師範學校尋常中學校歐文教科用圖書中地圖挿畫表圖等ノ文字ハ凡「ミニオン、オールドスタイル」(七ポイント)著色部ニハ「プレビアン、オールドスタイル」(八ポイント)マテチ用フルコトヲ得

二　教科用圖書ハ習字科用ノモノヲ除キ文字ト文字トノ間ニ凡當該文字ノ四分ノ一以上ノ字間ヲ存スルヲ要ス

三　教科用圖書ハ習字科用ノモノヲ除キ行ト行トノ間ニ凡當該文字ノ大サ以上行間ヲ存スルヲ要ス但高等小學校用ノモノハ其行間ヲ凡當該文字ノ四分ノ三マテ減スルコトヲ得

歐文ニアリテハ小學校用ノモノハ凡曲尺一分二厘師範學校尋常中學校用ノモノハ凡曲尺一分以上ノ行間ヲ存スルヲ要ス

四　教科用圖書中各行ノ長サ(輪廓アルモノハ其輪廓トモ)ハ習字科用ノモノヲ除キ縱行ノモノニアリテハ小學校用ノモノハ凡曲尺五寸五分以下其他ノモノハ凡曲尺五寸以下横行ノモノ若クハ歐文ノモノニアリテハ凡曲尺三寸三分以下タルヲ要ス

五　教科用圖書ノ用紙ハ白色ニシテ光澤ナク其質强靭ナルヲ要ス且成ヘク裏面ノ文字若クハ圖畫ノ表面ニ透ラサルモノヲ選フヘシ

六　印刷ハ其墨色眞黑ナルヘキハ勿論著色ノ部分ト雖モ區畫整正ニシテ鮮明ナルヲ要ス

七　挿圖ハ凡五間ノ距離ニ於テ其記載ノ事物ヲ明瞭ニ識別シ得ルヲ要ス

八　高等女學校教科用圖書ハ之ヲ用フヘキ學年ニ應シ小學校又ハ師範學校尋常中學校ノ例ニ準スヘシ

九　高等小學校第三學年以上ニ用フヘキ教科用圖書ハ師範學校尋常中學校ノ例ニ準スルコトヲ得

十　小學校教師用教科用圖書ハ總テ師範學校尋常中學校ノ例ニ準スヘシ

●教科用圖書檢定手數料納付方(明治二十五年七月文部省令第十七號)

教科用圖書檢定手數料ハ明治二十四年(十二月)勅令第二百四十五號ニ依リ本年九月一日ヨリ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ(三十一年勅令第百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム)

●教科用圖書檢定願書ニ印紙貼用ノ件(明治二十五年七月文部省告示第五號)

本年(七月)文部省令第十七號ニ依リ登記印紙ヲ以テ教科用圖書檢定手數料ヲ納ムルニハ地方廳ニ於テ願書ノ査閲ヲ受ケタル後其願書ニ印紙ヲ貼用シ消印スヘシ

●小學校圖書審査委員組織ニ關スル件(勅令第百四號明治二十六年九月)

朕小學校圖書審査委員組織ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令第十六條第二項ニ規定シタル小學校圖書審査委員ノ組織ニ尋常中學校長ヲ加フ

第一條　府縣知事ハ府縣會常置委員ニ代ヘ圖書審査委員トス

第二條　府縣知事ハ前條ノ具申ニ依リ相當ト認ムル圖書ハ之ヲ其府縣小學校教科用圖書ト定ムヘシ

第三條　審査委員ニ於テ審査ヲ了ルトキハ委員長ヨリ其顚末ヲ府縣知事ニ具申スヘシ

第四條　府縣知事ハ前條ノ具申ニ依リ相當ト認ムル圖書ハ之ヲ其府縣小學校教科用圖書ト定ムヘシ

第五條　府縣知事ハ四箇年ヲ經ルニ非サレハ小學校ノ教科用圖書ヲ更定スルコトヲ得ス但本項ノ明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十六條ニ基キ小學校教科用圖書審査等ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

小學校教科用圖書審査等ニ關スル規則

第一條　小學校圖書審査委員ハ府縣知事之ヲ命ス其ノ人員左ノ如シ(二十六年文部省令第十三號ヲ以テ改正)

一　北海道廳府縣視學官及視學(三十二年文部省令第三十一號改正ニ依ル)

二　學務擔任官吏一名(三十二年文部省令第三十一號改正ニ依ル)

三　府縣參事會員二名但府縣制ヲ施行セサル地方ニ於テハ府縣會常置委員二名

四　尋常師範學校長

五　尋常中學校長一名

六　尋常師範學校教員二名

七　小學校教員三名乃至五名

審査委員長ハ北海道廳府縣視學官ヲ以テ之ニ充ツ(三十二年文部省令第三十一號改正ニ依ル)

第二條　審査委員ハ自己又ハ其親族ノ著撰譯述編纂校閲出版等ニ係ル圖書ヲ審査スルコトヲ得ス但已ムヲ得サル場合ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受ケタルトキハ此限ニ在ラス

第三條　審査委員ニ於テ審査ヲ了ルトキハ委員長ヨリ其顚末ヲ府縣知事ニ具申スヘシ

第四條　府縣知事ハ前條ノ具申ニ依リ相當ト認ムル圖書ハ之ヲ其府縣小學校教科用圖書ト定ムヘシ

第五條　府縣知事ハ四箇年ヲ經ルニ非サレハ小學校ノ教科用圖書ヲ更定スルコトヲ得ス但本項ノ

例ニ依リ雖キ事情アルトキハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケテ特別ノ處分ヲナスコトヲ得

前項ニ依リ更定シタル圖書ヲ小學校ニ用フルニハ之ヲ課スヘキ最下學年ノ兒童ヨリ用ヒシメ其他ノ兒童ニハ從來ノ教科用圖書ヲ襲用セシムヘシ但本項ノ例ニ依リ雖キ事情アルトキハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村長ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第六條　此規則施行前府縣知事ニ於テ定メタル小學校教科用圖書ハ仍其效力ヲ有スルモノトス

第七條　此規則ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ

●採定濟小學校教科用圖書中修正ヲ加ヘタルトキ採定效力ノ件(明治三十二年五月文部省令第三十號)

北海道廳府縣ニ於テ採定シタル小學校教科用圖書ニシテ瑣少ノ修正ヲ加ヘ文部大臣ノ檢定ヲ得タルモノアルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ更ニ審査スルコトヲ要セスシテ修正ノ圖書ニ對シ仍採定ノ效力ヲ有セシムルコトヲ得

●小學校修身教科用圖書審査採定ノ件(明治二十五年十月文部省訓令第八號)

小學校修身教科用圖書ハ可成多數ノ圖書中ニ就キ最モ善良ナルモノヲ選擇スヘキ樣ニ付檢定濟ノ圖書多ク出ルヲ俟チ明治二十七年四月以後ニ於テ之ヲ審査採定スヘシ

●小學校修身教科書審査採定期日、唱歌用歌詞樂譜採定手續省略ノ件(明治二十六年十月文部省訓令第十號)

一　明治二十五年文部省訓令第五號ヲ廢ス

二　小學校ノ修身教科書ハ明治二十七年學年ノ始ヨリ之ヲ用ヰルコトヲ得シムル爲ニ明治二十五年文部省訓令第八號ニ指定シタル期日ノ前ニ之ヲ審査採定スルコトヲ得

三　文部大臣ノ檢定ヲ經タル小學校唱歌教科書中ノ歌詞及樂譜ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ明治二十四年文部省訓令第二號ノ手續ヲ要セスシテ小學校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式ヲ行フノ際唱歌用ニ供セシムルコトヲ得

●唱歌用歌詞樂譜採用ノ件(明治二十七年十二月文部省訓令第七號)

小學校ニ於テ唱歌用ニ供スル歌詞及樂譜ハ本大臣ノ檢定ヲ經タル小學校教科用圖書中ニ在ルモノ又ハ文部省ノ撰定ニ係ルモノ及地方長官ニ於テ本大臣ノ認可ヲ受ケタルモノ外ハ採用セシムヘカラス但他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ經タルモノハ此限ニ在ラス

●實業補習學校教科用圖書ノ件(明治二十七年二月文部省令第四號)

一　實業補習學校ニ於テ教科用圖書ヲ用フル場合ニハ普通教科目ニ係ルモノハ小學校用又ハ特ニ實業補習學校用トシテ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ其ノ實業教科目ニ係ルモノハ檢定ヲ經ルノ限ニ在ラス

二　前項特ニ實業補習學校用トシテ檢定ヲ經ヘキ圖書ニ關シテハ明治二十年文部省令第二號教科用圖書檢定規則ヲ適用ス

三　實業補習學校ノ教科用圖書ハ府縣ニ於ケル審査採定ヲ要セス

●師範學校教科書ノ件(明治二十年三月文部省訓令第四號)

尋常師範學校教科用圖書ノ儀ハ該學校教員ノ會議ニ付シ取調ノ上文部大臣ノ裁定ヲ經ヘシ

●中學校及高等女學校教科書ニ付キ稟申方(明治三十二年四月文部省訓令第三號)

中學校及高等女學校教科書ニシテ明治三十二年勅令第二十八號中學校令第十二條第一項但書及同年勅令第三十一號高等女學校令第十三條第一項但書ニ依ルノ必要アルトキハ地方長官ハ該教科書ノ名稱、著作者及發行者ノ氏名、發行年月日、卷冊ノ記號ヲ記載シ文部大臣ニ稟申スヘシ但稟申ノ際該圖書一部ヲ納付セシムルコトアルヘシ

第十五章　學校衛生

第一款　學校醫

●公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件(明治三十一年一月勅令第二號)

朕公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　北海道廳府縣郡市町村ノ設置ニ係ル學校ニ學校醫ヲ置ク

地方長官ハ特別ノ事情アルトキハ村立學校及人口五千未滿ノ町立學校ニハ當分ノ内學校醫ヲ置カサルコトヲ得

第二條　學校醫ハ地方長官之ヲ囑託ス

第三條　學校衛生事務ニ關シ學校醫ハ地方長官郡市町村長ノ諮詢ニ應シテ意見ヲ述フヘク又之ニ建議スルコトヲ得

第四條　學校醫ニハ其ノ學校經費ヨリ相當ノ手當ヲ給スヘシ

第五條　學校醫ノ囑託執務及其ノ他ニ關シ必要ナル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

附　則

第六條　本令ニ於テハ北海道沖繩縣ノ區ノ設置ニ係ル學校ハ町立學校ト同視シ沖繩縣ノ間切及島ノ設置ニ係ル學校ハ村立學校ト同視ス

第七條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ本令中市町村長ニ關スル規定ハ島司郡長（北海道ニ在テハ支廳長）區長戸長又ハ之ニ準スヘキモノニ適用ス

第八條　本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

●學校醫職務規程（明治三十一年二月文部省令第六號）

明治三十一年勅令第二號第五條ニ基キ學校醫職務規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

學校醫職務規程

第一條　學校醫ハ此規程ノ定ムル所ニ依リ學校衛生ニ關スル職務ニ從事ス

第二條　學校醫ハ毎月少クトモ一回教授時間内ニ於テ當該學校ニ到リ衛生上ノ事項ヲ視察スヘシ學年ノ終及學期ノ始ニ於テハ特ニ當該學校ニ到リ視察スルコトヲ要ス

第三條　學校醫ハ學校視察ノ際左ノ事項ヲ調査シ之ヲ視察簿ニ記入スヘシ

一　換氣ノ良否

二　採光ノ適否

三　机腰掛ノ適否

四　前列及最後列ノ机ト黑板トノ距離

五　煖爐ノ有無及煖爐ト最近生徒トノ距離

六　室内ノ溫度

七　圖畫掛圖黑板ノ衛生上ノ適否

八　學校清潔方法實行ノ情況

九　飲料水ノ良否

第四條　學校醫ハ學校視察ノ際疾病ニ罹レル生徒ヲ發見シタルトキハ其病症ニ依リ缺課休學又ハ療治ヲ爲サシムヘキコトヲ學校長ニ申告スヘシ

第五條　學校醫ハ明治三十年文部省訓令第三號學生生徒身體檢査規程ニ準據シ各生徒ノ身體ヲ檢査スヘシ

第六條　學校醫ハ學校ノ近傍若クハ學校内ニ於テ傳染病ノ發生シタルトキハ數次學校ニ到リ必要ナル豫防消毒方法ヲ施行シ尙其情況ニ依リ學校ノ全部若クハ一部分ノ閉鎖ヲ必要ト認ムルトキハ之ヲ管理者及學校長ニ申告スヘシ

通學生徒ノ所在地ニ傳染病ノ發生シタル場合ニ於テ其通學生徒ノ昇校ヲ禁スヘキ必要ヲ認ムルトキハ之ヲ管理者及學校長ニ申告スヘシ

第七條　學校醫ハ衛生上必要ト認メタル事項ニ就テハ管理者及學校長ニ申告スヘシ

第八條　此規程施行ノ爲メ必要ナル細則ハ地方長官之ヲ定ムルコトヲ得

●學校醫ノ資格（明治三十一年二月文部省令第七號）

明治三十一年勅令第二號第五條ニ基キ學校醫ノ資格ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一條　學校醫ヲ囑託スルニハ左ニ掲クル各項中ノ一ニ該當シ且醫術開業免狀ヲ有スル者ノ中ニ於テスヘシ

一　帝國大學醫科大學醫學科卒業ノ者

二　元東京大學醫學部醫學科本科又ハ別課卒業ノ者

三　高等學校醫學部醫學科卒業ノ者

四　元高等中學校醫學部醫學科卒業ノ者

五　大阪府京都府愛知縣醫學校醫學科卒業ノ者

六　元府縣立甲種醫學校卒業ノ者

第二條　第一條ノ資格ヲ具フル者ヲ得難キ場合ニ於テハ帝國大學醫科大學國家醫學講習科修了ノ者又ハ明治十六年布告第三十五號醫師免許規則第二條又ハ第四條ニ依リ醫術開業免狀ヲ有スル者ニ囑託スルコトヲ得

第二款　傳染病豫防及消毒

●學校傳染病豫防及消毒方法（明治三十一年九月文部省令第二十號）

學校傳染病豫防及消毒方法ヲ定ムルコト左ノ如シ

學校傳染病豫防及消毒方法

其一　豫防方法

第一條　學校ニ於テ特ニ豫防スヘキ傳染病ノ種類左ノ如シ

第一類

甲　痘瘡及假痘　實布垤利亞　猩紅熱　發疹窯扶斯

乙　百日咳　麻疹　流行性感冒　流行性耳下腺炎　風疹　水痘　肺結核　癩病

第二類　赤痢　虎列刺　腸窯扶斯

第三類　傳染性皮膚病　傳染性眼炎

第二條　第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル職員生徒等ハ昇校スルコトヲ得

前項ノ職員生徒等其傳染病治癒シタル後昇校セントスルトキハ先ツ全身浴ヲ行ヒテ衣服ヲ更メ且ツ醫師ニ於テ傳染ノ虞ナキコトヲ證明スルコトヲ要ス

第三條　第一條第一類乙又ハ第三類ノ傳染病ニ罹リタル職員生徒等ハ其病況ニ依リ醫師ニ於テ適當ノ處置ヲ施シ傳染ノ虞ナキコトヲ證明シタルモノニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス

第四條　職員生徒等ニシテ家族又ハ同居人中ニ第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル者アルトキ又ハ學校内ニ傳染病發生シタル場合ニ於テ其患者、屍體又ハ病毒ニ汚染シ若クハ汚染ノ疑アル物件ニ觸接シタルトキハ醫師ニ於テ適當ノ處置ヲ施シ傳染ノ虞ナキコトヲ證明シタル後ニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス

第五條　教員舍監等學校内ニ於テ第一條ノ傳染病者若クハ其疑アル者ヲ發見シタルトキハ直ニ之ヲ當該學校長ニ申告スヘシ學校長ハ醫師ヲシテ診斷セシメ相當ノ處置ヲナスヘシ

第六條　學校ニ於テ第一條ノ傳染病發生シタルトキハ其病況ニ依リ必要ト認ムルトキハ全校若クハ其一部ヲ閉鎖スヘシ

第七條　學校所在地若クハ其近傍ニ於テ第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病發生シタルトキハ明治三十年文部省訓令第一號ニ從ヒ充分ノ清潔方法ヲ施行スヘシ但第一條第二類ノ傳染病發生シタルトキハ校舍内ニ於テ使用スル飲料水ハ煮沸シタルモノヲ用フヘシ

第八條　生徒通學區域内ニ於テ第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病發生シ其病況ニ依リ必要ト認ムルトキハ其局部ヨリ通學スル生徒ノ昇校ヲ停止スルコトヲ得此場合ニ於テハ當該學校長ヨリ二十四時間以内ニ其旨ヲ管理者ニ屆出ツヘシ

第九條　傳染病ノ爲ニ閉鎖シタル學校若クハ其舍室ハ再ヒ之ヲ使用スルニ先チ明治三十年文部省訓令第一號定期清潔方法ノ各項ヲ施行スヘシ

其二　消毒方法

第十條　學校ニ於テ第一條第一類又ハ第二類ノ傳染病發生シタルトキハ其屍體、排泄物又ハ病毒ニ汚染シ若クハ汚染ノ疑アル物件ニ對シ左ノ區別ニ依リ消毒方法ヲ施行スヘシ但第一條第三類ノ傳染病發生シ其病況ニ依リ必要ト認ムルトキハ適宜本條ノ消毒方法ヲ應用スヘシ

一　第一條第一類及第二類ノ傳染病患者ノ屍體、第一類ノ傳染病患者ノ用ヒタル唾壺、第二類ノ傳染病患者ノ用ヒタル便器其他隙壁、牀、疊、建具、襖障、器具等ハ石炭酸水ヲ以テ消毒スヘシ

二　第一條第二類ノ傳染病患者ノ吐瀉物其他ノ排泄物ハ生石灰又ハ木灰汁ヲ以テ消毒シ强亞爾加里性反應ヲ呈スルニ至ルヘシ

三　食器、被覆、寢具等ハ煮沸又ハ蒸汽消毒ニ附スヘシ

四　消毒困難ニシテ廉價ナルモノハ之ヲ燒却スヘシ

五　前各項ノ消毒ニ適セサルモノハ之ヲ刷掃シ數日間日光ニ曝スヘシ

第十一條　消毒ニ供スル藥劑竝其應用ハ左ノ如シ

一　石炭酸水（二十倍）（結晶石炭酸五分鹽酸一分水九十四分ヲ攪拌シ溶解シタルモノ）

本品ハ屍體、吐瀉物其他ノ排泄物、器具、居室、手足等ノ消毒ニ用フ又衣類等ヲ消毒スルニハ驗酸ヲ加ヘサルモノヲ用フヘシ

二　生石灰末（生石灰ニ少量ノ水ヲ灌キ崩壞セシメタルモノ但用ニ臨ミテ之ヲ製スヘシ）

本品ヲ以テ吐瀉物其他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ其分量ノ五十分ノ一ヲ用フヘシ又流溝、芥溜、牀下等ヲ消毒スルニ用フ

石灰乳（十倍）（生石灰一分ニ水九分ヲ攪拌混和シタルモノ）

本品ノ應用ハ生石灰末ニ同シク吐瀉物、排泄物等ニハ其分量ノ五分ノ一ヲ用フ

木灰ハ生石灰ヲ得ルコト能ハサル場合ニ於テ虎列刺病患者ノ吐瀉物、赤痢病患者、腸窯扶斯患者ノ排泄物ノ消毒ニ用フルコトヲ得其用量ハ吐瀉物、排泄物ノ五分ノ一トス灰汁トシテ使用スルニハ木灰一分ニ水四分ヲ加ヘ之ヲ煮沸シテ製スヘシ其用量ハ吐瀉物、排泄物ノ同容量トス但石炭灰、藁灰ハ木灰ト同一ノ效ナシトス

三　格魯兒石灰水（二十倍）（格魯兒石灰五分ニ水九十五分ヲ攪拌混和セルモノ）

格魯兒石灰水ノ應用竝用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製スヘシ

附　則

第十二條　此省令ハ幼稚園ニ適用ス

第三款　清潔法

●學校清潔方法（明治三十年一月文部省訓令第一號）

學校ノ清潔ハ衛生上忽ニスヘカラサル所ナルヲ以テ學校衛生顧問ニ諮詢シ左ノ通清潔方法ノ標準ヲ定ムル依テ各學校ヲシテ之ニ準據シ其清潔ヲ保タシムルコトヲ務ムヘシ

學校清潔方法

清潔方法ヲ分チテ日常清潔方法定期清潔方法及浸水後清潔方法トス

甲　日常清潔方法

一、教室及寄宿舍ハ毎日人ナキ時ニ於テ先ツ窓戸ヲ開キ如露ヲ以テ少シク牀板及階段ヲ潤ホシ掃出シタル後濕布ヲ以テ建具校具等ヲ拭フヘシ但掃除ノ爲メニ室内ヲ潤ホスハ生徒ノ再ヒ之ニ入ルマテニ充分乾燥シ了ルヲ度トスヘシ

二、教室及寄宿舍ニハ其人員ニ應シ紙屑籠ト少量ノ水ヲ盛レル唾壺トヲ備ヘ紙片其他塵却物ハ必ス紙屑籠ニ投入シ痰唾ハ必ス唾壺ニ於テシ決シテ室内廊下等ニ放下セシムヘカラス

紙屑籠及唾壺ハ毎日之ヲ掃除スヘシ

三、寄宿舍内ニ於テハ戸外ニ於テ用ヰル腐物ヲ棄スヘシ但止ムヲ得サル事情アリテ特ニ之ヲ許ストキハ適宜ノ方法ヲ設ケテ室内ノ不潔ニ陷ラサルコトヲ務ムヘシ

四、靴ノ儘昇降スル校舍ノ出入口ニハ人員ニ應シ靴拭ヲ備フヘシ

五、寢具ハ毎月少クトモ一回之ヲ日光ニ曝シ被覆寢衣等ハ務メテ洗濯セシムヘシ

六、便所ノ尿溺及往壁等ハ毎日一回ホヲ以テ洗ヒ圖房ハ濕布ヲ以テ拭フヘシ塵箱ニハ成ルヘク蓋ヲ設クヘシ

七、糞壺内ニハ防臭藥トシテ粗製過滿俺酸加里、粗製格魯兒滿俺（以上百倍乃至三百倍）硫酸鐵、泥炭末、本炭末、乾燥土粉、灰等ヲ撒布シ期ヲ愆ラス汲取ラシムヘシ

八、食堂、炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ハ時々窓戸ヲ開キテ空氣ヲ通シ惡臭、煙氣又ハ湯氣ノ鬱滯ナキヲ務メ且掃除ヲ怠ルヘカラス殊ニ食堂ニハ濕布ヲ以テ其食卓等ヲ拭フヘシ

九、芥藥場ノ不潔物ハ期ヲ愆ラス搬送セシムヘシ

十、下水ハ常ニ疏通セシメ炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ノ下水ハ毎月少クトモ一回大掃除ヲ行フヘシ

十一、庭園、體操場、遊戯場、廊下、樣下等モ亦常ニ清潔ヲ保タシムヘシ

乙　定期清潔方法

定期清潔方法ハ毎年少クトモ一回夏休又ハ其他ノ長休ニ際シ之ヲ行フモノトス

十二、先ツ教室、寄宿舍内等ニ在ル机、腰掛、座蓋、戸棚等ヲ室外ニ出シ戸、障子、窓硝等ヲ外シ數物ヲ剝キタル後如露ヲ以テ牀板及廊下ヲ潤ホシ天井、四壁、牀板、廊下等盡ク之ヲ掃ヒ然ル後清水ヲ以テ洗拭スヘシ但汚染殊ニ甚シキ部分及器具等ハ熱湯汁若クハ石鹼水ヲ以テ洗拭スヘシ

十三、簷下、牀下等モ手ノ屆ク限リ之ヲ掃ヒ外部ノ羽目及簷廻リハ龍吐水等ヲ以テ洗滌スヘシ

十四、寢具、窓硝、數物等ニシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ洗濯シ其洗濯シ得ヘカラサルモノハ先ツ其塵ヲ掃ヒ書籍文具等ト共ニ數日之ヲ日光ニ曝シ刷掃スヘシ

十五、器具、寢具等ハ總テ室ノ乾キタル後ニアラサレハ室内ニ持込ムヘカラス

室ハ掃除後五日間以上窓戸ヲ開キテ空氣及日光ヲ通セシムヘシ

十六、牀板、壁面等ニ塵埃アルモノハ此際之ヲ塡塞シ風拔穴、煙突等ノ塵煤ハ之ヲ除去スヘシ

十七、浴室、洗面所、食堂、炊事場、生徒控所、雨中體操場、便所、下水、芥藥場等ニシテ破損アルモノハ此際盡ク修理ヲ加ヘ且大掃除ヲ行フヘシ

丙　浸水後清潔方法

洪水ノタメ水害ヲ被リタル學校ハ開校前左ノ清潔方法ヲ施行スヘシ

十八、水ニ浸サレタル校舍殊ニ寄宿舍ノ建具牀板等ハ取外シテ空氣ヲ通シ且牀下ノ汚物泥土ヲ除去シ場合ニ依テハ焚火、火鉢等ヲ用ヰテ充分ニ乾燥セシムヘシ

十九、建具、牀板、校具、腰張等ノ浸水シタルモノハ水又ハ熱湯ヲ以テ洗拭シタル後可成之ヲ日光ニ曝シ充分ニ乾燥セシムヘシ

二十、浸水ノ害ヲ被リタル井戸ハ必ス敢同之ヲ浚渫シテ汚物ヲ除キ井戸側ハ清水ヲ以テ洗ヒ能ク水ノ澄ミタル後ニ之ヲ使用スヘシ但開校後一箇月間ハ必ス其水ヲ煮沸シテ飲用スヘシ

二十一、右ノ外定期清潔方法ニ掲ケタル各項ヲ適宜應用スヘシ

第四款　身體檢査

●學生生徒身體檢査規程（明治三十年三月文部省訓令第三號）

學生生徒ノ身體ヲ檢査シ其發育及健康ノ狀態ヲ知悉スルハ衛生上忽ニスヘカラサル所ナルヲ以テ學校衛生顧問ニ諮詢シ學生生徒身體檢査規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

但明治二十一年十二月二十八日學生生徒ノ活力檢査ニ關スル訓令ハ之ヲ廢止ス

學生生徒身體檢査規程

一身體檢査ハ毎年四月及十月ニ於テ之ヲ施行スヘシ但滿二十年以上ノ者ニ就キテハ四月ノ一回ニ止ムルコトヲ得（三十一年文部省訓令第二號ヲ以テ但書追加）

一身體檢査ハ醫師ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ

一身體檢査ノ項目ハ身長、體重、胸圍、肺活量、脊柱、體格、視力、眼疾、聽力、耳疾、齒牙其他トシ其檢査票ノ樣式ハ左ノ如シ但十月ニ於テ施行スル檢査ニ在リテハ身長、體重、其他ノ三項目ニ止ムルコトヲ得（仝上）

（身體檢査票略ス）（三十年文部省訓令第二號ヲ以テ票中聽力ノ欄右左ノ區別ヲ削除ス）

一身體檢査票ハ十年間之ヲ保存スヘシ

一身體檢査ノ方法ハ左ノ如シ

檢査器械ハ「メートル」式ニ從ヒ衡器ハ水準器ヲ具ヘタルモノヲ可トス正シク尺度ヲ畫シタル厚紙ヲ柱若クハ壁ニ貼附シ以テ身長計ニ代フルモ亦一便法トス

右檢査ノ表記ニハ四捨五入法ヲ用ヰテ衡ハ「キログラム」度ハ「センチメートル」ヲ以テ一位トスヘシ

身長　ハ被檢者ヲシテ直立シ兩踵ヲ密接シ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ頭部ヲ正位ニ保タシム、足袋靴等ヲ脱スヘキ事勿論ナリ女子ニシテ髷アル者ハ一本ノ小桿ヲ取リ髷下ヨリ水平ニ横ヘテ之ヲ測定ス

體重　ハ著衣ノ儘測定スヘカラス若シ著衣ハ儘測定シタルトキハ其風袋ヲ全量ヨリ除去スヘシ

胸圍　ハ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ自然ノ位置ニアラシメ（體操ニ所謂「氣ヲ付ケー」ノ姿勢ニアラス）乳頭ノ水平線ニ於テ常時ヲ測定ス充盈、空虛ノ測定ニ於ケル位置亦同シ但小學校ニ於テハ常時ノミヲ測定ス

肺活量　ハ成ルヘク「ハッチンソン」氏ノ「スピロメートル」ヲ用ヰ立方「センチメートル」ヲ以テ之ヲ表記ス但小學校ニ於テハ之ヲ測定セス

脊柱　ハ正シキカ、傾キタルカ（右、左又ハ前）、傾キノ程度（強弱）ヲ檢査ス

體格　ハ強健、中等、薄弱ノ三等ニ區別ス

視力　ハ中心視力ヲ檢査スルモノニシテ「スチルレン」氏ノ試視力表ニ依リ六「メートル」（二十尺）ノ距離ニ於テD六（二十號）ヲ明視シ得ルモノヲ正視トシ兩眼ニ就キテ各別ニ測定シ十歳未滿ノ者ニハ施行セス（三十一年文部省訓令第二號改正ニ依ル）

聽力　ハ其障害ノ有無ヲ檢査ス（仝上）

齒牙　ハ其善惡、齲齒ノ有無ヲ檢査ス

其他　ノ部ニハ頭痛、鼻血等檢査ノ際ニ發見シタル疾患ヲ記入ス

右各項ノ外身體檢査上必要ト認メタル事項ハ備考欄内ニ記入スヘシ

一左ノ樣式ニ依リ身體檢査統計表ヲ調製シ檢査ノ翌月限リ文部大臣ニ報告スヘシ（身體檢査統計表樣式略ス）（三十一年文部省訓令第二號ヲ以テ樣式中聽力ノ全欄ヲ聽力ニ障害アル者ト改ム）

第十六章　外國留學生

●文部省外國留學生規程（明治二十五年十一月勅令第百二號）

朕茲ニ文部省外國留學生規程ノ件ヲ裁可ス

文部省外國留學生規程

第一條　文部省外國留學生ハ文部大臣ニ於テ特ニ須要ノ學術技藝ヲ研究セシメンカ爲ニ文部省直轄學校卒業ノ者又ハ文部省直轄學校教官ノ中ヨリ選拔差遣スルモノトス

第二條　（三十二年勅令第二百二號ヲ以テ削除）

第三條　文部省外國留學生ノ專修スヘキ學科留學スヘキ邦國及留學年限等ハ文部大臣之ヲ指定スヘシ

第四條　文部省外國留學生ニ支給スヘキ學資金ハ一箇年金千八百圓以内トシ旅費ハ外國旅費規則ニ依リ判任官ニ準シ之ヲ支給ス（三十二年勅令第二百二號ヲ以テ本條改正）

特別ノ事由アルトキ又ハ各地ヲ巡歷シテ研究セシムルトキハ前項學資金ノ外特ニ相當ノ學資金ヲ增給スルコトヲ得但シ巡歷研究ノ爲學資金ヲ增給スルトキハ別ニ旅費ヲ支給セス

第五條　文部省直轄學校教官ニシテ外國留學ヲ命シタル者ハ本邦發程ノ日ヨリ歸朝ノ日マテ當該各學校教官定員ノ外ニ置キ本官ノ俸給ヲ支給セ

ス但シ時宜ニ由リ特ニ俸給三分ノ一以内ヲ支給スルコトヲ得(仝上)

第六條　文部省外國留學生ハ歸朝ノ日ヨリ其留學年數ノ二倍ニ當ル期限間ハ文部大臣ノ指定スル職務ヲ辭スルコトヲ得ス

附　則

明治二十五年度及二十六年度ニ限リ本令第四條第一項ノ學資金ハ銀貨千七拾圓以内ヲ支給シ同條第二項ノ場合ニ於テハ銀貨千圓ヲ限リトス

●外務省留學生規程　(明治二十七年一月外務省令第一號)

明治二十六年勅令第百八十七號第九條ニ依リ公使館書記生又ハ領事館書記生ニ任用スヘキ外務省留學生規程左ノ通リ相定ム

外務省留學生規程

第一條　外務省留學生ハ支那語、朝鮮語、露西亞語又ハ西班牙語講習ノ爲外國ニ留學セシムルモノトス

第二條　外務大臣ハ外交官領事官又ハ貿易事務官ニ留學生ノ監督ヲ命シ留學中其ノ行爲ヲ監督セシムヘシ

第三條　外務省留學生ハ留學ノ地ニ到著ノ日ヨリ滿三年ヲ以テ卒業ノ期トス

監督官吏ノ具申ニ依リ語學上進セシ者ハ前項ノ期限ニ拘ラス特ニ卒業ト認ムルコトアルヘシ

第四條　疾病又ハ已ムヲ得サル事故ノ爲前條ノ期限ニ於テ卒業スルコトヲ得サルトキハ特ニ其ノ期限ヲ猶豫スルコトアルヘシ

猶豫期限ヲ過キ仍ホ卒業スルコトヲ得サルトキハ其ノ情狀ニ依リ留學生ヲ免ス

第五條　左ノ場合ニ於テハ留學中支給シタル學資及往返ニ係ル旅費ヲ本人又ハ保證人ヨリ償還セシムヘシ

一　留學中怠慢又ハ不品行ニシテ留學生ヲ免セラレタルトキ

二　任官後五箇年以内ニ於テ退官シタルトキ

但疾病ニ依リ外務大臣ニ於テ其ノ職ニ堪ヘスト認メタル者ハ此限ニ在ラス

第六條　外務省留學生保證人ハ身元正シク相當ノ財産アル者二名ヲ要ス

保證人ノ内破産死亡其ノ他保證人ニ適セサル事故ノ生シタルトキハ更ニ他ノ保證人ヲ立ツヘシ

第七條　外務省留學生ハ採用試驗出願ノ時年齡滿十八年以上滿二十五年以下ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ニ限ル(三十年外務省令第三號改正ニ依ル)

一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三　破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第八條　外務省留學生タラント欲スル者ハ別記甲號雛形ニ依リ調製シタル願書ニ履歷書及醫師ノ體格驗査ヲ經タル證明書竝支那語又ハ朝鮮語ヲ講習スヘキ者ハ漢文露西亞語又ハ西班牙語ヲ講習スヘキ者ハ露西亞文西班牙文英文又ハ佛文ノ内ヲ以テ起草シタル往復文ヲ添ヘ試驗期日十日前ニ外務省文官普通試驗委員ニ差出スヘシ

留學生募集ハ其講習スヘキ國語及人員ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第九條　外務省留學生試驗ヲ出願スル者ハ手數料トシテ金一圓登記印紙ヲ以テ納ムヘシ

第十條　外務省文官普通試驗委員ハ前條ニ規定シタル出願書類ヲ調査シ適當ト認メタル者ヲ召集シ左ノ試驗ヲ施行スヘシ

一　第八條ニ掲クル出願人ノ起草シタルト同一ノ外國文ヲ以テ更ニ往復文二通ヲ起草セシムルコト

但尙ホ起草文ト同一ノ國語ヲ以テ對話ヲ試ムルコトアルヘシ

一　邦文ヲ以テ往復文二通ヲ起草セシムルコト

一　數學　加、減、乘、除、分數、比例(三十年外務省令第三號ヲ以テ追加)

一　簿記　官用簿記(仝上)

第十一條　不正ノ方法ニ因リ試驗ヲ受ケント企テタル者及試驗ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス試驗合格ノ後是等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格ヲ無效トス

既ニ留學生トナリ留學スヘキ地ニ赴キタル後前項ノ事實發覺セシ場合ニ留學生ヲ免スルノ外第五條ニ掲クル學資及旅費ヲ本人又ハ保證人ヨリ償還セシムヘシ

第十二條　第十條ノ試驗ニ合格シタルトキハ標メ期限ヲ定メ別記乙號雛形ニ依リ調製シタル證書ヲ合格者ヨリ徵シ留學生ヲ命ス

試驗合格ノ有效期限ハ合格後留學生ニ採用セラレタル者ヲ除クノ外一箇月間トス

第十三條　外務省留學生ヲ命セラレタル者ハ疾病又ハ已ムヲ得サル事故ノ爲許可ヲ得タル者ノ外

命令ヲ受ケタル日ヨリ四週間以内ニ其ノ留學スヘキ地ニ出發スヘシ

第十四條　外務省留學生ハ外國留學中學資トシテ一箇年歐米諸國ニ於テハ千八百圓以内亞細亞諸國ニ於テハ千二百圓以内ヲ給ス(三十二年外務省令第三號改正ニ依ル)

第十五條　前條ノ學資支給方ハ總テ明治二十六年勅令第百七十一號公使館領事館費用條例中規定ノ在勤俸ノ例ニ依ル

第十六條　外務省留學生ノ旅費ハ外國留學地往返其他外務大臣ノ命ニ依リ旅行スルトキ其ノ旅中一切ノ費用ニ充ツル爲之ヲ給ス

第十七條　旅費ハ支度料船車料及日當ノ三種トス

第十八條　支度料ハ留學ヲ命セラレ本邦ヨリ始メテ出發スル場合ニ限リ其ノ留學スヘキ地ノ情況ヲ斟酌シ左ノ範圍内ニ於テ相當ノ額ヲ定メ之ヲ給ス

一　歐米諸國へ留學スル者ハ銀貨百五十圓以内(仝上)

一　亞細亞諸國へ留學スル者ハ銀貨百圓以内(仝上)

第十九條　留學ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ都合ニ由リ留學ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ給ス

第二十條　船車料ハ汽船、汽車賃二等ノ實費ヲ給ス但汽船汽車ノ便ナキ地方ニ於テハ外務大臣ヨリ指定シタル標準ニ依リ人馬舟車雇賃ノ實費ヲ給ス

第二十一條　日當ハ出發ノ日ヨリ到著ノ日マテ其ノ日數ニ應シ左ノ割合ニ依リ陸路ニ在テハ全額海路ニ在テハ五分ノ一ヲ給ス但海陸兩路ニ跨ルノ日ハ全額ヲ給ス(仝上)

一　歐米諸國　九圓

一　亞細亞諸國　五圓

第二十二條　船車料及日當支給方ニ關シ本令ニ規定セサルモノハ總テ明治二十六年勅令第百七十一號公使館領事館費用條例ニ依ル但同條例第二十條及第二十二條ハ適用セス

第二十三條　本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

(別記甲號雛形)

○印紙

外務省留學生採用願

私儀何語學講習ノ外務省留學生志願ニ付試驗ノ上御採用相成度此段奉願候也

年月日　何府縣郡市町村番地族籍

本人　姓名　印

同　保證人　姓名　印

同　保證人　姓名　印

外務大臣宛

(別記乙號雛形)

○印紙

證

私儀外務省留學生ヲ命セラルルニ於テハ留學生規程ヲ遵守シ萬一同規程第五條ニ依リ學資及旅費ノ償還ヲ命セラレタル場合ニハ本人又ハ保證人ニ於テ速カニ悉皆償還可致候也

年月日　何府縣郡市町村番地

本人　姓名　印

同　保證人　姓名　印

同　保證人　姓名　印

外務大臣宛

●遞信省外國留學生規程　(明治三十年四月勅令第百三十四號)

朕遞信省外國留學生規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省外國留學生規程

第一條　遞信省外國留學生ハ遞信大臣ノ選拔ニ依リ海事ニ關シ殊ニ須要ノ學術技藝ヲ研究セシムル爲メ外國ニ派遣スルモノトス

第二條　遞信省外國留學生ノ人員ハ同時ニ六人ヲ超エルコトヲ得ス

第三條　遞信省外國留學生ノ專修スヘキ學科、留學スヘキ邦國及年限ハ遞信大臣之ヲ指定ス

第四條　遞信省外國留學生ノ學資金ハ一箇年英貨百八拾磅以内トス

留學中各地巡歷研究ノ必要アルトキ其ノ他特別ノ事由アルトキハ一箇年英貨六拾磅以内ノ學資ヲ增給スルコトヲ得

第五條　遞信省外國留學生ノ旅費ハ外國旅費規則ニ依リ最下額ヲ支給ス在官者ニシテ外國留學ヲ命セラレタル者特ニ公務取調ヲ命セラレタルトキハ其ノ官相當ノ旅費ヲ支給スルコトヲ得

巡歷研究ノ爲メ學資金ヲ增給スルトキハ別ニ旅

費ヲ支給セス

第六條　在官者ニシテ外國留學ヲ命セラレタル者ニハ本邦發程ノ日ヨリ歸朝ノ日マテ本官ノ俸給ヲ支給セス但シ特ニ公務取調ヲ命シタル場合ハ此ノ限ニアラス

第七條　遞信省外國留學生ハ歸朝ノ日ヨリ其ノ留學年數ノ二倍ニ當ル期限間ハ遞信大臣ノ指定スル職務ヲ辭スルコトヲ得ス

第十七章　學位

●學位令（明治三十一年十二月勅令第三百四十四號）

朕學位令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

學位令

第一條　學位ハ法學博士、醫學博士、藥學博士、工學博士、文學博士、理學博士、農學博士、林學博士及獸醫學博士ノ九種トス

第二條　學位ハ文部大臣ニ於テ左ニ掲クル者ニ之ヲ授ク

一　帝國大學大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者又ハ論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ帝國大學分科大學教授會ニ於テ之ト同等以上ノ學力アリト認メタル者

二　博士會ニ於テ學位ヲ授クヘキ學力アリト認メタル者

帝國大學分科大學教授ニハ當該帝國大學總長ノ推薦ニ依リ文部大臣ニ於テ學位ヲ授クルコトヲ得

第三條　學位ヲ有スル者其ノ榮譽ヲ汚辱スルノ行爲アルトキハ博士會ノ議ヲ經テ文部大臣其ノ學位ヲ褫奪ス

第四條　明治二十年勅令第十三號學位令ニ依リ授與シタル學位ハ本令ノ學位ト同一ノモノトス

第五條　本令ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

●學位令細則（明治三十二年一月文部省令第一號）

明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第五條ニ基キ學位令細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

學位令細則

第一條　學位ハ學位受領者ノ專攻シタル學科ノ區別ニ從ヒ之ヲ授ク

第二條　帝國大學大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者アルトキハ當該帝國大學總長ハ其試驗成績ニ履歷書ヲ添ヘ文部大臣ニ具申スヘシ

第三條　論文ヲ提出シテ學位ヲ請求スル者ハ其專攻シタル學科ノ範圍內ニ屬スル自著ノ論文ニ履歷書ヲ添ヘ其論文ノ審査ヲ受クヘキ帝國大學分科大學教授會ヲ指定シテ文部大臣ニ申請スヘシ

第四條　學位記ノ樣式左ノ如シ

（樣式畧ス）

第十八章　統計報告

●學事年報取調條項及諸表樣式（明治二十八年十月文部省訓令第三號）

學事年報取調條項及諸表樣式別冊ノ通改定ス

明治二十五年文部省訓令第九號ハ廢止ス

（別冊）

學事年報取調條項

一管內學事ノ狀況

學事施設ノ要領及學事ノ現狀ヲ概記スヘシ

一學齡兒童

就學ニ關スル規則施行ノ狀況及表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一小學校

公立學校ノ校數位置設備等適否ノ狀況、修業年限學級編制ニ關スル狀況、私立學校ノ代用補習科專修科ノ狀況、生徒學業ノ進否學校衛生ノ狀況、教員ノ需用供給及待遇ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一徒弟學校

一實業補習學校

一盲啞學校

學科ノ適否、授業ノ狀況、生徒學業ノ進否、生徒卒業後ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一幼稚園

保姆ノ資格、保育ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一尋常師範學校

學校ノ設備、生徒養成ノ狀況、生徒學業ノ進否入學者（生徒ノ種別、從前ノ教育、年齡等）中途退學者ニ關スル狀況、生徒卒業後ノ狀況、附屬小學校及保備科簡易科講習科等ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一尋常中學校

學校ノ設備、生徒養成ノ狀況、生徒學業ノ進否入學者（從前ノ教育、年齡等）中途退學者ニ關スル狀況、生徒ノ健康ニ關スル狀況、生徒卒業後ノ狀況、實科專修科ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘ

一高等女學校

學校ノ設備、生徒養成及修業年限ニ關スル狀況、生徒學業ノ進否入學者（從前ノ教育、年齡等）中途退學者ニ關スル狀況、生徒ノ健康ニ關スル狀況、生徒卒業後ノ狀況、技藝專修科補習科ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一專門學校

一技藝學校

學校ノ設備、教員ノ資格、入學者ノ資格、授業ノ狀況、生徒學業ノ進否卒業後ノ狀況、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一各種學校

學校ノ設備、教員ノ資格、授業ノ狀況、生徒學業ノ進否、其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一圖書館

閱覽圖書ノ種類（何何學科ノ圖書ヲ閱覽スル者多キ類）閱覽人ノ狀況、（何何職業ノ者閱覽スルコト多キ類）其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一教科用圖書

教科用圖書ノ適否、需用供給ノ關係、其他教科用圖書ニ係ル狀況ヲ記述スヘシ

一府縣會郡會及市町村會

學事ニ係ル議事ノ梗概ヲ記述スヘシ

一教育會

組織並事業ノ梗概ヲ記述スヘシ

一學事關係職員

學務官吏、學務擔任郡吏、郡視學、市町村長、學務委員等總テ關係職員ノ事務ヲ措辦スル狀況等ヲ記述シ及學務官吏等級別人員ヲ附記スヘシ

一學事巡視及奬勵

學務官吏等巡視ノ狀況（回數、日數、其他）及教員生徒等奬勵ノ要領ヲ記述スヘシ

一將來學事施設上須要ノ件

一其他學事ニ付特ニ申報スヘキ事項アルトキハ適宜記述スヘシ

右諸項ハ歷年末ノ調査ニ依リ翌年三月三十一日限申報スヘシ

一公學費及資產

公立學校等經濟ノ要領、授業料徵收ノ方法、寄附金等ノ狀況、學校基本財產積立ノ方法等總テ學校維持及經濟上ノ得失ニ係ル狀況其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一公立學校職員恩給

公立學校職員退隱料等殊ニ府縣知事、郡長、市町村長ニ於テ定ムル退隱料等ニ關スル狀況其他表式ニ示ス事項ノ計數增減ノ事由等ヲ記述スヘシ

一其他學事經濟上ニ付特ニ申報スヘキ事項アルトキハ適宜記述スヘシ

右諸項ハ會計年度末ノ調査ニ依リ翌年度八月三十日限申報スヘシ

（諸表樣式畧ス）

●文部省直轄學校年報取調條項（明治二十年十二月十七日文部大臣訓令）

年報ノ儀自今左ノ條項ヲ具シ歷年ノ調査ヲ以テ翌年三月限開申スヘシ

一學規

本年中創定若クハ訂正セル條項及其事由目的等ヲ記載スヘシ

一處務

本年中管理及教授上ニ關シ處理シタル事務ノ要領及其事由目的等ヲ記載スヘシ

一職員

年末ノ現員並ニ其交迭ノ重ナルモノヲ記載スヘシ

一生徒（帝國大學ノ分ハ生徒ノ上ニ學生ノ二字ヲ加フ）

年末ノ現員及給費、貸費、自費、等級、試驗、入學、退學、卒業ノ諸項ヲ具シ其他風紀及卒業後ノ狀況等ヲ記載スヘシ

一經費

本年中ノ經費額並ニ授業料等收入支出蓄積金寄附金額及支出其他經濟ニ關シ計畫スル所ノ要領ヲ記載スヘシ

一書籍器械

書籍器械器具模型標品等其他類別ヲ以テ年末ノ現在數代價及之ヲ整備スルノ計畫等ヲ記載スヘシ

右ノ外重要ノ事件アラハ總テ其目的方法狀況等ヲ記載センコトヲ要ス

○文部省訓令（明治二十六年十二月二十二日直轄各部學事年報中歲入歲出及所有物件ニ關スル事項ハ會計年度ニ依リ翌年度五月限送出スヘシ但本文外ノ事項ハ仍從前ノ通歷年ノ調査ニ依リ翌年三月限差出スヘシ

●學務課長、學校長ノ變更進退開申方（明治三十一年八月文部省訓令第八號）

北海道廳府縣內務部ノ學務ニ關スル主務課長及北海道廳府縣立學校長ノ變更進退ノ節ハ其氏名官等及履歷ヲ具シ開申スヘシ但師範學校長及奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル北海道廳府縣立學校長ノ變更進退ノ場合ハ此限ニアラス

●學事ニ關スル廳府縣令申報方（明治十九年十一月文部省令第二十號）

學事ニ關スル廳府縣令ハ其公布ノ都度文部省ニ申報スヘシ

但シ豫メ稟申シタル件ハ此限ニアラス

●道廳府縣立諸學校傭外國人解傭等報告方（明治二十三年八月文部省訓令第六號）

本年（四月）內閣訓令第四號ヲ以テ明治十六年太政官第三十二號達廢止相成候ニ付テハ自今道廳及府縣立諸學校傭外國人ノ儀ハ傭入傭繼解傭共其時々當省ヘ報告スヘシ

第十九章　氣象

●氣象臺測候所條例（明治二十年八月勅令第四十一號）

朕氣象臺測候所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

氣象臺測候所條例

第一條　東京ニ中央氣象臺ヲ置キ地方便宜ノ場所ニ地方測候所ヲ置ク其位置ハ文部大臣之ヲ指定ス（二十六年勅令第百三十四號ヲ以テ本條以下第三條マテ改正）

第二條　前條ノ外測候所ヲ設置セントスル者アルトキハ文部大臣ノ許可ヲ受ク可シ

第三條　中央氣象臺ハ文部大臣之ヲ直轄シ地方測候所ハ地方長官之ヲ管理シ文部大臣之ヲ監督ス

其ノ測候所ハ地方長官之ヲ監督ス

第四條　地方測候所ノ費用ハ該測候所所在ノ地方稅ヲ以テ支辨ス可シ

第五條　中央氣象臺及各測候所ハ事業上互ニ氣脈ヲ通シ通信ヲ爲ス可シ

第六條　本條例施行ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム（二十六年勅令第百三十四號ヲ以テ改正）

●氣象臺測候所條例施行細則（明治三十一年三月文部省令第八號）

明治二十五年內務省令第五號氣象臺測候所條例施行細則ヲ改定スルコト左ノ如シ

氣象臺測候所條例施行細則

第一條　中央氣象臺ハ全國ノ氣象事業ヲ統轄シ全國ノ氣象ヲ調査シ全國ニ天氣豫報暴風警報ヲ發シ及氣象器械ノ檢定ヲ爲ス所トス

第二條　地方測候所ハ所在地ノ氣象ヲ觀測シ所屬廳管內ノ氣候ヲ調査シ並ニ中央氣象臺ノ天氣豫報ニ基キ地方天氣豫報ヲ發スル所トス

地方測候所ハ公私ノ依頼ニ應シ天氣豫報暴風警報ノ通報ヲ爲スコトヲ得

第三條　測候所ヲ分テ一等二等トス

一等測候所ハ晴雨計寒暖計乾濕計最高最低寒暖計日溫計地溫計地中寒暖計風力計風信器雨量計蒸發計日照計地震計等ヲ備ヘ每時觀測ヲ爲スヘシ

二等測候所ハ晴雨計寒暖計乾濕計最高最低寒暖計風力計風信器雨量計地震計等ヲ備ヘ一日六回ノ觀測ヲ爲スヘシ

第四條　測候所ハ前條備付ノ器械中日照計及地震計ヲ除クノ外ハ豫備器ヲ備フヘシ

第五條　測候所ハ中央氣象臺ヨリ暴風警報ヲ受ケタルトキ又ハ天候不穩ト認メタルトキハ中央氣象臺長ノ定メタル方法ニ依リ臨時觀測ヲ爲スヘシ

第六條　測候所ハ中央氣象臺ニ左ノ報告ヲ爲スヘシ

氣象電報　氣象月報　氣象年報

一周年事業報告　氣象五年報　暴風報告

雷雨報告　地震報告　積雪報告

動物報告　植物報告　雜報

第七條　測候所ハ互ニ氣象月報氣象年報及氣象五年報ヲ交換スヘシ

第八條　測候所ハ中央氣象臺ヨリ天氣豫報又ハ暴風警報ヲ受ケタルトキハ直ニ之ヲ掲示スヘシ

第九條　測候所ノ觀測ノ方法器械ノ品位報告ノ書式及期限天氣豫報要語又ハ氣象信號標式等ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ中央氣象臺長之ヲ定ム

第十條　測候所ニ於テ地方天氣豫報ヲ發スルニハ一箇年間天氣豫考ヲ爲シ其成績表ヲ添ヘ地方測候所ハ地方長官ニ於テ其他ノ測候所ハ地方長官ヲ經由シテ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十一條　測候所ハ每月地方天氣豫報ノ適否ヲ取調ヘ中央氣象臺長ニ通知スヘシ

第十二條　條例第一條ニ依リ地方測候所ヲ設立セントスルトキハ左ノ諸件ヲ詳記シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

一　敷地建物ノ坪數及其附近ノ地勢ヲ示スニ足ルヘキ圖面

二　建物ノ構造

三　等級

四　所員ノ數

五　使用スヘキ器械ノ明細書

六　經費豫算書

第十三條　地方測候所ノ敷地建物ヲ變更セントスルトキハ前條第一及第二ノ件ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受ヘシ

地方測候所ノ等級ヲ變更セントスルトキハ前條第四乃至第六ノ件ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十四條　地方測候所經費豫算額ノ決定シタルトキ及備付器械又ハ所員ニ異動アリタルトキハ其都度文部大臣ニ開申シ同時ニ中央氣象臺長ニ通知スヘシ

第十五條　條例第二條ニ依リ測候所ヲ設置セントスルトキハ左ノ諸件ヲ詳記シ地方長官ヲ經由シテ文部大臣ノ許可ヲ請フヘシ

一　敷地建物ノ坪數及其附近ノ地勢ヲ示スニ足ルヘキ圖面

二　建物ノ構造

三　等級

四　測候事業ニ從事スル者ノ員數

五　使用スヘキ器械ノ明細書

六　維持ノ方法

第十六條　前條測候所ノ敷地建物若クハ等級ヲ變更セントスルトキハ第十三條ニ準據シ地方長官ヲ經由シテ文部大臣ノ許可ヲ請フヘシ又其他ノ事項ニ異動アリタルトキハ地方長官ヲ經由シテ文部大臣ニ屆出テ同時ニ中央氣象臺長ニ通知スヘシ

第十七條　第十五條ノ測候所ヲ廢止セントスルトキハ其事由ヲ詳記シ地方長官ヲ經由シテ文部大臣ニ屆出ツヘシ

第十八條　文部大臣ハ臨時中央氣象臺技師ヲシテ測候所ヲ巡閱セシム

第十九條　條例第四條ノ地方測候所費ハ北海道廳ニ於テハ本廳費沖繩縣ニ於テハ地方費ヲ以テ支辨スヘシ

第二十條　警報信號標ハ中央氣象臺長ノ定メタル氣象信號標式ニ據リ設立スヘシ

第二十一條　郡市町村又ハ人民ニ於テ新ニ警報信號標ヲ設立セントスルトキハ地方長官ノ許可ヲ請フヘシ

第二十二條　地方長官新ニ警報信號標ヲ設立シ若クハ其設立ヲ許可シタルトキハ實施ヨリ少クモ三十日前左ノ諸件ヲ詳記シ文部大臣ニ開申シ同時ニ中央氣象臺長ニ通知スヘシ

一　位置及地勢（略圖ヲ添フルヲ要ス）

二　信號柱ノ高サ及信號ノ種類

三　維持ノ方法（設立ノ費途ヲモ記載スルヲ要ス）

四　管理者

第二十三條　警報信號標ニ異動ヲ生シタルトキハ地方長官ハ之ヲ文部大臣ニ開申シ同時ニ中央氣象臺長ニ通知スヘシ

第二十四條　前二箇條ノ場合ニ於テハ文部大臣之ヲ告示ス

附則

第二十五條　地方長官又ハ測候所設立者ハ此規則施行ノ日ヨリ一箇月以內ニ既設測候所ニ係ル第十二條及第十五條ノ諸件ヲ文部大臣ニ開申スヘシ

●中央氣象臺氣象通報規程（明治二十九年三月文部省令第二號）

中央氣象臺氣象通報規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

中央氣象臺氣象通報規程

第一條　中央氣象臺ニ氣象ノ通報ヲ依頼スル者ハ此規程ニ據ルヘシ

第二條　氣象ノ通報ヲ依頼スル者ハ登記印紙ヲ以テ手數料ヲ納ムヘシ一旦納付シタル手數料ハ如何ナル事故アルモ還付セス（三十一年勅令百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム）

第三條　氣象通報一回ノ手數料金額ハ左ノ種別ニ從ヒ之ヲ定ム

但暴風警報ハ警戒及解除ノ通報ヲ併セテ一回トス（三十年文部省令第十六號ヲ以テ本條幷ニ但書共改正三十二年同第十七號ヲ以テ手數料金額ヲ改正ス）

種別	普通電報ヲ以テ通報スル料金	至急電報ヲ以テ通報スル料金
氣象區天氣豫報	金貳拾五錢	金五拾五錢
同上高低氣壓ノ位置及氣壓度付	金參拾五錢	金六拾五錢

東京地方天氣豫報	金貳拾五錢	金四拾五錢
全國天氣實況	金六拾五錢	金壹圓參拾五錢
暴風警報	金四拾五錢	金八拾五錢

第四條　別使配送ヲ乞フ者及艀船配送ヲ要スル者ハ第三條ニ規定スル手數料ノ外一回毎ニ金貳拾錢暴風警報ニ在リテハ金四拾錢ヲ併納スヘシ（三十二年文部省令第十七號ヲ以テ改正）

第五條　氣象ノ通報ハ中央氣象臺ニ於テ規程シタル事項ノ外依頼ニ應セス但測候所若クハ官廳等ノ依頼ニ限リ特別ノ通報ヲ爲スコトアルヘシ其手數料ハ中央氣象臺長ノ定ムル所ニ依ル（三十年文部省令第十六號ヲ以テ改正）

第六條　氣象ノ通報ハ中央氣象臺ニ於テ規定シタル符號式ニ依ル

第七條　氣象ノ通報ハ中央氣象臺ニ於テ發送シタル後萬一不達ノコトアルモ該臺ハ其責ニ任セス

第八條　氣象ノ通報ヲ依頼セントスル者ハ左式ノ依頼書ヲ作リ其手數料金ニ相當スル登記印紙ヲ貼付シ中央氣象臺ニ差出スヘシ（三十一年勅令第百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム）

書式（用紙美濃紙但一葉一種ニ作ル）（三十年文部省令第十六號ヲ以テ書式改正）

通報依頼書

登記印紙ヲ貼付スヘシ

一通報種別

第何々氣象區
若クハ全國　天氣豫報
同上高低氣壓ノ位置及ヒ氣壓度付　天氣豫報
東京地方天氣豫報
全國天氣實況
第何々氣象區　暴風豫報
若クハ全國

一通報期限
何月何日ヨリ何月何日マテ何十何日間若シハ何月何日以降何十何回（但一會計年度以内ノ豫定トス）
一電報種類
普通電報若クハ至急電報
一屆先
何國何郡（市區）何町村何番地氏名
一最近電信局マテノ距離
何郵便電信局若クハ何電信局
一別使若クハ艀船配送
何十何町
右通報相成度及御依頼候也
有無

年　月　日

中央氣象臺長氏名殿　　依頼者　住所　氏　　名印

第九條　本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●中央氣象臺氣象器械檢定規程

（明治二十九年三月　文部省令第三號）

中央氣象臺氣象器械檢定規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一條　中央氣象臺氣象器械檢定規程

中央氣象臺ニ氣象器械ノ檢定ヲ依頼スル者ハ此規程ニ據ルヘシ

第二條　檢定ヲ了シタル器械ニハ器差ヲ示シタル檢定證ヲ交付ス

前項ノ檢定證ヲ分テ甲乙二種トス器差、齊整ニシテ精密ナル觀測用ニ適スト認ムルモノニハ甲號證ヲ交付シ其他ノモノニハ乙號證ヲ交付ス

第三條　氣象器械ノ檢定ヲ依頼スル者ハ登記印紙ヲ以テ手數料ヲ納ムヘシ一旦納付シタル手數料ハ如何ナル事故アルモ還付セス（三十一年勅令第百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム）

第四條　氣象器械檢定手數料ノ金額ハ器械ノ種類檢定ノ難易ニ依リ本條各項ノ範圍内ニ於テ中央氣象臺長之ヲ定ム

一水銀晴雨計　金壹圓乃至參圓
一空盒晴雨計　金參拾錢乃至壹圓五拾錢
一寒暖計　金貳拾錢乃至壹圓
一雨量計　金拾錢乃至五拾錢
一風力計　金五拾錢乃至壹圓五拾錢

第五條　第四條ニ記載セサル氣象器械ト雖モ時宜ニ依リ檢定ノ依頼ニ應シ且檢定證ヲ交付スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ其手數料ハ中央氣象臺長ノ定ムル所ニ依ル

第六條　時日ヲ限リ檢定ヲ依頼スル者アルトキハ時宜ニ依リ之ニ應スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ普通手數料ノ二倍ヲ徴收スヘシ但寒暖計ニ限リ同人ニシテ六箇以上ノ檢定ヲ同時ニ依頼スルモノノ外ハ普通手數料ノ五倍以内ヲ增徴スヘシ

第七條　檢定證ヲ紛失シ再度交付ヲ依頼スル者アルトキハ該證ノ寫ヲ交付スヘシ此場合ニ於テハ手數料金拾錢ヲ徴收スヘシ

第八條　檢定ノ依頼ニ係ル器械ニハ中央氣象臺ニ於テ檢定中相當ノ保護ヲ加フヘシト雖モ若シ破損スルコトアルモ該臺ハ其責ニ任セス

第九條　中央氣象臺ノ必要上檢定スル所ノ器械ニ對シテハ手數料ヲ徴收セス

第十條　第四條又ハ第六條ノ檢定ヲ依頼セントスル者ハ第一書式又ハ第二書式ノ依頼書ヲ作リ第七條ノ檢定證再度交付ヲ依頼セントスル者ハ第三書式ノ依頼書ヲ作リ其手數料金ニ相當スル登記印紙ヲ貼付シ中央氣象臺ニ送出スヘシ（三十一年勅令第百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム）

各種氣象器械檢定依頼書式左ノ如シ（三十年文部省令第十七號ヲ以テ書式改正）

第一書式（用紙美濃紙但一葉一器ニ限ル）

登記印紙ヲ貼付スヘシ

何國何某製
一何々　器械附刻ノ番號　一箇

右檢定相成度及御依頼候也

年月日　　依頼者　住所　氏　　名印

中央氣象臺長氏名殿

第二書式（用紙美濃紙但一葉一器ニ限ル）

登記印紙ヲ貼付スヘシ

何國何某製
一何々　器械附刻ノ番號　一箇

右來ル何月何日迄ニ檢定相成度及御依頼候也

年月日　　依頼者　住所　氏　　名印

中央氣象臺長氏名殿

第三書式（用紙美濃紙）

登記印紙ヲ貼付スヘシ

檢定證再度交付依頼書

一何々檢定證寫番號若クハ器械製造人名番號及舊檢定年月

右紛失ニ付再度交付相成度及御依頼候也

年月日　　依頼者　住所　氏　　名印

中央氣象臺長氏名殿

●內外國航海ニ係ル海上氣象報告方

（明治二十一年十二月　內務省令第十一號）

明治十九年遞信省令第四號第六條ニ掲クル內國航船ニ限リ來明治二十二年一月一日ヨリ左ノ雛形ニ據リ毎月海上氣象ヲ製シ中央氣象臺ニ報告ス可シ

（雛形略ス）

第二十章　曆時

●年號改元ノ詔勅

（明治元年九月布告）

今般御即位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就而ハ是迄吉凶之象兆ニ關ヒ屢改號有之候得共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰出候事

詔書

詔體太乙而登位膺乾命以改元淘聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海內億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革易舊制一世一元以爲永式主者施行

戊辰九月八日

●改曆ノ詔書

（明治五年十一月第三百三十七號布告）

今般改曆之儀別紙詔書ノ通被仰出候條此旨相達候事

（別紙詔書）

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躔度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率ヲ妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス蓋シ太陽曆ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晚ノ變ナク四歲每ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟サルナリ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

一今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事

但新曆儀板出來次第頒布候事

一一ヶ月三百六十五日十二ヶ月ニ分チ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一時刻ノ儀ハ迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト稱候事

一時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一諸祭典等德暦月日ヲ新暦月日ニ相當シ施行可致事

（新德暦日比較及時刻表ハ畧之）

●神武天皇御即位ヲ紀元ト定ム

（明治五年十一月第三百四十二號布告）

今般太陽暦御頒行　神武天皇御即位ヲ以テ紀元ト被定候ニ付其旨ヲ被爲告候爲メ來ル二十五日　御祭典被執行候事

但當日服者參朝可慎事

●年暦ニ干支記載ノ件（明治六年六月太政官達）

太陽暦御頒行ノ節干支ヲ除キ候處既往ノ年日推歩候ニハ干支相用候方便利ニ付自今暦上ニ年日トモ干支記載可致事

●本暦、略暦頒布ニ關スル件（明治十五年八月太政官第八號布達）

本暦並略暦ハ明治十六年暦ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布スヘシ

一枚摺略暦ハ明治十六年暦ヨリ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ出版スルコトヲ得

但明治九年（十月）内務省甲第三十九號布達ハ取消ス

●一枚摺略暦記載事項（明治二十三年十月文部省令第二號）

明治十五年（四月）太政官第八號布達第二項ニ依リ出版スル所ノ一枚摺略暦ハ自今左ノ規定ニ依ルヘシ

一　一枚摺略暦ハ左ニ列記スル事項ニ限リ記載スルモノトス

一　年號及紀元ノ年數干支

一　毎月ノ一日

一　日月食並其時間

一　大祭祝日並神社例祭大祓

一　日曜表甲子表庚申表己巳表

一　二十四節氣及雜節

一　新月滿月

一　前各項ニ相當スル陰暦日干支及陰暦ノ朔日

干支並之ニ相當スル陽暦日

以上ノ事項ハ帝國大學ニ於テ編纂スル所ノ暦ニ依ルヘシ但前各項規定ノ外本暦略本暦ニ掲載セサル事項ヲ記入スルハ此限ニ在ラス

●閏年ニ關スル件（明治三十一年五月勅令第九十號）

朕閏年ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布キシム

神武天皇即位紀元年數ノ四ヲ以テ整除シ得ヘキ年ヲ閏年トス但紀元年數ヨリ六百六十ヲ減シテ百ヲ以テ整除シ得ヘキモノノ中更ニ四ヲ以テ其ノ商ヲ整除シ得サル年ハ平年トス

●號砲執行ノ件（明治四年九月太政官第四百五十三號達）

舊本丸ニ於テ來ル九日ヨリ毎十二字大砲一發ツヽ毎日時號砲執行候條爲心得相達候事

●本初子午線經度計算方及標準時（明治十九年七月勅令第五十一號）

朕本初子午線經度計算方及標準時ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一　英國グリニッチ天文臺子午儀ノ中心ヲ經過スル子午線ヲ以テ經度ノ本初子午線トス

一　經度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東經ヲ正トシ西經ヲ負トス

一　明治二十一年一月一日ヨリ東經百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム

●標準時改稱（明治二十八年十二月勅令第百六十七號）

朕標準時ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　帝國從來ノ標準時ハ自今之ヲ中央標準時ト稱ス

第二條　東經百二十度ノ子午線ノ時ヲ以テ臺灣及澎湖列島並ニ八重山及宮古列島ノ標準時ト定メ之ヲ西部標準時ト稱ス

第三條　本令ハ明治二十九年一月一日ヨリ施行ス

第二十二類　勸業　度量衡

第一章　勸業

第一款　勸業博覽會

●内國勸業博覽會開期ノ件（明治十年十二月第八十八號布告）

内國勸業博覽會ノ儀ハ明治十年ヲ以テ第一回トシ爾後五ヶ年目毎（明治十四年ヲ以テ第二回トス）ニ被開候條此旨布告候事

但本會開設ノ場所及日限諸規則等ハ三ヶ年前ニ布告スヘキ事

●府縣博覽會ヘ審査官派出ノ件（明治十一年十一月内務省乙第七十七號達）

各府縣ニ於テ小博覽會興行候節往々審査官派出ノ儀願出候處右ハ其出品物産ノ景況ニヨリ自然一般ノ勸業上ニ可相關ト被認定候モノニ限リ派出爲致候條兼テ可相心得此段相達候事

●内國勸業博覽會ニ於テ授與ノ賞牌寫ヲ製品其他ヘ登載ノ件（明治十一年四月内務省甲第九號布達）

明治十年内國勸業博覽會ニ於テ授與ノ賞牌ハ受領人ノ適宜ニ任セ右賞牌ノ寫ヲ製造ノ物品又ハ其外ト包ミ或ハ看板廣告書等ノ類ヘ相付候儀ハ不苦候條此旨爲心得布達候事

●内外博覽會及其進會授與ノ褒證ヲ失ヒタル者ヘ證明證付與方（明治十七年十二月農商務省告示第二號）

内外博覽會及ヒ共進會ニ於テ授與ノ褒証水火盜難ニ罹リ失ヒタル者ヨリ請求候節ハ證明狀附與可致候條右等事故有之候ハヽ管轄廳ヘ願出ヘシ管轄廳ニ於テハ其失ヒタル事由及ヒ年月日ヲ取調當省ヘ具申致スヘシ

但官廳出品ニ係ル分モ本文ニ準ス

●博覽會共進會場ニ於ケル物品販賣者取扱方心得（明治二十一年一月大藏省訓令第一號）

博覽會共進會開設ニ際シ煙草菓子藥品ヲ出品シ且ツ其會場内外ニ於テ特ニ販賣スルトキ其取扱方ハ左ノ通心得ヘシ

但明治十一年（六月）内務大藏兩卿達第四十七號達ハ自今廢止ス

一　從來免許ノ營業人ニシテ出品スルモノハ別段免許鑑札ヲ受ルニ及ハス

一　印紙ノ貼用ヲ要スル物品ハ總テ其規則ニ遵テ印紙ヲ貼用スヘシ

一　出品主ニシテ其出品ノ販賣店ヲ開設スルモノ亦前二項ニ準ス但其店頭ニ免許何營業人住處氏名ヲ記載セル標札ヲ掲出スヘシ

一　前項販賣店開設ヲ許可スルニ當リ場内狹隘ノ爲メ止ムヲ得サルトキハ其場近傍ニ一定ノ區域ヲ限リテ之ヲ許可スルコトヲ得

●博覽會共進會品評會其他類似ノ會出品區域一郡市以上ニ渉ル（明治十一年二月農商務省訓令第五號）

明治三十二年一月以降其管下ニ於テ開設スル博覽會共進會品評會其他類似ノ會ニシテ其出品區域一郡市以上ニ渉ルモノハ閉會後三十日以内ニ左ノ事項ヲ報告スヘシ

但明治三十一年十二月以前ノ開設ニ係ルモノハ同二十四年（一月）當省訓令第三號ニ依リ報告スヘシ

一　開場地名
一　會名
一　會主
一　開會及閉會月日
一　出品區域
一　出品人員
一　出品員數
一　出品種類
一　受賞人員（各褒賞ノ等級種類ヲ區別シテ其受賞人員ヲ記載スヘシ）
一　來觀人員
一　會費總額
一　會費區別　府縣税（又ハ地方税）、通常收額、寄附金等各其金額ヲ記載スヘシ
一　會場及出品ノ景況

第二款　勸業諮問會并勸業委員設置ノ件（明治十六年五月太政官第十三號布達）

各地方ノ便宜ニ從ヒ左ノ條項ニ照準シテ勸業諮問會竝勸業委員ヲ設置スルコトヲ得

第一條　諮問會ハ各府縣勸業事務ニ付府知事縣令ノ諮問ニ備フルモノトス

第二條　諮問會員ハ府知事縣令ニ於テ管内農商工事ニ名望アル者ヲ選テ之ニ充ツ其人員並處務ノ順序等總テ府知事縣令適宜之ヲ定ムヲ可シ

第三條　諮問會員ノ旅費日當ハ地方税中勸業費ヲ

以テ支辨ス可シ

第四條　勸業委員ハ區町村若クハ聯合區町村ニ於テ勸業ノ事ヲ擔任シ又ハ（區郡）長戸長ノ諮問ニ備フルモノトス

第五條　勸業委員ノ人員撰擧方法及ヒ農務ノ順序等ハ區町村會又ハ聯合區町村會ニ於テ之ヲ評定シ府知事縣令ノ裁可ヲ受ク可シ

第六條　區町村若クハ聯合區町村ニ於テ農業會商業會工業會又ハ農商工ヲ併セタル勸業會其他同業會ヲ設置スルトキハ勸業委員ヲシテ會員タラシムルコトヲ得

第七條　府知事縣令ニ於テ勸業委員ノ設置及第六條ノ各會設立ヲ要用ト認ムルトキハ發擧シテ之ヲ設置セシムルコトヲ得此場合ニハ農商務卿ニ裁議シテ認可ヲ請ク可シ

第八條　勸業委員ノ旅費日當及第六條ノ各會費ハ區町村及聯合區町村ノ協議費ヲ以テ支辨シ又ハ關係各業者ニ於テ協議支辨スルコトヲ得但有志者ヲ以テ組織スル者ハ此例ニ非ラス

第九條　農商務卿及主務ノ官署ハ各地方勸業上ノ件ニ付諮問會又ハ第六條各會ノ意見ヲ問フコトアル可シ

諮問會又ハ第六條ノ各會ハ勸業上公益ノ件ニ付農商務卿及主務ノ官署ニ意見書又ハ報告書ヲ呈スルコトヲ得

右布達候事

●勸業諮問會幷勸業委員心得

（明治十六年七月農商務省第八號達）

本年（五月）第拾三號布達相成候ニ就テハ左ノ條項爲心得相達候事

第一諮問會ニ諮問スヘキ事項

一海陸運漕ノ利害（道路港灣ノ開鑿修築）ニ關スル事

二流運用悪水疏通ニ關スル事

三農商工水產山林礦山ノ利害及改良保護ニ關スル事

四農商工水產山林礦山ノ利害及改良保護ニ關スル統計ノ事（十九年農商務省第四號達改正ニ依ル）

第二諮問會員ノ定限

會員ハ任期ニ定限ナク又其數ヲ限フスト雖トモ五十名ヲ超ユヘカラス

縣會議員學務委員衛生委員戸長等ノ職務アルモノト雖トモ農商工事ニ名望アルモノハ之ニ諮問會員ヲ兼務セシムルモ妨ケナシ

農商務省官吏及農商工上等會員又ハ府知事縣令ノ許可ヲ得タル該府縣ノ官吏ハ會場ニ列シ意見ヲ陳ルコトヲ得ヘシ但會員ノ數ニ加ヘス

第三諮問會々頭

府知事縣令之ヲ勤ムヘシ但書記官又ハ各課長ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第四諮問會就明委員及書記

府知事縣令其屬官中ヨリ之ヲ命スヘシ

第五諮問會開會ノ期節又ハ臨時開會ヲ要スヘキ場合

通常府縣會開會以前ヲ以テ通常諮問會開會ノ期節トシ其臨時開會ノ場合ハ府知事縣令ノ見込ニ依ルヘシ

第六諮問會則ノ要旨及諮就ノ採擇

會則ハ總テ談話ノ體ヲ用ヒ諮就ノ採擇ハ會員ノ意見ニアルヘシ但場合ニヨリ會員ノ意見ヲ識別スヘキ爲メ起立ノ作用ニ依ルモ勝ナリ

第七諮問會員ノ招集

會員ノ招集ハ府知事縣令ノ逸書ヲ以テシ通常開會ノ日數ハ概子十五日以內臨時開會ノ日數ハ概子七日以內トスヘシ

第八諮問會費

旅費日當ハ府縣會議員ノ旅費日當ニ超ヘサル額ヲ目途トシ府縣會議ニ附スル等ハ總テ府縣會規則ノ成法ニ依ルヘシ

諮問會員ニ年手當ヲ給スルノ必要アルトキハ地方稅中勸業費ヲ以テ支辨スルコトヲ得其他開會ノ費用ハ府縣費中費ヲ以テ支辨スヘシ

第九勸業委員ノ擔任

勸業委員ハ府知事縣令ノ裁可ヲ受ケタル處務順序ニ依リ補持部內ノ農商工事ノ上進ヲ圖リ及府縣廳（區郡）役所ノ指揮スル處ノ事務並戸長ヨリ協議ノ事務ヲ處辨スヘシ

第十（區郡）長戸長諮問ノ事項

諮問ノ事項ハ概子第一ノ事項ニ依ルヘシ諮問ハ勸業委員各人ニ諮問スヘキモノトス

第十一勸業委員ノ選擧（十九年農商務省訓令第二十號ヲ以テ第一項改正）

勸業委員ハ每郡區役所管轄部內ニ四名以內トス但一部內四名ヲ以テ積算シ其總人員內ニ於テ甲乙部互ニ其人員ヲ增減スルハ妨ナシ

勸業委員ノ選擧ハ其要スヘキ人員ノ幾倍ヲ選擧セシメ府知事縣令之ヲ選拔スルノ場合アルヘシ

第十二農業會商業會工業會勸業會及同業會

各會ハ名稱ヲ一ニシテ檢束スルモノニ非ス蓋ハ農業會中ニ農談會アリ商業會中ニ商法會議所アリ同業會中ニ單一種ノ同業會或ハ各種同業會ヲ聯合シタル同業會アルノ類トス

第十三勸業委員ノ設置及各會設立ノ誘導

準則ヲ設ケテ諭達シ或ハ（區郡）長戸長ニ指示スル等同一ニ施行セント圖ルコトアルトキハ裁議シテ認可ヲ請クヘシト雖モ有志者ヲ說諭奮起セシムル等ノ如キハ認可ヲ請クヘキ限ニ非ス

第十四勸業委員費

旅費日當額ハ區町村會若クハ聯合區町村會又ハ關係各業者ノ議決ヲ經ル等總テ區町村會法ノ成法ニ依ルヘシ

勸業委員ニ月手當金ヲ給スヘキ必要アルトキハ之ヲ區町村費ヨリ支辨シ或ハ府縣會ノ決議ヲ經テ全部若クハ其幾分ヲ地方稅中勸業費ヨリ支出スルコトヲ得其月手當額ハ一名金五圓以內トス但第十一項第一ノ總人員ニ對シ一名金五圓ヲ以テ積算シ其金額內ニ於テ互ニ增減支給スルハ妨ナシ（全上）

勸業上ニ關シ勸業委員ヲ北海道廳府縣廳ヘ招喚スヘキ要用アルトキハ其旅費日當ハ地方稅中勸業費ヨリ支給スヘシ

第十五項施行ノ後本省ヘ報告スヘキ件（十九年農商務省第一號達ヲ以テ全項改正）

諮問會員ノ人名

諮問會ノ筆記

勸業委員ノ人員

各會設置ノ位地及名稱

已上ニ關スル諸費用ノ豫算決定額

●農商務省ニ於テ勸業會開設ノ件

（明治十六年十二月農商務省第十七號達）

每年二月十日ヨリ當省ニ於テ勸業會開設候條農商工及山林ニ關スル課掛ノ內重立候者一名ツヽ出京可爲致此旨相達候事

○農商務省達　明治十八年四月　明治十六年第十七號

（十二月）當省第十七號達ニ據リ開設候勸業會ノ議ハ重要ノ件ニ付可成的綜合該課長可差出此旨更ニ相達候事

但課長差支ノ節ハ平常課長代理ノ者差出可申事

●農事講習所規程

（明治二十七年八月農商務省令第八號）

第三款　農事講習所規程

農事講習所規程左ノ通相定ム

第一條　此規程ニ農事講習所ト稱スルハ地方勸業費若クハ之カ補助ヲ以テ設立スル普通農事、園藝、茶業蠶業、蹄鐵畜產ノ講習所若クハ傳習所ヲ謂フ

第二條　農事講習所ハ地方產業ノ改良進步ヲ圖ルヲ目的トスヘシ

第三條　農事講習所ノ教科目ハ農事ニ係ルモノヲ主トシ地方ノ情況ニ應シ補助教科トシテ數學、丈量、氣象、物理、化學、博物、地理、圖畫ノ類ヲ加フルコトヲ得

第四條　農事講習所ハ實習ヲ主トシ授業時間ノ過半ヲ之ニ充ツヘシ

第五條　農事講習所ノ修業年限ハ二箇年以內トス

第六條　地方長官ニ於テ農事講習所ヲ設立シ若クハ補助セントスルトキハ講習所規則各種ノ豫定設備及經費概算額ヲ具シ豫メ農商務大臣ノ認可ヲ受ケヘシ

第七條　地方長官ハ前條ノ認可ヲ經農事講習所ヲ設立シ若クハ補助スルトキハ速ニ左ノ事項ヲ農商務大臣ニ屆出ヘシ但第二項ハ每年三月三十一日マテニ其他ノ各項ハ變更ノ都度本條ノ手續ヲ爲スヘシ

一、名稱及位置

二、經費ノ種別及其豫算金額

三、實習設備ノ種別及其數又ハ其面積

四、建物ノ種別及其坪數

五、職員ノ履歷及教師ノ擔任教科目

第八條　地方長官ハ農事講習所ノ教師ヲシテ農事ニ關スル巡廻講話ヲナサシムルコトヲ得

第九條　農事講習所ハ便宜ノ季節ヲ撰ヒ適所ニ開設スルコトヲ得

第十條　農事講習所業務ノ功程ハ前年度分取纏メ每年四月三十日マテニ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十一條　水產講習所又ハ傳習所ハ此規程ニ準スヘシ

附則

第十二條　地方長官ハ現在ノ講習所若クハ傳習所ニ付來十月三十一日マテニ其規則ヲ添ヘ第七條ノ手續ヲ爲スヘシ

●農事講習所設置心得方

（明治二十七年八月農商務省訓令第二十六號）

農事講習所規程ニヨリ講習所ノ設置ヲナストキハ左ノ通心得ヘシ

一農事講習所ハ地方慣行ノ技藝ノ外學理ノ應用ヲ授ケ地方農事ノ改良進步ヲ圖ルヲ以テ主眼トナスヘキモノナルカ故ニ成ルヘク營業者及其子弟ヲ養成スルコトヲ勉ムヘシ

一農事講習所ハ校舍ヲ常設シテ講習ヲ爲スト適宜ノ季節場所ヲ撰ンテ講習ヲ爲ストハ一ニ地方ノ便宜ニ任ス

一農事講習所ニ於ケル授業ハ勉メテ平易ナル講話體ヲ用ヒ教科目ハ濫ニ其數ヲ增サス補助教科ハ成ルヘク農事專門教科ヲ講スルニ力リ之ヲ引援

教授スルヲ可トス然レトモ地方ノ情況ニヨリ特ニ補助教科目ヲ設置スルトキハ其講習ハ可成農事ニ關係アル事項以外ニ渉ラサルヲ要ス

●農事及水産巡回教師設置心得方

（明治二十七年八月農商務省訓令第二十八號）

地方農事及水産ノ改良進歩ヲ圖ル爲メ巡回教師ヲ設置スルトキハ左ノ通リ心得ヘシ

第一項　農事及水産巡回教師ノ業務ハ左ノ項目ニ依リ之レヲ定ムヘシ

一　巡回講話實驗指導及質問應答ニ關スルコト

二　公設若クハ公設ノ補助ヲ以テ設立セル試驗事業ニ關スルコト

三　府縣内ノ共進會若クハ品評會ノ出品審査ニ關スルコト

其他必要ト認ムル事項

第二項　農事及水産巡回教師ヲ設置シタルトキハ速ニ其履歴及擔任事業ヲ屆出ヘシ

第三項　農事及水産巡回教師ニ關スル經費ノ種別及豫算金額ハ毎年三月三十一日マテニ其業務ノ功程ハ前年度分取纏メ毎年四月三十日マテニ屆出ヘシ

第四項　地方長官ニ於テ重要ト認ムル農事及水産巡回教師講話ノ要領ハ其時々報告スヘシ

第四款　農事試驗場附分析

●府縣農事試驗場規程

（明治二十七年八月農商務省訓令第二十七號）

府縣農事試驗場規程左ノ通相定ム

府縣農事試驗場規程

第一條　此規程ニ府縣農事試驗場ト稱スルハ府縣稅（又ハ地方稅）若クハ之カ補助ヲ以テ設立スル府縣ノ農事試驗場ヲ謂フ

第二條　府縣農事試驗場ハ總テ何府縣農事試驗場ト稱スヘシ但農事以外ノ事項ニ係ル試驗ヲ併行スルトキハ便宜之カ名稱ヲ定ムルコトヲ得

第三條　府縣農事試驗場ハ農事試驗場本支場ノ試驗成績ヲ參照シ其府縣内農産ノ增殖改良ニ係ル事項ニ就キ試驗ヲ擧行スヘシ

第四條　府縣農事試驗場ハ有益ナル試驗成績及セシムルカ爲メ左ノ事業ヲ行フコトヲ得

一　講話　二　種苗ノ配付

三　報告ノ刊行　四　模範園ノ設置

其他必要ト認ムル事業

第五條　府縣農事試驗場ハ試驗用地ニ充ツル爲メ相當ノ田畑ヲ備フヘシ

第六條　府縣農事試驗場ハ必要ナル場合ニ於テハ分場ヲ設クルコトヲ得

第七條　地方長官ニ於テ府縣農事試驗場ヲ設立シ若クハ補助セントスルトキハ各種ノ豫定事業、各種ノ豫定設備及經費概算額ヲ具シ豫メ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條　地方長官ハ前條ノ認可ヲ經府縣農事試驗場ヲ設立シ若クハ補助スルトキハ速ニ左ノ事項ヲ農商務大臣ニ屆出ヘシ

但第二項ハ毎年三月三十一日マテニ其他ノ各項ハ變更ノ都度本條ノ手續ヲナスヘシ

一　名稱及位置

二　經費ノ種別及其豫算金額

三　試驗地ノ種別及其面積

四　建物ノ種別及其坪數

五　職員ノ履歴

第九條　府縣農事試驗場ハ農事試驗場若クハ農事試驗場支場ト協議ノ上毎年施行スヘキ試驗ノ項目及其方法ヲ定ムヘシ

第十條　府縣農事試驗場ハ毎年試驗成績及第四條ニ掲ケタル事業ノ功程ヲ農事試驗場若クハ農事試驗場支場ニ報告スヘシ

但重要ト認ムル講話ノ要領ハ其時々報告スヘシ

第十一條　現在ノ府縣農事試驗場ハ來十月三十一日マテニ第八條ノ手續ヲ爲スヘシ

●農事試驗場巡回講話等ニ關スル件

（明治二十六年七月農商務省訓令第十九號）

農事試驗場本支場管轄區域當省告示第八號ノ通相定メ候ニ付テハ左ノ事項心得ヘシ

一　農事講話ノ爲メ毎年本場及支場ノ技術官ヲシテ其管轄區域内ニ巡回セシム

但當分ノ内北海道及沈鎮縣ニハ實施セス

二　本場若クハ支場ヨリ農事講話ノ爲メ技術官派出ノコトヲ地方廳ニ通知スルトキハ其地方長官ハ豫メ講話ノ場所期日ヲ定メ場長若クハ支場長ヘ打合ノ上其管内ニ告知スヘシ

三　巡回講話若クハ品評會共進會審査等ノ爲メ旅費ヲ支辨シテ技術官ノ派出ヲ要スルトキハ其府縣所屬ノ本場若クハ支場ニ其旨ヲ移牒スヘシ

四　種苗ノ配付ハ本場若クハ支場ニ於テ配付ノ都度其旨官報紙上ニ廣告ス

五　土質種子肥料飼料等ノ鑑定並農事ニ關スル質問ハ其府縣所屬ノ本場若クハ支場ヘ申出ツヘシ

六　土質種子肥料飼料等ノ分析ニ關スル規程ハ追テ之ヲ定ム

●農事試驗場分析依頼者心得

（明治二十六年十二月農商務省告示第十九號）

農事試驗場ニ分析ヲ依頼スル者ハ左ノ心得書ニ依ルヘシ

分析依頼者心得

一　分析ニ要スル供試品ノ數量ハ左ノ區別ニ從ヒ差出スヘシ

但シ場長又ハ支場長必要ト認ムルトキハ增加セシムルコトアルヘシ

土壤

（甲）油粕、蕪、乾鰮、鯡搾　五百匁

（乙）骨粉、鳥糞ノ類、骨炭、石灰草木灰ノ類　五十匁乃至五百匁

（丙）人造肥料　五十匁乃至五百匁

（丁）堆肥ノ類　五百匁

肥料

（甲）穀菽其他子實ノ類　百匁

（乙）稃皮、麻ノ類　百五十匁

（丙）稿稈ノ類　同

（丁）根菜ノ類　八百匁

（戊）葉菜ノ類　六百匁

（己）果蓏ノ類　七百匁

（庚）生草ノ類　五百匁

農産物

（辛）乾草ノ類　百五十匁

（壬）以上ノ外植物莖葉ノ類　同

（癸）同上（乾燥セルモノ）　五百匁

（乾燥セサルモノ）

農産製造品

（甲）脂肪、油、砂糖、澱粉、茶藍、煙草、乳油、乾酪ノ類　二十匁乃至百匁

（乙）亞爾酒保兒、醸造飲料ノ類　四合

水

（甲）定性分析ヲ要スルトキ　二升

（乙）定量分析ヲ要スルトキ　五升

二　分析ヲ依頼セントスル者ハ第一號書式ニ依リ依頼書ヲ作リ供試品ヲ添ヘテ所轄農事試驗場ニ申出ツヘシ

三　場長若クハ支場長ニ於テ分析ヲ爲スノ必要ナシト認ムルモノ又ハ事故アリテ分析ヲ爲シ能ハサルトキハ依頼ニ應セサルコトアルヘシ

四　場長又ハ支場長ヨリ分析ノ依頼ニ應スル旨ヲ通知シタルトキハ第二號書式ニ依リ手數料納付書ヲ作リ明治二十六年勅令第二百三十號ニ依リ相當ノ登記印紙ヲ貼用シテ差出スヘシ

五　供試品ハ分析施行ノ後殘餘ヲ生スルモ返戻セサルモノトス

分析ノ依頼ニ應セサル供試品ハ通知ノ日ヨリ二週間以内ニ其返戻ヲ請求スルモノアルトキハ運賃先拂ヲ以テ發送ス

六　分析ノ成績ハ依頼者ニ交付ス

第一號書式

分析依頼書

一　供試品名

二　生産地若クハ製造地名

（明治二十六年十二月勅令第二百三十號）

農事試驗場分析手數料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　農事試驗場ニ分析ノ依頼ヲ爲ス者ハ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ納ムヘシ

一　土壤及肥料ノ定性分析ハ一成分毎ニ金三十錢トス

二　土壤ノ定量分析ハ一成分金一圓トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金五十錢ヲ加フ

三　土壤ノ普通含有セサル成分ノ定性ハ一成分毎ニ金二圓トシ其ノ定量ハ一成分毎ニ金五圓トス

四　肥料ノ定量分析ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金二十五錢ヲ加フ

但水分及灰分金量ノ定量ハ各金十錢トス

五　農産物及飼料ノ有機質成分ノ定量ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金三十錢ヲ加フ

但水分及可燃物全量ノ定量ハ各金十錢トス

六　農産物及飼料ノ灰分ノ定量ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金三十錢ヲ加フ

但灰分全量ノ定量ハ金十錢トス

七　農産製造品ノ定性分析ハ一成分毎ニ金五十錢トス

八　農産製造品ノ定量分析ハ一成分金一圓五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金一圓ヲ加フ

九　水ノ定性分析ハ一成分金二圓トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金五十錢ヲ加フ

十　水ノ定量分析ハ一成分金三圓トス二成分以上ハ一成分ヲ增ス毎ニ金二圓ヲ加フ

十一　以上列記シタルモノヽ外農産上ニ關係アル物料ノ分析手數料ハ前示ノ割合ニ準シ時々農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

三　生産人若クハ製造人名
四　分析ヲ要スル成分
右定性(又ハ定量)分析御依頼仕度候間御許可相成度候也

年　月　日　　職業　氏　　名　印　現住所

農事試驗場長又ハ農事試驗場何支場長宛

第二號書式
(此處ニ登記印紙ヲ貼用シ消印スヘシ)分析手數料納付書
何年何月何日付ヲ以テ御依頼仕置候何々分析ノ儀御許可相成候ニ就テハ右手數料納付仕候也

年　月　日　　職業　氏　　名　印　現住所

農事試驗場長又ハ農事試驗場何支場長宛

●農業ニ關スル分析依頼ニ應スル農事試驗本支場(明治二十六年十二月農商務省告示第十八號)

左記ノ農事試驗場本支場ニ於テ來十二月十五日ヨリ土壤、肥料、農産物、農産製造品其他農業上ニ關係アル物料ノ分析依頼ニ應ス

農事試驗場本場
東京府北豐島郡滝ノ川村大字西ヶ原
農事試驗場石川支場
石川縣石川郡松任町大字八ツ矢町
農事試驗場德島支場
德島縣名東郡加茂村大字東名東
農事試驗場熊本支場
熊本縣託麻郡出水村大字國分

○農商務省告示(明治二十七年五月第七號)
左記ノ農事試驗場ニ於テ來ル七月十五日ヨリ土壤、肥料、農産物、農産製造品其他農業上ニ關係アル物料ノ分析依頼ニ應ス

農事試驗場廣島支場
廣島縣沼田郡祇園村大字北下安
農事試驗場宮城支場
宮城縣名取郡茂ヶ崎村大字長町

○農商務省告示(明治二十七年五月第十九號)
左記ノ農事試驗場支場ニ於テ來ル明治二十八年一月十五日ヨリ土壤、肥料、農産物、農産製造品其他農業上ニ關係アル物料ノ分析依頼ニ應ス

農事試驗場大阪支場
大阪府下志紀郡柏原村大字市村

●地質調査所分析試驗手數料納付方(明治二十五年七月勅令第六十三號)

朕農商務省地質調査所ニ於テ爲ス分析試驗ニ關スル手數料徴收ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　農商務省地質調査所ニ分析試驗ノ依頼ヲ爲ス者ハ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ納ム可シ
一　一性分ノ定性分析ハ金一圓トス一定性ヲ增ス毎ニ金五十錢ヲ加フ
二　礦物、工業用原料、製造品等中一性分ノ定量分析ハ金二圓トス一定量ヲ增ス毎ニ金一圓ヲ加フ
三　一金屬ノ乾式定量分析ハ金二圓トス一定量ヲ增ス毎ニ金一圓ヲ加フ
四　礦物類ノ比重、硬度等ノ檢定ハ一廉毎ニ金五十錢トス
五　耐火材料用ノ粘土、煉化石等ノ火熱ニ於ケル實驗、陶磁器、煉化石、「セメント」原料用粘土類ノ器械分析及ヒ應用試驗ハ金二圓以上金二十圓以下トシ試驗ノ難易ニ從ヒ農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル
六　器械油等ノ比重、粘力、引火點、凝結點、沸騰點、熔融點、乾燥質ノ試驗ハ一廉毎ニ金五十錢トス金屬ニ於ケル作用、酸類及ヒ「アルカリ」ノ作用、酸類ノ定量、分餾、沃度化合數、檢化數等ノ試驗ハ第二號ニ準ス
七　建築材料等ノ吸水力、耐壓力、耐延力、凍寒ニ於ケル作用、石灰ノ「モルタル」製出力等ノ試驗ハ一廉毎ニ金一圓トス
八　「セメント」ノ比重、一定容量ノ重量、硬化ノ時間粉末ノ細粗硬化ノ際膨脹ノ程度、龜裂ノ現象等ノ試驗ハ一廉毎ニ金五十錢硬力即チ耐壓力並ニ耐延力等ノ檢定ハ一廉毎ニ金一圓以上金十圓以下トシ試驗ノ難易ニ從ヒ農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル
九　右各號外ニシテ化學工業ニ屬スルモノト認ムル試驗手數料ハ前示割合ニ準シ時々農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル
十　時日ヲ限リ分析試驗ヲ依頼スルトキハ前示手數料ノ二倍トシ同人ニシテ同種類ノモノ五箇以上ノ試驗ヲ同時ニ依頼スルトキハ前示手數料ノ二割ヲ減ス
第二條　前條ノ手數料ハ登記印紙ヲ以テ納ム可シ
第三條　本令ハ明治二十五年八月一日ヨリ施行ス

●地質調査所分析試驗依頼者心得(明治二十五年七月農商務省告示第十三號)

分析試驗依頼者心得左ノ通リ相定ム
一　明治二十五年勅令第六十三號ニ依リ農商務省地質調査所ニ分析試驗ノ依頼ヲ爲ス者ハ依頼書ニ供試品ヲ添ヘ直ニ該所ニ差出スヘシ
二　供試品ノ分量ハ左ノ區別ニ依ルヘシ
一　礦物類ノ分析ハ　十匁以上
二　石炭ノ分析ハ　一斤以上
三　金屬ノ乾式定量分析ハ四十匁以上
四　礦物類ノ比重、硬度等ノ檢定ハ　二匁以上
五　耐火材料用ノ粘土、煉化石等ノ火熱ニ於ケル實驗、「セメント」原料用粘土類ノ器械分析及應用試驗ハ三斤以上
六　器械油等ノ比重粘力、引火點、乾燥質ノ試驗等ハ　五合以上
七　建築材料等ノ吸水力、耐壓力、凍寒ニ於ケル作用等ノ試驗煉化石ハ試驗一廉毎ニ標本　八箇以上
石材ハ試驗一廉毎ニ一寸六分五厘乃至三寸三分立方(五乃至十「センチメートル」立方)ノ標本八箇以上
八　「セメント」ノ比重、硬化ノ時間、粉末ノ細粗、硬化ノ際膨脹ノ程度、龜裂ノ現象等ノ試驗ハ　三斤以上
一定容量ノ重量ノ檢定、　五斤以上
耐延力、及ヒ耐壓力ノ試驗　二十七斤以上
九　右各號外ノ分析試驗品ノ分量ハ臨時指揮ヲ受クヘシ

三　依頼書式ハ左ノ如シ

第一號書式(用紙美濃紙)
分析依頼書(此處ニ登記印紙ヲ貼用シ消印スヘシ)
一　試驗品名何々(試驗品ノ名稱ヲ記スヘシ)
二　產地若クハ製造地名(市町村等ヲ掲クヘシ)及ヒ製造人名何々
三　定性若クハ定量スヘキ物質(定性若クハ定量スヘキ物質ノ名稱ヲ左ニ列記スヘシ)
一　何々
一　同
一　同
右分析及御依頼候也
年月日　分析依頼者　氏　名　印　現住所
農商務省地質調査所長氏名殿

第二號書式(用紙美濃紙)
試驗依頼書(此處ニ登記印紙ヲ貼用シ消印スヘシ)
一　試驗品名何々(試驗品ノ名稱ヲ記スヘシ)
二　產地若クハ製造地名(市町村等ヲ掲クヘシ)及ヒ製造人名何々
三　試驗ノ目的(例ヘハ建築材料即チ煉化石ノ如キモノナレハ吸水量、耐壓力、凍寒ニ於ケル作用等、「セメント」ナレハ比重、一定容量ノ重量、硬化ノ時間、粉末ノ細粗、硬化ノ際膨脹ノ程度、龜裂ノ現象等其所要試驗ノ要領ヲ記スヘシ
右試驗及御依頼候也
年月日　試驗依頼者　氏　名　印　現住所
農商務省地質調査所長氏名殿

○農商務省告示(明治二十五年六月第二十一號)
明治三十年六月五年(七月二十五日)農商務省告示第十三號分析試驗依頼者心得中分析及試驗依頼書ハ自今農商務省鑛山局長宛ト爲シ東京市麹町區道三町三番地農商務省鑛山局地質課ヘ提出スヘシ

第五款　種畜

●種牡馬檢査法(明治三十年三月法律第十二號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル種牡馬檢査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

種牡馬檢査法

第一條　牡馬ハ此ノ法律ニ依リ毎年檢査ヲ受ケ合格シタルモノニアラサレハ種付ケニ使用スルコトヲ得ス(三十二年法律第九十二號改正ニ依ル)
第二條　檢査ニ合格シタル種牡馬ニハ軀肢ノ一部ニ烙印シ其ノ所有者ニ證明書ヲ下付スヘシ
第三條　證明書ノ效力ハ滿一箇年トス但地方ノ狀況ニ依リ此ノ年限ニ依ラサルコトヲ得(三十二年法律第九十二號ヲ以テ但書追加)
前項期限內ト雖疾病其ノ他ノ事故ニ因リ種牡馬ニ不適當ナリト認メタルトキハ證明ノ效力ヲ停止シ若ハ之ヲ取消スコトアルヘシ
第四條　檢査ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス
第五條　此ノ法律ハ官廳所有ノ種牡馬ニ適用セス

第六條　學術研究ノ爲牡馬ヲ種付ケニ使用セムトスル者アルトキハ地方長官ハ農商務大臣ノ認可ヲ經特ニ其ノ種付ケヲ許可スルコトアルヘシ

第七條　檢査ニ合格セサル牡馬又ハ證明ノ效力ヲ失ヒ若ハ停止セラレタル種牡馬ヲ種付ケニ使用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條　種牡馬檢査ノ標準及方法檢査委員ノ組織其ノ他此ノ法律施行ノ爲必要ノ規程ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九條　北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ因リ農商務大臣ハ當分ノ內島嶼ニ限リ此ノ法律ヲ施行セサルコトヲ得（三十二年法律第九十二號ヲ以テ追加以下樣下ケ）

附　則

第十條　此ノ法律施行以前ニ與ヘタル種牡馬ノ免許ハ其ノ免許期限間效力ヲ有スルモノトス

第十一條　此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

●種牡馬檢査法施行細則

（明治三十年五月農商務省令第四號）

種牡馬檢査法施行細則左ノ通相定ム

種牡馬檢査法施行細則

第一條　種牡馬ノ檢査ヲ受ケントスル者ハ地方長官ニ願出ヘシ

第二條　種牡馬ノ檢査ハ地方長官豫メ其期日ヲ告示シ二名以上ノ檢査委員之ヲ行フ

檢査委員ハ府縣官吏、獸醫又ハ產馬業ニ經驗アル者ノ中ヨリ地方長官之ヲ命ス

北海道廳、府縣ノ管下ニ屬スル島嶼ニ於テハ第一項ニ據ラサルコトヲ得（三十年農商務省令第十五號ヲ以テ追加）

第三條　種牡馬ノ資格標準ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　年齡滿四歲以上

二　體尺四尺五寸以上

三　強壯ニシテ骨格及性質善良ナルモノ

四　惡癖又ハ遺傳病ナキモノ

地方ノ狀況ニ依リ第一號第二號ノ制限ヲ適用シ難キトキ若クハ前數號ノ外尙ホ必要ト認ムル事項アルトキハ地方長官ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ適宜之ヲ施行スルコトヲ得

第四條　地方長官ハ前條ノ資格標準ニ合格シタル種牡馬ニハ種牡馬檢査法第二條ニ依リ其牡馬ノ左脇、臀下若クハ蹄壁ニ烙印シ其所有者ニ證明書ヲ下付スヘシ

第五條　地方長官ハ種牡馬檢査法第三條但書ニ依リ證明書ノ年限ヲ定メント欲スルトキハ其事由ヲ具シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ（三十二年農商務省令第七號ヲ以テ追加以下逐次樣下ク）

第六條　地方長官ハ證明書ヲ得タル種牡馬ト雖疾病其他ノ事故ニ依リ種牡馬ニ不適當ナリト認メタルトキハ種牡馬檢査法第三條ニ依リ其證明ノ效力ヲ停止シ若クハ之ヲ取消スヘシ

第七條　證明書其效力ヲ失ヒ若クハ取消サレタルトキハ該證明書ノ所有者ハ三十日以內ニ之ヲ地方長官ニ返納スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ地方長官ハ第四條ノ證印ヲ烙消スヘシ

第八條　種牡馬ノ種付ヲ爲ストキハ其所有者又ハ管理人ハ證明書ヲ携帶スヘシ

證明書ハ當該官吏又ハ牝馬所有者若クハ管理人ヨリ其閲覽ヲ請求スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第九條　證明書ヲ毀損亡失シ若クハ證明書記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其書換若クハ再渡ヲ地方長官ニ願出ヘシ

種牡馬斃死シタルトキハ證明書ヲ添ヘ其旨屆出ヘシ（三十年農商務省令第十五號ヲ以テ追加）

第十條　種牡馬ノ所有者又ハ管理人ハ帳簿ヲ調製シ種付牝馬ノ種類、年齡、毛色、體尺、特徵、種付年月日及其所有者又ハ管理人ノ住所氏名ヲ記載スヘシ

第十一條　牝馬所有者又ハ管理人ニ於テ產駒ノ血統證ヲ請求スルトキハ種牡馬所有者又ハ管理人ハ之カ交付ヲ拒ムコトヲ得ス

第十二條　種牡馬檢査委員其檢査ヲ結了シタルトキハ速ニ其成績ヲ地方長官ニ報告スヘシ

地方長官ハ前項ノ報告ニ依リ證明書ヲ下付シタルトキハ種牡馬裘ヲ調製シ其種類、年齡、體尺、毛色及所有者ノ住所氏名ヲ管內ニ告示スヘシ

第十三條　地方長官ハ每年一回以上主任官吏ヲシテ種牡馬ノ狀況、產駒ノ成績及第十條ノ帳簿ヲ檢査セシムヘシ（三十二年農商務省令第七號改正ニ依ル）

前項ノ場合ニ於テハ種牡馬所有者又ハ管理人ハ其檢査ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條　地方長官ハ第十二條第二項ノ種牡馬裘ヲ告示シタルトキ及第十三條第一項ノ檢査ヲ行ヒタルトキハ其都度種牡馬裘及檢査ノ狀況ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ（仝上）

第十五條　農商務大臣ハ臨時主任官吏ヲ派遣シ種牡馬檢査ノ執行ヲ監督セシメ若クハ種牡馬ノ狀況ヲ監察セシムルコトアルヘシ

第十六條　第七條第一項第八條乃至第十一條及第十三條第二項ニ違背シタルモノハ一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス（三十二年農商務省令第七號ヲ以テ改正）

●種牡馬檢査法ヲ施行セサル島嶼

（明治三十二年四月農商務省告示第三十一號）

明治三十年法律第十二號種牡馬檢査法第九條ニ因リ當分ノ內左ノ島嶼ニ限リ同法ヲ施行セス

鹿兒島縣大島郡各島嶼

同縣薩摩郡ノ內甑島

同縣熊毛郡ノ內屋久島並口永良部島

●種馬牧場及種馬所馬匹預托規則

（明治三十年一月農商務省訓令第一號）

種馬牧場及種馬所馬匹預托規則左ノ通相定ム

種馬牧場及種馬所馬匹預托規則

第一條　種馬牧場及種馬所ニ於テ飼養スル馬匹ヲ預托飼養セシムルトキハ此規定ニ依ルヘシ

第二條　受托人ハ馬匹ノ飼養ニ熟達シ身元確實ナル者ニ限ル

受托人ハ身元確實ナル保證人ヲ要ス

第三條　馬匹預托期限及馬匹預托飼養料ハ種馬牧場長若クハ種馬所長之ヲ定ム

飼養料ハ飼養ノ結果ニ依リ其金額ヲ增減スルコトヲ得

第四條　馬匹預托飼養料ハ馬匹返納ノ後交付スル但シ時宜ニ依リ數回ニ交付スルコトヲ得

第五條　預托馬匹ノ輸送費ハ種馬牧場長若クハ種馬所長ニ於テ其實費ヲ仕拂フヘシ

第六條　馬匹預托中疾病負傷等ノ爲メ治療ヲ要シタルトキハ種馬牧場長若クハ種馬所長ハ其實費ヲ仕拂フヘシ但シ其原因受托人ノ不注意ニ出ツルモノハ此限リニアラス

第七條　種馬牧場長若クハ種馬所長ハ馬匹預托中受托人ヲシテ左ノ各項ヲ確守セシムヘシ

一　常ニ衛生ニ注意シ飼料ヲ精選シ誠實ニ管理飼養スルコト

二　適當ノ運動ヲナサシムルノ外使役セサルコト

三　疾病ニ罹リ又ハ負傷シタルトキハ速ニ獸醫ノ治療ヲ受ケ同時ニ種馬牧場若クハ種馬所ニ急報スルコト

四　傳染病發生シ若クハ蔓延ノ兆アルトキハ速ニ適當ノ所置ヲナスコト

五　斃死流產等ノ場合ニ於テハ其狀況ヲ詳記シ診斷書及證明書類ヲ添ヘ速ニ種馬牧場若クハ種馬所ニ屆出テ指揮ヲ受クルコト

六　預托馬匹逸走シ又ハ盜奪セラレタルトキハ直ニ最寄警察署、警察分署若クハ巡査駐在所ニ屆出テ同時ニ種馬牧場若クハ種馬所ニ急報スルコト

七　前項ノ外種馬牧場長若クハ種馬所長ヨリ特ニ指定シタル事項ヲ遵守スルコト

第八條　種馬牧場長若クハ種馬所長ハ隨時預托馬匹ノ檢査ヲ行フヘシ但シ受托人ヲシテ特ニ指定ノ場所ニ馬匹ヲ牽出サシムルコトヲ得

第九條　預托中ト雖トモ種馬牧場若クハ種馬所ノ便宜ニ依ルカ若クハ受托人ニ於テ此規定ヲ遵守セサル行爲アリト認ムルトキハ何時タリトモ預托ノ馬匹ヲ返納セシムヘシ

第十條　第七條第五項第六項ノ場合ニ於テ損失ノ原因受托人ノ故意又ハ不注意ニ出タルモノト認ムルトキハ相當ノ代價ヲ辨償セシムルコトヲ得

第十一條　種馬牧場長若クハ種馬所長ハ受托人ヲシテ馬匹受取ノ際左記書式ノ預證ヲ差出サシムヘシ

（書式畧ス）

●種牡馬取締ノ件

（明治十八年一月農商務省第一號達）

種畜條例發布相成候ヤテ左ノ項目ニ據リ種牡牛馬取締方法適宜相設可屆出此旨相達候事

但種牡牛馬ハ左ノ雛形ニ據リ一箇年分取纏メ翌年二月十五日限リ農務局ヘ報告スヘシ

第一　牛ハ滿二歲以上滿十歲以下ノモノヲ用フヘシ但洋種ハ十歲以上ニ至ルモ妨ナシ

第二　馬ハ滿三歲以上滿十六歲以下ノモノヲ用フヘシ但洋種ハ十六歲以上ニ至ルモ妨ナシ

第三　遺傳病ナキモノヲ用フヘシ

第四　惡癖ナキモノヲ用フヘシ

第五　强壯ニシテ骨格善良ナルモノヲ用フヘシ

第六　寸尺ノ制限ハ適宜之ヲ定ムヘシ

（報告雛形畧ス）

第六款　蹄鐵工

●蹄鐵工免許規則

（明治二十三年四月法律第三十一號）

蹄鐵工免許規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

蹄鐵工免許規則

第一條　蹄鐵工ハ農商務大臣ヨリ蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ニ限ル

蹄鐵工トハ他人ノ依賴ニ應シ蹄鐵ヲ裝シ又ハ蹄ヲ剪ルヲ以テ其ノ業ト爲ス者ヲ謂フ

第二條　蹄鐵工免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

一　蹄鐵工免許試驗ニ合格シ其及第證書ヲ有ス

ル者

一　官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校又ハ陸軍部内ニ於テ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一　公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一　外國ニ於テ官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一　獸醫開業免狀ヲ有スル者但獸醫假開業免狀ヲ有スル者ヲ除ク

第三條　第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ蹄鐵工免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試驗及第證書又ハ卒業證書若クハ獸醫開業免狀ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條　蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ蹄鐵工籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第五條　蹄鐵工廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條　蹄鐵工免狀ヲ受クル者ハ其ノ免狀下付ノトキ手數料トシテ金一圓ヲ納ムヘシ

第七條　蹄鐵工免狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

書換ノ免狀ヲ受クル者ハ免狀下付ノトキ手數料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ

第八條　蹄鐵工ハ正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ムコトヲ得ス

第九條　免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條　第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十一條　蹄鐵工免許試驗規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附　則

第十二條　蹄鐵工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具申ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歴ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十三條　第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受クタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十四條　此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル獸醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼テント欲スル者ハ第三條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

其ノ免狀ヲ受クル者ハ第六條ノ手數料ヲ要セス

第十五條　此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

●蹄鐵工免許試驗規則（明治二十三年七月農商務省令第六號）

蹄鐵工免許試驗規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

蹄鐵工免許試驗規則

第一條　蹄鐵工免許試驗ハ蹄鐵ノ學術ニ就キ筆記口述及實地ヲ以テ之ヲ行フ

第二條　試驗ハ每年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ

第三條　農商務大臣ハ試驗主事及委員ヲ選定シテ試驗ヲ行ハシム

第四條　試驗ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受驗ノ地名ヲ願書ニ記載シ一月若クハ七月者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條　第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十一條　蹄鐵工免許試驗規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附　則

第十二條　蹄鐵工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具申ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歴ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十三條　第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受クタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十四條　此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル獸醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼テント欲スル者ハ第三條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

其ノ免狀ヲ受クル者ハ第六條ノ手數料ヲ要セス

第十五條　此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

●蹄鐵工免許試驗規則（明治二十三年七月農商務省令第六號）

蹄鐵工免許試驗規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

蹄鐵工免許試驗規則

第一條　蹄鐵工免許試驗ハ蹄鐵ノ學術ニ就キ筆記口述及實地ヲ以テ之ヲ行フ

第二條　試驗ハ每年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ

第三條　農商務大臣ハ試驗主事及委員ヲ選定シテ試驗ヲ行ハシム

第四條　試驗ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受驗ノ地名ヲ願書ニ記載シ一月若クハ七月中其居住ノ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

第五條　受驗者ハ試驗期日三日前受驗地ノ宿處ヲ其地方廳ニ屆出ヘシ

第六條　試驗及第者ニハ試驗主事ヨリ及第證書ヲ附與スヘシ

第七條　不正ノ方法ヲ以テ及第シタルトキハ及第ノ效ナキモノトス

●蹄鐵工假免許手續（明治二十三年七月農商務省訓令第三十八號）

明治二十三年四月法律第三十一號蹄鐵工免許規則第十二條ニ據リ蹄鐵工假免狀ノ下付ヲ出願スル者アルトキハ左ノ手續ニ依リ取扱フヘシ

蹄鐵工假免許手續

第一條　蹄鐵工假免狀ノ下付ヲ出願スル者アルトキハ蹄鐵工乏シキ地ニ限リ左ノ事項ヲ取調本人ノ願書及履歴書ヲ添ヘ具狀スヘシ

一　區域、農業、地勢及馬匹頭數

一　營業年限

第二條　假免狀下付ノ出願ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

●蹄鐵工免許及試驗願書ノ件（明治二十三年九月農商務省訓令第五十二號）

蹄鐵工免狀同假免狀下付願書及免許試驗願書ハ副本差出スニ及ハス

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル肥料取締法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

肥料取締法

第一條　此ノ法律ニ於テ肥料ト稱スルハ農產物ノ肥養ニ供スル物料ヲ謂フ

第二條　肥料ヲ製造販賣シ又ハ之ヲ販賣セムトスル者ハ地方長官（東京府ハ警視總監）ノ免許ヲ受クヘシ

第三條　地方長官（東京府ハ警視總監）ハ何時タリトモ官吏ヲ派シテ肥料ノ檢査ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ニ依リ臨檢ヲ爲ス官吏ハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

第四條　肥料ノ製造販賣者又ハ販賣者ハ前條ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ檢査ノ爲必要ナル肥料ノ交付ヲ拒ムコトヲ得ス

第五條　第二條ニ違背シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條　第四條ニ違背シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條　肥料ヲ僞造若ハ他ノ物料ヲ混和シテ販賣シ又ハ情ヲ知テ之ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ肥料ハ沒收ス

第八條　第四條ニ違犯シ又ハ第七條ノ刑ニ處セラレタル者ハ行政廳ニ於テ其ノ營業ヲ停止シ若ハ禁止スルコトヲ得

第九條　此ノ法律施行ノ爲必要ナル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附　則

第十條　此ノ法律施行期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八款　害蟲豫防

●害蟲驅除豫防法（明治二十九年三月法律第十七號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル害蟲驅除豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

害蟲驅除豫防法

第一條　此ノ法律ニ於テ害蟲ト稱スルハ農作物ヲ害スル各種ノ蟲類ヲ謂フ

第二條　驅除豫防スヘキ害蟲ノ種類及驅除豫防ノ方法ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ府縣知事之ヲ定ム

認可ヲ經タル種類以外ノ害蟲發生シ急速ノ處分ヲ要スルトキハ府縣知事ハ臨時驅除豫防ノ方法ヲ定メ之ヲ施行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第三條　害蟲田畑ニ發生シタルトキ又ハ發生ノ虞アルトキハ府縣知事ハ豫メ期限ヲ定メ該田畑ノ作人ヲシテ驅除豫防ヲ行ハシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ作人驅除豫防ヲ行ハサルトキハ府縣知事ハ市町村役ヲ以テ之ヲ行ヒ市町村ヲシテ該作人ヨリ其ノ費用ヲ徵收セシムルコトヲ得其ノ費用ノ徵收ニ關シテハ市制第百二條及町村制第百二條ヲ適用ス

第四條　害蟲蔓延シタルトキ又ハ蔓延ノ兆アルトキ若ハ害蟲田畑以外ノ地ニ發生シタルトキ又ハ發生ノ虞アルトキハ府縣知事ハ市町村役ヲ以テ驅除豫防ヲ行フコトヲ得

第五條　府縣知事ハ前條ノ驅除豫防ノ爲ニ市町村ニ命シテ夫役ヲ市町村全部又ハ一部ノ田畑ノ作人及所有者ニ賦課セシムルコトヲ得

夫役害蟲ノ種類ニ依リテ田又ハ畑ニ區別シテ賦課スルコトヲ得

夫役ノ賦課ハ段別又ハ地價ヲ以テ準率ト爲スヘシ

夫役ハ各別ノ率ニ據リ小作人、自作人及地主ニ賦課スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ市制第百二十三條及町村制第百二十七條ヲ適用セス

第六條　府縣知事ハ驅除豫防ノ爲必要アルトキハ市町村役ヲ以テ選ヲ設ケ又ハ農作物、藁稈、刈株、雜草ヲ拔棄若ハ燒棄スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ規定ヲ適用ス

第七條　驅除豫防ノ必要ヨリ生シタル損害ニ對シ被害者ハ賠償ヲ要求スルコトヲ得ス

第八條　土地所有者、管理者又ハ使用者ハ官吏及其ノ指揮ヲ承クル者ノ其ノ地ニ入リ驅除豫防ニ從事スルヲ拒ムコトヲ得ス

第九條　府縣知事又ハ郡長ハ必要ナル場合ニ於テハ府縣稅（地方稅）又ハ郡費ヲ以テ第三條、第四條、第六條ノ費用ヲ補助シ若ハ驅除豫防ニ必要ナル器具ヲ給與シ又ハ貸與スルコトヲ得

第十條　蟲類以外ノ動物ト雖農作物ヲ害スルトキ又ハ害スルノ虞アルトキハ府縣知事ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ此ノ法律ヲ適用スルコトヲ得

第十一條　第三條ノ場合ニ於テ府縣知事ノ命令ニ從ハサル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料又ハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第十二條　第六條及第八條ニ依レル官吏若ハ其ノ指揮ヲ承クル者ノ行爲ヲ妨害スル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金又ハ十一日以上二十日以下ノ重禁錮ニ處ス

第十三條　此ノ法律ハ北海道、沖繩縣及ノ他市制、町村制ヲ施行セサル島嶼ニ之ヲ施行セス別ニ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●害蟲驅除法取扱手續（明治二十九年三月農商務省令第六號）

害蟲驅除豫防法取扱手續左ノ通相定ム

害蟲驅除豫防法取扱手續

第一條　害蟲驅除豫防法第二條第一項ニ依リ驅除豫防スヘキ害蟲ノ種類及驅除豫防ノ方法ニ付キ本大臣ノ認可ヲ請フトキハ各害蟲ニ付キ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　名稱、方言

二　主ナル被害農作物ノ種類

三　驅除豫防ノ方法

害蟲驅除豫防法第二條第二項ノ場合ニ於テモ本條ノ事項ヲ記載シタル書面ヲ添フヘシ

第二條　害蟲驅除豫防法ノ施行ニ係ル命令ヲ發布シタルトキハ其都度本大臣ニ報告スヘシ（三十二年農商務省訓令第八號ヲ以テ改正）

第三條　害蟲一市町村以上ニ蔓延シタルトキ又ハ蔓延ノ兆アルトキハ鄰接市町村ニ於テ同時ニ驅除豫防ヲ行フヘシ

第四條　害蟲鄰接府縣ニ蔓延セントスルノ虞アルトキハ其ノ旨ヲ關係府縣ニ急報スヘシ

第五條　二府縣以上ニ跨リ害蟲蔓延シタルトキハ關係府縣ハ臨時驅除豫防ノ方法ヲ議定シ施行區域ヲ定メ驅除ヲ行フヘシ此場合ニ於テハ府縣知事ハ其ノ區域及第一條第一項ノ事項ヲ記載シタル書面ヲ添ヘ直ニ其ノ旨ヲ本大臣ニ具申スヘシ

第六條　害蟲驅除豫防法第十條ニ依リ蟲類以外ノ動物ニ對シ該法律ノ適用ニ付キ本大臣ノ認可ヲ請フトキハ本令第一條第一項ノ規定ヲ適用ス

第七條　害蟲發生シタルトキハ直ニ其ノ旨ヲ本大臣ニ急報スヘシ

第八條　害蟲蔓延シ若クハ蔓延ノ兆アリテ市町村費ヲ以テ之カ驅除豫防ヲ行フトキハ其ノ都度直ニ左ノ事項ヲ本大臣ニ報告スヘシ

一　害蟲ノ種類

二　郡市町村名

三　被害農作物ノ種類及被害見積段別

四　被害ノ狀況

第九條　毎年度ニ於テ市町村費ヲ以テ施行シタル害蟲驅除豫防ニ關スル事項ハ左ノ表式ニ依リ翌年四月三十日マテニ本大臣ニ報告スヘシ

（表式略ス）

●害蟲驅除ニ付注意ノ件（明治二十九年三月農商務省訓令第五號）

害蟲ノ驅除ハ其發生ノ初期ニ於テ之ヲ行フヲ以テ最モ效アリトス故ニ苟モ農作物ヲ害スル蟲類ノ發生シタル場合ニハ於テハ農家チシテ其機ヲ失フコトナク務メテ之カ驅除ニ從事セシムヘシ

第九款　蠶絲

●蠶種檢査法（明治三十年三月法律第十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル蠶種檢査法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

蠶種檢査法

第一條　此ノ法律ニ於テ蠶種ト稱スルハ原種及製絲用種ノ越年スルモノヲ謂フ

第二條　原種ハ框製ニスヘシ

第三條　蠶種ハ左ニ掲クル繭ヲ以テ之ヲ製造スルコトヲ得ス

一　二蠶以上合同シテ作リタル繭

二　繭層片薄ナル繭若ハ形狀ヲ失スルコト著シキ繭

三　繭層薄弱ニシテ繭ノ全量百ニ對シ繭層ノ量春蠶ニ在リテハ八、夏秋蠶ニ在リテハ六ニ達セサルモノ

第四條　蠶種ハ原種ヨリ產生シタル繭ヲ用ヰルニ非サレハ之ヲ製造スルコトヲ得ス

第五條　蠶種製造者ハ收繭後及產卵後ノ二期ニ於テ原種ニ在リテハ繭蛾卵、製絲用種ニ在リテハ繭、卵ノ檢査ヲ受クヘシ

第六條　第三條ニ掲ケタル繭ハ收繭後ノ檢査ヲ經ルマテ之ヲ保存スヘシ

原種ノ掃殼蠶種ノ製造ニ供用シタル繭及原種ノ製造ニ供用シタル母蛾ハ產卵後ノ檢査ヲ經ルマテ之ヲ保存スヘシ

第七條　此ノ法律施行ノ地方ニ於テハ檢査合格ノ證印ナキ蠶種ヲ賣渡シ又ハ讓渡スコトヲ得ス

第八條　此ノ法律施行ノ地方ニ於テ必要アリト認メタルトキハ地方長官ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ此ノ法律施行地以外ニ於テ製造シタル製絲用種ノ買受又ハ讓受ヲ認許スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ卵ノ檢査ヲ受ケシムヘシ

第九條　地方長官ハ蠶種檢査員ヲシテ養蠶期中蠶種製造者ニ就キ掃立蟻量ノ多寡生育ノ狀況及病蠶ノ有無ヲ視察セシムルコトヲ得

蠶種製造者ハ前項ノ視察ヲ拒ムコトヲ得ス

第十條　蠶種檢査員其ノ職務ヲ行フトキハ證票ヲ携帶スヘシ

第十一條　蠶種檢査員ハ自己若ハ家族ノ製造スル蠶種ノ檢査ヲナスコトヲ得ス　ゟ

第十二條　蠶種檢査ニ關スル費用ハ府縣ノ負擔トス但シ國庫ハ其ノ半額以內ヲ補助スルコトヲ得

北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ負擔トス

第十三條　地方長官ハ土地ノ情況ニ依リ農商務大臣ノ認可ヲ經テ此ノ法律ヲ施行セサルコトヲ得

第十四條　第三條第四條第五條第七條及第八條第二項ニ違背シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條　第六條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條　第九條第二項ニ違背シタル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十七條　此ノ法律中蠶種ノ製造及檢査ニ關スル規定ハ自家用ノ蠶種ノミヲ製造スル者ニ適用セス

第十八條　學術研究ノ爲農商務大臣又ハ地方長官ノ承認ヲ得蠶種ヲ製造スル者及其ノ製造シタル蠶種ニハ本法ヲ適用セス但シ賣渡スコトヲ得ス

第十九條　檢査方法及此ノ法律施行ニ關スル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附　則

第二十條　此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス但シ第二條ノ規定ハ此ノ法律施行後一箇年間之ヲ適用セス

第二十一條　明治十九年農商務省令第九號蠶種檢査規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

●蠶種檢査法施行細則（明治三十年六月農商務省令第六號）

明治三十年法律第十號蠶種檢査法施行細則左ノ通相定ム

蠶種檢査法施行細則

第一條　蠶種製造者ハ毎年二月十五日迄ニ雛形第一號ニ據リ其ノ年ノ原種掃立蛾數及蠶種製造豫算額ヲ地方廳ニ屆出ツヘシ

第二條　蠶種製造者ハ左ノ第一號ノ事項ヲ蠶種製造前ニ第二號ノ事項ヲ檢査前ニ其ノ壁紙ニ明記スヘシ

一　表面ニ春夏秋蠶ノ別及其ノ名稱

表面又ハ裏面ニ製造者ノ住所氏名

二　製造年月日

第三條　蠶種製造者原種ヲ製造セントスルトキハ一區ニ一批蛾ヲシテ產卵セシメ批蛾ト其ノ產卵區トニ同一ノ符號ヲ附スヘシ

第四條　蠶種製造者夏秋蠶ヨリ產生シタル繭ヲ以テ蠶種ヲ製造セントスルトキハ其ノ年ノ初期ニ於テ掃立タル原種ヨリ機織飼育シタルモノニ限ル

但初期掃立タル原種ノ掃殼ハ產卵後ノ檢査ヲ經ルマテ之ヲ保存スヘシ

第五條　蠶種檢査法第五條ニ據リ檢査ヲ受クヘキ蠶種ハ左ノ順序ニ據リ其ノ檢査ヲ行フ

一　收繭後ニ於テハ繭及其ノ原種

二　產卵後ニ於テハ蠶種及其ノ製造ニ供用シタル出殼繭

三　原種ニ在リテハ前二號ノ外尙其ノ製造ニ供用シタル批蛾

第六條　前條第一號第二號ノ檢査ハ蠶種製造者ニ就キ之ヲ行ヒ同條第三號及蠶種檢査法第八條第二項ノ檢査ハ蠶種檢査所ニ於テ之ヲ行フ

第七條　蠶種製造者ハ第五條第一號ノ檢査ヲ受クヘキ以前ニ於テ蠶種檢査法第三條ニ該當スル繭ヲ除去シ其殼量ト種繭ノ殼量トヲ各別ニ量定シ但名稱ノ異リタル繭ヲ混同スヘカラス

第八條　前條ニ據リ撰別シタル種繭ニシテ尙不完全ト認メタルトキハ蠶種檢査員ハ再ヒ其ノ撰別ヲ命スルコトヲ得

第九條　蠶種檢査員第五條第一號ノ檢査ヲ行ヒ蠶種檢査法第三條第四條ニ違背セスト認メタルトキハ雛形第二號ノ種繭證明書ヲ付與スヘシ

檢査ヲ經タル掃殼ニハ其ノ壁紙ノ裏面ニ自己ノ檢印ヲ押捺スヘシ

第十條　蠶種檢査員第五條第二號ノ檢査ヲ行ヒ蠶種製造額出殼繭及種繭證明書ヲ照合シテ正當ト認メタルトキハ其ノ蠶種壁紙ノ裏面ニ原種ニ在リテハ雛形第三號ノ原種用ノ印ヲ、製絲用種ニ在リテハ雛形第四號ノ製絲用種檢査合格證印ヲ押捺スヘシ

第十一條　蠶種製造者一枚ノ蠶種ヲ截斷シテ賣渡シ若クハ讓渡サントスルトキハ檢査前ニ於テ豫メ壁紙ノ裏面ニ截斷スヘキ線ヲ區劃シ置クヘシ（三十二年農商務省令第六號改正ニ依ル）

前項ノ蠶種ニハ壁紙ノ裏面每區ニ檢査合格證印ヲ押捺ス

第十二條　第五條第三號ノ檢査ハ左ノ方法ニ據リ之ヲ行フ

一蛾每ニ小乳鉢ニ容レ背性加里稀薄液若ハ蒸溜水少許ヲ加ヘテ能ク磨潰シ其ノ液ヲ顯微鏡ニ照シ微粒子ヲ發見シタルトキハ雛形第五號ノ有毒ノ印ヲ、微粒子ヲ發見セサルトキハ雛形第六號ノ無毒ノ印ヲ其ノ產卵區表面ノ空所ニ押捺シ其ノ壁紙ニ雛形第七號ノ原種檢査合格ノ證印ヲ押捺ス（全上）

前項ノ檢査合格證印ハ有毒卵ノ區ヲ除去シ若ハ

除去セシメタル後之レヲ押捺スルモノトス

第十三條　蠶種檢査法第八條第二項ノ檢査ハ左ノ方法ニ據リ之ヲ行フ

蠶種一枚毎ニ其ノ全面ヨリ蠶卵凡ソ百粒ヲ取リ之ヲ十等分シ其ノ一分毎ニ之ヲ小乳鉢ニ容レ苛性加里稀薄液少許ヲ加ヘテ能ク磨潰シ其ノ液ヲ顯微鏡ニ照シテ毎鏡面微粒子ノ有無ヲ檢シ之ヲ發見スルコト四鏡而以下ノモノニハ蠶種蜜紙ノ裏面ニ雛形第四號ノ製絲用種檢査合格ノ證印ヲ押捺ス

第十四條　原種ノ製造ニ供用シタル母蛾ニシテ避クヘカラサル事故ニ依リ亡失又ハ混亂シタルトキハ其ノ蠶種ニ對シ更ニ製絲用種合格ノ證印ヲ請フコトヲ得（三十二年農商務省令第六號改正ニ依ル以下同シ）

第十五條　蠶種製造者種繭證明書ヲ毀損若ハ紛失シタルトキハ所轄蠶種檢査所ニ書換若ハ再下付ヲ請求スヘシ

第十六條　蠶種製造者種繭證明書アル繭ノ全部若ハ其ノ幾部ヲ賣渡シ賣受ケ若ハ讓渡シ讓受ケタルトキハ受渡者連署ノ上種繭證明書ヲ添ヘ所轄蠶種檢査所ニ種繭證明書ノ書換若ハ下付ヲ請求スヘシ

第十七條　地方長官ハ蠶種檢査所ノ位置及管轄區域ヲ定メ若ハ變更ヲナストキハ豫メ農商務大臣ニ報告シ管内ニ告示スヘシ

蠶種檢査所ヲ開始シ又ハ閉鎖スルトキ亦同シ

第十八條　第五條第三號若ハ蠶種檢査法第八條第二項ノ檢査開始期日ハ毎年九月一日以後トス

第十九條　蠶種檢査員ハ品行方正ニシテ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ヨリ地方長官之ヲ命スヘシ

一　農商務省蠶業講習所農務局巷蠶業試驗場又ハ農務局假試驗場蠶業部卒業ノ證書ヲ有スル者

二　農務局ノ檢定試驗ニ及第シ其證書ヲ有スル者

三　地方長官ノ信認セル學校講習所傳習所又ハ試驗場ニ於テ蠶業ニ關スル學科ヲ修メ其卒業證書ヲ有スルモノ其他蠶業ニ熟達シ成績鑑査ニ精通セル者

第二十條　地方長官ハ蠶種檢査員ヲ命免シタルトキハ其都度農商務大臣ニ報告シ管内ニ告示スヘシ

第二十一條　地方長官蠶種檢査員ヲ命シタルトキハ雛形第八號ノ證票ヲ付與スヘシ

第二十二條　蠶種檢査員證票ヲ紛失シタルトキハ地方長官ニ屆出テ書換若ハ再下付ヲ請求スヘシ

第二十三條　蠶種檢査員證票ノ紛失ヲ屆出テタルトキハ地方長官ハ其ノ旨ヲ管内ニ告示スヘシ

第二十四條　農商務大臣又ハ地方長官ノ承認ヲ得タル學校講習所傳習所若ハ試驗場ニ於テ製造スル蠶種ハ蠶種檢査法及本則ニ準シ檢査ヲ行ヒ原種トシテ讓渡スコトヲ得

但此場合ニ於テハ該校、所、場名アル檢査合格證印ヲ押捺スヘシ

第二十五條　地方長官ハ毎年五月十五日迄ニ雛形第九號ノ證票ヲ付與シ前年度ノ檢査成績ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ

第二十六條　第一條ニ違背シタル者ハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十七條　蠶種檢査員監督ノ方法及檢査實施ニ關スル手續ハ地方長官之ヲ定メ農商務大臣ニ報告スヘシ

（第一號乃至第九號書式雛形略ス）

●蠶種檢査手數料ニ關スル件

（明治三十年六月　勅令第百七十七號）

朕蠶種檢査ノ手數料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　蠶種檢査法ニ據リ蠶種ノ檢査ヲ施行スル道廳府縣ノ蠶種檢査請求者ヨリ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ徴收スルコト得

一　原種　一蛾區ニ付　一匹

二　製絲用種　一枚ニ付　一錢五厘

第二條　前條ニ依リ徴收シタル手數料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收入トス

●蠶種檢査費ニ對スル國庫補助金額

（明治三十年七月　勅令第二百四十九號）

朕蠶種檢査法第十二條府縣蠶種檢査費ニ對スル國庫補助金額ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

蠶種檢査ハ第十二條ニ依リ國庫ヨリ補助スル金額ハ蠶種檢査ノ爲ニ要スル費額ノ十分ノ三トス但シ必要ノ場合ニ於テハ十分ノ二以内ヲ增加交付スルコトヲ得

●蠶種檢査ヲ施行セサル道廳府縣指定

○農商務省告示　明治三十年六月　第二十二號

法律第十號蠶種檢査法第十三條ニ據リ左ノ縣ニ於テ蠶種檢査法ヲ當分施行セサルコトヲ認可セリ

沖繩縣

○農商務省告示　明治三十年八月　第二十九號

法律第十號蠶種檢査法第十三條ニ據リ左ノ地方ニ於テ蠶種檢査法ヲ當分施行セサルコトヲ認可セリ

北海道廳ノ内　天塩、北見、十勝、釧路、根室、千島ノ六箇國

○農商務省告示　明治三十年十月　第三十五號

法律第十號蠶種檢査法第十三條ニ據リ左ノ府ニ於テ蠶種檢査法ヲ當分施行セサルコトヲ認可セリ

大阪府

○農商務省告示　明治三十一年三月　第五號

法律第十號蠶種檢査法第十三條ニ據リ左ノ地方ニ於テ蠶種檢査法ヲ當分施行セサルコトヲ認可ス

東京府ノ内　伊豆七島及小笠原島

●蠶種檢査法ニ依ル蠶種製造承認ノ件

○農商務省告示　明治三十一年五月　第十三號

本省蠶業講習所ノ蠶種製造ハ明治三十年法律第十號蠶種檢査法第十八條ニ據ルコトヲ承認ス

○農商務省告示　明治三十二年一月　第六號

東京帝國大學農科大學ノ蠶種製造ハ明治三十年法律第十號蠶種檢査法第十八條ニ據ルコトヲ承認ス

●蠶業講習所蠶種配付規則

（明治二十九年五月　農商務省令第五號）

蠶業講習所蠶種配付規則左ノ通相定ム

第一條　本所ニ於テ製造スル蠶種ハ原種用トシテ左ノ資格ヲ有スル者ニ限リ無代價ニテ配付ス

二段歩以上ノ桑園ヲ所有シ毎年二百枚以上ノ販賣用蠶種ヲ製造スル者

第二條　蠶種配付ヲ請求スル者ハ管轄區ノ證明ヲ得テ四月十五日マテニ蠶業講習所ニ出願スヘシ

但シ本年ニ限リ六月三十日マテニ出願スヘシ

第三條　配付スヘキ蠶種ハ請求者一名ニ付五十蛾分以上五百蛾分以下トス

第四條　蠶種ノ配當ハ出願ノ順序ニ依リ之ヲ定メ十月三十日マテニ發送スヘシ配付ヲ受クル能ハサル者ニハ九月三十日マテニ其旨ヲ通知スヘシ

第五條　蠶種ノ配付ヲ受ケタル者ハ別記書式ノ成蹟書ニ左ノ成繭ヲ添附シ翌年八月三十一日マテニ本所ニ遞送スヘシ

二百蛾分以上ノ蠶種ヲ受ケタル者ハ一升以上

二百蛾分未滿ノ蠶種ヲ受ケタル者ハ二升以上

第六條　前條ノ義務ヲ履行セサル者ハ爾後三年間蠶種ノ配付ヲ受クルヲ得ス

第七條　官立公立若クハ公設ノ補助ヲ受クル學校講習所傳習所及試驗場ニシテ蠶業研究ノ爲メ第二條ニ據リ出願スルトキハ第一條ノ資格ヲ有セサルモ二十五蛾分以内ノ蠶種ヲ配付ス

但此場合ニハ第五條第六條ヲ適用セス（三十年農商務省令第三號ヲ以テ追加）

●蠶業講習所巡廻講話及生徒募集心得

（明治二十九年五月　農商務省訓令第十三號）

蠶業講習所ノ巡廻講話及生徒募集ニ付テハ左ノ事項心得ヘシ

一　蠶業講習所長ヨリ蠶業講話ノ爲メ技術官派出ノコトヲ通知シタルトキハ地方長官ハ所長ト打合ノ上講話ノ場所及期日ヲ定メ管内ニ告知スヘシ

二　巡廻講話等ノ爲メ旅費ヲ支辨シテ技術官ノ派出ヲ要スルトキハ蠶業講習所長ニ其旨ヲ移牒スヘシ

三　蠶業傳習生ノ募集ハ蠶業講習所長ノ通牒ニ依リ地方長官其手續ヲ爲スヘシ

●生絲檢査所法

（明治二十八年六月　法律第三十二號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル生絲檢査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

生絲檢査所法

第一條　生絲檢査所ハ横濱及神戸ニ之ヲ設ク

第二條　本邦製産ノ生絲ヲ賣買スル者ハ内外人ヲ問ハス檢査所ニ對シ生絲ノ檢査ヲ請求スルコトヲ得但シ檢査料ヲ徴セス

第三條　生絲檢査所ハ農商務大臣ノ所管トシ此ノ法律施行ニ關スル細則ハ同大臣之ヲ定ム

此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

●生絲檢査法施行細則

（明治二十九年四月　農商務省令第三號）

生絲檢査所法施行細則左ノ通相定ム

第一條　生絲檢査所法施行細則

生絲檢査所ニ於テハ左ノ項目ニ付生絲ノ檢査ヲ施行ス

一　原量

二　正量

三　再繰
四　繊度
五　類節
六　強力及伸度
七　練減

第二條　生絲檢査所法第二條ノ檢査請求者ハ甲號雛形ニ從ヒ檢査ヲ要スル項目ヲ記シ請求書二通ヲ生絲檢査所長ニ差出スヘシ

第三條　生絲檢査所ニ於テ前條ノ請求書ヲ受理シタルトキハ生絲檢査所長ハ檢査請求書一通ニ生絲搬入及其檢査結了ノ時日ヲ記シ之ヲ檢査請求者ニ交付ス

第四條　生絲ノ檢査ハ請求書受理ノ順序ニ依ルモノトス但第三條ニ依リ指示セラレタル時日ニ生絲ヲ搬入セサルトキハ此限ニアラス

第五條　生絲檢査所所在地ニ在ラサル生絲檢査請求者ハ生絲檢査所所在地ニ代理者ヲ置キ檢査ヲ請求スヘシ

第六條　檢査請求者ハ第三條ニ依リ指示セラレタル時日ニ生絲ヲ搬入スルトキハ毎一箇ノ重量ヲ記シタル書面ヲ添付スヘシ

第七條　檢査ヲ要スル生絲ヲ生絲檢査所ニ搬入シタルトキハ生絲檢査所ハ檢査請求者ニ對シ乙號雛形ノ預書ヲ交付ス

前項ノ預書ハ檢査結了ノ後生絲ノ引渡ヲ受クルトキ之ヲ生絲檢査所ニ差出スヘシ

第八條　生絲檢査所ニ於テ生絲ノ荷造ヲ解クトキハ檢査請求者ハ之ニ立會フコトヲ得

第九條　生絲檢査所ニ於テ生絲檢査ヲ終リタルトキハ生絲檢査所ハ生絲一箇毎ニ丙號雛形ノ檢定證正副二通ヲ檢査請求者ニ交付ス

第十條　生絲檢査結了ノ後第一條第一號及第二號ノ檢査ヲ請求セル生絲ヲ除キ生絲一括毎ニ檢査濟ノ證ヲ貼付ス

第十一條　第一條第一號及第二號ノ檢査請求者ハ生絲ノ引渡ヲ受クルトキ所員ノ立會ヲ請ヒ檢定正書ヲ其ノ生絲ニ添ヘ荷造ヲナシ之ニ封印ヲ受クヘシ

前項荷造ニ係ル費用ハ檢査請求者之ヲ負擔スヘシ

第十二條　第十條ノ檢査證又ハ第十一條ノ封印ナキ生絲ハ檢査ノ效力ナキモノトス

第十三條　生絲檢査所ニ於テハ檢査請求者ノ搬入シタル生絲ニ對シ適當ノ保護ヲナスト雖不可抗力ノ爲損失ヲ致シタルトキハ其ノ責ニ任セス

第十四條　第一條第三號乃至第六號ノ檢査ニ供用シテ消耗シタル生絲ハ還付セス

第十五條　檢査ヲ請求セル生絲ニシテ檢査ヲ與フルノ價値ナシト認ムルトキハ生絲檢査所ハ檢査請求者ニ對シ其ノ請求ヲ取消サシムルコトアルヘシ

第十六條　生絲檢査所ノ檢査ヲ請求スル生絲ハ一箇(八貫目以上)以上タルヘシ

第十七條　生絲檢査請求者ハ生絲ノ見本ニ就キ第一條第三號乃至第六號ノ檢査ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ檢査請求者ニハ丁號雛形ノ檢査成績表一通ヲ交付ス

第十八條　前條ノ檢査請求者ニハ本則第六條第八條第九條第十條第十六條ヲ適用セス

(甲號乃至丁號雛形畧ス)(三十一年農商務省令第二號ヲ以テ丁號雛形ヲ改正ス)(明治二十九年四月)

● 生絲檢査規程

(農商務省告示第八號)

生絲檢査所生絲檢査規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

生絲檢査規程

第一　原量

原量檢査ハ天秤ヲ以テ生絲一箇ノ全量ヲ檢シタル後風袋其他附屬物ノ重量ヲ秤リ之ヲ控除シタルモノヲ生絲ノ原量トス

第二　正量

正量檢査ハ生絲一箇ノ原量ヲ秤リ九本ヲ採リテ之ヲ三分シ其二分ヲ各々乾燥器ニ入レ攝氏百十度乃至百三十五度ノ溫ヲ與フルコト凡ソ三十分時間ニシテ水分ヲ蒸散セシメタル後各一分ノ減耗百分比例ヲ求メ其差〇・五以下ナルトキハ二分平均ヲ求メテ之ヲ無水量トス若シ其差〇・五以上ナルトキハ更ニ殘リノ一分ヲ檢査シ三分ノ平均ヲ求メテ之ヲ無水量トシ之ニ生絲固有ノ含水量一割一分ヲ加ヘテ正量トス

第三　再繰

再繰檢査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ之ヲ再繰器ニ掛ケ生絲ノ細太ニ應シ一分時間四十回內外ノ速力ヲ以テ二時間繰返シ絲條ノ切斷數ヲ檢スルモノトス

第四　繊度

繊度檢査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ一本毎ニ長サ五百「メートル」ツヽ四口ヲ採リ其一口毎ニ「グラム」ヲ以テ原量ヲ秤リ之ヲ平均シテ繊度ノ本位ヲ定ムルモノトス(二十九年農商務省告示第二十七號改正ニ依ル)

檢定證ニハ實賣上便利ノ爲前項ノ結果ヲ左式(絲條ノ長サ四百七十六「メートル」ニ付「デニール」即チ〇・五三一三「グラム」ヲ以テ秤リタルモノ)ニ比較シ列記スルモノトス

第五　類節

類節檢査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リ一本毎ニ二回ツヽ五百「メートル」ニ對スル類節ノ多寡ヲ檢スルモノトス

第六　強力及伸度

強力及伸度檢査ハ生絲一箇中ヨリ五本ヲ採リテ一本毎ニ二回ツヽ之ヲ「セリメートル」ニ掛ケ強力ハ「グラム」ヲ以テ之ヲ秤リ同時ニ伸度ハ「ミリメートル」ヲ以テ檢シ各其平均ヲ要クルモノトス

第七　練減

練減檢査ハ生絲一箇中ヨリ三本ヲ採リ之ヲ三分シテ其二分ノ無水量ヲ檢シ其絲量四分一ノ馬耳塞石鹼ヲ熱湯ニ溶解シ生絲ヲ麻袋ニ入レテ該湯ニ投シ沸煮スルコト二回ニシテ更ニ微溫湯ニ投シ之ヲ攪拌シテ淸水ニ移シ能ク洗滌乾燥シテ練減ノ百分比例ヲ求メ之ヲ平均シテ護謨質其他ノ物質量ヲ檢定ス而シテ其差一以上ナルトキハ殘リノ一分ヲ檢査シ終リニ三分ノ平均數ヲ求メテ之ヲ練減量トス(仝上)

第十款　茶業組合

● 茶業組合規則

(明治二十年十二月農商務省令第四號)

茶業組合規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

但十七年三月第四號達茶業組合規則ハ廢止ス

茶業組合規則

第一章　總則

第一條　此規則中茶業者トアルハ茶ヲ製造シテ販賣シ又ハ茶園ヲ所有シ茶生葉ヲ販賣スル者及生葉者クハ製茶ヲ仲買又ハ販賣スル者ヲ總稱ス

第二條　茶業者ハ製品ヲ精良ニシ販路ヲ擴張シ賣買ヲ正確ナラシムルノ目的ヲ以テ組合ヲ設ケ之ニ加入スヘシ

但自家用製茶ノ殘生葉ヲ販賣スル者ハ各組合ニ於テ制限ヲ設ケ組合ニ加入セシメサルモ妨ナシ

第三條　組合ノ設置ハ郡區ノ區畫ニ依ルヘシ若シ一郡區內ニ於テ茶業者小數ナルトキハ近隣郡區ノ同業者ト合併スルコトヲ得

第四條　郡區ノ狀況ニ依リ茶ヲ製造シテ販賣スル者及生葉者ト茶園ヲ所有シテ生葉ヲ販賣スル者トヲ區別シテ組合ヲ設クルノ必要アルトキハ農商務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第五條　組合ノ名稱ハ何(府縣)何(郡區)茶業組合ト稱スヘシ

第六條　組合ハ郡區內便宜ノ場所ニ各組合事務所ヲ置キ其組合ニ關スル一切ノ事務ヲ整理スヘシ

第七條　組合ハ其氣脈ヲ聯通スル爲メ府縣ノ區畫ニ依リ便宜ノ地ニ聯合會議所ヲ設ケ全國便宜ノ地ニ中央會議所ヲ設クヘシ(二十三年農商務省令第三號ヲ以テ本條中改正)

第八條　組合ハ此規則ノ範圍內ニ於テ其業務ニ關シ組合及會議所ノ規約ヲ定ムヘシ

第九條　組合及聯合會議所ノ規約及豫算ハ地方長官ノ認可ヲ受ケ中央會議所ノ規約及豫算ハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ(二十五年農商務省令第五號ヲ以テ本條中追加)

但二府縣以上ノ組合員全部若クハ農部聯合シテ別ニ規約ヲ設クルノ必要アルトキハ其規約ヲ添ヘ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ(二十三年農商務省令第一號ヲ以テ但書追加)

第二章　組合員

第十條　組合員ハ組合ノ名譽ヲ以テ營利事業ヲナスコトヲ得ス

第十一條　組合員ハ組合及會議所ノ規約並ニ二府縣以上ノ聯合組合員ハ其聯合規約ヲ遵守シ且費用ヲ負擔スルノ義務アルモノトス(二十三年農商務省令第一號ヲ以テ本條中追加)

但費用負擔ノ割合及徵收方法ハ規約ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十二條　社名若クハ組名ヲ以テ組合員タル者ハ相當ノ代表人ヲ定メ置キ組合ニ關スル一切ノ責ニ任セシムヘシ

第三章　役員

第十三條　各組合事務所ニハ組長及委員ヲ置キ委員ハ部內ノ組合員之ヲ選定シ組長ハ委員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

但組長ヲ選任又ハ改選シタルトキハ地方長官ノ認可ヲ受ケ委員ヲ選任又ハ改選シタルトキハ其都度ヽ出ツヘシ(二十五年農商務省令第五號ヲ以テ但書改正)

第十四條　組長ハ委員ト協議シテ部內組合ノ取締ヲナシ其他一切ノ事務ヲ整理スヘシ

第十五條　組長ハ常ニ營業上ノ利害ニ注意シ組合ノ確實ヲ圖ルヘシ

第十六條　組長ハ部內組合中ニ生シタル紛議ヲ仲裁シ及ヒ違約者アルトキハ規約ニ依リ處分スルコトヲ得

但會議所ノ規約ニ違背シタル者ヲ處分シタルトキハ其旨會議所ニ通知スヘシ

第十七條　(二十二年農商務省令第五號ヲ以テ削除)

第十八條　聯合會議所ニハ事務員若干名ヲ置キ聯合會議ニ關スル事務及ヒ聯合會議所ノ規約ヲ以

テ定メタル事務ヲ取扱ハシムヘシ

第十九條　聯合會議所ノ事務員ハ會議ニ於テ部下組合員中ヨリ之ヲ選定シ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條　聯合會議所ノ事務員ハ議員ノ資格ヲ以テ聯合會議ニ列スルコトヲ得

第二十一條　中央會議ニ關スル事務及中央會議所ノ規約ヲ以テ定メタル事務ヲ取扱ハシムヘシ

第二十二條　中央會議所ノ事務員ハ中央會議議員ニ於テ全國組合員中定員倍數ノ候補者ヲ選定シ農商務大臣ノ認定ヲ請フヘシ（二十五年農商務省令第五號ヲ以テ改正）

但時宜ニ依リ組合員外ノ者ト雖トモ選擧スルコトヲ得

第二十三條　中央會議所ノ事務員ハ議員ノ資格ヲ以テ中央會議ニ列スルコトヲ得

第二十四條　役員ノ任期ハ二箇年トス若シ役員其任ニ適セサルトキハ中央會議所ノ事務員ハ農商務大臣ニ於テ聯合會議所ノ事務員及組合事務所ノ組長ハ地方長官ニ於テ其改選ヲ命スヘシ

但補闕役員ノ任期ハ前任役員ノ任期ニ依ルヘシ（二十五年農商務省令第五號ヲ以テ追加以下順次繰下）

第四章　會議

第二十五條　會議ヲ分テ聯合會議及中央會議トシ聯合會議ハ聯合會議所ニ於テ中央會議ハ中央會議所ニ於テ定時又ハ臨時ニ之ヲ開クヘシ

但中央會議定時會ノ會期ハ二週日以内臨時會期ハ一週日以内トス若會期ヲ延長スルノ必要ヲ生シタルトキハ豫メ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ（二十五年農商務省令第十四號ヲ以テ但書追加）

第二十六條　聯合會議ニ於テハ會議所所在府縣ノ組合ニ關スル事項ヲ議定シ中央會議ニ於テハ全國ノ組合ニ關スル事項ヲ議定スヘキモノトス

第二十七條　聯合會議ノ議員ハ部下各組合員若クハ組合委員之ヲ選定シ中央會議ノ議員ハ聯合會議議員之ヲ選定スヘシ（二十九年農商務省令第六號ヲ以テ本條中追加）

第二十八條　中央會議ノ議員ハ三年以上繼續シテ左ノ資格ノ一ニ該當シ仍引續キ該當スル者ニ限ル（二十五年農商務省令第五號ヲ以テ本條並ニ次條ヲ追加シ以下順次繰下）

一　茶園一町歩以上ヲ所有シ栽培スルコト

一　製茶五千斤以上ヲ製造スルコト

一　製茶二萬斤以上ヲ賣買スルコト

第二十九條　前條ノ資格ニ該當スル者ナキ地方ニ於テハ其資格ニ最モ近キ者ヲ選出スヘシ

第三十條　聯合會議及中央會議ニ出席スヘキ議員ノ數ハ產額又ハ開港地ヘ輸送額ノ多寡ニ從ヒ規約ニ於テ之ヲ定ムヘシ（二十四年農商務省令第二號ヲ以テ本條追加）

第三十一條　議員ノ任期ハ二箇年トス補闕議員ノ任期ハ前任議員ノ任期ニ依ルヘシ（二十五年農商務省令第五號ヲ以テ本條追加以下順次繰下）

第三十二條　會議ノ正副議長ハ議員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

第三十三條　會議ノ正副議長及議員ノ氏名並ニ會議開閉期日其聯合會議ニ係ルモノハ地方廳ニ其中央會議ニ係ルモノハ農商務省ニ屆出ツヘシ

第三十四條　農商務大臣ハ中央會議地方長官ハ聯合會議ノ開閉又ハ議員ノ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第三十五條　會議ハ議員半數以上出席セサレハ當日ノ議事ヲ開クコトヲ得ス

但議員半數以上ノ欠席三日以上ニ渉ルトキハ半數以内ト雖トモ議事ヲ開クコトヲ得

第三十六條　議事ハ出席員過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ據ル

第五章　規約

第三十七條　各組合ノ規約ハ其部内組合員中ヨリ委員ヲ選定シテ左ノ事項ニ準シ之ヲ定ム

一　違約者處分ノ方法

一　經費賦課徵收支出ノ方法

一　其他組合ノ情況ニ依リ必要ナル條件

第三十八條　聯合會議所ノ規約ハ左ノ事項ニ據リ會議ニ於テ之ヲ定ムヘシ

一　聯合會議所ノ位置

一　製茶ヲ改良シ販路ヲ擴張スルノ方法

一　製造及ヒ販賣上ノ弊害ヲ矯正スルノ方法

一　部下ノ組合ニ關スル事務ヲ處辨シ及ヒ紛議ヲ仲裁スルノ方法

一　聯合會議議員及ヒ事務員選擧ノ方法

一　聯合會議ニ關スル規程

一　違約者處分ノ方法

一　經費賦課徵收支出ノ方法

一　其他地方ノ情況ニ依リ必要ナル條件

第三十九條　中央會議所ノ規約ハ左ノ事項ニ據リ會議ニ於テ之ヲ定ムヘシ

一　中央會議所ノ位置

一　全國組合ノ氣脈ヲ聯通スルノ方法

一　內外茶業ノ實況ヲ調査シ及ヒ之ヲ報告スルノ方法

一　組合ノ位置

一　組合員ノ選擧

一　組盡不正茶取締ノ方法

一　役員選擧ノ方法

一　組合入退社取扱ノ方法

一　中央會議議員及ヒ事務員選擧ノ方法

一　中央會議ニ關スル規程

一　經費賦課徵收支出ノ方法

一　其他中央會議ニ於テ必要ト認メタル條件

第六章　罰則

第四十條　此規則第二條第九條第十條第十一條ニ違犯シタル者ハ金二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

●製茶產額僅少ノ府縣茶業組合規則停止ノ件（明治二十二年七月農商務省令第七號）

一府縣管內製茶產額僅少ニシテ明治二十年（十二月）省令第四號茶業組合規則ヲ施行シ難キ狀況アリト認メタルトキハ其府縣ニ限リ該規則ノ施行ヲ停止スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ別ニ告示ヲ以テ其府縣ヲ指定ス

但組合ノ設ケナキ府縣ノ茶業者組合ノ設ケアル府縣ニ於テ茶ヲ製造シ又ハ販賣スルトキハ其府縣ノ組合規約ヲ循守スヘキモノトス

●茶業組合規則施行停止ノ府縣（明治二十二年七月農商務省告示第六號）

明治二十二年（七月）當省令第七號ニ據リ左ノ縣下ニ茶業組合規則ノ施行ヲ停止ス

群馬縣　山梨縣　長野縣　福島縣　宮城縣
巖手縣　青森縣　秋田縣　山形縣　香川縣
沖繩縣

●茶業組合役員及議員ノ任期、資格年限起算方（明治二十五年三月農商務省訓令第五號）

本年（三月）農商務省令第五號中第二十四條ノ役員及第三十一條ノ議員任期ハ本年四月一日ヨリ起算シ第二十八條ノ議員資格年限ハ選擧ノ日ヨリ溯算スルモノトス

第十一款　同業組合

●重要輸出品同業組合法（明治三十年四月法律第四十七號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル重要輸出品同業組合法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

重要輸出品同業組合法

第一條　重要輸出品ノ生產、製造又ハ販賣ニ關スル營業ヲ爲ス者ハ同業者又ハ密接ノ關係ヲ有スル營業者相集リテ本法ニ依リ同業組合ヲ設置スルコトヲ得

重要輸出品及密接ノ關係ヲ有スル營業ノ種類ハ農商務大臣ノ認定ニ依ル

第二條　同業組合ハ組合員協同一致シテ營業上ノ弊害ヲ矯正シ信用ヲ保持スルヲ以テ目的ト爲スヘシ

第三條　同業組合ヲ設置セムトスルトキハ豫メ地區ヲ定メ其ノ地區內ノ同業者五分ノ四以上ノ同意ヲ得テ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ二種以上ノ營業者相集リ組合ヲ設置セムトスルトキハ各種營業每ニ五分ノ四以上ノ同意ヲ要ス

農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ地區ノ範圍及組合ニ加入スヘキ營業ノ種類ヲ指定シ若ハ其ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第四條　同業組合設置ノ地區內ニ於テ組合員ト同一ノ業ヲ營ム者ハ其ノ組合ニ加入スヘシ但シ營業上特別ノ情況ニ依リ農商務大臣ニ於テ加入ノ必要ナシト認ムル者ハ此ノ限ニ在ラス

第五條　同業組合ハ法人トシテ財產ヲ所有シ及訴訟上原告又ハ被告ト爲ルコトヲ得

同業組合ハ營利事業ヲ爲スコトヲ得ス

第六條　同業組合ハ組合相互ノ氣脈ヲ通シ其ノ目的ヲ達スル爲同業組合聯合會ヲ設置スルコトヲ得

同業組合聯合會ヲ設置セムトスルトキハ其ノ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第七條　同業組合及同業組合聯合會ノ定款ノ變更ハ各其ノ定款ノ規定ニ從ヒ之ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條　同業組合及同業組合聯合會ハ諸般ノ事務ヲ處理スル爲左ノ役員ヲ置クヘシ

一　組長　一名
一　副組長　一名
一　評議員　若干名

役員ハ組合員中ヨリ選擧シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第九條　同業組合又ハ同業組合聯合會ハ各其ノ定款ニ於テ檢查規程ヲ設ケ組合員ノ營業高ヲ檢查スルコトヲ得

農商務大臣ハ必要ト認ムルトキ檢查規程ヲ設ケシムルコトヲ得

第十條　同業組合又ハ同業組合聯合會ニ於テ違約者ニ對シ過怠金ヲ徵スルノ必要アルトキハ定款ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十一條　同業組合及同業組合聯合會ノ經費ノ豫算竝ニ徴收法ハ各其ノ定款ノ規程ニ從ヒ之ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

經費ノ決算貸借對照表及業務成績ハ毎年少クトモ一回組合員ニ公示シ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十二條　同業組合及同業組合聯合會ハ其ノ業務ニ關シ行政廳ニ建議スルコトヲ得又主務官廳ノ諮問アルトキハ調査報告ヲ爲スヘシ

第十三條　同業組合及同業組合聯合會ハ農商務大臣ノ命シタル官吏ノ臨檢ヲ拒ムコトヲ得ス又其ノ質問ニ對シ確實ニ答辯スヘキモノトス

第十四條　農商務大臣ハ公益上必要ト認ムルトキハ同業組合及同業組合聯合會ヲ設ケシムルコトヲ得

第十五條　農商務大臣ハ同業組合及同業組合聯合會又ハ其ノ役員ノ行爲若ハ同業組合會議及同業組合聯合會議ノ決議ニシテ法律命令ニ違背シタルトキ又ハ公益ヲ害シ若ハ同業組合及同業組合聯合會ノ目的ニ違背スルモノト認ムルトキ又ハ此ノ法律ニ依リ農商務大臣ノ命スル事項ヲ執行セサルトキハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一　同業組合及同業組合聯合會ノ解散又ハ其業務ノ停止

二　役員ノ全部又ハ一部ノ改選

三　決議ノ取消

第十六條　同業組合及同業組合聯合會解散ヲ爲サムトスルトキハ其ノ事由ヲ具シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十七條　第四條第十三條ノ規程ニ違背シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ過料ニ處ス

過料ハ同業組合及同業組合聯合會ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但シ其ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

過料ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徴收ス其ノ徴收ニ付テハ民事訴訟法第六編ノ規程ヲ準用ス但シ此ノ場合ニ於ケル檢事ノ命令ハ執行文ノ效力ヲ有ス

第十八條　同業組合若ハ同業組合聯合會ノ檢査證ヲ營業品ニ僞リテ附シタル者又ハ僞造若ハ模造ノ檢査證ヲ營業品ニ附シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

附　則

第十九條　輸出ニ關セサル物品ト雖同業者ニ於テ必要ト認ムルトキハ仍本法ヲ準用スルコトヲ得

●重要輸出品同業組合法施行細則

（明治三十年九月農商務省令第十七號重要輸出品同業組合法施行細則左ノ通相定ム）

第一條　組合ノ名稱ニハ同業組合ナル文字ヲ附スヘシ

第二條　組合ノ地區ハ郡市以上ノ區域ニ依ルヲ通例トス

第三條　組合ノ設置ニ關スル事務ハ地方長官ノ認可ヲ得タル五名以上ノ發起人ニ於テ之ヲ處辨スヘシ

重要輸出品同業組合法第十四條ニ依リ組合ノ設置ヲ命シタル場合ニ於テハ地方長官ハ創立委員ヲ選定スヘシ

地方長官ハ發起人ヲ認可シ又ハ創立委員ヲ選定シタルトキハ其ノ氏名住所及組合ヲ組織スル營業ノ種類竝組合ノ地區ヲ管内ニ告示スヘシ

第四條　發起人ハ地方長官ノ認可ヲ得タル日ヨリ六箇月内ニ組合創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ左ノ書類ヲ添附シテ認可申請ノ手續ヲ爲スヘシ（三十一年農商務省令第八號ヲ以テ改正以下同シ）

一　組合ノ設置ヲ必要トスル理由

二　組合ノ目的トスル物品竝其ノ最近五箇年間組合地域内ニ於ケル生産製造又ハ販賣ノ數量及價額

三　同業者五分ノ四以上ノ同意ヲ證明スヘキ書類

四　經費ノ概算竝徴收法ノ見込

組合ノ設置ヲ命シタル場合ニ於テハ創立委員ハ直ニ創立總會ヲ開キ定款ニ議定シ其認可ヲ申請スヘシ

前二項ノ場合ニ於テ創立總會ノ決議ニ依リ定款ノ認可申請前其ノ役員ヲ選擧シ定款ト共ニ其ノ認可ヲ申請スルコトヲ得

第五條　組合創立總會ハ發起人又ハ創立委員ニ於テ其ノ期日ヲ定メ少ナクトモ十四日前ニ公告又ハ其他ノ方法ニ依リ地區内ノ同業者ニ通知シ且地方長官ニ屆出ヘシ

組合創立總會ハ出席者三分ノ二以上ノ同意ニ依リ議決ヲ爲ス但創立總會ニ出席シ能ハサル者ハ同業者ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第六條　聯合會ノ設置ニ關スル事務ハ各組合ヨリ選出シタル委員ニ於テ之ヲ處辨スヘシ

第七條　組合又ハ聯合會ノ定款ニ掲クヘキ事項概ネ左ノ如シ

一　名稱及其ノ事務所ノ位置

二　組合ヲ組織スル營業ノ種類及其ノ地區又ハ聯合會ヲ組織スル組合ノ名稱

三　目的及其ノ業務

四　加入及脫退ニ關スル規程

五　役員ノ資格權限及其ノ選擧ニ關スル規程

六　會議ニ關スル規程

七　會計ニ關スル規程

八　違約者處分ニ關スル規程

九　定款ノ變更ニ關スル規程

十　解散ニ關スル規程

十一　營業品ノ檢査ヲ爲ストキハ其ノ規程

第八條　組合又ハ聯合會ノ役員認可申請書ニハ其ノ履歷書ヲ添附スヘシ

左ニ掲クル者ハ役員トシテ認可ヲ申請スルコトヲ得ス

一　地區内ニ於テ組合ヲ組織スル營業ニ從事シ一箇年ヲ經サル者

二　重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ商業及農工ノ業ヲ妨害スル罪財産ニ對スル罪風俗ヲ害スル罪及信用ヲ害スル罪ヲ犯シ刑ニ處セラレ滿期又ハ赦免後二箇年ヲ經サル者

三　公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ其ノ停止中ノ者

四　復權セサル破産者及家資分散者

第九條　組合又ハ聯合會經費ノ豫算竝徴收法ノ認可申請書ハ創立ノ場合ヲ除クノ外毎會計年度二箇月前ニ差出シ經費ノ決算貸借對照表及業務成績ハ毎會計年度二箇月内ニ報告スヘシ

第十條　農商務大臣ニ差出スヘキ認可申請ニ關スル文書ハ總テ地方長官ヲ經由スヘシ

●同業組合準則

（明治十七年十一月農商務省令第三十七號）

同業者組合ヲ結ヒ規約ヲ定メ禁業上福利ヲ增進シ濫獵ノ弊害ヲ矯正スルヲ圖ル者不敢候處往往其目的ヲ達スルコト能ハサル趣ニ付今般同業組合準則相定候條向後組合ヲ設ケ規約ヲ作リ認可ヲ請フ者アルトキハ此準則ニ基ツキ可取扱此旨相達候事

但認可ノ都度當省ニ屆出ツヘシ

同業組合準則

第一條　農工商ノ業ニ從事スル者ニシテ同業者或ハ其營業上ノ利害ヲ共ニスル者組合ヲ設ケントスルトキハ適宜ニ地區ヲ定メ其地區内同業者四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ規約ヲ作リ管轄廳ノ認可ヲ請フ可シ

第二條　同業組合ハ同盟中營業上ノ弊害ヲ矯メ其利益ヲ圖ルヲ以テ目的ト爲ス可シ

第三條　同業組合ノ規約ニ掲クヘキ事項ハ左ノ如シ

第一項　組合ヲ組織スル業名及組合ノ名稱

第二項　組合ノ區及事務所ノ位置

第三項　目的及方法

第四項　役員ノ選擧法及權限

第五項　會議ニ關スル規程

第六項　加入者及退去者ニ關スル規程

第七項　費用ノ徴收及賦課法

第八項　違約者處分ノ方法

右ノ外組合ニ於テ必要トナス事項

第四條　（三十年農商務省令第六號ヲ以テ削除）

第五條　同業組合ハ同業組合ノ資格ヲ以テ整理事業ヲ爲スコトヲ得ス

第六條　同業組合ハ總テ其事蹟及費用決算表ヲ毎年管轄廳ニ報告スヘシ

第七條　規約ヲ改正スルトキハ更ニ認可ヲ請フ可シ

第八條　分立又ハ合併スルトキハ更ニ規約ヲ作リ認可ヲ請フ可シ

第九條　同業組合ニ於テ聯合會ヲ設ケ其規約ヲ作ルトキハ管轄廳ノ認可ヲ請フ可シ

但其聯合二府縣以上ニ渉ルトキハ朋會地管轄廳ヲ經由シテ農商務省ノ認可ヲ請フ可シ

●同業組合準則適用方

（明治十八年八月農商務省第三拾五號達）

客歲（十一月）本省達第三十七號同業組合準則ハ專ラ管下重要物産ノ改良蕃殖ニ關スル農商工業者ノ組合ニ限リ適用スル儀ト可心得此旨更ニ相達候事

第十二款　漁業

●遠洋漁業奬勵法

（明治三十年三月法律第四十五號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル遠洋漁業奬勵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遠洋漁業奬勵法

第一條　遠洋漁業ヲ奬勵スル爲國庫ハ毎年度十五萬圓以内ヲ支出スヘシ

第二條　帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若ハ株主トスル商事會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ勅令ニ於テ指定スル漁獵又ハ漁撈ノ漁業ニ從事スル者ニ限リ遠洋漁業奬勵金ノ下付ヲ出願スルコトヲ得

第三條　前條ニ依リ奬勵金ヲ受クルコトヲ得ヘキ船舶ハ木製ト鐵製トヲ問ハス總噸數汽船五十噸以上帆船三十噸以上ニシテ農商務大臣ノ定ムル船舶艤裝規程ニ合格シ其ノ乘組員ハ總員ノ五分

ノ四以上帝國臣民ヲ以テ組織シタルモノニ限ル（三十二年法律第四十五號ヲ以テ本條中改正三十二年四月一日ヨリ施行ス）

第四條　遠洋漁業奬勵金ヲ受ケムトスル者ハ其ノ船舶ニ對シ豫メ農商務大臣ノ認許ヲ受クヘシ

第五條　農商務大臣ハ第二條ノ出願者ニシテ漁業ノ組織確實ナリト認ムル者ニハ漁獵ノ種類又ハ漁獵ノ場所ニ依リ定率ヲ設ケ五箇年以内奬勵金ノ下付ヲ許可スルコトヲ得但シ左ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス（三十二年法律第四十五號ヲ以テ本條第一號第二號中改正三十二年四月一日ヨリ施行ス）

一汽船總噸數　毎一噸　一箇年十五圓
但シ登簿總三百五十噸以上ハ噸數ニ應シ增加セス

一帆船總噸數　毎一噸　一箇年十圓
但シ登簿總二百噸以上ハ噸數ニ應シ增加セス

一乘組總員　毎一人　一箇年十圓
但シ勅令ニ定ムル乘組定員以外及年齢十六歲未滿ノ者ヲ除ク

第六條　遠洋漁業奬勵金下付ノ許可期間ト雖一箇年中遠洋漁業ニ從事スルコト五箇月ニ滿タサルトキハ其ノ年ニ對シテハ奬勵金ヲ下付セス

第七條　左ニ記載スル船舶ヲ以テ遠洋漁業ニ從事スル者ニハ遠洋漁業奬勵金ヲ下付セス

第一　此ノ法律施行以後帝國船籍ニ登錄ノ際製造後五箇年ヲ經過シタル外國製造ノ船舶

第二　製造後十五箇年ヲ經過シタル船舶

第八條　農商務大臣ハ第五條ノ許可ヲ受ケタル者ヲシテ遠洋漁業ニ關スル調査ヲ爲サシメ又ハ遠洋漁業練習生ヲ該船舶ニ乘組マシムルコトヲ得

第九條　第五條ノ許可ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ遠洋漁業ニ從事スル期間竝ニ其ノ漁業ヲ終リタル日ヨリ三箇年間其ノ船舶ヲ外國人ニ賣渡、交換、贈與、賃入書入スルコトヲ得ス但シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル遠洋漁業奬勵金ヲ償還シタルトキ又ハ天災其ノ他抗拒スヘカラサル强制ニ因リ航行ニ堪ヘサルトキ若ハ農商務大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニアラス

第十條　遠洋漁業ノ監督遠洋漁業練習生ヲ養成スルノ必要アルトキハ農商務大臣ハ第一條ニ掲クル金額ヨリ十分ノ一以内ヲ支出シ其ノ費用ニ充ツルコトヲ得

第十一條　詐僞ノ所爲ヲ以テ遠洋漁業奬勵金ヲ受ケタル者又ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ因テ得タル遠洋漁業奬勵金ハ之ヲ償還セシム

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第十二條　此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法敗毒俱發ノ例ヲ用ヰス

第十三條　第五條ノ許可ヲ受ケタル者此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ違背シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ遠洋奬勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得

第十四條　前數條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ各條ニ掲クル所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員若クハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十五條　此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ十五箇年間之ヲ施行ス

第十六條　此ノ法律ノ施行ニ必要ナル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

●遠洋漁業奬勵法施行細則

（明治三十年六月農商務省令第十號）

遠洋漁業奬勵法施行細則左ノ通相定メ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

遠洋漁業奬勵法施行細則

第一條　遠洋漁業奬勵法ニ依リ遠洋漁業奬勵金ヲ受ケントスル者ハ願書ニ左ノ書類ヲ添ヘ住居地又ハ船舶定繫場ノ管轄地方官廳ヲ經由シテ之ヲ農商務省ヘ差出スヘシ

一　登簿船免狀寫（臘茂、鯨鯨獵漁ハ免許證書ノ寫ヲ添フヘシ）

二　船舶檢査證書寫

三　船舶艤裝明細書

（イ）甲板上ノ裝置

（ロ）艙內ノ區劃

（ハ）漁具及船員室ノ配置

（ニ）漁艇及漁獵具ノ種類員數

四　乘組員數

（イ）漁獵長經歷書

（ロ）船舶職員竝水火夫以下員數

（ハ）漁獵夫員數

五　漁獵目論見書

（イ）漁獵ノ種類及方法

（ロ）漁獵ノ場所及區域

（ハ）漁業ノ時期

（ニ）漁獲物處理法

第二條　農商務大臣ニ於テ前條ノ願書ヲ受理シタルトキハ檢査ノ場所及期日ヲ定メ當該官吏ヲシテ其船舶ヲ檢査セシメ適當ト認ムルトキハ地方官廳ヲ經テ認許證書（書式第一號）ヲ本人ニ下附スヘシ

第三條　認許證書ヲ受有スル者遠洋漁業奬勵金ヲ受クル漁業ニ從事スルトキハ毎年一回艤裝ノ檢査ヲ受クヘシ

前項漁業ニ從事スルトキハ發著地寄港地及期日ヲ其都度農商務省ニ屆出ツヘシ

第四條　認許證書ハ常ニ船內ニ保持シ當該官吏其他職權アル者ニ於テ檢閱センコトヲ求ムルトキハ何時ニテモ之ヲ示スヘシ

第五條　認許證書ヲ受有スル船舶ハ農商務省ヨリ下付セル漁獵日誌ヲ備ヘ同日誌記載心得ニヨリ各事項ヲ記入スヘシ

第六條　認許證書ヲ受有スル者漁獵ノ種類漁獵ノ場所船體機關ノ構造及艤裝竝ニ乘組員數ヲ變更セントスルトキハ豫メ農商務大臣ノ認可ヲ請フヘシ但シ止ムヲ得サル事故ニ因リ認可ヲ請フノ暇ナクシテ變更シタルトキハ其事由ヲ詳記シ更ニ本條ノ手續ヲ怠リタルトキハ認許證書ノ效力ヲ失フモノトス

第七條　認許證書ヲ亡失毀損シタルトキ又ハ該證書ノ裏面ニ記載スル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ其再授若クハ書換ヲ出願スヘシ

第八條　認許證書ヲ受有スル者死亡又ハ破產シタルトキハ其遺族又ハ破產管財人ヨリ認許證書ヲ返納スヘシ

認許證書ヲ受有スル商事會社解散又ハ破產シタルトキハ其淸算人又ハ破產管財人ヨリ認許證書ヲ返納スヘシ

第九條　認許證書ヲ受有スル者左ノ事項ノ一ニ該當スルトキハ直ニ認許證書ヲ返納スヘシ

一　船舶ヲ賣渡、貸渡、交換又ハ讓渡シタルトキ

二　漁獵業ヲ廢止シタルトキ

三　船舶ヲ喪失又ハ解撤シタルトキ

四　遠洋漁業奬勵金ノ下附ヲ停止セラレタルトキ

五　前數項ノ外遠洋漁業奬勵金ヲ受クヘキ條件ヲ缺キタルトキ

第十條　認許證書ヲ受有スル船舶ハ發著ノ都度帝國ニ在テハ稅關、稅關支署、警察本分署又ハ浦役場外國ニ在テハ帝國領事館又ハ帝國貿易事務館ニ屆出テ其證明ヲ請求スルコトヲ得

第十一條　明治三十年勅令第百七十六號第一條ニ指定シタル漁獵又ハ同第二條ニ指定シタル場所ノ漁業ニ從事シタル者ハ漁業終了後農商務大臣ノ指定シタル官廳ニ於テ當該官吏又ハ其他特ニ委任セラレタル官吏ヨリ船舶乘組員數ノ證明ヲ受クヘシ

第十二條　賣買交換又ハ讓渡ニ依リ認許證書受有ノ船舶ヲ取得シテ其事業ヲ繼續セントスル者ハ第一條ノ書類ニ其事實ニ對スル市町村長ノ證明書又ハ登記ノ謄本ヲ添ヘ農商務省ヘ願出テ更ニ認許ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テハ船舶ノ檢査ヲ須ヰスシテ認許證書ヲ下附スルコトアルヘシ

第十三條　遠洋漁業奬勵法第八條ニ依リ遠洋漁業練習生ヲ船舶ニ乘組マシムルトキハ相當ノ待遇ヲ爲シ中途下船セシムルトキハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ止ムヲ得サル事故ニ因リ認可ヲ受クル暇ナクシテ下船セシメタルトキハ其事由ヲ詳記シ更ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

遠洋漁業練習生ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十四條　遠洋漁業練習生ヲ乘組マシメタル船舶ノ船長漁獵長ハ該練習生ヲシテ技術ヲ練習セシメ漁獵終了ノ後其狀況ヲ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十五條　遠洋漁業奬勵法第八條ニ依リ遠洋漁業ニ關スル調査ヲ命シタルトキハ指定ノ期日內ニ之ヲ報告スヘシ

第十六條　遠洋漁業奬勵金ヲ請求スルモノハ請求書（第二號書式）ニ遠洋漁業明細書（第三號書式）漁獵日誌第十條第十一條ノ證明書其他漁獵ノ事實ヲ證明スルニ必要ナル書類ヲ添ヘ之ヲ農商務省ニ差出スヘシ

第十七條　農商務省ニ於テハ前條ノ請求書及關係書類ヲ審査シテ遠洋漁業奬勵金ヲ下附スヘシ

第十八條　遠洋漁業奬勵法違反ニ關シ起訴セラレタル者ニ對シテハ其裁判ノ確定スル迄遠洋漁業奬勵金ノ下附ヲ中止ス

第十九條　遠洋漁業ニ從事スルコト一回五箇月ニ滿タサルトキハ二回以上ヲ通算シ五箇月ヲ經過シタルトキ奬勵金下附ノ請求ヲ爲スコトヲ得

漁業ノ期間一箇年以上ニ渉ルモノハ毎年度末ニ於テ之カ請求ヲ爲スヘシ

第二十條　天災其他抗拒スヘカラサル强制ニ因リ航行ニ堪ヘスシテ其船舶ヲ外國人ニ賣渡交換贈與賃入書入ヲナシタルトキハ船長又ハ所有者ヨリ其事由ヲ具シ農商務省ニ屆出ツヘシ

第一號書式

第　號
遠洋漁業奬勵法許證書

所有者	府縣郡市町村 氏名	
帆船	登錄年月日	
何丸	本船番號	
汽船	定繫場	
〃	製造年月日	
〃	登簿噸數	

本船ハ遠洋漁業奬勵法ノ規程ニ適合シタルヲ認メ茲ニ此證書ヲ下附ス

年　月　日

農商務省

表面

漁獵種類	漁獵場所	漁獵員數	漁獵種類	漁獲物處理場

艤裝檢査之證

裏面

火藥庫	安全栓及雷管其ノ他	乘組人員	飲料水容器	檢査年月日	檢査官認印	備考

第二號書式
汽船　帆船）何丸遠洋漁業奬勵金請求書

一金　但登簿噸數何噸ニ對スル奬勵金何年度分
一金　但乘組員何名ニ對スル奬勵金何年度分
合計金

右ハ何丸明治何年何月何日何國何地又ハ何港ヲ發シ何地ニ於テ何日間何漁獵ニ從事シ何國何地又ハ何港ヲ經テ明治何年何月何日何國何地又ハ何港ニ歸着致候間前記ノ遠洋漁業奬勵金御支給相成度別紙明細書並漁獵日誌其他證憑書類何通相添此段及請求候也

年　月　日　　住所　氏名　㊞

大臣殿

第三號書式
汽（帆）船何丸漁業明細書

年月日	發地名	著地名	碇泊場所	漁獵種類	漁獵場所	漁獲物 種類	漁獲物 數量	漁獲物 價額	記事

右之通候也

年　月　日

氏名　㊞

備考　記事欄内ニハ漁獲ニ從事シタル月日ノ天氣風向風力氣溫水溫其他必要ト認ムル事柄ヲ記載スヘシ

●遠洋漁業船舶艤裝規程（明治三十年六月農商務省令第九號）

遠洋漁業船舶艤裝規程左ノ通相定メ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

遠洋漁業船舶艤裝規程

第一條　遠洋漁業奬勵法ニ依リ遠洋漁業奬勵金ヲ受クヘキ船舶ハ其船體ノ構造遠洋漁業ニ適シ明治二十九年法律第六十七號船舶檢査法ニ依リ遠洋航船又ハ近海航船タルヘキ檢査證書ヲ有スルモノニシテ本規程ニ合格シタルモノニ限ル

第二條　遠洋漁業船ノ船體ハ總甲板ヲ有シ適度ノ荷足ヲ搭載シ得ヘキ構造ナルヲ要ス

第三條　遠洋漁業船ハ漁艇ノ搭載捕獲物ノ處理及貯藏ニ必要ナル場所ヲ設クヘシ

第四條　遠洋漁業船ニシテ火藥室ヲ設クルノ必要アルモノハ安全ノ場處ニ構造スルヲ要ス

第五條　遠洋漁業船ハ漁艇及捕獲物等ノ揚卸ヲ便ニスル爲メ之ニ適スル支柱、索具又ハ滑車器ヲ備フヘシ

第六條　遠洋漁業船ハ乘組總員ニ對シ一人ニ付一日少クモ二升ノ割合ヲ以テ三箇月分ヨリ少ナカラサル飲用水ヲ貯藏シ得ヘキ水箱又ハ水樽ヲ備フヘシ

但天水貯溜ノ裝置若クハ蒸溜器ノ備ヘアルモノ又ハ漁業ノ種類ニ依リ當該官吏ニ於テ本條ノ水量ヲ貯藏スルノ必要ナシト認メタルトキハ該水箱又ハ水樽ノ容積ヲ減減スルコトヲ得

第七條　遠洋漁業船ニシテ其漁獵ノ方法漁艇ヲ要スルモノハ左ノ制限ニ從ヒ之ヲ設備スヘシ

一　鯨戊獵船　　漁艇三隻以上
二　鰮肉獸獵船　　同　四隻以上
三　鯨獵船　　同　二隻以上
四　右ノ外各種ノ漁船　　同　二隻以上

前各號ノ漁艇ニハ每隻航海用具、羅針盤、信號喇叭及水樽ヲ備フルヲ要ス

第八條　遠洋漁業船ニ於テ使用スル漁獵具ハ左ノ制限ニ從ヒ之ヲ設備スヘシ

第一　鯨戊、鰮肉獸獵船
一　銃殺獵法ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付獵銃二挺以上及之ニ要スル彈丸、火藥、雷管等ヲ設備スルヲ要ス
二　投銛獵法ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付銛及竿ノ全備セル銛二挺以上トス

第二　鯨獵法
一　銃殺獵法ヲ爲スモノハ本船ニ銃砲二挺以上漁艇ニハ各一挺ニシテ之ニ要スル爆裂矢ハ銃砲一挺ニ付各二十發以上トシ火藥雷管等ハ其割合ヲ以テ之ヲ設備スヘシ
二　投銛獵法ヲ爲スモノハ漁艇每隻銛四挺又ハ爆裂銛二挺以上トス
三　捕鯨網ハ銃砲一挺又ハ漁艇一隻ニ付麻綱三百尋以上トス

第三　右ノ外各種ノ漁船
一　釣漁ヲ爲スモノハ左ノ割合ヲ以テスヘシ
延縄漁ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付延縄千五百尋以上トス
手釣漁ヲ爲スモノハ漁夫一人ニ付手釣三具以上トス
二　網漁ヲ爲スモノハ左ノ割合ヲ以テスヘシ
刺網漁ヲ爲スモノハ漁艇一隻ニ付刺網百尋以上トス
其他網漁ヲ爲スモノハ網及附屬具ノ全備セルモノ一統以上及其修復ニ要スル原料ヲ備フルモノトス
三　釣漁、網漁ヲ爲スモノニシテ餌料ヲ要スルモノハ其採取又ハ貯藏ニ必要ナル器具ヲ備フルモノトス

●遠洋漁業奬勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類、場所、船舶乘組定員ノ件（明治三十年六月勅令第百七十六號）

朕遠洋漁業奬勵法ニ依リ奬勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所並船舶乘組定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　遠洋漁業奬勵法ニ依リ遠洋漁業奬勵金ヲ受クヘキ漁獵ハ左ノ種類トス

鯨獵業
鰮虎獵業
鰮肉獸獵業
鱶漁業
鮪漁業
鰹漁業
鰐漁業
鯖漁業
鰯漁業
柔魚漁業
大鮃漁業

第二條　遠洋漁業奬勵法ニ依リ遠洋漁業奬勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ場所ハ左ノ洋海トス

支那海
臺灣海峽
東海

黄海
朝鮮海峡
日本海
荷哥蘭斯克海
太平洋

第三條　遠洋漁業奨勵法ニ依リ遠洋漁業奨勵金ヲ受クヘキ船舶乗組定員ハ左ノ如シ（三十二年勅令第百二十六號ヲ以テ改正）

流船
総噸數　五十噸以上　乗組定員　二十八名以下
総噸數　七十五噸以上　乗組定員　三十名以下
総噸數　百噸以上　乗組定員　三十二名以下
総噸數　百五十噸以上　乗組定員　三十五名以下
総噸數　二百噸以上　乗組定員　三十八名以下
総噸數　二百五十噸以上　乗組定員　四十一名以下
総噸數　三百噸以上　乗組定員　四十四名以下
総噸數　三百五十噸以上　乗組定員　四十七名以下

帆船
総噸數　三十噸以上　乗組定員　二十名以下
総噸數　四十噸以上　乗組定員　二十三名以下
総噸數　六十噸以上　乗組定員　二十六名以下
総噸數　八十噸以上　乗組定員　二十八名以下
総噸數　百噸以上　乗組定員　二十九名以下
総噸數　二百噸以上　乗組定員　三十名以下
総噸數　百二十噸以上　乗組定員　三十一名以下
総噸數　百四十噸以上　乗組定員　三十二名以下
総噸數　百六十噸以上　乗組定員　三十四名以下
総噸數　百八十噸以上　乗組定員　三十四名以下
総噸數　二百噸以上　乗組定員　三十七名以下

●遠洋漁業練習生規程（明治三十一年五月農商務省告示第十二號）

遠洋漁業練習生左ノ通相定ム

但本規程第四條遠洋漁業練習生志願者ハ本年ニ限リ五月三十一日迄ニ提出スルコトヲ得

第一條　遠洋漁業練習生ハ遠洋漁業ニ關スル技術ヲ練習スルモノトス

第二條　遠洋漁業練習生ハ左ノ資格ヲ有スル者ヨリ試驗ヲ經テ採用スルモノトス但時宜ニ依リ特ニ選拔採用スルコトアルヘシ

一　水産講習所卒業生
二　舊大日本水産傳習所卒業生
三　前二號ト同等以上ノ學術技能ヲ有スルト認ムルモノ

第三條　遠洋漁業練習生ハ二十人ヲ以テ定員トシ其修業年限ハ三年トス

前項遠洋漁業練習生ノ定員及修業年限ハ時宜ニ依リ之ヲ伸縮スルコトアルヘシ

第四條　遠洋漁業練習生タラント欲スルモノハ左ノ書式ニ依リ調製シタル願書ニ履歴書及醫師ノ體格證明書ヲ添ヘ毎年三月三十一日迄ニ地方長官ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第五條　地方長官ニ於テ前條ノ願書ヲ受ケタルトキハ願人並ニ身許引受人ノ身許ヲ調査シ副申書ヲ附シ農商務大臣ニ進達スヘシ

第六條　遠洋漁業練習生ハ農商務大臣ノ定ムル命令條件ヲ遵守シ其職務ニ從事スヘシ

第七條　遠洋漁業練習生ニ支給スヘキ手當金ハ一箇月金十五圓以内トス

第八條　遠洋漁業練習生ニシテ修業年限ヲ了ヘタル者ニハ其成績ヲ考査シ修業證書ヲ下付ス

第九條　遠洋漁業練習生ニシテ農商務大臣ノ定ムル命令條件ヲ遵守セサルカ又ハ成業ノ見込ナシト認ムルトキハ何時ニテモ遠洋漁業練習生ヲ免スヘシ但命令條件ヲ遵守セサルモノハ既ニ支給シタル手當金ヲ辨償セシムルコトアルヘシ

書式

遠洋漁業練習生志願書

私儀遠洋漁業練習生志願ニ付御試驗ノ上御採用被下度修業中ハ御規則命令等堅ク遵守可仕候依テ身許引受人連署ヲ以テ此段奉願候也

年　月　日

族籍住所職業雛子弟願人　氏　名印
族籍住所職業身許引受人　氏　名印

農商務大臣宛

●漁業組合準則（明治十九年五月農商務省令第七號）

漁業組合準則左ノ通相定ムル依テ此準則ニ基キ組合ヲ設置セシメ其規約認可ノ上當省ヘ届出ヘシ

漁業組合準則

第一條　漁業（水産動植物採捕ヲ併稱ス）ニ從事スルモノハ適宜區畫ヲ定メ組合ヲ設ケ規約ヲ作リ管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ

但漁者僅少ニシテ他ノ漁場ニ關係セサル地ハ管轄廳ノ見込ヲ以テ組合ヲ要セサルコトアルヘシ

第二條　組合ハ營業ノ弊害ヲ矯正シ利益ヲ增進スルヲ目途トスヘシ

第三條　組合ハ左ノ二類トス

第一類　捕魚採藻（遠海漁業若クハ大地引網捕鯨鮮漁昆布採收ノ類）各其種類ニ從ヒ特ニ組合ヲナスモノ

第二類　河海湖沼沿岸ノ地區ニ於テ各種ノ漁業ヲ混同シテ組合ヲナスモノ

第四條　前條第二類ノ漁業ニシテ漁場ノ相連帶スルモノハ必ス一組合トナスヘシ

第五條　組合ノ規約ニ掲クヘキ事項ハ左ノ如シ

一　組合ノ名稱及事務所ノ位置
二　組合ノ目的
三　役員選擧法及權限
四　會議ニ關スル規程
五　加入者及退去者ニ關スル規程
六　違約者處分ノ方法
七　費用ノ徴收及賦課法
八　捕魚採藻ノ季節ヲ定ムル事
九　漁具漁法及採藻ノ制限ヲ立ル事
十　漁場區域ニ關スル事
十一　前各項ノ外組合ニ於テ必要トナス事項

第六條　組合ハ規約ヲ更正シ若クハ其組合ヲ分立合併セントスルトキハ管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ

第七條　組合ハ聯合會ヲ設ケ其規約ヲ作リ若クハ之ヲ更正セントスルトキハ管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ

第八條　二府縣以上ニ渉ル組合及聯合會ノ規約ハ交渉管轄廳ヲ經テ農商務省ノ認可ヲ請フヘシ

但規約ヲ更正シ若クハ其組合ヲ分立合併セントスルトキモ亦本條ニ準スヘシ

第九條　二府縣以上ニ渉ル組合ハ便宜ノ地ニ事務所本部ヲ設ケ其他ハ每府縣事務所支部ヲ置クヘシ

但支部ハ組合ノ事情ニ依リ其必要ナラサル場合ニ於テハ之ヲ置カサルヲ得

●漁業組合外ノ者ニ組合規約ヲ遵守セシムル件（明治二十五年十二月農商務省訓令第四十一號）

廳府縣令ヲ以テ漁業組合外ノ者ヲシテ組合規約ノ條項ヲ遵守セシムルトキハ其條項ヲ告示スヘシ

●捕魚採藻ノ爲メ海面使用ノ件（明治八年十二月第百九十五號布告）

從來人民ニ於テ海面ヲ區畫シ捕魚採藻等ノタメ所用致居候者モ有之候處右ハ固ヨリ官有ニシテ本年（二月）第二十三號布告以後ハ所用ノ權無之候條從前ノ通所用致度者ハ前文布告但書ニ準シ借用願ヲ出ツヘシ

●海面借用願ニ關スル件（明治八年十二月太政官第二百十五號達）

捕魚採藻ノタメ海面所用ノ儀ニ付今般第百九十五號ヲ以布告候ニ付テハ右當用願出候者ハ調査ノ上差許其都度内務省ヘ可届出此旨相達候事（九年太政官第七十四號達ヲ以テ但書取消）

●捕魚採藻者ニ府縣税ヲ賦シ營業取締ノ件（明治九年七月太政官第七十四號達）

明治八年（十二月）第二百十五號ヲ以捕魚採藻ノタメ海面所用ノ儀ニ付相達置候所詮議ノ次第有之右但書取消シ候條以來各地方ニ於テ適宜府縣税ヲ賦シ營業取締ハ可成從來ノ慣習ニ從ヒ處分可致此旨相達候事

●捕魚採藻ノ爲メ湖川池沼所用ノ件（明治九年十月内務省乙第百十六號達）

捕魚採藻ノタメ海面所用ノ儀ニ付本年第七十四號ヲ以沿海府縣ヘ公達ノ旨モ有之付テハ海ト雖モ總テ海面ニ準シ處分可致其他官有ニ屬スル池沼ハ人民ノ願ニ因リ他ニ無障碍分ハ明治七年當省乙第五十五號達ニ照準各種ノ名義ヲ以借用料收入所用可差許積相心得當省ヘ可申出此旨相達候事

●鮑等捕獲ノ爲メ潛水器使用ニ關スル件（明治十五年三月農商務省第五號達）

近來海濱ニ於テ鮑等捕獲ノタメ潛水器械ヲ使用スル者有之趣相聞候處右ハ使用適度ヲ過ルトキハ介種蕃殖上ニ妨害ヲ來スヘキモノニ付篤ク注意ヲ加ヘ適宜取締ノ方法取調當省ヘ可伺出此旨相達候事

●漁業保護水産蕃殖ヲ計ル件

（明治十四年一月　内務省乙第二號達）

水産ノ盛殖ヲ謀ルハ國家經濟ノ要務ニ候處從來往々舊慣ヲ墨守シテ捕魚其宜ヲ失シ爲之水族ノ蕃殖ヲ妨ケ巨多ノ障碍ヲ生シ候類不少哉ニ相聞候ニ付萬一實地取調ノ上一層漁業ヲ保護シ水産ノ盛殖ニ注意可致此旨相達候事

●魚兒介苗等捕採制限ノ件

（明治十九年六月　農商務省訓令第九號）

魚兒介苗其他未成長ノ苔藻等濫リニ之ヲ捕採セサル樣各地ノ狀況ニ從ヒ適宜之カ制限ヲ立ツヘシ

●漁業取締及組合規則其他ノ命令經伺ノ件

（明治二十八年十月農商務省訓令第十四號）

漁業取締及漁業組合規則其他水産動植物ノ蕃殖保護等ニ關スル命令ハ自今本大臣ヘ經伺ノ上施行スヘシ（二十九年拓殖務省訓令第十二號參看）

但從前發布ニ係ル命令ノ改正又ハ廢止ヲナサントスルトキモ本文ニ準スヘシ

○拓殖務省訓令（明治二十九年十月第十二號）

明治二十八年（十月）農商務省訓令第十四號左ノ通改正ス

漁業取締及漁業組合規則其他水産動植物ノ蕃殖保護等ニ關スル命令ハ自今命令施行ノ上本大臣ニ上申ス可シ

第十三款　獣獵

●臘虎膃肭獸獵法（明治二十八年三月　法律第十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臘虎膃肭獸獵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臘虎膃肭獸獵法

第一條　臘虎膃肭獸ヲ獵獲セムトスル者ハ農商務大臣ノ免許ヲ受クヘシ

第二條　臘虎膃肭獸保護ノ爲勅令ヲ以テ禁獵區及禁獵期ヲ設ケ獵船、獵具、獵法ヲ制限シ牝牡、年齢ニ依リ其ノ獵獲ヲ禁止スコトヲ得

第三條　軍艦艦長、警察官吏、稅關官吏其ノ他特ニ命令ヲ受ケタル官吏ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ臘虎膃肭獸獵船、獵具及獵獲物ノ檢査ヲ行ヒ犯則者ト認ムヘキ者及船員ヲ抑留シ獵船、船具、獵具、船籍證書及獵獲物ヲ差押フルコトヲ得

第四條　禁獵區內又ハ禁獵期間ニ於テ臘虎膃肭獸ノ獵獲ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮又ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ何人ノ所有ヲ問ハス獵船、船具獵具及獵獲物ヲ沒收ス

第五條　獵船、獵具、獵法ノ制限及牝牡、年齢ニ依レル獵獲ノ禁止ニ違背シ又ハ獵船、獵具及獵獲物ノ檢査ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮又ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條　第一條ノ免許ヲ受ケスシテ臘虎膃肭獸ヲ獵獲シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ獵獲物ヲ沒收ス

第七條　第四條、第六條ニ依リ沒收セラルヘキ獵獲物ヲ既ニ販賣シタルトキハ其ノ代價ヲ追徵ス

第八條　此ノ法律ハ明治二十九年一月一日ヨリ施行ス

明治十七年第十六號布告及明治十九年勅令第八十號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

●臘虎膃肭獸臘免許規則

（明治二十八年十二月　農商務省令第十二號）

臘虎膃肭獸獵免許規則左ノ通相定ム

臘虎膃肭獸獵免許規則

第一條　臘虎若クハ膃肭獸ヲ獵獲セントスル者ハ其住居地又ハ獵船定繫場管轄ノ地方長官（東京府ハ警視總監以下之ニ倣フ）ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第二條　前條獵業免許ノ願書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ但地先沿岸ニ於テ獵銃ヲ使用セス臘虎若クハ膃肭獸ノ獵獲ヲナス者ハ第三ノ事項ヲ記載スルヲ要セス

一　獵業ノ種類　二　本籍及住所身分

三　獵船ノ數及其船名噸數四　獵船定繫場

五　獵期及獵場　六　獵具獵法

第三條　獵業ヲ免許シタルトキハ左ノ雛形ニ依リ各獵船ニ免許證ヲ下付ス

（免許證雛形略ス）

第四條　獵業免許ヲ得タル者獵業ニ從事スルトキハ出港地管轄警察本分署ニ屆出テ獵期ノ終了ニ際シ獵船定繫場若クハ寄港地管轄ノ警察本分署ニ獵業免許證ヲ差出シ檢印ヲ受ク可シ

前項警察本分署ノ檢印ヲ受ケサルコト二箇年以上ニ渉ルトキハ免許ノ效ヲ失フモノトス

第五條　獵業免許ヲ得タル者ハ左ノ雛形ニ依リ旗章ヲ製シ獵業ニ從事スルトキハ常ニ船檣又ハ船部ノ見易キ所ニ掲クヘシ

獵船ニ關スル端艇ニハ本船船名ヲ便宜見易キ所ニ表記スヘシ

（旗章雛形略ス）

第六條　獵業免許ヲ得タル者獵業ニ從事スルトキハ常ニ免許證ヲ携帶シ軍艦艦長警察官吏稅關官吏其ノ他特ニ命令ヲ受ケタル官吏ニ於テ檢閲セシコトヲ求ムルトキハ直ニ之ヲ示スヘシ

第七條　獵業免許ヲ得タル者獵業ニ從事シタルトキハ終了ノ後二箇月以內ニ於テ其ノ獵獲シタル臘虎膃肭獸ノ獵獲時日頭數獵獲場所及獵業ニ使用シタル端艇ノ數獵具ノ種別人員ヲ詳記シ管轄地方廳（東京府下ハ警視廳以下之ニ倣フ）ヲ經由シテ農商務省ニ報告スヘシ

第八條　獵業免許ヲ得タル者第三條ノ免許證ヲ亡失毀損シ又ハ第二條第二第三第四ニ記載シタル事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ具シ免許證ノ下渡又ハ訂正ノ願書ヲ管轄地方長官ニ差出スヘシ

第九條　獵業免許ヲ得タル者獵業ヲ廢止シ又ハ第四條第二項ニ據リ免許ノ效ヲ失ヒタルトキハ直ニ免許證ヲ管轄地方廳ニ返納スヘシ

●臘虎膃肭獸獵免許取扱手續

（明治二十八年十二月　農商務省訓令第十六號）

臘虎膃肭獸獵免許取扱手續左ノ通相定ム

臘虎膃肭獸獵免許取扱手續

第一條　臘虎膃肭獸獵免許規則第一條ニ據リ出願スル者アルトキハ免許規則第二條ニ記載シタル各項ヲ調査シ意見ヲ添ヘ本大臣ニ差出スヘシ

第二條　臘虎膃肭獸獵免許規則第二條但書ニ該當スル出願アルトキハ願書記載ノ事項ヲ調査シ不都合ナキモノハ免許證ヲ下付スヘシ

第三條　本手續第二條ノ免許證ハ使用高ヲ概算シ毎年三月本大臣ニ請求スヘシ

第四條　本手續第二條ノ免許證ニハ獵業者ノ本籍身分住所氏名船種及獵船ノ定繫場ヲ記入シ臘印ヲ以テ契印ヲ爲スヘシ

第五條　臘虎膃肭獸獵免許規則第八條ニ據リ免許證ノ下渡訂正ヲ出願シタルトキハ同則第一條ニ依レル者ノハ農商務省ニ差出シ本手續第二條ニ依レル者ノハ直ニ之ヲ示スヘシ

第六條　臘虎膃肭獸獵免許規則第九條ニ據リ返納セラルヘキ免許證ニシテ同則第一條ニ依レルモノハ其都度農商務省ヘ送付シ本手續第二條ニ依レルモノハ直ニ斷截スヘシ

第七條　免許證原簿ヲ備置キ本手續第二條ノ免許證下渡訂正ノ際臘虎膃肭獸獵免許規則第二條但書ノ事由ヲ登錄シ廢業又ハ免許ノ效ヲ失ヒタルモノハ其事故ヲ記スヘシ

第八條　本手續第二條ノ免許證ヲ下付シタルモノ又ハ免許證再渡訂正ヲ許可シタルモノハ翌年二月十五日マテニ左ノ表式ニ據リ本大臣ヘ報告スヘシ

（表式略ス）

第九條　臘虎膃肭獸獵免許規則第四條第一項ニ據リ屆出又ハ檢印シタル獵船ノ數ハ同則第一條ニ依レルモノハ其都度第二條但書ニ依レルモノハ毎年二月取纏メ本大臣ニ報告スヘシ

●臘虎、膃肭獸獵免許規則第二條但書ノ出願免許委任ノ件

（明治二十八年十二月　農商務省訓令第十五號）

明治二十八年農商務省令第十二號臘虎膃肭獸獵免許規則第二條但書ニ該當スル出願免許ノ件ヲ委任ス

第二章　度量衡

●度量衡法（明治二十四年三月　法律第三號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル度量衡法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

度量衡法

第一條　度量ハ尺、衡ハ貫ヲ以テ基本トス

第二條　度量衡ノ原器ハ白金「イリヂウム」合金製ノ棒及分銅トス其ノ棒ノ面ニ記シタル標線間ノ攝氏〇、一五度ニ於ケル長サ三十三分ノ十尺トシ分銅ノ質量四分ノ十五ヲ貫トス

第三條　度量衡ノ名稱命位ヲ定ムルコト左ノ如シ

度

毛　尺ノ萬分ノ一

厘　尺ノ千分ノ一

分　尺ノ百分ノ一

寸　尺ノ十分ノ一

尺

丈　十尺

間　六尺

町　三百六十尺（六十間）

里　一萬二千九百六十尺（三十六町）

地積

勺　歩ノ百分ノ一

合　歩ノ十分ノ一

歩　或ハ坪六尺平方

畝　三十歩

段　三百歩

町　三千歩

量

勺　升ノ百分ノ一

合　升ノ十分ノ一

御	石斗十升 百升	升六萬四千八百二十七立方分
厘	貫ノ百萬分ノ一 ノ十萬分ノ一	貫ノ萬分ノ一 匁貫ノ千分ノ一 貫
		斤百六十匁

第四條　從來借用ノ鯨尺ハ布帛ヲ度ルトキニ限リ之ヲ用ヰルコトヲ得

		鯨尺一尺ノ一尺二寸五分トシテ其ノ十倍ヲ鯨尺一丈ト十分ノ一ヲ鯨尺一寸ト百分ノ一ヲ鯨尺一分トス

第五條　「メートル」法度定鯨ノ左ニ掲クル比較ニ依リ之ヲ適法ノモノトシ本條以下ニ規定ヲ適用ス

度

厘	「メートル」 〇、〇〇〇〇三 （三萬三千三百三十三分の一）	「ミリメートル」　〇、〇〇三三〇
毛	〇、〇〇〇〇三 （三萬三千三百三十三分の一）	「センチメートル」　〇、〇三三〇〇
分	〇、〇〇〇三三 （三萬三千三百三十三分の一百）	「デシメートル」　〇、三三〇〇〇
寸	〇、〇〇三三〇 （三萬三千三百三十三分の一千）	「メートル」　三、三〇〇〇〇
尺	〇、〇三三〇〇 （三萬三千三百三十三分の一百萬）	「デカメートル」　三三、〇〇〇〇〇
間	〇、三三〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一十萬）	「クロメートル」　三三〇、〇〇〇〇〇
丈	三、三〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一百萬）	「キロメートル」　三三〇〇、〇〇〇〇〇
町	三三、〇〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一十萬）	
里	三三〇、〇〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一百萬）	
	三三〇〇、〇〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一千萬）	

地積

歩	「アール」 〇、〇〇〇〇一 （三萬三千三百三十三分の一）	「センチアール」　〇、〇〇一一五
合	〇、〇〇〇一一 （三萬三千三百三十三分の十）	「アール」　〇、一一五〇〇〇
勺	〇、〇〇一一〇 （三萬三千三百三十三分の百）	「クタール」　〇、一一五〇〇〇〇
坪	〇、〇一一〇〇 （三萬三千三百三十三分の千）	
畝	〇、一一〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一百萬）	
歩	一、一〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一十萬）	
町	一〇、〇〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一百萬）	
段	一〇〇、〇〇〇〇〇 （三萬三千三百三十三分の一千萬）	

重

石	「グラム」 〇、〇〇一 （二千三百三十三分の一）	「ミリグラム」　〇、〇〇〇一七五
斗	〇、〇一一 （二千三百三十三分の一百）	「センチグラム」　〇、〇一一七五〇
升	〇、一一〇 （二千三百三十三分の一十）	「デシグラム」　〇、一一七五〇〇
合	一、一〇〇 （二千三百三十三分の一）	「グラム」　一、一七五〇〇〇
勺	一〇、〇〇〇 （二千三百三十三分の一百）	「デカグラム」　一〇、一七五〇〇〇
	一〇〇、〇〇〇 （二千三百三十三分の一千）	「クログラム」　一〇〇、一七五〇〇〇
		「キログラム」　一〇〇〇、一七五〇〇〇

衡

貫	「トン」 〇、〇〇一 （二千三百三十三分の一）	「ミリグラム」　〇、〇〇〇一七五
匁	〇、〇一一 （二千三百三十三分の一百）	「センチグラム」　〇、〇一一七五〇
分	〇、一一〇 （二千三百三十三分の一千）	「デシグラム」　〇、一一七五〇〇
厘	一、一〇〇 （二千三百三十三分の一百萬）	「グラム」　一、一七五〇〇〇
毛	一〇、〇〇〇 （二千三百三十三分の一十萬）	「デカグラム」　一〇、一七五〇〇〇
斤	一〇〇、〇〇〇 （二千三百三十三分の一百萬）	「クログラム」　一〇〇、一七五〇〇〇
		「キログラム」　一〇〇〇、一七五〇〇〇

第六條　度量衡ノ原器ハ農商務大臣之ヲ保管ス

農商務大臣ハ度量衡ノ原器ニ依リ副原器二組ヲ製作セシメ原器ノ代用ニ供ス

副原器ノ一組ハ農商務大臣之ヲ保管シ他ノ一組ハ文部大臣之ヲ保管ス

第七條　農商務大臣ハ副原器ニ依リ地方原器ヲ製作セシムヘシ

地方原器ハ地方長官之ヲ保管シ度量衡器検定ノ標準ニ供スルモノトス

地方原器ハ地方長官之ヲ保管シ度量衡器検定ノ標準ニ供スルモノトス

第八條　度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ販賣セント欲スル者ハ地方長官ヲ経由シ農商務大臣ニ願出テ免許ヲ受クヘシ

製作ノ免許ヲ得タル者ハ修覆及販賣ヲナスコトヲ得

免許ニ関スル年限、身元保証金其ノ他必要ナル制限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條　度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ輸入シテ販賣シ又ハ営業ノ目的ニ使用スル者ハ検査ヲ其ノ検定ヲ受クヘシ

営業ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ前項検定ノ外之ヲ修覆シタルトキ及定期間ニ於テ検定ヲ受クヘシ

官廳、公署、官立、公立ノ諸建設物又ハ貨幣、病院其ノ他之ニ類スル建設物ニ於テ取引、授受及証明ノ為ニ使用スル度量衡器ハ営業ノ目的ニ使用スルモノニ準ス

第十條　度量衡器ノ種類、形状、物質、検定ノ定期及公差、検定スヘキ目盛及分銅ノ最小定限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條　度量衡器ノ検定及取締ハ地方長官之ヲ管理ス

地方長官ハ市長、町村長ヲシテ其ノ市町村内ニ於ケル度量衡器ノ取締ヲ行ハシメ及其ノ検定ニ関スル事務ヲ補助セシムルコトヲ得

第十二條　度量衡器ノ製作者、修覆者、販賣者及使用者ハ取締ノ為ニ行フ必要ナル検査ノ為其ノ検査ヲ拒ミ若クハ妨ケ又ハ検査ヲ拒ミ若クハ妨ケタル者ハ主任ノ官吏ヲシテ之ヲ示スヘシ

第十三條　度量衡器ノ製作、修覆及販賣ノ免許ヲ受クル者ハ免許料ヲ、検定ヲ受クル者ハ検定料ヲ納ムヘシ

免許料及検定料ノ金額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　度量衡器ノ製作者、修覆者若ハ販賣者ニシテ度量衡ニ関スル法律命令ニ違背シタル者ハ農商務大臣ニ其ノ営業免許ヲ取消スコトヲ得

第十五條　免許ヲ受クスシテ度量衡器ヲ製作シ若ハ修覆シテ販賣シタル者ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

免許ヲ受クスシテ度量衡器ヲ販賣シ又ハ検定ヲ受クサル度量衡器ヲ販賣シ若ハ之ヲ営業ノ目的ニ使用シ及其ノ員吏ノ請検ヲ拒ミタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

差違アル度量衡器ナルコトヲ知テ之ヲ販賣シ又ハ営業ノ目的ニ使用シタル者亦前項ニ同シ

第十六條　本法施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十七條　本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十八條　度量衡器ノ製作ニ限リ本法施行前六箇月以内ニ之ヲ免許スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法中製作ニ関スル條項ハ之ヲ適用ス

第十九條　從來度量衡製作及販賣ノ免許ヲ受クル者ハ更ニ免許ヲ受クルコトヲ要セス本法ノ規定ニ從ヒ其ノ格式ヲ整頓スルコトヲ得

第二十條　從來ノ度量衡器ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年以内ニ本法ノ規定ニ依リ其ノ検定ヲ経サルモノハ其ノ期限ヲ過クル後之ヲ販賣シ若ハ営業ノ目的ニ使用スルコトヲ得ス

第二十一條　從來ノ度量衡器ニシテ作製シタル者ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年ヲ限リ從來ノ検査規則ニ依ル

第二十二條　明治八年太政官第百三十五號度量衡取締條例及検査規則同九年第十七號布告度量衡改定規則及関係形状度量衡取締條例ハ從來ノ法令ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廃止ス但シ度量衡取締條例附属検査規則ハ前條ノ場合ニ限リ明治三十二年十二月三十一日マテ其ノ効力ヲ有ス

●度量衡法施行規則（明治三十年七月農商務省令第十一號）

明治二十四年（八月）度量衡令第十一號度量衡法施行規則左ノ通改正ス

度量衡法施行規則

第一章　検定

第一條　度量衡検定所ハ常設、特設ノ二トシ常設検定所ニ於テハ製作、修覆若クハ営業ノ目的ニ使用スル度量衡器ヲ検定シ特設検定所ニ於テハ営業ノ目的ニ使用スル度量衡器ヲ検定ス

特設検定所ハ地方廳所在地ニ一箇所ヲ置キ特設検定所ハ定期検定ヲ施行スルトキ地方長官便宜ニ地方廳所在地其ノ場所ヲ指定スヘシ

地方長官ニ於テ地方ノ状況ニ依リ該廳所在地外ニ常設検定所ヲ設置スヘキ必要アリト認ムルトキハ

特殊ノ場所ヲ指定シテ其ノ場所ノ及検定ノ期日ヲ定メ其ノ検定ヲ施行スル期日ヨリ少クモ一箇月以前ニ之ヲ告示スベシ

第二條　度量衡器ノ検定ヲ受クントスルトキハ製作、修繕若クハ輸入シタル者ハ左ノ甲號若ハ乙號書式ニ依リ其ノ使用スル者ハ明治三十年勅令第百十六號第九條検定請求書ニ明治三十年勅令第百十六號第九條ニ定ムル検定済印ノ表記印紙ヲ貼用シ之ヲ物品ニ添ヘ度量衡検定所ニ差出スベシ（三十一年農商務省令第十號ヲ以テ本式中改正）

甲號書式　用紙美濃

度量衡器検定請求書

貼用シタル印紙ヲ消印スベシ

度器

形狀	物質	種類 全長	種類 目盛	製作又ハ輸入號	箇數
直形	竹	直尺「何メートル」又ハ何尺	何分	何號又ハ自何何號	何箇
……	……	……	……	……	……

種類ノ欄中目盛ノ記入ヲ要スルハ一尺以下ノ度器ニ限ル

量器

形狀	物質	種類	製作又ハ輸入號	箇數
方形	檜	何「リットル」又ハ何升	何號又ハ自何何號	何箇
……	……	……	……	……

斗概

種類	製作又ハ輸入番號	箇數
大中又ハ小	何號又ハ自何何號	何箇
……	……	……

分銅

形狀	物質	種類	製作又ハ輸入番號	組箇數及
圓棒形	真鍮	何「グラム」又ハ何匁	何號又ハ自何何號	何箇
……	……	至自何匁	何號又ハ自何何號	何組何箇

秤

種類	物質	秤量	感量	製作又ハ輸入號	箇數
天秤	／	何「キログラム」又ハ何	何「ミリグラム」又ハ何	何號又ハ自何何號	何箇
竿秤	／	右ニ同シ	／	右ニ同シ	右ニ同シ
棹秤	樫	右ニ同シ	／	右ニ同シ	右ニ同シ
……	……	……	……	……	……

年　月　日　何製作、修繕又ハ輸入者　何　実㊞

乙號書式　用紙半紙

度量衡器検定請求書

貼用シタル印紙ヲ消印スベシ

度器

物質	種類 全長	種類 目盛	箇數
竹	直尺「何メートル」又ハ何尺	何匁	何箇
……	曲リ尺	……	……

量器

物質	種類	箇數
鍋	又ハ何「リットル」合	何箇
……	……	……
斗概		何箇

分銅

種類	箇數及組數
何匁又ハ何「グラム」	何箇
自何匁至何匁	何組何箇

秤

種類	物質	秤量	感量	箇數
天秤	／	何「キログラム」又ハ何	何「ミリグラム」又ハ何	何箇
竿秤	／	右ニ同シ	／	右ニ同シ
棹秤	／	右ニ同シ	／	右ニ同シ
……	……	……	……	……

年　月　日　何　実㊞　場所

第三條　検定所ニ度量衡器ヲ差出シ難キトキハ其ノ事由及度量衡器ノ種類、箇數等ヲ詳記シ特ニ其ノ所在地ニ於テ検定ヲ受クルコトヲ地方長官ニ請願スベシ

前項ノ場合ニ於テハ第二條ノ請求書ヲ出張吏員ニ差出スベシ

第四條　度量衡器ノ種類、形狀、物質、公差並ニ度器竿製量器ノ目盛及分銅ノ最小定限ハ明治三十年勅令第百十六號第一條、第三條及第四條其ノ標準ハ本令第二条ノ規定ニ依リ検定スベシ

第五條　度量衡器ヲ検査シタルトキハ其ノ合格ノモノニハ検定ノ証印ヲ附シ証印又ハ証書ヲ附シ証印ヲ附シ難キモノニハ証書ヲ附シ証印又ハ証書アルモノニシテ不合格ノトキハ証印ニハ消印ヲ附シ証書ハ終ス

鍾及錘ハ其ノ初回ノ検定ノ外合格スルモ証印ヲ附セス

第六條　証印、証書及消印ノ種類、雛形ヲ定ムルコト左ノ如シ但シ度量衡法第二十一條ノ場合ヲ除ク外定期検定ノ年ニ用ヰル証印ハ別ニ之ヲ定ム（三十一年農商務省令第十號ヲ以テ但書改正）

一証印

打込ミ印
大　二分半方
中　一分三厘半方
小　六厘半方

焼キ印
大　四分半方
小　二分半方

一消印

打込ミ印及焼キ印
大「長径四分短径一分六厘」
小「長径二分短径一分三厘」

第七條　汚染、磨滅、毀損等ニ依リ證印證書ノ識別シ難キモノ又ハ證書ノ紛失シタルモノハ更ニ其ノ器ノ檢定ヲ受クヘシ

第二章　構造

第八條　度器ハ表面ニ其ノ全長ヲ表記スヘシ但シ細帶狀ノ度器ニシテ函ニ連結シタルモノハ其ノ函ニ表記スルモ妨ナシ

割目ヲ盛リタル度器(縮尺)ハ全長ノ外其ノ目盛ノ割合ヲ表記スヘシ表記ノ方法ハ左ノ例ニ依ルヘシ

間ノ二千分ノ一ニ相當スル目盛ノモノハ

間	
1	2000 又ハ
1/2	2000 又ハ
二千分ノ一間	又ハ
二千分ノ一間	

檢定之證	
製作人	廳府縣何某
年號	何年
番號	第何號
物質	何々
形狀	何々
種類	何々
年月	廳府縣度量衡檢定所印

一證書

大　竪　三寸五分　横　五寸

小　竪　一寸二分　横　一寸五分

鏈狀ノ度器ハ其ノ一端ノ鎖ニ其ノ全長ヲ表記スヘシ

鏈狀ノ度器ハ別種ノ金屬片ヲ以テ其ノ目盛ノ標識トスヘシ

鋼鐵、革、麻布製ノ細帶狀度器ハ其ノ一端ニ眞鍮片ヲ附著シ證印ヲ附スルノ便ニ供スヘシ

第九條　量器ハ外側ニ其ノ全量ヲ表記シ斗概ハ切口ニ其ノ種類ノ大中小ヲ表記スヘシ

第十條　鐵葉ヲ以テ五合及一「リットル」以上ノ量器ヲ製作スルトキハ之ヲ二重ニスヘシ

第十一條　鐵、銅若クハ眞鍮ヲ以テ製作シタル量器ハ其ノ內面ニ錫又ハ白銅ヲ鍍著スヘシ

第十二條　木製ノ量器ハ鐵板ヲ以テ口緣ヲ被ヒ尙一升及二「リットル」以上ノ方形ノモノハ側及底(鍵アルモノハ其ノ鍵)ノ四隅ノ外面ニ鐵帶ヲ附著シ其ノ圓筒形ノモノハ一箇又ハ交叉シタル二箇ノ鐵帶ヲ側及底ノ外面ニ沿フテ附著スヘシ但シ酒、酢、醬油、食鹽等ノ如キ鐵ヲ腐蝕スヘキ物料ヲ量ルニ用ヰル量器ハ此ノ限ニアラス

鐵板又ハ鐵帶ヲ量器ニ附著スルニ螺旋釘ヲ以テシタルトキハ其ノ捻戾シヲナシ得サル丈ケ釘頭ヲ削去スヘシ

斗概ハ鐵葉ヲ以テ其ノ側面ヲ包ムヘシ但シ本條第一項但書ノ量器ニ附屬スル斗概ハ此ノ限ニアラス

第十三條　量器ニハ注口、把手及鍵ヲ附スルコトヲ得

注口ヲ附スルトキハ其ノ容量ノ割合ニ應シ量器ノ深サヲ減スヘシ

注口ノ口面ハ量器ノ上面ト其ノ高サヲ同一ニスヘシ但シ玻璃製ノモノハ此ノ限ニアラス

第十四條　衡器ノ重點及支點ニハ鋼鐵若クハ堅石ヲ用ヰ絹紐ニハ金屬、革又ハ强靭ナル絹絲、麻絲等ヲ用ヰルヘシ

第十五條　錘及增錘ノ物質ハ分銅ノ物質ト同一ノモノニ限ル但シ其ノ重量五十匁又ハ二百「グラム」以上ノモノニアラサレハ鐵ヲ以テ製作スルコトヲ得ス

第十六條　分銅、錘及增錘ノ重サヲ齊整スル爲メ鉛ノ類ヲ用ヰルトキハ其ノ一部ヲ穿チ此ニ鉛ヲ塡充シ金屬片(鐵ヲ除ク)ヲ以テ之ヲ塞ヘスヘシ但シ鉛ノ量ハ分銅、錘及增錘ノ重サノ二十分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ス

前項ノ穿口ヲ塞クニ螺旋釘ヲ用ヰルトキハ其捻戾シヲナシ得サル丈ケ釘頭ヲ打チ潰シ若クハ釘著ケニナスヘシ

第十七條　鐵製ノ分銅、錘及增錘ニシテ鉛ノ類ヲ塡充セサルモノハ特ニ其ノ一部ニ眞鍮片ヲ挿入シ證印ヲ附スルノ便ニ供スヘシ

第十八條　天秤、棹秤、桿秤ハ其ノ最大重ヲ掛ケタル量ヲ秤量トシ左ノ定限以下ノ量ヲ感スルコトヲ要ス

天秤　秤量ノ千分ノ一

棹秤　秤量ノ二千分ノ一

桿秤　秤量ノ二百分ノ一(但シ秤量二貫又ハ五「キログラム」以下ニシテ金屬製ニアラサルモノハ秤量ノ百分ノ一)

第十九條　棹秤ハ秤量十貫若クハ三十「キログラム」以上ノモノニ限ル

第二十條　棹秤及桿秤ノ目盛ハ左ノ定限以內トス但シ其ノ感量ヨリ小ニスルコトヲ得ス

棹秤　秤量二千分ノ一

桿秤　秤量二百分ノ一(但シ秤量二貫又ハ五「キログラム」以下ニシテ金屬製ニアラサルモノハ秤量ノ百分ノ一

第二十一條　二段以上目盛シタル桿秤ノ秤量及感量ハ每段ニ就キ之ヲ定ムヘシ

第二十二條　桿秤ノ取緒ハ一緒若クハ二緒トス其ノ二緒ノモノハ之ヲ表裏ニ附著スヘシ

第二十三條　調子玉アル衡器ニシテ支點二箇以上ヲ設クルモノハ其ノ支點每ニ重點ヲ附スヘシ

第二十四條　分銅ハ其ノ重量、增錘ハ其ノ掛量ヲ其ノ上面又ハ側面ニ表記スヘシ但シ線狀ノ分銅ハ此ノ限ニアラス

第二十五條　錘、增錘、皿等ニシテ其ノ附屬スル秤桿ト分離シ得ルモノハ其ノ秤桿ト同一ノ符號ヲ表記スヘシ

第二十六條　天秤ハ其ノ秤量及感量ヲ支柱、棹又ハ其ノ他ノ部ニ表記スヘシ

第二十七條　棹秤ハ其ノ棹秤ハ其ノ桿ノ目盛ノ各段ニ秤量ヲ表記スヘシ

第二十八條　度量衡器ニハ製作者若クハ輸入シテ販賣スル者ノ記號及製作若クハ輸入ノ年號、番號ヲ併列シテ表記スヘシ

修復シタル度量衡器ニシテ前項ノ記號、年號又ハ番號ヲ識別シ難キモノニハ修復者ノ記號及修復ノ年號、番號ヲ表記スヘシ其ノ表記ノ方法ハ左ノ例ニ依ルヘシ

明治三十年製(輸入若クハ修復)第千八十號ハ

「記號30 一〇八〇」又ハ「〇八〇一」又ハ記號30 記號20

第二十九條　數箇ノ分銅ヲ一組トナストキハ箱ニ納メ各箇ニ同一ノ記號、年號及番號ヲ附スヘシ

之ヲ各箇ニ附シ難キトキハ箱ニ表記スルコトヲ得

第三十條　度器ノ目盛ハ割目ノモノヲ除ク外度ノ名稱ノ二分ノ一又ハ一倍、二倍、五倍タルヘシ但シ間ノ目盛ハ本項規定ノ外其ノ十分ノ一百分ノ一トナスコトヲ得

玻璃製量器ノ目盛ハ量ノ名稱ノ一倍、二倍又ハ二分ノ一、五分ノ一、十分ノ一、二十分ノ一タルヘシ

衡器ノ目盛ハ衡ノ名稱ノ一倍、二倍、五倍若クハ此ノ倍數ノ十倍、百倍タルヘシ但シ斤ノ目盛ハ本項規定ノ外其ノ二分ノ一、四分ノ一、八分ノ一トナスコトヲ得

第三章　免許

第三十一條　度量衡器ノ製作、修復若クハ販賣ノ免許ヲ受ケントスル者ハ其ノ願書ニ明治三十年勅令第百十六號第六條ノ設計書ヲ添ヘ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ差出スヘシ但シ輸入販賣ノ免許ヲ受ケントスル者ハ其ノ旨ヲ願書ニ記スヘシ

第三十二條　農商務大臣度量衡器ノ製作、修復若クハ販賣ノ免許ヲ與ヘントスルトキハ其ノ通知書ニ免許料納入用紙ヲ添ヘ出願者ニ送付スヘシ

出願者ハ前項ノ免許料納入用紙ニ明治三十年勅令第百十六號第八條ノ免許料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ其ノ通知書ノ日附ヨリ三十日以內ニ農商務省ニ納ムヘシ

第三十三條　免許料ノ納入ヲナシタルトキハ免許狀ヲ下付スヘシ

免許狀ヲ受領シタルトキハ免許狀受領ノ日ヨリ三十日以內ニ明治三十年勅令第百十六號第十一條ノ身元保證金ヲ納ムヘシ

免許ヲ取消サレ若クハ營業ヲ廢止シタルトキハ免許狀ヲ返納スヘシ又之ヲ紛失シタルトキハ更ニ其ノ下付ヲ請フヘシ

第三十四條　第三十二條ノ免許料及第三十三條ノ身元保證金ヲ規定ノ期限內ニ差出サヽルトキハ其ノ出願又ハ免許ヲ無效トス

第三十五條　身元保證金ハ通貨若クハ公債證書ヲ地方長官ノ指定スル銀行ニ預ケ入レ其ノ預リ證券ヲ地方廳ニ納メ置クヘシ但シ公債證書ハ時價ニ依リ其ノ二割ヲ增シテ納ムヘシ

地方長官前項ノ預リ證券ヲ受取タルトキハ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第三十六條　身元保證金ノ金額ニ減少ヲ生シタルトキハ地方長官其ノ旨ヲ納入者ニ通知シ完納セシムベシ

前項ノ通知ヲ受クタル日ヨリ十五日以内ニ完納セサルトキハ地方長官ハ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申シ處分ヲ請フベシ

第三十七條　度量衡器ノ製作者ハ修覆ノ免許ヲ受クタル者ハ其ノ原器ノ貸渡ヲ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ請求スルコトヲ得

製作ノ免許ヲ受クタル者ハ其ノ原器ヲ製作スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ地方長官ノ檢定ヲ受クベシ

製作者ハ修覆ニ用ヰル原器ハ毎年一回以上地方長官ノ檢定ヲ受クベシ

第三十八條　度量衡器ノ製作、修覆者ハ輸入販賣ノ免許ヲ受クタル者ハ其ノ表記ニ用ヰル記號ヲ定メ豫メ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ届出ベシ

第三十九條　度量衡器ノ製作、修覆者ハ販賣ノ免許ヲ受クタル者其ノ營業ヲ廢止シタルトキハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ届出ベシ

第四十條　度量衡器ノ製作、修覆者ハ販賣ノ免許ヲ受クタル者死亡又ハ退隠シタルトキハ其ノ相續者ニ限リ營業ヲ繼續スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ免許狀ノ名義書換ヲ地方長官ヲ經由シテ農商務大臣ニ願出ベシ

第四十一條　衡器販賣ノ免許ヲ受クタル者料秤ノ取締及錘錘ニシテ金圓ニアラサルモノノ修覆ヲナサントスルトキハ其ノ旨ヲ地方長官ニ届出ベシ

第四十二條　料秤ノ取締及錘錘ニシテ金圓ニアラサルモノノ修覆ヲ爲ス販賣者ハ秤架及左ノ分銅ヲ備フベシ

重量合計十五貫又ハ五十「キログラム」以上ノ分銅但シ此ノ内五貫乃至二百又ハ二十「キログラム」乃至一「センチグラム」ノ各種ヲ合セ一組以上ヲ合ム

前項ノ分銅ハ毎五年一回以上地方長官ノ檢定ヲ受クベシ

第四十三條　料秤ノ取締及錘錘ニシテ金圓ニアラサルモノノ修覆ヲナシタルトキ違反アリト認ムルニ於テハ其ノ旨ヲ地方廳若クハ市町村長ニ届出ベシ

罰則

第四十四條　第七條、第四十一條及第四十三條ニ違背シタル者ハ拾四以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十五條　第三十三條第三項、第三十八條若クハ第三十九條ニ違背シタル者ハ貳圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十六條　第三十七條若クハ第四十二條ニ違背シタル者ハ五圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第四十七條　本規則ハ發布ノ日ヨリ施行ス但シ本規則第六條、第二十八條第三項及第四十二條ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

第四十八條　本規則施行以前ニ製作シタル鏈狀度器ノ檢定ニ付テハ明治三十年八月三十一日マテ、明治二十四年度量衡器官令第十一號ヲ適用ス

第四十九條　本規則發布以前度量衡器ノ製作、修覆者ハ輸入販賣ノ免許ヲ受クタル者ハ明治三十年八月三十一日マテニ本規則第三十六條ニ依リ其ノ記號ヲ届出ベシ

●度量衡器ノ制限、其製作、修覆及販賣ノ免許並檢定ニ關スル件（勅令第三十四號）

明治三十年四月勅令第百十六號

度量衡器ノ制限、其ノ製作、修覆及販賣ノ免許並檢定ニ關スル件ヲ左ノ如シ（三十一年勅令第三百二十六號ヲ以テ度量衡器ノ誤中改正）

第一條　度量衡器ノ種類、形狀及物質ヲ定ムルコトヲ農商務ノ請中改正）

度器					
形狀	物質	種類			
直形	金圓、象牙、骨、竹、木	直尺	十二尺以下	四「メートル」以下	
		折尺	三尺以下		
直角形	金圓	曲尺	長枝三尺以下	長枝一「メートル」以下	
連接直形	金圓、象牙、骨、竹、木	長尺	十五尺以下	五「メートル」以下	
		折尺	三尺以下		
細帶	金圓、象牙、	卷尺	百五十尺以下	五十「メートル」以下	
鏈狀	金圓	巻尺	十八尺	五「メートル」	
			三十尺	十「メートル」	
			六十尺	二十「メートル」	
	麻布、	尺巻	六尺以下		

度器							
秤							
形狀	物質	種類	寸法	容積	種類	寸法	容積
圓形	金	一匁	四・七四五	六立方分・三三	一「センチグラム」	一「デシメートル」立方分	〇・〇一
		二匁	九・三六	一二立方分・五四	二「センチグラム」	三・四	〇・〇二
		五匁	一二・三	三四立方分・一三五	五「センチグラム」	三・七	〇・〇五
		一合	一六・〇四	六四立方分・七〇	一「デシグラム」	五・九	〇・一〇
		二合	二〇・二一	一二六立方分・四〇	二「デシグラム」	八・〇	〇・二〇
		五合	二五・四三	二四立方分・一三五	五「デシグラム」	六・三	〇・五〇
	銅	五匁	一六・〇四	三四立方分・一三五	一「グラム」	六・〇	一・〇〇
		一合	二〇・二一	六四立方分・七〇	二「グラム」	一〇・四	二・〇〇
		二合	二五・四三	一二六立方分・四〇	五「グラム」	一六・三	五・〇〇
		五合	三二・四六	二四立方分・一三五	十「グラム」	三二・五	一〇・〇〇
		一升	四〇・五六	六四立方分・七〇	二十「グラム」	六四・一	二〇・〇〇
		二升	五〇・八六	一二六立方分・四〇	五十「グラム」	一二六・四	五〇・〇〇
		五升	七四・四五	二四立方分・一三五	十「グラム」	二五四・五	一〇〇・〇〇
		一斗	九三・八〇	六四立方分・七〇	二十「グラム」	五〇八・一	二〇〇・〇〇
塔形	真鍮、	一匁	四・七四五	六四立方分・七〇	一「センチグラム」	一・二四五	〇・〇一
		二匁	九・三六	一二六立方分・四〇	二「センチグラム」	三・四	〇・〇二
		五匁	一二・三	二四立方分・一三五	五「センチグラム」	三・七	〇・〇五
		一合	一六・〇四	六四立方分・七〇	一「デシグラム」	五・九	〇・一〇
		二合	二〇・二一	一二六立方分・四〇	二「デシグラム」	八・〇	〇・二〇
		五合	二五・四三	二四立方分・一三五	五「デシグラム」	六・三	〇・五〇
	鐵	五匁	一六・〇四	三四立方分・一三五	一「グラム」	六・〇	一・〇〇
		一合	二〇・二一	六四立方分・七〇	二「グラム」	一〇・四	二・〇〇
		二合	二五・四三	一二六立方分・四〇	五「グラム」	一六・三	五・〇〇
		五合	三二・四六	二四立方分・一三五	十「グラム」	三二・五	一〇・〇〇
		一升	四〇・五六	六四立方分・七〇	二十「グラム」	六四・一	二〇・〇〇
		二升	五〇・八六	一二六立方分・四〇	五十「グラム」	一二六・四	五〇・〇〇
		五升	七四・四五	二四立方分・一三五	十「グラム」	二五四・五	一〇〇・〇〇
		一斗	九三・八〇	六四立方分・七〇	二十「グラム」	五〇八・一	二〇〇・〇〇
錘形	真鍮、	一匁	四・七四五	六四立方分・七〇	一「センチグラム」	一・二四五	〇・〇一
		二匁	九・三六	一二六立方分・四〇	二「センチグラム」	三・四	〇・〇二
		五匁	一二・三	二四立方分・一三五	五「センチグラム」	三・七	〇・〇五
		一合	一六・〇四	六四立方分・七〇	一「デシグラム」	五・九	〇・一〇
		二合	二〇・二一	一二六立方分・四〇	二「デシグラム」	八・〇	〇・二〇
		五合	二五・四三	二四立方分・一三五	五「デシグラム」	六・三	〇・五〇
	鐵	五匁	一六・〇四	三四立方分・一三五	一「グラム」	六・〇	一・〇〇
		一合	二〇・二一	六四立方分・七〇	二「グラム」	一〇・四	二・〇〇
		二合	二五・四三	一二六立方分・四〇	五「グラム」	一六・三	五・〇〇
		五合	三二・四六	二四立方分・一三五	十「グラム」	三二・五	一〇・〇〇
		一升	四〇・五六	六四立方分・七〇	二十「グラム」	六四・一	二〇・〇〇
		二升	五〇・八六	一二六立方分・四〇	五十「グラム」	一二六・四	五〇・〇〇
		五升	七四・四五	二四立方分・一三五	十「グラム」	二五四・五	一〇〇・〇〇
		一斗	九三・八〇	六四立方分・七〇	二十「グラム」	五〇八・一	二〇〇・〇〇
形圓及形塔圓錐	瓦	一匁	徑四・七四五	六四立方分・七〇	一「センチグラム」	徑一・二四五	〇・〇一
		二匁	同	一二六立方分・四〇	二「センチグラム」	同	〇・〇二
		五匁	同	二四立方分・一三五	五「センチグラム」	同	〇・〇五
		一合	同	六四立方分・七〇	一「デシグラム」	同	〇・一〇
		二合	同	一二六立方分・四〇	二「デシグラム」	同	〇・二〇
		五合	同	二四立方分・一三五	五「デシグラム」	同	〇・五〇
		一合	同	三四立方分・一三五	一「グラム」	同	一・〇〇
		二合	同	六四立方分・七〇	二「グラム」	同	二・〇〇
		五合	同	一二六立方分・四〇	五「グラム」	同	五・〇〇
		一升	同	二四立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇・〇〇
		二升	同	四六立方分・七〇	二十「グラム」	同	二〇・〇〇
		五升	同	一〇二立方分・四〇	五十「グラム」	同	五〇・〇〇
		一斗	同	二〇四立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇〇・〇〇
		二斗	同	四〇八立方分・七〇	二十「グラム」	同	二〇〇・〇〇
		五斗	同	一〇二〇立方分・四〇	五十「グラム」	同	五〇〇・〇〇
		一石	同	二〇四〇立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇〇〇・〇〇
	瓦	一匁	徑四・七四五	六四立方分・七〇	一「センチグラム」	徑一・二四五	〇・〇一
		二匁	同	一二六立方分・四〇	二「センチグラム」	同	〇・〇二
		五匁	同	二四立方分・一三五	五「センチグラム」	同	〇・〇五
		一合	同	六四立方分・七〇	一「デシグラム」	同	〇・一〇
		二合	同	一二六立方分・四〇	二「デシグラム」	同	〇・二〇
		五合	同	二四立方分・一三五	五「デシグラム」	同	〇・五〇
		一合	同	三四立方分・一三五	一「グラム」	同	一・〇〇
		二合	同	六四立方分・七〇	二「グラム」	同	二・〇〇
		五合	同	一二六立方分・四〇	五「グラム」	同	五・〇〇
		一升	同	二四立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇・〇〇
		二升	同	四六立方分・七〇	二十「グラム」	同	二〇・〇〇
		五升	同	一〇二立方分・四〇	五十「グラム」	同	五〇・〇〇
		一斗	同	二〇四立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇〇・〇〇
		二斗	同	四〇八立方分・七〇	二十「グラム」	同	二〇〇・〇〇
		五斗	同	一〇二〇立方分・四〇	五十「グラム」	同	五〇〇・〇〇
		一石	同	二〇四〇立方分・一三五	十「グラム」	同	一〇〇〇・〇〇

形	方	銀笛	一升	同	六〇〇・〇〇	二「リットル」同	二・〇〇
	桝	五勺	六・〇〇	三四一・三五			
		一合	二一・〇〇	六四二・七〇			
		二合	二六・六六	一二五六・四〇			
		二五勺合	三〇・三〇	一三〇六・七五			
		五合	三九・三〇	二四一三・三〇			
		一舛	四九・〇〇	六〇二・〇〇			
		二舛	六一・七四	一二五三四・〇〇			
		五舛	七三・四〇	三四一三・〇〇			
		一斗	一〇九・〇〇	六〇二〇・〇〇			
	松姫、子						

斗概

形狀	物質	種類		寸法	
形	木	小	自五勺　至二合五勺	四 七分	五寸 至自三〇〇分
			自一「デシリットル」　至五「デシリットル」		
		中	自五合　至二舛	一〇	至自六〇五
			自一「リットル」　至五「リットル」		
		大	五舛　一斗	二〇	一三〇
			十「リットル」　二十「リットル」		
筒					
復器					
分銅					

形狀	物質	種類					
形	銅、銀、白金、アルミニュム、白鑞、錫、洋銀	五分	一匁	二匁	一「グラム」	二「グラム」	五「グラム」
筒		五匁	十匁	二十匁	十「グラム」	二十「グラム」	五十「グラム」
及		五十匁	百匁	二百匁	百「グラム」	二百「グラム」	五百「グラム」
形		五百匁	一瓩	二瓩	一「キログラム」	二「キログラム」	五「キログラム」
蹄	鐵、鋼、真鍮、錫、青銅（ヲ末十匁及五除滿ジクハラムニ鐵）	五瓩			十「キログラム」	二十「キログラム」	
形	同（除鐵クヲ）	一毛	二毛	五毛	一「ミリグラム」	二「ミリグラム」	五「ミリグラム」
狀		一厘	二厘	五厘	一「センチグラム」	二「センチグラム」	五「センチグラム」
		一分	二分		一「デシグラム」	二「デシグラム」	五「デシグラム」

秤

物質	種類
金圓	天秤
金圓	盤秤
金圓、銀、半、鼎、樽、桶、鑑、鑑	桿秤

第二條　檢査ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ明治三十二年ニ之ヲ檢定シ爾後五年目毎ニ之ヲ檢定ス

第三條　度量衡器ノ公差ヲ定ムルコト左ノ如シ（三十一年勅令第三百二十六號改正ニ依ル）

但シ分銅ハ內減ヲ許サス

度器ノ公差					
金圓製度器					
全長	目盛	全長	目盛	全長	目盛
三尺以下	一〇・〇瓩	五厘以上 二・〇瓩		一「メートル」以下 三・〇	一「ミリメートル」以上 〇・三
六尺以下	二〇・〇			二「メートル」以下 七・〇	
十尺以下	二五・〇			五「メートル」以下 一一・〇	五「ミリメートル」以上 一・〇
十二尺以下	三〇・〇	一寸以上 二〇・〇			
十八尺以下	四〇・〇				
三十尺以下	六〇・〇	一寸以上 二〇・〇		十「メートル」以下 二〇・〇	上ヲ五「センチメートル」以上 五・〇
六十尺以下	一一五・〇			二十「メートル」以下 三五・〇	
以六十六尺下	二二〇・〇			三十「メートル」以下 五五・〇	
九十尺以下	二六〇・〇			四十「メートル」以下 七五・〇	
百尺以下	二八〇・〇	一尺以上 五〇・〇			
以百二十尺下	二四〇・〇				
以百五十尺下	三〇〇・〇			以下五十「メートル」 一〇〇・〇	
以縣以下三尺	一〇・〇瓩		三瓩・〇		
以縣以下六尺	二〇・〇				

度器容量、水重及寸法ノ公差

容量ノ公差

木製鐵製製及二升又ハ五「リットル」以上ノ金圓製度器	一合又ハ二「デシリットル」以下	全量ノ百分ノ一
	二升又ハ五「リットル」以下	全量ノ百五十分ノ一
	一斗又ハ二十「リットル」以下	全量ノ二百分ノ一

全長	目盛	全長	目盛
一尺未滿	一・〇瓩	〇・五	〇・二
二尺以上	一・五	〇・八	〇・二
五尺以上	三・〇	一・五	〇・三
十二尺以上	五・〇	二・五	〇・三
十五尺以下	一〇・〇	五・〇	〇・三
縣尺二尺未滿	二・〇瓩	一・〇瓩	
縣尺三尺以下	四・〇	二・〇	一・五

竹、木、骨、銀、製度器

全長	目盛	全長	目盛
一尺未滿	一・〇瓩	〇・五瓩	〇・二
二尺以上	一・五	〇・八	〇・二
五尺以上	三・〇	一・五	〇・三
十二尺以上	五・〇	二・五	〇・三
十五尺以下	一〇・〇	五・〇	〇・三
縣尺二尺未滿	二・〇瓩	一・〇瓩	
縣尺三尺以下	四・〇	二・〇	一・五

革、麻布製度器

玻璃製度器	各目盛		其容量ノ百分ノ一
水重一斗及二「リットル」以下ノ全層製度器ノ公差			
一勺	〇・〇五	一「センチリットル」	〇・一「グラム」
二勺	〇・〇五	二「センチリットル」	〇・二
五勺	〇・一〇	五「センチリットル」	〇・三
一合	〇・二〇	一「デシリットル」	〇・五
二合	一・〇〇	二「デシリットル」	一・〇
二合五勺	一・〇〇	五「デシリットル」	四・〇
五合	一・五〇	一「リットル」	四・〇
一・斗	二・〇〇	二「リットル」	五・〇
寸法ノ公差			

枡（玻璃製ノモノヲ除ク）ノ徑及力		
	一升以下	〇・一
	二升以上	〇・二
	二「リットル」以下	〇・三「ミリメートル」
	五「リットル」以上	〇・八
寸法ノ長サ（中及小ノモノヲ除ク）及徑		一・〇
衡器ノ公差		
分銅五分	〇・〇五	分銅一「グラム」以上五「グラム」マテ 〇・〇一
分銅五「グラム」以上一「グラム」マテ	〇・〇一〇	
分銅十「グラム」以上	全重ノ千分ノ一	
分銅五「グラム」未滿	全重ノ百分ノ一	
目盛	一度目ノ二分ノ一ニ相當スル重サ	

第四條　檢定スベキ度器、玻璃製度器ノ目盛及分銅ノ最小定限ヲ定ムルコト左ノ如シ

度器ノ目盛

五厘　（一尺以下ノ度器）

一分　（十尺未滿ノ度器）

一寸　（十尺以上ノ度器）

鯨尺一分　（各種鯨尺度器）

一「ミリメートル」

（一「メートル」以下ノ度器）

五「ミリメートル」

（五「メートル」未滿ノ度器）

五「センチメートル」

（五「メートル」以上ノ度器）

玻璃製度器ノ目盛

全重ノ十分ノ一

分銅

一厘

一「センチグラム」

第五條　度量衡器ノ製作、修理又ハ販賣ノ免許年限ハ十五箇年トス

第六條　度量衡器ノ製作、修理又ハ販賣ヲ願出ル者ハ其ノ願書ニ左ノ事項ヲ詳記シタル機業ノ設計書ヲ添ヘ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ差出スベシ

製作、修理ヲ願出ル者

一　製作場、修理場ノ位置及構造

二　製作、修理セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質

三　資本金

四　製作、修理ニ使用スベキ技師、職工ノ員數及其ノ職業別並ニ諸器械ノ種類

販賣ヲ願出ル者及製作者ニシテ販賣ヲ兼ネスル者

一　販賣所ノ位置及構造

二　販賣セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質

三　資本金

農商務大臣前項機業ノ設計ヲ不適當ト認ムルトキハ其ノ願書ヲ却下スベシ

第七條　度量衡器ノ製作、修理又ハ販賣ノ免許ヲ受クタル者其ノ機業ノ設計ヲ變更セントスルトキハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第八條　度量衡器ノ製作、修理又ハ販賣ノ免許ヲ受クル者ハ左ノ免許料ヲ納ムベシ

度器、量器又ハ衡器ノ製作	金十五圓
度器、量器又ハ衡器ノ修理	金十二圓
度器、量器又ハ衡器ノ販賣	金五圓

第九條　度量衡器ノ檢定ヲ受クル者ハ左ノ檢定料ヲ納ムベシ（三十一年勅令第三百二十六號ヲ以テ衡器ノ部改正）

二段以上目盛シタル度器ハ一段毎ニ其ノ檢定料ヲ納ムベシ但シ曲リ尺ニシテ尺及「メートル」ヲ合セ盛フタルモノハ此ノ限ニアラズ

秤及定秤ニシテ其ノ目盛ヲ「キログラム」シタルモノハ其ノ目盛毎ニ檢定料ヲ納ムベシ

檢定料	
度器	
竹、木、骨、象、牙、革、麻	
一尺以下（一分目）	〇・五「銭」
一尺以下（五厘目）	一・〇
三尺以下（一分以上ノ目）	一・〇
十八尺以下	四・〇
三十尺以下	八・〇
六十尺以下	一五・〇
百尺以下	二五・〇
百五十尺以下	三五・〇
半「メートル」以下	二・五
一「メートル」以下	四・〇
五「メートル」以下	五・〇
十「メートル」以下	一〇・〇
二十「メートル」以下	二〇・〇
三十「メートル」以下	三〇・〇
五十「メートル」以下	四〇・〇
布	
鯨尺二尺未滿	〇・五
鯨尺三尺以下	一・〇
鯨尺六尺以下	四・〇
金	
三尺以下	二・五
十八尺以下	五・〇
六十尺以下	二五・〇
百尺以下	五〇・〇
百五十尺以下	八〇・〇
曲リ尺長枝二尺以下	三・五
曲リ尺長枝三尺以下	五・〇
曲リ尺長枝半「メートル」以下	六・〇
曲リ尺長枝一「メートル」以下	八・〇
半「メートル」以下	五・〇
一「メートル」以下	六・〇
五「メートル」以下	七・五
二十「メートル」以下	三五・〇
三十「メートル」以下	五〇・〇

罐	五十「メートル」以下	八〇・〇
	鯨尺三尺以下	二・五
	鯨尺六尺以下	五・〇
直器		
銀杏、樽、松姫、子、觀桑	二合五勺以下	一・〇
	二升以下	二・〇
	五升	三・五
	一斗	五・〇
	五「デシリットル」以下	一・五
	二「リットル」以下	二・〇
	五「リットル」	三・〇
	十「リットル」	四・〇
	二十「リットル」	六・〇
クヲ鐵除鐵	二合五勺以下	三・〇
	一升以下	四・〇
	二升	三・〇
	五升	五・〇
	一斗	七・五
	五「デシリットル」以下	三・五
	二「リットル」以下	五・〇
瓶	五「リットル」	四・〇
	十「リットル」	六・〇
	二十「リットル」	八・〇
汁椀	各種	〇・五
衡器		
分銅	五分未滿　一組（分銅ノ數八箇以下）	一五・〇
	五分未滿　一箇	四・〇
	二十匁以下　一組（分銅ノ數八箇以下）	八・〇
	五百匁以下　一組（分銅ノ數十三箇以下）	一五・〇
	五百匁以下　一箇	二・〇
	一貫以上　一箇	五・〇
	一「グラム」未滿　一組（分銅ノ數九箇以下）	一五・〇
	一「グラム」未滿　一箇	四・〇
	五十「グラム」以下　一組（分銅ノ數八箇以下）	八・〇
	一「キログラム」以下　一組（分銅ノ數十三箇以下）	一五・〇
	一「キログラム」以下　一箇	二・〇
	二「キログラム」以上　一箇	五・〇
天秤	一貫又ハ五「キログラム」未滿ヲ量スルモノ	五〇・〇
	其ノ他ノモノ	二〇・〇
	五十貫以下	五〇・〇

秤	百五十貫以下	一〇〇・〇
	以上百貫マテヲ增ス毎ニ五十錢ヲ加フ	
	二百「キログラム」以下	五〇・〇
	五百「キログラム」以下	一〇〇・〇
	以上三百「キログラム」マテヲ增ス毎ニ五十錢ヲ加フ	
	二貫以下	
秤	二貫ヲ超ク十貫未滿	一〇・〇
	十貫以上三十貫マテ	二〇・〇
	以上十貫マテヲ增ス毎ニ五錢ヲ加フ	
	七「キログラム」以下	八・〇
	七「キログラム」ヲ超ク百「キログラム」マテ	二〇・〇
	以上十「キログラム」マテヲ增ス毎ニ五錢ヲ加フ	

第十條　第八條ノ免許料及第九條ノ檢定料ハ、登記印紙ヲ以テ納ムベシ（三十一年勅令第百四十號ニ依リ收入印紙ヲ用ユルコトト改ム）

第十一條　度量衡器ノ製作、修繕又ハ販賣ノ免許ヲ受クベキ者ハ左ノ身元保證金ヲ納ムベシ（三十一年勅令第三百二十六號改正ニ依ル）

度器製作	金三百圓
量器製作	金三百圓
衡器製作	金五百圓
但シ秤ノミノ製作ハ金三百圓トス	
度量衡器修繕	金二百圓

度量衡器販賣

附則

第十二條　本令ハ明治三十年五月一日ヨリ施行ス

但シ本令第一條中度器ノ形狀、物質、種類、寸法、容積、第三條中量器ノ容積、寸法ノ公差及第四條中秤製造器ノ目盛ノ最小定限ニ關スル規程ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

第十三條　本令施行以前檢定ヲ受クベキ度器、量器ノ檢定ニ付テハ明治三十五年十二月三十一日マテ明治二十四年勅令第百七十七號ノ規程ヲ適用ス

○勅令　第明治二十四年八月

朕度量衡器ノ制度、其ノ製作、修繕及販賣ノ免許其ノ檢定ニ關スル規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム第一條　度量衡器ノ種類、形狀及物質ヲ定ムルコト左ノ如シ（二十八年勅令第六號ヲ以テ細帶狀ノ關改正）

金百圓

度器

形狀	物質	種類			
直形	骨角、竹、木、金屬、柔、牙	直尺	七尺以下	二「メートル」以下	
		鯨尺	一尺	二尺	三尺
直角形	金屬	尺曲リ	長枝二尺以下		
直線形接連	骨角、竹、木、金屬、柔、牙	經尺	十五尺以下	五「メートル」以下	
細帶狀	布、金屬、柔、麻	卷尺	百尺以下	三十「メートル」以下	

量器

形狀	物質	種類	寸法	容積	種類	寸法	容積
		一勺	直徑七分四厘	六立方分二毛	一「センチリットル」	直徑一「メートル」五分	〇・〇一

鍵狀金屬

鍵尺	十八尺	五「メートル」
	三十尺	十「メートル」
	六十尺	二十「メートル」

圓	金圓	二匁五分	九貫五百	二「キログラム」	三百匁	〇、〇二
		二匁五分	二貫七百	五「グラム」	三百七十匁	〇、〇五
		一匁	三貫七百五十匁	一「グラム」	五百匁	〇、一〇
		二匁	七貫五百匁	二「グラム」	一千匁	〇、二〇
		二匁五分	九貫三百七十五匁	二「グラム」	一千二百五十匁	〇、二五
		五匁	一六貫五百匁	五「グラム」	二千匁	〇、五〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
	銀幣	五匁	一六貫五百匁	一「グラム」	二千匁	〇、五〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		二〇匁	六六貫五百匁	二「キログラム」	七千五百匁	二、〇〇
		五〇匁	一六六貫五百匁	五「キログラム」	一万七千五百匁	五、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
	白銅幣	五匁	一六貫五百匁	一「グラム」	二千匁	〇、五〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	一、〇〇
		二〇匁	六六貫五百匁	二「キログラム」	七千五百匁	二、〇〇
		五〇匁	一六六貫五百匁	五「キログラム」	一万七千五百匁	五、〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇
	銅幣	一匁	三貫七百五十匁	一「グラム」	三百七十五匁	〇、〇一
		二匁	七貫五百匁	二「グラム」	一千匁	〇、〇二
		二匁五分	九貫三百七十五匁	二「グラム」	一千二百五十匁	〇、〇二五
		五匁	一六貫五百匁	五「グラム」	二千匁	〇、〇五〇
		一〇匁	三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三千七百五十匁	〇、一〇〇
		二〇匁	六六貫五百匁	二「キログラム」	七千五百匁	〇、二〇〇
		五〇匁	一六六貫五百匁	五「キログラム」	一万七千五百匁	〇、五〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一、〇〇〇
形	松姫子	五合	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		一升	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		二升	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		五升	七貫五百匁	七百五十匁	二「グラム」	二千匁	〇、一〇〇
		一斗	九貫七百五十匁	九百七十五匁	二「グラム」	二千匁	〇、二〇〇
	銀幣	五合	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		一升	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		二升	三貫七百五十匁	三百七十五匁	一「グラム」	一千匁	〇、〇五〇
		五升	七貫五百匁	七百五十匁	二「グラム」	二千匁	〇、一〇〇
		一斗	九貫七百五十匁	九百七十五匁	二「グラム」	二千匁	〇、二〇〇
方	銀幣	五匁	一六貫五百匁	三百七十五匁	一「グラム」	二千匁	〇、五〇〇
	銅幣	一〇匁	三三貫七百五十匁	七百五十匁	二「グラム」	七千五百匁	二、〇〇〇
		二〇匁	六六貫五百匁	一千五百匁	三「グラム」	一万七千五百匁	五、〇〇〇
		五〇匁	一六六貫五百匁	三千七百五十匁	一「キログラム」	三万七千五百匁	一〇、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	七千五百匁	二「キログラム」	七万七千五百匁	二〇、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	七千五百匁	二「キログラム」	七万七千五百匁	二〇、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	七千五百匁	二「キログラム」	七万七千五百匁	二〇、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	七千五百匁	二「キログラム」	七万七千五百匁	二〇、〇〇〇
		一〇〇匁	三三三貫七百五十匁	七千五百匁	二「キログラム」	七万七千五百匁	二〇、〇〇〇

斗桝

形狀	物質	種類	寸法
圓形	木材	小 自五勺 至二合五勺	七分 四〇分
		小 自二「デシリットル」 至五「デシリットル」	
		中 自五合 至二升	一〇′ 七〇′
		中 自一「リットル」 至五「リットル」	
		大 五升 一斗	二〇′ 一三〇′
		大 十「リットル」 二十「リットル」	

御器

分銅

形狀	物質	種類					
形	白金、金、銀、銅、真鍮、白鋼、洋銀（未滿十匁ハ除錆ヲ以テ五匁以上ハ除錆ヲ以テ鐵）	五分	一匁	二匁	一「グラム」	二「グラム」	五「グラム」
		五匁	十匁	二十匁	十「グラム」	二十「グラム」	五十「グラム」
		五匁	十匁	二十匁	百「グラム」	二百「グラム」	五百「グラム」
		五匁	一貫	二貫	一「キログラム」	二「キログラム」	五「キログラム」
		五貫			十「キログラム」	二十「キログラム」	
線狀	同（除鐵ヲ以テ）	一毛	二毛	五毛	一「ミリグラム」	二「ミリグラム」	五「ミリグラム」
		一厘	二厘	五厘	一「センチグラム」	二「センチグラム」	五「センチグラム」
		一分	二分		一「デシグラム」	二「デシグラム」	五「デシグラム」

秤

度量衡公差

全長		金圓製	象牙、木、竹、骨製	全長	金圓製	象牙、木、竹、骨製
一尺	未滿	〇、五四〇	一、四〇	五「デシメートル」未滿	〇、二一	〇、二一
二尺	未滿	〇、七五	一、五	二「デシメートル」以上	〇、三	〇、五
二尺五尺	未滿	一、五〇	三、〇	二「メートル」以上	〇、七	一、五
十二尺	以下	五、〇〇	五、〇	五「メートル」以下	二、五	三、〇
十八尺	以下	一〇、〇〇	一〇、〇	十「メートル」以上	全長ノ千分ノ	
三十尺	以上	全長ノ千分ノ				
鯨尺	二尺	二、〇〇	二、〇			
	三尺	四、〇〇	四、〇			

全長	芯及麻布	全長	芯及麻布
三尺以下	一分、〇	十二尺以下	三分、〇
六尺以下	二、〇	十八尺以下	四、〇

物質

物質	種類
金圓	天秤
金圓	棹秤
金圓、象牙、骨、黑檀、紫檀、樫	桿秤

第一條　繁榮ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ明治三十二年ニ之ヲ檢定シ爾後五年目毎ニ之ヲ檢定ス

第二條　度量衡器ノ公差ヲ左ノ如シ（二十八年勅令第六號ヲ以テ度器公差ノ表ノ末尾ニ一表ヲ追加ス）

但シ分銅ハ內減ヲ許サス

十尺以下	二、五	三十尺以下	六、〇
六十尺以下	一一、五	二「メートル」以下	七、〇
六十六尺以下	一二、〇	五「メートル」以下	一一、〇
九十尺以下	一六、〇	十「メートル」以下	二〇、〇
百尺以下	一八、〇	二十「メートル」以下	三五、〇
一「メートル」以下	「ミリメートル」三〇、〇	三十「メートル」以下	五五、〇

量器容量及寸法ノ公差

量器（各種ノ「リットル」以上ノ木製、鐵製又ハ二升又ハ金屬製ノモノ）ノ容量		全量ノ百五十分ノ一
量器（ノ硝子製ノモノ除ク）ノ徑及厚	一升以下	一厘
	二升以上	二厘
	二「リットル」以下	〇、三「ミリメートル」
	五「リットル」以上	〇、八「ミリメートル」
各種寸法ノ徑及長サ		一分

量器（鐵製及二「リットル」以下ノモノ一升ノ外他ノ金屬製ノモノ）ノ水重ノ公差

一合	〇、〇五「グラム」	一「センチリットル」	〇、〇一「グラム」
二合	〇、〇五	二「センチリットル」	〇、一二
五合	〇、一〇	五「センチリットル」	〇、二五
一合	〇、二〇	一「デシリットル」	〇、五

二合	一、〇〇	二「デシリットル」	一、〇
二合五勺	一、〇〇	五「デシリットル」	四、〇
五合	一、五〇	一「リットル」	四、〇
一升	二、〇〇	二「リットル」	五、〇

量器（硝子製ノモノ）ノ水重ノ公差

五勺	〇、〇三「グラム」	一「デシリットル」	〇、一「グラム」
一合	〇、〇五	二「デシリットル」	二、〇
二合	一、〇	五「デシリットル」	五、〇
二合五勺	一、二	一「リットル」	七、〇
五合	一、五	二「リットル」	一二、〇
一升	三、〇		

衡器ノ公差

分銅五分	〇、〇〇五「グラム」	分銅一「グラム」以上五「グラム」ニ未満	〇、〇一「グラム」
分銅一「グラム」以上五「グラム」未満	〇、〇一〇		
分銅十「グラム」以上	全重ノ千分ノ一		
分銅一「グラム」未満	全重ノ百分ノ一		
目盛	一度目ノ二分ノ一ニ相當スル重サ		

第四條　度器ノ各目盛ノ公差ハ前項定限ノ二分ノ一トス

度器ノ各目盛ノ公差ハ前項定限ノ二分ノ一トスヘキモ他ノ目盛ヲ檢定セサル度器ノ目盛及分銅ノ最小定限ヲ定ムルコトヲ左ノ如シ但シ量器ハ其ノ全量ノ外

度器ノ目盛

五厘（一尺以下ノ度器）

一分（十尺未滿ノ度器）

一寸（十尺以上ノ度器）

鯨尺一分（各種鯨尺度器）

第五條　度量衡器ノ製作、修繕又ハ販賣ノ免許年限ハ十五箇年トス

第六條　度量衡器ノ製作、修繕又ハ販賣ヲ願出ル者ハ其ノ願書ニ左ノ事項ヲ詳記シ所轄ノ役所ヲ經由シ度量衡大臣ニ差出スヘシ

一「ミリメートル」（一「メートル」以下ノ度器）

五「ミリメートル」（五「メートル」未滿ノ度器）

五「センチメートル」（五「メートル」以上ノ度器）

分銅

一厘

一「センチグラム」

製作、修繕ヲ願出ル者

一製作場、修繕場ノ位置及構造

二製作、修繕セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質

三資本金

四製作、修繕ニ使用スヘキ技師、職工ノ員數及其ノ職業別並ニ勤務場ノ種類

販賣ヲ願出ル者及製作者ニシテ販賣ヲ業スル者

一販賣所ノ位置及構造

二販賣セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質

三資本金

四販賣セントスル度量衡器ノ製作者、修繕者又ハ輸入者ノ住所、姓名及營業所

農商務大臣前項營業ノ設計ヲ不適當ト認ムルトキハ其ノ所示ニ拘下スヘシ

第七條　度量衡器ノ製作、修繕又ハ販賣ノ免許ヲ受ケル者其ノ營業ノ設計ヲ變更セントスル時ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條　度量衡器ノ製作、修繕又ハ販賣ノ免許ヲ受クル者ハ左ノ免許料ヲ納ムヘシ

度器、量器又ハ衡器ノ製作	金拾圓
度器、量器又ハ衡器ノ修繕	金拾圓
度器、量器又ハ衡器ノ販賣	金五圓

第九條　度量衡器ノ檢定ヲ受クルモノハ左ノ檢定料ヲ納ムヘシ（二十八年勅令第六號ヲ以テ裏中度器ノ部改正）

二段以上目盛シタル度器ハ一段毎ニ其ノ檢定料ヲ納ムヘシ

檢定料		
度器		
象牙、竹、木、骨	一尺以下（一分目）	〇、五圓
	一尺以下（五厘目）	一、〇
	三尺以下（一分以上、目）	一、〇
	十八尺以下	四、〇
	三十尺以下	八、〇
	六十尺以下	一五、〇
	百尺以下	二五、〇
	半「メートル」以下	二、五
布、麻、革、牙	一「メートル」以下	四、〇
	五「メートル」以下	五、〇
	十「メートル」以下	一〇、〇
	二十「メートル」以下	二〇、〇
	三十「メートル」以下	三〇、〇
	鯨尺一尺	〇、五
	鯨尺二尺	一、〇
	鯨尺三尺	一、〇
	一尺以下	二、五
	三尺以下	二、五

金	七尺以下	五〇
	十八尺以下	五〇
	六十尺以下	二五〇
	百尺以下	五〇〇
	曲リ尺各種	三五
圍	半「メートル」以下	五〇
	一「メートル」以下	六〇
	二「メートル」以下	七五
	五「メートル」以下	七五
	二十「メートル」以下	三五〇
	三十「メートル」以下	五〇〇
	鯨尺　一尺	二五
	鯨尺　二尺	二五
	鯨尺　三尺	二五
量器		
銀、桝、姫、鉢、子、杏、樽	二合五勺以下	一〇
	二升以下	二〇
	五升	三〇
	一斗	五〇
	二合五勺以下	三〇

瓶（ケ除テ式鍋）	一升以下	四〇
	二升	三〇
	五升	五〇
	一斗	七五
斗桝	各種	〇五
衡器		
分銅	五分未滿　一箇	四〇
	二十匁以下　一組（分銅ヘ數八箇以下）	八〇
	五百匁以下　一組（分銅ヘ數十三箇以下）	一五〇
	五百匁以下　一箇	二〇
	一貫以上　一箇	五〇
	一「グラム」未滿　一箇	四〇
	五十「グラム」以下　一組（分銅ヘ數八箇以下）	八〇
	一「キログラム」以下　一組（分銅ヘ數十三箇以下）	一五〇
	一「キログラム」以下　一箇	二〇
	二「キログラム」以上　一箇	五〇
天秤	一厘又ハ五「センチグラム」未滿ヲ感スルモノ	五〇〇
	其ノ他ノモノ	二〇〇
秤	五十貫以下	五〇〇
	百五十貫以下	一〇〇〇

秤	以上百貫マテニ增ス每ニ五錢ヲ加フ	
	二百「キログラム」以下	五〇〇
	五百「キログラム」以下	一〇〇〇
	以上三百「キログラム」マテニ增ス每ニ五錢ヲ加フ	
	二貫以下（目盛全指量ノ二百五十分ノ一ヨリ小ナルモノ）	四〇
	二貫以下（目盛全指量ノ二百五十分ノ一ヨリ小ナル）	八〇

桿秤	二貫ヲ超ク十貫未滿	一〇〇
	十貫以上三十貫マテ	二〇〇
	以上十貫マテニ增ス每ニ五錢ヲ加フ	
	七「キログラム」以下	八〇
	七「キログラム」ヲ超ク百「キログラム」マテ	二〇〇
	以上十「キログラム」マテニ增ス每ニ五錢ヲ加フ	

第十條　第八條ノ免許料及第九條ノ檢定料ハ登記印紙ヲ以テ納ムベシ（三十一年勅令第百四十號ヲ以テ收入印紙ヲ用ユルコトヽ改ム）

第十一條　度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ノ免許ヲ受ケタル者ハ左ノ費元條記金ヲ納ムベシ

度器製作	金三百圓
量器製作	金三百圓
衡器製作	
水材、銀、骨製桿秤、天秤、分銅、窪秤及金屬製桿秤	金三百圓
	金五百圓
度器修覆	金二百圓
量器修覆	金二百圓
衡器修覆	
水材、銀、骨製桿秤、天秤、分銅、窪秤及金屬製桿秤	金二百圓
	金三百圓
度器販賣	金百圓
衡器販賣	金百圓

❶度量衡ニ關スル免許料等ニ貼用ノ印紙消印ノ件（明治三十年勅令第九號）

度量衡器製作、修覆、販賣ノ免許料納入用紙ハ登記印紙ヲ貼用スル登記印紙ハ他顧者ヘ又ハ請求者ニ於テ消印ヲ爲サザル場合ニ於テ消印ヲ爲サザル旨認メタル後之ニ消印ヲ付スベシ

但消印ハ背紙ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニ渉ルヲ要ス

❷度量衡檢定、地方原器、檢定用具、檢定補助用具及度量衡檢定成績表ニ關スル規程（明治四十年勅令第三十五號）

度量衡檢定所、地方原器、檢定用具、檢定補助用具及度量衡檢定成績表ニ關スル規程左ノ通定ム

第一條　常設度量衡檢定所ハ火災ノ虞少ナク、氣溫ノ外成ルベク溫度ノ劇變ナキ乾燥靜穩ナル場所ヲ撰フベシ

第二條　特設度量衡檢定所ハ官廳公署其ノ他便宜ノ場所ヲ以テ之ニ充ツベシ

第三條　度量衡器ヲ檢定スル場所ハ濕氣少ク溫度ノ劇變、火災及塵埃ヲ避クベキ場所ニ堅牢ナル建ヲ搭ヘテ其ノ他ニ不便シテ保管スベシ

第四條　地方原器ハ濕氣少ク溫度ノ劇變、火災及塵埃ヲ避クベキ場所ニ堅牢ナル建ヲ搭ヘテ其ノ上ニ不便シテ保管スベシ

第五條　地方原器ヲ使用スルトキハ成ルベク其ノ保管シアル場所ニ於テシ且ツ直接ニ手ヲ觸レサル樣注意スベシ

第六條　地方長官ハ農商務大臣ノ指揮ニ從ヒ地方原器ノ檢定ヲ受クベシ但シ臨時檢定ヲ要スルトキハ其ノ事由ヲ具シテ農商務大臣ニ申請スベシ

第七條　農商務大臣ハ所錄第一號ノ檢定用具ヲ地方長官ニ交付スベシ

第八條　檢定用具ノ修補、引替若ハ增加ヲ要スルトキハ地方長官其ノ事由ヲ具シ農商務大臣ニ請求スベシ

第九條　地方長官ハ每年檢定用ニ供スル度量衡器ヲ檢定スベシ（三十年農商務省訓令第十八號改正ニ依ル）

第十條　地方長官ハ所錄第一號ニ掲クル度器檢定器若クハ量器檢定器ニ代用スベキ器具ニシテ他ノ農商務大臣ノ許可ヲ得テ特ニ之ヲ備フルコトヲ得（三十一年農商務省訓令第二十七號改正ニ依ル）

第十一條　地方長官ハ所錄第二號ノ檢定補助用具

ヲ備フヘシ

第十二條　地方長官ハ左ノ書式ニ依リ前年四月日ヨリ其ノ年三月ニ至ル一箇年間ノ度量衡檢定成績表及桿秤ノ取締、錘絲ニシテ金屬ニアラサルモノヽ修繕員數表ヲ調製シ毎年五月十日マテニ農商務大臣ニ報告スヘシ（三十年農商務省訓令第十八號改正ニ依ル）

（書式并ニ附錄圖式略ス）（三十年農商務省訓令第十八號、三十一年同省訓令第二十八號ヲ以テ書式及附錄中改正）

●度量衡檢定規程（明治三十年七月農商務省訓令第十九號）

明治二十五年（七月）農商務省訓令第二十二號度量衡檢定規程左ノ通改正ス

度量衡檢定規程

第一章　檢定

第一條　檢定スヘキ度量衡器ハ明治二十四年法律第三號度量衡法、明治三十年勅令第百十六號度量衡器ノ制限、其ノ製作、修繕及販賣ノ免許並其ノ檢定ニ關スル規則及明治三十年農商務省令第十一號度量衡法施行規則ノ規定ニ遵由シタルモノニ限ル

第二條　度量衡器ノ檢定ハ左ニ掲クル三回ノ檢査ヲ經ルヲ要ス

第一　度量衡器檢定請求書ノ當否ノ檢査

第二　度量衡器ノ種類形狀物質及構造ノ檢査

第三　度量衡器ノ目盛、量器ノ寸法、目盛及容量、衡器ノ感量、目盛及重量ノ檢査

第三條　第一回檢査ニ於テハ度量衡法第三條第四條第五條及度量衡法施行規則第二條ノ規定ニ照校シテ一ノ抵觸ナキモノヲ合格トシ其ノ他ハ不合格トス

第四條　第二回檢査ニ於テハ度量衡器ノ制限、其ノ製作、修繕及販賣ノ免許並其ノ檢定ニ關スル規則第一條及度量衡法施行規則第二章（第十八條及第二十一條ヲ除ク）ノ規定ニ照校シテ一ノ抵觸ナキモノヲ合格トシ其ノ他ハ不合格トス

第五條　第三回檢査ニ於テハ度量衡器ノ制限、其ノ製作、修繕及販賣ノ免許並其ノ檢定ニ關スル規則第三條第四條及本規程第二章ノ規定ニ照校シテ一ノ抵觸ナキモノヲ合格トシ其ノ他ハ不合格トス

第二章　檢査ノ方法

第六條　第二回以後ノ檢定ニ於テハ度量衡法施行規則第七條ノ場合ヲ除ク外左ニ掲クル各項ノ檢査ヲナスコトヲ要セス但特ニ必要ト認ムルトキハ此限ニアラス（三十一年農商務省令第二十八號ヲ以テ本條追加以下一條ヲ、縁下ク）

一　記號、年號、番號

二　量器ノ寸法

三　度量衡器ノ中間ノ目盛（盛リ直シノ場合ヲ除ク）

第七條　卷尺及鏈尺ヲ檢査スルニハ檢定用卷尺ヲ用ヰ其ノ他ノ度器ヲ檢査スルニハ檢定用直尺若クハ鯨尺ヲ用ヰルヘシ

第八條　檢定用直尺又ハ鯨尺ヲ用ヰルトキハ箱ノ儘度器檢定盤（第一圖）ノ後段「甲」「乙」ニ載セ盤縁ニ附シタル抑ヘ具「丙」「丁」「戊」ヲ以テ以其ノ移動ヲ防クヘシ

第九條　度器ノ目盛ヲ檢定スルニハ其ノ檢定スヘキ各最小目盛ヲ之ニ相當スル檢定用度器ノ目盛ニ對照スヘシ但シ割目ハ檢定用度器ノ目盛ニ相當スル目盛ニ限リ本項ヲ適用スヘシ

前項ノ場合ニ於テ受檢器ノ目盛線及文字ノ記入方ニ錯誤ナク且ツ兩度器ノ各目盛線互ニ並行シテ一致スルカ又ハ一致セサルモ其ノ差、公差以内ニ在ルモノヲ合格トスヘシ

一器ニ二段以上ノ目ヲ盛リタルモノハ其ノ一段毎ニ目盛ヲ檢査スルヲ要ス

第十條　度器ノ構造ニ因リ其目盛ヲ檢定用度器ノ目盛ト接合セシメ難キモノハ目渡シ器（第二圖）ヲ用ヰテ檢査スヘシ

第十一條　直尺又ハ鯨尺ノ全長及目盛ヲ檢定スルニハ受檢度器ヲ度器檢定盤ノ前段「己」「庚」ニ載セ其ノ構造ニ因リ載セ難キモノハ前段ノ上部ヲ撤去シ之ヲ其ノ下部「辛」「壬」ニ載セ其ノ目盛ヲ檢定用度器ノ目盛ト同シ高サニ於テ對照セシメ本條第二項若クハ第三項ノ手續ヲ行フヘシ但シ玉尺（球、圓壔等ノ經ヲ度ル直尺）ハ其ノ全長及目盛ヲ檢査シタル後更ニ第十一條ノ手續ニ依リ其ノ内直角ヲ檢査スルヲ要ス

受檢度器ノ全長檢定用度器ニ均シキ種類ノモノハ兩器ノ左方目盛ノ起線ヲ正シク合セ又受檢度器ノ全長檢定用度器ヨリ短キ種類ノモノハ受檢度器ノ左方目盛ノ起線ヲ檢定用度器ノ右方ヨリ數ヘタル受檢度器ノ全長相當ノ目盛線ニ正シク合セ受檢度器ノ目盛ヲ左方ヨリ右方ニ及ホシ逐次之ニ相當スル檢定用度器ノ目盛ニ對照シ又其ノ全長ヲ右端ノ目盛線ニ對照シテ其ノ差ヲ視定シ之ヲ目盛及全長ノ公差ニ照校スヘシ

受檢度器ノ全長檢定用度器ヨリ長キ種類ノモノハ檢定用度器ニ相當スル長サ毎ニ及其ノ殘餘ノ部分ニ就キ前項ノ手續ヲ行ヒ毎次視定シタル差ニ對照スヘシ但シ割目ハ檢定用度器ノ目盛ニ相當スル目盛ニ限リ本項ヲ適用スヘシ

前項ノ場合ニ於テ受檢器ノ目盛線及文字ノ記入方ニ錯誤ナク且ツ兩度器ノ各目盛線互ニ並行シテ一致スルカ又ハ一致セサルモ其ノ差、公差以内ニ在ルモノヲ合格トスヘシ

一器ニ二段以上ノ目ヲ盛リタルモノハ其ノ一段毎ニ目盛ヲ檢査スルヲ要ス

第十條　度器ノ構造ニ因リ其目盛ヲ檢定用度器ノ目盛ト接合セシメ難キモノハ目渡シ器（第二圖）ヲ用ヰテ檢査スヘシ

第十一條　直尺又ハ鯨尺ノ全長及目盛ヲ檢定スルニハ受檢度器ヲ度器檢定盤ノ前段「己」「庚」ニ載セ其ノ構造ニ因リ載セ難キモノハ前段ノ上部ヲ撤去シ之ヲ其ノ下部「辛」「壬」ニ載セ其ノ目盛ヲ檢定用度器ノ目盛ト同シ高サニ於テ對照セシメ本條第二項若クハ第三項ノ手續ヲ行フヘシ但シ玉尺（球、圓壔等ノ經ヲ度ル直尺）ハ其ノ全長及目盛ヲ檢査シタル後更ニ第十一條ノ手續ニ依リ其ノ内直角ヲ檢査スルヲ要ス

受檢度器ノ全長檢定用度器ニ均シキ種類ノモノハ兩器ノ左方目盛ノ起線ヲ正シク合セ又受檢度器ノ全長檢定用度器ヨリ短キ種類ノモノハ受檢度器ノ左方目盛ノ起線ヲ檢定用度器ノ右方ヨリ數ヘタル受檢度器ノ全長相當ノ目盛線ニ正シク合セ受檢度器ノ目盛ヲ左方ヨリ右方ニ及ホシ逐次之ニ相當スル檢定用度器ノ目盛ニ對照シ又其ノ全長ヲ右端ノ目盛線ニ對照シテ其ノ差ヲ視定シ之ヲ目盛及全長ノ公差ニ照校スヘシ

受檢度器ノ全長檢定用度器ヨリ長キ種類ノモノハ檢定用度器ニ相當スル長サ毎ニ及其ノ殘餘ノ部分ニ就キ前項ノ手續ヲ行ヒ毎次視定シタル差ニ對照スヘシ但シ割目ハ檢定用度器ノ目盛ニ相

照校スヘシ

第十二條　曲リ尺ハ前條第一項及第二項ノ手續ニ依リ兩枝ノ全長及目盛ヲ檢査シ其ノ合格シタルモノハ更ニ其ノ内外二角ヲ檢査スヘシ但シ此ノ場合ニ於テハ抑ヘ具ヲ用ヰルヲ要セス

角ヲ檢査スルニハ平板面又ハ厚紙面ニ兩脚規ヲ以テ直角ヲ畫キ之ニ受檢度器ノ内外二角ヲ照校シ俱ニ正シク合ヒタルモノヲ合格トスヘシ

第十三條　歴尺及鯨尺ハ之ヲ延長シテ第十條ノ手續ニ依リ其ノ全長及目盛ヲ檢査スヘシ

第十四條　卷尺又ハ鏈尺ノ全長及目盛ヲ檢査スルニハ檢定用度器ノ目盛ヲ施シタル邊ヲ檢査スル者ノ方ニ向ケ抑錘抑錘（第三圖）ヲ用ヰテ之ヲ其ノ間ニ渡シ張リ下部ニ木片ヲ布キ水平ヲ保タシメ錘子ヲ其ノ錘ニ載セ更ニ他ノ抑錘抑錘ヲ前ノ抑錘抑錘ニ並ヘ之ヲ用ヰテ受檢度器ヲ渡シ張リ檢定用度器ト相接シテ並行セシメ錘子ヲ其ノ錘ニ載セ俱ニ第十條第二項第三項ノ手續ニ依ルヘシ卷鯨尺ハ第十條ノ手續ニ依リ其ノ全長及目盛ヲ檢査スヘシ

第十五條　量器ハ量器用尺（第四圖）ヲ用ヰテ其ノ寸法ヲ檢査シ木材製、鐵葉製及二升又ハ五「リットル」以上ノ金屬製ノモノハ善ク乾キテ粒ノ揃ヒタル精粟ヲ其ノ他ノ量器ハ善ク漉シテ清潔ナル冷水ヲ用ヰテ其ノ容量ヲ檢査スヘシ

第十六條　量器ノ寸法ヲ檢査スルニハ其ノ形狀ニ照シ左ノ手續ニ依ルヘシ

一　方形量器ハ第三量器用尺ノ「甲」ヲ逐次四邊ニ當テ各方ノ寸法ヲ視定シ其ノ差ヲ公差ニ照校スヘシ

二　圓壔形量器ハ第一若クハ第二量器用尺ノ「甲」又ハ「乙」ヲ逐次内面二箇所以上ニ當テ徑ノ寸法ヲ視定シ其ノ差ヲ公差ニ照校スヘシ

三　斗概ハ之ヲ平板上ニ轉輾シテ其ノ面ニ密著セサルモノハ不合格トシ其密著スルモノハ更ニ側面及切口ヲ第三量器用尺ノ内直角ノ二邊ニ當テ「丙」及「乙」ノ目盛ニ依テ其ノ徑ト長サトヲ視定シ其ノ差ヲ公差ニ照校スヘシ

第十七條　量器檢定盤ハ粟粒ヲ以テ量器ノ容量ヲ檢定セントスルトキ土間ニ据ヘテ用ヰルモノトス

檢定用斗概及漏斗ノ注口ハ受檢量器五升又ハ十「リットル」以上ノモノニハ其ノ大ヲ五合又ハ一「リットル」以上ノモノニハ其ノ中ヲ二合五勺又ハ五「デシリットル」以下ノモノニハ其小ヲ用ヰルヘシ

第十八條　粟粒ヲ以テ量器ノ容量ヲ檢査スルニハ逐次左ノ四段手續ヲ行フヘシ

一　受檢量器ニ相當スル檢定用量器及容量比較器（第五圖ノ甲）ヲ量器檢定盤（第五圖ノ乙）上適宜ノ位置ニ据ヘ其ノ上位ニ漏斗ヲ裝置シテ粟ヲ注クノ用ニ供スヘシ漏斗ノ高サハ兩量器ニ對シ同一ニシ且斗概ヲ使用スルニ差支ナキヲ度トスヘシ

一斗及五升、二十「リットル」及十「リットル」ノ容量比較器ハ國ニ裝置シタル儘使用スヘシ

二　粟粒ヲ量器上ノ漏斗ニ盛リ其ノ下口ヲ開テ之ヲ量器ニ注入セシメ之ニ相當スル檢定用斗概（第六圖）ノ稜「甲乙」ヲ檢査スル者ノ方ニ向ケ靜ニ量器ノ一隅ニ當テ少シク斜ニ極メテ輕快ニ之ヲ引キ其ノ上面ニ餘リタル粟粒ヲ拂ヒ去ルヘシ此ノ場合ニ於テ量器ノ縁ニ尚粟粒ノ殘留スルカ又ハ斗概ト量器ノ衝突若クハ其ノ他ノ原因ノ爲メニ量器ヲ震動シタルトキハ更ニ其ノ施行ヲ新ニスヘシ但シ使用ニ要スル粟粒ノ量ハ方形ノ受檢量器ニ在テハ五割增圓形ノモノニハ三割增トスヘシ

三　量器ノ粟粒ヲ容量比較器上ノ漏斗ニ盛リ移シ其ノ下口ヲ開テ之ヲ容量比較器ニ注入セシメ其ノ粟ノ上面ニ當ル目盛ヲ視定スヘシ但シ粟粒ヲ漏斗ニ移スニハ務メテ器物ノ接觸漏斗ノ震動及粟粒ノ飛散ヲ防キ又便宜粟ヲ注キテ使用スヘシ

四　檢定用量器ヲ除キ之ニ代フルニ受檢量器ヲ以テシ更ニ前三段ノ手續ヲ施行シ其前後ニ視定シタル容量比較器ノ目盛ニ依リ兩者ノ容量ノ差ヲ視定シ之ヲ其ノ公差ニ照校スヘシ

第十九條　多數ノ量器ヲ引續檢査スル場合ニ於テハ豫メ前條第二段及第三段ノ手續ヲ反覆施行シ粟ノ上面ニ當ル容量比較器ノ平均目盛ヲ定メ而ル後同條第四段ノ手續ノミヲ行フコトヲ得（三十一年農商務省訓令第二十八號ヲ以テ改正）

第二十條　水ヲ以テ量器ノ容量ヲ檢査スルトキハ玻璃製量器ニハ玻璃製、瓦量比較器ヲ用ヰ金屬製量器ノ二合又ハ五「デシリットル」以上ノモノニハ檢定用大形天秤一合又ハ二「デシリットル」以下ノモノニハ中形天秤ヲ用ヰルヘシ但シ天秤ノ用法ハ第二十三條第三項ニ依ルヘシ

量器ニ水ヲ盛ルニハ先ツ其ノ内面ヲ濕シ次ニ水ヲ注入シ充分水ヲ含ミタル小刷毛ヲ以テ其ノ内面ニ附着スル氣泡ヲ掻キ取リ次ニ莖ノ一部ヲ量器ニ載セ緊閉シ徐ニ之ヲ進メテ密閉シ若シ莖ノ

下ニ氣泡ヲ殘ストキハ更ニ少量ノ水ヲ注入シ再ヒ其ノ蓋ヲ密閉シ其ノ外面周圍ノ水濕ヲ拭ヒ去ルヲ要ス但目盛アル璃玻製量器ニ在テハ之ヲ水平面上ニ置キ水ヲ注入シ其水面檢査セントスル目盛線ニ達スルヤ否ヲ視定スヘシ之ヲ視定スルニハ視線ヲ下方ノ水際ニ注キ水面ト一致セシムヘシ(全上訓令ヲ以テ但書改正)

第二十一條　水ヲ以テ金屬製量器ノ容量ヲ檢査スルニハ逐次左ノ五段ノ手續ヲ行フヘシ

一　受檢量器及ヒ之ニ相當スル檢定用量器ヲ其ノ蓋ヲ除キ天秤ニ載セ其ノ輕重ヲ檢スヘシ

二　檢定用量器受檢量器ヨリ重キトキハ之ヲ右皿ニ載セ輕キトキハ其ノ差ヨリ少シク重キ鉛(若クハ分銅)ヲ添ヘ之ヲ載セ又他ノ鉛(若クハ分銅)ヲ受ケ皿ニ盛リ之ヲ左皿ニ載セ左右平等ナラシムヘシ

三　檢定用量器ニ水ヲ盛リ之ニ公差相當ノ分銅ヲ加ヘ又他ノ鉛(若クハ分銅)ヲ他ノ受ケ皿ニ盛リ之ヲ左皿ニ載セ銅右平等ナラシムヘシ

四　右皿ノ檢定用量器、分銅、鉛及左皿ニ後ニ載セタル鉛(若クハ分銅)ヲ其ノ受ケ皿ト共ニ撤去シ更ニ右皿ニ受檢量器ヲ載セ之ニ鉛ヲ加ヘ左右平等ナラシムヘシ

五　受檢量器ニ水ヲ盛リ前ニ左皿ヨリ撤去シタル鉛(若クハ分銅)及其ノ受ケ皿ヲ再ヒ左皿ニ載スヘシ此ノ場合ニ於テ左右平等ナルカ又ハ右皿偏輕ヲ表スルモ之ニ其ノ公差二倍ニ相當スル分銅ヲ加ヘテ平等若クハ偏重ヲ表スルトキハ之ヲ合格トスヘシ

第二十二條　同量ノ受檢量器二箇以上ヲ引續キ檢査スル場合ニ於テハ其ノ輕重ヲ秤リ最モ重キモノニ就テ前條各段ノ手續ヲ行ヒ其ノ他ハ同條第四段及第五段ノ手續ノミヲ行フヘシ

第二十三條　玻璃製量器ノ容量ヲ檢査スルニハ先ツ水ヲ玻璃製容量比較器ニ注入シテ下方ノ公差線ニ達セシメ次ニ其水ヲ受檢量器ニ移シ水際檢査セントスル目盛線ニ達スルモノ又ハ達セサルモ公差相當ノ水ヲ更ニ注加シ水際該目盛線ニ達スルカ或ハ之ヲ超ユルモノヲ合格トスヘシ

口縁ヲ以テ全量ヲ限レル玻璃製量器ニ在テハ第十九條ノ規定ヲ準用シ水ノ溢出セサルモノ又ハ蓋下ニ氣泡ヲ殘ストキ更ニ公差相當ノ水ヲ徐ニ加ヘテ氣泡ノ消滅スルニ至ルモノヲ合格トスヘシ(三十一年農商務省訓令第二十八號ヲ以テ改正)

第二十四條　衡器ハ其重量、目盛及感量ヲ檢査ス

受檢分銅ノ種類一貫又ハ二「キログラム」以上ノモノニハ檢定用大形天秤ヲ、五十匁又ハ百「グラム」以上ノモノニハ中形天秤ヲ、二十匁又ハ五十「グラム」以下ノモノニハ小形天秤ヲ用ヰルヘシ

檢定用大形天秤ハ秤架ニ懸ケ中形及小形天秤ハ机上ニ載セ其ノ蓋ヲ水平ナラシメ俱ニ土間ニ据ヘテ用ヰルヘシ

第二十五條　分銅ヲ檢査スルニハ其ノ公差ニ相當スル分銅ヲ檢定用分銅ニ添ヘ天秤ノ右皿ニ又鉛(若クハ他ノ分銅)ヲ左皿ニ載セ之ヲ平等ナラシメ次ニ右皿ノ分銅ヲ悉皆撤去シ之ニ受檢分銅ヲ載スヘシ此ノ場合ニ於テ左右平等ナルカ又ハ右皿偏輕ヲ表スルモ之ニ其ノ公差相當ノ分銅ヲ加ヘテ平等若クハ偏重ヲ表スルトキハ之ヲ合格トスヘシ

第二十六條　天秤ヲ檢査スルニ逐次左ノ三段ノ手續ヲ行フヘシ

一　天秤ノ臺ナキモノハ秤架ニ懸クヘシ其ノ臺アルモノハ土間ニ据ヘタル机又ハ秤臺ニ載セ其ノ机又ハ秤臺ニ載セ難キモノハ直ニ土間ニ据ヘテ共ニ水平ナラシムヘシ

二　水平ヲ得タルモノニ微振ヲ與ヘ其指針正當ノ標點ヲ指スカ又ハ指ササルモ調子玉ヲ以テ之ヲ正スコトヲ得ルトキハ之ヲ合格トスヘシ又鉤、皿等ノ桿ト分離シ得ルモノニシテ之ヲ懸クル桿ノ左右ニ符合ナキモノハ其ノ分離シ得ヘキ部分ヲ逐次交換シ其ノ都度平等ヲ得ルモノヲ合格トスヘシ

三　秤量ニ相當スル檢定用分銅ヲ右皿ニ又鉛(若クハ他ノ分銅)ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ更ニ其ノ分銅及鉛ヲ左右交換シテ其ノ平等ヲ得タルモノ及平等ヲ得サルモ度表ノ設ケアルモノニ於テ其ノ傾斜度表ノ中度目ヲ超ヘサルモノニハ更ニ其ノ感量相當ノ分銅ヲ一方ノ皿ニ載セ一度目以上ノ感動ヲ起スモノ又ハ度表ノ設ケナキモノニ於テ感量ノ二分ノ一ニ相當スル分銅ヲ載セ平等ヲ得ルカ若クハ之レヲ超ユルモノニハ更ニ其ノ感量相當ノ分銅ヲ一方ノ皿ニ載セ感動ヲ目撃シ得ルモノヲ合格トスヘシ

第二十七條　臺秤及臺アル桿秤ヲ檢査スルニハ臺秤ハ臺脚ヲ平坦ナル位地ニ密著セシメテ据ヘ桿秤ハ水平ナル秤臺ニ載セ逐次左ノ三段ノ手續ヲ行フヘシ

一　分銅ハ金屬片ヲ指入セル部其ノ指入セサルモノハ重量ヲ表記セル部

二　天秤ハ桿ノ中央部

三　臺秤ハ桿ノ末端

錘及增錘ハ金屬片ヲ指入セル部、其ノ指入セサルモノハ掛量ヲ表記セル部

四　金屬製桿秤ハ直點ノ傍若クハ桿ノ末端又木製ノモノハ其ノ兩端ノ金具、金具ニ附印シ難キモノハ木材ノ部但シ第二同以後ノ檢定ニ於テハ頭金具若クハ木材ノ部

錘及增錘ハ臺秤ノモノニ同シ

五　皿又ハ鉤アル衡器ニシテ桿ニ附印シ難キモノハ其ノ皿又ハ鉤

四　度量衡器ノ附印シ難キモノニシテ之レト同一ノ記號年號番號ヲ函ニ表記シアルモノハ其ノ函

第三十三條　證書ハ適宜其ノ大小ヲ擇ヒ左ノ三項ノ一ニ該當スル度量衡器ニ附スルモノトス

一　小形又ハ硬質ノ爲メ附印シ難キモノ

二　附印スルトキハ毀損若クハ差狂ヲ生スルノ虞アルモノ

三　附印スヘキ局部ヲ有セサルモノ

第四章　檢定用ニ供スル度量衡器ノ檢定方法

第三十四條　檢定用ニ供スル度量衡器ノ檢定ハ之ヲ地方原器ニ照校シテ其ノ固有ノ差ヲ檢査スルモノトシ其ノ手續ハ本章及第二章ノ規定ニ據ルヘシ

此ノ檢査ニ於テ固有ノ差ヲ超ユルモノ及分銅ノ檢査ニ於テ平等ヲ得サルモノハ檢定ニ使用スルコトヲ得ス

一　錘ヲ直點ニ懸ケ桿ヲ桿息メノ中間ニ靜メ之ニ微振ヲ與ヘ其ノ振動上下一樣ナルトキ又ハ一樣ナラサルカ若クハ桿息メニ寄著スルモ調子玉ヲ以テ之ヲ正スコトヲ得ルモノヲ合格トスヘシ

二　錘ヲ適宜數箇所ノ目盛ニ懸ケ其各目盛ニ相當スル分銅ヲ蓋又ハ皿ニ載セ終リニ錘ヲ盛リ止メニ懸ケ之ニ相當スル分銅ヲ逐次蓋又ハ皿ノ四隅ニ移シ載セ其ノ都度平等ヲ得ルカ若クハ平等ヲ得サルモ公差相當ノ分銅ヲ增減シテ平等ヲ得ルモノヲ合格トスヘシ但シ皿ヲ垂下シタル桿秤ニ在テハ蓋止メノ檢査ニ於テ分銅ヲ皿ノ中央ニ載セ唯一同ノ平等ヲ得ルヲ以テ足レリトス

增錘ト共ニ使用スヘキ目盛アル桿秤ニ在テハ其ノ增錘ヲ附シタル儘前項ノ手續ヲ行フヘシ

三　增錘ナキ桿秤ハ錘ヲ盛リ止メニ懸ケ平等ヲ得タルトキ最小目盛相當ノ分銅ヲ皿ニ加ヘ感動ヲ起スモノヲ合格トスヘシ又增錘アル桿秤若クハ臺秤ハ其ノ增錘鉛小量ノモノヨリ漸次大量ノモノニ及ホシ各別ニ桿端ニ懸ケ又之ヲ悉皆同時ニ桿端ニ且ツ錘ニ盛リ止メニ懸ケ每次之ニ相當スル分銅ヲ蓋又ハ皿ニ載セ平等セサルモノハ直ニ不合格トシ平等ヲ得タルモノハ尙其ノ最小目盛相當ノ分銅ヲ蓋又ハ皿ニ加ヘ其ノ感動ヲ起スモノヲ合格トスヘシ但シ秤量五十貫又ハ百五十「キログラム」ヲ超ルモノハ增錘ヲ悉皆同時ニ懸クルノ手數ヲ省キ單ニ其ノ量ニ相當スル重量ヲ懸ケテ平等ヲ得タルトキ其ノ感動ヲ檢スヘシ

第二十八條　蓋ナキ桿秤ヲ檢査スルニハ之レヲ秤架ニ懸置シ錘ヲ直點ニ懸ケ桿ノ水平ヲ得サルモノ若クハ睨ミノ一致セサルモノハ直ニ不合格トシ其他ハ盛リ出シ及各段ノ目盛ニ就キ更ニ前條第二段以下ヲ適用スヘシ但直點ノ檢査ニ限リ調子玉ヲ以テ桿ノ水平若クハ睨ミヲ正スコトヲ得ルモノハ之レヲ合格トスヘシ(三十一年農商務省訓令第二十八號改正ニ依ル)

第二十九條　第二十二條第二十六條及第二十七條ノ檢査ヲ行フニ當リ目盛線及文字ノ記入方ニ錯誤アルモノハ不合格トスヘシ

第三章　證印、證書及消印ノ用法

第三十條　證印ヲ附スルニハ受檢器ノ種類、形狀、物質並之ヲ附スヘキ局部ノ廣狹ニ照シテ其ノ大小ニ應シ小ヲ擇ヒ消印ハ已ニ附シアル證印ノ大小ニ應シテ之レヲ用ヰルヘシ

第三十一條　金屬製ノ度量衡器、革又ハ麻布製ノ度器、木製ノ衡器ニハ打込ミ印ヲ、象牙又ハ骨製ノ度器、衡器、木製ノ量器ニハ烙キ印ヲ、竹又ハ木製ノ度器ニハ打込印若クハ烙キ印ヲ用ヰルヘシ

第三十二條　度量衡器ノ證印ヲ附スヘキ局部ハ左ノ如シ

一　度器

一　直尺、鯨尺、曲リ尺、曲尺及疊鯨尺ハ全長其ハ記號ヲ表記セル部

二　卷尺及卷鯨尺ハ其ノ一端但シ函ニ連結シアルモノハ其ノ函

三　鎖尺ハ其ノ一端ノ鎖

二　量器

一　枡ハ全量又ハ記號ヲ表記セル部

二　斗概ハ其ノ一端

三　衡器

一　分銅ハ金屬片ヲ指入セル部其ノ指入セサルモノハ重量ヲ表記セル部

二　天秤ハ桿ノ中央部

三　臺秤ハ桿ノ末端

錘及增錘ハ金屬片ヲ指入セル部、其ノ指入セサルモノハ掛量ヲ表記セル部

四　金屬製桿秤ハ直點ノ傍若クハ桿ノ末端又木製ノモノハ其ノ兩端ノ金具、金具ニ附印シ難キモノハ木材ノ部但シ第二同以後ノ檢定ニ於テハ頭金具若クハ木材ノ部

錘及增錘ハ臺秤ノモノニ同シ

五　皿又ハ鉤アル衡器ニシテ桿ニ附印シ難キモノハ其ノ皿又ハ鉤

四　度量衡器ノ附印シ難キモノニシテ之レト同一ノ記號年號番號ヲ函ニ表記シアルモノハ其ノ函

第三十三條　證書ハ適宜其ノ大小ヲ擇ヒ左ノ三項ノ一ニ該當スル度量衡器ニ附スルモノトス

一　小形又ハ硬質ノ爲メ附印シ難キモノ

二　附印スルトキハ毀損若クハ差狂ヲ生スルノ虞アルモノ

三　附印スヘキ局部ヲ有セサルモノ

第四章　檢定用ニ供スル度量衡器ノ檢定方法

第三十四條　檢定用ニ供スル度量衡器ノ檢定ハ之ヲ地方原器ニ照校シテ其ノ固有ノ差ヲ檢査スルモノトシ其ノ手續ハ本章及第二章ノ規定ニ據ルヘシ

此ノ檢査ニ於テ固有ノ差ヲ超ユルモノ及分銅ノ檢査ニ於テ平等ヲ得サルモノハ檢定ニ使用スルコトヲ得ス

第三十五條　度器ハ左ノ手續ニ據ル

一　直尺ハ度器檢定基ニ地方庶器ト對接シテ之ヲ載セ第一直尺ハ每一尺ノ長サヲ第二直尺ハ全長ヲ各其ノ左方ヨリ右方ニ及ホシテ之ヲ檢シ其ノ差ヲ測定スベシ

二　鎖尺ハ度器檢定基ニ第一直尺ト對接シテ之ヲ載セ鎖尺ノ左方目盛ノ起線ヲ第一直尺ノ右方ヨリ數ヘタル鎖尺ニ尺ニ相當スル目盛ニ正シク合セ第一直尺ノ右方ニ盛リタル目盛ニ照校シテ其ノ差ヲ測定シ更ニ地方庶器ニ對スル差ヲ算定スベシ地方庶器ニ對スル差ヲ算定スルニハ第一直尺ノ右方二尺ヲ地方庶器ニ比シタル差ニ其ノ左方一尺ノ差ノ二分ノ一ヲ加ヘタル差ヲ第一直尺ニ對スル鎖尺ノ差トサ差引スベシ

三　卷尺ハ度器檢定基ニ直尺ト對接シテ之ヲ載セ卷尺ノ目盛ノ起線ヲ直尺ノ左方目盛ノ起線ニ正シク合セ其ノ直尺ニ對スル差ヲ測定シ更ニ同樣ノ手續ニ依リ直尺ニ相當スル卷尺ノ長サト直尺ノ差トヲ測定シ其ノ差ヲ引差シテ卷尺ノ長尺全長ノ差ヲ求メ更ニ地方庶器ニ對スル差ヲ卷尺ノ差ニ加ヘ算定スベシ

第三十六條　量器ハ左ノ手續ニ據ル

一　量器用尺ハ鎖尺ヲ檢査スルノ手續ニ依リ夫ニ掲クル方庶器ニ對スル差ヲ直尺ニ比シ其ノ差ト直尺ノ地方庶器ニ對スル差ヲ引シテ之ヲ其ノ同有ノ差ニ照校スベシ

第一及第二量器用尺「甲」及「乙」ノ外側間ノ距離　一尺五寸

第三量器用尺「甲」ノ外側ト「乙」ノ內側トノ間ノ距離　一尺五寸

二　容量ハ標ヲ水面ヲ以テ檢査シ次表ニ掲クル容量ニ比シ其ノ差ヲ各器固有ノ差ニ照校スベシ

容量		水面	容量	水面
一	斗	四八一〇・四二七	二十「リットル」	二〇・〇〇「キログラム」
五	升	二四〇五・二一三	十「リットル」	一〇・〇〇
二	升	九六二・〇八五	五「リットル」	五・〇〇
一	升	四八一・〇四三	二「リットル」	二・〇〇
五	合	二四〇・五二一	一「リットル」	一・〇〇
二	合五勺	一二〇・二六一	五「デシリットル」	〇・五〇
二	合	九六・二〇九	二「デシリットル」	〇・二〇
一	合	四八・一〇四	一「デシリットル」	〇・一〇
五	勺	二四・〇五二	五「センチリットル」	〇・〇五
二	勺	九・六二一	二「センチリットル」	〇・〇二
一	勺	四・八一〇	一「センチリットル」	〇・〇一

五合又ハ一「リットル」以上ノ量器ニハ大形天秤ヲ二合五勺又ハ五「デシリットル」以下ノモノニハ中形天秤ヲ用ヰルヲ要ス

第三十七條　天秤ハ卓ニ第二章ノ規定ニ據リ分銅ハ二貫又ハ五「キログラム」以上ノモノニハ大形天秤ヲ百匁又ハ二百「グラム」以上ノモノニハ中形天秤ヲ五十匁又ハ百「グラム」以下ノモノニハ小形天秤ヲ用ヰ左ノ二項ノ手續ニ據ル

一　五毛又ハ五「ミリグラム」以下每組ノ分銅一毛十分ノ一又ハ一「ミリグラム」ノ分銅二箇ヲ天秤ノ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ更ニ同量ノ分銅ヲ以テ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

毎次其ノ平等ヲ檢スベシ

一毛十分ノ一又ハ一「ミリグラム」ノ分銅二箇ヲ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ一毛十分ノ二又ハ二「ミリグラム」ノ分銅ヲ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

一毛十分ノ二又ハ二「ミリグラム」ノ分銅二箇ト一毛十分ノ一又ハ一「ミリグラム」ノ分銅一箇ト左皿ニ載セ平等ナラシメ

一毛十分ノ五又ハ五「ミリグラム」ノ分銅ヲ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

一毛十分ノ五又ハ分銅一箇十分ノ二ノ分銅二箇及十分ノ一ノ分銅一箇ヲ合セテ左皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ一毛ノ分銅ヲ以テ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

二毛以上ノ分銅ハ前項ノ例ニ倣フベシ

二　一匁又ハ一「センチグラム」以上每組ノ分銅一匁又ハ一「センチグラム」ノ分銅一箇ヲ天秤ノ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ更ニ他ノ鉛ヲ以テ左皿ノ鉛ニ載セ換ヘ平等ナラシメ之ニ相當スル鉛ヲ添載シテ一匁又ハ二「センチグラム」ノ半分銅ヲ以テ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

二匁又ハ二「センチグラム」ノ分銅二箇及一匁又ハ一「センチグラム」ノ分銅一箇ヲ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ五匁又ハ五「センチグラム」ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

五匁又ハ五「センチグラム」以下ノ分銅ヲ合セテ一分又ハ一「デシグラム」ノ組ニ相當セシメ之ヲ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ更ニ一分又ハ一「デシグラム」ノ分銅ヲ以テ右皿ノ分銅ニ載換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

二分又ハ二「デシグラム」以上ノ分銅ノ檢査ハ一分又ハ一「デシグラム」ノ分銅ノ檢査ノ例ニ準ズベシ

最後ニ檢シタル一貫又ハ一「キログラム」分銅ノ固有ノ差相當ノ分銅ヲ地方庶器ニ添ヘテ之ト其ノ一貫又ハ一「キログラム」分銅ノ平等ヲ檢スベシ

三　二貫又ハ二「キログラム」以上ノ分銅ハ分銅固有ノ差ニ相當スル分銅ト地方庶器トヲ右皿ニ鉛ヲ左皿ニ載セ平等ナラシメ右皿ヨリ其ノ固有ノ差相當ノ分銅ヲミヲ左皿ニ載セ換ヘ之ヲ鉛ヲ撤去シ更ニ他ノ鉛ヲ左皿ニ載セ換ヘ平等ナラシメ又左皿ニ撤去シタル鉛ヲ添載シテ二貫又ハ二「キログラム」ノ分銅ヲ以テ右皿ノ分銅ニ載セ換ヘ其ノ平等ヲ檢スベシ

五貫又ハ五「キログラム」ノ分銅ニ在テハ四回「十「キログラム」分銅ニ在テハ九回、二十「キログラム」分銅ニ在テハ十九回、鉛ヲ載セ換ヘ前項ノ手續ヲ行フベシ

第五章　製作、修繕庶器ノ檢査

第三十八條　製作、修繕庶器ノ檢査ハ檢定用度量器ト同一ノ手續ニ依ルベシ但シ檢査ノ成績ハ之ヲ表面ニ認メ交付スベシ

附則

第三十九條　本規程ハ發布ノ日ヨリ施行ス但シ本規程第二十二條及第二十九條ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

第四十條　明治二十五年(七月)度量衡令第二十二號度量衡檢定規程第二十九條ハ明治三十年十二月三十一日マテ其ノ效力ヲ有ス

第四十一條　前條ノ規定ニ依リ證印、年號印及證印ヲ附スベキ度量衡器ノ局部ハ本規程第三十一條ニ依ル

(圖式畧ス)

●度量衡定期檢定ノ際度量衡器ニ附スベキ印及出張修繕ノ件

(度量衡法第三十一條ノ規定ニ基キ明治三十一年十一月勅令第二百一號)

明治三十一年度量衡定期檢定ノ際度量衡器ニ附スベキ印及出張修繕ノ件左ノ通定ム

第一條　明治三十一年中檢定シタル度量衡器ニハ左ノ證印ヲ附スベシ

	打込印	烙印	押印
大	二分平方	四分平方	二分平方
中	一分三直平方	一分平方	
小	六直平方		

第二條　明治三十一年ニ於テル度量衡器製作所、修繕所及販賣所ノ賣渡シ器物ニシテ明治二十六年以後ノ檢定ヲ受ケタルモノニハ左ノ印ヲ附スベシ

	打込印	烙印	押印
大	二分平方	四分平方	二分平方
中	一分三直平方	二分平方	
小	六直平方		

前項ノ印ヲ附シタル器物ハ明治三十二年ノ定期檢定ヲ受クルコトヲ要セス

第三條　度量衡定期檢定ニ於テ證書ノ附シアル器物ニシテ合格シタルトキハ其證書ニ證印ヲ附スベシ

第四條　第一條及第二條ノ印ヲ附スベキ局部及其用方ハ度量衡檢定規程第二十九條、第三十條及第三十一條ノ規定ヲ準用スベシ但證書ニ對シテハ「檢定之証」ノ欄ノ上部ニ押印ヲ附スベシ

第五條　度量衡器ノ製作、修繕ノ免許ヲ受ケタル者ハ度量衡定期檢定ノ年ニ限リ地方長官ノ認可ヲ得テ該地方ニ於テ出張修繕ヲナスコトヲ得

地方長官ハ土地ノ狀況ニヨリ前項修覆者ノ員數其他必要ナル制限ヲ設クルコトヲ得

●度量衡檢査規則

（明治八年八月太政官第百三十五號達度量衡取締條例附圖）

度量衡檢査規則

尺度檢査

尺度ノ檢査ハ舊器新器共渾發ヲ以テ之ヲ檢査スヘシ其法渾發ヲ以テ檢査スル所ノ尺度ヲ挾ミ其挾ム所ノ長サヲ檢査スル所ノ尺度ノ長サトシ之ヲ曲尺及鯨尺ノ原器ニ當テテ試驗スルニ其挾ム所ノ長サ曲尺ノ原器ニ適合スル者ハ檢査スル所ノ長サ曲尺定メ其挾ム所ノ長サ鯨尺ノ原器ニ適合スル者ハ之ヲ鯨尺ト定メ乃チ其器ヲ正當トシ以テ各々檢印ヲ捺押シ且尺名印（曲尺ハ曲字ノ印、鯨尺ハ鯨字ノ印）ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ其挾ム所ノ長サ曲尺及鯨尺ノ原器ニ適合セス長短差等ヲ生スル者ハ檢査スル所ノ尺度之ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス

舊器斗量檢査

舊器斗量ノ檢査ハ斗量ノ原器ト漏斗トヲ用ヒ舂キ精ケタル粟粒ヲ以テ之ヲ檢査スヘシ其法檢査スル所ノ器（假名檢器）一斗枡ナレハ左圖ノ如ク先ツ一斗枡ノ原器ヲ採リ漏斗ノ前位ニ於テ之ヲ盆上ニ据ヘ枡ノ中心ト漏斗口トヲシテ上下相向ハシメ受笹ヲ以テ枡ノ正上ニ据ヘ兼テ漏斗口ノ莨ヲ鎖シ粟粒ヲ漏斗ニ入レ置クヘシ先其量ハ本量ニ凡二割ヲ增シ凡一斗二升タルヘシ（但五升ニハ六升一升ニハ一升二合）如此シテ漏斗ハ莨ヲ開キ受笹ヲ以テ其漏下スル所ノ粟粒ヲ受ケ且其受クル所ノ粟粒ヲ笹ノ底版ヨリ枡ニ漏移スヘシ尤此際徐々ニ受笹ヲ轉廻シ粟粒ヲシテ枡ノ中央並四隅ニ遍滿セシムルヲ要ス既ニ之ヲ漏移シ終レハ斗概ヲ以テ其溢粒ヲ掻キ去リ之ヲ原量ト定ムヘシ尤此際斗概ノ使用ニ於ケル其量面ヲシテ亀甲凹凸ナク斗邊ト相水平ナラシムルヲ要ス（但盆上ニ散スル所ノ餘粒ハ枡ヲ撤シ盆ヲ覆シテ以テ之ヲ他器ニ移スヘシ）次ニ檢器ノ容量ヲ求ムル亦原器ニ於テスル法ノ如クシテ檢量ヲ互移換容セシカ爲メ檢量ヲ他器ニ移シ檢量ヲ原器ニ移スヘシ其法以テ原量ヲ檢器ニ移シ檢量ヲ用テ之ヲ各器ニ漏移シ既ニ之ヲ漏移シ終レハ原檢器共斗概ヲ以テ徐々ニ其量面ノ凸凹ヲ均平スヘシ此際斗概ノ使用ニ於ケル前後ノ手續キ經重緩急極メテ不同ナキヲ要ス（但斗概ヲ用フルノ後粟粒斗内ニ充實シ量面斗邊ト相平カニシテ溢粒盆ニ散スル者アレハ之ヲ拾收シテ原檢量試驗ノ參照ニ充ツヘシ）既ニ之ヲ均平シ終リ乃チ原檢兩器相並ヘテ之ヲ試驗スルニ其量各有餘不足ヲ生セサル者ハ檢査スル所ノ器之ヲ正當トシ以テ檢印ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ其量各有餘不足ヲ生スル者ハ檢査スル所ノ器之ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス此餘各種ノ舊器斗量其檢査法皆之ニ準スヘシ

但漏斗ノ製作左ノ圖面寸法ノ如クスレハ漏斗口ト一斗枡面トノ距離凡三寸許ナルヘシ故ニ餘種モ此距離ニ準セシメンカ爲メ五升枡ヨリ以下ハ其高サニ隨ヒ適宜ニ之カ莨ヲ設クヘシ

附則

權衡ノ各取リ緒ニ就テノ盛出シニ錘ヲ懸ケテ桿ノ水平ヲ得タルトキ其取リ緒ニ就テノ一度目ニ相當スル分銅ヲ皿又ハ鈎ニ加フルトキ感動ヲ起スモノヲ合格トシ感動セサルモノハ之ヲ不合格トスヘシ

（二十四年農商務省令第七號ヲ以テ追加）

舊器斗量檢査器械並檢査法之圖

（圖面略ス）

新器斗量檢査

新器斗量檢査ハ斗量尺度ヲ以テ檢査スヘシ其法斗量尺度ヲ檢査スル所ノ斗量ノ方深及弦鐵ノ幅厚ニ當テテ精密ニ之ヲ檢査スルニ其方深及弦鐵ノ幅厚尺度ニ適合スル者ハ之ヲ正當トシ以テ檢印ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ其方深及弦鐵ノ幅厚斗度尺度ニ適合セス長短差等ヲ生スル者ハ之ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス

新器斗概檢査

新器斗概ノ檢査ハ斗概ノ原器ヲ以テ之ヲ檢査スヘシ其法斗概ノ原器ヲ以テ檢査スル所ノ斗概ノ圓徑及長サニ當テテ之ヲ試驗スルニ其寸法原器ニ適合スル者ハ之ヲ正當トシ以テ檢印ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ其寸法原器ニ適合セス長短差等ヲ生スル者ハ之ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス

桿秤檢査

桿秤ノ檢査ハ舊器新器共先ク其直點ノ正否ヲ檢査スヘシ其法錘緒ヲ以テ其直點ニ當テテ錘ヲ垂レ上緒ヲ執テ衡ヲ釣リ之ヲ試驗スルニ其衡水平ニシテ左右偏重ナキ者ハ其直點ヲ正當トス、シ次ニ其大小諸量點ノ正否ヲ檢査スルニ各種ノ分銅（自一厘至二貫匁十七種）ノ原器ヲ以テスヘシ其法檢査スル所ノ器五百匁掛量皿秤ナレハ先ツ其最小量一匁ノ分銅（即原器餘亦然）ヲ以テ之ニ掛ケ錘緒ヲ以テ其量點ニ當テテ錘ヲ垂レ上緒ヲ執テ衡ヲ釣リ之ヲ試驗スルニ其衡水平ニシテ左右偏重ナキ者ハ其量點ヲ正當トスヘシ次ニ二匁ノ分銅其次五匁ノ分銅其次十匁ノ分銅其次二十匁ノ分銅ト次ヲ追テ各種ノ分銅ヲ掛ケ前法ノ如クシテ各之ヲ試驗スヘシ如此上緒ニヲ衡ヲ釣リ既ニ各種ノ分銅ヲ掛ケ終レハ更ニ前緒並元緒ニテ衡ヲ釣リ都テ上緒ニ於テスル法ノ如クシテ各種ノ分銅ヲ掛ケ之ヲ試驗スヘシ上緒前緒元緒共ニ之ヲ掛ケテ試驗スルニ直點及何レノ量點ニ於テモ其衡水平ニシテ左右偏重ナキ者ハ直點及各量點ヲ正當トシ乃チ其器ヲ正當トシ以テ檢印ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ上緒前緒元緒ノ内其釣ル所ノ衡水平ナラス左右偏重ヲ生スル者アルトキハ其直點又ハ其量點ヲ不正トシ乃チ其器ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス此餘各種ノ桿秤其檢査法皆之ニ準スヘシ

但桿秤種類掛量二貫匁ニ過クル者ハ三十二貫匁掛二十六貫匁掛十六貫匁掛十一貫匁掛六貫匁掛三貫五百匁掛ノ六種ナリ然ルニ分銅ノ原器其量二貫匁ニ止マレハ大小ノ量點其半ハチ試驗スルニ足ラス故ニ此六種ノ秤ニハ掛出ノ量點ヨリ二貫匁ノ量點迄試驗既ニ終レハ二貫匁ヨリ敢十貫匁ニ至ル其間ノ量點ハ試驗之ヲ略スヘシト雖モ上緒並元緒ノ極點（上緒並元緒最重ノ量點假令ハ三十二貫匁掛秤ハ上緒十六貫匁ノ量點元緒三十二貫匁ノ量點ナリ）ヲ試驗スル爲メ分銅原器ニ準シテ兼テ四貫匁ノ分銅八個ヲ製シ之ヲ假原器トシ然シテ或ハ原器種類ヲ相併セ或ハ假原器數個ヲ相併セ或ハ原器種類ト假原器數個トヲ相併セ各秤ニ掛ケテ上緒並元緒ノ極點ヲ試驗スルコト假令ハ三十二貫匁掛秤ニハ假原器四個相併セ掛ケテ上緒ノ極點ヲ試驗シ假原器八個相併セ掛ケテ元緒ノ極點ヲ試驗シ六貫匁掛秤ニハ二貫匁ノ原器一個一貫匁ノ原器一個相併セ掛ケテ上緒ノ極點ヲ試驗シ假原器一個二貫匁ノ原器一個相併セ掛ケテ元緒ノ極點ヲ試驗シ都テ其極點ノ量ノ如ク原器假原器ヲ合併突加シテ之ヲ掛ケ本文ニ示ス法ノ如クシテ之ヲ試驗シ以テ其器ノ正否ヲ判ス

右四貫匁ノ分銅假原器ハ銅或ハ鉛ヲ以テ之ヲ製スヘシ然シテ其形狀ノ如キハ隨意タリト雖モ其量製作法ハ先ツ二貫匁ノ分銅原器二個相併セ合量四貫匁トシ銅或ハ鉛凡四貫匁者ヲ以テ之ニ對シ天秤ヲ以テ之ヲ量ルコト其法次分銅檢査ノ條ニ說ク所ノ如クタルヘシ然シテ銅或ハ鉛其量輕重アル者ハ之ヲ增減シテ二貫匁ノ假原器ト定ムト等量ナラシメ以テ之ヲ四貫匁ノ原器二個ヘシ

但分銅ヲ掛クルニ緒紐ノ類ヲ以テ之レヲ掛ケンニハ其緒紐ノ類ハ所謂風袋ニテ全ク量外ナルカ故ニ別ニ之ヲ量テ量數ト分クヘシ

天秤檢査

天秤ノ檢査ハ舊器新器共分銅ノ原器ヲ以テ之ヲ檢査スヘシ其法板敷又ハ机等平坦ノ地位ヲ擇テ檢査スル所ノ天秤ヲ据ヘ象限儀ノ類ヲ以テ其天秤盤ニ當テテ之カ高低ヲ檢シ若シ高低アルトキハ片板ヲ假リ之ヲ墻メテ水平ナラシメ然シテ分銅ノ原器ヲ其左右ノ皿ニ掛クルコト假令ハ左ニ百匁ノ分銅一個ヲ掛ケ右ニ五十匁ノ分銅一個二十匁ノ分銅二個十匁ノ分銅一個ヲ掛ケ左右等量ナラシメ（左右ノ皿ニ掛クル分銅ノ量ハ充分重量ヲ要ス然レトモ天秤ノ大小ト分銅種類組合ノ便宜トニ隨テ適宜ニ增減スヘシ）然シテ其針口ノ感搖ヲ銳クセンカ爲メニ銅俵ヲ以テ微々ニ其鉤銅（箱ノ柱ニ掛ケテ天秤ヲ釣ル者）ノ甲所ヲ連抑スヘシ連抑シ終リ眼ヲ注テ精密ニ之ヲ試驗スルニ其針口上下正直ニ相接シ其衡水平ニシテ左右偏重ナキ者ハ其器ヲ正當ハ其器ヲ不正トシ以テ捺印スヘカラス

分銅檢査

分銅ノ檢査ハ舊器新器共分銅ノ原器ト天秤ノ原器トヲ以テ之ヲ檢査スヘシ其法板敷又ハ机等平坦ノ地位ヲ擇テ檢査スル所ノ天秤ヲ据ヘ象限儀ノ類ヲ以テ其天秤盤ニ當テテ之カ高低ヲ檢シ若シ高低アルトキハ片板ヲ假リ之ヲ墻メテ水平ナラシメ然シテ檢査スル所ノ分銅ノ原器ヲ其右皿ニ掛ケ其左皿ニ掛ケ之ト同量ナル銳クセンカ爲メニ抑棒ヲ以テ微々ニ其鉤銅（箱ノ柱ニ掛ケテ天秤ヲ釣ル者）ノ甲所ヲ連抑スヘシ連抑シ終リ眼ヲ注テ精密ニ之ヲ檢査スルニ其針口上下正直ニ相接シ其衡水平ニシテ左右偏重ナキトキハ檢査スル所ノ分銅之ヲ正當トシ以テ檢印ヲ捺押スヘシ然ルニ若シ其針口上下直接セス其衡水平ナラスシテ左右偏重ヲ生スルトキハ檢査スル所ノ分銅之ヲ不正トシテ以テ捺印スヘカラス

右之通候事

明治八年　月

●西洋形權衡檢査手續書

（明治二十五年十一月農商務省訓令第三十五號）

度量衡法第二十一條ノ規定ニ適用スヘキ從來ノ西洋形權衡檢査手續ハ左ノ如シ

西洋形權衡檢査手續書

一檢査ノ際錘ノ量ヲ增減スルニ便ナラシメンカ爲メ穆メ錘ノ上面若クハ側面ニ穴ヲ穿チ鉛屑ヲ納メテ螺旋ヲ以テ其口ヲ塞キ置クヘシ而シテ檢印ハ其螺旋ノ合セ目ニ打込ムヘシ

但錘質鐵ナレハ上面若クハ側面ノ一部ニ黃銅片ヲ埋メ其ニ穴ヲ穿チ其内ニ鉛屑ヲ納ムルコ

下本文ノ如クスヘシ又錘形小ニシテ穴中ニ鉛屑ヲ納ムルコト充分ナラサルモノハ穴ハ唯錘量ヲ增ストキ鉛ヲ納ムルノ操備ニ供スルノミトシテ初ヨリ鉛屑ヲ納メ置カス而シテ其量ヲ減セントスルトキハ錘ノ底面ヲ削リ取リ然ル後檢印ヲ捺スヘシ

一檢査ノ際增錘ノ量ヲ增減スルニ便ナラシメンカ爲メ樣メ錘ノ表面ニ穴ヲ穿チ鉛屑ヲ納レ螺旋ノ合セ目ニ打込ムヘシ

但增錘ノ質鐵ナレハ表面ニ黃銅ヲ埋メ云々前項但書ノ如シ

一增錘ヲ戰スル壺モ亦增錘ト同シ

一增錘ヲ附スル權衡ノ檢査ハ第一星點量ヲ檢シ第二最大星點量ニ於テ感シヲ檢シ第三各錘ヲ懸ケテ其量ヲ檢スヘシ

第二ノ感シヲ檢スルニハ最小目盛リ量ニ均シキ分銅ヲ以テ之ヲ檢スヘシ

但壺秤ニアリテハ其最大星點量ヲ檢スルトキ檢査分銅ヲ逐次壺ノ四隅ニ轉置シテ桿ノ水平ヲ檢スヘシ

●一斗桝使用ニ關スル件

（明治十九年三月農商務省令第二號）

穀量一斗以上ヲ授受スルノ際一斗桝ヲ用ヒサルトキハ其授受者ニ於テ之ヲ拒ムコトヲ得

●度量衡器拂下代徵收方委任ノ件

（明治二十四年九月農商務省則令第四十號）

本年省令第十一號度量衡法施行規則第四十條ニ據ル度量衡器ノ製作、修復原器拂下代ノ徵收方ハ其部ニ委任候條二十三年當省則令第六號及第二十九號ニ據リ取扱フヘシ

●地方度量定期檢定取扱方

（明治三十一年六月農商務省則令第十六號）

當省所管地方度量衡定期檢定費取扱方ハ明治三十一年（四月）本省則令第九號種牡馬檢査取扱順序ニ準據スヘシ

●度量衡檢定費豫算ニ關シ繰越計算書調製提出ノ件

（明治三十二年二月農商務省則令第十二號）

當省所管度量衡定期檢定費豫算ニ對シ仕拂上殘餘ヲ生シタルトキハ明治二十六年十一月大藏省令第三十二號第八號書式ニ據リ繰越計算書ヲ調製シ年度經過後一箇月以內ニ當省ヘ差出スヘシ

第二十三類　鑛業、森林

第一章　鑛業

●鑛業條例

（明治二十三年九月法律第八十七號）

朕鑛業條例ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

鑛業條例

第一章　總則

第一條　鑛業トハ鑛物ノ試掘採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ

第二條　鑛物ノ未タ採掘セサルモノハ國ノ所有トス

此ノ條例ニ於テ鑛物トハ金鑛（砂金ヲ除ク）銀鑛、銅鑛、鉛鑛、錫鑛（砂錫ヲ除ク）安質母尼鑛、水銀鑛、亞鉛鑛、蒼鉛鑛、滋鑛（砂鐵ヲ除ク）硫化鐵鑛、滿俺鑛、砒鑛、黑鉛、石炭、石油及硫黃ヲ謂フ

第三條　帝國臣民ニ非サレハ鑛業人トナリ又ハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ株主トナルコトヲ得ス

鑛業人未成年寡婦白痴又ハ癈疾ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ

第四條　農商務省鑛山局及鑛山監督署ノ官吏ハ在職中鑛業人トナリ又ハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ株主若ハ役員トナルコトヲ得ス

第五條　此ノ條例ニ依リ鑛業特許取消ノ處分ヲ受ケタル鑛業人ハ同鑛區ニ付一箇年間採掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第六條　二人以上共同シテ鑛業ヲ爲ストキハ總代一名ヲ撰定シ豫メ所轄鑛山監督署ニ屆出ツヘシ

總代ハ鑛業上ニ關シ政府ニ對シテ共同鑛業人ヲ代表スルモノトス

第七條　共同鑛業人ノ變更、採掘權ノ賣買、讓與、書入及廢業屆等ニハ總代ノ外少クモ共同鑛業人過半數ノ連署ヲ要ス

第二章　試掘及採掘

第八條　試掘ヲ爲サント欲スル者ハ其ノ願書ニ試掘地ノ圖面ヲ添ヘ所轄鑛山監督署長ニ差出シ其ノ認可ヲ請クヘシ

第九條　試掘ハ認可ノ日ヨリ一箇年ヲ限トス

試掘人前項ノ期限內ニ於テ其ノ事業ヲ竣ヘ難キ事實アルトキハ所轄鑛山監督署長ニ延期ヲ出願スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ハ其ノ事實ヲ調査シ已ムヲ得サルモノト認ムルトキハ一箇年以內ノ延期ヲ認可スルコトヲ得

第十條　試掘ニ依リ採取シタル鑛物ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ得テ之ヲ販賣スルコトヲ得

第十一條　前條ニ依リ鑛物ヲ販賣シタルトキハ三十日以內ニ其ノ販賣代價百分ノ一ヲ所轄鑛山監督署ニ納ムヘシ

前項ノ金額ヲ其ノ期限內ニ納メサル者ハ國稅滯納處分法ニ依リ處分ス

第十二條　採掘ノ特許ヲ得ント欲スル者ハ採掘願書ニ鑛區圖ヲ添ヘ農商務大臣宛ニテ所轄鑛山監督署ニ差出スヘシ

採掘願書及鑛區圖ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ノ日附ヨリ五十日以內ニ之ヲ差出スコトヲ得此ノ期限內ニ差出ササルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十三條　採掘ヲ出願スル者ハ出願地ニ其ノ採掘セントスル鑛物ノ存在スルコトヲ證明スヘシ

第十四條　鑛山監督署長ハ鑛物ノ存在ヲ認定スル爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ採掘出願人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

採掘出願人前項旅費日當納付ノ通知ヲ受ケ通知書到達ノヨリ十四日以內ニ之ヲ納メサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十五條　鑛山監督署ニ於テハ試掘及採掘出願登錄簿ヲ備ヘ置キ出願日時ノ先後ニ依リ之ヲ登錄ス

第十六條　試掘又ハ採掘ノ出願同一ノ地ニ付二人以上アルトキハ出願日時ノ先後ニ依リ其ノ許否ヲ定ム

出願ノ日時同一ナルトキハ鑛山監督署長ハ其ノ旨ヲ各出願人ニ通知スヘシ各出願人ハ通知書ノ日附ヨリ六十日以內ニ協議ヲ遂ケ出願人ヲ定ムヘシ若シ協議調ハサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

出願ノ日時同一ニシテ試掘ト採掘トニ係ルトキハ先ヲ採掘ノ出願ニ付其許否ヲ定ム

第十七條　農商務大臣採掘ノ特許ヲ與フヘキモノト認メタルトキハ鑛業特許證ヲ下付スヘシ

第十八條　試掘若ハ採掘ノ事業公益ヲ害スト認ムルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長、採掘ニ就テハ農商務大臣其ノ出願ヲ許可セス

第十九條　試掘者ハ採掘ノ事業公益ニ害アルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長採掘ニ就テハ農商務大臣既ニ與ヘタル認可若ハ特許ヲ取消スコトヲ得

鑛業人前項取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三十日以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但損害ノ賠償ヲ要求スルコトヲ得ス

第二十條　特許ヲ得タル鑛物ノ採掘權ハ賣買、讓與又ハ書入ヲ爲スコトヲ得

採掘權ヲ賣買、讓與スルトキハ雙方連署シ所轄鑛山監督署ヲ經農商務大臣ニ出願シ鑛業特許證ノ書換ヲ受クヘシ此ノ手續ニ依ラサル賣買、讓與ハ法律上其ノ効ナキモノトス

採掘權ノ書入ハ雙方連署シ所轄鑛山監督署ノ登錄ヲ受クヘシ其ノ登錄ヲ受ケサルモノハ法律上其ノ効ナキモノトス

第二十一條　他人試掘ノ年限中ハ其ノ試掘地内ニ於テ同一ノ鑛物ニ付採掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　他人ノ認可ヲ得タル試掘地内ニ於テ其ノ試掘人ノ未タ認可ヲ得サル鑛物ノ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スル者ハ試掘人ノ承諾ヲ經ヘシ

試掘人自ラ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ認可ヲ得タル鑛物ノ試掘ニ妨害アルトキノ外ハ他人所屬ノ鑛區内ニ於テ其ノ鑛業人ノ未タ試掘ノ認可又ハ採掘ノ特許ヲ得サル鑛物ニ付試掘若ハ採掘ヲ出願セント欲スル者ハ鑛業人ノ承諾ヲ經ヘシ

鑛業人自ラ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ試掘又ハ採掘ノ爲ニ鑛業ニ妨害アルトキノ外ハ鑛業人ハ前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十四條　宮城、離宮、神宮、皇陵、陸海軍所轄城堡、軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍三百間以内ノ場所ハ試掘又ハ採掘若ハ鑛業上使用スルコトヲ得ス但軍港、要港ハ其ノ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス

第二十五條　鐵道、馬車鐵道、公道、河湖、堤防、沼池、社寺、墓地、公園地及建物ヨリ地表地下トモ其周圍三十間以内ノ場所ニ於テハ所轄官廳若ハ所有者ノ承諾ヲ經ルニアラサレハ試掘又ハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス但危險ノ虞ナキモノハ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條　鑛業人ハ毎年ノ鑛業施業案ヲ調製シ其ノ前年十月三十日限其ノ初年ニ係ルモノハ採掘特許ノ日ヨリ三箇月以内ニ所轄鑛山監督署長ニ差出シ認可ヲ受クヘシ

前項ノ施業案ニシテ坑内ノ保安ニ害アリ又ハ其ノ鑛區ニ相當スル鑛業ヲ爲ササルモノト認メタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ理由ヲ鑛業人ニ示シ期限ヲ定メ之ヲ改正セシムヘシ

第二十七條　鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ受ケタル鑛業施業案ニ依ルニアラサレハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十八條　鑛業人鑛業施業案又ハ其ノ改正案ヲ期限内ニ差出ササルトキハ農商務大臣ハ其ノ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第二十九條　鑛業人一箇年以上休業シ又ハ採掘ノ特許ヲ得タル日ヨリ一箇年以内ニ鑛業ニ著手セサルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第三十條　前二條ノ場合ニシテ其ノ自己ノ過失ニ由ラサルモノハ特許取消ノ通ヲ受ケタル日ヨリ十四日以内ニ其ノ理由ヲ農商務大臣ニ申立テ再願ヲ爲スコトヲ得若シ農商務大臣ニ於テ之ヲ拒ムトキハ其ノ通ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十一條　鑛業人ハ坑内實測圖二葉ヲ調製シ一葉ハ所轄鑛山監督署ニ差出シ一葉ハ鑛業事務所ニ備ヘ置クヘシ

前項坑内實測圖ハ事業ノ進歩ニ從ヒ六箇月毎ニ追補スヘシ

鑛業人若シ他人ノ所屬ニ係ル隣接鑛區ノ坑内實測圖ニ付證明ヲ必要ト認ムルトキハ之ヲ所轄鑛山監督署長ニ請求スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ニ於テ右證明ノ爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ鑛業人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

第三十二條　鑛業人鑛業特許證ヲ毀損若ハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ所轄鑛山監督署ヲ經其ノ再下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

第三十三條　詐僞又ハ錯誤ニ由リ試掘ノ認可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ認可ヲ取消スヘシ若シ其ノ認可ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ其ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ賠償スヘシ

第三十四條　詐僞又ハ錯誤ニ由リ採掘ノ特許ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スヘシ若シ其ノ特許ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ハ特許ノ日ヨリ三十日以内ニ採掘特許ノ取消ヲ農商務大臣ニ訴願スルコトヲ得前項農商務大臣ノ裁定ニ不服アル者ハ其ノ裁定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十五條　第二十二條第二項及第二十三條第二項ノ場合ニ於テ理由ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ關係人又第二十五條但書ノ場合ニ於テ危險ノ虞ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

第三十六條　前條ノ判定ニ不服アル者ハ其ノ判定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ農商務大臣ノ裁定ヲ請求スルコトヲ得

第三十七條　鑛業人廢業シタルトキハ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署ニ届出テ鑛業特許證ヲ返納スヘシ

第三十八條　第十九條第二十八條第二十九條第三十四條第四十三條及第七十六條ニ依リ農商務大臣ニ於テ採掘ノ特許ヲ取消シ又ハ第三十七條ニ依リ廢業ノ届出ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ特許ヲ得タル鑛物ノ採掘權ニ對シ抵當權ヲ有スル債主ハ其ノ抵當權ヲ失フモノトス但第十九條及第三十四條ノ場合ヲ除クノ外債主ニ於テ六十日以内ニ其ノ鑛區ノ採掘ヲ願出ルトキハ出願ノ先後ニ拘ハラス特許ヲ與フヘシ

第三十九條　鑛業人ハ毎年一月前年ニ採取シタル鑛物ノ員數、製產物、其ノ販賣高、販賣代價、行業日數及工數ヲ所轄鑛山監督署ニ届出フヘシ

第四十條　鑛業人ハ農商務大臣定ムル所ノ書式ニ依リ帳簿ヲ調製シ製產物ノ員數及販賣代價等ヲ記載スヘシ

第三章　鑛區

第四十一條　鑛區トハ鑛物ノ採掘ヲ爲ス土地區域ヲ謂フ

鑛區ノ境界ハ直線ヲ以テ之ヲ定メ地表境界線ノ直下ヲ限トス其ノ一鑛區ノ面積ハ石炭ハ一萬坪以上其ノ他ノ鑛物ハ三千坪以上トシ共ニ六十萬坪ヲ超ユルコトヲ得ス

第四十二條　出願ニ係ル鑛區ノ位置形狀、鑛床ノ位置形狀ト相違シ鑛利ヲ損スヘキモノト認メタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ之ヲ出願人ニ通知シ訂正セシムヘシ

出願人前項ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ三十日以内ニ訂正シテ差出ササルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第四十三條　特許ヲ得タル鑛區ノ位置形狀、鑛床ノ位置形狀ト相違シ鑛利ヲ損スヘキモノト認メタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ農商務大臣ノ認可ヲ經六十日以内ノ期限ヲ定メ訂正セシムヘシ

若シ訂正セサルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル特許ヲ取消スコトヲ得

鑛業人前項特許取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第四十四條　鑛業人鑛床ノ形狀ニ依リ鑛區ノ境界若ハ位置ノ訂正ヲ要スルトキハ其ノ願書ニ理由書、訂正鑛區圖及鑛業特許證ヲ添ヘ農商務大臣宛ニテ所轄鑛山監督署ニ差出スヘシ

農商務大臣ニ於テ訂正ヲ必要ト認メタルトキハ更ニ鑛業特許證ヲ下附スヘシ

第四十五條　鑛業人鑛區ノ訂正ヲ出願シタル場合ニ於テ所轄鑛山監督署長吏員ノ實地臨檢ヲ必要トスルトキハ鑛業人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

鑛業人前項旅費日當納付ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ納メサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第四十六條　鑛區ヲ合併シ又ハ分割セント欲スル者ハ合併又ハ分割鑛區圖及鑛業特許證ヲ添ヘ所轄鑛山監督署ヲ經テ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ採掘權ヲ抵當ニ取リタル債主アルトキハ其ノ承諾書ヲ添フヘシ

鑛區ノ分割ハ第四十一條ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス

第四章　土地使用

第四十七條　試掘又ハ採掘ヲ出願スル爲他人ノ土地ヲ測量スルコトヲ必要トスルトキハ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受クヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

若シ測量ノ爲ニ損害ヲ生シタルトキハ其ノ測量ヲ請求シタル者ニ於テ之ヲ賠償スヘシ

測量請求者他人ノ所有地ニ入ルトキハ豫メ其ノ土地所有者ニ通知シ且測量認可證ヲ携帶スヘシ

第四十八條　左ノ場合ニ於テ鑛業上他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ必要トシ鑛業人其ノ貸渡ヲ請求シタルトキハ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

一　坑口ヲ開穿スル爲

一　鑛物及土石ノ堆積場ヲ設置スル爲

一　坑道、道路、鐵道、馬車鐵道、運河、溝渠及溜池ヲ開設スル爲

一　鑛業上必要ノ製錬場及建物ヲ建設スル爲

第四十九條　左ノ場合ニ於テハ土地所有者又ハ關係人ハ土地貸渡ノ請求ヲ拒ムコトヲ得

一　貸渡請求ノ土地第二十五條ニ記載シタル場所ニ係ルトキ

一　土地借受人ニ於テ第五十條ノ保證金ヲ差出ササルトキ

第五十條　土地借受人ハ貸渡ヲ受ケタル土地ニ對シ其ノ土地貸渡人ニ相當ノ借地料ヲ仕拂フヘシ

土地貸渡人ハ借地料ノ保證金トシテ土地借受人ニ豫メ土地登帳ニ記載シタル地價以内ノ金額ヲ差出サシムルコトヲ得

其ノ賈入トナリタル土地ニ對スル借地料及保證金ハ賈取主ニ於テ之ヲ受領スルモノトス

土地使用ニ依リ所有者又ハ關係人ニ損害ヲ與フルトキハ鑛業人ハ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ爲スヘシ

土地借受人土地ノ使用ヲ終リ其ノ使用中ノ借地料ヲ完納シタルトキハ土地貸渡人又ハ賈取主ハ

土地ト引換ニ保證金ヲ返還スヘシ

第五十一條　土地借受人貸渡ヲ受ケタル土地ノ使用ヲ終リタルトキハ土地貸渡人ノ要求ニ應シ其ノ土地ヲ原形ニ復シ返還スヘシ若シ原形ニ復シ難キトキハ土地借受人ニ於テ其ノ損害ヲ賠償スヘシ

第五十二條　土地借受人借地料ノ仕拂ヲ延滯シタルトキハ土地貸渡人ハ其ノ延滯借地料ニ相當スル金額ヲ保證金中ヨリ差引キ土地ヲ取戻スコトヲ得

前項土地ヲ取戻スニ當リ地上ニ建物等アルトキハ六十日以上ノ期限ヲ定メテ土地借受人ニ其ノ取除ヲ請求スヘシ若シ土地借受人ノ所在不分明ナルトキハ其ノ地方ノ新聞紙ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スヘシ

土地借受人右期限内ニ取除ヲナササルトキハ其ノ建物等ハ土地貸渡人ノ所有ニ歸スヘシ

第五十三條　鑛業人ノ請求ニ依リ土地ヲ分割シテ賃渡シ又ハ貸渡シタルカ爲殘地ノ利用ヲ害スルトキハ鑛業人ニ對シ其ノ土地全部ノ買取若ハ借受ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十四條　鑛業人ニ於テ貸渡ヲ受ケタル土地ヲ三箇年以上使用スル目的アルカ又ハ三箇年以上之ヲ使用スルトキハ土地貸渡人ハ鑛業人ニ其ノ土地ノ買取ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ其ノ買取ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十五條　土地ノ所有者及關係人ト測量請求人又ハ鑛業人トノ間ニ於テ土地貸渡、借地料、保證金、損害賠償金又ハ土地賣買代價ニ付協議調ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アルトキハ其ノ判定ノ通ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ土地貸渡ニ就テハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ借地料、保證金、損害賠償金若ハ土地賣買代金ニ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第五十六條　所轄鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ借地料、保證金、損害賠償金若ハ土地賣買代金ニ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第五十七條　鑛業人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ所轄鑛山監督署長ノ判定シタル借地料、保證金、損害賠償金又ハ賣買代金ニ不服アルモ其ノ金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若シ之ヲ受ケサルトキハ其ノ金額ヲ供託所ニ預ケ置キ土地ヲ使用スルコトヲ得

第五章　鑛業警察

第五十八條　鑛業ニ關スル警察事務ニシテ左ニ掲クルモノハ農商務大臣之ヲ監督シ鑛山監督署長之ヲ行フ

一　坑内及鑛業ニ關スル建築物ノ保安

一　鑛夫ノ生命及衛生上ノ保護

一　地表ノ安全及公益ノ保護

第五十九條　鑛業上ニ危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ニ其ノ豫防ヲ命シ又ハ鑛業ヲ停止スヘシ

所轄鑛山監督署長ニ於テ鑛業ヲ停止セントスルトキハ其ノ猶豫シ難キ場合ヲ除クノ外ハ農商務大臣ノ認可ヲ經ヘシ

第六十條　前條第一項ノ場合ニ於テ鑛業人直ニ其ノ豫防ニ著手セサルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ノ使用スル役員及鑛夫ヲ指揮シ其ノ豫防ヲ執行スヘシ

此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ其ノ使用スル役員及鑛夫ノ豫防ノ用ニ供シ且一切ノ費用ヲ負擔スルノ義務アルモノトス

第六十一條　第五十九條ニ依リ鑛業ヲ停止シタル後其ノ事故止ミタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ直ニ鑛業ノ停止ヲ解ク其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第六十二條　農商務大臣ニ於テ此ノ條例ニ依リ採掘ノ特許ヲ取消シタルトキ又ハ鑛業人廢業シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ六十日以上ノ期限ヲ定メ鑛業ノ爲建設シタル家屋及其ノ他ノ建物等ヲ除去セシムヘシ若シ右期限内ニ除去セサルトキハ其ノ建物等ハ土地所有者ノ所有ニ歸ス但所轄鑛山監督署長ニ於テ坑内保安ノ爲ニ必要ト認ムル坑内及坑口ノ構造物ハ之ヲ除去スルコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ鑛業人ノ所在不分明ナルトキハ第五十二條第二項ノ手續ニ依ルヘシ

第六十三條　農商務大臣ハ此ノ條例ノ範圍内ニ於テ省令ヲ以テ鑛業警察規則ヲ定ムルコトヲ得

第六章　鑛夫

第六十四條　鑛夫トハ鑛物ノ採掘及之ニ附屬スル業務ニ從事スル男女ノ職工ヲ謂フ

鑛業人ハ其ノ使役スル鑛夫ノ使役規則ヲ定メ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受クヘシ

第六十五條　鑛業人ト鑛夫トノ間ニ特別ノ約定ナキ場合ニ於テ雙方トモ十四日以前ニ通知スルトキハ屆役ノ解約ヲナスコトヲ得

第六十六條　左ノ場合ニ於テハ鑛業人ハ何時タリトモ鑛夫ヲ解雇スルコトヲ得

一　輕罪以上ノ刑ニ處セラレタルカ又ハ不行狀ノ所爲アルカ若ハ命令ヲ遵守セサルトキ

一　鑛業人又ハ其ノ使用スル役員ニ對シ粗暴ノ所爲アリタルトキ

一　身體虛弱ニシテ業務ニ堪ヘサルトキ

一　鑛業ヲ禁止セラレ又ハ廢業シタルトキ

第六十七條　左ノ場合ニ於テハ鑛夫ハ何時タリトモ其ノ雇役ヲ辭ムルコトヲ得

一　身體虛弱ニシテ業務ニ堪ヘサルトキ

一　鑛業人又ハ其ノ使用スル役員ニ於テ虐待シタルトキ

第六十八條　鑛業人又ハ其ノ代理人ハ解雇スル鑛夫ノ請求ニ依リ從來ノ業務年限本人ノ技能、賃錢及解雇ノ事由ヲ記載シタル證明書ヲ與フヘシ

鑛業人證明書ヲ與フルコトヲ拒ムカ又ハ鑛夫ニ於テ證明書中不當ト認ムル事項アルトキハ所轄鑛山監督署長若ハ警察官ニ申告スルコトヲ得

第六十九條　鑛業人ハ鑛夫ノ賃錢ヲ週貸ニテ仕拂フヘシ鑛夫ノ請求アルニアラサレハ物品ヲ以テ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

第七十條　鑛業人ハ鑛夫名簿ヲ備ヘ置キ氏名、年齡、本籍、職業、雇入及解雇ノ年月日ヲ記入スヘシ

第七十一條　農商務大臣ハ左ニ記載スル制限内ニ於テ省令ヲ以テ鑛夫工役規則ヲ定ムルコトヲ得

一　一日十二時間以上ノ就業時間ヲ制限スルコト

一　女工ノ工役ノ種類ヲ制限スルコト

一　十四年以下ノ男女職工ノ就業時間及工役ノ種類ヲ制限スルコト

第七十二條　鑛業人ハ左ノ場合ニ於テ其ノ屋入鑛夫ヲ救恤スヘシ其ノ救恤規則ハ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受クヘシ

一　鑛夫自己ノ過失ニ非スシテ就業中負傷シタル場合ニ於テ診療費及療養費ヲ補給スルコト

一　前項ノ場合ニ於テ鑛夫ニ療養休業中相當ノ日當ヲ支給スルコト

一　前項ノ負傷ニ由リ鑛夫ノ死亡シタルトキ埋葬料ヲ補給シ及遺族ニ手當ヲ支給スルコト

一　前項ノ負傷ニ由リ癒疾トナリタル鑛夫ニ期限ヲ定メ補助金ヲ支給スルコト

第七章　鑛業稅及鑛區稅

第七十三條　鑛業人ハ鑛業稅トシテ鑛業製產物ノ價格百分ノ一鑛區稅トシテ鑛區一千坪毎ニ一箇年金三十錢ヲ納ムヘシ但一千坪未滿ノ端數ニ對スル鑛區稅ハ之ヲ免除ス

鑛鑛ヲ採掘スル者ニハ鑛業稅ヲ課セス

第七十四條　前條鑛業製產物ノ價格ハ主要ナル市場ノ平均相場ヲ標準トシ農商務大臣ノ告示スル所ニ依ル但市場ノ相場ナキモノハ其ノ販賣代價ニ依ル

第七十五條　鑛業稅ハ前年分ヲ毎年三月三十一日限ニ又廢業ノ年ニ係ルモノハ廢業ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ

鑛區稅ハ一箇年分ヲ其ノ前年十二月十五日限ニ又初年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ採掘出願特許ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ其ノ廢業ノ年ニ係ルモノハ之ヲ返付セス

第七十六條　鑛業人納稅期限内ニ鑛業稅及鑛區稅ヲ納メサルトキハ農商務大臣ハ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得其ノ取消ニ不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第八章　罰則

第七十七條　第二十四條第二十五條ヲ犯シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十八條　特許ヲ得スシテ採掘ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ由リテ特許ヲ得タル者ハ十五圓以上百五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十九條　認可ヲ得スシテ試掘ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ由リテ認可ヲ得タル者又ハ認可ノ期限ヲ過キ尚ホ試掘ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十條　第二十七條ヲ犯シタル者及第五十九條ノ豫防ニ著手セサル者又ハ第六十二條但書ノ規定ヲ犯シタル者ハ十五圓以上百五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十一條　第三十一條第一項及第二項ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十二條　第十條ヲ犯シタル者ハ其ノ費得金ノ半額ニ相當スル罰金ニ處ス

第八十三條　第十一條ノ販賣代價ヲ隱匿シタル者ハ其ノ隱匿シタル金額ノ半額ニ相當スル罰金ニ處ス

第八十四條　第三十九條ニ依リ屆出フヘキ事項ヲ詐テ鑛稅シタル者ハ其ノ鑛稅金額ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ其ノ鑛稅ニ關セサル事項ニ係ルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十五條　第四十條ノ帳簿ヲ調製セス若ハ記載ヲ怠リ若ハ詐テ記載シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十六條　第六十四條第二項第六十九條及第七十二條ヲ犯シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十七條　第六條第三十七條第六十八條及第七十條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第八十七條　第八十一條第八十二條及第八十三條ノ場合ニ於テ自首シタル者ハ其ノ納付スヘキ金額ヲ追徵シ其ノ罪ヲ問ハス

第八十八條　此ノ條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

鑛業人未成年瘋顛白痴又ハ瘖啞ニシテ此ノ罰則ヲ犯シタルトキハ其ノ後見人ヲ處罰ス

第九章　附則

第八十九條　此ノ條例實施以前ニ許可ヲ得タル試掘人又ハ借區人ハ其ノ許可ヲ得タル年限中試掘又ハ鑛業ヲ爲スコトヲ得

第九十條　此ノ條例實施以前ニ借區人ノ許可ヲ得借區年限滿期後尚ホ引續キ鑛業ヲ爲サントスル者ハ借區滿期以前ニ此ノ條例ニ依リ出願スヘシ

第九十一條　此ノ條例ノ施行ニ關スル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九十二條　此ノ條例ハ明治二十五年六月一日ヨリ施行ス明治六年太政官第二百五十九號布告日本坑法ハ同日限之ヲ廢止ス

●鑛業條例施行細則（明治三十二年二月農商務省令第三號）

明治二十七年農商務省令第六號鑛業條例施行細則左ノ通改正ス

鑛業條例施行細則

第一條　鑛業ニ關スル願書、請求書、屆書及圖面ハ一件毎ニ調製スヘシ

鑛業ニ關スル願書又ハ其ノ添附圖面ニシテ本令ニ書式又ハ雛形ヲ定メタルモノハ其ノ書式又ハ雛形ニ準シテ之ヲ調製スヘシ

第二條　鑛業ニ關スル願書、請求書及屆書ニシテ登錄稅法第十四條又ハ明治三十二年勅令第四號ニ規定シタル事項ニ係ルモノニハ第十二號ノ書式ニ準シ相當ノ收入印紙ヲ貼用シタル上納書ヲ添附スヘシ

第三條　試掘願書及試掘地圖ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ニ試掘地略測圖ヲ添附シテ差出シ區キ試掘地圖ハ出願ノ日ヨリ五十日以內ニ之ヲ差出スヘシ

第四條　鑛業條例第十二條第二項ノ規定ニ依リ鑛區圖ヲ添附セスシテ採掘願書ヲ差出ストキハ鑛區圖ヲ添附スヘシ

區界測圖ヲ添附スヘシ

第五條　鑛業條例第四十七條ノ規定ニ依リテ測量ノ認可ヲ受ケントスル者ハ測量スヘキ土地ノ地名ヲ詳記シタル請求書ヲ差出スヘシ

前項ノ請求ニ因リテ測量認可證ヲ下付スルトキハ鑛山監督署長ニ於テ其ノ有效期限ヲ定メテ之ニ記載スヘシ

測量スヘキ土地ノ所有者又ハ關係人ニ於テ其ノ測量ヲ承諾シタルトキハ認可ヲ受クルコトヲ要セス

第六條　試掘地略測圖及鑛區略測圖ハ出願地ノ位置及區域ヲ確定スル目的ヲ以テ調製スヘシ

試掘地圖及鑛區圖ハ出願地ノ位置、境界及地形ヲ明示スル目的ヲ以テ調製スヘシ

第七條　出願區域ハ成ルヘク方形ニ近キ形狀ニ區劃スヘシ

略測圖ヲ以テ試掘又ハ採掘ヲ出願スルトキハ出願地ノ各隅ト爲ルヘキ測點ニハ不動物體ヲ選定スヘシ若シ不動物體ナキトキハ近傍ニ不動物體ヲ選定シ測點ニ對スル關係ヲ測定スヘシ

試掘地圖ヲ以テ試掘ヲ出願スルトキ又ハ鑛區圖ヲ以テ採掘ヲ出願スルトキハ顯著ナル不動物體二箇以上ヲ成ルヘク反對ノ位置ニ選定シテ之ヲ基點ト爲シ測點ニ對スル關係ヲ測定スヘシ若シ測點カ顯著ナル不動物體ニ符合スルトキハ之ヲ基點トナスヘシ

出願區域ノ各隅ト爲ルヘキ測點ニハ堅固ナル標杭ヲ設置シ之ニ測點ノ番號ヲ記載スヘシ若シ其ノ標杭カ不動物體ニ符合スヘキトキハ之ヲ設置スルコトヲ要セス

第八條　試掘地略測圖、鑛區略測圖、試掘地圖及鑛區圖ニハ左ノ事項ヲ明示スヘシ

一　基點及不動物體並ニ其ノ名稱、特徵

二　南北線及縮尺

三　出願地ヨリ五十間以內ニ他ノ試掘地、鑛區又ハ砂鑛採取地アルトキハ之ト出願地トノ關係

四　出願地內又ハ其ノ附近ニ鑛業條例第二十四條又ハ第二十五條ニ定メタルモノアルトキハ其ノモノ

五　出願地內又ハ其ノ附近ニ在ル鑛床露頭及其走向、傾斜

第九條　試掘地訂正願書又ハ鑛區訂正願書ニ添附スヘキ圖面ハ試掘地圖又ハ鑛區圖ニ準シテ調製シ新舊區域ヲ明示スヘシ

第十條　試掘地ノ區域ハ鑛業條例第四十一條第二項ノ規定ニ依ルヘシ

第十一條　他人ノ試掘地又ハ鑛區ニ隣接シテ試掘地又ハ鑛區ヲ得ントスル者ハ中間ニ十間以上ノ距離ヲ置キ出願スヘシ但隣接鑛業人ノ承諾ヲ得タルトキ又ハ試掘地ニ於テ採掘ヲ出願スルトキハ此ノ限ニ在ラス

鑛業ノ監督又ハ鑛利保護ノ爲メ必要ナリト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ前項ノ距離ヲ五十間迄延長スルコトヲ得

第十二條　試掘若ハ採掘ヲ出願スル者、鑛業特許證書換願ニ因リテ新ニ鑛業人ト爲ルヘキ者又ハ出願人變更願ニ因リテ新ニ出願人ト爲ルヘキ者二人以上ナルトキハ總代一名ヲ選定シテ之ヲ願書ニ記載スヘシ若シ之ヲ記載セサルトキハ初錄出願人ヲ以テ總代ト看做ス

前項ノ總代ハ出願ノ取消及出願人ノ變更ヲ除ク外共同出願人ヲ代表スルモノトス

第十三條　會社カ鑛業ニ關スル願書、請求書又ハ屆書ヲ差出ストキハ其ノ書類ニ社印ヲ押捺シ且會社ノ代表者之ニ署名捺印スヘシ

第十四條　試掘又ハ採掘ヲ出願シタル者ハ其ノ出願區域ノ變更ヲ出願スルコトヲ得ス

第十五條　採掘出願人ヲ變更セントスルトキハ新舊出願人ノ連署連印シタル願書ヲ所轄鑛山監督署長ニ差出スヘシ

第十六條　相隣接スル鑛區ノ鑛業人カ鑛業條例第四十四條ノ規定ニ依リ關係鑛區ヲ增減シテ相互ノ境界ヲ訂正セントスルトキハ連署連印シタル鑛區訂正願書ニ改定境界ヲ圖示シタル現鑛區驛絡圖及各別ニ調製シタル訂正鑛區圖ヲ添附スヘシ

第十七條　採掘權ニ對シ抵當權ヲ有スル債主アル場合ニ於テ鑛區ノ減區訂正ヲ出願セントスルトキハ願書ニ其ノ債主ノ承諾書ヲ添附スヘシ

第十八條　鑛業特許證書換願書、鑛區訂正願書、鑛區合併願書、鑛區分割願書、採掘權書入登錄願書、採掘ノ廢業屆書及鑛業條例第九十條ノ規定ニ依ル採掘特許願書ニハ鑛業特許證若ハ借區券ヲ添附スヘシ

第十九條　試掘願書、採掘願書、試掘地訂正願書、鑛區訂正願書、試掘延期願書及試掘又ハ採掘ノ廢業屆書ハ書留郵便ヲ以テ差出スヘシ

前項ノ書類ヲ差出ス者ハ發送郵便局ニ於テ受付ノ年月日及時刻ヲ記載シタル書留郵便物受取證ヲ請求スヘシ

第三條又ハ鑛業條例第十二條第二項ノ規定ニ依リテ願書ト同時ニ差出サル試掘地圖又ハ鑛區圖及第二十二條又ハ第二十三條ノ規定ニ依リテ所轄鑛山監督署長ヨリ期日ヲ指定シテ修正又ハ補充ヲ命セラレタル願書又ハ其ノ添附圖面ヲ差出ストキハ前二項ノ手續ニ依ルヘシ但期限ノ末日ニ差出ストキハ三日以內ニ書留郵便物受取證ヲ差出スヘシ

第二十條　試掘、採掘、試掘地訂正、鑛區訂正並ニ試掘延期ノ出願日時及前條第三項ノ願書、圖面並ニ廢業屆書ノ差出日時ハ發送郵便局ヨリ交付シタル書留郵便物受取證ニ記載シタル日時ニ依リテ之ヲ定ム

前條第二項ノ受取證ノ差出ヲ命シタル場合ニ於テ其ノ指定期日迄ニ之ヲ差出ササルトキハ郵便物消印便ノ締切時刻ニ書類又ハ圖面ヲ差出シタルモノト看做ス

第二十一條　鑛山監督署長カ試掘願書又ハ採掘願書ヲ受理シタルトキハ其ノ出願地ノ地方長官ニ其ノ願書ノ要旨ヲ通知スヘシ

地方長官ハ出願地ノ試掘又ハ採掘ニ付キ意見アルトキハ前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五十日以內ニ其ノ意見書ヲ所轄鑛山監督署長ニ送付スヘシ

第二十二條　鑛業ニ關スル願書、請求書又ハ圖面カ不完備ナルトキハ所轄鑛山監督署長ハ期日ヲ指定シ出願人ヲシテ之ヲ修正又ハ補充セシムヘシ

第二十三條　試掘又ハ採掘ノ出願區域ノ一部カ鑛業條例ニ依リ鑛業ヲ許可スヘカラサルモノナルトキ又ハ他人ノ試掘地若ハ鑛區ト重複スルトキハ所轄鑛山監督署長ハ期日ヲ指定シ出願人ヲシテ願書及圖面ヲ修正セシムヘシ試掘地又ハ鑛區ノ訂正願書ニ付テモ亦同シ

第二十四條　採掘出願地ニ鑛物ノ存在スル事實ヲ認定スル爲メ必要ナリト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ期日ヲ指定シ出願人ヲシテ鑛床ニ關スル證明書又ハ鑛物ノ標品ヲ差出サシムルコトヲ得

第二十五條　鑛山監督署長ハ公益上豫防ノ設備ヲ命スル必要アリト認ムルトキハ期日ヲ指定シ鑛業出願人又ハ鑛業人ヲシテ其設備ニ關スル設計書ヲ差出サシムルコトヲ得

第二十六條　鑛業出願人又ハ鑛業人カ所轄鑛山監督署長ヨリ鑛業ニ關スル書類又ハ圖面ノ差出ヲ命セラレタルトキハ指定ノ期日迄ニ之ヲ差出スヘシ

第二十七條　鑛業ニ關シ農商務大臣又ハ鑛山監督署長ニ差出シタル書類、圖面又ハ標品ニシテ必要ト認ムルモノハ之ヲ返付セス

第二十八條　鑛業出願人又ハ鑛業人カ所轄鑛山監督署長ヨリ試掘地、鑛區其ノ他鑛業ニ關スル調査ノ爲メ立會ヲ命セラレタルトキハ指定ノ期日ニ立會ヲ爲シ且調査事項ニ關スル說明ヲ爲スヘシ立會ノ期日ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

立會ヲ命スルニハ正當ノ理由アル場合ヲ除ク外少クトモ十五日前ニ之ヲ豫告シ期日確定シタルトキハ少クトモ三日前ニ之ヲ通知スヘシ

鑛業出願人又ハ鑛業人カ自ラ立會ヲ爲スコト能ハサルトキハ代理人ヲ差出スヘシ

第二十九條　鑛業ニ關スル願書、請求書又ハ屆書カ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ之ヲ受理セス

一　第十九條第一項ノ規定ニ違反シ書留郵便ヲ以テ差出ササルトキ

二　登錄稅又ハ手數料ノ上納書ヲ添附セサルトキ

三　試掘願書、採掘願書、試掘地訂正願書又ハ鑛區訂正願書ニ圖面ヲ添附セス又ハ添附圖面ニ依リ出願ノ區域分明ナラサルトキ

第三十條　鑛業ニ關スル願書又ハ請求書カ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ所轄鑛山監督署長ニ於テ事由ヲ明示シテ之ヲ却下スヘシ

一　第三條ニ定メタル期間内ニ試掘地圖ヲ差出ササルトキ

二　第二十二條又ハ第二十三條ノ規定ニ依リテ所轄鑛山監督署長カ指定シタル期日迄ニ修正又ハ補充ヲ爲ササルトキ

三　第二十四條ノ規定ニ依リテ所轄鑛山監督署長カ指定シタル期日迄ニ證明書又ハ標品ヲ差出ササルトキ

四　出願人カ第二十五條ノ規定ニ依リテ所轄鑛山監督署長カ指定シタル期日迄ニ設計書ヲ差出ササルトキ

五　出願人カ正當ノ理由ナクシテ第二十八條ノ規定ニ違反シテ立會ヲ爲ササルトキ

六　出願地調査ノ際出願人カ其ノ區域ヲ明示スルコト能ハサルトキ、其ノ指示スル區域カ願書ニ添附シタル圖面ト著シク相違スルトキ又ハ鑛物ノ存在ヲ證明スルコト能ハサルトキ

第三十一條　試掘ヲ認可スルトキハ試掘地圖ニ認可ノ番號ヲ記入シ所轄鑛山監督署ニ保存スル試掘地圖ト契印シテ之ヲ出願人ニ下付ス

採掘ヲ特許スルトキハ鑛區圖ニ特許ノ番號ヲ記入シ農商務省及所轄鑛山監督署ニ保存スル鑛區圖ト契印シテ之ヲ鑛業特許證ニ添附シ出願人ニ下付ス

第三十二條　試掘又ハ採掘ヲ許可シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十三條　鑛業人カ第三十一條ノ規定ニ依リテ下付セラレタル圖面ヲ毀損若ハ亡失シタルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ再下付ヲ出願スルコトヲ得

第三十四條　鑛業條例第六條ノ總代届書ハ試掘、採掘又ハ鑛業特許證書換ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ之ヲ差出スヘシ

第三十五條　鑛業人カ前條ノ期間内ニ總代届書ヲ差出ササルトキハ第十二條第一項ニ定メタル出願ノ總代ヲ以テ鑛業條例第六條ノ總代ト看做ス

第三十六條　鑛業人カ自ラ鑛業ヲ管理セサルトキハ鑛業代理人ヲ選定シ連署連印シタル届書ヲ所轄鑛山監督署長ニ差出スヘシ

第三十七條　鑛業代理人ハ左ノ權限ヲ委任セラレタルモノト看做ス但鑛業人カ其ノ代理權ニ制限ヲ加ヘタルトキハ鑛業代理人選定ノ届出ト共ニ其ノ旨ヲ届出ツヘシ

一　試掘延期ヲ出願スルコト、鑛業警察規則第十一條第一項ノ金額ヲ納ムルコト、鑛業施業案ノ認可ヲ出願スルコト、坑内實測圖ヲ差出シ又ハ坑内實測圖ノ證明ヲ請求スルコト、鑛業條例第三十九條ノ届出ヲ爲スコト、同第四十條ノ帳簿ヲ調製スルコト、同第五十五條ノ判定又ハ裁定ヲ請求スルコト、鑛夫使役規則及鑛夫救恤規則ノ認可ヲ出願スルコト、鑛夫名簿ヲ調製スルコト、鑛業稅及鑛區稅ヲ納ムルコト及鑛業條例第九十條ニ依リテ採掘特許ヲ出願スルコト

二　第三十三條ノ規定ニ依リテ圖面ノ再下付ヲ出願スルコト、第四十二條及第四十三條ノ届出ヲ爲スコト、鑛業警察規則第十四條、第十七條、第十九條及第二十一條ノ出願又ハ届出ヲ爲スコト

三　所轄鑛山監督署長ノ命令通知ヲ受クルコト及其命令ヲ執行スルコト

第三十八條　試掘人ハ試掘地圖、採掘人ハ左ノ書類及圖面ヲ鑛業事務所ニ備ヘ置クヘシ

一　鑛區圖

二　鑛業施業案

三　鑛業條例第四十條ノ帳簿

第三十九條　試掘延期ハ滿期前ニ出願シ且其ノ願書ニ試掘ノ成績及其ノ事業ヲ竣ヘ難キ事由ヲ詳記スヘシ

第四十條　鑛業條例第十條ノ規定ニ依リテ鑛物ヲ販賣セントスル者ハ試掘ノ認可番號、試掘地ノ地名、鑛物名、數量及見積代價ヲ記載シタル認可願書ヲ差出スヘシ但試掘地ニ於テ採掘ヲ出願シタルトキ、試掘ノ滿期又ハ廢業ノトキニ非サレハ之ヲ認可セス

第四十一條　鑛業施業案、鑛業條例第三十九條ノ届書及同第四十條ノ帳簿ハ第四號乃至第六號ノ雛形ニ準シテ之ヲ調製スヘシ

二箇以上ノ鑛區ニ付キ合併施業ヲ爲ス場合ニ於テハ前項ノ書類モ亦各合併シテ之ヲ調製スヘシ

第四十二條　鑛業條例第三十九條ノ規定ニ依リ届出ツヘキ事項ナキトキハ其ノ旨ヲ届出ツヘシ

第四十三條　鑛業條例第三十九條ノ届書ハ採掘ノ廢業又ハ採掘權讓渡ノ場合ニ於テハ其ノ日ヨリ三十日以内ニ之ヲ差出スヘシ但届出ツヘキ事項ナキトキハ其ノ旨ヲ届出ツヘシ

第四十四條　坑内實測圖ハ第三號ノ雛形ニ準シテ調製シ毎年六月末日及十二月末日ノ現況ヲ明示シ各八月末日及二月末日迄ニ所轄鑛山監督署長ニ差出スヘシ但前期ニ差出シタル坑内實測圖ハ請求ニ因リ之ヲ下付ス

二箇以上ノ鑛區ニ付キ合併施業ヲ爲ス場合ニ於テハ坑内實測圖モ亦合併シテ之ヲ調製スヘシ

第四十五條　鑛業條例第三十一條第三項ノ規定ニ依リテ坑内實測圖ノ證明ヲ得ントスル者ハ其ノ

事由ヲ記載シタル請求書ヲ差出スヘシ

第四十六條　鑛業條例第三十五條ノ規定ニ依リテ鑛山監督署長ノ判定ヲ請求スル者ハ請求書二通ヲ作リ之ニ對手人ノ氏名、住所及請求ノ理由ヲ記載シ請求人ノ出願セントスル試掘地又ハ鑛區ノ圖面ヲ添附シテ之ヲ差出スヘシ

鑛業條例第五十五條第一項ノ規定ニ依リテ鑛山監督署長ノ判定ヲ請求スル者ハ請求書及對手人ノ數ニ相當スル副本ヲ作リ之ニ請求ニ關スル土地ノ種目、番號、坪數、地價、對手人ノ氏名、住所、請求ノ事項並ニ理由、對手人ト協議シタル事實及請求人ニ於テ仕拂ハントスル金額ヲ記載シ關係土地ノ實測圖及工事設計書ヲ添附シテ之ヲ差出スヘシ

鑛業條例第三十六條又ハ第五十五條第二項ノ規定ニ依リテ農商務大臣ノ裁定ヲ請求スル者ハ前二項ノ規定ニ從ヒテ作リタル請求書ニ判定書ノ謄本ヲ添附シテ之ヲ所轄鑛山監督署長ニ差出スヘシ

第四十七條　鑛山監督署長カ前條ノ請求書ヲ受理シタルトキハ之ヲ對手人ニ送付スヘシ

對手人カ請求書ノ送付ヲ受ケタルトキハ三十日以内ニ證明書ヲ差出スヘシ

對手人カ前項ノ期間内ニ證明書ヲ差出ササルトキハ鑛山監督署長又ハ農商務大臣ハ其ノ證明書ノ差出ヲ待タスシテ判定又ハ裁定スルコトアルヘシ

第四十八條　相續ニ因リテ鑛業人ト爲リタル者又ハ氏名ヲ變更シタル鑛業人ハ戸籍吏ニ届出テタルヨリ三十日以内ニ其證明ヲ受ケ且鑛業特許證又ハ借區券ヲ添附シテ所轄鑛山監督署長ニ届出テ其ノ訂正ヲ受クヘシ

鑛業出願人カ死亡シタルトキ又ハ其ノ氏名ヲ變更シタルトキハ前項ニ準シテ届出ヲ爲スヘシ

第四十九條　會社カ鑛業出願人又ハ鑛業人タル場合ニ於テ其ノ社名又ハ代表者ヲ變更シ其ノ營業所ヲ移轉シ又ハ會社カ解散シタルトキハ十日以内ニ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署長ニ届出ツヘシ

第五十條　鑛業出願人又ハ鑛業人ニ命令通知ヲ要スルコトアル場合ニ於テ其ノ住所カ不分明ナルトキハ十日間其ノ要旨ヲ所轄鑛山監督署ノ掲示場ニ掲示スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ期間ノ末日ニ命令通知ヲ受ケタルモノト看做ス

第五十一條　鑛業條例第三十條、第三十三條第二項、第三十四條第二項、第四十三條第二項若ハ第七十六條ノ規定ニ依リテ行政裁判所ニ出訴シタル者又ハ同第三十四條第一項ノ規定ニ依リテ農商務大臣ニ訴願シタル者ハ七日以内ニ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署長ニ届出ツヘシ

第五十二條　鑛業條例第二十八條、第二十九條、第四十三條第一項若ハ第七十六條ノ規定ニ依リテ採掘特許ヲ取消シ又ハ同第三十七條ノ規定ニ依リテ廢業ヲ届出テタル場合ニ於テ其ノ採掘權ニ對シ抵當權ヲ有スル債主アルトキハ所轄鑛山監督署長ハ之ヲ其ノ債主ニ通知スヘシ

第五十三條　試掘又ハ採掘ハ廢業届書差出ノ日時ニ於テ廢業シタルモノト看做ス

第五十四條　左ノ場合ニ於テハ鑛業人ヲ二回以上二十四以下ノ罰金ニ處ス

一　坑内實測圖ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

二　第二十五條又ハ第二十六條ノ規定ニ依リテ書類又ハ圖面ノ差出ヲ命セラレタル場合ニ於テ指定ノ期日迄ニ之ヲ差出ササルトキ

三　第二十八條ノ規定ニ違反シテ立會ヲ爲サス又ハ調査事項ノ說明ヲ爲ササルトキ

四　第三十八條ノ書類又ハ圖面ヲ備ヘ置カサルトキ

五　第三十六條、第四十二條、第四十三條、第四十八條、第四十九條、第五十一條、第六十條又ハ鑛業條例第三十九條ノ規定ニ違反シテ届出ヲ爲ササルトキ

第五十五條　前條ノ規定ハ鑛業代理人及會社ノ代表者ニ之ヲ適用ス

附則

第五十六條　鑛業條例施行以前ニ差出シタル試掘願書又ハ借區願書ニシテ本令施行ノ日迄ニ處分ヲ終ラサルモノハ鑛業條例ニ依レル試掘願書又ハ採掘願書ト看做シ處分スヘシ

第五十七條　本令施行以前ニ差出シタル願書又ハ請求書ニシテ本令施行ノ日迄ニ處分ヲ終ラサルモノハ本令ニ依レル願書又ハ請求書ト看做シ處分スヘシ

第五十八條　本令施行以前ニ差出シタル願書又ハ請求書ニシテ明治二十七年勅令第百號ニ定メタル手數料ニ相當スル收入印紙ヲ貼用シタルモノハ明治三十二年勅令第四號施行ノ後ト雖モ仍ホ有效トス

第五十九條　本令施行以前ニ差出シタル區域變更願書ハ本令施行ノ後ト雖モ仍ホ有效トス

第六十條　本令施行ノトキニ於テ會社カ鑛業出願人又ハ鑛業人タル場合ニ於テハ本令施行ノ日ヨリ三十日以内ニ其ノ代表者ヲ所轄鑛山監督署長ニ届出ツヘシ

第六十一條　本令施行前ノ行爲ニ付テハ其ノ施行ノ後ト雖モ明治二十七年農商務省令第六號ニ定メタル罰則ヲ適用ス

第六十二條　本令ハ明治三十二年二月十日ヨリ施行ス

第六十三條　明治三十七年農商務省令第六號及明治三十九年農商務省令第七號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

書式(用紙美濃紙)

第一號(正副二通)

何鑛試掘認可願

何府縣國郡市町村大字内別紙試掘地(略測)圖ニ詳記セル箇所ニ於テ何鑛試掘致度候間認可相成度此段相願候也

年月日　願人　住所族籍　氏名　印
(出願人ヲシテ連署連印シ代理人ヲ爲スト雖モ共同)

何鑛山監督局長氏名殿

(注意　試掘地略圖五枚又ハ試掘地略測圖三枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第二號(正副二通)

何鑛試掘地訂正願

一何年何月何日認可第何號

何府縣國郡市町村何鑛試掘地何坪

坪(又ハ畝)何郡市町村大字小字何坪

合計(又ハ差引)何坪

右試掘地何々(番号ヲ記ス)ノ爲メ別紙訂正試掘地圖併記ノ通區域訂正致度候間認可相成度此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印

何鑛山監督局長氏名殿

(注意　訂正試掘地圖五枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第三號(正副二通)

何鑛試掘地廢止願

一何年何月何日認可第何號

何府縣國郡市町村何鑛試掘地

右試掘地何々(試掘ノ成績及鑛業ヲ設ヘル譯キ事由詳記)ノ爲メ年限滿了試掘致度候間認可相成度此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印
(又ハ代理人若ハ鑛業代理人氏名印)

何鑛山監督局長氏名殿

第四號(正副二通)

何鑛採掘特許願

何府縣國郡市町村大字別紙鑛區(略測)圖ニ詳記セル箇所ニ於テ何鑛存在致候ニ付キ採掘致度候間特許相成度此段相願候也

年月日　願人　住所族籍　氏名　印
(出願人ヲシテ連署連印シ代理人ヲ爲スト雖モ共同)

農商務大臣氏名殿

(注意　鑛區圖五枚又ハ鑛區略測圖三枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第五號(正副二通)

何鑛區訂正願

一何年月日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛區何坪

坪(又ハ畝)何郡市町村大字小字何坪

合計(又ハ差引)何坪

右鑛區何々(番号ヲ記ス)ノ爲メ別紙訂正鑛區圖併記ノ通訂正致度候間許可相成度鑛業特許證相添此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印

農商務大臣氏名殿

(注意　訂正鑛區圖五枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第六號(正副二通)

鑛業廢願(何年九十條ニ依ル何鑛採掘特許願)

一借許何號

何府縣國郡市町村何鑛借區

右借區年限滿了ニ付キ鑛業致度候間特許相成度鑛區圖及借區年相添此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印
(又ハ代理人若ハ鑛業代理人氏名印)

農商務大臣氏名殿

(注意　鑛區圖三枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第七號(正副二通)

何鑛區合併願

一何年何月何日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛區何坪

一何年何月何日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛區何坪

合計何坪

右ノ鑛區別紙合併鑛區圖併記ノ通合併致度候間許可相成度鑛業特許證相添此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印

農商務大臣氏名殿

(注意　合併鑛區圖三枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第八號(正副二通)

何鑛區分割願

一何年何月何日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛區何坪

此分割

何府縣國郡市町村何

右ノ通鑛區分割致度候間別紙分割鑛區圖及鑛業特許證相添此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印

農商務大臣氏名殿

(注意　分割鑛區圖各三枚ヲ添附シ適宜割印スベシ)

第九號(正副二通)

鑛業新許證書換願

一何年何月何日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛

右ノ採掘權ヲ他人ニ譲渡(賃貸)ノ契約相成度鑛業特許證書換願候間鑛業特許證相添此段相願候也

年月日　譲渡(賃渡)人　住所族籍　氏名　印
買受(賃受)人　住所族籍　氏名　印
(共同出願人ヲシテ連署連印シ代理人ヲ爲スト雖モ共同)

農商務大臣氏名殿

第十號(正副二通)

採掘權譲渡(賃渡)願

一何年何月何日特許第何號

何府縣國郡市町村何鑛

右ノ採掘權ヲ他人ニ譲渡(賃渡)ノ契約相成度鑛業特許證相添此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印
代理人　住所族籍　氏名　印

何鑛山監督局長氏名殿

第十一號(正副二通)

鑛業特許證(鑛區又ハ試掘地許可圖)再下付願

一何年何月何日特許(認可)第何號

何府縣國郡市町村何鑛

右特許證(鑛區又ハ試掘地許可圖)何々(番号ヲ記ス)ノ爲メ紛失(亡失)致候間再下付相成度此段相願候也

年月日　鑛業人　住所族籍　氏名　印
(又ハ代理人若ハ鑛業代理人氏名印)

農商大臣氏名殿

(注意　許可圖再下付願ハ所轄鑛山監督局長宛)

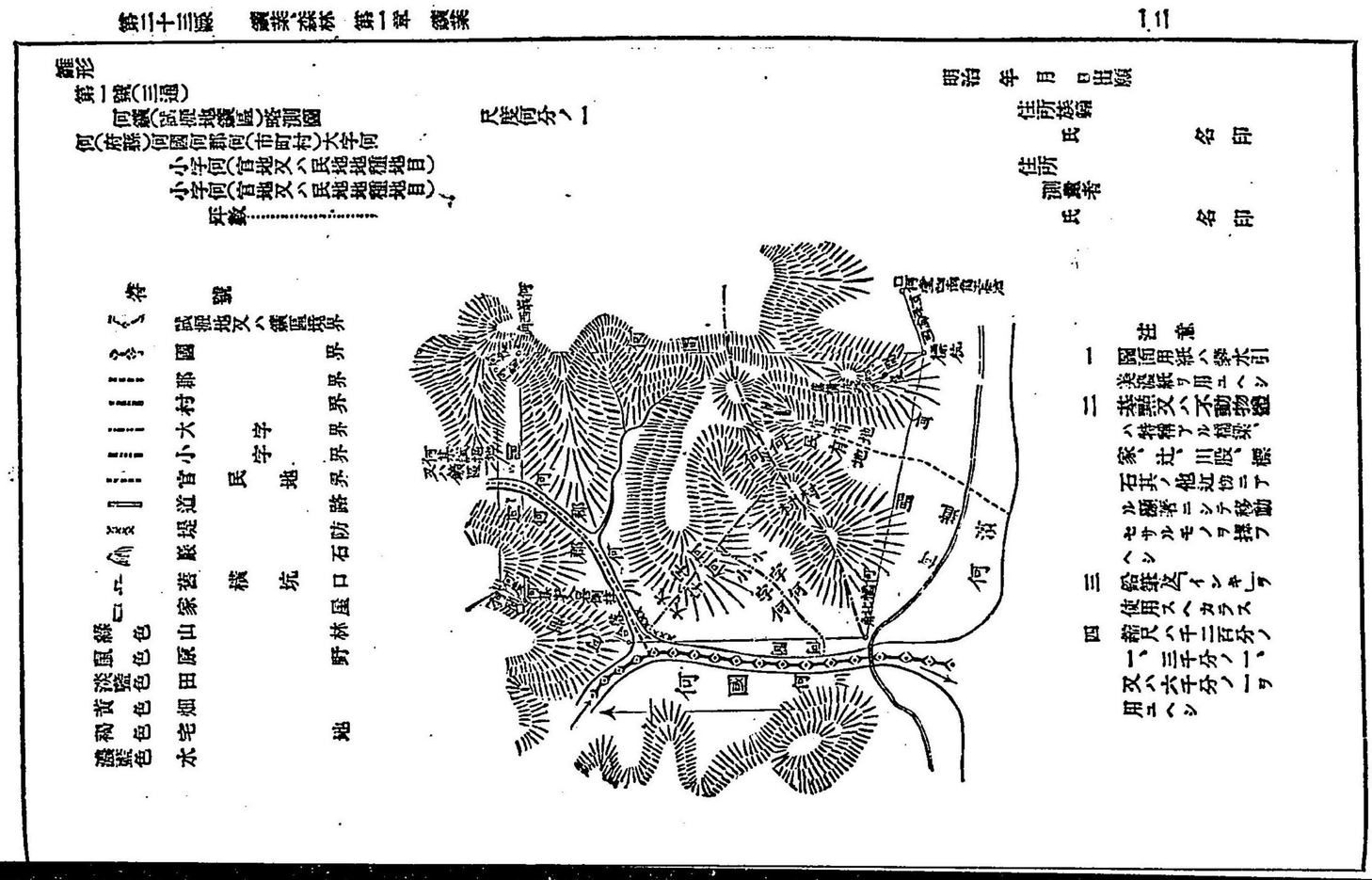
第十二號

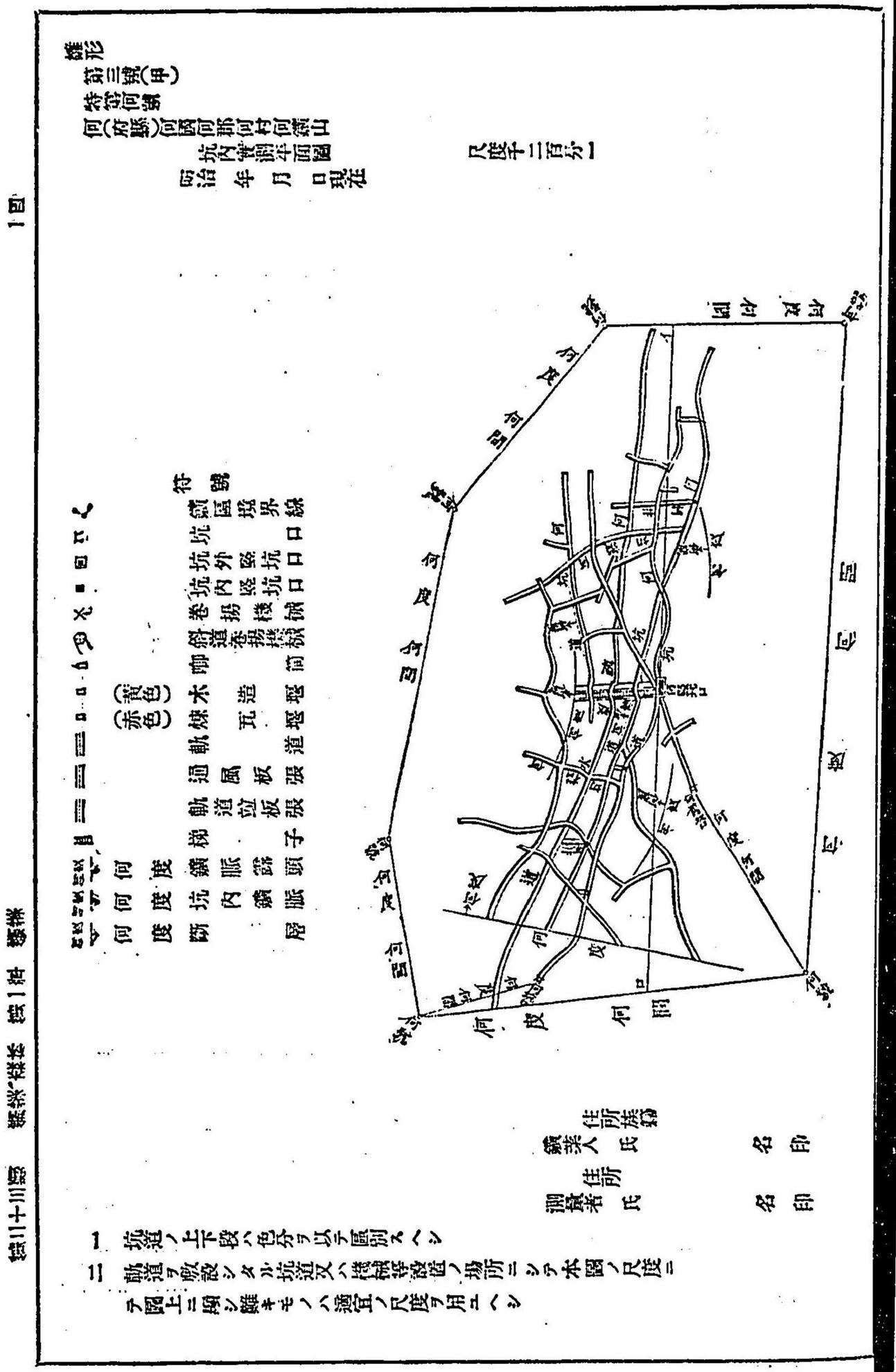
登録稅(手數料)上納書

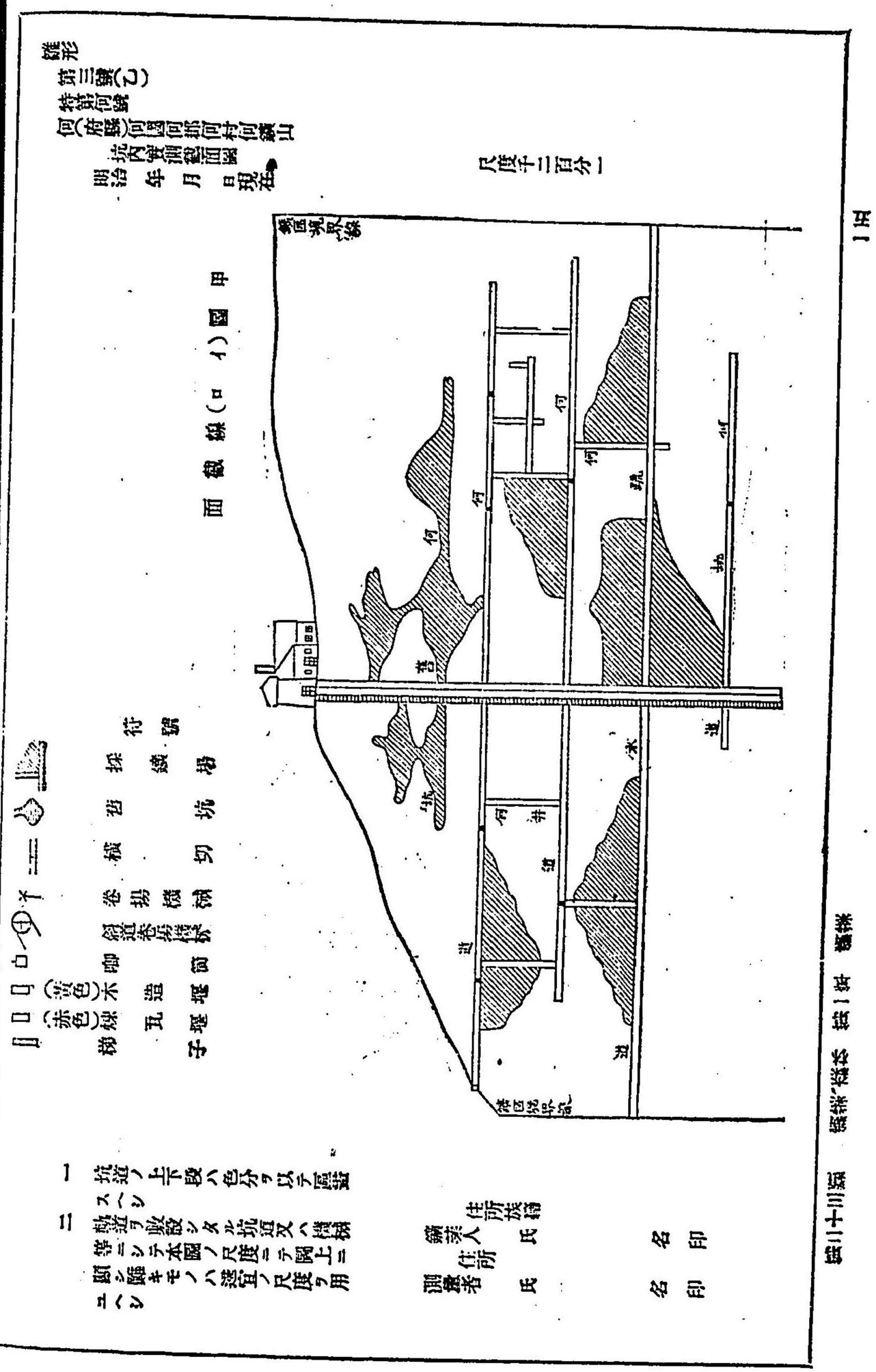
一何々願(屆又ハ請求)

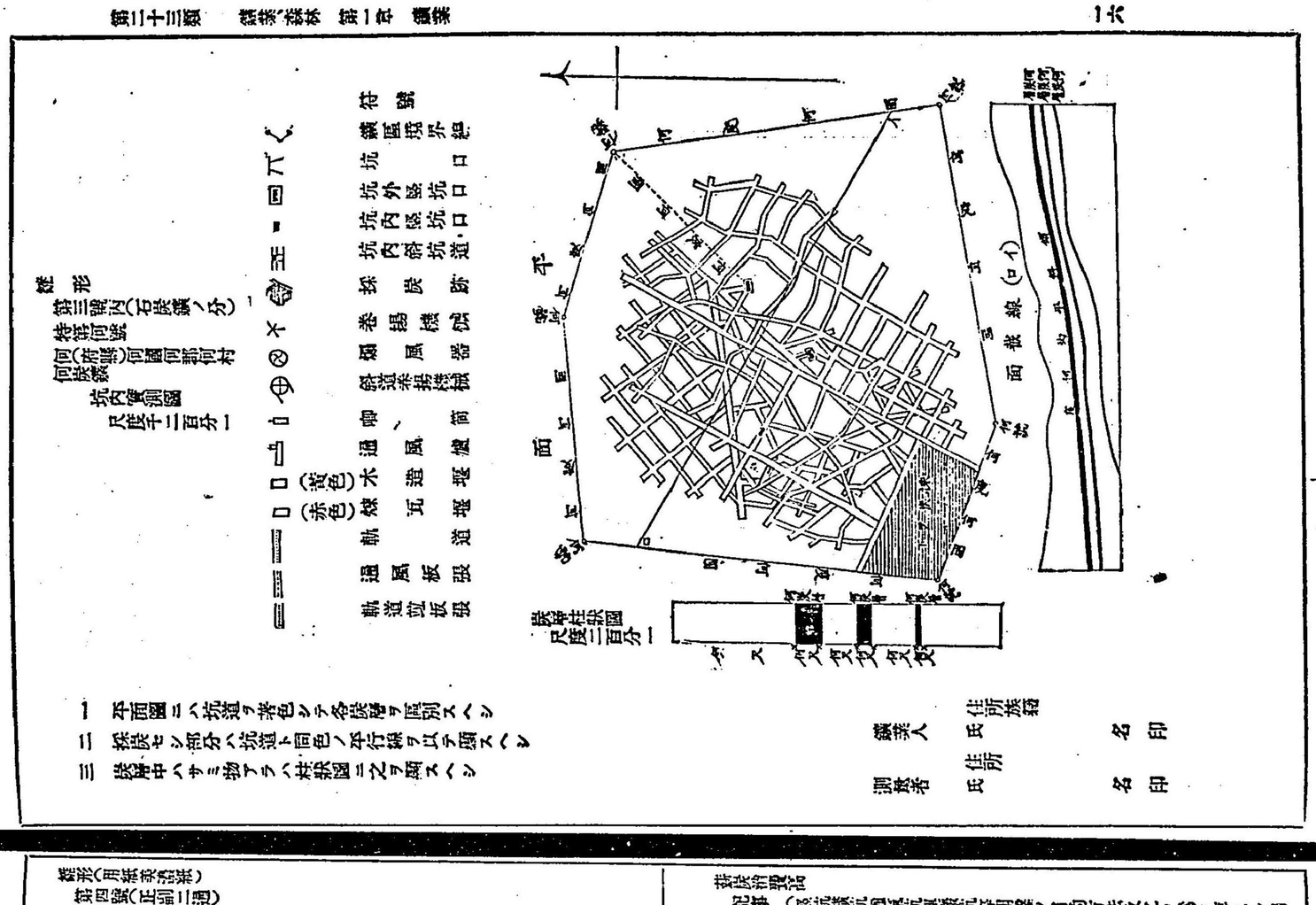
甲乙　甲乙

年月日　願人(屆出人又ハ請求人)氏名印


雛形
第一號(三通)
何縣(試掘地鑛區)略測圖
何(府縣)何國何郡何(市町村)大字何
小字何(官地又ハ民地地種地目)
坪數……
尺度何分ノ一
明治年月日出願
住所族籍
氏名印
住所
測量者
氏名印
濃褐黃淡黑緑紫色色色色色色
水宅畑田原山道家畜堤道官小大村郡國
試掘地又ハ鑛區境界
民字字地
横坑
品採取
野林屋口石防路道界界界界界界
地
何國
何郡
何濟
注意
一　圖面ニ用ヰル縮尺ハ鑛業法施行規則ニ特稱アル橋梁、家、辻、川股、標石其ノ他近傍ニ移動ヲ排スルモノヲ除キ「インキ」ヲ使用スベカラズ
二　雛形ハ特稱アル橋梁、家、辻、川股、標石其ノ他近傍ニ移動ヲ排スルモノヲ除キ「インキ」ヲ使用スベカラズ
三　鉛筆及「インキ」ヲ使用スベカラズ
四　縮尺ハ千二百分ノ一、三千分ノ一、六千分ノ一ヲ用ヰルベシ
雛形
第二號(五通)
何縣(試掘地鑛區)圖
何(府縣)何國何郡何(市町村)大字何
小字何(官地又ハ民地地種地目)
坪數……
尺度何分ノ一
明治年月日出願
住所族籍
氏名印
住所
測量者
氏名印
濃褐黃淡黑緑紫色色色色色色
水宅畑田原山道家畜堤道官小大村郡國
試掘地又ハ鑛區境界
民字字地
横坑
品採取
野林屋社防路道界界界界界界
地
何郡
何國
何濟
注意
一　圖面ニ用ヰル縮尺ハ鑛業法施行規則ニ特稱アル橋梁、家、辻、川股、標石其ノ他近傍ニ移動ヲ排スルモノヲ除キ「インキ」ヲ使用スベカラズ
二　雛形ハ特稱アル橋梁、家、辻、川股、標石其ノ他近傍ニ移動ヲ排スルモノヲ除キ「インキ」ヲ使用スベカラズ
三　鉛筆及「インキ」ヲ使用スベカラズ
四　縮尺ハ千二百分ノ一、三千分ノ一、六千分ノ一ヲ用ヰルベシ


雄形
第三號(甲)
何(府縣)何國何郡何村何鑛山
坑內實測平面圖
明治　年　月　日現在
尺度千二百分1
何度何間
測量者　住所族籍
氏　名印
鑛業人　住所族籍
氏　名印
1　坑道ノ上段ハ色分ヲ以テ區別スヘシ
二　軌道ヲ敷設シタル坑道又ハ機械等設置ノ場所ニシテ本圖ノ尺度ニテ圖上ニ顯シ難キモノハ適宜ノ尺度ヲ用ヒヘシ


雄形
第三號(乙)
何(府縣)何國何郡何村何鑛山
坑內實測平面圖
明治　年　月　日現在
尺度千二百分1
面線線(ロイ)圖甲
測量者　住所族籍
氏　名印
鑛業人　住所族籍
氏　名印
一　坑道ノ上下段ハ色分ヲ以テ區別
二　軌等ニ敷設シタル坑道又ハ機械
ニ顯シ難キモノハ本圖ノ尺度ニテ圖上ニ適宜ノ尺度ヲ用ヒヘシ


鑛形
特許三號內(石炭鑛ノ分)
特許何號
何何(府縣)何國何郡何村
炭鑛
坑內實測圖
尺度千二百分一
符號
鑛區境界線
坑口
坑外竪坑口
坑內斜坑口
採炭跡
揚機
烟卷
風器
斜道巻揚機
軌條
通風筒
(黃色)
(赤色)
瓦造煙筒
軌道
通風坂道
坂道
炭層柱狀圖
尺度二百分一
平面
面積線(ロイ)
測點番號
測點番號
測點番號
鑛業人　氏名　住所族籍　印
測量者　氏名　住所族籍　印
一　平面圖ニハ坑道ヲ着色シテ各炭層ヲ區別スベシ
二　採炭セシ部分ハ坑道ト同色ノ平行線ヲ以テ顯スベシ
三　炭層中ハサミ物アラハ柱狀圖ニ之ヲ顯スベシ

雛形(用紙美濃紙半切)

第五號(正副四通)　鑛業條例第三十九條ノ届書

鑛區位置　何府縣　國郡　何村　鑛山

鑛種　鑛區坪數　鑛業人　特許番號　住所族籍　何某印

明治何年鑛業明細表

鑛品	種別	越高	採掘高	製煉元鑛高	販賣 數量	販賣 代價	殘高	製品	種別	越高	製出高	販賣 數量	販賣 代價	殘高	工數	稼業日數	六月三十日現在使役人員	記事

注意

一種別ノ欄ニハ越高以下各欄ニ記入スル鑛品及製品ノ種類ヲ記入スヘシ

一採掘高ノ欄ニハ撰鑛高ヲ記入シ製煉元鑛高ノ欄ニハ製煉ニ供シタル鑛品高ヲ記入スヘシ

一石炭ヲ塊炭、粉炭、切込炭ニ區別シ販賣スル者ハ各別ニ記入シ計ヲ附スヘシ

一鑛品ハ貫ヲ單位トシ製品ノ内金、銀ハ匁其ノ他ハ斤ヲ單位トス但石炭ハ斤、石油ハ升鐵類ハ貫ヲ單位トス

一混合金屬(含金銅若ハ含銀銅ノ類)ハ含有成分ノ百分率ヲ朱書スヘシ

一鑛區坪數ハ其ノ年三月三十一日現在ヲ記入スヘシ

一鑛業代理人ヨリ届出ツルトキハ肩書ニ鑛業人何某鑛業代理人ト記載スヘシ

雛形(用紙美濃紙)

第六號(鑛業條例第四十條帳簿)

種目 ＼ 月	一月(七月)	二月(八月)	三月(九月)	四月(十月)	五月(十一月)	六月(十二月)	計
採掘高							
前月ヨリ越高							
買入高							
合計							
製煉高							
殘高							
製出高							

販賣	前月ヨリ越高	合計	販賣	殘高	販賣代價	記事

注意　採掘高ハ貫ヲ單位トシ製出高ノ内金、銀ハ匁其ノ他ハ斤ヲ單位トス　但石炭ハ斤、石油ハ升、鐵類ハ貫ヲ單位トス

●鑛業警察規則

(明治二十五年三月農商務省令第七號)

鑛業警察規則ノ左ノ通相定ム

鑛業警察規則

第一條　鑛夫五十人以上ヲ同時ニ入坑セシムル鑛山ニハ坑内ノ要部ニ於テ連絡シ且何時ニテモ出入シ得ヘキ狀態ヲ爲シタル二箇以上ノ坑口ヲ設クヘシ但同時ニ入坑セシムル鑛夫五十人未滿ノ鑛山ト雖モ鑛山監督署長ニ於テ必要ト認ムルトキハ本文ノ坑口ヲ設ケシムルコトアルヘシ

第二條　竪坑ノ坑口ニハ安全柵ヲ設ケ巻揚竪坑中人音ノ達セサル場所ニハ通信機ヲ設クヘシ

第三條　巻揚盤ヲ用ヰテ人ヲ昇降セシムル竪坑ニハ板圍アル堅牢ノ梯子道ヲ設クヘシ

第四條　竪坑内ニ架設スヘキ梯子ノ傾斜ハ八十度以内トシ少クトモ三十尺毎ニ踏棚ヲ設クヘシ

第五條　人ヲ昇降セシムル巻揚盤ニハ上蓋ヲ備フヘシ(二十六年農商務省令第七號改正ニ依ル)

前項ノ巻揚盤ニ用ヰル鐵綱ハ少クトモ市量ノ十倍ニ耐ユルモノヲ要シ昇降ノ速力ハ一分時間ニ六百尺ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條　人ヲ通行セシムル坑内ノ自轉車道及機械巻揚道ニハ軌道ノ一方ニ通行ニ差支ナキ人道ヲ設ク(シ(二十六年農商務省令第七號ヲ以テ改正)

前項ノ人道ヲ設ケサルトキハ軌道ノ傍側ニ於テ便宜避溜所ヲ設ケ白色ニ塗リ置クヘシ

第七條　交通運搬ニ供スル坑道ハ幅三尺高五尺以上タルヘシ(二十六年農商務省令第七號改正ニ依ル)

第八條　坑内ニハ鑛夫ノ衛生上必要ナル分量ノ新鮮空氣ヲ給送スヘシ(二十六年農商務省令第七號ヲ以テ改正)

第九條　破裂瓦斯ヲ發出スル石炭坑ニ於テハ鑛山係員ヲシテ安全燈ヲ携ヘ鑛夫就業前ニ坑内各工場ヲ巡視セシムヘシ若シ危險ノ虞アルトキハ相當ノ豫防法ヲ施行スルニ非サレハ鑛夫ヲ入坑セシムルコトヲ得ス(同上)

石油坑口ニ於テハ發火具及危險ナル燈火ヲ使用スルコトヲ得ス(三十二年農商務省令第五號ヲ以テ本項及次項追加)

石炭坑ニ於テハ消防ニ關スル相當ノ設備ヲ爲スヘシ

第十條　安全燈ハ鑛夫ノ入坑毎ニ破損其他危險ノ虞ナキヤ否ヤヲ檢査シ鎖鑰ヲ施シタル後ニ非サレハ鑛夫ニ渡スコトヲ得ス(二十六年農商務省令第七號改正ニ依ル)

第十一條　安全燈ヲ用ヰル坑内ニ於テハ鑛夫ハ發火具ヲ携帶スルコトヲ得ス(同上)

第十二條　鑛業人ハ一日間ノ使用見積高ヨリ多量ノ破裂藥ヲ鑛夫ニ渡スコトヲ得ス(同上)

使用ノ後殘餘アルトキハ出坑ノ節坑口ニ於テ還付セシムヘシ

第十三條　裝藥ノ際鐵製込棒ヲ使用スルコトヲ得ス又込土ハ粘土其他發火ノ虞ナキ土類ノ外使用スルコトヲ得ス(同上)

導火線ニ點火スルモ破裂セサルトキハ點火後少ナクトモ十五分間ハ同場所ニ近寄ルコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テハ其破裂藥ハ之ヲ掘出スルコトヲ得ス

第十四條　鑛業ニ使用スル煙突汽罐又ハ爐鑛所ヲ新設セントスルトキハ使用ノ目的ヲ記シタル設

計書及圖面ヲ所轄鑛山監督署長ニ差出シ其認可ヲ受クヘシ（二十六年農商務省令第七號ヲ以テ追加シ三十二年同省令第五號ヲ以テ改正ス）

發電機ヲ新設シタルトキハ使用ノ目的ヲ記シ其旨ヲ所轄鑛山監督署ニ届出ツヘシ

第十五條　同一鑛區内ニ於テ二人以上ノ鑛業人各自ニ試掘若クハ採掘ノ許可ヲ得タル鑛物ノ鑛脈交叉スルトキハ各鑛業人ハ互ニ鑛利ヲ損セサル樣協議ノ上試掘又ハ採掘スヘシ若シ協議整ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ノ指定スルトコロニ依ルヘシ（二十六年農商務省令第七號改正ニ依ル）

第十六條　試掘ノ認可若クハ採掘ノ特許ヲ取消サレタルトキ又ハ廢業シタルトキハ危險ノ虞アル坑口ヲ閉塞シ後害ナキ樣修理スヘシ（同上）

第十七條　鑛業條例第五十九條第一項ノ場合ニ於テ鑛業人危險ノ豫防ヲ完成シタルトキハ所轄鑛山監督署ニ届出ツヘシ（同上）

第十八條　農商務省鑛山局員及鑛山監督署員ハ鑛業ヲ臨視シ若クハ鑛業ニ關スル總テノ帳簿ヲ査閲スルコトヲ得（同上）

第十九條　鑛山ニ於テ不時ノ變災アリタルトキハ鑛業人ハ直ニ所轄鑛山監督署ニ其事由ヲ届出ツヘシ（同上）

第二十條　鑛業條例第六十四條第二項ノ鑛夫使役規則及同條例第七十二條ノ救恤規則ハ鑛夫ノ觀易キ場所ニ掲ケ置クヘシ（同上）

第二十一條　鑛山ノ狀況ニ依リ本則第一條第三條又ハ第四條ノ規定ヲ實施シ難キトキハ理由ヲ具シ所轄鑛山監督署長ニ出願シ其免除ヲ受クヘシ（二十六年農商務省令第七號ヲ以テ追加）

第二十二條　鑛業人又ハ鑛夫カ本則ニ違反シタルトキハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス（三十二年農商務省令第五號ヲ以テ改正）

前項ノ規定ハ鑛業代理人及會社ノ代表者ニ之ヲ準用ス

第二十三條　本則實施以前ニ許可ヲ得タル鑛山ニシテ本則ニ違フモノハ明治二十五年九月三十日迄ニ相當期限ヲ定メ實施ノ延期ヲ所轄鑛山監督署長ニ出願スヘシ

前項ノ期限ハ本則實施ノ日ヨリ五箇年ヲ超過スルコトヲ得ス

第二十四條　本則ハ鑛業條例實施ノ日ヨリ施行ス

●鑛業條例中ノ出張吏員旅費日當納付手續（明治二十五年四月農商務省令第九號）

鑛業條例第十四條第三十一條第四項及ヒ第四十五條ニ依リ旅費日當ヲ納付スル手續左ノ通相定ム

第一條　鑛業條例第十四條第一項第三十一條第四項及第四十五條第一項ニ依リ吏員ノ出張ヲ命シタルトキハ鑛山監督署長ハ出張吏員ノ氏名及ヒ旅費日當ノ概算額ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知スヘシ

第二條　出願人又ハ鑛業人ハ前條ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ法定ノ旅費日當ノ概算額ヲ出張吏員ニ交付スヘシ

第三條　出張吏員ハ實地臨檢ヲ終ヘタル後旅費日當ノ精算ヲ爲シ過不足アルトキハ鑛山監督署長ヨリ之ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知シ出張吏員ヲシテ超過額ヲ返附シ又ハ不足額ヲ追求セシムヘシ

●鑛業稅賦課ノ標準價格（明治三十年十二月農商務省告示第四十一號）

明治二十三年（九月）法律第八十七號鑛業條例第七十四條ニ依リ鑛業稅賦課ノ標準トスル鑛業製産物ノ價格ヲ左ノ通改定ス

但左ニ掲ケサル鑛業製産物竝ニ左表ニ掲ケサル石炭ハ總テ販賣代價ニ據ル

一金	一匁ニ付	四・八九円
一銀	同	〇・一四
一銅	百斤ニ付	二五・三〇
一安質母尼	同	一五・四一
一硫化安質母尼	同	九・二六

産地	石炭 塊炭	石炭 切込炭	石炭 粉炭	石炭 無煙炭	石炭 煙石
	一萬斤ニ付				
福岡縣遠賀郡	三一・二四円	一五・八九円	一六・五六円	—	—
同　鞍手郡	三三・三二	二二・〇四	一九・〇三	—	一七・九七
同　嘉穗郡	三三・一〇	二〇・三八	二〇・〇七	—	二〇・三三
同　田川郡	二七・八八	二四・八〇	二〇・〇三	—	二五・二四
同　粕屋郡	二〇・四三	一八・九九	一四・四三	—	—
同　三池郡	三三・四六	二五・九二	二五・五七	—	—
同　三池郡三池	三三・四六	二五・九二	二五・五七	—	—
佐賀縣東松浦郡	二一・八三	—	一五・四六	—	—
同　杵島郡	三三・八七	二三・七二	二三・一九	—	—
同　小城郡	二〇・六九	—	一〇・一八	—	—
長崎縣西彼杵郡　高島端島	二五・九九	二六・三五	一七・九九	—	—
山口縣厚狹郡	一四・六八	九・三五	五・九八	—	—
和歌山縣東牟婁郡三重縣南牟婁郡	—	—	—	二三・一七	—
福島縣石城郡　雙葉郡	二三・一〇	二一・四五	—	—	—
北海道空知郡	二二・八六	二一・五二	一七・九三	—	—

●鑛業特許證樣式（明治三十二年四月農商務省告示第三十三號）

鑛業特許證樣式明治三十二年五月一日以降左ノ雛形ノ通改正ス

雛形（第一面ノ輪廓形狀ヲ略ス、〔　〕ヲ附スルモノハ記載ノ例ヲ示スモノナリ第二面及第三面ハ從前ノ通記載スル位置ナリ）

注意

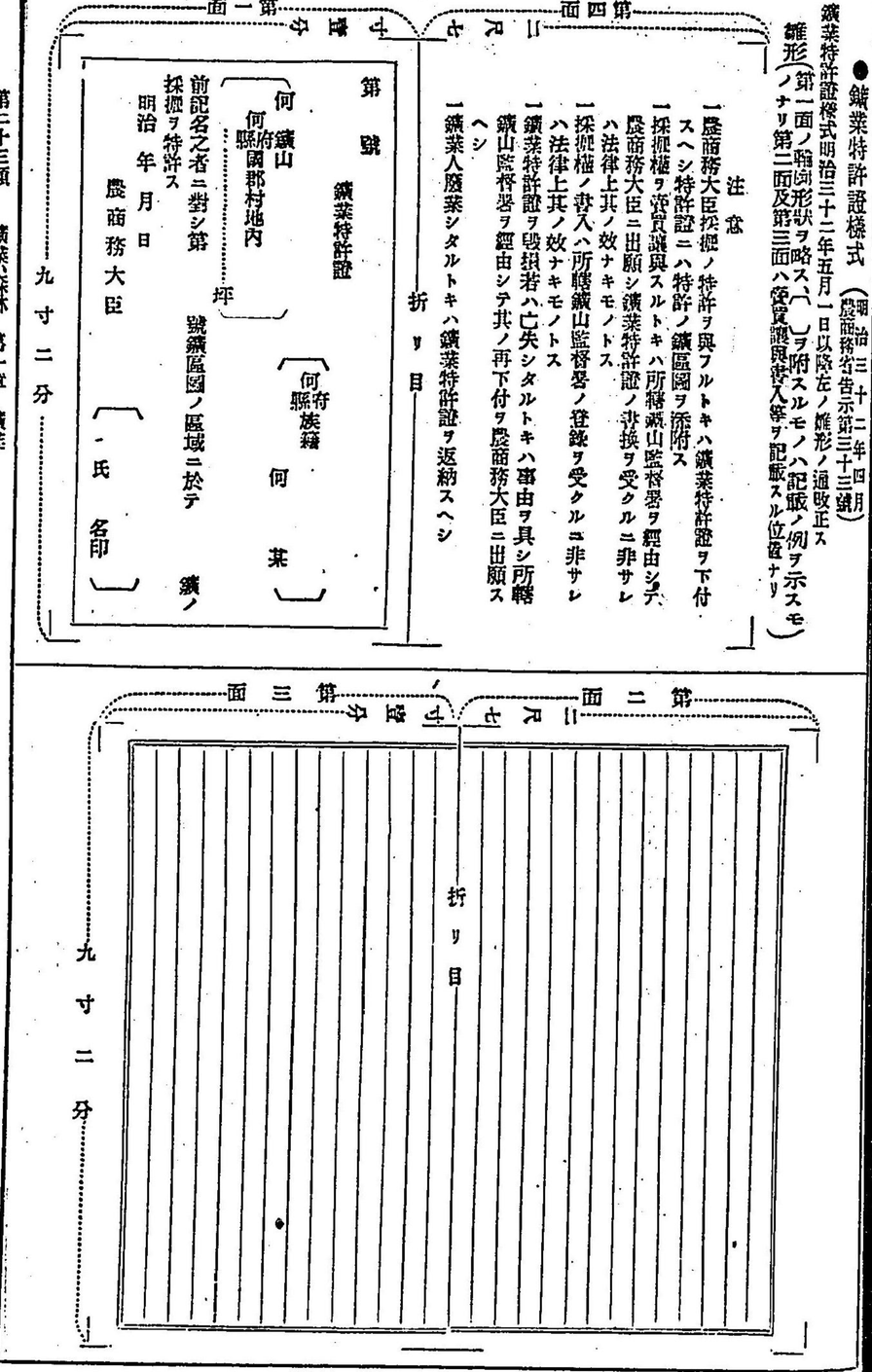
一農商務大臣採掘ノ特許ヲ與フルトキハ鑛業特許證ヲ下付スヘシ特許證ニハ特許ノ鑛區圖ヲ添附ス

一採掘權ヲ賣買讓與スルトキハ所轄鑛山監督署ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願シ鑛業特許證ノ書換ヲ受クルニ非サレハ法律上其ノ效ナキモノトス

一採掘權ノ書入ハ所轄鑛山監督署ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ法律上其ノ效ナキモノトス

一鑛業特許證ヲ毀損若ハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ所轄鑛山監督署ヲ經由シテ其ノ再下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

一鑛業人廢業シタルトキハ鑛業特許證ヲ返納スヘシ



●御料地、官有地ニ係ル試掘採掘出願ニ關シ協議ノ件（明治二十五年四月農商務省訓令第七號）

試掘若クハ採掘ノ出願若クハ官有地ニ係ルトキハ主管ノ官廳ニ協議ヲ遂クヘシ

●砂鑛採取法（明治二十六年三月法律第十號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル砂鑛採取法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

砂鑛採取法

第一條　此ノ法律ニ於テ砂鑛トハ砂金、砂錫及砂鐵ヲ謂フ

第二條　砂鑛ヲ採取セムト欲スル者ハ所轄鑛山監督署長ヲ經由シ農商務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第三條　採取ノ事業ヲ讓渡サムトスルトキハ所轄鑛山監督署長ヲ經由シ農商務大臣ノ許可ヲ受クヘシ（二十八年法律第十號ヲ以テ本條追加第三條ヲ第四條トシ以下繰下ク）

共同採取人中ニ於テ除名スルトキハ其ノ人名ヲ所轄鑛山監督署長ニ屆出ヘシ

第四條　帝國臣民ニ非サレハ採取人トナリ又ハ採取業ニ關スル組合員又ハ會社員トナルコトヲ得ス

採取人未成年、寡婦、白痴又ハ瘋癲ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ

農商務省鑛山局及鑛山監督署ノ官吏ハ在職中採取人トナリ又ハ採取業ニ關スル組合員又ハ會社員トナルコトヲ得ス

第五條　採取區域内ノ土地他人ノ所有ニ係ルトキハ所有者又ハ關係人ノ承諾ヲ受クヘシ

土地所有者又ハ關係人ハ自ラ採取ヲ出願スルトキノ外前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス但シ承諾ヲ與フルトキハ相當ノ砂鑛採取料ヲ要求スルコトヲ得

第六條　採取ノ事業公益ヲ害ス商務大臣ハ其ノ出願ヲ許可セス

第七條　採取ノ事業公益ニ害アルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル許可ヲ取消スコトヲ得

第八條　採取業上ニ危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ採取人ニ其ノ豫防ヲ命シ又ハ採取業ヲ停止スヘシ

所轄鑛山監督署長ニ於テ採取業ヲ停止セムトスルトキハ其ノ猶豫ス難キ場合ヲ除クノ外ハ農商務大臣ノ認可ヲ經ヘシ

採取業ヲ停止シタル後其ノ事故止ミタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ停止ヲ解クヘシ

第九條　採取人前條ニ依リ命セラレタル豫防ヲ怠ルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル許可ヲ取消スコトヲ得

第十條　採取人正當ノ理由ナクシテ一箇年以上休業シ又ハ採取ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ一箇年以内ニ採取ニ著手セサルトキハ農商務大臣ハ其ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第十一條　詐僞又ハ錯誤ニ由リ採取ノ許可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ許可ヲ取消スヘシ若其ノ許可ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ許可ノ日ヨリ三十日以内ニ其ノ許可ノ取消ヲ農商務大臣ニ請求スルコトヲ得

第十二條　第六條第八條第九條及第十條ノ過分ニ不服アルトキハ其ノ違ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十三條　採取許可取消ノ過分ヲ受ケタル採取人ハ同一區域ニ付一箇年間採取ノ出願ヲ爲スコトヲ得

第十四條　左ノ場合ニ於テ採取人他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ必要トシ其ノ貸渡ヲ請求シタルトキハ其ノ土地所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

一　洗鑛ノ爲

一　製錬所建設ノ爲

一　洗滌用水路溜池開設ノ爲

第十五條　採取人ハ使用スル土地ニ對シ其ノ土地所有者ニ相當ノ借地料ヲ仕拂フヘシ

其ノ買入トナリタル土地ニ對スル借地料ハ買取主ニ於テ之ヲ受領スルモノトス

土地使用ニ依リ貸渡人又ハ關係人ニ損害ヲ加フルトキハ採取人ハ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ爲スヘシ

第十六條　採取人借地料ノ仕拂ヲ延滯シタルトキハ土地所有者ハ其ノ土地ヲ取戻スコトヲ得

第十七條　第十三條ノ場合ニ於テ採取人五箇年以上土地ヲ使用スルトキハ其ノ土地所有者ハ土地ノ買取ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ採取人ハ其ノ買取ヲ拒ムコトヲ得ス

第十八條　採取人ノ請求ニ依リ土地ヲ分割シテ賣渡シ又ハ貸渡シタルカ殘地ノ利用ヲ害スルトキハ土地所有者ハ採取人ニ對シ其ノ土地全部ノ買取若ハ借受ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ採取人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十九條　土地所有者又ハ關係人ト採取人トノ間ニ於テ土地貸渡、採取料、借地料、損害賠償金又ハ土地賣買代金ニ付協議調ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アルトキハ其ノ判定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ土地貸渡ニ就テハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ採取料、借地料、損害賠償金若ハ土地賣買代金ニ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ願書ニハ第四號ノ書式ニ準シ明治三十二年勅令第四號ニ定メタル手數料ニ相當スル收入印紙ヲ貼用シタル上納書ヲ添附スヘシ

第二條　採取區域内ノ土地カ他人ノ所有ニ係ルトキハ採取願書ニ土地所有者又ハ關係人ノ承諾書ヲ添附スヘシ若シ承諾ヲ得ルコト能ハサルトキハ其ノ事由ヲ記載シタル書面ヲ添附スヘシ

前項ノ書類ヲ添附セサル採取願書ハ之ヲ受理セス

第三條　土地所有者又ハ關係人カ採取ノ出願ヲ承諾セサルトキハ所轄鑛山監督署長ハ六十日以上ニ於テ期日ヲ指定シ其ノ土地所有者又ハ關係人ニ採取願書ノ差出ヲ命スヘシ若シ其ノ期日迄ニ願書ヲ差出ササルトキハ出願セサルモノト看做ス

第四條　砂鑛採取ニ關スル書類ヲ郵便ニテ差出シタルトキハ發送郵便局ノ消印ニ依リテ差出ノ日ヲ定ムルモノトス

第五條　鑛業條例施行細則第四十六條及第四十七條ノ規定ハ砂鑛採取法第十一條ノ規定ニ依リテ採取許可ノ取消ヲ請求シ又ハ同法第十九條ノ規定ニ依リテ鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ノ裁定ヲ請求スル場合ニ之ヲ準用ス

第六條　採取人ハ第三號ノ雛形ニ準シテ前年中ノ砂鑛採取業明細表ヲ調製シ毎年二月末日迄ニ之ヲ所轄鑛山監督署長ニ差出スヘシ

採取人カ廢業シ又ハ採取業ヲ讓渡シタルトキハ三十日以内ニ第三號ノ雛形ニ準シテ調製シタル明細表ヲ差出スヘシ

前二項ノ規定ニ依リテ明細表ヲ差出ス場合ニ於テ之ニ記載スヘキ事項ナキトキハ其ノ旨ヲ屆出ツヘシ

第七條　採取人カ廢業シタルトキハ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署長ニ屆出ツヘシ

前項ノ願書ニハ第四號ノ書式ニ準シ明治三十二年勅令第四號ニ定メタル手數料ニ相當スル收入印紙ヲ貼用シタル上納書ヲ添附スヘシ

第八條　鑛業條例施行細則第十三條、第二十一條乃至第二十三條、第二十五條乃至第三十條、第三十二條及第四十八條乃至第五十條ノ規定ハ砂鑛採取ニ之ヲ準用ス

第九條　左ノ場合ニ於テハ採取人ヲ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第六條ノ手續ヲ爲ササルトキ

二　鑛業條例施行細則第二十五條又ハ第二十六條ノ規定ニ準シテ差出スヘキ書類又ハ圖面ヲ指定ノ期日迄ニ差出ササルトキ

三　鑛業條例施行細則第二十八條ノ規定ニ準シテ爲スヘキ立會ヲ爲サス又ハ調査事項ノ假明ヲ爲ササルトキ

四　鑛業條例施行細則第四十八條、第四十九條又ハ第六十條ノ規定ニ準シテ爲スヘキ屆出ヲ爲ササルトキ

第十條　前條ノ規定ハ會社ノ代表者ニ之ヲ適用ス

第十一條　本令施行以前ニ差出シタル砂鐵採取願書ハ明治三十二年勅令第四號施行ノ後ト雖モ仍ホ有效トス

第十二條　鑛業條例施行細則第五十七條、第五十八條、第六十條及第六十一條ノ規定ハ砂鑛採取ニ之ヲ準用ス

第十三條　本令ハ明治三十二年二月十日ヨリ施行ス

第十四條　明治二十七年農商務省令第七號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

書式(用紙美濃紙)

第一號(正副二通)

砂(金)(錫)(鐵)採取願

何府縣郡市町村大字内別紙實測圖ニ詳記セル

裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第十條　所轄鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ノ裁定請求ノ爲ニ要スル費用ハ民事訴訟費用ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第十一條　採取人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ所轄鑛山監督署長ノ判定シタル採取料、借地料、損害賠償金又ハ土地賣買代金ニ不服アルモ其ノ金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若之ヲ受ケサルトキハ其ノ金額ヲ供託所ニ預置キ土地ヲ使用スルコトヲ得

第十二條　詐僞ニ由リテ許可ヲ得シテ採取ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ由リテ許可ヲ得タル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十三條　此ノ法律施行以前ニ許可ヲ得タル採取人ハ此ノ法律ニ依リ引續キ其ノ業ヲ爲スコトヲ得

第十四條　砂鑛採取ノ警察其ノ他國土保安ニ關シ必要ナル規定及此ノ法律ノ施行細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第十五條　此ノ法律ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス

●砂鑛採取法施行細則（明治三十二年二月農商務省令第四號）

明治二十七年農商務省令第七號砂鑛採取法施行細則左ノ通改正ス

砂鑛採取法施行細則

第一條　砂鑛採取ニ關スル願書及添附實測圖ハ本令ニ定メタル書式及雛形ニ準シテ之ヲ調製スヘシ

鑛山監督署長ニ屆出ツヘシ

廢業ノ日ハ前項ノ屆書差出ノ日トス

第八條　鑛業條例施行細則第十三條、第二十一條乃至第二十三條、第二十五條乃至第三十條、第三十二條及第四十八條乃至第五十條ノ規定ハ砂鑛採取ニ之ヲ準用ス

第九條　左ノ場合ニ於テハ採取人ヲ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第六條ノ手續ヲ爲ササルトキ

二　鑛業條例施行細則第二十五條又ハ第二十六條ノ規定ニ準シテ差出スヘキ書類又ハ圖面ヲ指定ノ期日迄ニ差出ササルトキ

三　鑛業條例施行細則第二十八條ノ規定ニ準シテ爲スヘキ立會ヲ爲サス又ハ調査事項ノ假明ヲ爲ササルトキ

四　鑛業條例施行細則第四十八條、第四十九條又ハ第六十條ノ規定ニ準シテ爲スヘキ屆出ヲ爲ササルトキ

第十條　前條ノ規定ハ會社ノ代表者ニ之ヲ適用ス

第十一條　本令施行以前ニ差出シタル砂鐵採取願書ハ明治三十二年勅令第四號施行ノ後ト雖モ仍ホ有效トス

第十二條　鑛業條例施行細則第五十七條、第五十八條、第六十條及第六十一條ノ規定ハ砂鑛採取ニ之ヲ準用ス

第十三條　本令ハ明治三十二年二月十日ヨリ施行ス

第十四條　明治二十七年農商務省令第七號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

書式(用紙美濃紙)

第一號(正副二通)

砂(金)(錫)(鐵)採取願

何府縣郡市町村大字内別紙實測圖ニ詳記セル

箇所ニ於テ砂(金)(銀)(鐵)存在候ニ付キ採取致度候間許可相成度此段相願候也

年月日　願人住所族籍氏名印

(共同願人ハ連署ノ代ヲ爲ス連印ヲ爲ス)

鑛務大臣殿

(注意　採取地ノ名称宜敷記入スベシ)

第三號(正副二通)(何県ニ於ケル採取願ノ分)

何府縣郡市町村大字何川何別紙鑛測圖ニ詳記致セル箇所ニ於テ砂(金)(銀)(鐵)存在候ニ付キ採取致度候間許可相成度此段相願候也

年月日　願人住所族籍氏名印

(共同願人ハ連署ノ代ヲ爲ス連印ヲ爲ス)

鑛務大臣殿

(注意　採取地ノ名称宜敷記入スベシ)

第三號(正副二通)

何年何月何日第何號鑛許可

一何府縣郡市町村大字何字砂(金)(銀)(鐵)採取鑛業願

右採取地ハ今般許可相成度此段相願候也

年月日　願人住所族籍氏名印

(共同願人ハ連署ノ代ヲ爲ス連印ヲ爲ス)

鑛務大臣殿

第四號

一何々願及ハ請求手數料上納書

年月日　願人又ハ請求人住所族籍氏名印

第一號(四通)

何府縣何郡何(市町村)大字何字何(官地又ハ民地)

小字何(官地又ハ民地)

砂(金)(銀)(鐵)採取地實測圖

尺度何分ノ一

明治年月日出願

住所族籍氏名印

測量者住所族籍氏名印

符號

川　堤　道　橋　官　小　大　郡　國

(淡)　(堤)　(道)　(橋)　(官)　(小)　(大)　(郡)　(國)

採取地界　鑛標　防　屋　路　場　梁　界　界　界　界

注意

一　圖面用紙ハ鑛水引表鑛紙ヲ用ユベシ

二　芸菜鑛ハ鑛流ノ上流下流及支流ノ上流ニ各一箇所ツヽ設ケ特稱アル橋鑛家社川脇標石其ノ他近傍ニアル斷崖ニシテ移動セサルモノヲ擇フベシ

三　鉛鉛鑛及「インキ」ヲ使用スベカラス

四　縮尺ハ千二百分ノ一、三千分ノ一又ハ六千分ノ一ヲ用ユベシ

五　圖面ニ周邊スル府縣郡市町村大字小字ハ採取地ノ兩岸ニ接スル分ヲ測記スルモノトス

六　五十間以内ノ地ニ於テ自他測記スルモノトス

七　支流ノ帶鑛ハ出願ニ係ルモノニヲ掲クベシ

雛形（用紙英濟紙）
第三號（正副二通）

明治何年砂（金）（銅）（鐵）採取行業細明表

採取場所	採取人	住所族籍何	某印
何府縣國郡市町村大字	坪又ハ里數		

許可番號	許可年月日	越高	採取高	販賣代價	殘高	工數	人員	記事

注意
一採取高砂金ハ匁其ノ他ハ貫ヲ單位トス
一坪數又ハ里數ノ欄ニハ採取場ノ坪數若ハ其ノ延長里數ヲ記スヘシ但其ノ年十二月三十一日現在ヲ記入スルモノトス
一人員ハ十二月三十一日現在ノ使役人員ヲ記入スヘシ

他人採掘ノ鑛物、砂鑛製煉ニ關スル報告ノ件（明治三十二年二月農商務省訓令第六號）

他人ノ掘採セル鑛物ヲ買入レ製煉スル者又ハ砂鑛ヲ製煉スル者アルトキハ左ノ雛形ニ依リ一箇年ノ工程ヲ取調ヘ翌年三月限リ報告スヘシ
但明治二十六年（七月）當省訓令第十六號ハ廢止ス

（報告雛形略ス）

●鑛業砂鑛採取業出願地ノ地名等報告方請求ノ件（明治三十二年三月農商務省訓令第十三號）

鑛山監督署長ハ鑛業砂鑛採取業出願地ノ地名、地類目ノ異同、出願地ニ鑛業條例第二十四條及第二十五條ニ掲ケタルモノノ有無又ハ出願地內ノ土地所有者ニ關スル事實判明ナラサルトキハ出願地ノ支廳長、郡市長、島司又ハ之ニ準スルモノニ其ノ報告ヲ請求スヘシ
鑛山監督署長ハ鑛業及砂鑛採取業ニ關スル手數料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
鑛業及砂鑛採取業ニ關シ左ニ掲クル出願又ハ請求ヲ爲ス者ハ收入印紙ヲ以テ每件左ノ手數料ヲ納ムヘシ

採掘特許出願人變更願　金十圓
坑內實測圖證明請求　金十圓
測量原圖請求　金五圓
鑛業特許證再下付願　金五圓
鑛區又ハ試掘地許可圖再下付願　金五圓
鑛業條例第九十條ニ依ル採掘特許願　金十圓
砂鑛採取願　金十圓
但シ河床ニ在テハ延長五里迄每ニ其ノ他ニ在テハ六十萬坪迄每ニ一件トス
砂鑛採取業讓渡願　金十圓
鑛山監督署長ノ判定請求　金十圓
農商務大臣ノ裁定請求　金十圓
附則
本令ハ明治三十二年二月十日ヨリ施行ス
明治二十七年勅令第百號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●鑛業稅、鑛區稅徵收取扱方（明治二十五年四月大藏省訓令第二十二號）

本年六月一日ヨリ鑛業條例施行ニ付鑛業稅及鑛區稅徵收取扱方左ノ通心得ヘシ
一北海道廳長官府縣知事ハ鑛業稅及ヒ鑛區稅臺帳ヲ毎ケ每納期前鑛山監督署長ヨリ鑛業人ノ住所氏名及ヒ納稅額等ノ通知ヲ受ケ之ヲ整理スヘシ
但開業廢業其他通知ヲ受クヘキ手續ハ豫メ鑛山監督署長ト協議シ置クヘシ
一鑛業稅又ハ鑛區稅ヲ滯納スル者アルトキハ其都度滯納者ノ住所氏名及ヒ稅目金額ヲ收入官吏ヨリ鑛山監督署長ヘ通知セシムヘシ

●臨時鑛區調査處務規程（明治三十二年一月農商務省訓令第一號）

臨時鑛區調査處務規程左ノ通リ相定ム

第一條　臨時鑛區調査ハ試掘採掘ノ許可地及砂鑛採取ノ許可地ヲ測定シテ聯絡圖ヲ調製シ許可區域ヲ整理シ相互ノ關係ヲ判明ナラシムルヲ以テ目的トス

第二條　從前已ニ實査確定セル許可地ニシテ更ニ測量スルヲ要セサルモノハ直ニ聯絡圖中ニ編入スヘシ
他ノ許可地ニ接近セス特ニ整理ノ必要ナキモノハ臨時調査ヲ爲スヲ要セス
聯絡圖ハ新規ノ許可地成立スル每ニ補正スヘキモノトス

第三條　鑛山局長ハ農商務大臣ノ指揮ヲ受ケ臨時鑛區調査ノ區劃順序方法等ヲ定メ其事務ヲ監督ス

第四條　鑛山監督署長ハ所屬管內鑛區調査ニ關シ明治二十五年本省訓令第八號ニ依リ其署在勤臨時鑛區調査員及其他ノ署員ヲ指揮シテ調査ニ從事セシムヘシ

第五條　臨時鑛區調査ニ依リテ許可圖ト實地トノ相違又ハ錯誤ノ處分ヲ發見シタルトキハ鑛山監督署長ハ直チニ其整理ニ關スル相當ノ處分ヲ爲スヘシ

第六條　臨時鑛區調査ノ爲メ鑛業人又ハ採取人ニ命令示達ヲ要スル事項アルトキハ鑛業條例施行細則及砂鑛採取法施行細則ノ規定ニ依ルヘシ

第二章　森林

第一款　森林法（明治三十年四月法律第四十六號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル森林法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

森林法

第一章　總則

第一條　此ノ法律ニ於テ森林ト稱スルハ御料林、國有林、部分林、公有林、社寺林及私有林ヲ謂フ

第二條　原野山嶽其ノ他ノ土地ニシテ第八條第一乃至第五ニ該當スルモノハ森林ニ準シテ此ノ法律ヲ適用ス

第二章　營林ノ監督

第三條　公有林及社寺林ニシテ其ノ經濟ノ保續ヲ損シ又ハ荒廢スルノ虞アルトキハ主務大臣ニ於テ營林ノ方法ヲ指定スヘシ
私有林ニシテ荒廢ノ虞アルトキハ主務大臣ニ於テ營林ノ方法ヲ指定スルコトヲ得

第四條　前條指定ノ方法ニ背キ伐木ヲ爲シタル者ニハ主務大臣ハ其ノ伐採ヲ停止シ伐木跡地ニ造林ヲ命スルコトヲ得

第五條　前條ノ造林ヲ怠ル者アルトキハ政府ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ費用ヲ徵收シ又ハ其ノ造林ニ係ル部分ヲ部分林ト爲スコトヲ得

第六條　森林ヲ開墾セムトスル者ハ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第七條　國土保安ニ危害ノ虞アリト認ムルトキハ主務大臣ハ豫メ其ノ箇所ヲ指定シ森林ノ開墾ヲ禁止スルコトヲ得

第三章　保安林

第八條　森林ニシテ左ニ列記スル箇所ニ在ルモノハ保安林ニ編入スルコトヲ得
一　土砂壞崩流出ノ防備ニ必要ナル箇所
二　飛砂ノ防備ニ必要ナル箇所
三　水害、風害、潮害ノ防備ニ必要ナル箇所
四　頻雪、墜石ノ危險ヲ防止スルニ必要ナル箇所
五　水源ノ涵養ニ必要ナル箇所
六　魚附ニ必要ナル箇所
七　航行ノ目標ニ必要ナル箇所
八　公衆ノ衛生ニ必要ナル箇所
九　社寺、名所又ハ舊跡ノ風致ニ必要ナル箇所

第九條　保安林ハ編入ノ原因消滅シ又ハ公益上特別ノ事由生シタルトキハ之ヲ解除スルコトヲ得

第十條　保安林ノ編入解除ハ府縣郡市町村其ノ他直接ノ利害ヲ有スル者ヨリ府縣知事ニ申請スルコトヲ得

第十一條　府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ必要ト認メ又ハ前條ノ申請ヲ受ケタルトキハ之ヲ地方森林會ノ會議ニ付スヘシ
地方森林會ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條　保安林ノ編入解除ヲ地方森林會ノ會議ニ付セムトスルトキハ開會三十日以前ニ府縣公報ヲ以テ告示シ其ノ森林ノ所有者竝大林區署土木監督署ニ其ノ旨ヲ通知シ且所在市町村役場ニ掲示スヘシ

第十三條　保安林ニ編入ノ爲地方森林會ノ會議ニ付セムトスル森林ハ前條告示ノ日ヨリ決定ノ日

マテ其ノ立木ノ伐採、土石切芝ノ採取、樹根ノ採掘及開墾ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條　保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ異議アルトキハ第十二條ノ告示ノヨリ二十五日以内ニ府縣知事ヲ經テ意見書ヲ地方森林會ニ提出スルコトヲ得

第十五條　府縣知事ハ地方森林會ノ答申書ニ意見ヲ付シ關係書類ヲ添ヘ之ヲ主務大臣ニ具申スヘシ

第十六條　保安林ノ編入解除ハ地方森林會ノ議決ヲ經テ主務大臣之ヲ決定ス

第十七條　保安林ノ編入解除ハ官報及府縣公報ヲ以テ告示シ且其ノ森林ノ所有者ニ通達スヘシ

第十八條　保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ關スル處分ニ不服アルトキハ前條ノ告示若ハ通達ヲ受ケタルヨリ九十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條　保安林ニ於テハ皆伐及開墾ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條　府縣知事ノ許可ヲ得ルニ非サレハ保安林ニ於テ土石切芝ノ採取、樹根ノ採掘又ハ牛馬ノ放牧ヲ爲スコトヲ得ス

第二十一條　主務大臣ハ必要アリト認ムルトキハ保安林ノ伐木ヲ禁止又ハ制限スルコトヲ得

第二十二條　主務大臣ハ保安林ニ關シ其ノ森林ノ所有者ニ當林及保護ノ方法ヲ指定シ且其ノ使用收益ヲ制限スルコトヲ得

第二十三條　主務大臣ハ保安林又ハ開墾禁止ノ森林ヲ開墾シタル者ニ對シ復舊ノ造林ヲ命スルコトヲ得

第二十四條　前條ノ造林ヲ施行セス又ハ第二十二條ニ依リ指命シタル事項ヲ實施セサル者アルトキハ政府ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得

第二十五條　政府ニ於テ保安林ヲ買上ケムトスルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條　保安林ニ編入セラレタル爲損害ヲ蒙リタル森林所有者ハ其ノ伐木ヲ禁止セラレタル場合ニ於ケル直接ノ損害ニ限リ補償ヲ求ムルコトヲ得但シ御料林、國有林ニ對シテハ補償ヲ爲スノ限ニ在ラス

前項ノ損害ニシテ申請ニ係ルモノハ申請者之ヲ補償シ命令ニ係ルモノハ政府之ヲ補償ス但シ申請者ノ補償ニ係ルモノハ政府ニ於テ其ノ三分ノ一以内ヲ補助スルコトヲ得

損害ノ算定方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十七條　第二十五條ノ買上價格又ハ前條ノ補償金額ニ付異議ハサルトキハ地方森林會ヲシテ評決セシムヘシ若之ニ服セサル者ハ評決ノ通知ヲ受ケタルヨリ九十日以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十八條　保安林ニ編入セラレタル森林ハ地租及公課ヲ免ス

第二十九條　官地私木ノ森林ニシテ保安林ニ編入セラレタルモノハ借地料ヲ免ス

第三十條　從來ノ禁伐林、風致林又ハ伐木停止林ハ此ノ法律施行ノヨリ保安林トシ其ノ森林ニ對スル從來ノ制限ハ仍其ノ效力ヲ有ス

第四章　森林警察

第三十一條　伐木造材又ハ木材薪買ヲ業トスル者ハ林產物ニ使用スル記號又ハ印章ヲ所轄警察署ニ屆出クヘシ

警察署ハ他人ノ記號又ハ印章ニ類似スルモノノ使用ヲ禁止スルコトヲ得

第三十二條　伐木造材ヲ業トスル者ノ手板帳簿器具等ニ對シ森林官吏又ハ警察官吏ノ檢査アルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第三十三條　森林官吏又ハ警察官吏ノ許可ヲ得スシテ森林內ニ火入ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條　森林ニ接續スル原野ニ火入ヲ爲ストキハ森林ニ對シテ豫メ防火ノ設備ヲ爲スヘシ

第三十五條　森林ニ於テ濫ニ焚火ヲ爲シ又ハ煙火ヲ携帶スルコトヲ得ス

第三十六條　森林又ハ其ノ近傍ニ於テ火災又ハ蟲害アルヲ發見シタル者及森林ニ關スル罪ヲ犯シ若ハ犯サムトスル者アルヲ覺知シタル者ハ直ニ森林官吏、警察官吏又ハ郡市町村吏員ニ申告スヘシ

第五章　罰則

第三十七條　森林ニ於テ其ノ主副產物ヲ竊取シタル者ハ森林竊盜トシ二圓以上臟額二倍以下ノ罰金又ハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス其ノ主副產物ニシテ人工ヲ加ヘタルモノニ係ルトキ亦同シ但シ罰金ハ臟額以下ニ下スコトヲ得ス

第三十八條　森林竊盜ニシテ左ニ記載シタル所爲アルトキハ二圓以上臟額二倍以下ノ罰金及二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス但シ罰金ハ臟額以下ニ下スコトヲ得ス

一　根株ヲ毀壞若ハ隱蔽シテ罪跡ノ湮滅ヲ圖リタルトキ

二　臟物ヲ原料トシテ木炭、樟腦、椎茸、松根油其ノ他ノ物品ヲ製シタルトキ

三　臟物ヲ燃料トシテ鑛物ノ採取精製若ハ石灰煉化石、瓦其ノ他ノ物品ノ製造ニ使用シタルトキ

四　犯罪ヲ容易ナラシムル爲船舶ヲ使用シタルトキ

五　保安林ニ於テ盜伐ヲ爲シタルトキ

六　林產物採取ノ權利ヲ行使スルニ際シ其ノ罪ヲ犯シタルトキ

七　三人以上共謀シ又ハ五人以上ヲ屈使シテ其ノ罪ヲ犯シタルトキ

八　契約ニ依リ森林保護ノ義務ヲ有スル者其ノ罪ヲ犯シタルトキ

九　差押ノ臟物ヲ隱匿若ハ消毀シタルトキ

第三十九條　森林竊盜ノ臟物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若ハ牙保ヲ爲シタル者ハ二圓以上臟額二倍以下ノ罰金及一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス但シ罰金ハ臟額以下ニ下スコトヲ得ス

第四十條　他人ノ所有ニ屬スル森林ノ樹木ヲ傷害シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條　他人ノ森林ニ放火シタル者ハ懲役ニ處シ因テ主產物ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス其ノ自己ノ森林ニ係ルトキハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四十二條　濫ニ他人ノ森林內ニ於テ牛馬ヲ放牧シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條　森林ノ爲設ケタル標識ヲ移轉シ若ハ毀壞シタル者ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ經界ヲ表シタル物件ニ係ルトキハ刑法第四百二十條ヲ適用ス

第四十四條　立木、木材又ハ根株ニ附シタル記號印影ヲ變更若ハ消除シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十五條　第六條ノ許可ヲ得スシテ森林ヲ開墾シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス保安林又ハ開墾禁止ノ森林ニ係ルトキハ罰金ノ外仍十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

他人ノ森林ヲ開墾シタル者亦同シ

第四十六條　保安林ニ於テ皆伐ヲ爲シ又ハ禁止若ハ制限ノ命令ニ違背シテ伐木ヲ爲シタル者ハ其ノ伐採シタル木材代價相當ノ罰金ニ處ス

第四十七條　第十三條又ハ第二十條ニ違背シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十八條　第三十二條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十九條　第三十三條第三十四條又ハ第三十五條ニ違背シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス因テ他人ノ森林ヲ燒燬シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十條　第三十一條ニ違背シタル者ハ五十錢以上ノ科料ニ處ス

第五十一條　此ノ法律ニ規定シタル罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第六章　雜則

第五十二條　此ノ法律ニ於テ開墾ト稱スルハ燒畑切替畑及地目變換ヲ包含ス

第五十三條　森林竊盜ノ臟物ヲ原料トシテ採取又ハ製造シタル樟腦、椎腦油、鑛其ノ他樹木ノ脂液及木炭ハ臟物ト見做ス

第五十四條　此ノ法律ニ依リ徵收スヘキ費用ハ國稅怠納處分法ニ依リ徵收スルコトヲ得

第五十五條　森林ニシテ此ノ法律發布以前ヨリ無立木トナリ又ハ荒廢ニ屬スルモノハ主務大臣ニ於テ期限ヲ定メ造林ヲ命スルコトヲ得其ノ造林ヲ怠ル場合ニ於テハ第五條ノ規程ヲ適用ス

第五十六條　前條ニ依リ造林ヲ命セラレタル森林ハ其ノ造林シタル部分ニ限リ竪年ヨリ二十五箇年以內地租及公課ヲ免スルコトヲ得

原野山林又ハ荒蕪地ニシテ新ニ造林シタルモノハ前項ノ例ニ依ル

第五十七條　北海道沖繩縣其ノ他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ノ森林ニ就テハ保安林ニ關スル規程ニ限リ此ノ法律ヲ適用ス但シ保安林ノ編入解除ニ關スル手續ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條　此ノ法律ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

●森林法施行細則（明治三十年十二月農商務省令第十九號）

森林法施行細則左ノ通相定ム

第一條　府縣知事ハ森林法第三條乃至第五條第七條第二十一條乃至第二十四條及第五十五條ノ執行ヲ必要ト認ムルトキハ農商務大臣ニ具申シテ指揮ヲ請フヘシ

第二條　保安林編入ノ申請書又ハ官廳ノ通知書ニハ保安林編入調書及圖面ヲ添付スヘシ

保安林編入調書ノ樣式ハ府縣知事之ヲ定ム

第三條　保安林解除ノ申請書又ハ官廳ノ通知書ニハ解除ヲ要スル理由ヲ記載スヘシ

但保安林幾部ノ解除ニ係ル場合ハ保安林ノ全部及解除スヘキ部分ヲ明示シタル圖面ヲ添付シ之ニ其解除スヘキ保安林ノ面積ヲ附記スヘシ

第四條　府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ必要ト認メ若クハ保安林編入解除ニ就キ申請又ハ通知ヲ受ケタルモノニシテ其編入解除ニ就キ二府縣以上ノ利害ニ關係アルトキハ其旨ヲ關係府縣知事ニ通知スヘシ

第五條　府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ニ付地方森林會ノ答申書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ具シ關係書類ヲ添付シテ三十日以內ニ農商務大臣ニ提出スヘシ

第六條　農商務大臣ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ決定シタルトキハ其旨ヲ關係府縣知事ニ通達シ府縣知事ハ五日以內ニ府縣公報ヲ以テ其旨ヲ告示

スルコトヲ得

第五條　第四條ノ通知ヲ受ケタル府縣知事ハ其ノ通知ニ關スル森林ノ所有者ニ當林及保護ノ方法ヲ指定シ且其ノ使用收益ヲ制限スルコトヲ得

第六條　主務大臣ハ保安林又ハ開墾禁止ノ森林ヲ開墾シタル者ニ對シ復舊ノ造林ヲ命スルコトヲ得

第七條　第六條ノ造林ヲ施行セス又ハ第二十二條ニ依リ指命シタル事項ヲ實施セサル者アルトキハ政府ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得

第八條　第二十五條ノ買上價格又ハ第二十六條ノ補償金額ニ付異議ハサルトキハ地方森林會ヲシテ評決セシムヘシ若之ニ服セサル者ハ評決ノ通知ヲ受ケタルヨリ九十日以內ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　第二十八條ノ規程ハ保安林ニ編入セラレタル森林ニ之ヲ準用ス

第十條　第二十九條ノ規程ハ官地私木ノ森林ニシテ保安林ニ編入セラレタルモノニ之ヲ準用ス

第十一條　第三十條ノ規程ハ從來ノ禁伐林、風致林又ハ伐木停止林ニ之ヲ準用ス

第十二條　第三十一條ノ規程ハ伐木造材ヲ業トスル者ノ手板帳簿器具等ニ之ヲ準用ス

第十三條　第三十二條ノ規程ハ森林官吏又ハ警察官吏ノ檢査ニ之ヲ準用ス

第十四條　第三十三條ノ規程ハ森林ニ接續スル原野ニ火入ヲ爲ストキハ森林ニ對シテ豫メ防火ノ設備ヲ爲スヘシ

第十五條　第三十五條ノ規程ハ森林ニ於テ濫ニ焚火ヲ爲シ又ハ煙火ヲ携帶スルコトヲ得ス

第十六條　第三十六條ノ規程ハ森林ニ於テ火災又ハ蟲害アルヲ發見シタル者及森林ニ關スル罪ヲ犯シ若ハ犯サムトスル者アルヲ覺知シタル者ハ直ニ森林官吏、警察官吏又ハ郡市町村吏員ニ申告スヘシ

第十七條　第三十七條ノ規程ハ森林ニ於テ其ノ主副產物ヲ竊取シタル者ハ森林竊盜トシ二圓以上臟額二倍以下ノ罰金又ハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス其ノ主副產物ニシテ人工ヲ加ヘタルモノニ係ルトキ亦同シ但シ罰金ハ臟額以下ニ下スコトヲ得ス

第十八條　第三十八條ノ規程ハ森林竊盜ニシテ左ニ記載シタル所爲アルトキハ二圓以上臟額二倍以下ノ罰金及二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス但シ罰金ハ臟額以下ニ下スコトヲ得ス

一　根株ヲ毀壞若ハ隱蔽シテ罪跡ノ湮滅ヲ圖リタルトキ

二　臟物ヲ原料トシテ木炭、樟腦、椎茸、松根油其ノ他ノ物品ヲ製シタルトキ

三　臟物ヲ燃料トシテ鑛物ノ採取精製若ハ石灰煉化石、瓦其ノ他ノ物品ノ製造ニ使用シタルトキ

四　犯罪ヲ容易ナラシムル爲船舶ヲ使用シタルトキ

五　保安林ニ於テ盜伐ヲ爲シタルトキ

六　林產物採取ノ權利ヲ行使スルニ際シ其ノ罪ヲ犯シタルトキ

シ森林所在地ノ市町村役場ニ掲示シ且ツ其旨ヲ森林所有者ニ通達スヘシ

第七條　府縣知事ハ保安林ヲ買上クルノ必要アリト認ムルトキハ農商務大臣ノ指揮ヲ受ケ森林所有者ト協議シテ其買上價格ヲ定ムヘシ

第八條　保安林ノ買上價格又ハ補償金額ニ付協議整ハサル場合ニ於テハ森林法第二十七條ニ依リ府縣知事ハ之ヲ地方森林會ノ會議ニ附シ其裁決シタル買上價格又ハ補償金額ヲ關係者ニ通達スヘシ

第九條　保安林損害ノ補償若クハ其補償ノ補助ヲ受ケントスル者ハ其金額ヲ定メ算定理由ヲ詳述シタル請求書ヲ府縣知事ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

第十條　森林法第三十一條ニ依ル屆書ハ其記號ノ形狀並ニ印影ヲ添付シタル書面ヲ作業地管業地ノ所轄警察署ニ差出スヘシ

前項ノ場合ニ於テ警察署ハ所管小林區署ニ通知スヘシ

第十一條　森林內ニ火入ヲ爲サントスル者ハ豫メ期日ヲ定メ森林官若クハ警察官ニ申出許可ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テ火入ヲ許可シタルトキハ別記火入許可證ヲ交付スヘシ

第十二條　森林內火入ノ當日ハ火入者ニ於テ前條ノ火入許可證ヲ現場ニ携帶スヘシ

第十三條　森林內又ハ森林ニ接續スル原野ニ火入ヲ爲サントスル者ハ火入期日前ニ火入箇所鄰接地ノ所有者若クハ管理者ニ其旨ヲ通知スヘシ

第十四條　火入ノ場合ニ於テ他ニ延燒ノ虞アリト認メタルトキハ森林官又ハ警察官ハ其火入ヲ差止メ火入方法又ハ火入期日ヲ改メシメ若クハ相當ノ設備ヲ爲サシムヘシ

（火入許可證書ス）

●森林監督規程（明治三十一年六月農商務省訓令第十四號）

森林監督規程左ノ通定ム

森林監督規程

第一條　森林監督官ハ農商務大臣ノ命ニ依リ左ノ事項ヲ監察ス

一　保安林ニ對スル營林保護ノ指定使用收益ノ制限及國土保安ニ關係アル森林ノ開墾禁止ニ就テノ實況並ニ效果

二　公有林、社寺林及私有林ノ營林方法

三　大小林區署ノ業務

前項ニ掲クル事項ノ外仍ホ特ニ監察セシムルコトアルヘシ

第二條　森林監督官ハ出張巡廻中監察事項ニ就キ府縣知事又ハ大林區署長ニ照會往復スルコトヲ得

第三條　森林監督官ハ監察ノ事項ニシテ監督上處分ヲ要スルモノト認メタルモノハ山林局長ヲ經テ農商務大臣ニ具申スヘシ

第四條　森林監督官ハ監察事項ニ就テハ指揮命令ヲ爲スコトヲ得

但法律命令又ハ成規ニ違背シ若クハ違背ナラサル行爲ニシテ事ノ重大ニ涉ルモノハ之ヲ中止スルコトヲ得

●保安林取扱心得（明治三十年十二月農商務省訓令第三十一號）

保安林取扱心得左ノ通相定ム

保安林取扱心得

第一章　保安林調査

第一條　保安林ハ設定ノ目的ニ依リ左ノ十二種ニ區分調査スルモノトス

一　土砂扞止林　二　飛砂防止林
三　水害防備林　四　防風林
五　潮害防備林　六　類聚防止林
七　墜石防止林　八　水源涵養林
九　魚附林　十　目標林
十一　衞生林　十二　風致林

第二條　保安林調査ニ於テハ地形地質ノ異同地物配置ノ狀態其他利害ノ關係ヲ推斷スルニ必要ナル事項ハ唯目的箇所ノ區域內ノミニ止マラス廣ク全般ノ形勢ニ注目スヘシ

第三條　保安林調査ニ於テハ目的箇所ノ區域面積其他必要ナル區界並ニ顯著ナル物件ノ位置等ノ調査ハ可成精確ナル方法ニ依リテ測量スヘシ

第四條　保安林調査ハ利害關係ノ顯著ナルモノヨリ漸次著手スヘシ

保安林ノ編入ニ付申請アリタルトキ若クハ官廳ノ通知アリタルトキハ速ニ保安林調査ヲ行フヘシ

第五條　保安林調査ニ於テハ主トシテ左記各項ノ事項ヲ調査シ保安林編入調書ヲ製スヘシ

一　目的箇所ノ所在地籍地目地番及其所有主

二　面積及地價

三　地形地質及地盤面ノ形狀

四　現在ノ林況

五　保安林編入ノ事由

六　保安林編入後ニ於テ營林及保護ノ方法其他必要ナル制限事項

七　保安林編入後ニ於テ造林及地盤保護工事ノ種類並ニ方法

八　關係區域

第六條　保安林調査ノ選定ヲ爲スニ當リ編入ノ目的ニ種以上ニ涉ル場合ハ實地ノ形勢ニ依リテ效用ノ程度及必要ノ多少等ヲ比較シテ其主ナル種類ノ保安林ニ編入ノ目的ヲ以テ調査シ其旨ヲ調書ニ記入シ置クヘシ

第七條　保安林編入調書ハ別記樣式ニ依リテ各調査箇所毎ニ調製シ保安林地圖ヲ添付スルモノトス

第八條　保安林地圖ハ各調査箇所毎ニ一圖トシ左ノ各項ヲ明示スルモノトス

一　調査箇所及其附近ノ地形

二　調査箇所ニ於ケル林況並ニ地物ノ配置

三　境界並ニ鄰接地ノ種類

保安林地圖用紙ハ礬水引美濃紙半片一枚及二枚半ノ三種各一葉ヲ以テ全紙トシ縮尺度ハ可成千分一二千分一及五千分一ノ三種中ニ就キ撰ムヘシ

第二章　保安林ノ施業

第九條　保安林ニ於テハ一箇所（編入調書ノ一筆ヲ一箇所トス）毎ニ施業ヲ爲スヘシ

但保安林ノ種類同一ニシテ所有者同一ナルカ若クハ所有者異ナルモ各所有者合意ニテ同一事業ヲ爲サントスル場合ニ於テ保安上ノ目的ヲ害セスト認ムルトキハ二箇所以上ノ保安林ヲ併合シテ一施業ヲナスコトヲ得（三十一年農商務省令第四十二號ヲ以テ改正）

第十條　保安林ノ斫伐法ハ擇伐又ハ群成擇伐ヲ用ユルモノトス（同上）

第十一條　毎年ノ擇伐區域ハ立木地全面積ヲ輪伐齡ヲ以テ除シタル商ノ三倍ヨリ小ナルヲ得ス（同上）

第十二條　擇伐又ハ群成擇伐面積（斫伐スヘキ立木ノ占領面積）ハ立木地全面積ヲ輪伐齡ヲ以テ除シ得タル商ノ五分ノ四ヲ超ユルコトヲ得ス（同上）

群成擇伐ハ可成箇所ヲ增シ一箇所ノ面積ハ力メテ狹小ナラシムヘシ

但手入間伐及被害木ノ斫伐ハ此限リニアラス

第十三條　保安林ニ於ケル輪伐齡ハ左ノ標準ニ依ルヘシ（同上）

一　矮林　十五年以上
二　喬林　六十年以上
一　竹林　三年以上
一　中林ニアリテハ上木ハ喬林ノ輪伐齡下木ハ矮林ノ輪伐齡

第十四條　斫伐ヲ行フニ於テハ到底地力ヲ維持シ若クハ回復スルノ見込ナキモノ又ハ高地ノ森林ニシテ林木ノ生長極メテ遲鈍ナル場所急斜砂岩地等ニシテ再ヒ森林ヲ仕立ツルコト困難ナル場所ノ如キハ斫伐ヲ禁止スヘシ（同上）

第十五條　防火及砂防ノ設備ノ必要アル箇所ハ豫テ其方法ヲ指定スヘシ（同上）

第十六條　現在ノ保安林並ニ將來保安林ニ編入スヘキ箇所ニシテ荒廢ニ屬スルモノハ十箇年以內ニ造林セシムヘシ（同上）

第三章　附則

第十七條　利害ノ關係ニ府縣以上ニ跨ル森林ニ在リテハ關係府縣知事協議ノ上便宜其主管ヲ定メテ保安林ノ調査ヲ爲スヘシ

第十八條　保安林調査ハ國有林及部分林ニ在リテハ大林區署御料林ニ在リテハ御料局ニ委囑スルコトヲ得

第十九條　森林法施行以前ノ編入ニ係ル保安林調査ハ森林法施行後五箇年以內ニ之ヲ調査スヘシ（保安林編入調書樣式略ス）（三十一年農商務省訓令第四十二號ヲ以テ樣式中改正）

●保安林臺帳規程（明治三十年十二月農商務省訓令第三十二號）

保安林臺帳規程左ノ通相定ム

保安林臺帳規程

第一條　各地方廳ハ保安林臺帳ヲ備ヘ置クヘシ

前項ノ臺帳ハ御料林、國有林、部分林、公有林、社寺林、私有林ヲ各別ニ編製スルモノトス

第二條　保安林臺帳ハ保安林ノ編入アリタルトキ及保安林取扱心得第十九條ノ調査結了シタルトキハ之ヲ登錄スルモノトス

第三條　保安林臺帳ハ別記樣式ニ據リ之ヲ調製シ雛形ニ準シ圖面ヲ添付スヘシ

第四條　保安林ヲ解除シ又ハ保安林臺帳ニ記載シタル事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其都度更正ヲ爲スモノトス

前項ニ依リ臺帳ノ更正ヲ爲シタルトキハ當省指令年月日及番號ヲ記入シ主任官吏ノ證印ヲ捺スヘシ

第五條　保安林臺帳ニ登錄シタルトキハ別記報告樣式ニ據リ其都度本大臣ニ報告スヘシ其報告事項ニ異動ヲ生シタルトキ亦同シ（三十二年農商務省訓令第十號ヲ以テ改正）

第六條　保安林ニ就キ直接利害ノ關係ヲ有スル者ヨリ保安林臺帳ノ閱覽ヲ請フトキハ之ヲ閱覽セシムヘシ

（別記報告樣式、圖面雛形略ス）（三十二年農商務省訓令第十號ヲ以テ圖面雛形ヲ改ム）

●保安林簿規程（明治三十年十二月農商務省訓令第三十三號）

保安林簿規程左ノ通相定ム

保安林簿規程

第一條　大林區署長ハ所轄内ニ屬スル國有保安林簿ヲ調製シ大林區署ニ備ヘ置クヘシ
前項ノ林簿ハ國有林、國有地ノ部分林ヲ各別ニ編製スルモノトス
第二條　保安林簿ハ別記樣式ニ據リ之ヲ調製シ雖形ニ準シ圖面ヲ添付スヘシ
第三條　新タニ保安林編入ノ決定アリタルトキハ保安林簿ニ登錄スヘシ其解除ノ決定又ハ保安林簿ニ記載シタル事項ニ異動アリタルトキハ其都度之ヲ更正スヘシ
前項ニ依リ保安林簿ノ更正ヲ爲シタルトキハ地方廳通知ノ年月日及番號ヲ記入シ主任官吏ノ認印ヲ捺スヘシ
第四條　森林法施行以前ノ編入ニ係ル保安林ニシテ假登帳ヲ用ヒ來リタルモノハ保安林取扱心得第十九條ノ調査結了ト同時ニ本規程第二條ノ林簿ニ登錄スルモノトス
（保安林簿樣式、圖面雛形略ス）（三十二年農商務省訓令第十一號ヲ以テ圖面ヲ改ム）

●保安林損害算出規程（明治三十年十二月農商務省令第二十一號）

森林法第二十六條ニ依リ保安林損害算出規程左ノ通相定ム

保安林損害算出規程

第一條　保安林ニシテ伐木ヲ禁止セラレタル場合ニ於ケル毎年ノ直接損害額ハ普通保安林ノ作業ニ依リ得ヘキ伐期收入金（隔年作業ノ場合ニハ連年ノ收入ニ改算スルモノトス）ヨリ造林費ヲ控除シタルモノトス
第二條　伐木禁止ノ保安林ニシテ未タ伐期ニ達セサルモノハ普通保安林ノ作業ニ於ケル伐期ニ達シタル時ヨリ前條ノ方法ニ依リ其損害額ヲ算定ス
第三條　本規程ニ依リ用ユル利率ハ年五朱トシ損害額ハ十箇年ヲ過クル毎ニ之ヲ修正スルコトヲ得

●保安林ニ關スル規程ニ限リ森林法ヲ施行スヘキ島嶼（明治三十年十二月勅令第四百四十四號）

朕保安林ニ關スル規程ニ限リ森林法ヲ施行スヘキ島嶼指定ノ件ヲ裁可茲ニ之ヲ公布セシム
森林法第五十七條ニ依リ保安林ニ關スル規程ニ限リ森林法ヲ施行スヘキ島嶼左ノ通指定ス
東京府下
小笠原島　伊豆七島
長崎縣下
對馬國
島根縣下
隱岐國
鹿兒島縣下
大隅國大島郡
大島　德ノ島　喜界島　沖永良部島　與論島
薩摩國川邊郡
硫黃島　黑島　竹島　口之島　臥蛇島　平島　中之島　悪石島　諏訪ノ瀬島　寶島

●沖縄縣其他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ノ保安林編入解除ニ關スル手續（明治三十年十二月勅令第四百四十五號）

朕沖縄縣其ノ他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ノ保安林編入解除ニ關スル手續ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

沖縄縣其ノ他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ノ保安林編入解除ニ關スル手續

第一條　府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ必要ト認メタルトキハ編入解除ニ關スル調書ヲ調製シ之ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ
第二條　保安林ノ編入解除ハ直接ノ利害ヲ有スル者ヨリ府縣知事ニ申請スルコトヲ得
府縣知事ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ之ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ
第三條　保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ異議アルトキハ府縣知事ヲ經テ意見書ヲ農商務大臣ニ提出スルコトヲ得
第四條　保安林ノ編入解除ハ農商務大臣之ヲ決定ス
第五條　保安林ノ編入解除ハ官報府縣公報其ノ他便宜ノ方法ヲ以テ告示シ且其ノ森林ノ所有者ニ通達スヘシ

●北海道保安林編入解除手續（明治三十年十二月勅令第四百四十五號）

朕北海道保安林編入解除手續ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道保安林編入解除手續

第一條　北海道ニ於ケル保安林ノ編入解除ニ關スル手續ハ本令ノ定ムル所ニ依ル
第二條　保安林ノ編入解除ニ關シテ直接ノ利害ヲ有スル者ハ其ノ編入解除ヲ道廳長官ニ申請スルコトヲ得
第三條　前條ノ申請ハ其ノ所管道廳支廳長ヲ經由シテ之ヲ爲スヘシ
道廳支廳長ハ前項ノ申請ニ對シ自己ノ意見ヲ附シテ之ヲ道廳長官ニ具申スヘシ

第四條　保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ異議アルトキハ道廳支廳長ヲ經テ意見書ヲ道廳長官ニ提出スルコトヲ得
第五條　保安林ノ編入解除ハ道廳長官之ヲ決定ス
道廳長官ハ第二條ノ申請ナキトキト雖必要ト認ムルトキハ保安林ノ編入解除ヲ爲スコトヲ得
第六條　保安林ノ編入解除ハ道廳公報ヲ以テ告示シ且其ノ所有者ニ通達スヘシ
第七條　本令ノ施行ニ關スル細則ハ道廳廳令ヲ以テ之ヲ定ム
附則
第八條　本令ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

●森林ノ開墾ヲ許可シタルトキ報告方（農商務省訓令第四十三號）

森林法第六條ニ據リ森林ノ開墾ヲ許可シタルトキハ開墾ノ種類及面積及箇所數等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十一月第七十二號）

森林法第四十六號森林法第六條ニ依リ開墾ヲ許可シタルモノニシテ地租條例ノ開墾又ハ地目變換ニ該當スルモノアルトキハ府縣知事ハ之ヲ稅務管理局長ニ通知スヘシ

●造林地地租免除出願ノ件（明治三十一年十一月大藏省令第十八號）

明治三十年法律第四十六號森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地免租ニ關スル取扱ノ件（明治三十一年十二月農商務省訓令第四十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十一月第七十三號）

森林法第五十六條ニ依リ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十一月第七十三號）

森林法第五十六條ニ依リ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十五號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十六號）

森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地地租免除出願ノ件（明治三十一年十一月大藏省令第十八號）

明治三十年法律第四十六號森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地免租ニ關スル取扱ノ件（明治三十一年十二月農商務省訓令第四十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十七號）

森林法第四十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地地租免除出願ノ件（明治三十一年十一月大藏省令第十八號）

明治三十年法律第四十六號森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地免租ニ關スル取扱ノ件（明治三十一年十二月農商務省訓令第四十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十八號）

森林法第四十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地地租免除出願ノ件（明治三十一年十一月大藏省令第十八號）

明治三十年法律第四十六號森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地免租ニ關スル取扱ノ件（明治三十一年十二月農商務省訓令第四十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第七十九號）

森林法第四十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地地租免除出願ノ件（明治三十一年十一月大藏省令第十八號）

明治三十年法律第四十六號森林法第五十六條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ請ハントスル者ハ所轄稅務管理局長ニ願出ヘシ

●造林地免租ニ關スル取扱ノ件（明治三十一年十二月農商務省訓令第四十四號）

森林法第五十六條ノ造林地免租ニ關シテハ左項ニ據リ取扱フヘシ
一　府縣知事ハ大藏省訓令第七十三號ニ依リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尚ホ造林ノ難易地味ノ良否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ査定スヘシ
一　植林及中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十五箇年以內
二　樵林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內
二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左表ノ例ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ
（報告表略ス）

○大藏省訓令（明治三十一年十二月第八十號）

林務講習規則左ノ通相定ム

●林務講習規則（明治三十一年十二月農商務省訓令第三十八號）

林務講習規則

第一條　大林區署長ハ執務ノ餘暇ヲ以テ大林區署ニ於テ管林主事補及森林監守ヲ林務講習生トナシ林務ヲ講習セシムルコトヲ得
第二條　林務講習生ハ大林區署長之ヲ選定ス
第三條　林務講習生ノ定員ハ一大林區署二十名以內トス
第四條　林務講習期ハ六箇月以內トス
第五條　林務講習擔當員ハ大林區署職員ヲ以テ之ニ充ツ
第六條　林務講習ノ課程ハ左ノ如シ

森林植物學及昆蟲學大意	毎週凡ソ三時間	
簡易測量法	同	凡ソ二時間
造林法	同	凡ソ三時間
測樹法	同	凡ソ二時間
林務及司法警察ニ關スル現行法規	同	凡ソ三時間
實習	同	隨時

第七條　林務講習期ノ終ニ卒業試問ヲ行ヒ合格者ニハ大林區署長ノ名ヲ以テ證明書ヲ與フルコトヲ得
第八條　大林區署長ハ此規則ニ基キ經費ノ上林務講習細則ヲ定ムルコトヲ得
右訓令ス

●森林施業按（明治二十四年四月農商務省訓令第十七號）

今般森林施業ニ關スル諸案備考附錄別冊ノ通相定メ來二十六年度ヨリ實施ス
但施業案編製心得及製圖式ハ山林局ヨリ送付ス
（別冊略ス）

●林務講習規則（明治三十一年十一月農商務省訓令第三十八號）

林務講習規則左ノ通相定ム

第二款　國有土地林野

●國有林野法（明治三十二年三月法律第八十五號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル國有林野法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

國有林野法

第一條　此ノ法律ニ於テ國有林野ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル森林原野ヲ謂フ
第二條　國有林野ニシテ國土保安又ハ國有林野ノ經營上國有トシテ保存ノ必要アルモノハ賣拂讓與又ハ交換スルコトヲ得ス但シ公用又ハ公益事

業ノ爲必要アルトキ及第十五條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三條　前條ノ國有林野ト雖他ノ官有地ニ編入スルノ必要アルトキハ之カ組換ヲ爲スコトヲ得

組換ヲ爲シタル土地ニシテ其ノ使用ヲ廢シタル場合ニ於テ林野ニ復スヘキ必要アルモノハ更ニ國有林野ニ編入ス

社寺上地ニシテ其ノ境内ニ必要ナル風致林野ハ區域ヲ畫シテ社寺現境内ニ編入スルコトヲ得

第四條　國有林野ノ境界査定ハ當該官廳ニ於テ豫メ期日ヲ定メ鄰接地所有者ニ通告シテ其ノ立會ヲ求メ施行スヘシ

鄰接地所有者豫定期日ニ於テ立會ハサルコトアルモ當該官廳ハ境界査定ヲ施行スルコトヲ得

第五條　國有林野ノ境界査定ヲ終ヘタルトキハ當該官廳ハ直ニ鄰接地所有者ニ通告スヘシ

第六條　國有林野ノ境界査定又ハ測量ノ爲目標ヲ設置シ若ハ支障木竹ヲ伐採スルノ必要アルトキハ其ノ土地若ハ木竹ノ所有者ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス但シ相當ノ補償ヲ求ムルコトヲ得

第七條　隣接地所有者境界査定ニ不服アルトキハ第五條ノ通告ヲ受ケタル日ヨリ六十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第八條　國有林野ハ左ノ場合ニ限リ隨意契約ヲ以テ賣拂フコトヲ得

一　公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ

二　市町村又ハ公立小學校ノ基本財産ニ充フルトキ

三　社寺上地ノ森林ヲ其ノ社寺ニ賣拂フトキ

四　命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ緣故アル林野ヲ其ノ緣故アル者ニ賣拂フトキ

五　民有地、道路、河川等ニ介在スル十町歩以内ノ林野ヲ賣拂フトキ

六　道路、溜池、堤塘、溝渠等ノ敷地トシテ貸付シアル林野ヲ其ノ借地人ニ賣拂フトキ

七　此ノ法律施行以前ニ開墾、牧畜又ハ植樹ノ爲貸付シタル林野又ハ第九條ノ開墾地ヲ其ノ事業ヲ成功シタル者ニ賣拂フトキ

第九條　國有林野ハ開墾ノ成功ヲ條件トシ豫メ其ノ價格及成功期限ヲ定メ隨意契約ヲ以テ賣拂ノ豫約ヲ爲スコトヲ得

第十條　國有林野產物ノ隨意契約ニ依ル賣拂ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條　國有林野ハ左ノ場合ニ限リ隨意契約ヲ以テ貸付シ又ハ使用セシムルコトヲ得

一　公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ

二　牧畜又ハ植樹ノ爲必要アルトキ

三　牛馬放牧ノ爲使用セシムルトキ

四　第九條ニ依ル開墾者ノ爲ニスルトキ

五　一箇年貸付料三百圓ヲ超エサルトキ

第十二條　國有林野ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ相當ノ貸付料又ハ牛馬放牧料ヲ徵收スヘシ但シ前條第一號及第四號ノ場合ニ於テハ貸付料ヲ免スルコトヲ得

第十三條　國有林野ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ左ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス

一　植樹ノ場合ニ於テハ八十年

二　家屋、倉庫其ノ他ノ建設物ノ場合ニ於テハ三十年

三　其ノ他ノ場合ニ於テハ十五年

前項ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ得

第十四條　國土保安又ハ國有林野ノ經濟上必要ナル場合ニ限リ國有林野又ハ立木竹ト他ノ同價格ノ以上ノ土地、森林、原野又ハ立木竹ト交換スルコトヲ得

第十五條　國有林野ハ左ノ場合ニ限リ譲與スルコトヲ得

一　段別一町歩以下ニシテ公立ノ學校又ハ病院ノ用地ニ供スルトキ

二　府縣郡市町村及其他ノ公共團體ニ於テ道路、河川、港灣、水道、堤塘、溝渠、溜池、火葬場、墓地、公園等公共ノ用ニ供スルトキ

第十六條　用途ヲ指定シテ譲與シタル國有林野ヲ指定ノ期間内ニ其ノ用途ニ使用セサルトキ又ハ一旦其ノ用途ニ使用シタル後當該官廳ニ於テ指定シタル期間其ノ使用ヲ繼續セサルトキハ之ヲ返還セシムルコトヲ得

前項ニ依リ林野ヲ返還セシメタル場合ニ於テハ其ノ林野ノ上ニ設定シタル第三者ノ權利ハ消滅ス

第十七條　社寺上地ノ森林ハ其ノ社寺ニ保管セシムルコトヲ得

社寺ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ社寺林地ヲ使用シ又ハ主副產物ヲ採取スルコトヲ得

第十八條　國有林野ニシテ保護上必要ナル場合ニ於テハ市町村又ハ市町村内ノ一部ニ其ノ保護ヲ委託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ其ノ受託者ニ林野產物ヲ譲與スルコトヲ得

委託ノ方法及受託者ニ譲與スヘキ林野產物ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條　國ハ造林者ト其ノ收益ヲ分收スルノ契約ヲ以テ國有林野ニ部分林ヲ設クルコトヲ得

法令、慣行又ハ其ノ他ノ理由ニ依リ國有林ニ就キ收益ノ分收ヲ爲スモノハ前項ノ部分林ト看做ス

第二十條　部分林ノ樹木ハ國ト造林者トノ共有トシ其ノ持分ハ收益分收ノ部合ニ均シキ者トス

部分林設定前ヨリ存在スル樹木ハ國ノ所有トス

第二十一條　部分林ノ存續期間ハ八十年ヲ超ユルコトヲ得ス

前項ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ得

第二十二條　民法第二百五十六條ノ規定ハ部分林ノ樹木ニ適用セス

第二十三條　第十八條第二項及第三項ノ規定ハ部分林ノ造林者ニ之ヲ準用ス

第二十四條　主務大臣ハ十箇年毎ニ其ノ年三月三十一日ニ現在スル國有林野現在表ヲ其ノ年開會ノ帝國議會ニ報告スヘシ但シ第一回ノ報告ハ明治三十四年三月三十一日ノ現在ニ依ル

第二十五條　主務大臣ハ毎會計年度間ニ於ケル國有林野ノ坪減異動ヲ翌年度開會ノ帝國議會ニ報告スヘシ

附則

第二十六條　此ノ法律ハ北海道及沖縄縣ニ施行セス

第二十七條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

●國有林野處分ニ關スル申請ニ付テノ諭告（明治三十一年八月廿七日農商務大臣）

國有林野ノ處分ニ關スル申請等ニ就キ事理ノ當否ヲ審究セス手段方法ノ如何ニヨリテ願意ヲ達シ得ルト稱シ他ヲ誘惑煽動スル者アリ殊ニ近來是等ノ徒益々多キヲ加ヘ各地方ニ出張巡遊シテ周旋代願等ヲ業トシ或ハ官邊ニ緣故ヲ有スト云ヒ甚シキニ至リテハ當局者既ニ承諾ヲ表セリト云フカ如キ虛僞誣妄ノ言ヲ以テ申請者ヨリ金品ヲ領收スルモノアリト云フ抑モ政府ニ於テハ下民ト云ヒ拂下ト云ヒ交換ト云ヒ固ヨリ一定ノ制規アリテ嚴慎慎密ノ調査ヲ盡シテ而シテ後處分ヲ爲スモノナレハ其許否ノ分ル所ハ即チ事理ノ當否如何ニ在リ故ニ代願周旋ヲ云々スル者ノ言ヲ信シ没リニ申請シ又ハ周旋代理等ヲ依託スルハ貴重ノ時間ト金錢トヲ徒費スルノミ斯ル弊害ハ個人ノ損害ニ止マラス政府ニ於テモ其虛僞誣妄ノ言ノ爲メニ自然政務ヲ阻碍セラルルコト尠シトセス宜シク各自ニ於テ深ク警省シ其欺罔ニ陷ラサランコトヲ期スヘシ

右諭告ス

●國有林野處分調査規程（明治三十二年四月農商務省訓令第二十二號）

國有林野處分調査規程左ノ通定ム

國有林野處分調査規程

第一條　國有林野處分ノ爲メ調査スヘキ事項左ノ如シ

一　明治二十三年（四月）農商務省丙林第一三六號逓官有林野實況調査内規（以下略シテ單ニ實況調査内規ト稱ス）及明治二十六年（七月）農商務大臣内訓官有森林原野實況調査方針（以下略シテ單ニ實況調査方針ト稱ス）ニ基キ調査シタル要存置不要存置林野ノ區別ノ適否

二　實況調査ノ際存廢區別未定若ハ調査脫落ノ林野ニ在リテハ要存置不要存置ノ區別

三　不要存置林野ノ面積、價格及其產物ノ材積、數量竝ニ價格

四　其他不要存置林野ノ發拂處分ニ付準備上必要ナル事項

第二條　調査員ハ林野整理支局在勤判任官ヲ以テ之ニ充テ林野整理支局長之ヲ指揮監督スヘシ

第三條　林野整理支局長ハ調査員ヲ數組ニ分チ各調査區ニ派遣スヘシ

一組ハ判任官一名若ハ二名ヲ以テ組織シ之ニ屬員又ハ人夫ヲ附屬セシムルコトヲ得

調査區ハ小林區ノ管轄區域ニ從ヒ林野整理支局長之ヲ定ムヘシ

第四條　調査ハ經濟上優位ニシテ不要存置タルヘキ林野ノ多數ナル調査區ヨリ先ニスヘシ一調査區内ノ調査ニ付テモ亦同シ

第五條　調査ノ順序ハ存廢區別ノ調査ヲ先ニシ順次第三章乃至第七章ノ調査ヲ爲スヘシ但存廢區別ノ調査必要ナキ場合其他第三章乃至第七章ノ順序ニ依ルノ必要ナキ場合ニハ此限ニアラス

第六條　調査員ハ調査着手前ニ請書ニ付受命調査區内ノ林野ニ對シ年期貸付、主副產物ノ年期賣拂、副產物ノ年期無料採收、部分林、豫約賣拂其他總テ林野ニ附帶スル義務ノ有無ヲ調査シ其調書ヲ携帶スヘシ

第七條　豫約賣拂林野ニシテ成功年限中ニ係ルモノハ第三章乃至第六章ノ調査ヲ爲スコトヲ要セス

第八條　豫約賣拂林野ニシテ事業不成功其他ノ原因ニ依リ返地セシメタルモノハ本規程ノ調査ヲ爲スヘシ

第九條　開墾、牧畜又ハ植樹ノ爲メ貸付シタル林野ニ付テハ前二條ノ規定ヲ準用ス

第十條　調査ハ小林區署職員ノ立會ヲ求メ之ヲ施行スヘシ但林野整理支局長ニ於テ立會ノ必要ナシト認ムル場合ハ此限ニアラス

第十一條　殘務ノ附帶スル林野ノ境界査定、產物ノ材積及數量ノ調査ニハ可成其權利者ヲ立會ハシムヘシ

第二章　調査事項

第十二條　調査員ハ林野整理局長ノ定ムル樣式ニ從ヒ要存置不要存置林野區別表（以下略シテ單ニ區別表ト稱ス）不要存置林野調査表（以下略シ

テ單ニ調査書ト稱ス）及不要存置林野實測圖（以下略シテ單ニ實測圖ト稱ス）ヲ調製スヘシ

前項ノ書類ハ之ヲ市町村別ニ編綴シ毎月三回林野整理支局長ニ差出スヘシ

第十三條　區別表ニハ要存置不要存置林野ノ區別面積價格及其事由ヲ記載スヘシ

第十四條　調査書ニハ不要存置林野ニ關スル一切ノ調査事項ヲ記載スヘシ

調査書ハ一箇所毎ニ用紙一葉ヲ充ツヘシ用紙ニ欄行ナキ事項アル場合又ハ欄行不足セル場合ニハ第二頁ニ之ヲ記載スヘシ

第十五條　調査書ニハ其欄外ニ調査ノ年月日ヲ記載シ調査員及立會官吏署名捺印スヘシ

第十六條　實測圖ハ縮水引美濃紙半片一枚又ハ二枚以上ヲ繼キタル用紙ヲ用ヒ第四章ノ規定ニ從ヒ之ヲ調製スヘシ

實測圖ハ一箇所毎ニ用紙一葉ヲ充ツヘシ

實測圖ハ當該當所調査書ノ第二頁ニ貼付シ又ハ次葉ニ編綴スヘシ

第十七條　林野整理支局長一調査區全部ノ調査報告書類ヲ受取リタルトキハ十五日以内ニ林野整理局長ノ定ムル樣式ニ從ヒ各調査區ニ分チ不要存置林野調査總括表ヲ調製スヘシ

第十八條　文字ハ楷書體ニテ明記シ訂正、挿入、削除等ヲ爲ス場合ニハ之ヲ朱記シ其箇所ニ檢印スヘシ

第三章　存廢區別ノ調査

第十九條　存廢區別ノ再調査ハ實況調査内規及實況調査方針ニ準據シ實地ニ就キ踏査スヘシ

實況調査ノ際存廢區別未定及調査脱落箇所ノ調査ニ付テモ亦同シ

第二十條　存廢區別ハ前條ノ外左ノ各號ヲ參酌シテ定ムヘシ

一　面積ヲ以テ存廢ノ標準ト爲スヘキ場合ニハ實際ノ見込面積ニ據ルヘシ

二　實況調査方針第二號ニ依リ存廢ヲ區別スヘキ場合ニハ左ノ事項ヲ參酌スヘシ

（イ）地元及隣係町村ノ耕地面積竝ニ牛馬ノ頭數

（ロ）耕地ノ肥料及秣草ニ需要スル芝草ノ數量

（ハ）民有林野放牧ノ慣行アル國有林野ヨリ供給スル芝草ノ數量

三　平坦地又ハ丘陵地等ニシテ容易ニ田畑ニ開墾シ得ヘキモノ及桑、柑類、櫟、楮其他農業ニ關スル果樹ノ植栽ニ適スルモノハ實況調査方針第一號ニ依リ固有農地ト認ムヘキモノトス

四　保安林ト驅利害ノ關係極メテ小ナルモノハ存置ヲ要セサルモノトス但調査書ニハ其保安林タルコトヲ記載スヘシ

五　無立木地若ハ岩石地等ニシテ收入ノ見込ナキ林野又ハ交通極メテ不便ナル位置ニ在ル林野等ニシテ民有ニ適セサルモノハ存置スヘキモノトス

第二十一條　河川法ニ依ル河川ノ區域、砂防法ニ依ル砂防設備又ハ航路標識其他國防上必要ナリト認ムヘキ林野ハ林野整理支局長ノ指揮ヲ受ケ存廢區別ヲ定ムヘシ

第二十二條　存廢區別再調査ノ結果カ實況調査ノ成績ト異ナルトキハ林野整理支局長ノ指揮ヲ受ケ存廢區別ヲ定ムヘシ

第四章　境界查定、實測及面積算定

第二十三條　境界ノ明瞭ナラサル林野ハ查定ヲ施行シタル上實測ヲ爲スヘシ但從前實測濟ノ林野ニ付テハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第二十四條　民地官有ノ森林ニ付テハ境界查定及實測ヲ爲スコトヲ要セス但產物ノ材積及數量ノ調査ノ爲必要ナリト認ムルモノニ在リテハ適宜ノ方法ニ依リ之ヲ爲スヘシ

第二十五條　實測ハ有鎖簡測器以上ノ精良ナル測器竝ニ測鎖、竹縄若ハ間縄ヲ使用シテ之ヲ爲スヘシ但面積一町歩以下ノ平地林野ニ在リテハ平面板若ハ羅針盤ヲ使用スルコトヲ得

第二十六條　實測圖調製ニ使用スル縮尺ハ可成左ノ區別ニ依ルヘシ

面積五段歩未滿　六百分ノ一

面積一町歩未滿　千分ノ一

面積五町歩未滿　二千分ノ一

面積十町歩未滿　三千分ノ一

面積十町歩以上　四千分ノ一

從前實測濟ノ林野ニ付テモ前項ニ依リ圖面ヲ調製スヘシ

第二十七條　市町村ノ附近ニ在ル林野其他經濟上特別ノ價値アル林野ニ付テハ實測ハ可成精良ナル器械ヲ用ヒ製圖ハ可成大ナル縮尺ヲ用フヘシ

第二十八條　林野内ニ左ニ掲クル箇所アルトキハ實測圖面ニ其位置ヲ表示スヘシ

一　温泉敷地、礦泉敷地、鹽田又ハ貯木場其他經濟上特殊ノ目的ニ供用シ得ヘキ土地

二　年期貸地、部分林、豫約營拂地其他義務ノ附帶スル土地

前項第一號ノ土地ニ付テハ別ニ其部分ヲ實測シ六十分ノ一ノ縮尺ヲ用ヒテ別圖ヲ調製シ之ヲ全圖ニ添付スヘシ

第二十九條　實測圖ノ調製終リタルトキハ從前實測濟ノモノヲ除クノ外圖面ニ三斜線ヲ劃シ三斜法ニ依リ面積ヲ計算スヘシ

各三角形ノ面積及總面積ハ之ヲ圖面ニ記載スヘシ

第三十條　第五章　產物ノ材積及數量ノ調査

貫直樹種ノ森林ニ在リテハ全林ノ樹木ニ付材積ヲ計算シ薪炭林及未成樹林ニ在リテハ標準地ヲ選定シ標準地内ノ材積ヲ計算シテ全林ノ總材積ヲ算出スヘシ但林相混淆複雜又ハ立木群生點生等ノ爲標準地ヲ選定シ難キモノハ此限ニアラス

標準地ノ面積ハ全面積ノ百分ノ五以上トシ其ノ最小面積ハ一段歩トス

第三十一條　官地民木ノ森林ハ產物ノ材積及數量ヲ調査スルコトヲ要セス

第三十二條　林野内ニ主產物年期營拂ニ係ルモノアルトキハ其營拂ヲ禁ジタル樹木ヲ控除シ殘餘ノモノニ付材積ヲ計算スヘシ

第三十三條　部分林ノ主產物ハ全林ノ材積調査ヲ爲シ分收ノ部合ニ依テ國有ニ屬スヘキモノヲ算出スヘシ土地ノ區域ニ依リ分收スル場合ニ在リテハ國有ニ屬スル區域ノ材積ヲ調査スヘシ

第三十四條　材積ノ調査ハ胸高ノ直徑若ハ周圍及各直徑ノ平均高サヲ測リテ之ヲ爲スヘシ直徑級ハ一寸毎ニ階級ヲ設クヘシ

第三十五條　材積ノ計算ニ用フヘキ形數ハ左ノ標準ニ依ルヘシ但各地方ニ於テ實驗上調査ニ係ル形數ヲ用フルモ妨ナシ

針葉樹（濶葉樹ニ之ヲ準用ス）

形數等級	高サ（全長）	形數
一等	二十間未滿	〇、四六
二等	十五間未滿	〇、四八
三等	十間未滿	〇、五〇
四等	七間未滿	〇、五三
五等	五間未滿	〇、五五
六等	三間未滿	〇、六〇

雜木

形數等級	直徑（胸高）	形數
一等	五寸以上	〇、七五
二等	二寸以上	〇、六〇
三等	一寸以上	〇、五五
四等	一寸未滿	〇、三〇

第三十六條　人工植栽ノ幼樹ニ在リテハ植栽苗數年度、補植苗數年度等ヲ調査スヘシ既ニ幼樹ト稱スルハ針葉樹林ニ在リテハ十五年生以下雜木林ニ在リテハ五年生以下トス但樹種又ハ地方ノ狀況ニ依リ之ヲ伸縮スルモ妨ナシ

第三十七條　價値ヲ有セサル稚樹及下芝等ハ材積又ハ數量ノ調査ヲ爲スヲ要セス

第三十八條　竹林ハ其種類品質ノ良否ヲ參酌シ總面積ノ百分ノ一以上ノ標準地ニ據リ全數量ヲ算出スヘシ

第三十九條　副產物ハ左ノ方法ニ依リ數量ヲ調査スヘシ

一　菌蕈、筍、下草又ハ茸等連年生產アルモノハ既往三箇年間ノ平均生產額ヲ調査スヘシ既往ノ生產額ヲ知リ難キモノハ適宜ノ方法ニ依リ數量ヲ調査スヘシ

二　果樹、茶、桑、楮、三極又ハ椶等林業ニ屬セサルモノハ各適宜ノ方法ニ依リ數量（本數、株數、大小等）ヲ調査スヘシ

三　建築材料其他經濟上特殊ノ目的ニ供セラルヘキ土石類ハ適宜ノ方法ニ依リ現存ノ總數量ヲ調査スヘシ

年期營拂又ハ年期無料採取ヲ許可シタル副產物ニ付テモ亦前項ニ依リ數量ヲ調査スヘシ

第四十條　樹皮、樹液、樟又ハ落枝等主產物ノ一部ヲ爲スモノ又ハ價値ヲ有セサル副產物ハ其數量ヲ調査スルヲ要セス

第六章　價格ノ調査

第四十一條　林野ノ素地ニ付テハ比鄰類地ノ時價、比鄰類地ノ時價ヲ知リ難キトキハ附近類地ノ時價ヲ標準トシ地質地形及交通ノ便否等ヲ參酌シテ其價格ヲ定ムヘシ

比鄰若ハ附近ノ類地ノ時價ハ登記所ニ登記セラレタル賣買價格其他實際ノ賣買相場ヲ標準トスヘシ

第四十二條　主產物ニ付テハ其地方ノ時價ヲ標準トシ既往營拂代價ヲ參酌シテ山元時價ヲ定ムヘシ

第四十三條　人工植栽ニ係ル幼樹ニ付テハ費用價（植栽實費及其利子ヲ合算シタルモノ）ヲ以テ其價格トス

費用價計算ニ用フヘキ利率ハ年五分トス

費用價ヲ知リ難キトキハ他ノ人工植栽林ノ類例ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第四十四條　副產物ニ付テハ左ノ方法ニ依リ其價格ヲ定ムヘシ

一　第三十九條第一項第一號ニ該當スルモノハ既往三箇年間ノ平均單價、平均單價ヲ知リ難キ場合ニ於テハ適宜ノ方法ニ依リ單價ヲ求メ其價格ヲ算出スヘシ

二　第三十九條第一項第二號及第三號ニ該當スルモノハ適宜ノ方法ニ依リ單價ヲ求メ其價格ヲ算出スヘシ

第四十五條　第二十八條第一項第一號ニ掲ケタル土地及第三十九條第一項第二號ニ掲ケタル果樹ノ價格ヲ調査スル場合其他必要アリト認ムルトキハ評價人ヲシテ評價セシムルコトヲ得

前項ノ評價人ハ林野整理支局長之ヲ選定ス

第七章　營拂處分ノ參考トナルヘキ事項ノ調査

第四十六條　調査員ハ左ノ事項ヲ調査シ之ヲ調査

書當該欄内ニ記載スヘシ

一　社寺委託林ニ付テハ受託社寺、委託許可年月、委託年限其他必要ト認ムル事項

二　部分林ニ對スル部分林仕付主及官地民木ノ森林ニ對スル民木所有者

三　道路、溜池、堤塘、溝渠等ノ敷地トシテ貸付シアル林野ニ付テハ其借地人、實況其他必要ト認ムル事項

四　前號以外ノ年期貸付地ニ付テハ其借地人貸付ノ年月、貸付年限、借地ノ目的、借地ノ目的タル事業ノ實況及契約解除ニ依リテ受クヘキ借地人ノ損害其他必要ト認ムル事項

五　主副產物年期賣拂並ニ副產物無料採取ヲ許可シタル林野ニ付テハ其權利者、許可ノ年月、許可年限其他必要ト認ムル事項

第八章　監督

第四十七條　調査員ハ林野整理支局長ヨリ交付スル森林手帳ヲ携帶シ日々左ノ事項ヲ記入スヘシ

一　執務ノ種類

二　外業ナルトキハ延里程

三　調査セシ林野ノ字名及面積

四　立會者ノ官氏名又ハ住所氏名

五　上官ノ監督檢閲ヲ受ケタルトキハ其要領

六　其他必要ト認ムル事項

第四十八條　明治二十四年(二月)戊第一一〇號達森林手帳携帶心得ハ其第二條ヲ除クノ外調査員ニ之ヲ準用ス

第四十九條　調査員ハ林野整理局長ノ定ムル樣式ニ從ヒ調査功程表ヲ調製シ毎月三回林野整理支局長ニ差出スヘシ

第五十條　林野整理支局長ハ毎月一回總組ノ調査功程一覽表ヲ調製シ翌月十日迄ニ農商務大臣ニ進達スヘシ

調査功程一覽表ノ樣式ハ調査功程表ノ樣式ニ準據スヘシ

第五十一條　林野整理支局長ハ部下ノ官吏ヲシテ少ナクトモ毎月一回各調査區ヲ巡回セシメ調査員ノ監督ヲ爲スヘシ

前項監督ニ關スル規定ハ林野整理支局長之ヲ定メ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五十二條　林野整理支局長ハ第十二條第一項ノ書類ヲ檢閲シ調査不備ト認ムル事項アルトキハ其再調査ヲ爲スヘシ但直ニ決定シ得ヘキモノハ此限ニアラス

前項ノ再調査ハ前調査ニ干與セサル部下ノ官吏ニ命スヘシ

第五十三條　林野整理支局長ハ過分調査ノ結了シタルモノニ就テハ毎月二回要存置不要存置區別總括表ヲ調製シ農商務大臣ニ進達シテ存廢區別及見積價格ノ認可ヲ受クヘシ

要存置不要存置區別總括表ノ樣式ハ第十二條ニ規定スルモノヲ準用スヘシ

第九章　雜則

第五十四條　調査員ハ境界査定、實測及產物ノ材積、數量調査ノ爲メ必要ナル場合ニ限リ國有林野ノ產物ヲ斫伐又ハ採取スルコトヲ得

前項ニ依リ斫伐又ハ採收シタル產物ハ直ニ當該小林區署長ニ引渡スヘシ

第五十五條　調査員ハ境界査定又ハ實測ノ爲メ國有ニ屬セサル支障木竹ヲ斫伐スルノ必要アルトキハ豫メ其旨ヲ所有者ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ所有者ヨリ補償ヲ求ムルトキハ其事件ヲ當該小林區署長ニ移スヘシ

第五十六條　調査員大林區署職員ノ立會ヲ必要ト認ムルトキハ其事由ヲ記シ林野整理支局長ニ請求スヘシ

第五十七條　調査員ハ野帳ヲ携帶シ境界査定、實測及產物ノ材積、數量調査等實地ニ於テ調査シタル事項ヲ記入スヘシ

野帳ノ樣式ハ林野整理支局長適宜之ヲ定ムヘシ

第五十八條　調査員ハ一調査區ノ調査終了後野帳ヲ取纏メ之ヲ林野整理支局長ニ差出スヘシ

前項ノ野帳ハ其區分完結迄之ヲ林野整理支局ニ保存スヘシ

●林野下戻審査委員規則（明治三十二年五月農商務省訓令第二十六號）

林野下戻審査委員規則左ノ通相定ム

但明治三十一年(六月)農商務省訓令第十二號及同年(十二月)農商務省訓令第四十一號ハ之ヲ廢止ス

林野下戻審査委員規則

第一條　農商務省山林局ニ林野下戻審査委員ヲ置ク

委員ハ五名以上トシ高等官ヨリ選定シテ之ニ充ツ

第二條　委員ハ山林局調査課ノ提出ニ係ル林野下戻申請事件ノ成案ヲ審査ス

第三條　林野下戻申請事件ノ成案ハ委員三名以上ノ審査ヲ經ルヲ要ス

委員ニ於テ異見アルトキハ之ヲ具申スヘシ

第四條　山林局長ニ於テ必要ト認ムルトキハ委員會ヲ開クコトヲ得

委員ハ山林局長ニ委員會ノ開會ヲ求ムルコトヲ得

議長ハ山林局長ヲ以テ之ニ充ツ局長事故アルトキハ委員中ヨリ其代理者ヲ指命ス

第五條　委員會ニハ委員半數以上ノ出席ヲ要ス

委員會ノ評決ハ多數決ニ依ル此ノ場合ト雖モ少數意見者ハ別ニ其意見ヲ具申スルコトヲ得

第六條　委員ハ申請事件ニ關シ秘密ヲ恪守スヘシ

●國有林事業豫定案編製規程（明治三十二年二月農商務省訓令第九號）

國有林事業豫定案編製規程左ノ通相定メ候條從來ノ命令ニシテ本規程ニ抵觸スルモノハ都テ消滅シタル儀ト心得ヘシ

國有林事業豫定案編製規程

第一章　總則

第一條　國有林事業豫定案ヲ別テ左ノ七種トス

一　主產物處分豫定案

二　副產物處分豫定案

三　貸地豫定案

四　造林豫定案

五　官行間伐豫定案

六　官行伐木造材及運材豫定案

七　官行伐竹豫定案

第二條　事業豫定案ハ一小林區毎ニ編製シ一大林區ヲ通シテ別ニ總括表ヲ調製スヘシ

第二章　主產物處分豫定案

第三條　施業案既成ノ分ニシテ其所伐豫定外ニ避クヘカラサル原因ニヨリ伐採スルヲ要スル箇所アルトキハ備考欄ニ其理由ヲ詳記スヘシ

第四條　面積ハ皆伐作業ニ在リテハ其伐採區域面積、擇伐作業ニ在リテハ其伐採木ノ占領面積ヲ掲クヘシ但間伐ハ其作業ノ如何ニ拘ハラス間伐木ノ占領面積ヲ掲クヘシ

第五條　材積中用材ハ尺〆薪材ハ棚根株ハ箇枝條鹿柴及竹ハ束ヲ以テ單位トス但枝條鹿柴ハ三尺繩〆トシ竹ノ束ハ地方ノ慣習ニ從フ

材積及數量ハ四捨五入ヲ以テ單位ニ止メ價格ハ同法ニ依リ同位ニ止ムヘシ

第六條　混淆林ニ在リテハ樹種毎ニ其面積、材積、價格ヲ分記スヘシ但面積ハ各樹種混淆ノ歩合ニヨリ算出スヘシ

第七條　官行伐木造材及運材又ハ官行間伐ヲナストキハ其旨ヲ備考欄ニ記入シ前年度ニ於テ伐木造材又ハ運材シ翌年度ニ於テ處分ヲナス場合ハ前年度豫定案ニハ其價格ヲ朱書シ翌年度豫定案ニハ其材積ヲ朱書スヘシ但材積ハ官行伐木造材及運材豫定案ノ造材材積、價格ハ同案ノ造材價格ヲ掲クヘシ

第八條　主伐若クハ主伐ニ附帶シテ生シタル鹿柴枝條根株等ハ主伐欄中其用途ニヨリ用材又ハ薪材欄ニ掲記スヘシ間伐若クハ間伐ニ附帶シテ生シタル鹿柴、枝條、根株モ亦之ニ準ス但立木ト同時ニ處分セサルモノハ總テ間伐欄ニ掲記スヘシ

第九條　備考欄ニハ斫伐ノ事由間伐ノ種類其他要件ヲ記載スヘシ

第十條　最尾ニ作業別並ニ樹種別再掲ヲ設クヘシ但樹種別ハ針葉樹濶葉樹及竹ノ三種ニ概括スルニ止メ別ニ各種類ニ細別スルニ及ハス

第十一條　部分官收木及被害木ノ見積額ハ各別ニ再掲部ニ記入スヘシ但部分木ノ民收ニ屬スル分ハ備考欄ニ記載スヘシ

第十二條　總括表ハ一小林區毎ノ再掲ヲ移記シ最尾ニ區分毎ノ通計ヲナスヘシ

第三章　副產物處分豫定案

第十三條　副產物ヲ類別シテ左ノ十二類トス

第一類　樹皮

第二類　樹實

第三類　樹葉

第四類　脂液

第五類　柴草

第六類　蕈

第七類　菌類

第八類　製品　總括表ニ在リテハ備考ニ主要ナルモノノ品名ヲ記載スヘシ

第九類　藥料

第十類　石類

第十一類　土類

第十二類　雜　總括表ニ在リテハ備考ニ主要ナルモノノ品名ヲ記載スヘシ

第十四條　數量ハ左ノ稱呼ヲ用ユ

第一類第三類第五類ニ屬スルモノハ束又ハ貫ヲ以テ算ス但束ハ三尺繩〆トス

第二類ニ屬スルモノハ石又ハ貫ヲ以テ算ス

第四類第六類第七類第八類第九類ニ屬スルモノハ貫ヲ以テ算ス但油類ハ石ヲ以テ算ス

第十類ニ屬スルモノハ切ヲ以テ算ス但輙石ハ箇ヲ以テ算ス

第十一類ニ屬スルモノハ坪ヲ以テ算ス

第十二類ニ屬スルモノハ別ニ單位ヲ定メス但竹皮、筍ハ貫、竹枝ハ束ヲ以テ算シ其束ハ三尺繩〆トス

第十五條　種目欄ニハ各副產物ノ名稱ヲ記載スヘシ

第十六條　面積ハ種目毎ニ其採收區域面積ヲ記載スヘシ

第十七條　年期携下中ノモノハ備考欄ニ其期限ヲ記載スヘシ

第十八條　無料採收及手入料トシテ無代下附スルモノハ其面積及數量ヲ朱書スヘシ

第十九條　總括表ハ一小林區毎ニ各類別ノ合計ヲ掲ケ最尾ニ其合計ヲ附スヘシ但數量ハ四捨五入ヲ以テ單位ニ止メ價格ハ同法ニヨリ同位ニ止ムヘシ

第四章　貸地豫定案

第二十條　貸地ヲ類別シテ左ノ十三類トス

第一類　建物敷　用途ノ如何ヲ問ハス建物ヲ築設スルモノハ總テ本類ニ屬ス

一　第一種　人ノ居住スル家屋

二　第二種　第一種以外ノ建物ヲ謂フ

第二類　道路及用水敷

第三類　耕地

第四類　樹木栽植地

第五類　物置場及物干場

第六類　造材場及炭竈敷

第七類　學校及社寺用地

第八類　鑛業用地

第九類　鑛泉用地

第十類　牧場

第十一類　猟獵場

第十二類　養魚場

第十三類　雜種

第二十一條　年期貸渡中ノモノハ備考欄ニ其期限ヲ記載スヘシ

第二十二條　無料貸渡ノモノハ其面積ヲ朱書スヘシ

第二十三條　總括表ハ一小林區毎ニ各類別合計ヲ掲ケ最尾ニ計ヲ附スヘシ但料金ハ四捨五入ヲ以テ圓位ニ止ムヘシ

第五章　造林豫定案第一部

第二十四條　造林第一部ヲ類別シテ左ノ項目ニ別ツ

第一項　新植

第一目　伐採跡地

第二目　未立木地

第三項　補植

第一目　人工更新林

第二目　天然更新林

第三項　手入　雜草木刈拂、下枝刈拂、防火線燒切、風倒引起、雪倒引起等

第一目　人工更新林

第二目　天然更新林

第四項　苗圃

第一目　播種　種子採收又ハ購入播種ヨリ第一回床替前マテノ事業ヲ包含ス

第二目　床替　第一回床替ヨリ林地移植前マテノ事業ヲ包含ス　挿穂ハ床替ニ準ス

第三目　雜　器具器械購入修繕、藩籬溝渠築設修繕、番小屋、肥壺設置、番人、借地料、新規開墾等

第二十五條　樹種混淆スルトキノ新植補植及手入ニ於テハ其面積以下各所要種目ヲ樹種毎ニ分記スヘシ

第二十六條　補植及手入ハ樹種及新植年度ノ異ナル毎ニ苗圃播種及床替ハ樹種及播種年度ノ異ナル毎ニ其面積以下各所要種目ヲ分記スヘシ

第二十七條　伐採跡地新植ハ其伐採年月補植及手入ハ其新植年月床替ハ其播種年月ヲ記載スヘシ

第二十八條　補植及手入ノ面積ハ其區域全面積ヲ記載スヘシ

第二十九條　種目ハ種子、苗木、運搬、人足、雜品、肥料、器具、土地、家屋ノ九種トシ左ノ單位ヲ用ユ

種子ハ石　苗木ハ本　運搬ハ駄又ハ貫　人足ハ人　雜品ノ桁、竹ハ本　造弧資等ハ枚　繩蓆ハ貫、束、房　肥料ハ人糞ハ荷　滿油粕、灰、過燐酸石灰等ハ貫　草、落葉等ハ束又ハ貫　器具ハ箇、挺、本等　土地ハ町　家屋ハ棟

第三十條　播種ノ產地　種子採收又ハ購入播種ヨリ第一回床替前マテノ事業ヲ包含ス

第二目　床替　第一回床替ヨリ林地移植前マテノ事業ヲ包含ス　挿穂ハ床替ニ準ス

第三目　雜　器具器械購入修繕、藩籬溝渠築設修繕、番小屋、肥壺設置、番人、借地料、新規開墾等

第二十五條　樹種混淆スルトキノ新植補植及手入ニ於テハ其面積以下各所要種目ヲ樹種毎ニ分記スヘシ

第二十六條　補植及手入ハ樹種及新植年度ノ異ナル毎ニ苗圃播種及床替ハ樹種及播種年度ノ異ナル毎ニ其面積以下各所要種目ヲ分記スヘシ

第二十七條　伐採跡地新植ハ其伐採年月補植及手入ハ其新植年月床替ハ其播種年月ヲ記載スヘシ

第二十八條　補植及手入ノ面積ハ其區域全面積ヲ記載スヘシ

第二十九條　種目ハ種子、苗木、運搬、人足、雜品、肥料、器具、土地、家屋ノ九種トシ左ノ單位ヲ用ユ

種子ハ石　苗木ハ本　運搬ハ駄又ハ貫　人足ハ人　雜品ノ桁、竹ハ本　造弧資等ハ枚　繩蓆ハ貫、束、房　肥料ハ人糞ハ荷　滿油粕、灰、過燐酸石灰等ハ貫　草、落葉等ハ束又ハ貫　器具ハ箇、挺、本等　土地ハ町　家屋ハ棟

第三十條　播種ノ產地

苗木ノ產地及苗齡

運搬ノ里程　一里當リ經費

人足ノ種類　功程

雜品肥料器具ノ名稱、雜品ノ用途、器具新調修繕ノ區別、借地ノ地目、借家ノ種類

第三十一條　義務補植、無料手入又ハ雜草木ノ費却ニヨリ手入ノ目的ヲ遂クルモノ等經費ヲ要セサルモノハ備考欄ニ其事由ヲ記載シ又砂防工施行地ニ植栽スルモノハ第二部ノ當該記入番號及施工年度(工事ト植栽ト年度ヲ異ニスル場合)ヲ備考欄ニ記載スヘシ

第三十二條　前年度ニ於テ購入シタル種子、苗木、雜品等ヲ翌年度ニ於テ播種植栽ニ使用スルモノハ其價格ヲ朱書スヘシ

第三十三條　總括表ハ一小林區毎ニ樹實、樹種、林種別ニ記入シ最尾ニ總計ヲ同樣區別記載スヘシ

第六章　造林豫定案第二部

第三十四條　造林第二部ヲ類別シテ左ノ項目ニ分ツ

第一項　道路

第一目　第一類　木材運搬ニ供スルモノ

第二目　第二類　徑路

第二項　橋梁

第三項　河川改修

第四項　堤塘

第五項　溝渠

第六項　防火線

第一目　固定

第二目　臨時

第七項　竹林藩籬

第八項　砂防工　砂防工ニ附帶スル堰堤ハ本項ニ包含ス

第九項　雜

第三十五條　長、幅、高、深ノ單位ハ尺ヲ用ユ

第三十六條　人足ノ種類、功程雜品ノ名稱及其長開仕樣ヲ摘要欄ニ記載スヘシ

第三十七條　第九項ニ屬スルモノハ其種類名ヲ備考欄ニ記載シ又第八項砂防工施行地ノ苗木植栽ヲ後年度ニ讓ル場合ハ其事由及植栽年度ヲ備考欄ニ記載スヘシ

第三十八條　第一項乃至第五項ハ設計書及設計圖ヲ添附スヘシ

第三十九條　總括表ハ一小林區毎ニ記入シ最尾ニ總計ヲ設ケ更ニ新設修繕ニ區別シタル合計ヲ掲クヘシ但第九項ニ屬スルモノハ種類毎ニ分記シ其種類名ヲ備考欄ニ記載スヘシ

第七章　造林豫定案第三部

第四十條　造林第三部ヲ類別シテ左ノ項目ニ分ツ

第一項　普通造林ニ關スル試驗

第一目　種子試驗

第二目　苗木試驗

第三目　更新法試驗

第二項　各種ノ試驗及調査

第一目　森林植物帶調査

第二目　森林氣象ノ觀測

第三目　森林保護法ノ試驗及調査

第四目　木材利用法ニ關スル試驗及調査

第五目　測樹及經理法ニ關スル試驗及調査

第六目　雜(各地方ニ於テ特ニ必要ト認ムル事項)

第四十一條　種目及摘要欄記載方ハ第一部ニ同シ

第八章　官行間伐豫定案

第四十二條　伐採面積及伐採材積ハ主產物處分豫定案ト符合セシムルヲ要ス

第四十三條　新植年度不明ナルモノハ林齡ノミヲ摘クヘシ

第四十四條　人足ノ種類功程雜品ノ名稱用途ヲ摘要欄ニ記載スヘシ

第四十五條　總括表ハ一小林區毎ニ樹種別ニ記入シ最尾ニ總計ヲ同樣記載スヘシ

第九章　官行伐竹豫定案

第四十六條　經費種目ハ傭人料ニ在リテハ人足ノ總類功程ヲ摘要欄ニ記載シ其他ノ種目ニ在リテハ林產物處理費ノ節別毎ニ合計記載スヘシ

但樹員ノ俸給諸給旅費其他一切ノ附帶經費(林產物處理費外)ヲ目別ニ備考欄ニ記載スヘシ

第四十七條　種目ハ傭人料ニ在リテハ人足ノ總類功程ヲ摘要欄ニ記載シ其他ノ種目ニ在リテハ林產物處理費ノ節別毎ニ合計記載スヘシ

第四十八條　總括表ハ一小林區毎ニ造材種目毎ニ記入シ最尾ニ總計ヲ同樣記載スヘシ

但事業創始年度ノ總括表ニハ生木ニ屬スル分ノ將來ニ對スル施業要略ノ調書ヲ添附スヘシ

第十章　官行伐竹豫定案

第四十九條　伐採面積及伐採束數ハ主產物處分豫定案ト一致セシムルヲ要ス

第五十條　人足ノ種類功程雜品ノ名稱用途ヲ摘要欄ニ記載スヘシ

第五十一條　總括表ハ一小林區毎ニ竹種別ニ記入シ最尾ニ總計ヲ同樣記載スヘシ

第十一章　實行

第五十二條　各種ノ豫定案中豫定ハ總テ表ノ左方ニ設ケ右方ニ其實行ヲ記載スヘシ

但官行伐木造材及運材豫定案ニ在リテハ其合計ノ下ニ其實行ヲ記載スヘシ

第五十三條　豫定ヲ變更シタルトキハ實行ノ備考欄ニ其事由ヲ記載シ別口ニ變更案ヲ掲記スヘシ追加ノ場合ニ於テモ亦同シ

第五十四條　豫定不實行ノ場合ニ於テハ實行欄ニ朱線ヲ引キ備考欄ニ其事由ヲ朱記スヘシ但造林ニ在リテハ金額ヲ朱書スヘシ

第五十五條　部分官收木並ニ被害木及豫定外處分ニ係ルモノハ樹種別再掲ノ下ニ於テ各〻別口ヲ設ケ記入スヘシ但記入番號林籍箇所名ヲ豫定面ニ記入スヘシ

第五十六條　造林實行摘要欄ニハ左ノ要件ヲ記載スヘシ

種子採收年月　官行採收ニ用ユ

苗木ノ播種年月又ハ苗齡但官苗ハ播種年月ヲ用ヒ買苗ハ苗齡ヲ用ユ

第五十七條　一記入番號ニシテ數回ニ實行スヘキ見込ノモノニ在リテハ豫定面ニ記入シタル後實行上必要ナル丈ケノ空欄ヲ設ケ斜線ヲ引キ計ヲナシ次ノ記入番號ニ移ルヘシ

前項ノ空欄ヲ設ケス數回ニ實行セサルヲ得サル場合ニ於テ記入スル能ハサルトキハ別口ニ移記シ其旨備考欄ニ記載スヘシ

第五十八條　年度末ニ至リ實行部ヲ合計シ豫定部ニ準シテ作業別及樹種別再掲又ハ類別再掲等ヲナシ又豫定外及追加變更ノ分モ之ニ準シテ再掲ヲナシ最尾ニ於テ全部ヲ總計シテ更ニ之カ再掲ヲナスヘシ

第五十九條　實行ハ大林區署及小林區署ニ於テ記入スヘシ但大林區署ニ於テハ年度末ニ至リ各小林區署實行ノ總計ヲ作ルヘシ

第十二章　雜則

第六十條　施業案既成ノモノハ林班小班ノ記號ヲ記入シ未成ノモノハ小字ノミヲ記入スヘシ

第六十一條　用紙ハ曲尺ニテ縱一尺三寸橫二尺ノ厚官變水引美濃紙若クハ之ニ類似ノ料紙ヲ以テ中央ニ一寸幅ノ綴代ヲ明ケ調製スヘシ

第六十二條　國有原野ノ事業豫定案ハ前各條ニ準シ別表ニ調製スヘシ
（事業豫定案式ハ當省ヨリ別ニ之ヲ頒ツ）
（樣式略ス）

●國有林野內ニ牛馬放牧許可報告ノ件（明治三十二年一月農商務省訓令第三號）

國有林野內ニ於テ牛馬ノ放牧ヲ許可シタルトキハ左記樣式ニ準シ每年度一回報告スヘシ
（樣式略ス）

●國有土地森林原野下戻法（明治三十二年四月法律第九十九號）

聖帝國議會ノ協贊ヲ經タル國有土地森林原野下戻法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

國有土地森林原野下戻法

第一條　地租改正又ハ社寺上地處分ニ依リ官有ニ編入セラレ現ニ國有ニ屬スル土地森林原野若ハ立木竹ハ其ノ處分ノ當時之ニ付キ所有又ハ分收ノ事實アリタル者ハ此ノ法律ニ依リ明治三十三年六月三十日迄ニ主務大臣ニ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得

前項ノ期限ヲ經過シタルモノ又ハ裁判所ノ判決ヲ受ケタルモノハ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

府縣設置以後上地處分ヲ受ケタル土地及地租改正處分既濟地方ニ於ケル未定地脫落地ニ付テハ此ノ法律ノ規定ヲ準用ス

第二條　下戻ノ申請ヲ爲ス者ハ第一條ノ事實ヲ證スル爲少クトモ左ノ書面ノ一ヲ添附スルコトヲ要ス

一　公簿若ハ公書ニ依リ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルモノ

二　高受又ハ正租ヲ納メタル證アルモノ

三　捌下下下附願賣讓與賣入書入寄附等ニ依ル所有又ハ分收ノ事實ヲ證スヘキモノ

四　木竹又ハ其ノ賣却代金ヲ分收シタル證アルモノ

五　私製ヲ以テ木竹ヲ植付ケタル證アルモノ

六　私製ヲ以テ田畑宅地ニ開墾シタル證アルモノ

第三條　前條ノ證據書類ニシテ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルニ足ルト認ムルトキハ主務大臣ハ其ノ下戻ヲ爲スヘシ

第四條　下戻ヲ受ケタル者ハ其ノ下戻ニ因リテ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得ス

前項ニ依リ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得シタル者ハ其ノ土地森林原野若ハ立木竹ニ關シ第三者ニ對スル國ノ權利義務ヲ承繼ス

第五條　第二條ニ依リ下戻ヲ受ケタルモノト雖モ公用又ハ社寺境內ニ供セラルルモノハ其ノ公用又ハ社寺境內ヲ廢シタル後ニアラサレハ權利ヲ行使スルコトヲ得ス

第六條　下戻申請ニ對シ不許可ノ處分ヲ受ケタル者其ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七條　此ノ法律施行以前ニ差出シタル下戻ニ關スル申請書又ハ願書ハ此ノ法律ニ依リタルモノト看做ス

●國有土地森林原野下戻申請手續（明治三十二年四月農商務省令第八號）

本年法律第九十九號ニ依ル國有土地森林原野下戻申請手續左ノ通相定ム

國有土地森林原野下戻申請手續

第一條　國有土地森林原野下戻申請ハ本令ノ定ムル所ニ依ル

第二條　下戻申請書ニシテ土地及北海道ノ森林原野ニ係ルモノハ地方長官ヲ經由シテ內務大臣ニ森林原野ニ係ルモノハ大林區署長ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

立木竹竝ニ未定地、脫落地等ニ係ルモノ亦前項ニ同シ

申請書ハ別記雛形ニ準據シ其土地森林原野等ノ位置ヲ示シタル詳細ノ圖面ヲ之ニ添附スヘシ

第三條　市町村有若クハ市町村內ノ區又ハ市町村內一部ノ所有ニ下戻申請ヲ爲ストキハ市町村會又ハ區會ノ決議書ヲ添ヘ其市參事會町村長ヨリ申請ヲ爲スヘシ

社寺ヨリ申請スル場合ハ神社ニ在テハ神職及氏子總代（氏子總代ナキトキハ信徒總代）寺院ニ在テハ住職及檀徒總代（檀徒總代ナキトキハ信徒總代）佛堂ニ在テハ受持僧侶及信徒總代連署シ且寺院ノ申請ニハ其所屬宗派管長ノ添書ヲ附スヘシ

代理人ヨリ申請スル場合ハ代理委任ヲ證スヘキ書面ヲ添附スヘシ

第四條　地方長官又ハ大林區署長ニ於テ下戻申請書ヲ受ケタルトキハ之ヲ審査シ意見ヲ附シテ主務大臣ニ進達スヘシ

第五條　主務大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ直接申請人ニ就キ推問ヲ爲スコトアルヘシ

第六條　申請ニ對スル指令又ハ申請書ノ却下ハ地方長官又ハ大林區署長ヲ經テ申請人ニ交附スヘシ

第七條　申請書ニ添附セル證據ニ對シ主務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ何年何月何日何第何號檢閱ナル文字ヲ押捺若クハ記入スルコトアルヘシ
（別記雛形）

何々申請書

住所身分職業
申請者　氏　名
年齡

何、、、、　申請ノ目的物

（所在地、種目、面積、樹種、本數竝ニ地番號アルモノハ其番號ヲ詳記スヘシ）

事實

何、、、、　理由

何、、、、　立證

何、、、、
（證據ハ本書竝ニ寫ヲ添附スヘシ）

右申請仕候也

年月日　市町村長　氏　名　印

主務大臣宛

第三款　官有林野附產物處分

●官有森林原野及產物特別處分規則（明治二十三年四月勅令第六十九號）

聖官有森林原野及產物特別處分規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官有森林原野及產物特別處分規則

第一條　農商務大臣ハ左ノ場合ニ限リ官有森林原野及其產物ヲ競爭ニ附セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡又ハ賣却スルコトヲ得

一　官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡シ及其建築材料ヲ賣渡スト

二　開墾若クハ牧畜ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡ストキ

三　鑛業ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ建築材料又ハ薪炭材ヲ賣渡ストキ

四　植樹ノ爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ

五　非常ノ災害ニ罹リタル地方人民ノ爲メ建築材料ヲ賣渡ストキ

六　從來ノ慣行ニ由リ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若クハ土石ヲ賣渡ストキ

七　部分木ヲ仕附人ニ賣拂フ場合ニ於テ之ヲ其發見人ニ賣渡ストキ

八　社寺建築營繕ノ爲メ該社寺上地ノ木材若クハ土石ヲ賣渡ストキ

九　地押調査ニ由リ發見シタル開墾地ヲ其開墾人ニ賣渡ストキ

十　建築其他ノ用ニ供スヘキ土石ヲ發見シタル場合ニ於テ之ヲ其發見人ニ賣渡ストキ

十一　季節アル生產物ヲ賣拂フトキ

十二　開墾牧畜若クハ植樹ノ爲メ貸渡シタル森林原野ノ區域內ニアル產物ヲ其借受人ニ賣拂フトキ

十三　林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ產物ヲ賣渡ストキ

十四　部分方法ニ由リ林產物製造ノ爲メ其原料ヲ請負人ニ賣渡ストキ

十五　見積借地料一箇年金貳百圓ニ超ユサル森林原野ヲ貸渡ストキ

十六　拾町歩以下ニシテ見積代價金貳百圓ニ超ユサル森林原野ノ民有地又ハ道路河川ニ介在セルモノヲ接續地ノ所有者ヘ賣拂フトキ

十七　見積代價金貳百圓ニ超ユサル主副產物ヲ賣拂フトキ（二十四年勅令第二百二號ヲ以テ本項改正）

十八　河海沼澤池ノ堤立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ（二十三年勅令第二百八十二號ヲ以テ追加）

第二條　農商務大臣ハ競爭入札ニ附シタル物件ノ豫定價格ニ達セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ爾後三十日以內ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下ヲ望ム者アルトキハ隨意之ヲ賣拂フコトヲ得

第三條　農商務大臣ハ相當ノ年限ヲ定メ社寺上地官林ノ全部又ハ幾分ヲ該社寺ニ委托シ其林地ノ使用ヲ許可シ又ハ其林地ノ產物ヲ下附スルコトヲ得（二十三年勅令第二百八十三號ヲ以テ本條追加）

第四條　農商務大臣ハ社寺上地官林又ハ特別ノ緣故アル官有森林原野ニシテ存置ヲ要セスト認メタルモノハ其社寺又ハ其緣故アル者ニ限リ隨意ノ契約ヲ以テ賣渡スコトヲ得（二十四年勅令第六十六號ヲ以テ本條追加）

第五條　農商務大臣ハ森林保護ノ爲メ必要ト認ムルトキハ制限ヲ附シ地元人民ニ森林ノ副產物ヲ無料ニテ採取セシムルコトヲ得

第六條　農商務大臣ハ森林手入ノ爲メ採取シタル產物ノ全部又ハ一部ヲ手入料トシテ下附スルコトヲ得（二十四年勅令第二百二十號ヲ以テ第五條六條追加）

●帝國大學資金所屬森林原野竝產物特別處分規則（明治三十一年五月勅令第九十二號）

聖帝國大學資金所屬森林原野竝產物特別處分規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國大學資金所屬森林原野竝產物特別處分規則

第一條　文部大臣ハ左ノ場合ニ限リ隨意契約ヲ以テ帝國大學資金所屬森林原野ノ貸渡及其ノ產物ノ賣却ヲ爲スコトヲ得
一　官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若ハ建築材料ヲ賣渡ストキ
二　見積借地料一箇年二百圓ヲ超エサル森林原野ヲ貸渡ストキ
三　從來ノ慣行ニ由リ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若ハ土石ヲ賣渡ストキ
四　林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ
五　季節アル生產物ヲ賣拂フトキ
六　部分木ヲ其ノ仕付人ニ賣拂フトキ
第二條　文部大臣ハ競爭入札ニ附シタル物件ノ豫定價格ニ達セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ開札後三十日以內ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下ヲ望ム者アルトキハ隨意之ヲ賣拂フコトヲ得

●臺灣官有森林原野、產物特別處分令（明治二十九年九月勅令第三百十一號）

朕臺灣官有森林原野及產物特別處分令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣官有森林原野及產物特別處分令

第一條　臺灣總督ハ左ノ場合ニ限リ官有森林原野及其ノ產物ヲ競爭ニ附セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡シ又ハ賣渡スコトヲ得
一　官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡シ及其ノ建築材料ヲ賣渡ストキ
二　開墾若クハ牧畜ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡ストキ
但森林原野ヲ賣渡スニハ其ノ買受豫約人ニ於テ豫定ノ事業ヲ成功シタル後ニ限ル
三　鑛業ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ建築材料又ハ薪炭材ヲ賣渡ストキ
四　植樹ノ爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ
五　非常ノ災害ニ罹リタル地方人民ノ爲メ建築材料ヲ賣渡ストキ
六　部分木ヲ仕附人ニ賣拂フトキ
七　從來ノ慣行ニヨリ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若クハ土石ヲ賣渡ストキ
八　地籍調査ニ依リ發見シタル開墾地ヲ其ノ開墾人ニ賣渡ストキ
九　建築其ノ他ノ用ニ供スヘキ土石ヲ發見シタル場合ニ於テ之ヲ其ノ發見人ニ賣渡ストキ
十　季節アル生產物ヲ賣拂フトキ
十一　開墾牧畜若クハ植樹ノ爲メ貸渡シタル森林原野ノ區域內ニアル產物ヲ其ノ借受人ニ賣拂フトキ
十二　林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ產物ヲ賣渡ストキ
十三　部分方法ニ依リ林產物製造ノ爲メ其ノ原料ヲ請負人ニ賣渡ストキ
十四　見積借地料一箇年金二百圓ニ超エサル森林原野ヲ貸渡ストキ
十五　見積代價二百圓ニ超エサル主副產物ヲ賣拂フトキ
十六　河海沼湖溪池ノ埋立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ
十七　樟腦製造ノ爲樟樹若ハ其他ノ木竹ヲ賣拂フトキ（三十二年勅令第二百九十一號ヲ以テ追加）
第二條　臺灣總督ハ競爭ニ附シタル物件ノ豫定價格ニ達セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ開札後三十日以內ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下若クハ貸下ヲ望ムモノアルトキハ隨意之ヲ賣渡若クハ貸渡スコトヲ得
第三條　臺灣總督ハ森林保護ノ爲メ必要ト認ムルトキハ制限ヲ附シ地元人民ニ森林ノ副產物ヲ無料ニテ採取セシムルコトヲ得
第四條　臺灣總督ハ森林手入ノ爲メ採取シタル產物ノ全部又ハ一部ヲ手入料トシテ下附スルコトヲ得
第五條　本令施行ニ關スル細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

●隨意契約ヲ以テ原野賣渡ニ關スル件（明治二十三年七月農商務省訓令第三十四號）

明治二十三年勅令第六十九號官有森林原野及產物特別處分規則第一條第二項ニ據リ隨意契約ヲ以テ原野ヲ賣渡ストキハ左ノ條項ニ準據ス可シ

第一條　原野賣渡願書ハ地方長官宛ニテ地元町村長ヲ經由シ所轄官廳ニ差出サシム可シ其願書ニハ賣渡出願ニ係ル原野所在ノ國郡町村字名地目段別並地相當代價ヲ記載シ且事業方法書收支豫算書及實測圖ヲ添附セシムルヲ要ス
第二條　前條ニ據リ願書ヲ差出シタル者アルトキハ地方長官ハ其願書ニ意見ヲ附シ事業方法書收支豫算書及實測圖ヲ添ヘ本大臣ノ指揮ヲ請ク可シ其出願ニ係ル原野ノ段別五町步已下ニシテ其地上ノ產物見積代金三拾圓ヲ超エサルトキハ之ヲ專決スルコトヲ得（二十五年農商務省訓令第十號ヲ以テ改正）
第三條　原野賣渡願書ハ總テ書留郵便ヲ以テ之ヲ差出サシメ若シ二人已上同地ニ附テ出願シタルトキハ地方長官ハ願書發送時日ノ前後ヲ取調ヘ意見ヲ附シ本大臣ノ指揮ヲ請ク可シ
第四條　原野ノ賣渡ハ總テ豫約ノ方法ニ據リ代價

ヲ納附シタル後ニアラサレハ其所有權ヲ拂受人ニ移轉セシメサルモノトス其代價ハ事業成功ノ後拂受人又ハ保證人ヲシテ所轄官廳ニ納附セシム可シ
但事業成功ノ部分ニ對スル所有權ハ拂受人ノ請求ニ依リ其部分ニ相當スル代價ヲ納附セシメタル上之ヲ拂受人ニ移轉セシムルコトヲ得
第五條　賣渡ノ豫約ヲナスヘキ原野ノ段別ハ四百町步已內トス
但土地ノ區域又ハ事業ノ方法ニ依リテハ特ニ此制限ノ超過ヲ許可スルコトアルヘシ
第六條　事業ノ成功期限ハ十五年已內ニ於テ之ヲ定メシメ若シ天災其他止ムヲ得サル事由ニ依リ中途拂受人ニ於テ豫定ノ事業方法又ハ成功期限ノ變更ヲ要スルコトアルトキハ地方長官ハ其拂受人ヲシテ更ニ事業方法書及收支豫算書ヲ添ヘ願書ヲ差出サシメ本大臣ノ指揮ヲ請ク可シ
第七條　賣渡ノ豫約ヲナシタル土地ノ使用料等ハ總テ之ヲ徵收セサルモノトス
第八條　左ニ記載スル條項ハ拂受人ヲシテ之ヲ遵守セシム可シ
一　賣渡豫約ニ係ル土地ハ所轄官廳ノ許可ヲ得スシテ之ヲ他人ニ貸渡スヲ得サルコト
二　賣渡豫約土地ニ對スル負擔及其土地ヨリ生スル損害ニ就テハ拂受人其責ニ任ス可キコト
三　拂受人ハ賣渡豫約許可ノ日ヨリ滿六箇月已內ニ豫定ノ方法ニ從ヒ事業ニ著手ス可キコト
四　拂受人ハ前年ニ於ケル事業ノ功程ヲ翌年一月中ニ所轄官廳ニ報告ス可キコト
五　拂受人ニ於テ事業ニ著手シ及ヒ事業ノ成功シタルトキハ十日已內ニ所轄官廳ニ報告ス可キコト
六　賣渡豫約土地內ニ在ル木竹其他指定メタル物件ハ拂受又ハ特別ノ契約ヲナスニアラサレハ拂受人ニ於テ之ヲ採取シ若クハ使用ス可カラサルコト
七　地方長官ニ於テ官吏ヲ派遣シ事業ノ進否及方法ヲ檢査セシムルトキハ之ヲ拒ムヲ得サルコト
八　拂受人ハ賣渡豫約許可ノ日ヨリ十日已內ニ標杭ヲ境界ニ建設ス可キコト
九　事業ハ必ス豫定ノ方法書ニ依テ之ヲ爲ス可キコト
第九條　拂受人第八條ニ記載スル事項ヲ遵守セス又ハ成功期限ニ至リ事業成功セサルトキハ豫定通成功セル部分ニシテ相當ノ代價ヲ納附シタルモノハ之ヲ除キ其他ハ所轄官廳ニ返還セシムヘシ
前項ノ場合ニ於テ返還地ニ係ル勞費ハ官廳ニ於テ之ヲ辨償セス又返還地ニ在ル植物建物等ハ相當ノ期限ヲ定メ之ヲ取拂ハシムヘシ
第十條　從前開墾牧畜ノ爲メ原野賣渡豫約ヲナシタルモノニシテ既定ノ契約ナキ事項ハ更ニ此規定ニ據リ取扱フヘシ

●官有原野ヲ開墾牧畜ノ爲メ豫約賣渡ノ件（明治三十年十二月農商務省訓令第三十六號）

官有原野ヲ開墾牧畜ノ爲メ豫約賣渡ハ當分ノ內明治二十三年七月本省第三十四號ヲ以テ府縣ヘ訓令シタル條項ニ準シ取扱フヘシ

●官有森林原野及產物特賣規程（明治二十四年九月農商務省告示第八號）

官有森林原野及產物特賣規程左ノ通リ相定ム

官有森林原野及產物特賣規程

第一章　通則

第一條　森林原野及產物ノ特賣ハ總テ本規程ニヨリ施行スルモノトス
但原野ノ豫約賣渡ハ此限ニアラス
第二條　左ノ諸項ノ一ニ觸ルルモノハ特賣ヲ受クルコトヲ得ス
一　森林原野及產物ニ關スル損害賠償若クハ違約金辨償ヲ終ヘサルモノ
二　賣渡スヘキ物件ニ對シ罪ヲ犯シタルモノ
第三條　特賣ヲ願フモノハ第一號乃至第四號書式ニヨリ願書ヲ差出スヘシ
但其願旨建築及土木用材ニ係ルモノハ之カ設計書地所ニ係ルモノハ實測圖及隣接地ノ略圖事業用材ニ係ルモノハ事業方法書ヲ添附スルヲ要ス
第四條　賣買當事者ハ第五號書式ニ準シ契約書ヲ作リ雙方署名捺印ノ上各一通ヲ領收シ置クヘシ
賣渡代金五拾圓以上ナルトキハ賣買契約締結ノ際買受人ヨリ賣渡代金十分一ニ當ル內金ヲ契約保證金トシテ拂込ムヘシ
第五條　契約ノ金額五拾圓ニ滿タサルモノハ第六號書式ノ請書ヲ以テ契約書トナスコトヲ得
第六條　契約書其他契約ニ關スル書類ニ記載アル事項ノ一部分ニ變更ヲ要スルトキハ其部分ニ附箋シ雙方署名捺印スヘシ
第七條　特ニ使用ノ目的ヲ定メテ特賣ヲ受ケタル場合ニハ當該官廳ノ許可ヲ得スシテ其目的ヲ變更シ又ハ他ニ轉賣讓與スルコトヲ得ス

第二章　代價拂込　物件引渡

第八條　買受人約定日限內ニ買受代金ヲ完納シタルトキハ其買受物件ヲ管理スル官廳ニ出頭シテ

拂込証ヲ示シ之カ引渡ヲ請求スヘシ賣渡物件ハ其代價ノ幾分ヲ拂込ムトモ之ニ對スル內渡ヲ爲ササルモノトス

第九條　賣渡物件所管ノ官廳前條第一項ノ請求ヲ受ケタルトキハ約定ノ日限內ニ之ヲ引渡スヘシ

第十條　買受人物件ノ引渡ヲ受ケタルトキハ第七號書式ノ領收書ヲ作リ當該官廳ニ差出シ約定ノ日限內ニ其物件ヲ所在地ヨリ搬出スヘシ

第十一條　買受物件ノ搬出ヲ終リタルトキハ五日以內ニ其旨當該官廳ニ屆出ツヘシ

第十二條　物件ノ所有權ハ引渡ヲ受クルニ隨ヒ買受人ニ移轉シ當該官廳ハ之カ保管ノ責ニ任セス

第三章　違約處分　損害賠償

第十三條　左ノ場合ニ於テハ締結ノ契約ヲ解除シ違約金トシテ當初拂込ノ契約保證金ヲ還附セス尙損害アルトキハ之ヲ賠償セシムヘシ

但賣渡代金五拾圓未滿ナルトキハ違約金ヲ徵セサルモノトス

一　買受人賣買契約締結後代金ヲ豫定ノ日限內ニ拂込マサルトキ

但天災其他不可抗ノ原因又ハ豫メ當該官廳ノ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

二　買受人約定ノ日限內ニ物件ノ引渡ヲ受ケサルトキ

三　買受人賣買契約締結後物件引渡シ以前ニ於テ本規程ニ違背スルカ又ハ契約ノ取消ヲ請求シタルトキ

第十四條　賣買契約締結後物件引渡シ以前ニ於テ當該官廳已ヲ得サル事故ニヨリ契約ヲ取消シタルトキハ第十三條ニ準シ其違約金ニ當ル金額ヲ交附シ尙損害アルトキハ之カ賠償ヲナスモノトス

第十五條　第七條ノ規程ニ違ヒ許可ヲ得スシテ轉賣讓與ヲ爲シ又ハ目的外ニ使用シタルモノハ當初賣渡代金ニ等シキ金額ヲ徵收シ尙損害アルトキハ之ヲ賠償セシムヘシ

第十六條　買受人物件ノ引渡ヲ受ケタル後豫期外ノ陸碍ニ遭ヒ之ヲ約定日限內ニ搬出シ終ルコトヲ得サルトキハ其事由ヲ具シ最初定メタル期限ノ半數ヨリ長カラサル期限ヲ定メテ搬出日限ノ延期ヲ請求シ當該官廳ノ許可ヲ受クヘシ

此場合ニ於テ當該官廳ハ左ノ割合ヲ以テ其間ノ該物件置場ニ係ル借地料ヲ課シ之ヲ前納セシムヘシ

一　賣渡代價百圓以上ノモノハ一日ニ付其千分ノ一

二　賣渡代價百圓未滿ノモノハ一日ニ付金拾錢

但天災又ハ不可抗ノ原因ヨリシテ搬出延期ヲ要スル事由アルモノハ特ニ借地料ヲ免除シ又ハ期限ヲ伸長スルコトヲ得

第十七條　前條ニヨリ搬出延期ヲ許可シタル後天災又ハ不可抗ノ原因アルニアラスシテ尙再ヒ延期ヲ請求スルコトアルモ當該官廳ハ其求ニ應セサルヘシ

前項ノ場合ニ於テ搬出未濟ノ物件ニ對スル所有權ハ當該官廳ニ復歸スルモノトス但既納ノ代金ハ還附セス

第十八條　第十六條ノ場合ニ於テ買受人搬出延期ノ請求ヲ爲サス恣ニ約定日限ヲ過キタルトキハ當該官廳ハ同條ノ割合ニ二倍スル借地料ヲ取立ツヘシ

第十九條　買受人又ハ其雇人若シハ代理人買受物件ヲ伐採蒐集若クハ製造運搬等ノ際ニ於テ當該官廳ニ損害ヲ與ヘタルトキハ當該官廳ハ之ニ對スル賠償金ヲ要求スヘシ

第四章　雜件

第二十條　賣買契約締結後物件引渡シ以前ニ於テ天災又ハ不可抗ノ原因ニヨリ目的ノ物件ヲ亡失毀損シタル爲メ契約ヲ解除シ之カ爲メ買受人ニ於テ損害ヲ生スルモ當該官廳ハ其責ニ任セス

前項ノ場合ニ於テ契約ノ解除ヲ要セス其毀損部分ノ更正ニ止メ尙繼續履行セントスルトキハ第六條ノ手續ニ準スヘシ

第二十一條　賣渡物件ハ當初買受人ニ於テ檢覽シタルモノニ付賣買契約締結後敗壞若クハ品質ニ多少ノ差違アリ又ハ內部腐蝕等ノ爲メ買受人ニ於テ損害ヲ生スルモ當該官廳ハ其責ニ任セス

第二十二條　立木竹生草等賣渡ノ場合ニ於テ其根株ハ賣渡外ノモノトス

但特別ノ契約アルモノハ此限ニアラス

第二十三條　買受人代理人ヲ以テ諸般ノ事項ヲ履行セシムルトキハ買受人ハ其旨當該官廳ニ屆出ツヘシ

第一號書式（用材出願ノ式）

立木拂下願

何國何郡何（町村）大字何々字何々官林ノ內凡段別何程

一何木何本

此尺〆何程

代金何圓　賣尺〆ニ付金何程

一何木何本

此尺〆何程

代金何圓　同上

合木數何程

此尺〆何程

代金何圓

右ハ何々（特賣ヲ受得ルノ事故）ノ爲メ入用ニ候間何々（特賣ヲ受ケサルヲ得サル事由）ニ付御拂下被減下度明治何年何月森林原野及產物特賣規程ヲ遵守此段奉願候也

明治何年何月何日

住所
族籍
氏　名　印

當該官廳長官宛

第二號書式（薪炭材出願ノ書式）

立木拂下願

何國何郡何（町村）大字何々字何々官林ノ內凡段別何程

一何木何本

此棚數何程　賣棚ニ付金何程

代金何圓

同國同郡何（町村）大字何々字何々官林ノ內凡段別何程

一何木何本

此棚數何程　賣棚ニ付金何程

代金何圓

合木數何程

此棚數何程

代金何圓

右ハ云々（第一號書式ニ同シ）

第三號書式（副產物出願ノ式）

何々拂下願

何國何郡何（町村）大字何々字何々官林ノ內

一何々何程

代金何圓　賣（束貫等）ニ付金何程

（年季出願ノモノハ左ノ通標記スヘシ）

何國何郡何（町村）大字何々字何々官林ノ內

一何々何程　但明治何年ヨリ同何年マテ何箇年季

代金何圓　賣（束貫等）ニ付金何程

此一箇年分何程

代金何圓

右云々（第一號書式ニ同シ）

第四號書式

森林（原野）拂下願

何國何郡何（町村）大字何々字何々

一何々（地目）段別何町何段何畝何歩

何國、、、、、、、、、、

一何々（地目）段別何町歩ノ內

段別何段何畝何歩

合計段別何段何畝何歩

（實測段別ハ竝記スヘシ）

右ハ云々（第一號書式ニ同シ）

第五號書式

賣買契約書

印紙　此印紙ハ賣人ヘ領收シ證ノミ買人ヨリ貼附スルモノトス

何國何郡大字何々字何々官林

一何々（樹種等）何程

此代金何程

今般前書ノ通リ賣買契約締結候ニ付テハ明治何年何月官有森林原野及產物特賣規程及左記ノ條項ヲ承諾シ賣方買方名捺印ノ上各一通ヲ領收シ證ノモノ也

年月日

賣人（當該官廳長特賣主任）官　氏　名印

買人　氏　名印

一代價拂込何年何月何日限

一物件引渡何年何月何日限

一物件搬出何年何月何日限

一物件引渡場所

一何々

（契約ヲ要スル條件ヲ列記ス）

第六號書式

請書

何國何郡何村大字何々字何々官林

一何々（樹種等）何程

此代金何程

今般前書ノ通リ御拂下相受ケ候ニ付テハ明治何年何月官有森林原野及產物特賣規程及左記ノ條項ヲ承諾シ請書差出シ候也

年月日

買人　氏　名印

（當該官廳長特賣主任）官氏名殿

一代價拂込何年何月何日限

一物件引渡何年何月何日限

一物件搬出何年何月何日限

一物件引渡場所

一何々

（契約ヲ要スル條件ヲ列記ス）

第七號書式

證

一何々　何程

一何々　何程

右御引渡相成正ニ領收候也

年月日

買人　氏　名印

（當該官廳長引渡主任）官氏名殿

●林產物公賣規程（明治二十三年五月農商務省告示第四號）

林產物公賣規程左ノ通相定ム

林産物公賣規程

第一章　競爭入札

第一條　林産物ノ公賣ハ入札方法ヲ用ヰテ施行ス可シ

第二條　林産物ヲ入札ニ附セントスルトキハ少クトモ入札期日ノ十五日以前ニ掲示若クハ官報新聞紙及其他ノ方法ヲ以テ可成廣ク之ヲ公告スヘシ

公告ニハ左ノ各項ノ諸件ヲ摘明ス可シ

一　入札ニ附スヘキ物件
二　入札スヘキ場所
三　入札スヘキ日限及時刻
四　入札ノ保證金額
五　入札ニ附スヘキ物件ノ所在地
六　入札ニ附スヘキ物件ノ明細書標本（表示スルノ必要アルトキ）ノ所在地林産物公賣規程及ヒ特別契約書案（林産物公賣規程ノ外特ニ契約ヲ要スル條件アルトキ）其他契約ヲ要スル條件等ヲ示ス場所
七　入札掛長ノ官氏名

第三條　入札ニ附スヘキ物件ノ豫定價額ハ之ヲ封書トナシ入札函ニ差入レ置クモノトス

第四條　左ノ諸項ノ一ニ觸ルル者ハ入札ヲナスコトヲ得ス

一　林産物ヲ買受ケ其代金怠納中ノ者
二　官林ニ關スル損害賠償若クハ違約金ノ辨償ヲ終ヘサル者
三　入札ニ附スヘキ物件ニ對シ罪ヲ犯シタル者

第五條　入札セント欲スル者ハ該物件若クハ其標本又ハ明細書及ヒ此規程竝ニ特別契約書案其他該契約ニ必要ナル條件ヲ熟閲シ豫シメ不都合ナキ樣心得置ク可シ

入札人ハ第一號書式ニ依リ入札書ヲ作リ入札保證金ト共ニ豫定ノ日時ニ入札所ニ持參シ入札掛員ノ面前ニテ右保證金ノ員數ヲ改メ之ヲ封シテ入札掛員ニ差出シタル上ニテ入札ス可シ

第六條　入札掛長前條ノ保證金ヲ受領シタルトキハ第二號書式ニ依リ預證ヲ作リ入札人ヘ交附スヘシ

第七條　入札函ハ入札締切時限ニ達スルト同時ニ閉鎖スヘシ

第八條　左ニ掲クル入札ハ無效トス

一　入札書ノ要領不明ナルモノ
二　歸字脫字汚染塗抹其他ニ由リ金員及ヒ氏名ヲ認知シ難キモノ
三　開札ニ立會ハサルモノノ入札

第二章　開札再入札落札

第九條　入札ヲ終タルトキハ入札人ヲ開札所ヘ呼集シ入札掛長若クハ其代理者ハ入札人ノ面前ニ於テ入札函ヲ開キ先ツ入札書ト入札人トヲ一一照合シ入札書ヲ開封シ番號金額及氏名ヲ高ク讀上ケ入札掛員ヲシテ之ヲ無記セシメ豫定代價以上ノ最高額入札人ヲ落札人ト定メ之ヲ各入札人ニ報告スヘシ

第十條　開札ノ上入札一モ豫定價額ニ達セサルトキハ其旨ヲ各入札人ニ報告シ再ト入札セント欲スルモノヲシテ即時ニ再入札ヲナサシム若シ再入札ノ望人ナキトキハ其公賣ハ取消スヘシ

第十一條　落札トナルヘキ同價額ノ入札人二名以上アルトキハ其入札人ヲシテ即時ニ再入札ヲナサシメ尚同價ノ入札アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ム

第十二條　落札人ハ入札ヲ取消シタルトキハ遞次繰下ケ落札人ヲ定ムヘシ但其繰下ケハ豫定價額以上ニ止ルモノトス

第十三條　落札人定リタルトキ若クハ落札人ナクシテ公賣ヲ取消タルトキハ入札掛長ハ即時ニ落札人ニ報告スヘシ

第十四條　落札人定リタル上ハ其場ニ於テ直ニ他ノ入札人ヘ保證金積リ證書ト引換ニ入札保證金ヲ還附シ落札人ニハ賣買契約締結後ニ之ヲ還附ス

第十五條　落札人定リタルトキハ即時ニ落札代金十分ノ一ニ當ル内金ヲ契約保證金トシテ拂込ミ第三號書式（別紙）ニ據リ賣買契約書ヲ作リ結約者雙方署名捺印シ各一通ヲ領收シ置ク可シ但シ落札人ハ其便宜ニ依リ落札代價十分ノ一以上ノ金額若クハ其全額ヲ即納スルコトヲ得

第三章　代價拂込、物件引渡

第十六條　落札人約定日限内ニ賣買代金ノ拂込ミヲ了リタルトキハ其落札物件ヲ管スル官所ニ出願シ其拂込證（交附票ヲ受取リタルトキハ之レト偕ニ）ヲ示シ之カ引渡ヲ請求ス可シ

落札物件ハ其代價ノ幾分ヲ拂込ムトモ之ニ對スル内渡ヲナサルモノトス

第十七條　落札物件所管ノ官所前條ノ請求ヲ受ケタルトキハ約定ノ日限内ニ之ヲ引渡ス可シ

第十八條　買受人物件ノ引渡ヲ受タルトキハ第四號書式（別紙）ニ據リ領收證ヲ作リ引渡掛員ニ差出シ約定ノ日限内ニ其物件ヲ所在地ヨリ搬出スヘシ

第十九條　物件ノ所有權ハ物件ノ引渡ヲ受ルニ隨ヒ買受人ニ移轉スルモノトス

第四章　違約處分、損害賠償

第二十條　左ノ場合ニ於テハ入札保證金ヲ還附セス

一　落札ノ上賣買契約ヲ落札人ニ於テ締結セサルトキ
二　開札後ニ入札ノ取消ヲナシタルトキ

第二十一條　左ノ場合ニ於テハ契約保證金ヲ還付セス締結ノ契約ハ解除スルモノトス

一　落札人賣買契約締結後代金ヲ約定ノ日限内ニ拂込マサルトキ
二　落札人賣買契約締結後代金拂込以前ニ契約ヲ取消シタルトキ
三　落札人約定ノ期限内ニ物件ノ引渡ヲ受ケサルトキ

第二十二條　落札人物件ノ引渡ヲ受ケタル後豫期外ノ障礙ニ遇ヒ之ヲ約定日限内ニ搬出シ了ルコトヲ得サルトキハ其事由ヲ具シ更ニ期限ヲ定メテ搬出日限ノ延期ヲ請求ス可シ此ノ場合ニ於テハ當該署所ハ左ノ割合ヲ以テ其間ノ該物件置場ニ係ル借地料ヲ課シ之ヲ前納セシム可シ

一　落札代價金百圓以上ノモノハ一日ニ付其千分ノ一
二　落札代價金百圓未滿ノモノハ一日ニ付金十錢

但搬出延期ヲ要スルノ事由天災若クハ事變ニ屬スルトキハ特ニ右借地料ヲ免ス可シ

第二十三條　前條ノ場合ニ於テ落札人搬出延期ノ請求ヲナサシテ恣ニ約定日限ヲ過ルトキハ當該署所ハ前條ノ割合ニ二倍スルノ借地料ヲ取立ツ可シ

本條及ヒ前條ノ場合ニ於テ落札人右借地料ヲ納メサルトキハ當該署所ハ其搬出未滿ノ物件ヲ差押ヘ本人ヲ立會ハシメテ之ヲ公賣ニ付シ其代金ヲ以テ借地料及ヒ差押公賣其他ノ諸入費ヲ支拂ヒ猶ホ殘金アルトキハ之ヲ還付シ若シ不足スルトキハ更ニ之ヲ要求ス可シ

第二十四條　落札人若クハ屋人落札物件ヲ伐採蒐集若クハ製造運搬等ノ際ニ於テ當該署所ニ損害ヲ與ヘタルトキハ當該署所ハ之ニ對スル賠償引當トシテ搬出未滿ノ物件ヲ差押ヘ若クハ其事業ヲ中止シ期限ヲ定メ相當ノ賠償金ヲ要求ス可シ

落札人右賠償金ヲ承諾シタル上之ヲ期限内ニ納メサルトキハ第二十三條第二項ノ手續ニ依リテ之ヲ處分ス可シ

第五章　雜件

第二十五條　公賣物件入札後又ハ賣買契約締結後天災事變等ノ避クヘカラサルノ原因ニ由リ目的ノ事件ヲ亡失毀損シタル爲メ公賣ヲ取消シ之カ爲メ入札人落札人又ハ買受人ニ於テ損害ヲ生スルモ當該署所其責ニ任セス

第二十六條　公賣物件ハ當初入札人ニ於テ熟覽シタルモノニ付落札後數量若クハ物質等ニ多少ノ差違アリ又ハ物件ノ内部ニ腐朽等アルモ當該署所ハ其責ニ任セス

第二十七條　立木竹公賣ノ場合ニ於テ其根株ハ公賣外ノモノトス但シ別段ノ契約アルモノハ此限ニアラス

第二十八條　入札人落札人又ハ買受人代理人ヲ以テ諸般ノ事項ヲ履行セシムルトキハ代理人ハ其委任狀ヲ當該署所ニ示スヘシ

第二十九條　落札人其物件ヲ搬出以前ニ於テ他ヘ賣買讓與シタルトキハ雙方連署シテ當該署所ニ屆出テ認可ヲ受ク可シ

第一號書式

印紙

第　號　　入札書

一何々（物件ノ名稱ヲ記入スヘシ）　何程（數量）

此代金何程

第　號　　何程

一何々

第二號書式

第　號　　證

一金何程　　納入　姓　名

但何々入札保證金

右封ノ儘預置候也

年月日　　入札掛長官　姓　名　印

入札掛長割印

第　號

一金何程　　納入　姓　名

但何々入札保證金

年月日

此代金何程

（以下此例ニ準シ公告ニ掲載ノ物件概目ヲ一々記載スヘシ）

右代金ヲ以テ買受申度林産物公賣規程其他公示又ハ特別契約ノ條項ヲ承諾シ保證金相添ヘ入札書差出候也

年月日　　住所　姓　名　印

（代理人ナルトキハ代理人ノ住所姓名ヲ併記シ捺印スヘシ以下皆同シ）

入札掛長官姓名宛

第三號書式

賣買契約書

印紙　此印紙ハ賣人ヘ領收シ置クモノノミニ買人ヨリ貼付スルモノトス

今般別紙入札書ノ通落札セシニ付林産物公賣規程及左記ノ條項ヲ承諾シ賣買契約ヲ締結シ雙方

畏名ノ上各一通ヲ銀收シ置クモノ也

年月日　　賣人　入札掛長官　姓　名印
　　住所
　　買人　　姓　名印

一代價拂込何年何月何日限
一物件引渡何年何月何日限
一物件引渡ヲ請求スヘキ官署
一物件引渡場所
一何々
「契約ヲ要スル條件ヲ列記ス

第四號雛式

印紙　　證

第　號
一何々（物件ノ名稱ヲ記入スヘシ）何程（數量）
第　號
一何々　　何程
右御引渡相成銀收候也

年月日　　住所
　　買人　姓　名印
引渡掛員官姓名宛

●官有森林原野公賣ニ關スル規定（明治二十四年七月農商務省告示第七號）

官有森林原野ノ公賣ハ明治二十三年五月當省告示第四號林産物公賣規程ニ準シ施行ス

●林産物品取扱區分（明治二十五年一月農商務省訓令第一號）

林産物品取扱區分方自今左ノ通リ心得ヘシ

一　官行事業又ハ官民分收ノ契約ニ依リ收得シタル物品ハ總テ林産物品會計規程ニ據リ取扱フヘシ

二　前項ノ外盜伐木末木落枝落葉ノ類ニシテ官之ヲ採集セス該物件所在地ニ於テ直チニ變却スルモノハ林産物品會計規程ニ據リ取扱フヲ要セス但變却ノ目的ヲ以テ特ニ之ヲ採集シ貯蔵場ニ蔵置シタルトキハ該規程ニ據リ取扱フヘシ

三　立木竹小柴下草其他ノ産物ニシテ土地ニ附著ノ儘變却スルモノハ總テ林産物品會計規程ニ據リ取扱フヲ要セス

●官有森林交換規程（明治二十四年九月農商務省訓令第三十八號）

官有森林交換規程左ノ通相定ム

官有森林原野若クハ田畑

第一條　官有森林交換規程

官有森林ヲ以テ民有森林原野若クハ田畑ト交換セントスルトキハ此規程ニ準據スヘシ

第二條　官有森林ヲ以テ民有森林原野若クハ田畑ト交換スルコトヲ得ルハ官有森林ノ經營上必要ノ土地ニシテ少クトモ評定價格相均シキモノニ限ル

第三條　交換ヲ爲サントスル官有森林アルトキハ申込ノ期日ヲ定メ掲示若クハ官報新聞紙及其他ノ方法ヲ以テ左ノ事項ヲ公告スヘシ

但特別ノ緣故アル官有森林又ハ官ニ於テ特ニ必要ナル民有地ノ交換ハ公告ノ法ヲ用ヰス

一　交換ヲ爲サントスル官有森林ノ所在地及其字地番號

二　交換ヲ爲サントスル官有森林ノ實測段別

三　交換ヲ爲サントスル官有森林産物ノ種類及數量

但樹木ノ數量ハ本數竝ニ材積ヲ示スヘシ

四　交換ニ應ムヘキ民有地目ノ種類

第四條　前條ニ因リ交換ヲ申込マントスルモノアルトキハ左ノ事項ヲ具シ書面ヲ差出サシムヘシ

一　交換ノ爲メ提供スル民有森林原野若クハ田畑ノ所在地及其字地番號

二　交換ノ爲メ提供スル民有地目

三　交換ノ爲メ提供スル民有森林原野若クハ田畑ノ段別及其土地ノ價格

四　交換ノ爲メ提供スル民有森林原野産物ノ種類數量及價格

但田畑ニシテ産物共ニ交換セントスルトキハ本項ニ準スヘシ

五　交換ノ爲メ提供スル民有森林原野若クハ田畑ノ地形ヲ示セル繪圖面

但隣接地目及最近官有森林トノ位置及距離ヲ記載スヘシ

第五條　交換ノ書面ヲ差出シタルモノアルトキハ提供ノ民有森林原野若クハ田畑ヲ實査シ經營上最モ必要ナルモノヲ撰ヒ左ノ事項ヲ具シ農商務大臣ノ指揮ヲ請クヘシ

一　交換ヲ爲サントスル官有森林及民有森林原野若クハ田畑ノ實測段別及地形竝四隣ノ景況ヲ示セル明細繪圖及其土地ノ評定價格

二　交換ヲ爲サントスル官有森林及民有森林原野田畑産物ノ種類數量竝評定價格

三　交換ノ利害ニ關スル意見

第六條　民有森林原野若クハ田畑ヲ實測シ及産物ノ數量ヲ算定スルニハ出願人ヲ立會セシムヘシ

第七條　森林原野田畑及産物ノ評定價格ハ評價人ノ評價ニ依ルヘシ

第八條　提供ノ民有森林原野若クハ田畑ニシテ交換ヲ爲スニ適當ナルモノト認メタルトキハ直税分署及登記所ニ照會シテ出願人ノ所有物ニ相違ナキヤ且其物ニハ他ノ權利ノ附著スルコトナキヤヲ確ムヘシ

●官有森林原野ヲ民有ニ引戻請求手續（明治三十年八月農商務省令第十三號）

官有森林原野ヲ民有ニ引戻ヲ請フモノハ自今左ノ手續ニ據ル可シ

第一條　官有森林原野ニ編入セラレタルモノニシテ民有タルヘキ證左ニ據リ地所又ハ立木竹ノ引戻ヲ請フモノハ大林區所管林野ニ關シテハ大林區署其他ノ官有地又ハ未定地脱落地ノ民有編入ニ係ルモノハ府縣廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ申請スヘシ（三十年農商務省令第二十號三十一年同省令第二號改正ニ依ル）

申請書ハ別記雛形ニ準拠スヘシ

第二條　前條ノ申請アリタルトキハ府縣廳竝ニ大林區署ハ所見ヲ具シ六十日以内ニ農商務省ニ進達スヘシ但不得已事故アリテ期限内ニ進達スル能ハサル事件ニ付テハ特ニ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ（三十年農商務省令第二十號ヲ以テ但書追加）

第三條　農商務省ニ於テ必要アリト認ムルトキハ直接申請人ニ就キ推問ヲ爲スコトアルヘシ

第四條　申請ニ對スル指令ハ府縣廳又ハ大林區署ヲ經テ申請人ニ交付スヘシ

第五條　本令發布以前府縣廳ヘ出願セシ分ハ本令ニ依リ提出シタル申請ト看做ス

（別記雛形）

何々申請書

住所身分職業
氏名
年齢

申請ノ目的物

何、、、、事實
何、、、、理由
何、、、、立證
何、、、、
（證據ハ本書竝ニ寫ヲ添付スヘシ）

右申請仕候也

年月日

市町村長　氏　名印
（市町村長ニ於テ意見アルモノハ別紙ヲ以テ具申スルコトヲ得）

農商務大臣宛

●御料地下戻申請ノ件（明治三十一年三月農商務省告示第六號）

御料地ハ官内省ノ所管ナルニ依リ該地下戻ニ關スル申請ハ自今當省ニ於テ處理セス其既ニ進達ニ係リ處分未濟ノ分ハ此際地方廳ヲ經テ總テ之ヲ却下ス

但シ處分未濟ノ申請ニシテ宮内省ニ於テ拂下告示ノ部分ニ該當スルモノハ當省ヨリ宮内省ニ照會ノ上該省ニ於テ其拂下處分ヲ停止スル旨通牒ニ接セリ

●社寺上地官林委託規則（明治二十四年四月農商務省令第五號）

明治二十三年勅令第六十九號官有森林原野及産物特別處分規則第三條ニ據リ社寺上地官林委託規則左ノ通之ヲ定ム

第一條　社寺上地官林委託規則

社寺ニ於テ上地官林ノ委託ヲ請ケント欲スルトキハ願書ニ其ノ創立ノ年代由緒沿革格出願地ノ字名區域段別樹種別本數（竹ハ三寸周リ以上ノ數量）維持方法氏子檀徒信徒ノ概數等ヲ詳記シ年限ヲ定メ圖面ヲ添ヘ神官住職及ヒ氏子檀徒總代（氏子檀徒ナキモノハ信徒總代）三名以上連署シ寺院ハ管長ノ奥書ヲ經テ所轄大林區署長ニ差出スヘシ

第二條　社寺上地官林ノ委託ハ此ノ規則中特ニ定メタル場合ノ外十五年ヲ以テ限度トス委託年限ヲ經過シ尚ホ引續キ其ノ委託ヲ請ケント欲スルモノハ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條　社寺ハ委託前他人ニ於テ採取ノ許可ヲ得其ノ期限内ニ係ルモノヲ除クノ外委託官林内ノ副産物（即チ樹實菌蕈落枝落葉下草晩筍ノ類）ヲ無代價ニテ收得スルコトヲ得

第四條　社寺ハ所轄大林區署長ノ許可ヲ得テ委託官林内ニ建造物ヲ設ケ又ハ竹木ヲ栽植シ若クハ林地ヲ使用スルコトヲ得

前項ニ據リ竹木ノ栽植ヲ爲シタルトキハ其ノ栽植地ノ委託ハ新植ノ年度ヨリ起算シ八十年ヲ以テ限度トス其ノ純植ニ就テモ新植ノ年度ヨリ起算シ該限度ヲ超過スルヲ許サス

第五條　社寺ハ風致其ノ他水源涵養土砂吸止等總テ公共ノ利益ニ關スルモノヲ除キ所轄大林區署長ノ許可ヲ得テ其ノ栽植ニ係ル竹木ヲ伐採スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ社寺ハ其ノ伐採シタル竹木相當價格ノ二分ノ一ヲ所轄大林區署ニ納付スヘシ

第六條　社寺ハ其ノ建築又ハ修繕用ニ供セントスルトキハ委託官林内在來ノ竹木ニシテ風致其ノ他水源涵養土砂吸止等總テ公共ノ利益ニ關スルモノヲ除キ相當代價ヲ以テ特賣ヲ所轄大林區署長ニ請求スルコトヲ得

前項ニ據リ譲渡ヲ受ケタル竹木ヲ目的外ニ使用シ又ハ轉譲シ若クハ讓與シタルトキハ其ノ譲渡代價ノ二倍ヲ徵收スヘシ

第七條　社寺ハ其ノ委託官林保護ノ責ニ任シ且ヲ四至ニ境界標ヲ建設スヘシ

前項ノ境界標ハ委託許可ノ日ヨリ十日以内ニ之ヲ建設シ委託官林ノ段別境界ノ方位許可ノ年月日及ヒ某社寺ノ請ケタル委託官林タルコトヲ明瞭ニ表記スヘシ

第八條　社寺ハ第四條ニ據リ委託官林内ニ竹木栽植ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ十日以内ニ其ノ栽植地ノ四至ニ標杭ヲ建設シ栽植地ノ段別境界ノ方位許可ノ年月日及ヒ某社寺ノ請ケタル委託官林内ノ栽植地タルコトヲ明瞭ニ表記スヘシ

第九條　社寺ニ於テ委託官林内ノ竹木ヲ斫伐シ副産物ヲ採取スルトキハ凡テ所轄大林區署長ノ指示スル方法ニ據ルヘシ

第十條　社寺ニ於テ委託官林ノ手入ヲナサントスルトキハ所轄大林區署長ノ許可ヲ受クヘシ

第十一條　第四條第五條第六條第十條ニ依リ差出スヘキ願書ニハ神官住職及ヒ氏子檀徒若クハ信徒總代ノ連署ヲ要ス

第十二條　斫伐ノ許可ヲ受ケタル竹木ハ所轄大林區署長ノ引渡ヲ受クルニアラサレハ之ヲ伐採スルコトヲ得ス

但引渡ヲ受ケタル竹木雖モ其ノ根株ハ特ニ許可シタルモノ外掘採スルコトヲ得ス

第十三條　社寺ハ其ノ委託官林ヲ他ニ轉貸スルコトヲ得ス

第十四條　左ノ場合ニ於テハ社寺ハ事由ヲ記メ速ニ所轄大林區署長ニ届出ヘシ

但第二第三第四及ヒ第五ノ場合ニ於テハ所轄大林區署長ノ檢査ヲ受クヘシ

一　看守人ヲ置キ又ハ盜シタルトキ

二　委託官林ニ係ル犯罪其ノ他異狀ノ事故アリタルトキ

三　道路電線耕地宅地家屋等ニ對スル障害アリタルトキ

四　林地ノ使用若クハ栽植ヲ終ハリタルトキ

竹木ノ栽植ヲナシタルトキハ其ノ栽植實費取調書ヲ添付スヘシ

五　竹木ヲ斫伐シ及ヒ運搬ヲ終ハリタルトキ

第十五條　左ノ場合ニ於テハ所轄大林區署長ハ委託期限中ト雖モ其ノ委託ヲ解クコトヲ得

一　官用又ハ公用ノ爲メ必要アルトキ但此場合ニ於テハ委託中社寺ノ費用ヲ以テ栽植シタル竹木ニ就テハ其ノ栽植實費ヲ賠償ス

二　此ノ規則ニ定メタル制限及ヒ條件ニ違背シタルトキ但社寺ノ栽植ニ係ル竹木ハ之ヲ官没ス

第十六條　竹木及ヒ副産物ノ斫伐採取其ノ他林地使用ノ爲メ若クハ故意怠慢ニ依リ委託官林ニ傷害ヲ生シ又ハ生セントスルトキハ所轄大林區署長ハ其ノ斫伐採取使用ヲ停止若クハ禁止シ尚ホ其ノ委託ヲ解クコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ損害アルトキハ社寺ニ於テ其ノ賠償ノ責ニ任スヘシ

第十七條　社寺ニ於テ此規則ヲ履行スルニ因リテ生スル費用ハ社寺ノ負擔トス

●社寺ノ上地ニ係ル御料地委託出願方（明治二十四年五月官内省告示第九號）

御料地ノ内社寺ノ上地ニ係ルモノハ該社寺ノ出願ニ依リ本年四月農商務省令第五號社寺上地官林委託規則ヲ適用シ之ヲ委託スルコトアルヘキニ付委託ヲ請ケントスル社寺ハ左ノ區別ニ從ヒ出願スヘシ

一　御料局支廳又ハ事務所ノ所管ニ屬スル御料地ニ對シテハ該支廳長又ハ事務所長

一　地方廳ニ委託シタル御料地ニ對シテハ該地方長官

一　以上列記外ノ御料地ニ對シテハ總テ御料局長

●官林木、木材檢査並引渡用極印ノ件（明治二十四年七月農商務省令第一號）

官有林野ノ立木又ハ木材ノ檢査及引渡ニ用ユル極印雛形ノ通リ相定候條自今左ノ區別ニ依リ使用ス可シ

一　第一號雛形檢印ハ譲渡讓與ヲ爲スニ當リ豫メ其立木及木材ノ檢査ヲ爲セシトキ又ハ之レカ伐採檢査ヲ爲セシトキ其證トシテ打印スヘシ

二　第二號雛形払印ハ譲渡讓與ヲ爲セシ證トシテ其立木及木材ニ打印スヘシ

三　第三號雛形山印ハ譲渡木ノ根株盜伐伐木材及其伐跡、境界木其他區域ヲ定メ譲渡シタル林野中存置ヲ要スヘキ立木及其境木等ニ打印スヘシ

四　以上三項ノ外地方ニヨリ特ニ使用ヲ要スル場合ニハ總テ山印ヲ適用スヘシ

五　檢印払印ハ黑肉ヲ用ヒ山印ハ黑朱肉適宜使用スルモ妨ナシ

六　極印ヲ誤打セシトキハ朱肉ノ同印ニテ消印スヘシ

但朱肉ヲ用ヒタル山印ヲ消印スルトキハ黑肉ヲ用ユヘシ

（極印雛形略ス）

●御料地ノ立木、木材ニ用ユル極印ノ件（明治二十六年一月官内省告示第一號）

御料地ノ立木又ハ木材ニ用ユル極印左ノ通相定メ本年一月ヨリ使用ス

（極印雛形第一號第二號略ス）

一　第一號極印ハ檢査ヲ爲シタル立木根株及木材ニ黑色ニテ鉛記ス

但盜伐伐ニ罹リタル殘存木材及其根株ニハ朱色ニテ鉛記ス

二　第二號極印ハ譲渡讓與ノ爲メ引渡ヲ爲セシ立木根株及木材ニ黑色ニテ鉛記ス

●御料林ヨリ伐出スル木材取扱方（明治三十一年三月官内省告示第十號）

御料局ニ於テ御料林ヨリ伐出スル木材ニハ其ノ上部ニ切判ヲ附シ尚其ノ下部ニ伐木年度ヲ識別スル爲メノ切判ヲ加フ其ノ切判形ハ左ノ如シ

但シ其ノ下部ノ切判形ハ十年毎ニ回歸使用スル且伐木地ヲ識別スル爲メ上部切判ノ直下ニ尚一箇ノ切判ヲ加フルコトアルヘシ

（切判雛形略ス）

●府縣管理ノ官有山林原野ヲ大林區署ニ授受ノ件（明治三十年十月農商務省訓令第二十七號）

從來府縣ニ於テ管理スル官有山林原野ハ總テ來十二月二十五日限リ當該大林區署ニ授受ノ手續ヲ爲スヘシ

●官有山林原野ニ關スル處分委任ノ件（明治二十四年三月農商務省訓令第十號）

自今左記ノ條件竟請ヲ要セス處分後報告スヘシ

一　官有山林原野ノ枯木倒木危險木障害木處分

二　官有山林原野中測量ニ支障ノ立竹木伐採ノ件

三　官有山林原野ニ於テ季節アル產物發却ノ件

但五箇年以上ノ年期貸渡ハ此限ニアラス（二十四年農商務省訓令第二十五號ヲ以テ但書追加）

四　官有山林原野ヲ官林ヘ編入ノ件

五　官有山林原野地種目組替ニ付地上立竹木賣却ノ件

六　官有山林原野ヘ公益ノ爲メ竹木獻植ノ件

七　非常ノ際治水ノ爲メ官有山林原野ノ立竹木處分ノ件

八　官有山林原野ニ於テ鑛業上必要ナル地所貸渡ノ件但五箇年以上ノ年期貸渡ハ此限ニアラス（同上）

九　官有山林原野一區域段別五町歩以下ニシテ一箇年借受料金五十圓以下ノ土地貸渡ノ件但殿區域ニシテ五町歩ヲ超過スルトキ又ハ五箇年以上ノ年期貸渡ハ此限ニアラス（二十四年農商務省訓令第二十五號ヲ以テ但書中追加）

十　從來ノ慣行ニ由リ官有山林原野（國土保安ニ關係ナキ箇所）ニ於テ代金五十圓以下ノ土石發却ノ件

十一　官有山林原野ニ於テ墓地火葬場汚穢物埋却場及斃牛馬捨場新設又ハ取廢メノ爲メ段別一町歩以下發却ノ件

十二　官有山林原野一段歩以内ニシテ譲渡代金十圓以下ノ箇所民有地又ハ河川道路等ニ介在セルモノ接續地主ヘ譲却ノ件

以上十二項ハ北海道國沖縄縣ヲ除ク（十三項以下ハ鑛業條例施行ニ依リ消滅ス）

一　官有山林原野ノ枯木倒木危險木障害木處分小笠原島官林原野處分方ノ件　二十四年十二月許可

第四款　部分木

●部分木仕付條例（明治十一年三月内務省布達甲第四號）

植林ノ儀ハ最モ方今ノ急務ニ付今般部分木仕付條例別紙ノ通施行候條其趣旨ヲ體認從事候樣可致此旨布達候事

（別紙）

部分木仕付條例

第一條　樹木ナキ官有ノ山野官ニ於テ差支無之時ハ人民ノ願ニヨリ之ヲ貸渡シ地味ニ適當セル木種ヲ植付セシメ其幾分ヲ官納シ自ラ其幾分ヲ收メシムルヲ名ケテ部分木ト云

但官林伐木跡ト雖モ從前部分ノ慣行有之箇所ハ本文ニ準スルヲ得ヘシ

第二條　第一條ノ趣旨ヲ以テ官地ヲ拜借セント欲スルモノハ先ツ該所ノ反別ヲ測量シ地味ノ適否ヲ審査シ別紙第一號書式ニ照ラシ地方廳ニ願出ヘシ

第三條　前條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ於テ官吏ヲ派遣シ巡視點檢事實相違ナキトキハ之ヲ聞届ケ別紙第二號書式ニ倣ヒ貸地祭狀ヲ下ケ渡スヘシ

第四條　樹木部分ノ方法ハ運輸ノ便否地味ノ善惡人民希望ノ厚薄ニヨリ二官八民（假令ハ百本ノ立木ナレハ二十本ヲ官收シ八十本ハ人民ニ附與スルヲ云フ）以上實際適宜ニ之ヲ區分スヘシ（十一年内務省甲第二十號ヲ以テ「ヨリ五官五民迄ノ間」九字ヲ削リ「以上實際」ノ四字ヲ加フ）

第五條　第四條掲クル所ノ部分方法ハ成木ノ上立木ノ儘分配スルアリ又ハ伐木ノ節官民於テ各評

價人ヲ出シ總計金額ヲ豫算シ金員ヲ以テ配賦スルアリ共ニ官民協議ノ上適宜ニ之ヲ定ムルモノトス

但不得已事故アツテ官ニ於テ該地入用ノ節ハ相當代價ヲ以テ其民有ニ當レル樹木ヲ買上クヘシ

第六條　地方廳ニ於テハ臺帳ヲ製シ毎年人民ヘ貸渡シタル地所反別(植付挿付)木種員數及ヒ拜借人ノ住所姓名共詳細取調前年十二月迄ノ分翌年一月限リ内務省地理局ニ届出ヘシ

第七條　官ハ地所ノ貸渡料ヲ取立サルヘシ借人ハ植挿養護ヲ担任スルモノトス

第八條　植挿ノ後樹木成育スルニ隨ヒ手入伐木セント欲スルトキハ前以テ地方廳ニ願出ツヘシ地方廳ニ於テ實地點檢不都合ナキモノハ是ヲ許可シ茂除ノ樹木ハ悉ク仕立主ニ下付スヘシ而シテ臺帳ニ就キ其茂伐セシ木數ヲ削除シ其翌年一月限リ遺漏ナク内務省地理局ニ届出ツヘシ

但十五年以後ニ至リ拔伐スル木品ハ最初ノ約束ニ基キ各之ヲ配賦スヘシ

第九條　地所拜借願濟ノ上ハ四至境界ヲ正シ四隅(左ノ通仕立主ヲシテ標木ヲ建設セシムヘシ

塞

何府縣下何國何郡何町村字何四至境界

第何號幾官幾民部分林反別何程

一何年何月植付挿付　仕立主何郡何町村　何之誰

第十條　仕立主ノ都合ニヨリ其部分木仕付ノ樣ヲ他ニ讓渡サント欲スルトキハ其事實ヲ詳記シ地方官ニ願出ツヘシ地方廳ニ於テハ實際不都合ナキモノト認ムルトキハ證券ニ奥書シテ下渡シ追テ内務省地理局ヘ届出ツヘシ

但本文ノ樹木ヲ買入書入セント欲スルトキハ明治七年第六號公布ノ手續ニ準擬シ所戸長ノ檢認ヲ受クヘシ

第十一條　借地反別ハ豫メ其制限ヲ定メスト雖モ其植栽見込ノ員數ニ對照シ相當ノ地積ヲ貸付スルモノトス

但植立員數ノ都合ニヨリ廣大ノ地積ヲ要シ一時植挿ヲ爲シ得サル場合ニ於テハ三箇年以内ノ期限ヲ以テ追次其植樹ヲ許スヘシ然レトモ三箇年ヲ過キ猶其植挿未了ノ地ハ直ニ返附セシムヘシ

第十二條　一時植立竝追次植樹ニ拘ラス實地植立濟ノ上ハ其旨地方廳ニ届出之レカ檢査ヲ受クヘシ

△願書雛形

△第一號　△表紙　(△印朱書)

部分木植付挿付願

何府縣管下何國何郡何村

華族士族
平民　何之誰

△第一號

御管内何國何郡何(町村)字何官山野反別何程ヘ何木何程幾官幾民ノ部分方法ヲ以テ御規則ノ通私費(植付挿付)被差許度此段奉願候也

何(府縣)管下何國何郡何(町村)

華族士族
平民　何之誰印

年月日

△奥書

前書ノ通相違無之ニ付被差許度候也

年月日　區戸長印

地方長官宛

△留券雛形

△第二號

△番號

部分木留券

何府縣下何國何郡何町村　何之誰

△割印

何府縣下何國何郡何町村字何官山野反別何程

何樹植付挿付何程　△樹種數品有之モノ本行ニ倣ヒ別記スヘシ

右明治何年何月ヨリ地所貸渡候條植付(挿付)ヨリ培養保護ニ至ルマテ全ク私費ヲ以テ可相辨尤成育ノ上ハ幾官幾民ノ割合ヲ以テ部分スヘキモノ也

年月日　地方長官姓名印

△此割印ハ縣廳所用ノ印ヲ臺帳ニ割印ス

●部分木仕付出願ノ者心得方

(明治十一年六月内務省布達甲第十四號)

本年(三月)當省甲第四號ヲ以テ部分木仕付條例及布達置候處右ニ照準出願ノ者ハ別紙ノ條件相心得不都合ノ儀無之樣可致此旨布達候事

(別紙)

一部分木仕付條例ニ準シ官地拜借許可濟ノ後條例第十條ノ手續ヲナサス竊ニ其地ヲ他人ニ貸シ又ハ賣入書入ヲ爲スモノ

一同斷許可濟ノ日ヨリ滿一年ヲ過キテ植挿著手セサルモノ

但條例第十一條但書ノ場合ハ本文ト牴觸スルコトナシ

一同斷一箇年以内ト雖モ主願ノ樹木ヲ植挿セス他事ニ使用セルモノ

一植樹ノ爲メ甲ノ地ヲ拜借シ從乙ノ地ニ苗床ヲ設ケ實植苗植等ヲナシ他日生育ヲ待テ甲地ニ移植スヘキコトノ著明ナルトキト雖モ最初許可ノ日ヨリ滿三年ニ至リ猶甲地ニ移植セサルモノ

右條々ノ所爲アルモノハ直ニ其地竝地上ニ附著セルモノヲ取上ケ最初貸渡許可ノ日ヨリ而後ノ借地料ニ當ル金額ヲ徵收シ且其者等(第一條ノ所爲ニ依リ其地ヲ借リ又ハ書入質入ニ取リタル者モ亦同シ)ヘ再此條例ニ由リ官地ヲ貸渡スヲ許サス

●部分木仕付條例頒布ノ趣意

(明治十一年三月内務省達乙第二十七號)

告諭ノ件

森林ノ經國ニ緊要ナルハ勿論ニ候處近來工事進歩土木多端ノ折柄木材ノ需用日一日相增候ニ付テハ植樹ノ儀ハ最モ方今ノ急務ニ有之然ルニ偶種樹ニ志アルモ所有地無キカ爲著手致シ得サル者有之哉ニ相聞候ニ付今般部分木仕付條例頒布候條其趣旨管下人民ヘ丁寧告諭シ國益ヲ永遠ニ圖候樣可致此旨相達候事

第二十四類　特許、意匠及商標

第一章　特許

●特許法（明治三十二年三月法律第三十六號）

既帝國議會ノ協賛ヲ經タル特許法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許法

第一條　工業上ノ物品及方法ニ關シ最先ノ發明ヲ爲シタル者若ハ其ノ承繼人ハ此ノ法律ニ依リ特許ヲ受クルコトヲ得

物品ノ發明ニ係ル特許ハ特許ヲ受ケタル者ニ限リ其ノ發明ノ物品ヲ製作、使用、販賣若ハ擴布スルノ權利ヲ有セシム

方法ノ發明ニ係ル特許ハ特許ヲ受ケタル者ニ限リ之ヲ使用若ハ擴布スルノ權利ヲ有セシム但其ノ特許ノ效力ハ同一方法ニ依リ製作セラレタル物品ニ及ブモノトス

第二條　左ニ掲クル發明ハ特許ヲ受クルコトヲ得ス

一　飲食物、嗜好物

二　醫藥又ハ其ノ調合法

三　秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アルモノ

四　特許出願前公ニ知ラレ又ハ公ニ用ヰラレタルモノ但シ試驗ノ爲二年以内公ニ知ラレタルモノハ此ノ限ニアラス

第三條　特許ノ年限ハ十五年トシ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス

第四條　特許ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ讓渡シ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第五條　特許局ノ官吏ハ在職中特許ヲ有スルコトヲ得ス但シ相續ニ因リ之ヲ取得シ又ハ在職前ヨリ之ヲ有スルトキハ此ノ限ニアラス

第六條　特許ニ關シ出願若ハ請求ヲ爲サントスル者又ハ特許證主ニシテ帝國内ニ住所ヲ有セサルトキハ帝國内ニ住居ヲ有スル者ニ就キ代理人ヲ定ムヘシ

前項代理人ハ此ノ法律及之ニ基キテ發スル命令ノ定ムル所ニ依リ特許局ニ對シテ爲スヘキ手續又ハ特許ニ關スル民事訴訟及告訴ニ付本人ヲ代表スルモノトス

第七條　特許局長ハ特許ニ關スル代理人ヲ適當ナラスト認ムルトキハ其ノ改任ヲ命スルコトヲ得

第八條　特許ニ關スル代理ヲ常業トスル者ハ特許局長ニ願出登錄ヲ受クヘシ

代理業者ノ登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條　前條ニ依リ登錄ヲ受ケタル代理業者ニシテ其ノ業務ニ關シ犯罪又ハ不正ノ行爲アリタルトキハ特許局長ハ其ノ代理業ヲ停止又ハ禁止スルコトヲ得

第十條　特許ニ關シ出願又ハ請求ヲ爲シタル者此ノ法律若ハ之ニ基キテ發スル命令ノ定ムル期間内又ハ此ノ法律若ハ之ニ基キテ發スル命令ニ依リ特許局長若ハ審判長ノ定ムル期間内ニ成規又ハ指定ノ手續ヲ爲ササルトキハ其ノ出願又ハ請求ハ無效トス

第十一條　特許ヲ受ケントスル者ハ一發明毎ニ發明ノ明細書及必要ノ圖面ヲ添ヘ特許局長ニ出願スヘシ

特許局長ハ出願者ニ對シ必要ト認ムルトキハ雖形若ハ見本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第十二條　特許ヲ出願シタルトキハ特許局審査官其ノ發明ヲ審査ス

第十三條　審査官ニ於テ特許ヲ與フヘキモノト査定シタルトキハ特許局長ハ特許原簿ニ登錄シ特許證ヲ下付ス

特許證ニハ特許局長之ニ署名シ明細書及必要ノ圖面ヲ添付ス

第十四條　工業所有權保護同盟條約國ニ於テ發明ノ特許ヲ出願シタル者七箇月以内ニ同一發明ニ付特許ヲ出願シタルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十五條　政府若ハ府縣ノ開設シタル博覽會若ハ共進會ニ出品スル者ニシテ他日其ノ物品ニ付發明ノ特許ヲ出願セントスルトキハ出品前ニ於テ其ノ旨ヲ特許局長ニ屆出ヘシ

前項ノ場合ニ於テハ博覽會若ハ共進會ニ於テ其ノ物品ヲ受領セシヨリ六箇月以内ニ特許ヲ出願シタル者ニ限リ最初屆出ノ日ニ於テ其ノ出願ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

工業所有權保護同盟條約國ニ於テ萬國博覽會ノ開設アルニ當リ其ノ國ニ於テ出品ニ對シ與ヘタル特許出願ノ期間ハ帝國内ニ於テモ有效トス

第十六條　公益ノ爲普及ヲ要スルモノ又ハ軍事上必要ナルモノ若ハ秘密ヲ要スルモノニ係ル發明ニシテ特許局長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ主務官廳ヨリ請求アリタルトキハ特許局長ハ特許ニ制限ヲ付シ若ハ特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタル特許ヲ制限シ若ハ之ヲ取消スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ政府ハ相當ノ報酬ヲ特許出願者又ハ特許證主ニ與フヘキモノトス

第十七條　他人ノ特許發明ヲ利用シテ爲シタル發明ニ付特許ヲ出願シタル者特許ノ査定ヲ得タル

トキハ原特許證主ニ協議シ其ノ發明ヲ使用スル
ノ承諾ヲ受クヘシ
發明者前項ノ承諾ヲ得ルコト能ハサルトキハ其
ノ事由ヲ具シ特許局長ニ申告スヘシ特許局長ニ
於テ正當ノ理由アリト認ムルトキハ其ノ利用發
明ニ對シ特許ヲ與フルコトヲ得但シ原特許證主
ニ對シ特許局長ノ相當ト認ムル報酬ヲ仕拂フニ
非サレハ其ノ特許ヲ實施スルコトヲ得ス

第十八條　前二條ノ報酬額ニ對シ不服アル者ハ裁
判所ニ出訴スルコトヲ得但シ第十六條ノ場合ニ
於テハ之カ爲國分ヲ停止セス

第十九條　特許證主ハ自己ノ特許發明ヲ利用シテ
爲シタル發明ニ對シ追加特許ヲ受クルコトヲ得
追加特許ハ原特許ニ從ヒ移轉若ハ消滅スルモノ
トス

第二十條　特許ヲ受ケタル發明ニシテ左ノ場合ニ
該當スルモノアルトキハ其ノ特許ヲ無效トス
一　第一條及第二條ニ違反シタルモノ
二　發明ノ實施ニ必要ナル事項ヲ故意ニ明細書
ニ記載セサリシモノ
三　發明ノ實施ニ必要ナラサル事項ヲ故意ニ明
細書ニ記載セシモノ

第二十一條　審査官ニ於テ特許ヲ與フヘカラスト
査定シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定書ヲ出願
人ニ送付スヘシ

第二十二條　審査官ニ於テ特許出願ノ發明カ他人
ノ特許出願中ノ發明又ハ他人ノ特許發明ト抵觸
スト査定シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定書ヲ
關係人ニ送付スヘシ

第二十三條　前二條ノ査定ニ不服アル者ハ査定書
到達ノ日ヨリ六十日以內ニ特許局ニ不服理由書
ヲ差出シ再審査ヲ請求スルコトヲ得
再審査ヲ請求スル者アルトキハ特許局長ハ前査
定ニ干與セサル審査官ヲシテ更ニ之ヲ審査セシ
ムヘシ
審査官其ノ不服理由ヲ不當ト査定シタルトキハ
特許局長ハ其ノ査定書ヲ不服者ニ送付スヘシ

第二十四條　發明抵觸ノ査定確定シタルトキハ特
許局長ハ關係人ヨリ發明ニ關スル始末書ヲ徵シ
審査官ヲシテ發明宗成ノ前後ヲ審査セシメ其ノ
査定書ヲ關係人ニ送付スヘシ

第二十五條　前條ニ依リ既ニ與ヘタル特許ヲ取消
シ出願ノ發明ニ特許ヲ與フルトキハ其ノ特許年
限ハ前特許登錄ノ日ヨリ起算ス

第二十六條　特許證主其ノ明細書若ハ圖面ノ不完
全ナルコトヲ發見シタルトキハ改訂明細書若ハ
圖面ヲ添ヘ特許證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得一
箇ノ特許證ヲ分割シテ二箇以上ト爲スノ必要ア
ルコトヲ發見シタルトキ亦同シ但シ發明ノ要部
ヲ變更スルモノハ此ノ限ニアラス

第二十七條　前條ノ出願アリタルトキハ審査官之
ヲ審査ス
前項ノ場合ニ於テ審査官ノ査定ニ不服アル者ハ
第二十三條ニ依リ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條　第二十三條及第二十七條ノ再査定ニ
不服アル者ハ査定書到達ノ日ヨリ六十日以內ニ
特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第二十九條　二箇以上ノ特許發明互ニ抵觸シ又ハ
特許發明ト特許ヲ受ケサル物品若ハ方法ト抵觸
スルコトヲ發見シタルトキハ利害關係人ハ權利
ヲ確認スル爲特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十條　特許ヲ受ケタル發明第二十條ニ該當ス
ルコトヲ發見シタル者ハ其ノ特許ヲ無效トスル
爲特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十一條　特許局ノ審査、審判及報酬額ノ決定
ニ關シ必要アルトキハ特許局ハ當事者ノ申立ニ
因リ證據調ヲ爲シ又ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ
地ノ區裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得
前項證據調ニ關シテハ民事訴訟法第二編第一章
第五節乃至第十一節ノ規定ヲ準用ス

第三十二條　特許局ニ於テ審判スヘキ事件ハ審判
官三人若ハ五人ヲ以テ之ヲ審判ス其ノ三人若ハ
五人中ノ一人ヲ審判長トス
審判ノ審決ニハ理由ヲ付スルコトヲ要ス

第三十三條　審判ハ正副二通ノ審判請求書ヲ以テ
之ヲ請求スヘシ審判請求書ニハ理由ヲ付スルコ
トヲ要ス
特許局ニ於テ審判請求書ヲ受理シタルトキハ其
ノ副本ヲ被請求人ニ送付シ相當ノ期間ヲ指定シ
テ正副二通ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ
特許局ハ必要ト認ムル場合ニ於テ期限ヲ付シテ
更ニ請求人、被請求人ヨリ辯駁書、答辯書ヲ差
出サシムルコトヲ得
審判長ハ職權又ハ當事者要方ノ申立ニ因リ口頭
審判ヲ爲スコトヲ得
口頭審判ハ公開スルモノトス

第三十四條　請求人若ハ被請求人成規又ハ指定ノ
期間內ニ答辯書若ハ辯駁書ヲ差出ササルトキ又
ハ辯論期日ニ出頭セサルトキハ審判長ハ相手方
ノ意見ヲ聽キ審判ヲ終結スルコトヲ得

第三十五條　第二十八條第二項第二十九條及第三
十條ノ請求ニ因ル審決ニ對シ不服アル者ハ其ノ
審決カ法律ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルコ
トヲ理由トスルトキニ限リ審決書到達ノ日ヨリ
六十日以內ニ大審院ニ出訴スルコトヲ得
前項ノ訴及裁判ニ付テハ民事訴訟ノ上告及其ノ
裁判ニ關スル規定ヲ準用ス

第三十六條　大審院ニ於テ出訴ノ理由アリト認ム
ルトキハ原審決ヲ破毀シ更ニ審判ヲ爲サシムル
爲事件ヲ特許局ニ差戻スヘシ
大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付表
シタル意見ハ其ノ事件ニ關シ特許局ヲ覊束スル
モノトス

第三十七條　第二十八條第二項第二十九條及第三
十條ノ請求ニ因ル審判ニ關スル費用ノ負擔及其
ノ費用額ハ審判長之ヲ決定ス
大審院ニ於テ費用ノ負擔ヲ言渡シタル場合ニ於
ケル費用額ニ付テモ亦同シ
前二項ノ費用ニ關シテハ民事訴訟法第七十二條
乃至第八十二條及第八十六條及民事訴訟費用法ヲ
準用ス

第三十八條　特許ヲ受ケタル發明ニシテ左ノ場合
ニ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ
特許ヲ取消スコトヲ得
一　特許證主正當ノ事故ナクシテ特許證ノ日付
ヨリ三年ヲ經ルモ帝國內ニ於テ其ノ發明ヲ實
施公行セサル場合又ハ三年以上其ノ實施公行
ヲ中止シタル場合ニ於テ第三者ヨリ相當ノ條
件ヲ付シテ其ノ讓受若ハ使用ヲ請求スルモ之
ヲ拒絕シタルトキ
二　特許證主特許料納付期限後六十日ヲ經過ス
ルモ仍其ノ納付ヲ怠リタルトキ
三　特許證主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上第
六條ノ代理人ヲ置カサルトキ

第三十九條　特許證主ハ特許料トシテ各特許ニ付
毎年金十圓ヲ納ムヘシ
前項特許料ハ三年毎ニ金五圓ヲ增スモノトス
特許證主追加特許ヲ受ケタルトキハ追加特許料
トシテ一時ニ金二十圓ヲ納ムヘシ

第四十條　特許料ハ毎年一年分ヲ特許證ノ日付ニ
賠當スル日ニ於テ前納スヘシ第一年ニ係ルモノ
及追加特許料ハ特許査定書到達ノ日ヨリ六十日
以內ニ之ヲ納ムヘシ
前納セシ特許料ハ之ヲ還付セス但シ一時ニ二年
分以上ノ特許料ヲ前納シタル場合ニ於テハ未タ
其ノ納付期限ニ至ラサルモノニ限リ之ヲ還付ス

第四十一條　特許證主ハ其ノ特許品ニ特許ノ標記
ヲ付スヘシ

第四十二條　特許局ハ特許公報ヲ發行シテ特許發
明ノ明細書、圖面特許證ノ改訂、特許ノ異動其
ノ他特許ニ關スル必要ノ事項ヲ公示スヘシ但シ
祕密ヲ要スルモノハ此ノ限ニアラス

第四十三條　特許ニ關スル書類ノ謄本、圖面ノ謄
寫又ハ特許原簿ノ一覽ヲ要スル者ハ特許局ニ請
求スルコトヲ得但シ祕密ヲ要スルモノハ此ノ限
ニアラス

第四十四條　證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑
託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ僞證又ハ詐僞ノ鑑定
ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ
處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ僞證又ハ
詐僞ノ鑑定ヲ爲サシメタル者ハ前項ニ同シ
前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定、審決
若ハ決定ニ至ラサル前特許局若ハ囑託ヲ受ケタ
ル裁判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第四十五條　他人ノ特許品ヲ僞造シタル者又ハ情
ヲ知リテ僞造特許品ヲ使用シ若ハ販賣シタル者
又ハ他人ノ特許方法ヲ竊用シタル者又ハ情ヲ知
リ其ノ竊用シテ製造シタル物品ヲ使用若ハ販賣
シタル者ハ十五日以上三年以下ノ重禁錮又ハ十
圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス
他人ノ特許ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リ之
ヲ外國ヨリ輸入シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ輸
入シタル物品ヲ使用シ若ハ販賣シタル者ハ罰前
項ニ同シ

第四十六條　前條ノ場合ニ於テ沒收シタル物件ハ
之ヲ特許證主ニ給付ス

第四十七條　詐僞ノ所爲ヲ以テ特許ヲ受ケタル者
又ハ特許ヲ受ケサル物品ニ特許標記ヲ付シ若ハ
之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リ其
ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ
重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス
特許ヲ受ケサル物品ヲ販賣スル爲廣告、看板、
引札等ニ於テ特許品タルニ紛ハシキ表示ヲ爲シ
タル者ハ罰前項ニ同シ

第四十八條　第四十五條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ
待テ其ノ罪ヲ論ス

第四十九條　特許證主特許標記ヲ付スルコトヲ怠
リタルトキハ其ノ特許品タルコトヲ知リテ其ノ
權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ要償ノ訴ヲ爲
スコトヲ得

第五十條　特許證主其ノ特許品ノ要部ヲ分離シテ
販賣シタルトキハ其ノ販賣シタル部分ニ對シ告
訴又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第五十一條　此ノ法律ニ定メタル書類ノ送付ハ書
留郵便又ハ特許局ノ使丁ヲ以テ之ヲ爲ス此ノ場
合ニ於テ郵便配達人及特許局ノ使丁ハ民事訴訟
法ノ送達吏ト準視ス

附則

第五十二條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨ
リ之ヲ施行ス

第五十三條　明治二十一年勅令第八十四號特許條
例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス
專賣特許條例及特許條例ニ依テ受ケタル專賣特
許若ハ特許ハ其ノ年限間此ノ法律ニ依テ受ケタ
ル特許ト同一ノ效アルモノトス
特許ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行
項ニ同シ

第四十六條　前條ノ場合ニ於テ沒收シタル物件ハ
之ヲ特許證主ニ給付ス

第四十七條　詐僞ノ所爲ヲ以テ特許ヲ受ケタル者
又ハ特許ヲ受ケサル物品ニ特許標記ヲ付シ若ハ
之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リ其
ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ
重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス
特許ヲ受ケサル物品ヲ販賣スル爲廣告、看板、
引札等ニ於テ特許品タルニ紛ハシキ表示ヲ爲シ
タル者ハ罰前項ニ同シ

第四十八條　第四十五條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ
待テ其ノ罪ヲ論ス

第四十九條　特許證主特許標記ヲ付スルコトヲ怠
リタルトキハ其ノ特許品タルコトヲ知リテ其ノ
權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ要償ノ訴ヲ爲
スコトヲ得

第五十條　特許證主其ノ特許品ノ要部ヲ分離シテ
販賣シタルトキハ其ノ販賣シタル部分ニ對シ告
訴又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第五十一條　此ノ法律ニ定メタル書類ノ送付ハ書
留郵便又ハ特許局ノ使丁ヲ以テ之ヲ爲ス此ノ場
合ニ於テ郵便配達人及特許局ノ使丁ハ民事訴訟
法ノ送達吏ト準視ス

附則

第五十二條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨ
リ之ヲ施行ス

第五十三條　明治二十一年勅令第八十四號特許條
例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス
專賣特許條例及特許條例ニ依テ受ケタル專賣特
許若ハ特許ハ其ノ年限間此ノ法律ニ依テ受ケタ
ル特許ト同一ノ效アルモノトス
特許ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行

ノロマテニ區分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

●特許法施行細則（明治三十二年六月農商務省令第十三號）

特許法施行細則左ノ通相定ム

特許法施行細則

第一章　總則

第一條　特許ニ關スル出願、請求、届出等ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

書面ハ一件毎ニ一通ヲ作リ差出人ノ住所及ヒ差出ノ年月日ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

關係人又ハ相手方アル場合ニ於テハ其員數ニ應スル副本ヲ添附スヘシ

第二條　本則ニ書式ノ定アル場合ニ在リテハ書面ハ其書式ニ依リテ之ヲ作ルヘシ

第三條　書面ハ日本語ヲ以テ之ヲ認ムヘシ

委任狀、國籍證明書等ニシテ外國語ヲ以テ認メタルモノニハ其譯文ヲ添附スヘシ

第四條　特許出願者其出願シタル發明ニ關シ書面ヲ差出ストキハ之ニ願書ノ番號及ヒ發明ノ名稱ヲ記載スヘシ

第五條　特許ヲ受ケタル發明ニ關シ書面ヲ差出ストキハ之ニ特許ノ番號及ヒ發明ノ名稱ヲ記載スヘシ

第六條　特許ニ關スル願書、請求書、特許法第十五條第一項ノ規定ニ依ル屆書及ヒ特許法又ハ本則ノ規定ニ依リ差出期限ヲ定メタル書類ヲ特許局ニ差出シタルトキハ受取證ヲ交付スヘシ此場合ニ於テハ書面ノ差出日時ハ其受取證ニ記載シタル日時ニ依リテ之ヲ定ム

第七條　書留郵便ヲ以テ前條ニ掲ケタル書類ヲ差出シタルトキハ其差出日時ハ發送郵便局ヨリ交付シタル書留郵便物受取證ニ記載シタル日時ニ依リテ之ヲ定ム

第八條　書類、雛形又ハ見本カ不明瞭又ハ不完備ナルトキハ特許局長又ハ審判長ハ相當ノ期間ヲ定メ差出人ヲシテ之ヲ訂正、補充又ハ改造セシムヘシ

第九條　書類、雛形又ハ見本ハ差出人ニ於テ之ヲ訂正、補充又ハ改造スルコトヲ得但出願又ハ請求ノ要旨ヲ變更スルトキハ此限ニ在ラス

第十條　帝國內ニ住所ヲ有セサル外國人カ特許ニ關スル出願又ハ請求ヲ爲ストキハ其國籍證明書又ハ住所若クハ營業所ノ所在地ヲ證明スル書面ヲ差出スヘシ

第十一條　發明者ノ承繼人ハ其承繼人タルコトヲ證明スル書面ヲ差出スヘシ

第十二條　代理人カ特許ニ關スル出願、請求其他ノ手續ヲ爲ストキハ其代理權ヲ證明スル書面ヲ差出スヘシ

第十三條　特許法第六條ノ規定ニ依リ代理人ヲ定メタルトキハ其旨ヲ届出ツヘシ

第十四條　特許法第七條ノ規定ニ依リ代理人ノ改任ヲ命シタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ代理人ニ通知スヘシ

第十五條　特許法又ハ本則ノ規定ニ依リ特許局長又ハ審判長カ定メタル期日又ハ期間內ニ成規又ハ指定ノ手續ヲ爲スコト能ハサルトキハ特許局長又ハ審判長ハ當事者ノ請求ニ因リ其期日ノ變更又ハ期間ノ延長ヲ許可スルコトヲ得本則ニ期間ヲ定メタル場合ニ付キ亦同シ

特許局長又ハ審判長カ前項ノ許可ヲ與ヘタルトキハ其旨ヲ關係人ニ通知スヘシ

第十六條　特許局ニ差出シタル書類、雛形又ハ見本ニシテ特許局長又ハ審判長ニ於テ必要ト認ムルモノハ之ヲ還付セス

第十七條　數人カ共同シテ出願、請求其他ノ手續ヲ爲ストキハ特許局ニ對シ全權ヲ有スル代表者一人ヲ選定シテ之ヲ書類ニ記載スヘシ

第十八條　特許局ニ於テ書留郵便ヲ以テ書類ノ送付ヲ爲ストキハ配達證明郵便ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第十九條　特許局ノ使丁ヲ以テ書類ノ送付ヲ爲ストキハ使丁ハ其書類ノ封皮ニ送付ノ日時ヲ記載シテ之ニ捺印スヘシ

書類ノ送付ヲ受ケタル者ハ其受領ノ日時ヲ記載シタル受取證ヲ使丁ニ交付スヘシ

第二十條　住所又ハ居所ノ不分明其他ノ事由ニ因リテ書類ノ送付ヲ爲スコト能ハサルトキハ特許局長又ハ審判長ハ官報ヲ以テ其事由ヲ公告スヘシ此場合ニ於テハ官報掲載ノ日ヨリ起算シテ二十日ヲ經過シタルトキハ其末日ニ於テ書類ノ送付アリタルモノト看做ス

第二十一條　左ノ各號ノ一ニ該當スル書類、雛形又ハ見本ハ之ヲ受理セス

一　特許法又ハ本則ニ定メタル方式ニ違背シタルトキ

二　登錄稅又ハ手數料ヲ納付セサルトキ

三　特許法若クハ本則ニ定メタル期間又ハ特許法若クハ本則ノ規定ニ依リ特許局長又ハ審判長ノ定メタル期日若クハ期間ヲ過キタルトキ

特許局ニ於テ受理シタル書類、雛形又ハ見本カ前項各號ノ一ニ該當スルトキハ之ヲ却下ス

前二項ノ場合ニ於テハ附箋ニ其事由ヲ記載スヘシ

第二十二條　特許ニ關スル出願、請求若クハ届出ヲ爲シタル者カ其氏名、住所若クハ印章ヲ變更シタルトキ又ハ其選定シタル代理人ヲ更シタルトキハ遲滯ナク其旨ヲ特許局ニ届出ツヘシ

氏名又ハ印章變更ノ届書ニハ證明書ヲ添附スヘシ

第二十三條　特許法第十五條第一項ノ規定ニ依ル届書ニハ戸籍謄本及ヒ圖面ヲ添附スヘシ

特許局長カ前項ノ届書ヲ受理シタルトキハ受取證ヲ交付スヘシ

第二十四條　何人ト雖モ其利害關係ヲ疏明スルトキハ特許ニ關スル事項ノ證明書ヲ請求スルコトヲ得但特許局長ニ於テ秘密ヲ要スト認ムルモノニ付テハ此限ニ在ラス

第二章　出願

第二十五條　特許法第十四條ノ規定ニ依ル特許願書ニハ最初出願ノ當時差出シタル願書、明細書及ヒ圖面ノ謄本ニシテ其出願ヲ爲シタル國ノ政府ニ於テ認證シタルモノヲ添附スヘシ

第二十六條　特許法第十五條第二項ノ規定ニ依ル特許願書ニハ博覽會又ハ共進會ノ物品受領證ヲ添附スヘシ

特許法第十五條第三項ノ規定ニ依ル特許願書ニハ萬國博覽會ヲ開設シタル國ニ於テ特許出願ノ期間ヲ與ヘタル證明書ヲ添附スヘシ

第二十七條　特許局長カ特許ニ關スル願書ヲ受理シタルトキハ出願番號ニ願書ノ番號、發明ノ名稱、出願人竝ニ代理人ノ氏名、住所及ヒ願書差出ノ年月日ヲ登錄スヘシ

前項ノ登錄ヲ爲シタルトキハ特許局長ハ願書ノ番號ヲ出願人ニ通知スヘシ

第二十八條　明細書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　發明ノ名稱

二　發明ノ性質及ヒ目的ノ要領

三　圖面ノ略解

四　發明ノ詳細ナル說明

特許法第十七條又ハ第十九條ニ定メタル出願ナルトキハ其發明ト原特許發明トノ關係

五　特許ノ請求範圍

第二十九條　特許ノ請求範圍ハ發明ノ要部ニ限リ之ヲ記載スヘシ

第三十條　圖面ニハ發明ノ說明ニ必要ナル部分ヲ示シ特許發明ヲ利用シテ爲シタル發明ナルトキハ其發明ト原特許發明トノ關係ヲモ示スヘシ

第三十一條　雛形及ヒ見本ハ堅牢ナル材料ヲ用ヰ曲尺一尺立方以內ニ於テ之ヲ作ルヘシ但此制限ニ從ヒ難キトキハ此限ニ在ラス

製品ノ原料カ發明ノ要部ヲ爲ストキハ雛形及ヒ見本ハ其原料ヲ用ヰ之ヲ作ルヘシ

物質ノ發明ニ付キ見本ヲ提出スルトキハ試驗用ニ供スルニ足ル分量及ヒ其成分ヲ差出スヘシ

第三十二條　雛形又ハ見本カ破損又ハ變化シ易キモノナルトキハ差出人ハ相當ノ手當ヲ爲シテ之ヲ差出スヘシ

第三十三條　雛形又ハ見本ノ滅失、毀損ニ付テハ特許局ハ其責ニ任セス

第三十四條　特許局長カ雛形又ハ見本ヲ還付セントスルトキハ其旨ヲ差出人ニ通知スヘシ

差出人カ前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ六十日以內ニ受取ノ手續ヲ爲ササルトキハ特許局長ハ適宜之ヲ處分スヘシ

第三章　審査

第三十五條　特許局長カ第二十七條第一項ニ定メタル登錄ヲ爲シタルトキハ願書ヲ審査官ニ交付スヘシ

第三十六條　審査官ハ發明ノ種類ニ依リ願書ノ番號ニ從ヒテ審査スヘシ

第三十七條　審査官カ發明ノ審査ニ關シ出願人ヲシテ其試驗ヲ爲サシムル必要アリト認ムルトキハ其旨ヲ特許局長ニ報告スヘシ此場合ニ於テハ特許局長ハ出願人ヲシテ試驗ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十八條　審査書ニハ左ノ事項ヲ記載シ審査官之ニ署名スヘシ

一　願書ノ番號

二　發明ノ名稱

三　出願人ノ氏名

四　出願ノ要領

五　審査ノ主文及ヒ理由

六　審査ノ年月日

第三十九條　再審査審査書ニハ前條第一號、第二號、第五號及ヒ第六號ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載シ審査官之ニ署名スヘシ

一　再審査請求人及ヒ關係人ノ氏名

二　不服理由ノ要領

第四十條　左ノ場合ニ於テハ發明抵觸ノ審査ヲ爲スヘカラス

一　特許ヲ與フヘカラサル他ノ理由ノ存スルトキ

二　出願人ニ於テ其發明ノ完成カ抵觸スヘキ發明ノ特許出願後ナルコトヲ認ムルトキ

第四十一條　抵觸審査書又ハ發明完成ノ前後ニ關スル審査書ニハ第三十八條ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載シ審査官之ニ署名スヘシ

一　抵觸番號

二　抵觸スヘキ發明ノ願書又ハ特許ノ番號

三　抵觸スヘキ發明ノ名稱

四　抵觸スヘキ發明ノ出願人又ハ特許權主ノ氏名

五　抵觸スヘキ發明ノ要領又ハ關係人陳述ノ要領

第四十二條　發明抵觸ノ審査確定シタルトキハ特

許局長ハ關係人ヲシテ三十日以内ニ其發明ニ關スル始末書ヲ差出サシムヘシ

第四十三條　始末書ニハ抵觸番號及ヒ發明ノ完成ニ關スル事實ノ詳細ナル說明ヲ記載スヘシ

第四十四條　特許局長カ始末書ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ相手方ニ送付スヘシ

審査官カ答辯ヲ爲サシムル必要アリト認ムルトキハ其旨ヲ特許局長ニ報告スヘシ此場合ニ於テハ特許局長ハ相當ノ期間ヲ定メ答辯書ヲ差出サシムルコトヲ得

前二項ノ規定ハ關係人カ始末書又ハ答辯書ヲ訂正又ハ追加シタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十五條　始末書又ハ答辯書ニハ之ニ記載シタル事實ノ證明ニ必要ナル證據物件ヲ添附スヘシ

第四十六條　關係人カ指定ノ期間内ニ始末書又ハ答辯書ヲ差出ササルトキハ審査官ハ直ニ査定ヲ爲スコトヲ得

第四十七條　抵觸ノ原因カ消滅シタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ關係人ニ通知スヘシ

第四章　審判

第四十八條　審判請求書ニハ左ノ事項ヲ記載ヘシ

一　請求人及ヒ被請求人ノ氏名、住所

二　審判事件ノ表示

三　請求ノ要旨及ヒ理由

第四十九條　答辯書又ハ辯駁書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　審判番號

二　請求人及ヒ被請求人ノ氏名、住所

三　審判事件ノ表示

四　答辯又ハ辯駁ノ要旨及ヒ理由

第五十條　第四十四條及ヒ第四十五條ノ規定ハ審判請求書、答辯書及ヒ辯駁書ニ之ヲ準用ス

第五十一條　審判ノ請求人カ其請求ヲ取消シタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ相手方ニ通知スヘシ

第五十二條　口頭審判ヲ爲ストキハ審判長ハ期日ヲ定メ之ヲ當事者雙方ニ通知スヘシ

第五十三條　口頭審判ニ於テハ日本語ヲ用ユヘシ

但日本語ニ通セサル者ハ通事ヲ用ユルコトヲ得

第五十四條　口頭審判ニ於テハ調書ヲ作リ審判長及ヒ之ヲ作リタル官吏署名捺印スヘシ

第五十五條　審決アリタルトキハ特許局長ハ其審決書ノ謄本ヲ當事者雙方ニ送付スヘシ

第五十六條　審決書ニハ左ノ事項ヲ記載シ審判官之ニ署名スヘシ

一　審判番號

二　請求人及ヒ被請求人ノ氏名、住所

三　審判事件ノ表示

四　請求、答辯及ヒ辯駁ノ要領

五　審決ノ主文及ヒ理由

六　審決ノ年月日

第五十七條　審判官カ査定ヲ不當ナリト認ムルトキハ特許局長ハ更ニ審査ヲ爲サシムヘシ

第五十八條　審判ニ關スル費用ノ傳票又ハ其費用計算書其他必要ナル書類ヲ添附シテ之ヲ審判長ニ差出スヘシ

審判長ハ必要ト認ムルトキハ相手方ノ意見ヲ聽クコトヲ得

第五十九條　前條ノ決定アリタルトキハ特許局長ハ其決定書ヲ當事者雙方ニ送付スヘシ

第五章　特許

第六十條　審査官カ特許ヲ與フヘシト査定シタルトキハ特許局長ハ特許原簿ニ登錄シ且其査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

第六十一條　特許法第十七條第一項ニ定メタル査定アリタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ相當ノ期間ヲ定メテ原特許證主ノ承諾書ヲ差出サシムヘシ

出願人カ原特許證主ノ承諾書ヲ差出シタルトキハ特許局長ハ特許原簿ニ登錄シ且査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

原特許證主カ承諾ヲ與ヘサル場合ニ於テ特許局長カ出願人ニ特許ヲ與ヘタルトキハ特許原簿ニ登錄シ且査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ此場合ニ於テハ特許局長ハ其旨ヲ原特許證主ニ通知スヘシ

第六十二條　原特許證主ニ支拂フヘキ報酬ノ決定ヲ受ケントスル者ハ申請書ヲ作リ報酬ノ金額及ヒ其計算ニ關スル書類ヲ添附シテ之ヲ特許局ニ差出スヘシ

前項ノ申請アリタルトキハ特許局長ハ副本ヲ相手方ニ送付シ相當ノ期間ヲ定メテ其意見ヲ聽クコトヲ得

第六十三條　特許局長カ報酬ノ決定ヲ爲シタルトキハ其決定書ヲ當事者雙方ニ送付スヘシ

第六十四條　審査官カ特許證ノ改訂又ハ分割ヲ許可スヘキモノト査定シタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ特許原簿ニ登錄シ且其査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

第六十五條　特許證ハ第九號乃至第十三號ノ書式ニ依リ之ヲ作ルヘシ

第六十六條　相續ニ因リテ特許ヲ取得シタル者ハ其證明書ヲ特許局ニ差出シ特許證ノ書換ヲ申請スヘシ

第六十七條　特許法第四條第二項ニ定メタル登錄ヲ受ケントスル者ハ請求書ヲ作リ登錄原因ヲ證スル書面正副二通及ヒ特許證ヲ添附シテ之ヲ特許局ニ差出スヘシ

前項ノ請求アリタルトキハ特許局長ハ特許原簿ニ登錄シタル後其登錄事項ヲ特許證ニ記載シ登錄原因ヲ證スル書面ノ正本ト共ニ之ヲ請求人ニ還付スヘシ

第六十八條　特許法第十六條ノ規定ニ依リ特許ニ制限ヲ附シ若クハ特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタル特許ヲ制限シ又ハ取消ストキハ其理由ヲ出願人又ハ特許證主ニ通知スヘシ

第六十九條　特許原簿ニハ左ノ事項ヲ登錄スヘシ

一　特許ノ番號

二　發明ノ名稱

三　特許證主ノ氏名、住所

四　特許ノ讓渡ニ付テハ其事由、制限ヲ附シタルトキハ其制限

五　特許ノ共有ニ付テハ其事由、持分ノ定アルトキハ各共有者ノ持分

六　特許ノ質入ニ付テハ債權額、其利息、辨濟期、質權ノ順位及ヒ質權設定ノ年月日

七　帝國内ニ住所ヲ有セサル特許證主ノ代理人ノ氏名、住所

八　特許ノ制限ニ付テハ其事由及ヒ制限ノ範圍

九　利用發明特許ニ付テハ原特許ノ番號、原發明ノ名稱及ヒ原特許證主ノ承諾ノ有無

十　追加特許ニ付テハ原特許ノ番號、原發明ノ名稱及ヒ原特許登錄ノ年月日

十一　特許法第二十五條ノ規定ニ依ル特許ニ付テハ前特許登錄ノ年月日

十二　特許證ノ改訂又ハ分割ニ付テハ其事由

十三　特許ノ無效、取消又ハ消滅ニ付テハ其事由及ヒ其事由發生ノ年月日

十四　特許證ノ再下付ニ付テハ其事由及ヒ再下付ノ年月日

十五　登錄ノ年月日

第七十條　特許原簿ニ登錄シタル事項ニ變更ヲ生シ又ハ其事項カ消滅シタルトキハ其變更又ハ消滅ノ登錄ヲ爲スヘシ

第七十一條　特許無效ノ審決カ確定シタルトキ、特許局長カ特許ヲ取消シタルトキ又ハ特許證主カ其特許ヲ拋棄シタルトキハ特許證主ハ其特許證ヲ返納スヘシ

第七十二條　特許料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

第七十三條　特許證主カ特許料ヲ納メタルトキハ特許局長ハ領收證ヲ交付スヘシ

第七十四條　特許證カ滅失又ハ毀損シタルトキハ特許證主ハ其再下付ヲ請求スルコトヲ得特許證ノ再下付ヲ爲ストキハ特許證ニ其事由及ヒ年月日ヲ記載スヘシ

附則

第七十五條　本則ハ特許法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

書式

第一號

特許願

收入印紙

一發明ノ名稱

一發明者ノ氏名

私(私共)儀別紙明細書ニ記載スル物品(方法)ニ付キ特許相受度(「特許法第十四條又ハ第十五條ニ定メタル出願ナルトキハ」別紙「證明書領收證」相添)此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所

職業　氏　名印

年月日

特許局長氏名殿

第二號

利用發明特許願

收入印紙

一發明ノ名稱

一發明者ノ氏名

一原特許ノ番號

私(私共)儀別紙明細書ニ記載スル物品(方法)ニ付キ特許相受度此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所

職業　氏　名印

年月日

特許局長氏名殿

第三號

追加特許願

收入印紙

一發明ノ名稱

一發明者ノ氏名

一原特許ノ番號

私(私共)儀別紙明細書ニ記載スル物品(方法)ニ付キ特許相受度此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所

職業　氏　名印

年月日

特許局長氏名殿

第四號

特許證改訂願

收入印紙

一發明ノ名稱

一特許ノ番號

私(私共)儀別紙明細書(圖面)ノ通特許證ノ改訂相受度此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所

職業

年月日　　氏　　名印
特許局長氏名殿

第五號　特許證分割願

收入印紙

一發明ノ名稱
一特許ノ番號
私(私共)儀別紙明細書(圖面)ノ通特許證分割相受度此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所
職業　　氏　　名印

年月日
特許局長氏名殿

第六號　發明品出品願

收入印紙

一發明ノ名稱
一發明者ノ氏名
私(私共)儀別紙說明書(圖面)ニ記載スル發明品ヲ何年何月何日ヨリ何所ニ於テ政府(何府、何縣)ノ開設スル博覽會(共進會)ニ出品可致候ニ付特許法第十五條ノ規定ニ依リ此段及御屆候也

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名印

年月日
特許局長氏名殿

第七號　登錄請求書

收入印紙

一特許證主ノ氏名
一特許ノ番號
私(私共)儀何某ヨリ前記特許(持分)ヲ讓受(質取)候ニ付登錄相成度別紙契約書(遺言書)相添此段及請求候也

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名印

年月日
特許局長氏名殿

第八號　登錄請求書

收入印紙

一特許證主ノ氏名
一特許ノ番號
私(私共)儀前記特許ヲ共有ト致候ニ付登錄相成度別紙契約書相添此段及請求候也

本籍(國籍)及ヒ住所
共有者　氏　　名印

年月日
特許局長氏名殿

第九號　特許證

第何號

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名

一發明ノ名稱
前記發明ハ特許局審査官ニ於テ特許ヲ與フヘキモノト査定シタリ仍テ特許原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　　名印

第十號　利用發明特許證

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名

一發明ノ名稱
前記發明ハ明治何年何月何日第何號特許發明ヲ利用シタルモノニシテ特許局審査官ニ於テ利用發明特許ヲ與フヘキモノト査定シタリ仍テ特許原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　　名印

第十一號　追加特許證

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名

一發明ノ名稱
前記發明ハ明治何年何月何日付第何號特許發明ヲ利用シタルモノニシテ特許局審査官ニ於テ追加特許ヲ與フヘキモノト査定シタリ仍テ特許原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　　名印

第十二號　改訂特許證

第何號(原特許ノ番號)

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名

一發明ノ名稱
前記發明ニ對シ特許局審査官ニ於テ明治何年何月何日付第何號特許證ノ改訂ヲ許可スヘキモノト査定シタリ仍テ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　　名印

第十三號　分割特許證

第何號(原特許ノ番號)ノ一、二、三、

本籍(國籍)及ヒ住所
氏　　名

一發明ノ名稱
前記發明ハ明治何年何月何日付第何號特許證ノ分割ニ係ルモノニシテ特許局審査官ニ於テ分割ヲ許可スヘキモノト査定シタリ仍テ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　　名印

第二章　意匠

●意匠法（明治三十二年三月法律第三十七號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル意匠法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

意匠法

第一條　工業上ノ物品ニ應用スヘキ形狀、模樣、色彩又ハ其ノ結合ニ係ル新規ノ意匠ヲ按出シタル者若ハ其ノ承繼人ハ此ノ法律ニ依リ意匠ノ登錄ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得

第二條　左ニ掲クル意匠ハ登錄ヲ受クルコトヲ得ス

一　菊花御紋章ト同一若ハ類似ノ形狀、模樣ヲ有スルモノ

二　秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アルモノ

三　意匠登錄出願前公ニ知ラレ又ハ公ニ用ヰラレタルモノ又ハ之ト類似スルモノ但シ自己ノ登錄意匠ト類似スルモノハ此ノ限ニアラス

第三條　意匠專用ノ年限ハ十年トシ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス但シ類似意匠ノ專用年限ハ原意匠ノ有效年限ニ伴フ

第四條　意匠ノ專用ハ農商務大臣ノ定ムル類別ニ從ヒ出願人ノ指定シタル物品ニ限ル

第五條　他人ノ委託又ハ雇主ノ費用ヲ以テ按出シタル意匠ニ係ル登錄出願ノ權利ハ其ノ委託者若ハ雇主ニ屬ス但シ別ニ契約アル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス

第六條　意匠專用權ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ讓渡シ若ハ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第六條　意匠專用權ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ讓渡シ若ハ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

類似意匠ヲ所有スル者ハ其ノ類似意匠ト共ニ讓渡シ共有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スニ非サレハ前項ノ登錄ヲ受クルコトヲ得ス

第七條　特許局ノ官吏ハ在職中意匠專用權ヲ有スルコトヲ得ス但シ相續ニ因リ之ヲ取得シ又ハ在職前ヨリ之ヲ有スルトキハ此ノ限ニアラス

第八條　意匠ノ登錄ヲ受ケントスル者ハ一意匠每ニ其ノ意匠ヲ應用スヘキ物品ヲ明記シ雛形、見本若ハ圖面ヲ添ヘ特許局長ニ出願スヘシ

特許局長ハ出願者ニ對シ雛形、見本、圖面、說明書ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第九條　二人以上同一又ハ相類似スル意匠ノ登錄ヲ出願スル者アルトキハ出願ノ先ナルモノヲ登錄ス其ノ同時ノ出願ニ係ルモノハ共ニ之ヲ登錄セス但出願者共有ノ目的ヲ以テ連名登錄ノ申出ヲ爲シタルトキ又ハ出願者一人ト爲リタルトキハ此ノ限ニアラス

第十條　工業所有權保護同盟條約國ニ於テ意匠登錄ヲ出願シタル者四箇月以內ニ同一意匠ニ付登錄ヲ出願スルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十一條　登錄ヲ受ケタル意匠ニシテ第一條第二條第五條又ハ第九條ニ違反シタルモノナルトキハ其ノ登錄ヲ無效トス

第十二條　登錄ヲ受ケタル意匠ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ登錄ヲ取消スコトヲ得

一　意匠登錄證主ハ意匠料納付期限後六十日ヲ經過シ仍其ノ納付ヲ怠リタルトキ

二　意匠登錄證主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上第二十二條ニ依ル特許法第六條ノ代理人ヲ選任カサルトキ

第十三條　意匠登錄證主ハ意匠料トシテ各意匠ニ付第一年ヨリ第三年マテハ每年金三圓第四年ヨリ第六年マテハ每年金五圓第七年ヨリ第十年マテハ每年金七圓ヲ納ムヘシ

類似意匠ノ登錄ヲ受ケタルトキハ各類似意匠ニ付一時ニ金三圓ヲ納ムヘシ

第十四條　意匠料ハ每年一年分ヲ登錄證ノ日付ニ應當スル日ニ於テ前納スヘシ第一年ニ係ルモノ及前條第二項ノ意匠料ハ登錄査定書到達ノ日ヨリ六十日以內ニ之ヲ納ムヘシ

前納シタル意匠料ハ之ヲ還付セス但シ一時ニ二年分以上ノ意匠料ヲ納付シタル場合ニ於テハ未タ其ノ納付期限ニ到ラサルモノニ限リ之ヲ還付ス

第十五條　意匠登錄證主ハ其ノ意匠ヲ應用シタル物品ニ意匠登錄ノ標記ヲ付スヘシ

第十六條　證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ僞證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シ僞證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲サシメタル者ハ罰前項ニ同シ

前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定若ハ審決ニ至ラサル前特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第十七條　他人ノ登錄意匠ヲ摸擬シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ摸擬シタル物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

他人ノ登錄意匠ヲ侵害スヘキ物品ナルコトヲ知リ之ヲ外國ヨリ輸入シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十八條　前條ノ場合ニ於テ沒收シタル物件ハ之ヲ意匠登錄證主ニ給付ス

第十九條　詐僞ノ所爲ヲ以テ意匠ノ登錄ヲ受ケタ

ル者又ハ登錄ヲ受ケサル意匠ヲ應用シタル物品ニ登錄標記ヲ付シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

登錄ヲ受ケサル意匠ヲ應用シタル物品ヲ販賣スル爲廣告、看板、引札等ニ於テ其ノ意匠ノ登錄ヲ受ケタルニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者ハ前項ニ同シ

第二十條　第十七條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第二十一條　意匠登錄證主登錄標記ヲ付スルコトヲ怠リタルトキハ其ノ登錄意匠タルコトヲ知リテ其ノ權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ賠償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第二十二條　特許法第六條乃至第十條第十二條第十三條第十五條第二十一條第二十三條第二十八條乃至第三十七條第四十三條及第五十一條ノ規定ハ意匠ニ關シテ之ヲ準用ス

附則

第二十三條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十四條　明治二十一年勅令第八十五號意匠條例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

意匠條例ニ依テ受ケタル登錄ハ其ノ年限間此ノ法律ニ依テ受ケタル登錄ト同一ノ效アルモノトス

意匠ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行ノ日マテニ處分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

●意匠法施行細則（明治三十二年六月農商務省令第十四號）

意匠法施行細則左ノ通相定ム

意匠法施行細則

第一條　意匠登錄願書ハ第七條ニ定メタル類別毎ニ之ヲ作ルヘシ

第二條　雛形及ヒ見本ハ曲尺二尺立方以內ニ於テ之ヲ作ルヘシ但此制限ニ從ヒ難キトキハ此限ニ在ラス

第三條　圖面ニハ意匠ノ說明ニ必要ナル部分ヲ示スヘシ

寫眞ヲ以テ圖面ニ代用スルトキハ寫紙ヲ附スルコトヲ得

第四條　審査官ハ願書ノ番號ニ從ヒテ審査スヘシ

第五條　意匠登錄證ハ第五號又ハ第六號書式ニ依リ之ヲ作ルヘシ

第六條　意匠原簿ニハ左ノ事項ヲ登錄スヘシ

一　登錄ノ番號

二　意匠ノ名稱

三　類別及ヒ物品

四　登錄證主ノ氏名、住所

五　類似意匠ニ付テハ原意匠ノ登錄番號及ヒ其登錄ノ年月日

六　意匠專用權ノ讓渡ニ付テハ其事由、制限ヲ附シタルトキハ其制限

七　意匠專用權ノ共有ニ付テハ其事由、持分ノ定アルトキハ各共有者ノ持分

八　意匠專用權ノ質入ニ付テハ債權額、共利息、辨濟期、質權ノ順位及ヒ質權設定ノ年月日

九　帝國內ニ住所ヲ有セサル登錄證主ノ代理人ノ氏名、住所

十　登錄ノ無效取消又ハ消滅ニ付テハ其事由及ヒ其事由發生ノ年月日

十一　登錄證ノ再下付ニ付テハ其事由及再下付ノ年月日

十二　登錄ノ年月日

第七條　出願人ハ左ノ類別ニ從ヒ意匠ヲ應用セントスル物品ヲ指定スヘシ

第一類　被服

衣、裳、外套、襯衣、帶、襟、領卷、肩掛等

第二類　頭飾、服飾

櫛、簪、根掛、胸飾、領飾、腕環、指環、釦等

第三類　時計、附屬品

秒時計、晝時計、掛時計、鎖、下ケ物等

第四類　傘、杖、陳

第五類　携帶品

紙入、貨幣入、名刺入、煙草入、煙管、煙管筒、手提鞄等

第六類　家具、室內裝飾品

棚、寢箭、机、椅子、卓子、寢臺、類、屏風衝立、寒掛、卓被等

第七類　敷物

段通、油圖、花毯等

第八類　暖室具、附屬品

暖爐、火鉢、煙草盆、炭取、石炭入、火箸等

第九類　燈器

燭臺、手燭、行燈、燈籠、洋燈、瓦斯燈、電燈等

第十類　建築物ノ附屬品

障子、戶、扉、柵、欄間、欄干、引手、釘隱等

第十一類　織物及ヒ他類ニ屬セサル織物製品

絹、綿、麻、毛等各種ノ織物、服紗、手巾等

第十二類　他類ニ屬セサル編物、組物

「レース」、打紐、飾緣等

第十三類　他類ニ屬セサル漆器（假漆塗、油漆塗等モ之ニ屬ス）

第十四類　他類ニ屬セサル陶器（煉瓦、瓦等モ之ニ屬ス）

第十五類　他類ニ屬セサル玻璃

第十六類　他類ニ屬セサル七寶

第十七類　他類ニ屬セサル金屬製品

第十八類　他類ニ屬セサル石材製品

第十九類　他類ニ屬セサル木、竹、牙、角類製品

第二十類　紙及ヒ他類ニ屬セサル紙製品

紋紙、擬革紙、襖紙、壁紙、表紙、色紙、短冊、紙帶、書簡筒等

第二十一類　皮革及ヒ他類ニ屬セサル皮革製品

第二十二類　冠物

帽子、頭巾、笠等

第二十三類　履物、附屬品

下駄、草履、靴、鼻緒、爪掛等

第二十四類　扇及ヒ團扇

第二十五類　飲食器

膳、椀、茶椀、皿、鉢、杯、徳利、菓子器、鐵瓶、土瓶、茶托、杯臺、紅茶具、珈琲具、匙、箸、箸箱、重箱等

第二十六類　文房具

硯、筆筒、鉛筆、硯屏、文鎭、墨臺、水滴、印材、肉池、文臺、硯箱、筆、墨、「インキ」、「ペン」軸等

第二十七類　樂器、玩具及ヒ遊戲具

第二十八類　菓子及ヒ其他ノ食用品

第二十九類　他類ニ屬セサル物品

第八條　特許法施行細則第一條乃至第二十七條、第三十二條乃至第三十五條、第三十八條、第三十九條、第四十八條乃至第六十條、第六十六條、第六十七條及ヒ第七十條乃至第七十四條ノ規定ハ意匠ニ關シテ之ヲ準用ス

附則

第九條　本則ハ意匠法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一號　意匠登錄願

収入印紙

一意匠ノ名稱

一登錄ノ請求範圍

一意匠ヲ應用スヘキ物品

一案出者ノ氏名

私（私共）儀前記意匠ニ付キ登錄相受度（特許法施行細則第一號書式ニ準ス）此段相願候也

本籍（國籍）及ヒ住所

職業　氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第二號　類似意匠登錄願

収入印紙

一意匠ノ名稱

一登錄ノ請求範圍

一意匠ヲ應用スヘキ物品

一案出者ノ氏名

私（私共）儀前記意匠ニ付キ登錄相受度此段相願候也

本籍（國籍）及ヒ住所

職業　氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第三號　登錄請求書

収入印紙

一登錄證主ノ氏名

一登錄ノ番號

私（私共）儀何某ヨリ前記意匠專用權（持分）ヲ讓受ケ（賣取）候ニ付登錄相成度別紙契約書（遺言書）相添此段及請求候也

本籍（國籍）及ヒ住所

氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第四號　登錄請求書

収入印紙

一登錄證主ノ氏名

一登錄ノ番號

私（私共）儀前記意匠專用權ヲ共有ト致候ニ付登錄相成度別紙契約書相添此段及請求候也

本籍（國籍）及ヒ住所

共有者　氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第五號　類似意匠登錄證

一意匠ノ名稱

一意匠ノ應用スヘキ物品

前記意匠ハ特許局審査官ニ於テ登錄ヲ與フヘキモノト査定シタリ仍テ意匠原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

本籍（國籍）及ヒ住所　氏　名

年月日　特許局長　氏　名　印

第六號　類似意匠登錄證

一意匠ノ名稱

一意匠ヲ應用スヘキ物品

本籍（國籍）及ヒ住所　氏　名

前記意匠ハ明治何年何月何日付第何號登錄意匠ト類似スルモノニシテ特許局審査官ニ於テ登錄スヘキモノト査定シタリ仍テ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

年月日　特許局長　氏　名　印

第三章　商標

●商標法（明治三十二年三月法律第三十八號）

聯帝國議會ノ協贊ヲ經タル商標法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商標法

第一條　自己ノ商品ヲ表彰スル爲商標ヲ專用セントスル者ハ此ノ法律ニ依リ其ノ登錄ヲ受クヘシ

第二條　文字、圖形又ハ記號ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノハ商標ノ登錄ヲ受クルコトヲ得ス

一　菊花御紋章ト同一若ハ類似ノ圖形ヲ有スルモノ

二　國旗、軍旗、勲章又ハ外國ノ國旗ト同一若ハ類似ノモノ

三　秩序又ハ風俗ヲ紊リ若ハ世人ヲ欺瞞スルノ虞アルモノ

四　他人ノ登錄商標又ハ其ノ登錄失效後一年ヲ經過セサルモノト同一若ハ類似ニシテ同商品ニ使用セントスルモノ

五　此ノ法律施行前ヨリ他人ニ使用者アル商標ト同一若ハ類似ノモノ

六　商品ノ普通名稱、產地ヲ表彰スルモノ又ハ其ノ品位、品質、形狀ヲ商業上慣用ノ文字、圖形若ハ記號ニ依リ表彰スルモノ及普通ニ使用セラルル氏名、商號、會社名若ハ組合名ヲ普通ノ書體ニ依リ記載スルモノ

七　國、地紋其ノ他特別著明ノ外觀ナキモノ

第三條　商標專用ノ年限ハ二十年トシ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス

外國ノ登錄商標ニシテ帝國ニ於テ登錄ヲ受ケタルモノノ專用年限ハ原登錄ノ有效年限ニ從フ但シ二十年ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條　商標專用年限滿了ノ後其ノ商標ヲ續用セントスル者ハ更ニ其ノ登錄ヲ受クルコトヲ得

第五條　商標ノ專用ハ農商務大臣ノ定ムル類別ニ從ヒ出願人ノ指定シタル商品ニ限ル

第六條　登錄商標主其ノ營業ヲ讓渡シ又ハ他人トシ若ハ共有ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ特許局ニ請求シ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

登錄商標主同商品ニ付類似ノ商標ヲ有スルトキハ共ニ讓渡シ若ハ共有ト爲シ又ハ類似商標ノ使用ヲ廢止スルニ非サレハ前項ノ登錄ヲ受クルコトヲ得ス

第七條　商標ノ登錄ヲ受ケントスル者ハ一商標每ニ其ノ商標ヲ付スヘキ商品ヲ明記シ見本ヲ添ヘ特許局長ニ出願スヘシ

第八條　二人以上同一又ハ相類似スル商標ヲ同商品ニ使用セントシテ登錄ヲ出願スル者アルトキハ出願ノ先ナルモノヲ登錄シ同時ニ出願シタルモノハ共ニ之ヲ登錄セス但シ出願者一人トナリタルトキハ此ノ限ニアラス

第九條　工業所有權保護同盟條約國ニ於テ商標登錄ヲ出願シタル者四箇月以內ニ同一商標ニ付登錄ヲ出願スルトキハ其ノ出願ハ最初出願ノ日ニ於テ之ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第十條　登錄ヲ受ケタル商標ニシテ第二條又ハ第八條ニ違反シタルモノナルトキハ其ノ登錄ヲ無效トス但シ第二條第四號若ハ第五號ニ該當シ又ハ第八條ニ違ヒ登錄ヲ受ケタルモノニシテ登錄後三年ヲ經タルトキハ此ノ限ニアラス

第十一條　登錄ヲ受ケタル商標ニシテ帝國ニ於テ該當スルモノアルトキハ特許局長ニ於テ其ノ登錄ヲ取消スコトヲ得

一　登錄商標主登錄後其ノ商標ヲ使用スル商品ノ產地、品質等ニ關シ不實ノ事項ヲ附記シタルトキ

二　登錄商標主正當ノ事故ナクシテ六箇月以上サルトキ

第十二條　商標專用權ハ登錄商標主其ノ商標ヲ使用スル營業ノ廢止ニ因リ消滅ス

第十三條　商標ノ登錄ヲ受クル者ハ一商標ニ付商品一類每ニ商標料金三十圓ヲ納ムヘシ續用ノ登錄ニ付テモ亦同シ

第十四條　特許局ハ商標公報ヲ發行シ商標登錄ニ關スル必要事項ヲ公示スヘシ

第十五條　證人又ハ鑑定人ニシテ特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ對シ僞證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シ僞證又ハ詐僞ノ鑑定ヲ爲サシメタル者ハ前項ニ同シ

前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定若ハ審決ニ至ラサル前特許局又ハ囑託ヲ受ケタル裁判所ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第十六條　他人ノ登錄商標ナルコトヲ知リ其ノ承諾ヲ經スシテ之ト同一又ハ類似ノ商標ヲ製造シ之ヲ交付若ハ販賣シタル者又ハ他人ノ登錄商標ト同一若ハ類似ノ商標ヲ同商品ニ使用シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣シ若ハ販賣ノ爲所藏シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮又ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

他人ノ登錄商標ヲ有スル容器、包裝等ナルコトヲ知リ之ヲ同商品ニ使用シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣シ若ハ販賣ノ爲所藏シタル者、又ハ他人ノ登錄商標ト同一若ハ類似ノ商標ヲ其ノ商品販賣ノ廣告、看板、引札等ニ使用シタル者ハ前項ニ同シ

第十七條　詐僞ノ所爲ヲ以テ商標ノ登錄ヲ受ケタル者又ハ登錄ヲ受ケサル商標ニ登錄標記ヲ付シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ商品ヲ販賣ノ爲所藏シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

登錄ヲ受ケスシテ登錄標記又ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ付シタル商標ヲ其ノ商品販賣ノ廣告、看板、引札等ニ使用シタル者ハ前項ニ同シ

第十八條　第十六條及第十七條ノ場合ニ於テハ商標及商標ヲ表示スヘキ原具ヲ沒收ス其ノ商標ト分離スヘカラサル商品、容器、包裝等ハ之ヲ毀壞セシム

第十九條　第十六條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第二十條　特許法第六條乃至第十條第十二條第十三條第十五條第二十一條第二十三條第二十八條乃至第三十七條第四十三條及第五十一條ノ規定ハ商標ニ關シテ之ヲ準用ス

第二十一條　主務官廳ニ於テ認可シタル同業者ノ組合ニシテ標章ヲ商標トシテ專用セントスルトキハ此ノ法律ニ依リ登錄ヲ受クルコトヲ得

前項ニ依リ登錄ヲ受ケタル標章ハ登錄商標ニ準ス

附則

第二十二條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十三條　明治二十一年勅令第八十六號商標條例ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

商標條例ニ依テ受ケタル商標ハ此ノ法律ニ依テ受ケタル商標ト同一ノ效アルモノトス

商標ニ關スル出願又ハ請求ニシテ此ノ法律施行ノ日マテニ處分ヲ終ラサルモノハ此ノ法律ニ依リタル出願又ハ請求ト看做シ處分スヘシ

第二十四條　明治二十一年勅令第八十六號商標條例第二條第三號ニ該當シ又ハ同第八條ニ違ヒ登錄ヲ受ケタル商標ニシテ同第十條ニ依リ無效タルヘキモノニ對シテハ此ノ法律施行後二年ヲ經過スルトキハ其ノ登錄無效ノ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

●商標法施行細則（明治三十二年六月農商務省令第十五號）

商標法施行細則左ノ通相定ム

商標法施行細則

第一條　商標登錄願書ハ第十四條ニ定メタル類別每ニ之ヲ作ルヘシ

第二條　帝國ニ於テ登錄ヲ受ケントスル商標カ既ニ外國ニ於テ登錄ヲ受ケタルモノナルトキハ其登錄願書ニ原登錄證及ヒ明細書ノ謄本ニシテ其國ノ政府ニ於テ認證シタルモノヲ添附スヘシ

第三條　商標ヲ綴用セントスルトキハ專用年限滿了前ニ其願書ヲ特許局ニ差出スヘシ若シ外國ニ於テ商標綴用ノ許可ヲ得タル後帝國ニ於テ許可ヲ得タル旨ヲ證明スル書面ヲ添附スヘシ

第四條　共有商標ノ登錄ヲ受ケントスルトキハ登錄願書ニ營業ヲ共ニスル事實ヲ證明スル書面ヲ添附スヘシ

第五條　商標ノ見本ハ强靭ナル紙料ヲ以テ之ヲ作ルヘシ

見本ハ三通之ヲ差出スヘシ但特許局長ハ必要ト認ムルトキハ更ニ數通ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第六條　審査官ハ願書ノ番號ニ從ヒテ審査スヘシ

第七條　審査官カ商標ヲ登錄スヘキモノト査定シタルトキハ特許局長ハ其査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

出願人カ査定書ノ送付ヲ受ケタルトキハ商標料ヲ納付シ且同時ニ商標ノ印版一箇ヲ差出スヘシ

第八條　商標ノ印版ハ木材又ハ金屬ヲ用ヒ長サ曲尺四寸以內、幅三寸以內及ヒ厚サ七分六厘トスヘシ

印版ハ商標ノ全部ヲ一箇ノ版面ニ彫刻シテ之ヲ作ルヘシ

第九條　特許法施行細則第三十二條乃至第三十四條ノ規定ハ商標ノ印版ニ之ヲ準用ス

第十條　出願人カ第七條第二項ニ定メタル手續ヲ爲シタルトキハ特許局長ハ商標原簿ニ登錄スヘシ

第十一條　登錄證ハ第六號乃至第八號書式ニ依リ之ヲ作ルヘシ

第十二條　商標ノ讓渡又ハ共有ノ登錄ヲ受ケントスルトキハ其請求書ニ營業ヲ讓受ケ又ハ營業ヲ共ニスル事實ヲ證明スル書面ヲ添附スヘシ

第十三條　商標料ハ登錄許可ノ査定書到達ノ日ヨリ六十日以內ニ之ヲ納ムヘシ

第十四條　商標原簿ニハ左ノ事項ヲ登錄スヘシ

一　登錄ノ番號

二　類別及ヒ商品

三　登錄商標ノ氏名、住所、同業組合ニ在リテ

八　其名稱、事務所及ヒ其代表者ノ氏名
四　外國ノ登錄商標ニ付テハ原登錄ノ有效年限
五　商標ノ綴用ニ付テハ其事由
六　商標專用權ノ讓渡又ハ共有ニ付テハ其事由
七　類似商標ニ付テハ原商標ノ登錄番號
八、帝國內ニ住所ヲ有セサル登錄商標主ノ代理人ノ氏名、住所
九　登錄ノ無效、取消又ハ消滅ニ付テハ其事由及ヒ其事由發生ノ年月日
十　登錄證ノ再下付ニ付テハ其事由及ヒ再下付ノ年月日
十一　登錄ノ年月日

第十五條　出願人ハ左ノ類別ニ從ヒ商標ヲ使用セントスル商品ヲ指定スヘシ

第一類　化學品、藥劑及ヒ醫療補助品
酸類、鹽類、亞爾加里、濃白粉、護謨、膠、燐、石鹼、酒精、個里酚林、規那鹽、莫兒比涅、丁幾劑、舍利別、煎劑、水劑、浸劑、丸藥、膏藥、散藥、錠藥、煉藥、生藥、藥油、石灰、硫黃、鑛水、麝香、打粉、食鹽、艾、防腐劑、防臭劑、驅蟲劑、捆帶、綿紗、綿散絲、脫脂綿、海綿等

第二類　染料、顏料及ヒ珠染料
藍玉、藍靛、紫根、紅、朱、丹、鯨肯、燒肯、洋硝、白粉、胡粉、金銀粉、藤黃、染齒料、綠青、明礬等

第三類　塗料
漆、假漆、油漆、墨、靴墨、靴油、防蟲料、防水料等

第四類　香料、煙料及ヒ他類ニ屬セサル化粧品
香水、香油、髮膏、香袋、線香、炷香、化粧下等

第五類　金屬及ヒ其半加工品
銑鐵、鋼鐵、鋼鐵、鋼鐵、條鐵、鐵葉、鐵板、鐵線、銅、銅板、銅線、鉛、鉛板、亞鉛、亞鉛板、錫、合金等

第六類　金屬製品
錫物、打物、彫鑄品、編物等

第七類　利器及ヒ尖刃器
鋸、鋸、鑿、錐、鑿、斧、鐵、小刀、剃刀、鋏、針、釘、蕭嘴等

第八類　貴金屬、其模造物及ヒ其製品並ニ彫鑄品（「アルミニウム」金、「ニツケル」銀及ヒ「プリタニヤメタル」モ之ニ屬ス）
黃金、銀、四分一、紫銅、其他貴金屬ノ合金、鍍品「モール」等

第九類　寶石類、其模造物及ヒ其製品並ニ彫鑄品
金剛石、珊瑚珠、真珠、瑪瑙、水晶、黃玉、碧玉等

第十類　礦物類
石材、其模造物及ヒ其製品並ニ彫鑄品、版石、大理石、砥石、石器等

第十一類　石材、其模造物及ヒ其製品並ニ彫鑄品、版石、大理石、砥石、石器等

第十二類　漆喰及ヒ土砂類
漆喰「セメント」、石膏、土瀝青、土砂等

第十三類　陶磁器類
陶器、磁器、土器、瓦、煉瓦等

第十四類　七寶燒
第十五類　玻璃及ヒ其製品（鉄瑠璃品モ之ニ屬ス）
玻璃板、玻璃管、玻璃壜、玻璃球等

第十六類　機械類（機械ノ各部モ之ニ屬ス）
織機、紡績機、裁縫機、製糸機、印刷機、其他諸機械、汽機、汽罐等

第十七類　器工器具
鋏、鋤、鍬、稻扱、唐箕、耙、釘拔、鐵槌、鑿、鑿等

第十八類　理化學、醫術、測量及ヒ教育用器械、器具（眼鏡及ヒ其鏡器類モ之ニ屬ス）

第十九類　度量衡

第二十類　運搬用機械並ニ器具類
荷車、馬車、人力車、自轉車、小兒用車、船、鐵道用車輛、車輪等

第二十一類　樂器

第二十二類　時計及ヒ其附屬品

第二十三類　銃砲、彈丸及ヒ爆發物類
大砲、小銃、獵銃、短銃、火藥、綿火藥、「ダイナマイト」、雷管、煙火等

第二十四類　醫種、天藥種及ヒ藥
第二十五類　眞綿、木綿糸、麻、苧、羽毛類及ヒ其粗製品

第二十六類　生絲、絹絲及ヒ天蠶絲（琴絲、金絲、銀絲モ之ニ屬ス）

第二十七類　綿絲
第二十八類　毛絲
第二十九類　麻絲及ヒ第二十六類乃至第二十八類ニ屬セサル絲類

第三十類　絹織物
第三十一類　木棉織物
第三十二類　毛織物
第三十三類　麻織物
第三十四類　第三十類乃至第三十三類ニ屬セサル織物

第三十五類　絲類ノ編物、組物及「レース」類（各種ノ紐類モ之ニ屬ス）

第三十六類　被服類
衣服、冠、帽子、「カラ」、「カフス」、裝飾、襦衣、「フボン」下、手袋、足袋、目利安等

第三十七類　清酒
第三十八類　砂糖、蜜類
砂糖、氷砂糖、糖蜜、蜂蜜等

第三十九類　菓子及ヒ物類
干菓子、蒸菓子、掛ケ物、西洋菓子、飴、砂糖漬等

第四十類　茶、珈琲及ヒ「チヨコレート」類

第四十一類　煙草類

第四十二類　穀、菜、種子及ヒ菓物類
五穀、蔬菜、蕈、菓實、種子、根球、麹種、「モヤシ」等

第四十三類　挽粉、澱粉及ヒ其製品
穀粉、葛粉、山慈姑粉、麩類、湯葉、蒟蒻、凍豆腐、凍蒟蒻等

第四十四類　味噌、醬物及ヒ漬物類

第四十五類　他類ニ屬セサル食料品及ヒ加味品
肉類、越幾斯類、卵、鰹節、鰹、乾鮑、海苔、昆布、荒布、伽紗、岬苔、雲丹、芥子、胡椒等

第四十六類　牛乳及ヒ其製品
牛乳、凝乳、乳油、乳餅、乳粉等

第四十七類　煙具及ヒ煙物
煙管、煙袋、煙管筒、懷中物等

第四十八類　紙及ヒ其製品
紙、色紙、短冊、板紙、擬革紙、壁紙、油紙、盜紙、書簡筒、張文匣、一閑張、帳簞、元結、水引等

第四十九類　文房具
筆、墨、印肉、墨汁、石筆、鉛筆、「ペシ」「ペン」軸、硯、墨汁壺、文鎮、筆筒、筆架等

第五十類　皮革及ヒ其製品（各種ノ鞄類モ之ニ屬ス）
毛皮、柔革、馬具、文匣、革帶、靴、唐弓、絃、鞭等

第五十一類　摺附木
第五十二類　油、蠟類
石油、種油、魚油、蠟、蠟燭、脂肪等

第五十三類　肥料
干鰯、鯡粕、油粕、骨粉、糞等

第五十四類　木竹材（木皮、竹皮類モ之ニ屬ス）

第五十五類　木、竹、籐類ノ製品及ヒ其漆塗、蒔繪品類指物、挽物、曲物、編物、組物、桶類等

第五十六類　甲、角、牙類ノ製品及ヒ其模造品

第五十七類　藺、草及ヒ他類ニ屬セサル其製品
麥藺、麥表、筵、笠、繩、突藺、草田等

第五十八類　傘、蝙蝠傘、杖、下駄、草履、雪駄、鼻緒、爪掛等

第五十九類　扇子及ヒ團扇類

第六十類　燈器（燈器ノ各部モ之ニ屬ス）
「ランプ」、燭臺、提燈等

第六十一類　歯磨及ヒ洗粉類（磨粉モ之ニ屬ス）

第六十二類　刷子及ヒ帚類

第六十三類　玩具及ヒ遊戲具類（造花及ヒ花籠類モ之ニ屬ス）
鞠、碁、將棋、人形、獨樂、弓、球突具、押繪、骨牌等

第六十四類　圖畫及ヒ寫眞類

第六十五類　書畫、新聞紙、雜誌類

第六十六類　洋酒
葡萄酒、麥酒、「ブランディ」、「ベルモット」、「ウキスキー」、「リキユール」等

第六十七類　他類ニ屬サセル各種ノ酒類
味淋、白酒、燒酎、濁酒、鹿ノ歓、直シ等

第六十八類　他類ニ屬セサル各種ノ飲料
冷水、鹽水、「ラムネ」、氷等

第六十九類　醬料類
醬油及ヒ酢類

第七十類　燃料類
石炭、「コーク」、薪、炭、附木、燭心等

第七十一類　寢具類
蒲團、蒲團、坐蒲團、枕、蚊帳等

第七十二類　他類ニ屬セサル雜誌製品

第七十三類　他類ニ屬セサル商品

第十六條　商標法第二十一條ニ定メタル同業組合カ差出ス書面ニハ其名稱及ヒ事務所ヲ記載シ代表者之ニ署名捺印スヘシ
同業組合カ標章ノ登錄ヲ受ケントスルトキハ其願書ニ主務官廳ノ認可ヲ得タル旨ヲ證明スル書面ヲ添附スヘシ

第十七條　特許法施行細則第一條乃至第二十七條、第三十二條、第三十五條、第三十八條、第三十九條、第四十八條乃至第五十九條、第六十六條、第六十七條及ヒ第七十條乃至第七十四條ノ規定ハ商標ニ關シテ之ヲ準用ス

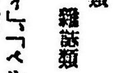
附則

第十八條　本則ハ商標法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

書式

第一號

商標登錄願



商標ヲ附スヘキ商品

私（私共）儀前揭商標ニ付キ登錄相受度（特許法施行細則第一號書式ニ準ス）此段相願候也

本籍（國籍）及ヒ住所
職業
氏　名印

年月日

第二號

特許局長氏名殿

商標綴用登錄願

收入印紙

印見本

登錄ノ番號

商標ヲ附スヘキ商品

私(私共)儀前掲商標專用致度ニ付更ニ登錄相受度此段相願候也

本籍(國籍)及ヒ住所

氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第三號

組合標章登錄願

收入印紙

印見本

標章ヲ附スヘキ商品

當組合儀前掲ノ標章ヲ商標トシテ使用致度ニ付登錄相受度主務官廳ノ認可證相添此段相願候也

何府縣郡市町村番地

何々組合

代表者　氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第四號

登錄請求書

收入印紙

一登錄商標主ノ氏名

一登錄ノ番號

私(私共)儀何其ヨリ前記商標專用權ヲ讓受ケ候ニ付登錄相成度別紙契約書(證書)相添此段及請求候也

何府縣郡市町村番地

何々組合

代表者　氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第五號

登錄請求書

收入印紙

一登錄商標主ノ氏名

一登錄ノ番號

私(私共)儀前記商標專用權ヲ共有ト致候ニ付登錄相添此段及請求候也

本籍(國籍)及ヒ住所

氏　名　印

年月日

特許局長氏名殿

第六號

第何號

商標登錄證

印見本

商標ヲ附スヘキ商品

前掲商標ハ特許局審査官ニ於テ登錄スヘキモノト査定シタリ仍テ商標原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

本籍(國籍)及ヒ住所

氏　名

年月日

特許局長　氏　名　印

第七號

第何號

外國商標登錄證

印見本

一商標ヲ附スヘキ商品

一專用年限

前掲商標ハ何國ノ登錄商標ニシテ特許局審査官ニ於テ登錄スヘキモノト査定シタリ仍テ商標原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

本籍(國籍)及ヒ住所

氏　名

年月日

特許局長　氏　名　印

第八號

第何號(原登錄ノ番號)

商標綴用登錄證

印見本

商標ヲ附スヘキ商品

前掲商標ハ明治何年何月何日第何號登錄商標ノ綴用ニ係ルモノニシテ特許局審査官ニ於テ登錄スヘキモノト査定シタリ仍テ商標原簿ニ登錄シ茲ニ本證ヲ下付スルモノ也

本籍(國籍)及ヒ住所

氏　名

年月日

特許局長　氏　名　印

第四章　雜

●特許法意匠法及商標法ヲ臺灣ニ施行スルノ件（明治三十二年六月勅令第二百九十號）

勅令第二百九十號

朕特許法意匠法及商標法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許法、意匠法、及商標法ヲ明治三十二年七月一日ヨリ臺灣ニ施行ス

●特許局審判事務章程（明治三十二年六月勅令第二百七十九號）

朕特許局審判事務章程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　特許局審判事務章程

特許局長ハ各審判事件ニ付審判官ヲ指定ス可シ

第二條　特許局長ハ審判官中審判ニ參與スルコト能ハサル故障アル者アルトキハ其ノ指定ヲ解キ更ニ他ノ審判官ヲ指定シテ之ヲ補充ス可シ

第三條　審判長ハ指定審判官ノ中上席者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　審判長ハ審判ニ關スル事務ヲ統理ス

第五條　審判長ハ一名若ハ二名ノ主査審判官ヲ命スルコトヲ得

第六條　審決ハ審判評議ヲ經ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　審決ハ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ審判長ノ決スル處ニ依ル

第八條　審判官ハ左ノ事件ニ參與スルコトヲ得ス

一　自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件

二　直接又ハ間接ニ利害ノ關係ヲ有シタル事件

三　審査官トシテ審査ニ參與シタル事件

附則

第九條　本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

●特許代理業者登錄規則（明治三十二年六月勅令第二百三十五號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ特許代理業者登錄規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許代理業者登錄規則

第一條　特許代理業者ト稱スルハ特許、意匠又ハ商標ニ關スル代理ヲ常業トスル者ヲ謂フ

第二條　特許代理業者ノ登錄ヲ受ケントスル者ハ能力者ニシテ且特許代理業者試驗ニ合格シタル者ナルコトヲ要ス

特許代理業者試驗ニ關スル規定ハ農商務大臣之ヲ定ム

第三條　左ニ掲クル者ハ試驗ヲ經スシテ登錄ヲ受クルコトヲ得

一　文官高等試驗又ハ判事檢事登用試驗ニ合格シタル者

二　帝國大學分科大學又ハ之ト學科程度同等ト認ムル內外國ノ學校ニ於テ定規ノ課業ヲ卒ヘタル者

三　辯護士タル資格ヲ有スル者

四　特許局ノ高等官タリシ者又ハ二年以上特許局審査官補タリシ者

第四條　左ニ掲クル者ハ登錄ヲ受クルコトヲ得ス

一　特許法、意匠法、商標法又ハ第十五條ニ定メタル罪ヲ犯シタル者

二　重罪ノ刑ニ處セラレタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

三　禁錮ニ處セラレ滿期又ハ赦免ノ後三年ヲ經サル者

四　公權停止中ノ者

五　破產者ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第五條　特許代理業者ニシテ第二條若ハ第三條ノ資格ヲ失ヒ又ハ第四條ニ該當スルトキハ登錄ハ直ニ其ノ效ヲ失フ

第六條　登錄ヲ受ケントスル者ハ手數料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ

前項ノ手數料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

手數料ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ還付セス

第七條　登錄願書ニハ履歷書及第二條第一項第三條並第四條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添附スヘシ

第八條　特許局ニハ特許代理業者名簿ヲ備ヘ左ノ事項ヲ登錄スヘシ

一　特許代理業者ノ氏名、住所

二　事務所

三　登錄ノ年月日

第九條　前條第一號及第二號ニ掲ケタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ特許代理業者ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ特許局ニ屆出ツヘシ特許代理業者其ノ業務ヲ廢止シタルトキ亦同シ

特許代理業者死亡シタルトキハ其ノ相續人ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ屆出ツヘシ

前二項ノ屆出アリタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ其ノ旨ヲ登錄スヘシ

第十條　特許代理業ヲ停止シ又ハ其ノ停止ヲ解キタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ其ノ旨ヲ登錄スヘシ

第十一條　特許代理業ヲ禁止シタルトキ及第五條ノ事實アリタルトキハ特許局長ハ特許代理業者名簿ニ抹消ノ登錄ヲ爲スヘシ

第十二條　特許代理業者名簿ニ登錄シタル事項ハ官報特許公報及商標公報ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第十三條　特許代理業者ハ相手方ノ代理人トシテ取扱ヒタル事件又ハ特許局在職中取扱ヒタル事件ニ付其ノ業務ヲ行フコトヲ得ス

第十四條　特許代理業者組合ヲ設ケタルトキハ組合規約ヲ定メテ特許局長ノ認可ヲ受クヘシ組合規約ヲ變更シタルトキ亦同シ其ノ組合ヲ廢止シタルトキハ特許局ニ屆出ツヘシ

第十五條　登錄ヲ受ケスシテ特許代理業ヲ營ミ若ハ特許代理業者ト公稱シタル者又ハ詐僞ノ所爲ヲ以テ登錄ヲ受ケタル者ハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

特許代理業ヲ停止若ハ禁止セラレ又ハ第五條ニ依リ登錄ノ效ヲ失ヒ仍業務ヲ營ミタル者亦前項ニ同シ

附則

第十六條　本令發布前ヨリ特許代理業ヲ營ム者ニシテ第三條ニ該當セサル者ハ特許代理業者試驗委員ノ銓衡ヲ經テ登錄ヲ受クルコトヲ得但シ本

今施行ノ日ヨリ三十日以内ニ出願シタル者ニ限ル

第十七條　本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

●特許出願ニ關スル明細書及圖面調製方標準（明治三十二年六月農商務省告示第五十九號）

明治三十二年七月一日以後特許出願ニ關スル明細書及ヒ圖面ハ左ノ標準ニ依リ作ルヘシ

一　明細書ハ美濃紙二ツ折ニシテ凡ソ其上部曲尺一寸、下部八分、左二分、綴料一寸ヲ餘シ楷書又ハ行書ヲ以テ十三行二十五字詰ニ認ムヘシ

二　明細書中圖面ト對照シテ說明スルモノアルトキハ其指示スヘキ部分ニ適當ナル名稱及ヒ符號ヲ附スヘシ

三　圖面ハ强靭ニシテ平滑ナル白紙若クハ複寫布ヲ用ヰ凡ソ其上部曲尺六分、下部四分、左二分、右一寸四分ヲ餘シ竪曲尺八寸、横四寸八分ノ面内ニ濃墨ニテ鮮明ニ調製スヘシ

四　圖面ハ著色スルコトヲ得ス

五　圖ノ離レタルモノハ一箇毎ニ番號ヲ附シ又一部分ニシテ數圖ニ亘ルモノアレハ必ス同一ノ符號ヲ用ユヘシ但番號及ヒ符號ハ濃墨ニテ明瞭ニ記スヘシ

六　符號ヲ直ニ圖ニ施スコト能ハサルトキハ其部分ヨリ少シク離シテ之ヲ記シ點線若クハ細線ヲ以テ其部分ト符號トヲ接續スヘシ陰ヲ施シタル上ニハ符號ヲ記スヘカラス已ヲ得サルトキハ部分ニ限リ陰ヲ施サスシテ符號ヲ記スヘシ

七　截斷面ヲ現ハスニハ線間凡ソ曲尺三厘ヲ離シタル平行線ヲ斜ニ引クヘシ又截斷面中部分ヲ異ニスルモノハ各方向ヲ異ニシタル斜線ヲ用ユヘシ

八　凹凸ノ部分ヲ明瞭ナラシムル爲メ圖面ニ陰ヲ施ス必要アルトキハ線ヲ用ヰテ簡明ニ畫クヘシ射影ハ成ルヘク施スヘカラス

九　明細書及ヒ圖面ニハ出願人異名捺印シ他ノ事項ヲ記載スヘカラス

●特許、意匠及商標ニ關スル手數料（明治三十二年五月勅令第百九十五號）

第一條　特許、意匠又ハ商標ニ關シ左ニ掲クル書類ヲ差出ス者ハ手數料トシテ下ニ定ムル金額ヲ納ムヘシ

一　特許願書　毎一件金五圓
二　追加特許願書　毎一件金三圓
三　特許證改訂願書　毎一件金五圓
四　特許證分割願書　毎一件金一圓
五　意匠登錄願書　毎一件金三圓
六　商標登錄願書　毎一件金三圓
七　標章登錄願書　毎一件金二圓
八　登錄商標使用登錄願書　毎一件金三圓
九　再審査請求書　毎一件金十二圓
十　審判請求書　毎一件金十二圓
十一　書類ノ謄本ノ請求書　毎一件金十錢
十二　圖面ノ調製ノ請求書　圖面一枚ニ付金三十錢以上金三十圓以下ニ於テ調製ノ難易ニ從ヒ特許局長ノ定ムル金額
十三　原簿ノ一覽ノ請求書　毎一件金十錢
十四　博覽會又ハ共進會ノ出品ニ關スル屆書　毎一件金一圓

第二條　手數料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

附則

第三條　本令ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

●特許、意匠又ハ商標ニ關シ差出ス請求書、申請書ニ要スル手數料（明治三十二年六月農商務省令第十六號）

特許、意匠又ハ商標ニ關シ差出ス請求書、申請書ニ要スル手數料左ノ通相定ム

第一條　特許、意匠又ハ商標ニ關シ左ニ掲クル書類ヲ差出ス者ハ手數料トシテ下ニ定ムル金額ヲ納ムヘシ

一　期日ノ變更又ハ期間ノ延長請求書　毎一件金二十錢
二　證明請求書　毎一件金五十錢
三　審判ニ關スル費用ノ負擔及ヒ費用額ノ決定申請書　毎一件金五十錢
四　利用發明ノ特許ニ付キ原特許證主ニ支拂フヘキ報酬額ノ決定申請書　毎一件金五十錢
五　相續ニ因ル特許證、意匠登錄證又ハ商標登錄證ノ書換申請書　毎一件金一圓
六　特許證ノ再下附請求書　毎一件金三圓
七　意匠登錄證又ハ商標登錄證ノ再下付請求書　毎一件金一圓

第二條　手數料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

第三條　本則ハ明治三十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●特許意匠商標ニ係ル印刷書類拂下代價並書類謄本手數料及請求手續（明治二十二年一月農商務省告示第一號）

特許條例意匠條例及商標條例ニ依リ特許發明ノ明細書特許公報商標公報ノ拂下代價並ニ書類謄本圖面調製ノ手數料及請求手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一條　印刷書類拂下代價ハ明細書一部ニ付金貳錢五厘特許公報一部ニ付金拾五錢商標公報一部ニ付金貳錢五厘トス（三十年農商務省告示第九號三十一年同省告示第七號參看）

第二條（三十二年勅令第百九十五號ニ依リ消滅）

第三條（同上）

第四條　印刷書類ノ拂下ヲ望ム者ハ發明人東京市京橋區八官町十三番地彦根正三ニ就テ購入スヘシ（二十四年農商務省告示第三號ヲ以テ改正三十年同省告示第九號參看）

第五條　書類ノ謄本又ハ特許條例第三十三條ニ依リ圖面ノ調製ヲ請求スル者ハ請求書ヲ差出スヘシ但圖面ノ調製ヲ請求スル者ハ其發明ノ雛形見本又ハ粗圖ニ明細書ヲ添ヘテ差出スヘシ尤モ審査用ノ爲メ既ニ其發明ノ雛形見本又ハ粗圖並明細書ヲ差出シタルモノハ之レヲ添フルニ及ハス（同上）

第六條　意匠條例第二十五條ニ依リ圖面ノ調製ヲ請求スル者ハ其意匠登錄證ノ番號及日附ヲ請求書ニ記載シテ差出スヘシ

第七條　手數料ハ特許局長ノ通知ニ依リ相當ノ登記印紙ヲ納付書ニ貼用シ消印ノ上特許局ニ差出スヘシ（二十五年農商務省告示第二號ヲ以テ改正）

○農商務省告示（明治三十年四月特許公報第九號）

二百四號及商標公報第百四十二號以下ノ書類ニ其代價ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　特許公報及商標公報ノ書類人並町三町目九番地博文館主大橋新太郎トス

二　特許公報ノ代價ハ一部ニ付金二十錢商標公報ノ代價ハ一部ニ付金十錢トス

○農商務省告示（明治三十一年三月特許公報及商標公報代價左ノ通リ改正ス第七號）

一　特許公報ノ代價ハ第二百二十二號以下一部ニ付金二十五錢商標公報ノ代價ハ第百八十號以下一部ニ付金十三錢トス

第二十五類　運輸通信

第一章　運輸

第一款　鐵道

●鐵道敷設法（明治二十五年六月法律第四號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル鐵道敷設法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道敷設法

第一條　政府ハ帝國ニ必要ナル鐵道ヲ完成スル爲漸次左ノ定ノ線路ヲ調査シ及敷設ス

第二條　左ノ定線路ハ左ノ如シ

中央線

一　神奈川縣下八王子若ハ靜岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道

一　長野縣下長野若ハ篠ノ井ヨリ松本ヲ經テ前項ノ線路ニ接續スル鐵道

一　山梨縣下甲府ヨリ靜岡縣下岩淵ニ至ル鐵道

中央及北陸線ノ連絡線（三十年法律第六號ヲ以テ改正）

一　岐阜縣下多治見ヨリ岐阜ニ至ル鐵道

前項ノ線路ヨリ分岐シ若ハ長野縣下松本ヨリ岐阜縣下高山ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道

北陸線

一　福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ石川縣下七尾ニ至ル鐵道

一　京都府下舞鶴ヨリ福井縣下小濱ヲ經テ敦賀ニ至ル鐵道（二十八年法律第十一號ヲ以テ追加）

北陸線及北越線ノ連絡線

一　富山縣下富山ヨリ新潟縣下直江津ニ至ル鐵道

北越線

一　新潟縣下直江津又ハ群馬縣下前橋若ハ長野縣下豊野ヨリ新潟縣下新潟及新發田ニ至ル鐵道

羽越線及岩越線（二十八年法律第十二號ヲ以テ改正）

一　新潟縣下新發田ヨリ山形縣下米澤ニ至ル鐵道

一　新潟縣下新津ヨリ福島縣下若松ヲ經テ白河、本宮近傍ニ至ル鐵道

奥羽線

一　福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形、秋田縣下秋田青森縣下弘前ヲ經テ青森ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ山形縣下酒田ニ至ル鐵道

一　宮城縣下仙臺ヨリ山形縣下天童若ハ宮城縣下石巻ヨリ小牛田ヲ經テ山形縣下船形町ニ至ル鐵道

一　岩手縣下黒澤尻若クハ花巻ヨリ秋田縣下横手ニ至ル鐵道

一　岩手縣下盛岡ヨリ宮古若ハ山田ニ至ル鐵道

磐武線及常磐線

一　東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉、佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道及本線ヨリ分岐シテ水戸ニ至ル鐵道

一　茨城縣下水戸ヨリ福島縣下平ヲ經テ宮城縣下岩沼ニ至ル鐵道

近畿線

一　奈良縣下奈良ヨリ三重縣下上柘植ニ至ル鐵道

一　大阪府下大坂若ハ奈良縣下八木又ハ高田ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道

一　京都府下京都ヨリ奈良縣下奈良ニ至ル鐵道

一　京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道

山陽線

一　廣島縣下三原ヨリ山口縣下宗門關ニ至ル鐵道

一　廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

山陰線

一　京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豊岡、鳥取縣下鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山口近傍ニ至ル鐵道

山陰及山陽連絡線

一　兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ粟山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道

一　兵庫縣下姫路近傍ヨリ鳥取縣下鳥取ニ至ル鐵道又ハ岡山縣下岡山ヨリ津山ヲ經テ鳥取縣下米子及境ニ至ル鐵道若ハ岡山縣下倉敷又ハ玉島ヨリ鳥取縣下境ニ至ル鐵道

一　廣島縣下廣島ヨリ島根縣下濱田ニ至ル鐵道

四國線

一　香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル鐵道

一　德島縣下德島ヨリ前項ノ線路ニ接續スル鐵道

一　香川縣下多度津ヨリ愛媛縣下今治ヲ經テ松

山ニ至ル鐵道

九州線

一　佐賀縣下佐賀ヨリ長崎縣下佐世保及長崎ニ至ル鐵道

一　熊本縣下熊本ヨリ三角ニ至ル鐵道及宇土ヨリ分岐シ八代ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道

一　熊本縣下熊本ヨリ大分縣下大分ニ至ル鐵道

一　福岡縣下小倉ヨリ大分、宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道

一　福岡縣下飯塚ヨリ原田ニ至ル鐵道

一　福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道

以上ノ線路ニ變更增減ヲ要スルモノアルトキハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ決定スヘシ

第三條　鐵道工事ハ緩急ニ應シテ其ノ期限ヲ數期ニ區分シ每期ノ工事ヲ機續事業トス

第四條　鐵道事業ニ要スル費用ハ公債ヲ募集シテ之ニ充ツ

第五條　鐵道公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トス

第六條　鐵道公債ニ關シ本法ニ規定ナキモノハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

第二章　第一期鐵道及公債募集

第七條　豫定線路中左ノ線路ハ第一期間ニ於テ其ノ實測及敷設ニ著手ス

一　中央豫定線ノ內神奈川縣下八王子若ハ韓岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及巨野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道

一　北陸豫定線ノ內福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道

一　北越豫定線ノ內新潟縣下直江津又ハ群馬縣下前橋若ハ長野縣下豐野ヨリ新潟縣下新潟及新發田ニ至ル鐵道

一　奧羽豫定線ノ內福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形、秋田縣下秋田青森縣下弘前ヲ經テ青森ニ至ル鐵道

一　山陽豫定線ノ內廣島縣下三原ヨリ山口縣下赤間關ニ至ル鐵道及廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

一　九州豫定線ノ內佐賀縣下佐賀ヨリ長崎縣下長崎及佐世保ニ至ル鐵道及熊本縣下熊本ヨリ三角ニ至ル鐵道

一　近畿豫定線ノ內京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道

一　近畿線ノ內大阪若ハ奈良縣下高田若ハ八木ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道

一　山陰山陽聯絡豫定線ノ內兵庫縣下姬路近傍ヨリ鳥取縣下鳥取ヲ經テ境ニ至ル鐵道又ハ岡山縣下岡山ヨリ津山ヲ經テ鳥取縣下境ニ至ル鐵道若ハ岡山縣下倉敷ヨリ鳥取縣下境ニ至ル鐵道

以上線路ノ外ニ倘敷設ノ急ヲ要スヘシト認ムルモノアルトキハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ更ニ第一期工事トシ特ニ公債ヲ募集スルコトヲ得

比較線路ハ政府ニ於テ更ニ調査ヲ遂ケ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ決定スヘシ

第八條　第一期鐵道工事ハ起工ノ年ヨリ向フ十二箇年ヲ以テ成效期限トス

第九條　第一期鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金六千萬圓ヲ限リ明治二十六年度ヨリ十二箇年間ニ漸次公債ヲ募集スヘシ（二十六年法律第一號ヲ以テ改正）

第十條　政府ハ第一期ニ敷設スヘキ鐵道線路ヲ實測シ每線路ノ工費豫算ヲ定メ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ

第三章　私設鐵道ノ處分

第十一條　既成私設鐵道ニシテ第二條ニ依リ敷設スヘキ線路ノ買收ノ必要アリト認ムルモノハ政府ハ其ノ會社ト協議ノ上價格ヲ豫定シ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ

第十二條　私設鐵道買收ノ費用ハ公債ヲ發行シ代償トシテ其ノ會社ニ交付スヘシ

第十三條　豫定鐵道線路中私設會社ニ敷設ヲ許可シタルモノハ其ノ會社ノ全部線路ヲ買收スルカ又ハ會社ノ申請ニ依リ相當ノ處分ヲナシタル上ニアラサレハ之ヲ敷設セス

第十四條　豫定鐵道線路中未タ敷設ニ著手セサルモノニシテ若私設鐵道會社ヨリ敷設ノ許可ヲ願出ル者アルトキハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ許可スルコトアルヘシ

第四章　鐵道會議

第十五條　政府ハ鐵道會議ニ諮詢シテ左ノ事項ヲ施行ス

一　鐵道工事著手ノ順序

一　第十條ノ決定ニ基キ鐵道工事ノ都合ニ依リ北ノ都度募集スヘキ公債金額

第十六條　鐵道會議ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

●豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件

○法律　明治廿六年三月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル第八號

豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第二條山陰及山陽聯絡豫定線路中兵庫縣下姬路生野間鐵道ハ政府ニ於テ適當ナリト認ムルトキハ同法第十四條ノ規定ニ拘ハラス私設鐵道會社ニ其敷設ヲ許可スルコトヲ得

○法律　明治二十七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治廿五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一　新潟縣下直江津ヨリ新潟及新發田三至ル鐵道

一　京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道

一　奈良縣下高田ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道線中五條ヨリ和歌山縣下和歌山ニ至ル鐵道

一　福井縣下敦賀ヨリ石川縣下金澤ヲ經テ富山縣下富山ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ石川縣下七尾ニ至ル鐵道

一　東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道線中千葉縣下佐倉ヨリ銚子ニ至ル鐵道

一　茨城縣水戸ヨリ福島縣下平ヲ經テ宮城縣下岩沼ニ至ル鐵道

一　奈良縣下奈良ヨリ三重縣下上柘植ニ至ル鐵道

一　兵庫縣下姬路ヨリ生野若クハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道線中兵庫縣下笹山及谷川ヨリ京都府福知山ニ至ル鐵道

一　福島縣下福島近傍ヨリ山形縣下米澤及山形秋田縣下秋田青森縣下弘前ヲ經テ青森ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ山形縣酒田ニ至ル鐵道

○法律　明治廿七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一　東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道線ヨリ分岐シテ木更津ニ至ル鐵道

一　福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊本ニ至ル鐵道線中熊本縣下山鹿ヨリ植木ニ至ル鐵道

政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線路ノ全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲ササルトキハ其進捗狀況ヲ以テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲メ相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律　明治廿七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一　新潟縣下新津ヨリ福島縣下若松ヲ經テ白河本宮近傍ニ至ル鐵道

一　兵庫縣下姬路ヨリ生野若クハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道線中兵庫縣下姬路ヨリ生野ヨリ和田山ヲ經テ京都府下綾部ニ至ル鐵道

一　福岡縣下飯塚ヨリ原田ニ至ル鐵道

政府ハ前項鐵道線路一部ノ敷設ヲ私設鐵道會社ニ許可スル場合ニ於テ本線路ノ全部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之カ敷設ヲ爲ササルトキハ其ノ建設實費ヲ以テ本鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ他ノ會社ニ賣渡サシムル爲メ相當ノ條件ヲ附スヘシ（三十年法律第三十四號ヲ以テ追加）

○法律　明治廿九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル第七十二號

豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一　山梨縣下甲府ヨリ靜岡縣下岩淵ニ至ル鐵道

一　東京府下上野ヨリ千葉縣下千葉、佐倉ヲ經テ銚子ニ至ル鐵道ヨリ分岐シテ木更津ニ至ル鐵道線中千葉縣下曾我町ヨリ木更津ニ至ル鐵道

一　京都府下舞鶴ヨリ福井縣下小濱ヲ經テ敦賀ニ至ル鐵道

一　兵庫縣下姬路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道線中兵庫縣下姬路ヨリ笹山ヲ經テ京都府下園部ニ至ル鐵道

一　香川縣下多度津ヨリ愛媛縣下今治ヲ經テ松山ニ至ル鐵道

一　福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分、宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道中大分縣下柳ケ浦ヨリ大分ニ至ル鐵道

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十三號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　宮城縣下石ノ卷ヨリ小午田ヲ經テ山形縣下
船形町ニ至ル鐵道線中宮城縣下石ノ卷ヨリ同
縣下温泉村鍛冶屋澤ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線路ノ全
部ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於
テ之カ敷設ヲ爲サザルトキハ其ノ建設費實費ヲ以
テ前項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ
賣渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十四號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下
鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山
口近傍ニ至ル鐵道線中兵庫縣下和田山ヨリ湯
島ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ兵庫縣下和
田山ヨリ鳥取縣下鳥取ニ至ル豫定鐵道線路ノ全部
ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ
之カ敷設ヲ爲サザルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ
前項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣
渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十五號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下
鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山
口近傍ニ至ル鐵道線中鳥取縣下米子ヨリ島根
縣下今市ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ鳥取縣下米
子ヨリ島根縣下濱田ニ至ル豫定鐵道線路ノ全部ヲ
敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之
カ敷設ヲナサザルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ前
項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡
サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十六號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下
鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山
口近傍ニ至ル鐵道線中鳥取縣下米子ヨリ島根
縣下今市ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ鳥取縣下米
子ヨリ島根縣下濱田ニ至ル豫定鐵道線路ノ全部ヲ
敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ之
カ敷設ヲナサザルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ前
項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣渡
サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十七號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　熊本縣下熊本ヨリ大分縣下大分ニ至ル鐵道
線中熊本縣下熊本ヨリ大津ニ至ル鐵道
一　同鐵道線中大分縣下大分ヨリ竹田ニ至ル鐵
道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ該豫定鐵道
線路ノ全部ノ敷設貫通ヲ妨ケルノ虞ナカラシメン
カ爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十八號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　京都府下舞鶴ヨリ兵庫縣下豐岡、鳥取縣下
鳥取、島根縣下松江、濱田ヲ經テ山口縣下山
口近傍ニ至ル鐵道線中兵庫縣下和田山ヨリ湯
島ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ兵庫縣下和
田山ヨリ鳥取縣下鳥取ニ至ル豫定鐵道線路ノ全部
ヲ敷設スルノ必要ヲ認ムルニ當リ其ノ會社ニ於テ
之カ敷設ヲナサザルトキハ其ノ建設費實費ヲ以テ
前項ノ鐵道ヲ政府ニ買收シ又ハ之ヲ他ノ會社ニ賣
渡サシムル爲相當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治二十九年四月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第七十九號　タル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件
ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎
ニ至ル鐵道線中高知縣下山田野地ヨリ須崎ニ
至ル鐵道
一　香川縣下琴平ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎
ニ至ル鐵道ニ德島縣下德島ヨリ接續スル鐵道
線中德島縣下德島ヨリ川田ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ德島縣下德
島ヨリ高知縣下高知ヲ經テ須崎ニ至ル聯絡線路ノ
全部ノ敷設貫通ヲ妨クルノ虞ナカラシメンカ爲相
當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治三十年三月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タ
第十一號　ル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ
關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　廣島縣下海田市ヨリ吳ニ至ル鐵道

○法律明治三十年三月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タ
第三十二號　ル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ
關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　岐阜縣下多治見ヨリ岐阜ニ至ル鐵道
政府ハ前項ノ許可ヲ與フル場合ニ於テ本線ト中央
線トノ管理ヲ統一スルノ必要ヲ認ムルトキハ其ノ

建設費實費ヲ以テ之ヲ政府ニ買收スル爲メ相
當ノ條件ヲ附スヘシ

○法律明治三十年三月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タ
第三十三號　ル豫定鐵道線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ
關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法豫定鐵道線路
中左ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スル
コトヲ得
一　兵庫縣下姫路ヨリ生野若ハ笹山ヲ經テ京都
府下舞鶴又ハ園部ニ至ル鐵道若ハ兵庫縣下土
山ヨリ京都府下福知山ヲ經テ舞鶴ニ至ル鐵道
線中兵庫縣下國包ヨリ同縣下谷川ニ至ル鐵道
一　鹿島縣下廣島ヨリ島根縣下濱田ニ至ル鐵道
一　福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分宮崎縣下宮
崎ヲ經テ鹿兒島縣下鹿兒島ニ至ル鐵道線中大
分縣下大分ヨリ宮崎縣下宮崎ニ至ル鐵道
一　福岡縣下久留米ヨリ山鹿ヲ經テ熊本縣下熊
本ニ至ル鐵道線中福岡縣下久留米ヨリ山鹿ニ
至ル鐵道

●鐵道敷設中央豫定線比較線路決定ノ件

○法律明治二十七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タ
第六號　ル鐵道比較線路決定ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ
之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第七條中中央
豫定線比較線路ハ左ノ線路ヲ採ル
一　東京府下八王子ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下
諏訪ヲ經テ西筑摩郡ヨリ受知縣下名古屋ニ至
ル鐵道

○法律明治二十七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經
第十二號　タル鐵道比較線路決定ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ
之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第七條第十項
ノ中央豫定比較線路ハ左ノ線路ヲ採ル
一　長野縣下篠ノ井ヨリ松本ヲ經ル鐵道

●北越豫定線比較線路決定

（明治廿七年六月法律第七號）
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道比較線路決定ニ關
スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第七條中北越
豫定比較線路ハ左ノ線路ヲ採ル
一　新潟縣下直江津ヨリ新潟及新發田ニ至ル鐵
道

●近畿豫定線比較線路決定二件

（明治廿七年六月法律第八號）
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道比較線路決定ニ關
スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第七條中近畿
豫定線比較線路ハ左ノ線路ヲ採ル
一　京都府下京都ヨリ舞鶴ニ至ル鐵道

○法律明治廿七年六月　朕帝國議會ノ協贊ヲ經タ
第九號　ル鐵道比較線路決定ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之
ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第七條中近畿
豫定線比較線路ハ左ノ線路ヲ採ル
一　奈良縣下高田ヨリ五條ヲ經テ和歌山縣下和歌
山ニ至ル鐵道

●山陰山陽聯絡比較線路決定

（明治廿七年六月法律第十號）
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道比較線路ニ關スル
法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム
明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第四號鐵道敷
設法第七條中山陰山陽聯絡豫定線比較線路ハ左ノ
線路ヲ採ル
一　兵庫縣下姫路ヨリ鳥取縣下鳥取ヲ經テ境ニ至
ル鐵道

●北海道鐵道敷設法

（明治二十九年五月法律第九十三號）
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道鐵道敷設法ヲ裁
可シ玆ニ之ヲ公布セシム
北海道鐵道敷設法
第一條　政府ハ北海道ニ必要ナル鐵道ヲ完成スル
爲漸次豫定ノ線路ヲ調査シ及敷設ス
第二條　北海道豫定鐵道線路ハ左ノ如シ
一　石狩國旭川ヨリ十勝國十勝太及釧路國厚岸ヲ
經テ北見國網走ニ至ル鐵道
一　十勝國利別ヨリ北見國相ノ内ニ釧路國厚岸ヨ
リ根室國根室ニ至ル鐵道
一　石狩國旭川ヨリ北見國宗谷ニ至ル鐵道
一　石狩國雨龍原野ヨリ天鹽國增毛ニ至ル鐵道
一　天鹽國奈與呂ヨリ北見國網走ニ至ル鐵道
一　後志國小樽ヨリ渡島國兩館ニ至ル鐵道

第三條　北海道鐵道工事ハ實地ノ經畧ニ應シ各線ヲ數區ニ分チ每區ノ工事ヲ樞線事業トス

第四條　北海道鐵道事業ニ要スル費用ハ公債ヲ募集シテ之ニ充ツ

第五條　北海道鐵道公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トス

第六條　北海道鐵道公債ニ關シ本法ニ規定ナキモノハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

第七條　北海道鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金三千三百萬圓ヲ限リ明治三十年度ヨリ工事ノ緩急ト財政ノ都合ヲ圖リ漸次公債ヲ募集ス

第八條　政府ハ鐵道線路ヲ實測シ每區ノ工費豫算ヲ定メ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ

第九條　明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第十四條、第十五條ハ本法ニ適用ス

●北海道鐵道豫定線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件

（明治三十年三月　法律第三十五號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道鐵道豫定線路中私設鐵道會社ニ敷設許可ノ件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法第一條ノ線路ハ私設鐵道會社ニ其ノ敷設ヲ許可スルコトヲ得

一後志國小樽ヨリ渡島國函館ニ至ル鐵道

●鐵道略則

（明治五年五月　第百四十六號布告）

第六十一號布告鐵道略則別紙ノ通改正候條此旨相達候事

但開局日限ノ儀ハ治定ノ上追テ可相達候事

（別紙）

鐵道略則

第一條　何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ルヘシ然ラサレハ決シテ列車ニ乘ル可カス

第二條　手形檢査及渡方ノ事

手形檢査ノ節ハ改テ受ケ取集ノ節ハ渡スヘシ若シ檢査ノ節手形ヲ出サス或ハ取集ノ節手形ヲ渡ササル者ハ更ニ最初發車ノ「ステーション」ニテ旅客ノ乘リ下リ荷物ノ積ミ下ロシヲ爲ス所ヲ云フ）ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ尤途中ヨリ乘來リシ者ニテ其確證判然タル時ハ其乘リタル場所ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ

第三條　途中「ステーション」ニテ乘組非手形ノ事

途中「ステーション」ニテ乘組テハ列車中餘地ノ有無ニ應シテ乘組ムコトヲ得ヘシ若シ其手形ヲ買取リシ旅人數ヲ容レヘキ餘地ナキ時ハ其中ニテ最モ遠キ地ニ赴ク手形所持ノ人丈ケ先ツ乘込ムコトヲ得ヘシ若シ又同里程ノ地ニ赴ク客數人アルトキハ其手形ノ番號ノ順序ヲ以テ乘ルコトヲ得ヘシ

第四條　偽欺ノ者扱方ノ事

何人ニ不限賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セント計リ或ハ遠ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乘ラスシテ更ニ上等ノ車ニ乘リ組又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ增賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遠ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ至リナカラ車ヨリ下リ去ルコトヲ肯セス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃ントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ

第五條　列車運轉中出入禁止ノ事

總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルコト又ハ車內旅客ノ居ルヘキ場所ノ外ニ乘ルコトヲ禁ス

第六條　病者及傳染病ヲ煩フ者ハ乘車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在ラハ見當リ次第鐵道掛ノ者ヨリ車外並ニ鐵道構外ニ退去セシムヘシ

第七條　吸煙並婦人部屋男子出入禁止ノ事

何人ニ限ラス「ステーション」構內吸煙ヲ禁セシ場所並ニ吸煙ヲ禁セシ車內ニテ吸煙スルコトヲ許サス且婦人ノ爲ニ設ケル車及部屋等ニ男子妄リニ立入ルヲ許サス若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛ノ者ノ戒ヲ用ヒサル者ハ車外並ニ鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

第八條　醉人及不行狀人扱方ノ事

何人ニ不限總シテ列車乘組中又ハ「ステーション」並ニ鐵道構內ニテ醉ニ乘シ妄狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀ヲ爲ス者ハ鐵道掛ノ者ヨリ車外及鐵道構外ヘ直ニ退去セシムヘシ

第九條　鐵道ニ屬スル物品ヲ毀損スル時ノ事

何人ニ不限濫リニ「ステーション」其他鐵道構內ニ標識揭示セル掛附等ヲ剝シ或ハ破リ或ハ除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ冬車ノ踏器械倉庫建家牆柱其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ都テ法ニ隨テ處置スヘシ

第十條　機關車等ヘ乘込ヲ禁スル事

機關方並火夫ノ外ハ其筋ノ許ヲ得スシテ機關車又ハ炭水車ニ乘リ或ハ乘ラント爲ス可ラス且車長及車掛ノ者ノ外其筋ノ許シヲ得スシテ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乘ラント爲ス可ラス若此禁ヲ犯シ鐵道掛リノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ直チニ其場ヨリ退去セシムヘシ

第十一條　鐵道地所ヘ妄リニ立入者取扱方ノ事

何人ニ不限「ステーション」又ハ鐵道構內ヘ妄リニ立入者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外ヘ立去ラシムヘシ

第十二條　旅客ノ荷物紛失毀損取扱方ノ事

旅客手廻リ荷物其外所持ノ品タリトモ總テ之カ爲ニ別段ニ賃金ヲ拂ヒ其受取證書ヲ取置カサレハ若シ紛失毀損等アルトキハ政府ニ於テ關係セサルヘシタトヒ賃金ヲ拂ヒ證書ヲ取置トモ其毀損紛失等ヲ償フニハ只旅客自用衣服ノミニ止リ日償金モ五十圓ニ過ルコトナシ

第十三條　高金及大切ノ物品紛失毀損ニ關不關アル事

金銀紙貨幣郵便切手爲替會社通用券爲換手形約定證書金銀諸拂證書地所建家沽券諸給圖書齒古器金銀玉石鍍金及諸彫繪細工物時計類其餘表類或ハ玩偏物ノ裝飾ニ混作ノ品類及硝子器類陶器漆器酒器種蘭耕布生熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品拆並價高等ヲ明白ニ其掛ヘ申立テ增賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等請合シ分ノ外ハ總テ政府ニ於テ之ヲ償ハス

第十四條　牛馬獸類運送ノ事

牛馬及其他ノ獸類ヲ運送スルニ其持主或ハ送ヲ人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛ヘ申出相當ノ增賃金ヲ拂ヒ請合證書ヲ取置クヘシ若シ增賃金ヲ拂ハス請合ヲ爲ササル分ハ如何程品價ノ獸類紛失損害アルトモ牛一匹金二十圓以上馬一疋或ハ乳牛一疋ニ金五十圓以上羊或ハ豚一疋ニ付金五圓以上ヲ政府ニ於テ償フコトナシ

第十五條　砲弾ヲ禁スル事

何人ニ不限車內ハ勿論鐵道線及其他構內ニテ砲發スルヲ禁ス

第十六條　爆發質ル危害物運輸ヲ禁スル事

鐵道線ヨリ道テ公告スルマテハ火藥及ヒ「ヒトローリナム」「クロシン」「ナイル」「トルペンタイ」（石炭油等ヲ云）硝性非ニ爆發質燃燒質等ノ物品ハ運輸セサルヘシ

第十七條　荷物目錄ヲ渡スヘキ事

運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者ヘ引渡シ又ハ請取ノ度每ニハ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品拆數量及姓名ヲ記シテ掛リノ者ヘ差出スヘシ

第十八條　物品非常類損害賠償方定限ノ事

鐵道ニテ運送スル物品並常類紛失損害アリトモ鐵道掛リノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非レハ政府ニ於テ之ヲ償フコトナシ

第十九條　荷物運送賃金ノ事

何人ニ不限荷物運送賃ノ催促ヲ受テ尙拂ハサル時ハ其荷物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若シ又其荷物既ニ他所ニ運送セシ時ハ其後同人附屬ノ荷物鐵道掛リヘ送來ルコトアルトキハ之ヲ留置キ同人ヘ告知ラセタル上ニテ滯金高程ノ品ヲ入札公賣シ其滯金ト諸入費トヲ引取殘金殘品ヲ同人ヘ返スヘシ又時宜ニヨリ右ノ取計ヲ爲サス法官ニ立ルヿモアルヘシ

第二十條　規則ハサル者ノ事

何人ニ不限諸事前條ノ規則ニ隨ハスンハ乘車及ヒ荷物ノ運送ヲ許ササルヘシ

第二十一條　規則等ノ變革布達ノ事

此規則中變革及加除アルトキハ其事情ニ隨テ其時宜ニ從ヒ布達スヘシ

第二十二條　荷物運送引請方ノ事

諸荷物ノ運送ヲ引請ルコトハ列車中餘地ノ有無ニ應スヘシ

第二十三條　此規則ヲ施行スル方ノ事

ニ訴ヘ犯罪人罰シ方等ノ裁判ヲ乞フ手順ハ鐵道頭或ハ鐵道支配人ノ間ニテ其取扱アルヘシ

第二十四條　旅客並荷物ノ運賃ハ時宜ニ隨ヒ變革アルト雖モ其變革每ニハ二週日前ニ告達スヘシ

尤鐵道頭鐵道支配人及運輸頭取ノ間ニ於テ前條ノ如キ告達ヲ臨時ニ常例ヨリ下等ノ運賃ヲ以テ別ニ列車ヲ仕立ルコトモアルヘシ

第二十五條　此規則ハ來ル五月七日ヨリ施行スヘシ

右之條々此度確定候事

●鐵道犯罪罰例

（明治六年三月　第百一號布告）

壬申第百四十七號布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相成候條此旨相達候事

（別紙）

鐵道犯罪罰例

第一條　鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關カル事務取扱中醉ニ乘シ無狀ヲ現ハスニ於テハ二十五圓以內ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニヨリ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱アルトキハ其事情ニ依リ五百圓以內ノ罰金又ハ三月以內ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス（明治十二年第十二號布告ヲ以テ禁錮ヲ禁獄ト改ム）

第二條　規則第四條ニ記スル處ノ不法ヲ爲ス者ハ二十五圓以內ノ罰金或ハ三十日以內ノ禁獄ニ處ス（明治十二年第十二號布告ヲ以テ改正）

第三條　規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以內ノ罰金ニ處ス

第四條　規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以內ノ罰金ニ處ス

第五條　規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ十圓以內ノ罰金ニ處ス

第六條　規則第八條ニ記セル所行ヲ爲ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス(明治十二年第十二號布告ヲ以テ禁錮ヲ禁獄ト改ム)

第七條　規則第九條ニ記セル所ノ不法ヲ爲ス者ハ三十圓以内ノ罰金又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス(同上)

第八條　規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第九條　規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ貳拾五圓以内ノ罰金或ハ三拾日以内ノ禁獄ニ處ス(同上布告ヲ以テ改正)

第十條　規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第十一條　規則第十七條ニ記スル處ノ賃荷物品等其外ヲ秘ラニ出サス或ハ故ラニ欺僞ノ品物書ヲ出ス者ハ三箇月以内ノ懲役又ハ禁獄或ハ其品物巻頓(千七百斤ヲ云)毎ニ貳拾五圓以内ノ罰金ニ處ス巻頓以下ハ拾圓以内尤一罰ノ贖金高五百圓ニ過キス(同上)

第十二條　鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照ラシ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシ但シ償金ノ追徴モ鐵道察ヨリ法官ヘ乞フトキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

●鐵道罫則、鐵道犯罪罰例ヲ私設鐵道ニ適用スルノ件（明治十六年七月第二十三號布告）

明治五年(五月)第百四十六號布告鐵道略則及同六年三月第百一號布告鐵道犯罪罰例ハ私設鐵道ニモ通用ス

右　奉勅旨布告候事

●火薬類鐵道運送條規（四月工部省明治十八年告示第十四號）

明治五年(五月)第百四十六號公布鐵道略則第十六條ニ依リ火薬類鐵道運送條規左ノ通相定ム但此條規ハ私設鐵道ニモ適用スルモノトス

右告示候事

火薬類鐵道運送條規

第一條　火薬類ハ鐵道局ノ都合ヲ以テ之ヲ運送スルコトアルヘシ

第二條　火薬類ハ別仕立列車或ハ旅客車ヲ連結セサル普通ノ貨物列車ヲ以テ運送スヘシ但兵員乘車ノ時其携帯スル彈藥ハ此限ニアラス

第三條　火薬類ヲ運送スルノ賃金ハ百斤ニ付一哩金一錢二厘ト定ム但三千五百斤以下及二十哩以内ト雖モ猶本數本哩ニ當ル金額即チ金八圓四拾錢ヲ徴スヘシ

第四條　火薬類ヲ運送セントスル者ハ其名稱種類量數及送受人ノ氏名住所ヲ記載シタル書面ヲ發車前十八時間以前ニ鐵道局ニ差出シ其承諾ノ證ヲ領受スヘシ其證ナキトキハ之ヲ運送セサルモノトス但非常急劇ノ際ハ此時間ノ限ニアラス

第五條　火薬類ノ受渡ヲ爲スハ鐵道局員ニ限ルヘシ且其時間ハ日出後日沒前ニシテ鐵道局ニ於テ特ニ指定スル日時ヲ限ルヘシ

第六條　火薬類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ爲ストキハ其他箱等ハ成ルヘク互ニ手渡ヲ爲シ決シテ地上ニ投下シ又ハ轉轉セシムヘカラス若シ轉轉セサルヲ得サルトキハ必ス革布木綿等ヲ以テ其經過スヘキ地上ヲ敷フヘシ

第七條　火薬類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ爲ス者ハ鋼鐵或ハ釘ヲ附シタル靴類ヲ穿チ又ハ摺附木等ノ發火質アル器具ヲ携ヘ又ハ吸烟スルヲ許サス

第八條　火薬類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ始ムルトキハ之ヲ終ルマテ少時間ト雖モ猶豫スヘカラス又其事ニ預ラサル他人ノ其場ニ近クヲ防クヘシ

第九條　火薬類停車場若クハ鐵道ノ倉庫ニ到着シタルトキハ六時間以内ニ其受取方ヲ爲スヘシ此時間ヲ過ツレハ一時間毎ニ一頓ニ付金二圓ノ運滯料ヲ徴スヘシ

第十條　鐵道局ハ火薬類ノ受渡庫入運送荷揚荷積ノ爲メ火薬類ニ生シタル損害并ニ之ニ原因シテ他ニ及ヒタル損害ハ勿論其他何等ノ事アルモ其責ニ任セサルモノトス但鐵道局員ノ過失ニ因テ起ルモノハ此限ニアラス

第十一條　火薬類ノ運送ヲ委托スル者ハ前ニ列記シタル條規ヲ承認シタル證トシテ鐵道局ヨリ下付シタル條規寫書ノ端末ニ署名捺印スヘシ

●幌内鐵道火薬類運送條規（明治十九年一月農商務省告示第二號）

當省所轄幌内鐵道火薬類運送條規左ノ通相定ム此旨告示ス

幌内鐵道火薬類運送條規

第一條　火薬類ヲ運送セントスル者ハ其名稱種類數量及受取人ノ氏名住所ヲ記載シタル書面ヲ發車四十八時間以前ニ積出スヘキ停車場ニ差出シ承認ノ證ヲ領受スヘシ

第二條　火薬類ノ積送ノ停車場ニ到着シタル時ヨリ六時間以内ニ受取ヘシ此時限ヲ過ルトキハ一時間毎ニ目方拾貳貫目ニ付金拾錢ノ割ヲ以テ運滯料ヲ徴收スヘシ

第三條　火薬類受渡ヲ爲スハ停車場吏員ニ限ルヘシ其受渡時間ハ日出後日沒前ニシテ特ニ指定スル時日ニ限ルモノトス但時機ニ依リ日沒後ニ渡方ヲ爲スコトアルヘシ

第四條　非常事變ニ際シ火薬類受渡運送急ヲ要スルトキハ其請求ニ依リ第一條第三條ノ時限ニ拘ハラス便宜處分スヘシ

第五條　火薬類運送ハ貨物列車ヲ以テシ若シ貨物列車ヲ差立サルトキハ通常列車ニ搭載スルコトアルヘシ但陸海軍人携帯スル彈藥ハ此限ニアラス

第六條　火薬類受渡庫入等ヲ爲ストキハ互ニ手渡ヲ爲シ決テ地上ニ投下シ又ハ轉轉スヘカラス若シ轉轉セサルヲ得サルトキハ經過スヘキ地上ニ必ス革布木綿等ノ類ヲ敷クヘシ

第七條　火薬類荷造成規ニ抵觸スルモノハ一切運送セサルモノトス

●神戸鐵道棧橋繫船規約（明治十八年七月工部省告示第二十四號）

神戸鐵道棧橋ニ諸船ヲ繫泊セントスルモノハ左ノ鐵道棧橋繫船規約ニ從フヘシ

鐵道棧橋繫船規約

第一條　凡船舶ヲ鐵道棧橋及錨標ニ繫泊セントスルトキハ船長或ハ其代理者ヨリ躬メ其旨ヲ神戸鐵道局輸送長或ハ(時宜ニ依リ)其代理官ニ告ケ免狀ヲ受クヘシ

第二條　凡船舶ハ棧橋ニ於テ繫泊シ又ハ暫停スル爲メ必要ナル少時間ヲ除クノ外錨標ニ繫泊スル許サス又風位天候ノ如何ヲ論セス總テ棧橋ニ來リ又ハ之ヨリ去ル船舶ノ妨害ヲ爲ス如キ接近ノ位置ニ繫泊スルヲ許サス

第三條　棧橋ニ繫泊スル船舶若シ之ヨリ離ルヘキコトヲ命セラレタルトキハ速ニ錨標ニ移ルヘシ其他ハ棧橋ニ繫泊スヘカラス

第四條　錨鎖其他繫泊ノ用具ハ其爲メ設タル方法ニ據ルニ非レハ棧橋ノ如何ナル部分ニモ附着スヘカラス

但船舶繫留ノ爲メ錨標杭等充分ノ備アレトモ若シ船體ノ大サ或ハ艌造ノ形特別ナル船舶ニシテ別段ニ繫泊ノ器具ヲ要シ其旨ヲ報知スルトキハ鐵道局ニ於テ之ヲ設置スルコトアルヘシ

第五條　日曜日休暇日及暴風雨ノ日ヲ除キ平日業務時間ハ日出ニ始リ日沒ヲ以テ終ルモノトス

但神戸税關長ノ許可ヲ受クタル者ニ限リ特別ニ夜業ヲ許スコトアルヘシ

第六條　門戸ハ毎夜一時ニ閉ヘシ其後ハ何人タリトモ出入スルヲ許サス

第七條　縱令如何樣ノ事情アルトモ棧橋及鐵道構内ニテ濫酒滿等ヲ煮或ハ一切ノ火ヲ焚クヲ許サス

第八條　火薬ナイトロー、グリセリン石脳諸酸其他危險燃發質ノ物品ハ段別ノ許可ヲ受クルニ非レハ鐵道構内ニ荷揚スルヲ許サス總テ右等ノ物品ヲ積載セル船舶ハ棧橋或ハ標錨ニ來着ノ前ニ其由ヲ報告スヘシ

第九條　灰輕荷石泥ノ類別ナク其他何品ヲ問ハス廢物ヲ船舶ヨリ投棄シ或ハ鐵道構内ニ荷揚スヘカラス而シテ棧橋或ハ錨柱ニテ無據輕荷ヲ積入ルル船舶ノ爲メ輕荷受ヲ備置キタレハ能ク注意シテ之ヲ用ユヘシ

第十條　棧橋ニテ荷揚スル船舶ハ自己ノ滑車ヲ用ユヘシ(格別ノ約束ニ依リ棧橋ノ千斤力ヲ用ユルコトヲ得而シテ諸荷物ノ損害雜費ハ船舶ノ負擔滑車ヲ離ルマテ其船舶ノ擔當タルヘシ

第十一條　棧橋ニ繫泊セル船舶ノ長或ハ其代理者ハ神戸税關規則ヲ嚴守スヘキヲ以テ若シ之ニ違犯シタルトキハ直ニ其船舶ヲシテ棧橋ヲ去ラシムヘシ

第十二條　棧橋或ハ錨標ヲ用ユル船舶ノ長或ハ其代理者ハ前ニ列記シタル規約ヲ遵守スヘシ其承認ノ證トシテ規約寫書下附ノ時受書ニ調印スヘシ

明治十八年七月　鐵道局

●幌内鐵道手宮棧橋繫船規約（明治十八年七月農商務省告示第十五號）

當省所轄札幌縣下幌内鐵道手宮棧橋ハ幌内石炭船積ノ爲メ架設セシモノニ候處尚ホ一般ノ便利ヲ謀リ各船ヲ繫泊シ貨物積卸ヲ許可スル時ハ左ノ規約ニ從フヘシ

幌内鐵道手宮棧橋繫船規約

第一條　凡ソ船舶ヲ棧橋及錨標ニ繫泊セントスルトキハ船長或ハ其代理者ヨリ躬メ其旨ヲ手宮停車場ヘ申出許可ヲ受クヘシ

第二條　凡ソ船舶ハ棧橋ニ於テ繫泊シ又ハ暫停スル爲メ必要ナル少時間ヲ除クノ外錨標ニ繫泊スルヲ許サス又風位天候ノ如何ヲ論セス總テ棧橋ニ來リ又ハ之ヨリ去ル船舶ノ妨害ヲ爲ス如キ接近ノ位置ニ繫泊スルヲ許サス

第三條　棧橋ニ繫泊スル船舶ハ錨鎖其他何品ヲ問ハス廢物ヲ船舶ヨリ投棄シ或ハ鐵道構内ニ荷揚スヘカラス

コトヲ命セラレタルトキハ速ニ錨標ニ移ルヘシ
再ビ許可ヲ受ルマテハ棧橋ニ繫泊スヘカラス但此場合ニ於テハ棧橋附屬ノ錨標ニ繫留セス直ニ去テ他船ノ棧橋ニ來去スルニ支障ナキ所ニ投錨スヘシ

第四條　鐵鎖綱繩其他繫泊ノ用具其爲メ設ケタル方法ニ據ルニ非レハ棧橋ハ如何ナル部分ニモ附着スヘカラス但石炭積取船ノ外ハ棧橋ノ橋端ヨリ四百尺ノ間ニ繫船スヘカラス

第五條　日曜日休暇日及暴風雨ノ日ヲ除キ平日業務時間ハ日出ニ始リ日沒ヲ以テ終ルモノトス但小樽船改所ノ許可ヲ受ケタル者ニ限リ特別ニ夜業ヲ許スコトアルヘシ

第六條　門月ハ日沒ヨリ一時ヲ經テ閉ヘシ其後ハ何人タリトモ出入スルヲ許サス

第七條　棧橋ノ事情アルトモ棧橋ニテ濫酒滿等ヲ煮或ハ一切ノ火ヲ焚クヲ許サス

第八條　火藥ナイトロー、グリセリン石膏酸其他危險爆發質ノ物品ハ別段ノ許可ヲ受クルニ非レハ棧橋ニ荷揚スルヲ許サス總テ右等ノ物品ヲ積載スル船舶ハ棧橋或ハ錨標ニ來着ノ前ニ其由ヲ報告スヘシ

第九條　灰燼荷（石泥ノ類ヲ含ム）其他何品ヲ問ハス腐物ヲ船舶ヨリ投棄シ或ハ棧橋ニ荷揚スヘカラス

第十條　棧橋ニテ荷揚スル船舶ハ自己ノ滑車ヲ用ユヘシ

第十一條　棧橋ヨリ積卸貨物ハ手宮停車場ニ於テ定ムル所ノ棧橋使用料ヲ徵收スヘシ但棧橋ヨリ手宮停車場間ノ運送ハ手宮停車場ニ於テ取扱フモノトス

第十二條　棧橋及ヒ錨標ニ繫泊スル船ノ爲メニ棧橋又ハ錨標ヲ毀損セシ時ハ其修繕費ヲ償ハシムヘシ但天災非常ニ因リ毀損セシ時ハ此限ニアラス

第十三條　棧橋或ハ錨標ヲ用ユル船舶ノ長或ハ其代理者ハ前ニ列記シタル規約ヲ遵守スヘシ其承認ノ證トシテ規約寫書下付ノ時受書ニ調印スヘシ

○私設鐵道條例（明治二十年五月勅令第十二號）

朕私設鐵道條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

私設鐵道條例

第一條　旅客及荷物運輸營業ノ目的ヲ以テ鐵道ヲ布設セントスル者ハ發起人五人以上結合シ鐵道會社創立願書ニ起業目論見書ヲ添ヘ本社ヲ設置セントスル地ノ地方廳ヲ經由シテ政府ニ差出スヘシ

馬車鐵道ハ本條例定ムル所ノ限ニアラス

第二條　起業目論見書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

第一　社名及本社所在地

第二　線路ノ兩端及其經過スヘキ地名但略圖ヲ添フヘシ

第三　資本ノ總額及株株或ハ一株ノ金額

第四　鐵道布設ノ費用及運輸營業ノ收支概算

第五　發起人ノ氏名住所及發起人各自ノ引受クヘキ株數但發起人總員ノ引受クヘキ株數ハ總株數十分ノ二以上タルヘシ

第三條　政府ニ於テ第一條ノ願書及目論見書ヲ査閱シ起業ノ大體ニ不都合ナキト認ムルトキハ假免許狀ヲ下附シ本社ヲ設立セントスル地ノ地方廳ニ令シ發起人ヲシテ線路圖面工事方法書工費概算書及會社ノ定款ヲ調製シ之ヲ差出サシムヘシ既設ノ鐵道ニ妨害ヲ生スルノ虞アリ又ハ其地方ノ狀況鐵道ノ布設ヲ要スト認ムルトキハ願書ヲ却下スヘシ

第四條　政府ニ於テ前條ノ圖面書類ヲ審査シ妥當ナリト認ムルトキハ成可ク經テ會社設立及鐵道布設ノ免許狀ヲ下附スヘシ

第五條　發起人前條ノ免許狀ヲ下付セラレタル後ニアラサレハ社名ヲ以テ株金ヲ募集シ鐵道布設ノ工事ニ著手スルコトヲ得ス

第六條　會社ハ其登記ノ日ヨリ六箇月以内ニ鐵道布設工事ニ著手シ免許狀ニ記載シタル限定期限内ニ竣功スヘシ若シ其期限内ニ竣功シ難キ事由アルトキハ少クトモ二箇月以前本社所在ノ地方廳ヲ經由シテ政府ニ具申シ延期ヲ請フヘシ但其延期ハ限定期限ノ半ヲ超ユルコトヲ得ス（三十年法律第二十三號ヲ以テ改正）

第七條　軌道ノ幅員ハ特許ヲ得タル者ヲ除クノ外總テ三呎六吋トス

第八條　左ニ記載スルモノヲ以テ鐵道用地トス

第一　線路ニ當ル敷地但其幅員ハ堤堰切取架橋等ノ工事ノ必要ニ應シテ定ムルモノトス

第二　停車場及之ニ附屬スル車庫貨物庫等ノ建築用ニ供スル土地

第三　前項ノ構内ニ常住ヲ要スル驛長車長及機關方等ノ家宅番人小屋等ノ建築用ニ供スル土地

第四　鐵道布設又ハ運輸ニ要スル車輛器具ヲ製作修繕スル器械場及同上ノ資材器具ヲ貯藏スル倉庫ノ建築用ニ供スル線路ニ沿ヒタル土地

第九條　鐵道布設ノ爲メ舊來ノ道路橋梁溝渠運河等ヲ變換シ又ハ一時之ヲ移設セントスルトキハ所管官廳ノ許可ヲ受クヘシ但其費用ハ會社ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第十條　線路ノ道路ヲ横斷スル場所ニハ橋梁ヲ架設シ若クハ踏切道ヲ設クヘシ其他危險防止ノ爲メ必要ノ場所ニハ牆柵門戸堤防ヲ設ケ若クハ番人ヲ配付スル等充分ノ警備ヲナスヘシ

第十一條　線路ノ全部若クハ一部ノ工事竣功シ旅客及貨物ノ運輸ヲ開業セントスルトキハ鐵道局長官ニ屆出ヘシ

第十二條　鐵道局長官ハ前條ノ屆出ニ依リ檢査員ヲ派遣シテ工事方法書ニ照シ軌道橋梁車輛建物等ヲ監査セシメ完全ナリト認ムルトキハ開業免許狀ヲ下付スヘシ若シ不完全ナリト認ムルトキハ其改築修理ヲ命スヘシ但此場合ニ於テハ監査員ノ復命書ヲ會社ニ示スヘシ

會社ハ前項ノ開業免許狀ヲ得スシテ運輸ノ業ヲ開クコトヲ得ス

第十三條　鐵道局長官ハ鐵道布設中臨時檢査員ヲ派遣シテ工事ヲ監査セシメ又運輸開業ノ後ニ於テモ檢査員ヲ派遣シテ軌道橋梁車輛建物等並運輸上ノ實況ヲ監査セシメ危險ナリト認ムルトキハ其改築修理ヲ命スヘシ但此場合ニ於テハ檢査員ノ復命書ヲ會社ニ示スヘシ

第十四條　第十二條第十三條ノ改築修理ヲナシタルトキハ更ニ檢査ヲ受クヘシ

第十五條　官有ノ土地ニシテ鐵道用地ニ必要ナルモノ及第九條ノ土地ハ相當代價ヲ以テ之ヲ拂下ケ其民有ニ係ルモノハ公用土地買上規則ニ據リ買上ケ會社ニ拂下クヘシ但其土地ニ建物アルトキハ本條ニ準シテ之ヲ處分スヘシ

第十六條　會社ニ於テ鐵道布設ヲ止メ又ハ線路ノ變更ニ依リ不用トナリタル鐵道用地ニシテ最初公用土地買上規則ニ據テ買上ラレタルモノハ原所有者ニ於テ原價ヲ以テ之ヲ買戻スコトヲ得

會社ハ前項ノ土地不用トナリタル旨ヲ原所有者ニ通知スヘシ若シ原所有者ニ於テ三箇月以内ニ之ヲ買戻ササルトキハ其權利ヲ失フモノトス

第十七條　政府ハ鐵道用地内ニ於テ線路ニ沿ヒ電線ヲ架設スルコトヲ得又會社ハ其架柱ノ一部ヲ使用シ鐵道用ノ電線ヲ架スルコトヲ得但其一部ニ對スル費用ヲ支辨スヘシ

第十八條　會社ハ鐵道用地及停車場建物ノ一部ヲ無料ニテ郵便及ヒ電信ノ用ニ供スヘシ但政府ニ於テ建物ノ改造ヲ要シ又ハ用地ノ買上ヲナストキハ其費用ヲ支辨スヘシ

第十九條　明治十五年第五十九號布告郵便條例ニ依リ郵便物ト稱スルモノ及其運送ニ關スル入員ノ運賃ハ左ニ記載スル割合ヲ以テ運信省ト會社ト協メ之ヲ約定スヘシ

第一　下等旅客二十人ノ坐位ニ當ル積量

一哩ニ付金一錢五厘以内

第二　一車（四噸積）貸切

一哩ニ付金五錢以内

但車室ヲ構造シ又ハ之ヲ改造セシメタルトキハ運信省ヨリ其費用ヲ支辨スヘシ

第二十條　鐵道事務ニ關シテ往復スル官吏ハ常傭切手ヲ帶ルニテ乘車セシムヘシ但其官吏ハ常傭切手ヲ帶ル者ニ限ル

第二十一條　公務ヲ以テ往復スル陸海軍軍人軍屬及警察官吏又ハ軍馬銃砲彈藥糧食被服隊具工廠兵器具天幕等ハ總テ半價ヲ以テ輸送スヘシ但其公務タルコトヲ證スヘキ通券ヲ帶ル者ニ限ル

第二十二條　囚徒及其護送官吏ハ半價ヲ以テ乘車セシムヘシ

第二十三條　臨時若クハ事變ニ際シテハ徵發令ノ定ムル所ニ從ヒ鐵道ヲ使用セシムヘシ平時ト雖モ至急ニ兵隊ノ派遣ヲ要スル場合ニ於テハ當該官廳ノ命ニ從ヒ速ニ之ヲ輸送スヘシ但其運賃ハ第二十一條ノ例ニ依ル

第二十四條　陸海軍ニ於テ軍事上必要ノ爲メ車輛ニ改造ヲ加ヘ又ハ新設置ヲ施シ或ハ軍用器具ノ製造ヲ命シ其費用ヲ支辨スルトキハ會社ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十五條　鐵道局長官ハ公衆ノ安全ノ爲メ官有鐵道ニ實施スル事物ハ會社ニ命シ之ヲ施設セシムルコトヲ得

第二十六條　政府又ハ政府ノ許可ヲ得タル者ニ於テ會社ノ鐵道線路ニ接續シ若クハ之ヲ横斷シテ鐵道ヲ布設シ又ハ會社ノ鐵道線路ニ接近シ若クハ之ヲ横斷シテ道路橋梁溝渠運河ヲ設クルトキハ會社ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十七條　官設鐵道ニ施行スル規則ハ私設鐵道モ亦之ヲ適用スヘシ

第二十八條　會社ニ於テ工事ノ方法又ハ會社ノ定款ヲ變更セントスルトキハ本社所在ノ地方廳ヲ經由シテ政府ニ具申シ認可ヲ受クヘシ

第二十九條　旅客及貨物ノ運賃額又ハ運輸規程ヲ定メ若クハ之ヲ變更セントスルトキハ運信大臣ノ認可ヲ受クヘシ但下等旅客運賃額ハ一哩ニ付金一錢五厘ノ割合ヲ超過スルコトヲ得ス又其砲圍内ニ於テ運賃額ヲ增加スル場合ニ於テハ少クトモ二週日前ニ之ヲ公示スヘシ

前項ノ旅客運賃額ヲ算定スルニ當リ一人ニ對スル最低額ヲ金三錢マテニ定ムルコトヲ得

本條例ニ依リ運賃ヲ半減スルトキ及哩數ニ對シテ運賃額ヲ定ムルトキハ厘位以下端數ヲ生スルトキハ之ヲ錢位ニ切上クルコトヲ得（三十年法律第

二十四號ヲ以テ改正）

第三十條　列車發着時間及度數ヲ定メ又ハ之ヲ變更スルトキハ鐵道局長官ニ報告スヘシ

第三十一條　會社ハ毎年度毎ニ營業ノ報告書ヲ調製シ四十日以内ニ鐵道局長官ニ差出スヘシ

第三十二條　會社ハ其財産ノ全部若クハ一部ヲ抵當トシテ負債ヲナスコトヲ得但其額ハ株主ヨリ拂込ミタル資本金額十分ノ五ヲ超過スルコトヲ得ス

毎勘定季中ニ支拂フヘキ負債ノ元利金ヲ完償シタル後ニアラサレハ株主ニ純益金ノ配當ヲナスコトヲ得ス

第三十三條　會社ノ勘定ヲ分ツテ左ノ二種トス

第一　資本勘定　軌道車輛營横停車場土地建築物等營業上收益アルヘキ物件ノ創設ニ係ル出納

第二　收益勘定　前項物件ノ維持保存ニ要スル費用及營業上ノ出納

第三十四條　私設鐵道ノ官設鐵道ニ接續スル場合ニ於テ交互運輸ノ手續及賃金ノ割合等ハ鐵道局長官之ヲ定ムヘシ

二箇以上ノ私設鐵道接續スル場合ニ於テ交互運輸ノ手續及賃金ノ割合等ニ係リ雙方ノ聯協ハサルトキハ鐵道局長官ノ裁定ヲ請フヘシ

前項ノ場合ニ於テ鐵道局長官ノ裁定ハ終局トス

第三十五條　政府ハ免許狀下付ノ日ヨリ滿二十五箇年ノ後特ニ營業期限ヲ定メタルモノハ其滿期後ニ於テ鐵道及附屬物件ヲ買上ルノ權アルモノトス

第三十六條　前條ニ依リ鐵道及附屬物件ヲ買上ルトキハ前五箇年間ノ株券價格ヲ平均シ之ヲ以テ買上價格ト定ムヘシ

第三十七條　會社ハ其登記ノ日ヨリ六箇月以内ニ鐵道布設工事ニ著手セス又ハ豫定期限及延期内ニ竣功セサルトキハ免許狀ノ返納ヲ命スヘシ但事宜ニ由リ其既設ノ鐵道及附屬物件ヲ公賣ニ附シ其買受者ヲシテ之ヲ竣功セシムルコトアルヘシ（三十年法律第二十三號ヲ以テ改正）

第三十八條　旅客及貨物輸送ノ際社員ノ疎漏倨慢又ハ故意ニ依リ損害ヲ生シタルトキハ會社其賠償ノ責ニ任スヘシ

第三十九條　第五條ノ免許狀ヲ受ケシテ社名ヲ以テ株金ヲ募集シ及鐵道布設工事ニ著手シタルトキハ第三條ノ假免狀ヲ沒收シ第十二條ノ免許狀ヲ受ケス又ハ第十二條第十三條ノ改築修理ヲナサスシテ營業ヲナシタルトキハ鐵道局長官ハ之ヲ停止スヘシ但其營業中ノ收入金ハ之ヲ沒收スヘシ

第四十條　鐵道運輸關業後會社ニ於テ此條例及會社定款ニ違背シ又ハ鐵道ノ正當ナル使用ヲ妨害シタルトキハ政府ハ役員ヲ改撰セシメ又ハ鐵道局ヲシテ運輸ノ業ヲ繼續セシムルヘシ但鐵道局ヲシテ運輸ノ業ヲ繼續セシムル場合ニ於テモ其營業上ノ損益ハ仍ホ會社ニ屬スヘキモノトス

第四十一條　本條例ノ細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

●私設鐵道線路圖面工事方法書ニ關スル細則

工費豫算書ニ關スル細則

（明治三十年十二月逓信省令第三十五號）

明治二十九年五月逓信省令第九號私設鐵道條例第二條ニ列記スル線路圖面工事方法書并工費豫算書ニ關スル細則左ノ通改定ス

第一條　線路圖面ハ左ノ諸圖トス

一　實測平圖二種（電氣鐵道ニ付テハ各種二通ツツヲ要ス）

一種ハ縮尺一吋六鎖、一種（一吋三十鎖トシ線路ノ左右五鎖以内ニアル建物、田野等ヲ詳ニシ其他市街、村落、道路、山川及其ノ他ノ地形ヲ明ニシ郡市、町村ノ境界及磁針力位ヲ示スヘシ）鐵道中心線ハ赤色ヲ以テ彩リ距離ハ起點ヨリ一哩毎ニ記シ更ニ一哩ノ四分ノ一毎ニ之ヲ細刻シ曲線ハ其ノ直線ト接續ノ點、風向角度及半徑ヲ記シ停車場ノ位置、名稱並ニ中心哩程並ニ橋梁及隧道ノ位置ヲ示シ又道路、河川等ノ位置變換ヲ要スルモノハ變換ノ要點ヲ詳記スヘシ若シ他ノ鐵道線路ト連絡スルカ或ハ之ヲ横斷スル處アレハ該線路ノ前後各半哩間ノ中心線ヲ示スヘシ

電氣鐵道ニ付テハ發電所、變壓所、配電所、電氣線路、電柱、埋線及埋線試驗口ノ位置、埋線ノ深サ、電氣線路ノ經過地名及近傍ノ町村名電柱ノ番號、道路ノ幅員、電柱ノ道路ヘ出幅及其ノ最近地ノ番地、他人ニ屬スル電燈線、電力線其ノ他電氣鐵道用電線ト交叉又ハ接近スル箇所、電氣線路ヨリ凡ソ一町以内ノ區域ニ在ル電信線、電話線其ノ他電氣信號線等ノ位置並ニ軌道ヨリ凡ソ二町以内ノ區域ニ在ル地下埋設ノ金屬線、金屬管其ノ他金屬體及發電機ノ一極ヲ接地スル點ノ位置等明瞭ナル凡例ヲ掲ケ記入スルヲ要ス

二　實測縱斷面圖二種（電氣鐵道ニ付テハ各種二通ツツヲ要ス）

縮尺ノ長サハ平面圖ニ同一ニシテ高サハ一

種ハ一吋六十尺、一種ハ一吋百五十尺トシ中心線地面ノ高底（黑色）線路基面ノ高低（赤色）築堤ノ高サ（綠色）切取ノ深サ（赤色）隧道ノ長サ（赤色）橋梁渡線ノ延長、桁ノ種類及箇數、停車場ノ名稱、中心哩程及其ノ兩端區域等ヲ詳ニシ且ツ圖外ニ直線及曲線、圖表ヲ示スヘシ距離、凡テ平面圖ト同一ニ記シ高サハ一吋六鎖ノ圖ハ二鎖毎ニ一吋三十鎖ノ圖ハ十鎖毎ニ尺ヲ以テ記シ又線路ノ勾配及經過地ノ名稱ヲ記入スヘシ

河川橫斷ノ場所ニ於テハ其ノ平水位並ニ最高洪水位ヲ記シ又線路經過地中洪水ノ氾濫スル箇所ハ其ノ高サヲ示スヘシ

道路又ハ他ノ鐵道ヲ橫斷スル所アレハ之ヲ詳記シ若シ該道路若クハ鐵道ノ勾配ニ變更ヲ要スルトキハ其ノ設計ノ要點ヲ記スヘシ

他ノ鐵道ト連絡シ或ハ之ヲ橫斷スル場合ニハ該鐵道ノ前後各一哩間ノ縱斷面圖ヲ添付スヘシ

三　實測橫斷面圖

縮尺ハ長高トモ一吋二十鎖トシ縱斷面圖ノミニテ地形ヲ示スニ不充分ナル所ニハ之ヲ添付スヘシ

四　實測河川圖（內務省直轄河川ニ架橋スル場合ニ限リ調製ヲ要ス）

縮尺ハ平面圖一吋三鎖、縱斷面圖長一吋三鎖高一吋三十尺、橫斷面圖長高各一吋四十尺トシ架橋所ノ上流下流各半哩以內ニ於ルケ堤塘及川床ノ形狀、平水及最高洪水點ヲ記入スヘシ

五　線路圖面ニハ第一號書式ニ準シ曲線表及勾配表ヲ添付スヘシ

第二條　工事方法書ニハ左ノ事項ヲ詳記スルヲ要ス

一　土工ハ築堤及切取ノ幅員、傾斜面ノ勾配、排水溝ノ寸法、用地ノ幅員等ニ係ル設計ヲ詳說シ且ツ其ノ圖面ヲ添付スヘシ

二　橋梁ハ基礎、橋臺及橋脚ノ設計ヲ詳ニシ又橋桁ノ强弱及構造ニ關ル必要ナル說明ヲ詳記シ且ツ其ノ圖面ヲ添付スヘシ

三　土留不垣、渡線ニ重要ナル工事モ亦前項ニ同シ

四　隧道ハ其ノ土質ノ種類ニ應スル施工斷面及坑門ノ圖面ヲ添ヘ其ノ設計ヲ詳記スヘシ

五　軌道ハ其ノ軌隔、軌條ノ重量及品種、附屬品、枕木ノ寸法及敷設間隔「バラスト」ノ種類及厚サ等ヲ詳說シ其ノ圖面ヲ添付スヘシ

六　停車場ハ縮尺一吋一鎖ノ圖面ヲ以テ本屋、倉庫、機關車、車庫、信號器、轉車盤、給水器等凡テ構造物ノ位置ヲ示シ又側線及「ポイント」ノ配置「クロッシング」ノ交角、用地ノ境界並ニ中心哩程ヲ明カニシ踏構造物設計ノ概要ヲ說明スヘシ乘車場、跨線橋、信號器及轉車盤等ハ別ニ其ノ設計ヲ詳示スル圖面ヲ添付スヘシ

七　車輛ハ機關車ノ形狀、寸法、重量及汽罐、客車並ニ貨車ノ形狀、寸法、容量、重量、車軸及車輪ノ構造、互聯機及緩急機ノ裝置寸法等ヲ詳說、其ノ圖面ヲ添付スヘシ

八　建築定規圖其ノ他前記以外必要ナル圖面ハ其ノ說明ヲ記シ之ヲ添付スヘシ

九　電氣鐵道ニ付テハ發電所、變壓所及配電所內機械器具ノ裝置法、原動機ノ種類、數箇及馬力數、發電機ノ種類、數箇及電氣馬力數又ハ「アツト」、電壓、變壓器（同轉變壓機ヲ含ム）ノ種類、箇數及電氣馬力數又ハ「アツト」、電壓及其ノ配置法、電車ニ裝置スル電動機ノ種類箇數及電氣馬力數又ハ「アツト」、電壓、電車內機械器具ノ裝置法、電氣方式、配電法、電氣鐵道方式（單線式電氣鐵道ニアリテハ軌鐵ノ接續法ヲモ）電氣線路ノ種類及構造法、保安裝置法ヲ明細ニ記入スルヲ要ス

工費豫算書ハ第二號書式ニ準據スヘシ

第三條　第一條ノ至第三條ノ圖面、工事方法書及豫算書ニ據リ工事ヲ實施スル二當リ左ノ各項ニ該當スルモノハ認可ヲ要セス

但第一條第四項ニ記シタル河川及停車場ノ位置ニ關係ヲ有スル場所其ノ他重要ナル建造物所在ノ地ニ關スル場合ハ此限ニ非ラス

一　線路ノ高低ノ變更ハ市街ナレハ三尺以內其ノ他ニアリテハ六尺以內ヲ超過セサルトキ

二　線路ノ勾配ヲ變更シテ之ヲ緩ナラシムルトキ並ニ之ヲ變更シテ百分ノ一ヨリ急ナラシメサルトキ

三　曲線半徑ヲ變更シテ之ヲ長カラシムルトキ並ニ之ヲ變更シテ四分ノ一哩ヨリ短縮セシメサルトキ

四　中心線ノ移動ハ市街又ハ家屋稠密ノ地ナレハ平面圖ニ記スルモノヨリ左右各半鎖以內其ノ他ハ五鎖以內ヲ限度トシ之ヲ超過セサルトキ

五　認可ヲ經タル工事方法書範圍內ニ於テ橋梁「コルベルト」、隧道、踏切道及道路、河川附換工事ノ增減廢設又ハ伸縮ヲ爲ストキ

六　停車場ノ設計ハ乘車場、信號器側線、「ポイント」、「クロッシング」ノ配置及用地ノ境界モ

除テ其ノ他ノ變更ヲ爲ストキ
七　機關車客車及貨車ノ工事方法ヲ變更セムトシテ其ノ員數ノミヲ増加スルトキ
前項ノ範圍內ニ於テ變更ヲ施シタルトキハ建設中ニ係ル線路ニアリテハ其竣功ノ際ニ又營業開始後ノ線路ニ於テハ其ノ變更ノ都度圖面及理由書ヲ添付シテ屆出ヘシ且ツ該變更ノ爲メ工費豫算ニ異動ヲ生スルトキハ其部分ノ新舊豫算對照表ニ其ノ差額ノ支出又ハ繰入ノ途ヲ明示シタルモノ並ニ改正總豫算表ヲ添付スヘシ

第五條　圖面ハ總テ縱布ヲ用ヒ一尺五寸平方ヲ以テ最小極度トスヘシ

第六條　圖面、工事方法書、工費豫算書並ニ諸表ニハ其ノ主任技術者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

第一號書式（甲）
何鐵道會社線

曲線表

何　々　間

哩鎖節

曲線ノ始點			曲線ノ終點			半徑	交角		方向	切線ノ長		曲線ノ長			直線ノ長		
哩	鎖	節	哩	鎖	節	鎖	度	分	向	鎖	節	哩	鎖	節	哩	鎖	節
												計			計		

第一號書式（乙）
何鐵道會社線

勾配表

何　々　間

哩鎖節

程			距離			「フオルメーシヨン」ノ高	h（高低ノ差）		i（勾配）		i×h	
哩	鎖	節	哩	鎖	節		上リ	下リ	上リ	下リ	上リ	下リ
									1in	1in		
			計				計	計			計	計

第二號書式(甲)

何鐵道會計線

何々間建設費換算內訳表

項	目或ハ節	數量	平均單價	金高	合計
		哩　節			
測量		哩	圓	圓	圓
土地收用	路用地	坪			
	停車場用地	坪			
	川敷用地	坪			
	橋梁用地	坪			
	植栽用地	坪			
土工	線路切取	立坪			
	同盛土	立坪			
	同大運搬	立坪			
	線路築堤	立坪			
	土留石積	立坪			
	川敷石積	立坪			
	停車場切取	立坪			
橋梁		延坪			
隧道		間			
軌道	鐵條	哩	圓	圓	圓
	枕木	本			
	「バラスト」及ロツシング	立坪			
	敷砂	哩			
	利用敷設	哩			
	敷設路	哩			
道路					
橋梁					
隧道					
軌道					
合計					

第二號書式(乙)

總係費明細表

費目	金額
何々費	圓　錢　厘
合計	

第二號書式(丙)

資本金內譯表

費目	金高
創業費 營業資金 建設費 合計	圓

備考　創業費ハ商法第百六十四條ニ據リ創業費ニ於テ償却スヘキ旨ノ費用ヲ記入スヘシ
營業資金ハ營業開始ニ資スル費用ニシテ別ニ明細表ヲ設クヘシ

第二號書式(丁)

營業資金明細表

費目	金額
何々費	圓　錢　厘
合計	

第二號書式(戊)

何鐵道會社線

何々間橋梁明細表又ハ何々間「コルベルト」明細表

名稱	位置	「スパン」	橋脚ノ質	橋臺及橋脚	基礎ヨリ「アーチ」頂點迄高	「アーチ」延長	基礎	金高
桁ハ「アーチ」或ハ「コルベルト」ノ質								
	經　緯	數　長 呎		呎	呎	呎		圓
								計

第二號書式(己)

何々鐵道會社線

何々間隧道明細表

名稱	位置 始	位置 終	延長 鎖	延長 呎	「アーチ」厚	側壁厚	「インバート」厚	單價	金額
									計

第二號書式(庚)

何鐵道會社線

何々間停車場豫算明細表

名稱	數量	單價	金高	合計	摘要
何停車場		圓	圓	圓	
本屋	坪				
機關車庫	坪				
客車庫	坪				
荷物庫	坪				
乘車場	呎				
跨線橋					
轉車臺	個				
給水器	個				
信號器	個				
石炭臺	個				
鍛冶小屋	坪				
「ランプ」室	坪				
線所	坪				
井戶	個				
何々					
用地	段				
地築	坪				
支線	哩				
「ポイント」及「クロッシング」	組				
驛長舍	坪				
柵垣	間				
何停車場					
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	「ポイント」及「クロッシング」ニ組入ルヘシ

○內務省令第一號（明治三十一年一月）

私設鐵道條例第三條ニ列記スル線路圖面工事方法書竝ニ工費豫算書ニ關スル細則ハ明治三十年十二月遞信省令第三十五號ニ準據スヘシ

◎私設鐵道起業目論見書ニ添付スヘキ略圖ニ關スル細則（明治三十年四月遞信省令第五號）

明治二十年勅令第十二號私設鐵道條例第二條第二號起業目論見書ニ添附スヘキ略圖ニ關スル細則左ノ通リ制定ス

第一條　私設鐵道條例第二條第二號起業目論見書ニ添附スヘキ略圖ハ左ノ二種トス

一、踏測平面圖

縮尺ハ十萬分ノ一トシ線路ノ中心線ハ赤色ヲ彩リ且其ノ經過スル地名及地勢ヲ明記シ停車場ノ位置ヲ示シ距離ハ停車場毎ニ記入スヘシ

一、踏測縱斷面圖

縮尺ノ長サ一吋三十鎖ニシテ高サハ一吋百五十尺トシ中心線地面ノ高低（黑色）線路基面ノ高低（赤色）ヲ四十鎖毎ニ記シ隧道（赤色）及橋梁（赤色）ノ延長線路ノ勾配及經過地ノ名稱ヲ記入スヘシ

第二條　略圖ニハ踏測者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

◎私設鐵道線路ニ於ケル事故報告ノ件（明治三十年八月遞信省訓令第四號）

其府縣管內ニ敷設スル私設鐵道線路ニ於テ左記ノ事故發生シタルトキハ直ニ其旨ヲ報告スヘシ

一車輛脫線

一車輛衝突

一線路故障及其他危險ナル運轉上ノ事故

◎私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道電氣取締規則（明治三十年七月遞信省令第二十四號）

明治二十九年五月遞信省令第八號私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道電氣取締規則左ノ通改正ス

私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道電氣取締規則

第一條　此ノ規則中電線ト稱スルハ電氣傳送ニ用フル金屬線ヲ謂フ

第二條　此ノ規則中電路ト稱スルハ發電機、電線其ノ他ノ器具大地等電流ノ通過スル一全路ヲ謂フ

第三條　此ノ規則中低壓ト稱スルハ直流法ニアリテ六百「ヴォルト」交流法ニアリテハ三百實效「ヴォルト」ヲ超過セサル電壓ヲ謂ヒ高壓ト稱スルハ低壓ノ制限ヲ超過シ直流法ニアリテハ三千五百「ヴォルト」交流法ニアリテハ三千五百實效「ヴォルト」ヲ超過セサル電氣ヲ謂フ

特別高壓ト稱スルハ高壓ノ制限ヲ超過セサル電氣ヲ謂フ

第四條　電車線ニ使用スル電氣ハ直流法ニシテ其ノ電壓ハ六百「ヴォルト」以下タルヘシ但シ六百「ヴォルト」以上ノ電壓又ハ交流法ノ電氣ヲ使用セムトスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條　特別高壓電氣ノ使用ハ特種ノ保安裝置ヲ爲スモノニ限リ遞信大臣其ノ土地ノ狀況ニ依リ許可スルモノトス

第六條　遞信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ歸線ノ一部トシテ大地ヲ使用スルコトヲ許可セサルコトアルヘシ

第七條　電線ハ使用電流ノ爲攝氏二十度以上ノ溫度ヲ增スコトナク且絕緣物ニ變化ヲ顯ハササルモノタルヘシ

第八條　各電線ニハ完全ナル安全器ヲ備ヘ電流ノ爲攝氏四十度以上ノ溫度ヲ增サシムヘカラス

第九條　架空電車線ノ太サハ直徑二分五厘以上ニシテ極メテ强硬ナル條線ヲ用フヘシ但シ危險ノ虞ナシト認ムル場合ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第十條　架空電線ハ電車線ヲ除ク外總テ絕緣物ヲ以テ被覆シ外物ニ觸ルルモ容易ニ損傷セサル樣外裝シタルモノタルヘシ

三百「ヴォルト」以上ノ電壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ適當ナル絕緣物ヲ以テシ其ノ絕緣力ハ二十四時間沒水ノ後更ニ鹽水ニ沒シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ攝氏十五度ノ溫度ニ於テ一哩一百「オーム」以上ノモノタルヘシ

高壓ニ使用スル電線ノ被覆ハ護謨又ハ之ニ相當スル適宜ノ絕緣物ヲ以テシ其ノ厚サ三厘五毛以上ニシテ其ノ絕緣力ハ二十四時間沒水ノ後更ニ鹽水ニ沒シ一分時間充電ノ後一百「ヴォルト」以上ノ電壓ヲ以テ試驗シ攝氏十五度ノ溫度ニ於テ一哩四十万「オーム」以上ノモノタルヘシ

人家ヲ離隔シ交通稀少ニシテ危險ノ虞ナシト認ムル場所ニ於ケル架空電線ハ遞信大臣ノ認可ヲ得テ前各項ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第十一條　各電路ノ必要ナル場所及電車ニ避雷ノ裝置ヲ爲スヘシ

第十二條　大地ト接續セサル電路ニハ必ス漏電ヲ檢スルノ裝置ヲ爲スヘシ

第十三條　道路ニ架設スル架空電線ハ電車線ヲ除ク外道路ノ片側ニアラサレハ其架設ヲ許サス若架空ノ電燈線、電力線又ハ他ノ電氣鐵道用電線ノ架設シアル道路ニ架設スルトキハ之ト同側ニ架設シ若道路ノ片側ニ電信線、電話線其ノ他電氣信號線ノ架設シアルトキハ他ノ片側ニ架設スヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ遞信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第十四條　架空ノ電車線ハ地表ヲ距ル十六尺以上其ノ他ノ架空電線ハ道路ヲ橫斷スル所ニ於テハ地表ヲ距ル二十尺以上其ノ他ノ場所ニ於テハ十六尺以上タルヘシ又造營物ニ沿ヒ架設スルトキハ四尺以上造營物ノ上ヲ架渉スルトキハ六尺以上離隔セシムヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ危險ノ虞ナシト認ムル場所ハ地方長官ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第十五條　電信線、電話線其ノ他電氣信號線ヲ架設

セル場所ニ架空電線ヲ架設スルトキハ危險ノ虞ナク且障害ヲ與ヘサル樣離隔スヘシ

第十六條　電信線電　話線又ハ其ノ他ノ電氣信號ト其ノ上部ニ於テ交叉シ若ハ六尺以上ノ距離ニ接近シテ架空電線ヲ架設スルトキハ其ノ前日迄ニ關係管理者ニ通知シ立會ヲ請フヘシ

第十七條　架空ノ電車線ニハ其ノ上部三尺以上ノ距離ニ於テ少クトモ二條ノ金屬線ヲ大地ヨリ絶緣架設スル力若ハ適當ナル方法ヲ設ケ電信線其ノ他電氣信號線ト電氣的混觸ヲ豫防スルノ裝置ヲ爲スヘシ但シ危險ノ虞ナシト認ムル場所ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第十八條　架空電線ハ他人ニ屬スル架空ノ電信線又ハ電氣鐵道用電線ト並行、交叉若ハ接近シテ架設スルトキハ三尺以上ヲ離隔スヘシ但シ其ノ關係管理者ノ承諾ヲ得タルトキハ本條規定ノ距離ニ據ラスシテ架設スルコトヲ得ヘシト雖二尺以内ニ接近セシムヘカラス

第十九條　電車線ハ十町以内ノ區劃ニ分チ非常其ノ他道路ニ故障起リタル場合ニ於テ容易ニ電流ヲ遮斷シ得ル樣施設スヘシ但シ逓信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ本條ノ制限ヲ輕減スルコトアルヘシ

幹線ハ各要所ニ開閉器ヲ裝置シ火急ノ場合ニ於ニ送電ヲ停止スルニ便ナラシムヘシ

各幹線ニハ繼信所ニ於テ銳敏ナル自働遮斷法ヲ設クヘシ

第二十條　他人ニ屬スル架空ノ電燈線電力線又ハ電氣鐵道用電線ト交叉シ若ハ之ニ接近シテ架空電線ヲ架設スルトキハ三尺以上離隔スヘシ但シ工事上止ムヲ得サル場所ニシテ地力長官ノ認可ヲ得タルモノ又ハ同一ノ電柱ニ架渉スルモノハ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第二十一條　歸線ハ軌道ノ外側一尺以内ニ敷設スル部分及軌道ヲ除ク外ハ總テ大地ヨリ絶緣スヘシ但シ他ニ障害ヲ及ホスノ虞ナシト認ムル場所ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第二十二條　絶緣セサル歸線ヲ使用スルトキハ其ノ軌道ノ中間若ハ軌道ノ外側一尺以内ニ敷設スル部分及軌道ヲ除ク外ハ總テ大地ヨリ絶緣スヘシ但シ他ニ障害ヲ及ホスノ虞ナシト認ムル場所ハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ本條ノ制限ニ據ラサルコトヲ得

第二十三條　絶緣セサル歸線ヲ使用スル場合ニ於テ地下ニ埋設シタル金屬體アルトキハ左ノ各項ニ據リ施設ヲ爲スヘシ但シ金屬體所有者ノ承諾ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

一　歸線ハ地下埋設ノ金屬體ヨリ成ルヘク離隔シ其ノ距離六尺以上タルヘシ但シ工事上止ムヲ得サルトキハ六尺以内ニ近クルコトヲ得ルモ此ノ場合ニ於テハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ歸線ト金屬體トノ間ニ不導體ノ離隔物ヲ設ケ電流ヲシテ地中六尺以上ヲ通過スルニアラサレハ兩者間ヲ流通スルコト能ハサラシムヘシ

二　歸線ト其ノ近傍ニ在ル金屬體トノ間ニ電流ノ通スル場合ニ於テ其ノ方向歸線ヨリ金屬體ニ向テ流ルルトキハ兩者間ノ電壓ノ差四「ヴオルト」又金屬體ヨリ歸線ニ向テ流ルル過セシムヘカラス但シ金屬體ノ電壓ノ差一「ヴオルト」ヲ超

三　軌鐵ハ電氣的完全ナル接續ヲ爲スヘシ

四　軌鐵ノ外一平方寸ノ百分ノ四以上ノ敷面積ヲ有スル銅線又ハ之ト同等以上ノ導電力ヲ有スル歸線ヲ用フヘシ

五　軌鐵ノ中間又ハ軌道ノ外側一尺以内ニ敷設シタル絶緣セサル歸線ハ長サ一百尺以下毎ニ一平方寸ノ百分ノ三以上ノ敷面積ヲ有スル銅線又ハ之ト同等以上ノ導電力ヲ有スル他ノ方法ヲ以テ軌鐵ト接續スヘシ

第二十四條　前條ノ場合ニ於テハ歸線ノ絶緣セサル部分ニ起ルヘキ最大電位ノ差及第二十五條ニ規定スル接地點ヨリ發電機ニ向テ流ルル電流ハ常ニ之ヲ表示スルノ裝置ヲ爲シ之ヲ毎日記錄シ置クヘシ

第二十五條　發電機ノ一極ヲ接地シタル點ノ近傍ニ於テ二箇ノ地板ヲ埋設シ且四「ヴオルト」以下ノ電壓ヲ用ヒテ兩接地點間ニ「アムペアー」以上ノ電流ヲ發セシムル樣施設シ少クトモ毎月一回以上之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

前項接地點ハ金屬體ヨリ六尺以上ヲ隔テタル所ニ施設シ又埋設スヘキ地板ノ距離ハ十間以上タルヘシ

本條ニ適合セル接地點ヲ得難キ場合ニハ逓信大臣ノ認可ヲ得テ他ノ方法ヲ用フルコトヲ得

第二十六條　絶緣電線ノ絶緣力ハ其ノ漏洩電流軌道一里ニ對シ「アムペアー」ノ三十分ノ一ヲ超過セサル樣維持スヘシ若其ノ漏洩電流軌道一里ニ對シ一「アムペアー」ヲ超過シ二十四時間ヲ過クルモ之ヲ除去スルコト能ハサルトキハ直ニ車輛ノ運轉ヲ停止スヘシ但シ地下ニ埋設シタル絶緣電線ノ絶緣力ハ一里四百萬「オーム」ヲ下ルヘカラス

逓信大臣ハ土地ノ狀況ニ依リ前項ノ制限ヲ輕減スルコトアルヘシ

第二十七條　前條第一項本文漏洩電流ハ毎日一回

第一項但書ノ絶緣力ハ毎月一回使用最大電壓ヲ用ヒ之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

第二十八條　歸線ト金屬體トノ電氣的接續ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ金屬體所有者ノ承諾ヲ得タル後逓信大臣ノ認可ヲ受クヘシ其ノ接續ハ最モ善良ニシテ且容易ニ之ヲ點檢シ得ル樣施設シ三箇月毎ニ一回以上之ヲ試驗シ其ノ成績ヲ記錄シ置クヘシ

第二十九條　架空電線以外ノ電線ヲ他ノ金屬體ト交叉シ若ハ之ニ接近シテ施設スルトキハ其ノ電線又ハ之ヲ納メ若ハ保護スル爲用フル金屬體ヨリ他ノ金屬體ニ放電ヲ起ササル樣豫防方法ヲ設クヘシ

第三十條　埋線試驗口ハ成ルヘク瓦斯又ハ水ノ浸入スルコトナキ樣築造スヘシ若瓦斯ノ浸入スルコトアルモ電氣作用ノ爲爆發セサル樣豫防方法ヲ設クヘシ

第三十一條　高壓電線ト低壓電線トヲ同一ノ管若ハ樋内ニ納ムルコトヲ許サス

第三十二條　架空電線以外ノ高壓電線ヲ人畜ニ危害ヲ及ホスノ處アル場所ニ施設スルトキハ完全ナル絶緣方法ヲ施シ之ヲ堅牢ナル管若ハ樋内ニ納ムヘシ

第三十三條　電線ヲ納ムル暗渠管若ハ樋等ハ堅牢ニシテ荷車其ノ他重大ナル重量ノ壓力ニ堪ヘ且容易ニ瓦斯又ハ水ノ浸入セサル樣築造スヘシ

第三十四條　電線ヲ納メ若ハ之ヲ鎧裝スル爲用フル金屬體ハ充分大地ト電氣的接續ヲ爲スヘシ但シ電燈球取附用器具其ノ他之ニ類スル短小ナルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三十五條　開閉器、安全器、抵抗器及其ノ他導體ニ接ニル器具ハ耐火質ノモノタルヘシ否ラサレハ耐火質ノ物體ニ取附クヘシ

第三十六條　變壓所ハ事業ノ爲專用スル場所ニ設置スヘシ

變壓器ハ當業者ノ外容易ニ之ニ觸ルルコト能ハサル場所ニ設置スヘシ

第三十七條　變壓器ノ內外ヲ問ハス低壓電線ト高壓電線ト相互ノ接觸ヨリ生スル危險ヲ豫防スル爲メ適當ノ方法ヲ設クヘシ

第三十八條　電柱上ニ設置スル變壓器ハ耐火耐水質ノ函内ニ納メ地上十六尺以上ノ所ニ取附クヘシ

第三十九條　電柱ニハ事業者名並電柱ノ番號ヲ記スヘシ

高壓電線ヲ支持スル腕木ハ其ノ全部ヲ赤色ニ塗ルヘシ

第四十條　此ノ規則中第七條第二十四條及第二十五條ノ規定ハ發電所配電所及變壓所内ニ適用セス

第四十一條　毎日運轉スル市輛數及其ノ使用スル最大ノ電流及電壓ヲ記錄シ置クヘシ

第四十二條　事業者ハ學識經驗アル主任技術者ヲ置キ工事施行前其ノ履歷書ヲ添ヘ逓信大臣ニ届出ヘシ爾後之ヲ變更シタルトキハ三日以内ニ其ノ履歷書ヲ添ヘ届出ヘシ但シ逓信大臣ニ於テ不適當ト認ムルトキハ其ノ變更ヲ命スルコトアルヘシ

第四十三條　逓信大臣ハ必要、認ムル場合ニ於テ事業者ニ命シ電車ニ避雷器、速度制限器、特種ノ緩急器等ヲ裝置セシムルコトアルヘシ

第四十四條　逓信大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ事業者ニ命シ電氣用器具及物品ノ見本ヲ差出シ其ノ試驗ヲ受クシムルコトアルヘシ若試驗ノ成績不完全ナリト認ムルトキハ改修又ハ使用ノ停止ヲ命スルコトアルヘシ但シ其ノ試驗ニ係ル費用ハ事業者ノ負擔トス

第四十五條　逓信大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ此ノ規則規定以外ノ施設ヲ命スルコトヘシ

第四十六條　逓信大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ第四十七條第二十七條第二十八條及第四十一條ノ記錄ヲ差出サシムルコトアルヘシ

第四十七條　逓信大臣ハ出火其ノ他非常ノ場合ニ際シ危險豫防ノ手續ヲ爲サシムルカ爲必要ト認ムルトキハ常ニ電氣線路ノ各要所ニ技術者又ハ工夫ノ散宿ヲ命スルコトアルヘシ

散宿所ニハ屋外業人ノ瞭易キ所ニ其ノ標札ヲ掲クヘシ

第四十八條　事業者ハ送電中ノ架空電線ノ近傍ニ出火アルトキハ直ニ現場ニ技術者又ハ工夫ヲ派遣シ危險豫防ノ手續ヲ施シ其ノ旨出張ノ警察官ニ届出シムヘシ其ノ出張員ハ該官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ退場スルコトヲ得ス

出火ノ場所ニ派遣ノ技術者又ハ工夫ハ晝間ハ標旗夜間ハ標燈ヲ携帶スヘシ

第四十九條　事業者ハ送電中ノ架空電線ノ近傍ニ出火アルトキハ直ニ其ノ區域内ノ電流ヲ遮斷スヘシ

前項ニ依リ送電ヲ止メタル區域内電線ノ各要所ニ晝間ハ標旗夜間ハ標燈ヲ掲クヘシ

第五十條　前二條ノ標旗及標燈ノ制式ハ別ニ之ヲ定ム

第五十一條　事業者ハ其ノ事業ヨリ災害其ノ他ノ妨障ヲ生シタルトキハ其ノ時日、場所、原因及狀況等ヲ具シ逓信大臣ニ届出ヘシ

第五十二條　左ノ事項ハ三日以内ニ逓信大臣ニ届出ヘシ

一　主任技術者ノ改氏名
二　送電ノ停止及廢止但シ其ノ理由ヲ記スヘシ
三　幹線又ハ絶縁區線ノ增設又ハ變更
四　車輛數及其ノ增減

第五十三條　私設鐵道條例第十二條ニ據リ開業免許狀ヲ下付セラレタル後ニ於テ工事設計中電氣ニ關スル事項ヲ變更セムトスルトキハ同條例第三條ニ列記スル線路圖面工事方法書並工費豫算書中關係事項ヲ記載セル書類ヲ添ヘ逓信大臣ニ願出認可ヲ受クヘシ

前項ノ認可ヲ受ケタル工事落成シタルトキハ其旨逓信大臣ニ屆出ヘシ

逓信大臣ハ前項ノ屆出ニ依リ工事ヲ檢査シ完全ナリト認ムルトキハ使用認可書ヲ下付スヘシ但檢査ノ必要ナシト認ムルトキハ直ニ使用認可書ヲ下付スルコトアルヘシ

第五十四條　此ノ規則ニ據リ逓信大臣ニ差出ス書類ハ總テ所轄地方廳ヲ經由スヘシ

第五十五條　事業者此ノ規則ノ條項ニ違背シ又ハ此ノ規則ニ據リ發スル命令ヲ遵守セサルカ爲危險ノ虞アリト認ムルトキハ逓信大臣ハ其ノ危險ノ除去セラルルマテ電氣ノ信用ヲ停止スルコトアルヘシ

第五十六條　事業者此ノ規則第四條第二十八條前條第三十九條第四十二條第四十八條及第四十九條ノ規定ニ違反シ又ハ第五十一條及第五十二條ノ屆出ヲ爲サス又ハ第四十六條ノ記錄ヲ差出サス若ハ第二十四條第二十五條第二十七條第二十八條及第四十一條ノ記錄ヲ爲ササルモノハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ罰料又ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

前項ノ罰則ハ其ノ所爲ヲ爲シタル取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス

第五十七條　此ノ規則ハ明治三十年八月一日ヨリ實施ス

●電氣事業取締規則等ニ據リ使用スル標旗、標燈制式

（明治二十九年五月逓信省告示第百十五號）

明治三十年六月逓信省令第十四號電氣事業取締規則第十九條及私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道取締規則第四十八條ニ據リ使用スル標旗ハ縱一尺五寸橫二尺トシ其ノ標竿ハ長サ三尺トシ調製スヘシ

地色	白
標	三尺
縱	二尺
標章色	赤
事業者名（會社ハ會社名）ヲ標章ノ下ニ墨書ス	
旗竿長サ	六尺

地色	白
形狀	逆帶高脚
標章色	赤
事業者（會社ハ會社名）ヲ標章ノ下ニ墨書ス	
燈竿長サ	六尺

明治二十一年六月逓信省告示第百八十四號改正ニ依ル）

電氣事業取締規則第二十條及私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道取締規則第四十九條ニ據リ使用スル標旗ノ制式

電氣事業取締規則第十九條及私設鐵道條例ニ據ル電氣鐵道取締規則第四十八條ニ據リ使用スル標旗ハ丸形弓張提燈ノ形狀トシ標章其ノ他ハ前圖ニ準シ調製スヘシ

●私設鐵道ニ於テ運輸營業停車場ノ使用開始報告ノ件

（明治三十一年六月逓信省告示第百六十八號）

私設鐵道株式會社ニ於テ其線路ニ於ケル運輸ノ營業又ハ停車場ノ使用ヲ開始シタルトキハ其旨電報ヲ以テ即日報告スヘシ

鐵道株式會社名	開業免許狀下付年月日	開業免許狀區間	停車場名	各停車場間哩數

●陸軍鐵道船舶輸送規則

（明治二十九年四月陸軍省令第七號）

陸軍鐵道船舶輸送規則左ノ通定ム

陸軍鐵道船舶輸送規則

第一條　本規則ハ臨時陸軍運輸通信部ニ於テ鐵道若クハ船舶ニ依リ軍隊及軍需品ヲ運送スル方法ヲ定ムルモノトス

第二條　軍隊ノ輸送ハ補充輸送、送還輸送及一部輸送ノ三種ニ別ツ

第三條　補充輸送及送還輸送ハ一般ニ大輸送ト名ケ鐵道ニ在テハ二列車以上船泊ニ在テハ二艘以上ヲ要スル者ヲ云ヒ一部輸送トハ之ヨリ以下ノ車輛船舶ヲ要スル者ヲ云フ

第四條　大輸送ハ陸軍大臣ノ命ニ依リ臨時陸軍運輸通信部長之ヲ規畫シ一部輸送ハ各部各隊自ラ鐵道當路者（鐵道）若クハ運輸通信支部長（船舶）ト協議シテ施行スルモノトス

第五條　大輸送ニ方リ臨時ニ停車場司令部ヲ設クル等ノ必要アリテ將校以下人員ノ派遣ヲ運輸通信部長ヨリ請求スルトキハ師團長ハ最寄ノ部隊ヨリ之ヲ派出スルモノトス

但シ派遣ニ係ル費用ハ運輸通信部ニ於テ支辨ス

第六條　軍需品ノ鐵道輸送ハ臨時軍用貨物鐵道輸送手續ニ依ル

第七條　陸軍輸送券ハ船舶鐵道ノ二種トシ別記雛形ノ如ク運輸通信部ニ於テ調製ス

但シ鐵道ノ輸送券ハ大輸送ヲ行フ時ノミ使用スルモノトス

第八條　各部隊長ハ鐵道若クハ船舶輸送ヲ行ハントスル前日ニ於テ一名ノ將校ヲ乘車地又ハ乘船地ニ差遣シ停車場司令官（鐵道吏員）若クハ運輸通信支部長ト協議、豫備ヲ爲サシムヘシ

第九條　運送指揮官ハ鐵道吏員及船長ノ職域ニ關渉スルヲ得ス

第十條　單獨旅行者ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ限リ陸軍運送船ニ便乘ヲ請求スルコトヲ得

一　陸海軍ノ命令ヲ以テ往復スル軍人軍屬

二　臺灣及在外軍隊ニ屬スル酒保商人（但シ酒保道送品ノ寄領者ハ一回一人ニ限ル）

三　公用ヲ以テ臺灣及在外軍隊所在地ニ往復スル官吏及其屬員（二十九年陸軍省令第二十號改正ニ依ル）

第十一條　船舶借切特約船ニ便乘ヲ許可スルハ左記ノ者ニ限ル

一　陸軍ノ命令ヲ以テ往復スル軍人軍屬及屬員並其家族

二　臺灣及在外軍隊ニ屬スル酒保商人（但シ酒保道送品ノ寄領者ハ一回一人ニ限ル）

第十二條　便乘ノ許可ヲ得タル者ハ運輸通信官衙ヨリ便乘券ヲ受領シ乘船ノ際船長ニ差出スヘシ

第十三條　便乘者ハ船內ニ在テハ輸送指揮官及船長ノ命令ニ服從シ且船內諸規則ヲ遵守スヘシ

第十條第二項以下ノ便乘者並ニ族數ヲ受ケタル便乘者ハ船內食料ヲ自辨スルモノトス

第十四條　便乘者ハ一人十貫目以上ノ手荷物ヲ携帶スルヲ得ス特別ノ理由アルモノハ運輸通信官衙長ノ許可ヲ受クヘシ又如何ナル理由アルモ劇品ヲ携帶スルヲ許サス

第十五條　運輸通信官衙ニ於テ附與シタル便乘券ニハ官職姓名（之ナキ者ハ族籍住所）等ヲ可成詳記シ萬一便乘者遭難死亡スルモ其通知ヲ爲シ得ルカ如クス

第十六條　便乘券ハ獨行者ハ各個人ニ附與シ一團ヲ爲ス者ハ其引率者ニ附與シ以テ監督者ト爲ス

第十七條　便乘者ニシテ船內ニ在リ船則ニ違犯シ輸送指揮官及船長ノ命令ニ服從セサル者等ハ上陸ヲ禁止シ乘船地又ハ內地ニ送還スヘシ

第十八條　軍隊ノ大輸送ヲ行フニ方リ鐵道船舶ノ輸送費ハ運輸通信部ノ支辨スル所ナリト雖モ給養ニ係ル費用ハ總テ當該軍隊ノ支辨トシ一部輸送ニ在テハ鐵道輸送費及諸給養費共ニ當該部隊ノ支辨トス

但シ軍人軍屬ニシテ單獨者ノ船內給養並ニ後送者ノ內地上陸後實費拂旅費ノ支給ハ運輸通信部之ヲ支辨シ後送者ノ內傷備病院ニ入院後轉送スル者ハ其發送スヘキ豫備病院ノ支辨トス

第十九條　鐵道ノ大輸送ニ方リ各號列車中輸送指揮官(若クハ特ニ命セラレタル軍吏或ハ他ノ職員)ハ現金ヲ携帶シ總發停車場ニ到著スレハ食物ト引換ニ現價ヲ商人ニ仕拂フヘキモノトス

第二十條　停車場司令部ハ停車場內或ハ其近傍家屋內ニ設ケテ其名ヲ標記シ晝ハ國旗ヲ掲ケ夜ハ紅燈若クハ提燈ヲ以テ標示ス

附　則

第二十一條　線區司令部存在中鐵道ノ大輸送ニ係ル業務ハ該司令部之ヲ掌理ス

(別記略ス)

●私設鐵道乘車手續　(明治三十年十二月陸軍省告示第二十一號)

私設鐵道乘車手續左ノ通相定ム

私設鐵道乘車手續

第一條　私設鐵道條例第二十一條ニ依リ陸軍軍人軍屬私設鐵道會社ノ汽車ニテ往復スル者及物品ヲ輸送スルトキハ條末ニ掲クル標式ノ證券ヲ附與スヘシ

第二條　此證券ハ軍隊官衙學校ニ於テ調製附與スルモノトス

第三條　軍人軍屬ハ附與スル所ノ乘車證券軍人ハ上長官以上上等室士官准士官中等室下士以下下等室軍屬ハ高等官五等以上上等室同六等以下中等室列任官及雇員傭人ハ下等室ヲ以テ定規トス然レトモ時宜ニ依リ本人ノ認ニ任セ等級ヲ變更スルモ妨ケナシ但本文ノ如ク上中下ノ等級ヲ定ムト雖各室ノ設ケナキ列車ニ在テハ證券面ノ上等ヲ中等ニ中等ヲ下等室ニ充ツルハ時宜ニ依ル

第四條　乘車證券ハ一名毎ニ之ヲ附與スル但一時數名旅行スルトキハ上中下等ノ各室ニ乘ルヘキ人名ヲ列記シ其上級者ニ附與ス若シ列記シ能ハサルトキハ別紙ニ記載シ添付ス

一時數種ノ物品ヲ輸送スルトキ證券裏面ニ列記シ能ハサルトキハ別紙ニ物名、箇數、斤量ヲ記載シ添付ス

第五條　乘車證券ハ某地ニ往復スル者或ハ巡廻各地ニ亘リ瀧車ノ乘替ヲ要スル者ノ如キハ其度數ヲ量リ隨メ數葉ヲ附與スルコトヲ得

但シ用トナリタルトキハ返附スルモノトス

第六條　水火盜難等ノ爲メ證券ヲ失ヒタルカ或ハ臨時證券ヲ要スルトキハ其近傍陸軍ノ官衙又ハ軍隊ニ就キ請求スルコトヲ得

第七條　無賃携帶スルヲ得ヘキ手荷物ノ定限ハ尋常乘客ト同樣タルヘシ其限外ノ分ハ定價ノ運賃ヲ拂フヘキモノトス

第八條　陸軍新兵入營ノトキハ本手續ニ依リ乘車スルコトヲ得

第九條　在鄉軍人及補充兵召集ノ場合ニ在テハ證券ヲ用ヒス召集令狀ヲ示シテ減價乘車スルコトヲ得

第十條　此ノ手續ニ依リ減價乘車ノ者ト雖モ手荷物賃金ノ定限ハ尋常乘客ト異ルコトナシ

附　則

一明治二十三年(三月)海軍省告示第六號規定ノ證券ハ當分ノ內混用スルコトヲ得

(雜形略ス)

●海軍新兵入營ノ時私設鐵道乘車券附與ノ件　(明治二十三年三月海軍省訓令第一號)

海軍新兵入營ノ時私設鐵道條例第二十一條ニ依リ乘車セシムルトキハ徵兵ナレハ集合地ヨリ入營地マテノ乘車證券ヲ新兵受領委員ヨリ附與シ志願兵ナレハ出發地ヨリ入營地マテノ乘車證券ヲ徵募官ヨリ府縣廳ヲ經テ附添人ニ交附シ附添人ヨリ之ヲ附與スルモノトス

●五十哩以上鐵道乘車切手通用期限　(明治三十一年四月逓信省告示第八十七號)

五十哩以上ノ鐵道乘車切手通用期限左ノ通改正ス

五十哩以上ノ乘車切手通用期限ハ五十哩以上百哩未滿ハ二日、百哩以上ハ百哩未滿毎ニ一日ヲ加フルモノトス

但通用期限ハ總テ發行當日ヨリ起算ス

●天災事變ノ爲メ鐵道線路ニ故障ヲ生シタル場合旅客荷物賃金取扱方　(明治二十九年十二月逓信省告示第二百五十五號)

天災事變ノ爲メ鐵道線路ニ故障ヲ生シ途中ニ於テ列車ノ進行ヲ中止シ前途容易ニ開通ノ見込ナキ場合ニハ該列車ノ旅客及諸荷物ハ途中驛ニ於テ下車セシメ又ハ引渡ヲ爲シ既納賃金ハ經過區間ニ對スル額ヲ控除シ殘餘拂戻ノ手續ヲ爲スヘシ但此場合ニ於テ當初ノ發驛ヘ返乘又ハ逆送ヲ望ムモノハ無賃ニテ其取扱ヲ爲スコトアルヘシ

●臺灣鐵道會社保護ニ關スル件　(明治三十年六月勅令第百七十四號)

朕臺灣鐵道會社保護ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　臺灣總督ハ必要ト認ムルトキハ臺灣鐵道會社鐵道用地ニ供セントスル官有地ヲ無代價ニテ下付スルコトヲ得

第二條　左ニ記載スルモノヲ以テ鐵道用地トス

第一　線路ニ當ル敷地但シ其ノ幅員ハ築堤切取架橋等工事ノ必要ニ應シテ定ムルモノトス

第二　停車場及之ニ附屬スル車庫貨物庫等ノ建築用ニ供スル土地

第三　前項ノ構內ニ當住ヲ要スル驛長車長及機關方等ノ家宅番人小屋等ノ建築用ニ供スル土地

第四　鐵道敷設又ハ運輸ニ要スル車輛器具ヲ製作修繕スル器械場及同上ノ資材器具ヲ貯藏スル倉庫ノ建築用ニ供スル線路ニ沿ヒタル土地

第三條　鐵道用地ニアラスト雖モ汽車用工場用ニ要スル石炭又ハ鐵道敷設ニ要スル材料運搬ノ爲敷設スル鐵道敷地其ノ他必要ノ土地ニシテ官有ニ係ルモノハ臺灣總督ニ於テ必要ト認ムルトキハ無代價ニテ之ヲ下付シ又ハ臺灣鐵道會社鐵道敷設竣工マテ無料ニテ之ヲ貸付スルコトヲ得

第四條　鐵道用地又ハ前條ニ掲ケタル目的ニ供セントスル土地民有ニ係ル場合ニ於テ之ト交換センカ爲ニ臺灣鐵道會社ヨリ官有地ノ下付ヲ請求スルトキハ臺灣總督ハ無代價ニテ之ヲ下付スルコトヲ得但シ其ノ官有地ハ交換セントスル民有地ト評定價格相均シキモノニ限ル

第五條　臺灣總督ハ公益ノ爲必要ト認ムルトキハ既設官有鐵道並ニ之ニ附屬スル建物器具等ヲ無代價ニテ臺灣鐵道會社ニ下付スルコトヲ得

第六條　無代價ニテ下付スル官有地ニ附屬スル建物植物等ハ併テ無代價ニテ之ヲ下付スルモノトス

●軌道條例　(明治二十三年八月法律第七十一號)

朕軌道條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軌道條例

第一條　一般運輸交通ノ便ニ供スル馬車鐵道及其他之ニ準スヘキ軌道ハ起業者ニ於テ內務大臣ノ特許ヲ受ケ之ヲ公共道路上ニ布設スルコトヲ得

第二條　馬車鐵道及其他之ニ準スヘキ軌道布設ノ爲起業者ト雖モ其ノ在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シ若ハ新ニ軌道敷設クルノ必要アルトキハ之ニ要スル土地ハ起業者ニ於テ土地收用法ノ

並物品輸送手續　(明治三十一年三月海軍省告示第三號)

海軍軍人軍屬私設鐵道乘車並物品輸送手續左ノ通定ム

海軍軍人軍屬私設鐵道乘車並物品輸送手續

第一條　私設鐵道條例第二十一條ニ依リ海軍軍人軍屬乘車シ若ハ物品ヲ輸送スルトキハ左ニ掲クル樣式ノ證券ヲ附與スヘシ

第二條　證券ハ東京所在ノ各部並在京ノ軍人軍屬ニ在テハ本省ニ於テ其ノ他ノ地方所在ノ各部並經船團及在鄉ノ軍人軍屬ニ在テハ各所管鎭守府ニ於テ調製附與スルモノトス但シ經船又ハ在鄉ノ軍人ニ在テハ便宜ニ依リ本省若ハ各鎭守府執レニ請求スルモ妨ケナシ

第三條　東京及鎭守府所管ノ各部並經船團ニ於テハ隨メ證券所要ノ數ヲ定メ本省經理局若ハ所管鎭守府經理部ニ要求シテ之ヲ備ヘ置クヘシ

第四條　乘車證券ハ左ノ區別ニ依リ之ヲ附與スヘシ但シ本人ノ望ニ依リ若ハ列車ニ上中下等各室ノ設備ナキ等ノ爲メ其等級ヲ變換スルハ便宜ニ依ル

一　奏任官以上　上等室

二　候補生試補生徒判任官及判任官見習中等室

三　卒及雇員(特ニ身分待遇ノ定メアルモノヲ除ク)傭人下等室

第五條　證券ハ一人毎ニ之ヲ附與スヘシ但シ行軍其ノ他數人一行ノ場合ニ在テハ其ノ一行ニ證券一葉ヲ附與シ別ニ其ノ人員ニ對スル官職氏名網書ヲ添付シテ行使セシムルコトアルヘシ

第六條　巡廻各地ニ亘リ瀧車ノ乘替ヲナス等都テ數回乘車ノ必要アルモノニハ其ノ度數ヲ量リ隨

規定ニ依リ内閣ノ認定ヲ經テ之ヲ改用スルコトヲ得

第三條　在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シタル部又及新設シタル部道敷ハ俱ニ道路敷ニ編入ス

第二款　船舶

●船舶法（明治三十二年三月法律第四十六號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル船舶法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶法

第一條　左ノ船舶ヲ以テ日本船舶トス

一　日本ノ官廳又ハ公署ノ所有ニ屬スル船舶

二　日本臣民ノ所有ニ屬スル船舶

三　日本ニ本店ヲ有スル商事會社ニシテ合名會社ニ在リテハ社員ノ全員、合資會社及ヒ株式會社合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ全員、株式會社ニ在リテハ取締役ノ全員ガ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶

四　日本ニ主タル事務所ヲ有スル法人ニシテ其代表者ノ全員ガ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶

第二條　日本船舶ニ非サレハ日本ノ國旗ヲ掲クルコトヲ得ス

第三條　日本船舶ニ非サレハ不開港場ニ寄港シ又ハ日本各港ノ間ニ於テ物品又ハ旅客ノ運送ヲ爲スコトヲ得ス但法律若クハ條約ニ別段ノ定アルトキ、海難若クハ捕獲ヲ避ケントスルトキ又ハ主務大臣ノ特許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第四條　日本船舶ノ所有者ハ日本ニ船籍港ヲ定メ其船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ船舶、積量測度ヲ申請スルコトヲ要ス

船籍港ヲ管轄スル管海官廳ハ他ノ管海官廳ニ船舶ノ積量ノ測度ヲ囑託スルコトヲ得

外國ニ於テ取得シタル船舶ヲ外國各港ノ間ニ於テ航行セシムルトキハ船舶所有者ハ日本ノ領事又ハ貿易事務官ニ其船舶ノ積量ノ測度ヲ申請スルコトヲ得

第五條　日本船舶ノ所有者ハ登記ヲ爲シタル後船籍港ヲ管轄ル管海官廳ニ備ヘタル船舶原簿ニ登錄ヲ爲スコトヲ要ス

前項ニ定メタル登錄ヲ爲シタルトキハ管海官廳ハ船舶國籍證書ヲ交付スルコトヲ要ス

第六條　日本船舶ハ法令ニ別段ノ定アル場合ヲ除ク外船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證明書ヲ請受ケタル後ニ非サレハ日本ノ國旗ヲ掲ケ又ハ之ヲ航行セシムルコトヲ得ス

第七條　日本船舶ハ法令ノ定ムル所ニ從ヒ日本ノ國旗ヲ掲ケ且其名稱、船籍港、番號、積量、喫水ノ尺度其他ノ事項ヲ標示スルコトヲ要ス

第八條　日本船舶ノ名稱ハ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第九條　船舶所有者カ其船舶ヲ修繕シタル場合ニ於テ其積量ニ更ヲ生シタルモノト認ムルトキハ再ヒ積量ノ改測ヲ申請スルコトヲ要ス

第四條第二項及ヒ第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十條　登錄シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船舶ノ所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間內ニ變更ノ登錄ヲ爲スコトヲ要ス

第十一條　船舶國籍證書ニ記載シタル事項ニ更ヲ生シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間內ニ其書換ヲ申請スルコトヲ要ス

船舶國籍證書カ毀損シタルトキ亦同シ

第十二條　船舶國籍證書カ滅失シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間內ニ更ニ之ヲ請受クルコトヲ要ス

第十三條　日本船舶ノ外國ノ港ニ碇泊スル間ニ於テ船舶國籍證書カ滅失毀損シタルトキハ船長ハ其地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

日本船舶カ外國ニ航行スル途中ニ於テ前項ノ事由カ生シタルトキハ船長ハ最初ニ着到シタル地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

前二項ノ規定ニ從ヒテ假船舶國籍證書ヲ請受クルコト能ハサルトキハ其後最初ニ到着シタル地ニ於テ之ヲ請受クルコトヲ得

第十四條　日本船舶カ滅失若クハ沈沒シタルトキ、解撤セラレタルトキ又ハ日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間內ニ抹消ノ登錄ヲ爲シ且測量ナク船舶國籍證書ヲ返還スルコトヲ要ス　船舶ノ存否カ六个月間分明ナラサルトキ亦同シ

第十五條　日本ニ於テ船舶ヲ取得シタル者カ其取得地ヲ管轄スル管海官廳管轄區域內ニ船籍港ヲ定メサルトキハ其管海官廳ノ所在地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十六條　外國ニ於テ船舶ヲ取得シタル者ハ其取得地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十三條第三項ノ規定ノ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十七條　外國ニ於テ交付スル假船舶國籍證書ノ有效期間ハ一年ヲ超ユルコトヲ得ス

日本ニ於テ交付スル假船舶國籍證書ノ有效期間ハ六个月ヲ超ユルコトヲ得ス

前二項ノ期間ヲ超ユルトキト雖モ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ船長ハ更ニ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十八條　船舶カ船籍港ニ到着シタルトキハ假船舶國籍證書ハ有效期間滿了前ト雖モ其效力ヲ失フ

第十九條　第十一條乃至第十四條ノ規定ハ假船舶國籍證書ニ之ヲ準用ス

第二十條　前十六條ノ規定ハ總噸數二十噸未滿又ハ積石數二百石未滿ノ船舶及ヒ端舟其他櫓櫂ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓櫂ヲ以テ運轉スル舟ニハ之ヲ適用セス

第二十一條　前條ニ掲ケタル船舶ノ船籍及ヒ其積量ノ測度ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條　日本船舶ニ非スシテ國籍ヲ詐ル目的ヲ以テ日本ノ國旗ヲ掲ケタルトキハ船長ヲ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ情狀重キトキハ其船舶ヲ沒收ス但捕獲ヲ避ケントスル目的ヲ以テ日本ノ國旗ヲ掲ケタルトキハ此限ニ在ラス

日本船舶カ國籍ヲ詐ル目的ヲ以テ日本ノ國旗ニ非サル旗章ヲ掲ケタルトキ亦前項ニ同シ

第二十三條　第三條ノ規定ニ違反シタルトキハ船長ヲ二百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處シ船舶ヲ沒收ス

第二十四條　官吏ヲ欺キ船舶原簿ニ不實ノ登錄ヲ爲サシメタル者ハ二月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以上千圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リテ處斷ス

第二十五條　第六條ノ規定ニ違反シタルトキハ船長ヲ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條　第七條ノ規定ニ從ヒテ日本ノ國旗ヲ掲ケサルトキハ船長ヲ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十七條　第七條ニ定メタル事項ヲ船舶ニ標示セサルトキ又ハ第八條乃至第十二條若クハ第十四條ノ規定ニ違反シタルトキハ船舶所有者ヲ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條　第二十二條、第二十三條、第二十五條及ヒ第二十六條ノ規定ハ船長ニ代ハリテ其職務ヲ行フ者ニ亦之ヲ適用ス

第二十九條　第二十二條、第二十三條、第二十五條及ヒ第二十六條ニ定メタル罪ニ付テハ刑法數人共犯ノ例ヲ適用セス

第三十條　第二十七條ノ場合ニ於テ刑法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ依リ船舶所有者ノ罪ヲ論スヘカラサルトキハ其法定代理人ヲ罰ス

第三十一條　第二十七條ノ規定ノ船舶管理人又ハ商事會社其他ノ法人ノ代表者若クハ清算人ニ之ヲ適用ス

第三十二條　管海官廳ノ事務ハ外國ニ在リテハ日本ノ領事又ハ貿易事務官之ヲ行フ

（附則）

第三十三條　本法ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三十四條　船舶ノ登記ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治十九年法律第一號登記法中船舶ノ登記ニ關スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第三十五條　商法第五編ノ規定ハ商行爲ヲ爲ス目的ヲ以テセサルモ航海ノ用ニ供スル船舶ニ之ヲ準用ス但官廳又ハ公署ノ所有ニ屬スル船舶ハ此限ニ在ラス

第三十六條　明治三年正月二十七日布告商船規則、同十二年第五號布告、同年第十九號布告、同十四年第十二號布告其他ノ法令ニシテ本法ノ規定ニ抵觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第三十七條　本法施行ノ際登簿船舶免狀又ハ船艦札ヲ受有スル船舶ノ所有者カ本法ノ規定ニ依リ船舶國籍證書ヲ請受クヘキトキハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ登錄ヲ爲シ且船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ從ヒテ船舶國籍證書ヲ請受クルマテハ登簿船免狀又ハ船艦札ハ船舶國籍證書ト同一ノ效力ヲ有ス

第三十八條　本法施行ノ際登簿船假免狀ヲ受有スル船舶ノ所有者カ本法ノ規定ニ依リ船舶國籍證書ヲ請受クヘキ場合ニ於テハ其假免狀ハ有效期間ノ滿了ニ至ルマテハ假船舶國籍證書ト同一ノ效力ヲ有ス但船舶カ船籍港ニ到着シタルトキハ此限ニ在ラス

登簿船假免狀ノ有效期間カ滿了シタルトキト雖モ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ船長ハ假船舶國籍證書ヲ請求クルコトヲ得

第三十九條　第十四條ノ規定ハ本法施行前ニ同條ニ掲ケタル事由カ生シタルモ未タ登簿船原簿ノ削除ヲ請ハサル場合ニ之ヲ準用ス但同條ニ定メタル二週間ノ期間ハ船舶所有者カ本法施行前ニ事實ヲ知リタルトキト雖モ其施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

本法施行前ニ踪跡ヲ失ヒタル船舶ニシテ未タ登簿船原簿ノ削除ヲ請ハサルトキ亦同シ

前二項ノ規定ニ違反シタルトキハ船舶所有者ヲ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條及ヒ第三十一條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十條　本法施行前ヨリ存否ヲ分明ナラサル船舶ニシテ未タ本法ノ期間カ經過セサルモノニ付テハ第十四條ニ定メタル六箇月ノ期間ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第四十一條　本法ノ施行ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ定ム

●船舶法施行細則（明治三十二年六月逓信省令第二十四號）

船舶法施行細則左ノ通定ム

船舶法施行細則

第一章　總則

第一條　本則ニ於テ船舶ノ種類ト稱スルハ汽船帆船ノ別ヲ謂フ

機械力ヲ以テ運航スル裝置ヲ有スル船舶ハ蒸氣ヲ用ユルト否トニ拘ハラス之ヲ汽船ト看做ス

主トシテ帆ヲ以テ運航スル船舶ハ機關ヲ有スルモノト雖モ之ヲ帆船ト看做ス

第二條　浚渫船ハ推進器ヲ有セサレハ之ヲ船舶ト看做サス

第三條　船籍港ハ各市町村ノ名稱ニ依ル但市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在リテハ市町村ニ準スヘキ區劃ノ名稱ニ依ル

第四條　左ノ場合ニ於テハ船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ノ交付前ト雖モ最寄管海官廳ノ認可ヲ受ケ船舶ヲ航行セシムルコトヲ得

一　試運轉ノトキ

二　積量ノ測度ヲ受ケントスルトキ

三　正當ノ事由アルトキ

第五條　左ノ場合ニ於テハ船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ノ交付前ト雖モ船舶ニ國旗ヲ掲クルコトヲ得

一　祝日大祭日但外國ノ祝祭日ニ付テハ其國ノ港ニ碇泊スル場合ニ限ル

二　前號ノ外祝意又ハ敬意ヲ表スルトキ

三　進水ノトキ

四　前條ノ規定ニ依リ船舶ヲ航行セシムルトキ

第六條　船舶ノ積量若クハ登錄ニ關スル事項又ハ其標示ヲ照査スル爲メ必要アリト認ムルトキハ檢査官吏ハ何時ニテモ船舶ニ臨檢スルコトヲ得

第七條　本則ノ規定ニ依リ管海官廳ニ書類ヲ差出スヘキ場合ニ於テ代理人ヲ使用スルトキハ其權限ヲ證スル書面ヲ添附スヘシ

第二章　積量ノ測度

第八條　船舶法第四條第一項ノ規定ニ依リ船舶ノ積量ノ測度ヲ申請セントスル者ハ第一號書式ノ申請書ヲ管海官廳ニ差出スヘシ

前項ノ申請書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一　製造ニ依リ船舶ヲ取得シタル場合又ハ製造後未タ積量ノ測度ヲ申請セサル船舶ヲ取得シタル場合ニ於テハ造船者ニ於テ製造地、進水ノ年月日ヲ證スル書面及機關ヲ有スル船舶ニ在リテハ汽機、汽鑵ノ製造者ニ於テ汽機、汽鑵製造ノ年月日ヲ證スル書面

二　所有權ノ取得、持分ノ移轉、所有者ノ國籍取得ニ依リ又ハ商事會社其他ノ法人ニシテ船舶法第一條第一項第三號第四號若クハ第二項ニ掲ケタル條件ノ具備ニ依リ船舶ノ國籍ヲ取得シタル場合ニ在リテハ前號ニ掲ケタル事項ノ外造船者、汽機及汽鑵ノ製造者ノ氏名又ハ名稱並船舶ノ原名ヲ證スル書面

船舶法第二十條ニ掲ケタル船舶ノ積量總噸數二十噸以上又ハ積石數二百石以上ト爲リタル場合ニ在リテハ地方長官ニ於テ前項第二號ニ掲ケタル事項ヲ證スル書面ヲ申請書ニ添附スヘシ

第九條　積量ノ測度ハ船舶檢査執行地ニ於テ之ヲ行フ但船舶ノ構造、航路ノ狀況又ハ其他ノ事由ニ依リ船舶ヲ檢査執行地マテ航行セシムルコト能ハサル場合ニ於テ管海官廳ノ認可ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第十條　積量ノ測度ヲ申請スル者ハ測度ヲ受クルニ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第十一條　第八條及前條ノ規定ハ船舶法第四條第三項ノ規定ニ依リ外國ニ於テ船舶ノ積量ノ測度ヲ申請スル場合ニ之ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テハ當該官廳ハ運輸ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ關係書類ヲ送付スヘシ

第十二條　管海官廳ニ於テ積量ノ測度ノ申請ヲ受ケタルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ニ臨檢シ第二號書式ノ船舶件名書ヲ調製セシムヘシ

管海官廳ハ船舶件名書ノ謄本ヲ申請者ニ交付シ同時ニ第八條第二項及第三項ニ依リ差出シタル證書ヲ還付スヘシ

第十三條　前條ノ規定ハ第十一條ノ場合ニ之ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テハ當該官廳ハ運輸ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ關係書類ヲ送付スヘシ

第十四條　第九條但書ノ場合ニ於テ船舶ノ所在地當該管海官廳ノ管轄區域外ナルトキハ該官廳ハ其所在地ヲ管轄スル管海官廳ニ第十二條ニ規定スル事務ヲ囑託スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ囑託ヲ受クタル管海官廳ハ囑託ヲ爲シタル管海官廳ニ船舶件名書ヲ送付スヘシ

第十五條　船舶法第九條ノ規定ニ依リ船舶ノ積量ノ改測ヲ申請セントスル者ハ申請書ニ改測ヲ受ケントスル部分及測度ノ爲メ檢査官吏ノ臨場ヲ受ケントスル場所ヲ記載シ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ

第九條第十條第十二條及前條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十六條　國籍ヲ取得スル目的ヲ以テ內國ニ於テ製造スル船舶ニ付テハ其竣工前ト雖モ最寄管海官廳ニ積量ノ部分測度ヲ申請スルコトヲ得但噸ノ甲板下部ノ噸數及甲板間ノ噸數ヲ測度スルコトヲ得ルニ至ラサルトキハ此限ニ在ラス

第十條及第十二條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第八條ノ申請ヲ爲ス者前項ノ規定ニ依リ船舶件名書ノ謄本ヲ受ケタルトキハ之ヲ申請書ニ添附スヘシ

第三章　船舶ノ登錄

第十七條　船舶法第五條第一項ノ規定ニ依リ船舶ノ登錄ヲ爲スニハ申請書ニ登記ノ謄本ヲ添ヘ之ヲ管海官廳ニ差出スヘシ

管海官廳ハ關係書類ヲ調査シ汽船及機關ヲ有スル帆船ニ在リテハ左ノ事項ヲ船舶原簿ニ登錄ス

一　番號

二　信號符字

三　種類

四　名稱

五　船籍港

六　甲板ノ層數及種類

七　外板ノ材料

八　船骨ノ材料

九　檣ノ數

十　綱具ノ裝置

十一　船首ノ形狀

十二　船尾ノ形狀

十三　造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル長

十四　船舶積量測度方法ニ依ル量噸甲板下ノ長

十五　造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル幅

十六　船體最廣部ニ於テ內張板ノ內面ヨリ內面マテノ幅

十七　造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル深

十八　船舶積量測度方法ニ依ル量噸甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底內張板ノ上面マテノ深

十九　支水隔壁ノ數

二十　二重底ノ位置及容量

二十一　最大喫水

二十二　量噸甲板下部ノ噸數

二十三　量噸甲板上部ノ噸數

甲板間ノ噸數

船首樓ノ噸數

船橋樓ノ噸數

船尾樓ノ噸數

圓室ノ噸數

其他蔽圍セル場所ノ噸數

二十四　總噸數

二十五　登簿噸數

二十六　船員常用室ノ噸數

二十七　機關室ノ噸數

二十八　汽機ノ種類及數

二十九　汽鑵ノ種類及數

三十　汽鑵ノ材料

三十一　汽筩ノ數

三十二　汽筩ノ徑

三十三　汽筩ノ行長

三十四　推進器ノ種類及數

三十五　公稱馬力

三十六　製造地

三十七　進水ノ年月日

三十八　汽機製造ノ年月日

三十九　汽鑵製造ノ年月日

四十　汽機製造者ノ氏名又ハ名稱

四十一　汽鑵製造者ノ氏名又ハ名稱

四十二　造船者ノ氏名又ハ名稱

四十三　原名

四十四　所有者ノ氏名又ハ名稱及住所數共有者ナルトキハ其持分

帆船ニ在リテハ前項第一號乃至第二十六號第三十六號第三十七號第四十二號乃至第四十四號ノ事項ヲ登錄ス

石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ在リテハ第二項第一號第三號乃至第五號第七號乃至第九號第三十六號第三十七號第四十二號乃至第四十四號ノ事項及左ノ事項ヲ登錄ス

一　船首ノ內面ヨリ船尾ノ內面ニ至ル船底水平ノ長

二　船體最廣部ニ於テ外板ノ內面ヨリ內面マテノ幅

三　腰當梁ノ中央ニ於テ其上面ヨリ航ノ上面マテノ深

四　積石數

第二項第十四號第十六號第十八號及前項ノ長、幅及深ハ曲尺ヲ以テ測リタル尺度ヲ登錄ス

第十八條　船舶ノ名稱ヲ變更セントスル者ハ其事由ヲ記載シタル申請書ヲ管海官廳ニ差出スヘシ

第十九條　管海官廳ニ於テ船舶ノ名稱ノ變更ヲ許可スルハ左ノ場合ニ限ル

一　所有者ノ氏名、名稱又ハ之ト同一ト認ムヘキ名稱ヲ有スル船舶ヲ取得シタルトキ

二　船舶ノ名稱ニ番號ヲ冠附シ又ハ冠附シタル番號ヲ變更若クハ削除スルトキ

三　所有者ニ於テ自己ノ行爲ニ因ルニアラスシテ船舶ノ名稱ノ爲メニ著シキ不便ヲ受クルトキ

第二十條　甲管海官廳ノ管轄區域内ニ船籍港ヲ定メタル船舶ノ船籍港ヲ乙管海官廳ノ管轄區域内ニ變更スル場合ニハ甲管海官廳ニ變更ノ登錄ヲ申請スヘシ

前項ノ場合ニ於テ甲管海官廳ハ其船舶ニ關スル船舶原簿ノ謄本及其附屬書類ヲ乙管海官廳ニ移送シ該船舶ノ登錄用紙ヲ閉鎖ス

船舶原簿ヲ謄本ニハ現存セル登錄ノミヲ謄寫ス

乙管海官廳ハ第二項ノ規定ニ依リ移送ヲ受ケタル謄本ニ依リ其船舶原簿ニ登錄ヲ移ス

第二十一條　船籍港甲管海官廳ノ管轄區域内ヨリ乙管海官廳ノ管轄區域内ニ轉屬シタルトキハ管海官廳ハ申請ヲ待タス前條第二項乃至第四項ノ手續ヲ爲ス

第二十二條　第十七條第二項第六號乃至第十二號第十九號乃至第二十一號第二十八號乃至第三十五號ノ事項ニ變更ヲ生シタル場合ニ於テ變更ノ登錄ヲ爲サントスル者ハ變更ニ係ル新舊事項ヲ申請書ニ列記シ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ

第十二條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十三條　船籍港ヲ管轄スル管海官廳ノ管轄區域外ニ船舶ノ所在スル場合ニ於テ前條ノ登錄ヲ爲サントスルトキハ船舶所在地ヲ管轄スル管海官廳ニ臨檢ヲ申請シ臨檢報告書ノ交付ヲ受クルコトヲ得

前項ノ臨檢報告書ハ前條第一項ノ申請書ニ之ヲ添附スヘシ

第二十四條　第十七條第二項第十三號乃至第十八號第二十二號乃至第二十七號又ハ第四項各號ノ事項ニ變更ヲ生シタル場合ニ於テ變更ノ登錄ヲ爲サントスル者ハ第十五條ノ申請ト同時ニ之ヲ爲スヘシ

第二十五條　船舶所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ申請書ニ變更ノ事實ヲ證スル登記ノ謄本又ハ抄本又ハ登記濟證ヲ添附シテ變更ノ登錄ヲ申請スヘシ

第二十六條　行政區畫、土地ノ名稱又ハ地番號ノ變更アリタルトキハ船舶原簿ニ記載シタル區劃名稱又ハ番號ハ當然之ヲ變更シタルモノト看做ス

但第二十一條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第二十七條　船舶法第十四條ノ規定ニ依リ抹消ノ登錄ヲ爲サントスル者ハ申請書ニ登記濟證ヲ添ヘ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ

前項ノ場合ニ於テ管海官廳ハ其船舶ノ登錄用紙ヲ閉鎖ス

第二十八條　船舶所有者ニ於テ登錄ニ錯誤又ハ遺漏アルコトヲ發見シタルトキハ其旨ヲ疏明シ登錄ノ訂正ヲ申請スヘシ

管海官廳ニ於テ登錄ニ錯誤又ハ遺漏アルコトヲ發見シタルトキハ船舶所有者ニ通知スヘシ

第二十九條　何人ト雖モ手數料ヲ納付シテ船舶原簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ヲ申請シ又利害ノ關係アル部分ニ限リ船舶原簿ノ閲覽ヲ請求スルコトヲ得

手數料ノ外郵送料ヲ納付シテ船舶原簿ノ謄本又ハ抄本ノ送付ヲ請求スルコトヲ得

第四章　船舶國籍證書及假船舶國籍證書

第三十條　管海官廳ニ於テ第十七條ニ依リ船舶ノ登錄ヲ爲シタルトキハ第三號書式ノ船舶國籍證書ヲ申請者ニ交付ス

第三十一條　船舶國籍證書ニ記載シタル事項ノ變更ニ依リ該證書ノ書換ヲ申請セントスル者ハ變更ノ登錄ノ申請ト同時ニ之ヲ爲スヘシ

第三十二條　第二十六條ノ規定ハ船舶國籍證書ニ記載シタル行政區畫、土地ノ名稱又ハ地番號ノ變更アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第三十三條　船舶國籍證書ノ毀損ニ依リ該證書ノ書換ヲ申請セントスル者ハ申請書ニ其事由ヲ記載シ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ

船舶國籍證書ノ滅失ニ依リ更ニ之ヲ請受ケントスルトキ亦同シ

第三十四條　第三十一條又ハ前條ノ申請ヲ受ケタル管海官廳ハ船舶國籍證書ヲ調製シ之ヲ申請者ニ交付ス但第二十條第一項ノ場合ニ於テハ乙管海官廳之ヲ交付ス

第三十五條　船舶國籍證書ノ書換ヲ申請シタル場合ニ於テ其交付アリタルトキハ遅滯ナク舊證書ヲ返還スヘシ

第三十六條　船舶法第十三條ノ規定ニ依リ假船舶國籍證書ヲ請受ケントスル船長ハ申請書ニ其事由ヲ記載シ假船舶國籍證書ニ記載スヘキ事項ヲ證明スルニ必要ナル書類アルトキハ其書類ヲ添ヘ管轄管海官廳ニ差出スヘシ

船舶國籍證書ノ毀損ニ依リ前項ノ申請ヲ爲シタル場合ニ於テ假船舶國籍證書ノ交付アリタルトキハ遅滯ナク船舶國籍證書ヲ返還スヘシ

假船舶國籍證書ノ樣式ハ第四號書式ニ依ル

第三十七條　船舶法第十五條又ハ第十六條ノ規定ニ依リ假船舶國籍證書ヲ請受ケントスル者ハ第五號書式ノ申請書ニ所有權ノ取得ヲ證スル書面ヲ添ヘ當該管海官廳ニ差出スヘシ

第三十八條　假船舶國籍證書ノ有効期間ハ其船舶ノ船籍港ニ回航セントスル場合ニ於テハ到達スヘキ期間ヲ標準トシ其他ノ場合ニ於テハ船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得ル期間ヲ標準トシ船舶法第十七條ニ定ムル期間内ニ於テ當該管海官廳之ヲ定ム

第三十九條　假船舶國籍證書ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ申請書ニ新舊事項ヲ列記シ最寄管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ

第三十二條乃至第三十五條ノ規定ハ假船舶國籍證書ニ之ヲ準用ス

第四十條　假船舶國籍證書ハ其效力ヲ失ヒタルトキ又ハ船舶國籍證書ヲ請受ケタルトキハ遅滯ナク之ヲ最寄管海官廳ニ返還スヘシ

第四十一條　本章ノ規定ニ依リ船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ヲ返還スヘキ場合ニ於テ之ヲ返還スルヿト能ハサルトキハ其事由ヲ疏明スヘシ

船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ノ滅失シタルトキ又ハ之ヲ返還スヘキ場合ニ於テ返還セサルトキハ管海官廳ハ其無效ナルコトヲ官報ニ公告ス

第四十二條　第二十八條ノ規定ハ船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ニ記載シタル事項ニ錯誤又ハ遺漏アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第五章　國旗及船舶ノ標示

第四十三條　船舶ハ左ノ場合ニ於テ國旗ヲ後部ニ掲クヘシ

一　帝國軍艦ヨリ要求セラレタルトキ

二　帝國ノ燈臺又ハ海岸警標ヨリ要求セラレタルトキ

三　外國ノ港ヲ出入スルトキ

四　外國貿易船帝國ノ港ヲ出入スルトキ

五　法令ニ別段ノ定アルトキ

第四十四條　船舶ニ標示スヘキ事項及其方法ハ左ノ如シ但石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ付テハ第四十五條ノ規定ニ依ル

一　船首兩舷ノ外部ニ船舶ノ名稱、船尾外部ノ見易キ所ニ船舶及船籍港ノ名稱ヲ四吋以上ノ國字及羅馬字ヲ以テ記スルコト

二　中央ノ船梁ニ船舶ノ番號、總噸數及登簿噸數ヲ彫刻シ又ハ其番號及噸數ヲ彫刻シタル板ヲ釘著スルコト

三　船首材及船尾材、船尾材ナキトキハ船柱ノ外部兩側面ヘ喫水ヲ示ス爲メ龍骨ノ下面、副龍骨ヲ有スルトキハ其下面直線ヨリ最大喫水ニ至ルマテ一呎毎ニ六吋ノ羅馬數字又ハ亞刺比亞數字ヲ以テ其尺度ヲ記シ數字ノ下端ハ其數字ノ表示セル喫水線ト一致スルコト

第四十五條　石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ハ前條ニ定メタル方法ニ依リ船尾ニ船舶及船籍港ノ名稱、船梁ニ船舶ノ番號及積石數ヲ標示スヘシ

第四十六條　船舶ノ標示ハ明瞭ニシテ久ニ耐ユル方法ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第四十七條　標示スヘキ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ遅滯ナク其標示ヲ改ムヘシ

第六章　登錄稅、手數料、旅費及日當

第四十八條　登錄稅法ノ規定ニ從ヒ登錄稅ヲ納付スルニハ左ノ區別ニ依リ相當ノ收入印紙ヲ貼用シタル登錄稅納付書ヲ登錄ノ申請書ニ添ヘテ差出スヘシ

一　第十七條第一項ノ場合ニ於テハ登錄稅法第四條一項第一號

二　船舶ノ名稱、船舶所有者ノ氏名又ハ名稱及住所又ハ共有者ノ持分ノ變更ニ依リ登錄ヲ爲ス場合、第二十二條又ハ第二十四條ノ場合ニ於テハ登錄稅法第四條第一項第四號

三　第二十七條ノ場合ニ於テハ登錄稅法第四條第一項第三號

四　船籍港變更ノ場合ニ於テハ登錄稅法第四條第一項第二號

第四十九條　登錄稅法第四條第一項第四號ニ付テハ第十七號第二項各號又ハ第四項各號ノ事項ノ變更ヲ以テ每一箇トス

第五十條　登錄稅納付書ニハ船舶ノ名稱、積量及稅金額ヲ記載シ登錄稅法第四條第一項第四號ノ場合ニ於テハ變更ノ箇數ヲモ記載スヘシ

第五十一條　第二十九條ノ手數料ハ左ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ申請書ニ貼用シテ之ヲ納付スヘシ

一　謄本ノ交付　一枚ニ付金二十錢

二　抄本ノ交付　一枚ニ付金二十錢

三　船舶原簿ノ閲覽　金二十錢

第五十二條　登錄稅納付書又ハ前條ノ申請書ニ貼用シタル收入印紙ハ管海官廳ニ於テ消印ヲ爲スヘキモノトス但申請者ニ於テ自己ノ便宜上消印ヲ爲スハ妨ナシ

第五十三條　船舶所有者ノ申請ニ依リ船舶檢査官吏ノ出張シタルトキハ船舶所有者ハ成規ノ旅費及日當ヲ當該管海官廳ニ納付スヘシ

第七章　罰則

第五十四條　本則ノ規定ニ依リ船舶國籍證書又ハ臨船船國籍證書ヲ返還スベキ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ其義務ヲ怠リタルトキハ船舶所有者ヲ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第五十五條　本則ハ船舶法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第五十六條　明治二十六年（二月）遞信省令第三號、同年（同月）遞信省令第六號、其後船舶取扱規則ハ同年（同月）遞信省令第六號、明治二十九年（四月）遞信省令第三號、登簿證書船舶免狀取扱規則ハ本則施行ノ日ヨリ廢止ス

第五十七條　船舶法施行ノ際登簿船舶免狀又ハ船籍札ヲ受有スル船舶ニシテ船舶法ノ規定ニ依リ登錄ヲ爲シ且船舶國籍證書ヲ將受ベキモノノ所有者ハ噸數十五噸以上又ハ容積百五十石以上ノ船舶ニ付テハ船舶法施行ノ後始テ定期檢査又ハ特別檢査ヲ申請スルトキ當該檢査官吏ニ、登簿噸數十五噸未滿ノ汽船及船舶ニ付テハ船舶法施行ノ日ヨリ起算シ二箇年內ニ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ容量ノ測度ヲ申請スベシ

前項ノ船舶ニシテ登簿船免狀又ハ船籍札ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生ジタルトキハ船舶所有者ハ前項ノ規定ニ拘ハラズ遲滯ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ前項ノ申請ヲ爲スベシ

第五十八條　第十條及第十二條ノ規定ハ前條ノ場合ニ之ヲ準用ス

前項ノ規定ニ依リ船舶ニ臨檢シタル檢査官吏ハ船舶ノ測度ニ關シ第十九條ノ規定ニ依リ容量ノ測度ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ遲滯ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ登錄及船舶國籍證書ノ交付ヲ申請スベシ

第五十九條　前條ノ規定ニ依リ容量ノ測度ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ遲滯ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ容量ノ測度ヲ申請スベシ

前項ノ申請ハ左ニ掲クル事項ヲ記載シタル申請書ヲ差出シテ之ヲ爲スベシ

一　船舶ノ種類、名稱及噸數

二　船籍港

三　船舶共有者ニ在リテハ各共有者ノ住所、氏名又ハ名稱及持分

第六十條　前條ノ申請書ニハ左ニ掲クル書面ヲ添附スベシ

一　登記ノ謄本

二　機關ヲ有スル船舶ニ在リテハ汽機及汽罐ノ製造者ニ於テ其製造ノ年月日ヲ證スル書面

三　船舶札ヲ受有スル船舶ニ在リテハ當該地方官廳ニ於テ原名、製造地、進水ノ年月日及造船者ノ氏名又ハ名稱ヲ證スル書面

第六十一條　管海官廳ニ於テ第五十九條ノ申請ニ依リ登錄ヲ爲ストキハ登簿船免狀又ハ船籍札ニ記載シタル製造年月ヲ以テ進水ノ年月日ト看做ス

第六十二條　登簿船免狀ヲ受有スル船舶ノ所有者船舶國籍證書ヲ將受ケタルトキハ遲滯ナク該免狀ヲ當該管海官廳ニ返還スベシ

船舶札ヲ受有スル船舶ノ所有者船舶國籍證書ヲ將受ケタルトキハ遲滯ナク該船舶札ヲ原地方官廳ニ返還スベシ

第六十三條　第五十四條ノ罰則ハ前條ノ懲務ヲ怠リタル船舶所有者ニ之ヲ準用ス

第六十四條　船舶法施行ノ際登簿船免狀又ハ船舶札ヲ受有スル船舶ハ登錄ヲ了シマテ第四十四條又ハ第四十五條ノ標示ヲ爲サヽルコトヲ得

第六十五條　第四十條及第五十四條ノ規定ハ船舶法施行ノ際受有スル假免狀又ハ之ニ準用ス

（第一號雛形式）

噸數測度申請書

一　汽（帆）船何丸

1　船籍港

何市郡村（何府縣何國何郡）

二　噸數

總噸數何噸又ハ噸石數何石

三　造船者ノ氏名又ハ名稱

何某又ハ何會社（何府縣何國何郡何市町村）

四　製造地

何府縣何國何郡何市町村

五　進水ノ年月日

明治何年何月何日

六　汽機製造者ノ氏名又ハ名稱

何某又ハ何會社

七　汽機製造ノ年月日

明治何年何月何日

八　汽罐製造者ノ氏名又ハ名稱

何某又ハ何會社

九　汽罐製造ノ年月日

明治何年何月何日

十　原名

何々

十一　所有者ノ氏名又ハ名稱及住所並共有者ナルトキハ其持分

何府縣何國何郡何市町村何番地何某又ハ何會

十二　船舶管理人ノ住所氏名

何府縣何國何郡何市町村何某

十三　測度ヲ受ケントスル場所

右者本條所載ノ事項ニ關シ（又ハ何國人何某ヨリ買受ケ）登簿內ニ船籍港ヲ定メ候ニ付依賴國庫相成度因テ保證書類相添此段及申請候也

住所

氏名

（第二號雛形式）

噸數測度證書

明治　年　月　日　何　某印

（管轄官廳名）

殿中

（備考）

1　船名、郡市町村名、氏名及名稱ニハ振假名ヲ附記シ外國ノ名稱ナルトキハ外國文字ヲ附記スベシ

二　原名ト稱スル國籍表符前ニ於ケル最近ノ船名ヲ記載ス

三　前記件名中船舶ノ種類ニ依リ事項ナキモノハ之ヲ省畧スベシ

（第三號雛形式）

船舶件名書

汽（帆）船何丸

1　甲板ノ層數及種類

二　外板ノ材料

鋼、鐵又ハ木

三　船骨ノ材料

鋼、鐵又ハ木

四　梁ノ數

何本

五　綱具ノ號數

「シップ」「バーク」「バーケンタイン」「ブリッジ」「ブリガンタイン」「スクーナー」「カッター」「スループ」等

六　船首ノ形狀

船尾形、角形又ハ丸形

七　船尾ノ形狀

圓形、橢圓形又ハ方形

八　造船規矩ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル長

何尺何寸

九　船舶容量測度方法ニ依ル量間甲板下ノ長

何尺何寸何分

十　造船規矩ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル幅

何尺何寸

十一　船體平面部ニ於テ內張板ノ內面ヨリ內面マテノ幅

何尺何寸何分

十二　造船規矩ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル深

何尺何寸

十三　船舶容量測度方法ニ依ル量間甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底內張板ノ上面マテノ深

何尺何寸何分

十四　支木間壁ノ數

幾何

十五　二重底ノ位置及容量

全通何噸又ハ船首何噸、船尾何噸、前艙何噸、後艙何噸等

十六　最大吃水

何尺何寸

十七　總噸數

何噸

十八　登簿噸數

何噸

十九　汽機ノ種類及數

單成、複成、三連成、三重成等　何箇

二十　汽罐ノ種類及數

筒形、橢圓形、ベルビー、ニー、木等式等　何箇

二十一　汽罐ノ材料

鐵又ハ鋼

二十二　汽筒ノ數

何箇

二十三　汽筒ノ徑

高壓何吋中壓何吋低壓何吋

二十四　汽筒ノ行長

何吋

二十五　推進器ノ種類及數

外輪、螺旋推進器等何箇

二十六　公稱馬力

幾何

右明治何年何月何日某所ニ於テ臨檢シタル船舶ノ通稱規矩之候也

所屬官廳

明治　年　月　日　官　氏　名　印

（備考）本雛式中ノ件名ハ汽船ヲ標準トシテ列擧シタルモノナルヲ以テ帆船ニ付テハ第十七條第三項乃至第五項ノ規定ニ依リ變更又ハ省略スベシ

（噸數測度）（第三號雛式）甲　汽船ニ用ユル分

番號		尺度		樣	圖
種類		船舶容量測度方法ニ依ル量間甲板下ノ長……	汽罐及機ノ種類		
		船體平面部ニ於テ內張板ノ內面ヨリ船底內張板ノ上ノ深	汽罐及機ノ種類		

船名		船舶容量測度方法ニ依ル量間甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底內張板ノ上面マテノ幅……	汽罐及機ノ種類		
			汽罐及機ノ製造年月日		

（輪廓錨鎖）（第三號書式）乙　帆船ニ用ユル分　竪一尺一寸五分　横一尺

菊花錨ノ紋章

番號	種類	船名	船籍港	造船者	製造地	進水ノ年月日	甲板ノ層數	外板ノ材料	船骨ノ材料	檣ノ數	綱具ノ裝置	船首ノ形狀	船尾ノ形狀

前記ノ事項ハ何レモ正確ニシテ本船ハ日本帝國ノ國籍ヲ有スルコトヲ證明ス

明治　年　月　日　　日本帝國　管海官廳名　印

所有者ハ又ハ共有者	
面マテノ深	汽鑵製造者
汽鑵製造ノ年月日	
噸數	
量噸甲板下部ノ噸數	
量噸甲板上部ノ噸數	
甲板間ノ噸數	
船首樓ノ噸數	
船橋樓ノ噸數	
船尾樓ノ噸數	
囲室ノ噸數	
其他蓋圍セル場所ノ噸數	
總噸數	
登簿噸數	
船員常用室ノ噸數	
機關室ノ噸數	

（輪廓錨鎖）（第四號書式）甲　汽船ニ用ユル分　竪一尺一寸五分　横一尺

菊花錨ノ紋章

番號	種類	船名	船籍港	造船者	製造地	甲板ノ層數	外板ノ材料	船骨ノ材料	檣ノ數	綱具ノ裝置	船首ノ形狀

所有者ハ又ハ共有者	
量噸甲板下部ノ噸數	
量噸甲板上部ノ噸數	
甲板間ノ噸數	
船首樓ノ噸數	
船橋樓ノ噸數	
船尾樓ノ噸數	
囲室ノ噸數	
其他蓋圍セル場所ノ噸數	
總噸數	
登簿噸數	
汽機ノ種類及數	汽鑵ノ種類及數
推進器ノ種類及數	汽機製造者
汽鑵製造者	汽機製造ノ年月日
汽鑵製造ノ年月日	

（輪廓錨鎖）（第三號書式）丙　石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ用ユル分　竪九寸　横六寸

菊花錨ノ紋章

番號	種類	船名	船籍港	造船者	製造地	進水ノ年月日	甲板ノ層數	外板ノ材料	船骨ノ材料	檣ノ數

所有者ハ又ハ共有者	
船尾ノ形狀	船員常用室ノ噸數

前記ノ事項ハ何レモ正確ニシテ本船ハ日本帝國ノ國籍ヲ有スルコトヲ證明ス

明治　年　月　日　　日本帝國　管海官廳名　印

（輪廓錨鎖）（第四號書式）乙　帆船ニ用ユル分　竪一尺一寸五分　横一尺

錨ノ紋章

種類	船名	船籍港	造船者	製造地	進水ノ年月日	甲板ノ層數	外板ノ材料	船骨ノ材料	檣ノ數	綱具ノ裝置	船首ノ形狀	船尾ノ形狀

本船ハ日本帝國ノ國籍ヲ有スルコトヲ證明ス此證書ハ來ル明治年月日マテ效力ヲ有スト雖モ其以前ニ於テ船籍港ニ到著シタルトキハ直ニ其效力ヲ失フ

明治　年　月　日　　日本帝國　管海官廳名　印

所有者ハ又ハ共有者	
甲板ノ層數	
量噸甲板下部ノ噸數	
量噸甲板上部ノ噸數	
甲板間ノ噸數	
船首樓ノ噸數	
船橋樓ノ噸數	
船尾樓ノ噸數	
囲室ノ噸數	
其他蓋圍セル場所ノ噸數	
總噸數	
登簿噸數	
船員常用室ノ噸數	
機關室ノ噸數	

（輪廓錨鎖）（第四號書式）丙　石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ用ユル分　竪九寸　横六寸

錨ノ紋章

種類	船名	船籍港	造船者	製造地	進水ノ年月日	甲板ノ層數	外板ノ材料	船骨ノ材料	檣ノ數

所有者ハ又ハ共有者	
船尾ノ形狀	船員常用室ノ噸數

前記ノ事項ハ何レモ正確ニシテ本船ハ日本帝國ノ國籍ヲ有スルコトヲ證明ス

明治　年　月　日　　日本帝國　管海官廳名　印

（第五號書式）

假船舶國籍證書交付申請書

汽（帆）船何丸

一　船籍港　何市町村（何府縣何國何郡）
二　製造地　何府縣何國何郡何市町村
三　造船者　何某又ハ何會社
四　進水ノ年月日　明治又ハ西暦何年何月何日
五　甲板ノ層數　何層
六　外板ノ材料　鋼、鐵又ハ木
七　船骨ノ材料　鋼、鐵又ハ木
八　檣ノ數　何本
九　綱具ノ裝置　「シップ」「バーク」「バーケンタイン」「ブリッグ」「ブリガンタイン」「スクーナー」「カッター」「スループ」等
十　船首ノ形狀　曲形、斜形又ハ直形
十一　船尾ノ形狀　圓形、楕圓形又ハ方形
十二　船舶積量測度方法ニ依ル量噸　甲板下ノ長　何尺何寸何分
十三　船體最廣部ニ於テ內張板ノ內面ヨリ內面マテノ幅　何尺何寸何分
十四　船舶積量測度方法ニ依ル量噸　甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底內張板ノ上面マテノ深　何尺何寸何分
十五　量噸甲板下部ノ噸數　何噸
十六　量噸甲板上部ノ噸數　何噸
甲板間ノ噸數　何噸
船首樓ノ噸數　何噸
船橋樓ノ噸數　何噸
船尾樓ノ噸數　何噸
圓室ノ噸數　何噸
其他載囤セル場所ノ噸數　何噸
十七　總噸數　何噸
十八　登簿噸數　何噸
十九　船員常用室ノ噸數　何噸
二十　機關室ノ噸數　何噸
二十一　汽機ノ種類及數　聯成、聯成冷汽、三聯成等　何箇
二十二　汽罐ノ種類及數　筒形、橢圓形、「ベルビーユ」水管式等　何箇
二十三　推進器ノ種類及數　外車、螺旋推進器等
二十四　汽機製造者　何某又ハ何會社
二十五　汽機製造ノ年月日　明治又ハ西暦何年何月何日
二十六　汽罐製造者　何某又ハ何會社
二十七　汽罐製造ノ年月日　明治又ハ西暦何年何月何日
二十八　船舶所有者又ハ共有者及持分　何府縣何國何郡何市町村何番地何某又ハ何會社

右者今般新造致シ（又ハ何國人何某ヨリ買受ケ等）候ニ付假船舶國籍證書交付相成度船舶法第十五條（又ハ第十六條）船舶法施行細則第三十七條ニ依リ關係書類何通相添此段及申請候也

明治　年　月　日　　住所　氏名　印

（管海官廳名）御中

備考　本書式中ノ件名ハ汽船ヲ標準トシテ列擧シタルモノナルヲ以テ帆船ニ付テハ第四號書式ノ乙、丙ノ書式ニ記載シタル件名ニ對照シ變換又ハ省略スヘシ

國籍證書

尺度及積量

船首ノ內面ヨリ船尾ノ內面ニ至ル船底水平ノ長　船體最廣部ニ於テ外板ノ內面ヨリ內面マテノ幅　膠當梁ノ中央ニ於テ其上面ヨリ航ノ上面マテノ深　積石數

本船ハ日本帝國ノ國籍ヲ有スルコトヲ證明ス此證書ハ來ル明治　年　月　日マテ效力ヲ有スト雖モ其以前ニ於テ船籍港ニ到著シタルトキハ直ニ其效力ヲ失フ

明治　年　月　日　　日本帝國　管海官廳名　印

●西洋形船ヘ大小砲設備ヲ許ス（明治八年五月第九十八號布告）

海軍官船ヲ除クノ外西洋形船ヘ賊難防禦ノ爲メ大小砲設備ノ儀差許候條左ノ通可相心得此旨布告候事

第一條　海軍官船ヲ除クノ外諸省使府縣所轄ノ西洋形官船並ニ人民所持ノ西洋形商船ヘ大砲口徑四寸以內二門小銃三十挺設備スル事苦シカラス

但船ノ噸數ニ因リ本文ニ掲クル銃砲ノ數ヲ減スルカ又ハ銃砲ノ種類ヲ取捨スルハ其便宜ニ任スト雖モ若シ增造セントスルトキハ更ニ願出許可ヲ受クヘシ

第二條　大砲一門ニ彈藥五十發小銃一挺ニ付百發ヲ超ユヘカラス

第三條　船內ヘ銃砲ヲ設備スル時省使ハ正院ヘ上請シ府縣ハ內務省ヘ申出許可ヲ受クヘシ

但人民所持船ノ分ハ其管轄廳ヘ願出許可ヲ受クヘシ而シテ該廳ニ於テ免許狀ヲ與ヘ其旨內務省ヘ屆出ヘシ

第四條　銃砲ノ設備ヲ許可セシトキハ其旨海軍省ヘ通知スル事トス尤省使ノ分ハ正院ヨリシ府縣並ニ人民ノ分ハ內務省ヨリ通知スヘシ

第五條　諸省使府縣並ニ人民ニ於テ外國ヨリ買入レノ船內ニ附屬セシ分モ前條ノ手續ニ依ルヘシ

但銃砲彈藥等買入ルル節ハ明治五年（正月）第二十八號布告銃砲取締規則ニ從フヘシ

●外國ヘ渡航ノ日本形商船國旗掲揚ノ件（明治十年七月第五十二號布告）

自今外國ヘ渡航ノ日本形商船ハ大小ノ別ナク國旗ヲ掲揚可致此旨布告候事

但國旗ノ寸法ハ明治三年正月布告商船規則中三種ノ內小形ノ分ヲ可用事

●日本形船舶五百石以上ノ船舶製造ヲ禁ス（明治十八年七月第十六號布告）

日本形五百石以上ノ船舶ハ明治二十一年一月ヨリ其製造ヲ禁止ス

●船舶檢査法（明治二十九年四月法律第六十七號）

帝國議會ノ協贊ヲ經タル船舶檢査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶檢査法

第一條　日本船舶ハ左ニ記載スルモノヲ除ク外此ノ法律ノ規程ニ依リ檢査ヲ受クヘシ

一　海軍艦船艇
二　登簿噸數十五噸未滿若ハ積石數百五十石未滿ノ帆船
三　湖川其ノ他靜隱ノ海上ヲ航行スル帆船
四　櫓櫂ノミヲ以テ航行スル船舶

第二條　此ノ法律ニ依リ檢査ヲ受クヘキ汽船ハ遠洋航船、近海航船、沿海航船、平水航船ノ四種トシ帆船ハ遠洋航船、近海航船ノ二種トス

第三條　船舶ノ檢査ハ船舶ヲ日本船舶トシテ初メテ航行ノ用ニ供スルトキ其ノ航行期間滿了ノトキ及航行期間內特ニ必要アルトキ之ヲ行フ

第四條　船舶ノ航行期間ハ汽船ニ在テハ三箇月以上一箇年以內、帆船ニ在テハ六箇月以上三箇年以內トス

第五條　登簿噸數十五噸以上若ハ積石數百五十石以上ノ船舶ノ檢査ハ其ノ所在地ヲ管轄スル船舶司檢所之ヲ行ヒ登簿噸數十五噸未滿ノ汽船ノ檢査ハ其ノ仕出地ノ地方官廳之ヲ行フ

第六條　檢査官吏船舶ヲ檢査シ遞信大臣ノ定ムル檢査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ本船ノ航路定限、旅客定員、汽壓制限及航行期間ヲ定メ管轄官廳ヨリ船舶檢査證書ヲ交付スヘシ

第七條　檢査ヲ受ケタル船舶ノ所有者又ハ船長ニ於テ船舶檢査證書ノ受有前ニ船舶ヲ航行ノ用ニ供セムトスルトキハ檢査官吏ハ其ノ請求ニ依リ假證書ヲ交付シテ之ヲ許可スルコトヲ得

第八條　檢査官吏ハ何時ニテモ船舶ニ臨視シ若特ニ檢査ヲ爲スノ必要アリト認ムルトキハ其ノ航行ヲ停止スルコトヲ得

第九條　船舶ノ檢査ニ對シ不服アル者ハ其ノ事由ヲ具シ遞信大臣ニ再檢査ヲ申請スルコトヲ得

再檢査ヲ申請シタル者ハ其ノ決定前船舶ノ原狀ヲ變更スルコトヲ得ス

第十條　遞信大臣ノ特ニ定ムル場合ノ外船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受有セスシテ船舶ヲ航行ノ用ニ供シ又ハ船舶檢査證書若ハ假證書ニ記載スル船舶ノ航路定限、航行期間ヲ超エテ航行シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

詐僞ノ所爲ヲ以テ船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受ケ又ハ汽壓制限ヲ超エテ航行シ又ハ檢査官吏ノ臨視ヲ拒ミ又ハ航行停止ノ命ニ違背シ又ハ必要ナル器具ノ豫備ヲ爲サスシテ船舶ヲ航行ノ用ニ供シタル者亦同シ

船舶檢査證書若ハ假證書ニ記載スル旅客定員ヲ超エテ旅客ヲ搭載シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條　前條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

前條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス

第十二條　船舶ノ航路定限、航行期間、旅客定員及汽壓制限ニ關スル規程其ノ他此ノ法律ノ施行

ニ必要ナル細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

附則

第十三條　此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第十四條　明治十七年第三十號布告西洋形船舶檢査規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十五條　明治十七年第三十號布告西洋形船舶檢査規則ニ依リ交付シタル船舶檢査證書ハ其ノ有效期間滿了マテ効力ヲ有ス

第十六條　此ノ法律施行ノ際現存スル積石數百五十石以上ノ帆船ハ遞信大臣ノ定ムル順序ニ依リ漸次檢査ヲ受クルマテ船舶檢査證書ヲ受有セスシテ航行ノ用ニ供スルコトヲ得

第十七條　此ノ法律ハ外國ノ船籍ニ屬スル船舶ヲ借入レ帝國各港ノ間又ハ帝國ト外國トノ間ニ於テ航行ノ用ニ供スル者ニモ亦之ヲ適用ス

●船舶檢査法施行細則（明治三十年五月遞信省令第六號）

船舶檢査法施行細則左ノ通定ム

船舶檢査法施行細則

第一章　總則

第一條　本則ニ於テ檢査官廳ト稱スルハ登簿噸數十五噸以上若ハ積石數百五十石以上ノ船舶ニ關シテハ其ノ所在地ヲ管轄スル船舶司檢所、登簿噸數十五噸未滿ノ船舶ニ關シテハ其ノ仕出地ノ地方官廳ヲ謂フ

第二條　本則ニ於テ船舶所有者ニ關スル規程ハ特ニ明文ヲ掲クル場合ノ外船舶檢査法第十七條ニ依リ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ借用者ニモ之ヲ適用ス

第二章　檢査

第三條　船舶檢査法ニ依リ船舶ノ檢査ヲ受ケントスルトキハ日本船舶ニ在テハ其ノ所有者若ハ船長ヨリ第一號書式ノ申請書、外國船舶ニ在テハ其ノ借用者ヨリ第二號書式ノ申請書ヲ檢査官廳ニ差出スヘシ

第四條　船舶司檢所ノ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ檢査執行地ハ遞信大臣之ヲ定メ地方官廳ノ檢査ヲ受クヘキ船舶ノ檢査執行地ハ地方長官之ヲ定ム

第五條　第四條ニ依リ定ムル場所ノ外ニ於テ船舶ノ檢査ヲ受ケントスル者ハ事由ヲ具シテ檢査官廳ニ申請スルコトヲ得

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請ヲ相當ノ理由アリト認ムルトキハ檢査官吏ヲ派シ檢査ヲ執行セシムヘシ

第六條　檢査申請者ハ船舶檢査規程ニ從ヒ船體機關及屬具ノ檢査ニ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第七條　檢査官吏船舶ニ臨檢シタルトキハ檢査申請者ハ登簿船免狀、船籍札、船舶檢査證書、船舶檢査手帖、船舶職員ノ海技免狀、海員屬入證書、備品明細書及日誌等檢査ニ必要ナル書類ヲ其ノ檢閲ニ供スヘシ

第三章　船舶檢査證書

第八條　檢査官吏船舶ヲ檢査シ船舶檢査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ檢査官廳ヨリ第三號書式ノ船舶檢査證書ヲ檢査申請者ニ交付スヘシ

第九條　檢査申請者船舶檢査法第七條ニ依リ假證書ノ交付ヲ申請シ檢査官吏ニ於テ其ノ船舶ヲ船舶檢査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ第四號書式ノ假證書ヲ交付スヘシ

假證書ノ有效期間ハ船舶檢査證書ト交換シ得ヘキ期間ヲ標準トシ三箇月ノ範圍内ニ於テ檢査官吏之ヲ定ム

船舶檢査證書ヲ受有シタルトキハ當該檢査官廳ニ假證書ヲ返納スヘシ

第十條　船舶檢査證書若ハ假證書ハ船内最モ見易キ場所ニ掲示スヘシ

第十一條　船舶檢査證書若ハ假證書ヲ亡失若ハ毀損シタルトキ又ハ之ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ事由ヲ具シ證據書類ヲ添ヘテ檢査官廳ニ其ノ再授若ハ書換ヲ申請スヘシ

船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受有スル船舶ノ所有權ヲ移轉シタルトキハ新舊所有者ノ連署ヲ以テ又ハ新所有者ヨリ登簿船免狀若ハ登記ノ謄本ヲ添ヘ檢査官廳ニ該證書ノ書換ヲ申請スヘシ

前二項ニ依リ船舶檢査證書若ハ假證書ノ書換ヲ申請シ新證書ヲ受有シタルトキハ舊證書ヲ返納スヘシ

第十二條　船舶檢査證書若ハ假證書ハ左ニ掲クル場合ニ於テ其ノ受有者ヨリ檢査官廳ニ返納スヘシ

第一　船舶ノ航行期間又ハ假證書ノ有效期間滿了ノトキ

第二　船舶航行ノ用ヲ爲ササルニ至リタルトキ

第三　日本船舶タル資格ヲ失ヒタルトキ

第四　外國船舶ノ使用ヲ解除シタルトキ

第五　第二十七條ノ申請ニ依リ檢査ヲ執行シ新證書ヲ交付シタルトキ

第十三條　左ノ場合ニ於テハ船舶檢査證書若ハ假證書ヲ受有セス又ハ船舶檢査證書若ハ假證書ニ記載スル船舶ノ航路定限若ハ航行期間ヲ超エテ船舶ヲ航行ノ用ニ供スルコトヲ得

第一　船舶檢査執行地外ニ於テ新造、修繕、購入若ハ國ヒタル船舶ニシテ檢査ヲ受クル爲メ旅客貨物ヲ搭載セス檢査執行地マテ航行スルトキ但シ外國ニ於テ新造、修繕若ハ購入シタル船舶ニシテ帝國領海ニ於テ相當ト認ムル適航證書ヲ有スルトキハ旅客貨物ヲ搭載スルコトヲ得

第二　航路定限内ノ地ニ船舶檢査執行地無キ場合ニ於テ檢査ヲ受クル爲メ旅客貨物ヲ搭載セスシテ檢査執行地マテ航行スルトキ

第三　航路定限外ノ地ニ於テ檢査ヲ受ケタル船舶ニシテ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ航路定限内ノ地マテ航行スルトキ

第四　外國ヨリ歸航スル船舶ニシテ外國ニ於ケル最終ノ寄港地ヲ發シタル後航行期間滿了スル場合ニ於テ檢査官廳所在ノ最初ノ寄港地ニ於テ其ノ認可ヲ受ケ到達地マテ航行スルトキ

第五　船體機關其ノ他要部修繕ノ爲メ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ工場所在地マテ航行スルトキ

第六　沿海航船若ハ平水航船ニシテ航路定限變更ノ爲メ檢査官廳ノ認可ヲ受ケ航路區域外ヲ航行スルトキ

第十四條　第十三條第三號乃至第六號ニ依リ船舶ヲ航行ノ用ニ供セントスルトキハ船舶所有者ヨリ事由ヲ具シテ檢査官廳ニ其ノ認可ヲ申請スヘシ

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請書ヲ受理シ同航ニ差支ナシト認ムルトキハ第五號書式ノ同航認可證書ヲ交付スヘシ但シ旅客貨物ノ搭載ヲ禁スルヲ必要ト認ムルトキハ其旨ヲ該證書ニ記入スヘシ

同航認可證書ノ有效期間ハ同航ニ要スル期間ヲ標準トシテ檢査官廳之ヲ定ム

同航認可證書ニハ第十一條及第十二條ヲ準用ス

第四章　航路定限

第十五條　船舶ノ航路ハ左ノ四種トス

第一　遠洋航路

内外國ノ各地ニ通スルモノ

第二　近海航路

東經百十三度ヨリ同百五十七度及北緯二十一度ヨリ同五十二度ニ至ル線内

第三　沿海航路

一　上總國八幡崎ヨリ安房國野島崎、伊豆國大島及神子元島ヲ經テ遠江國御前崎ニ至ル線内

二　三河國伊良胡崎ヨリ志摩國大王崎ニ至ル線内及大王崎ヨリ紀伊國大島汝岬ヲ經テ日ノ岬ニ至ル線内但シ第三區内ニ連通スルコトヲ得

三　紀伊國日ノ岬ヨリ阿波國伊島ニ至ル線内、伊豫國佐田崎ヨリ豐後國地藏崎ニ至ル線内及筑前國蘆屋ヨリ岩屋崎ヲ經テ長門國觀音崎ニ至ル線内但シ第二區若ハ第四區ノ一區内ニ連通スルコトヲ得

四　豐後國地藏崎ヨリ伊豫國佐田崎ニ至ル線内及土佐國伊佐岬ヨリ日向國細島ニ至ル線内但シ第三區内ニ連通スルコトヲ得

五　土佐國室戸崎ヨリ伊佐岬ニ至ル線内

六　日向國都井崎ヨリ大隅國種子島、屋久島、口永良部島、黑島ヲ經テ薩摩國野間岬ニ至ル線内

七　薩摩國黑瀨戸ヨリ肥前國五島ヲ經テ平戸海峽ニ至ル線内

八　出雲國日ノ岬ヨリ隱岐列島ヲ經テ伯耆國加露ニ至ル線内

九　但馬國餘部崎ヨリ越前國安島崎ニ至ル線内

十　能登國狼剛崎ヨリ佐渡國飛島ヲ經テ羽後國酒田ニ至ル線内

十一　陸前國花淵崎ヨリ金花山ヲ經テ陸中國久慈ニ至ル線内

十二　陸奥國尻矢崎ヨリ渡島國恵山岬ヲ經テ勝振國室蘭ニ至ル線内及陸奥國權現崎ヨリ小島ヲ經テ渡島國江差ニ至ル線内

十三　後志國辨慶岬ヨリ神威崎天鹽國增毛ニ至ル線内

十四　釧路國釧路ヨリ根室國納沙布岬及野付ヲ經テ知床崎ニ至ル線内及其ノ線内ノ沿岸

十五　琉球本島ヨリ沖繩諸群島間

第四　平水航路

一　湖川港内

二　相模國觀音崎ヨリ上總國富津ニ至ル線内

三　駿河國三保崎ヨリ伊豆國戸田港ニ至ル線内

四　三河國伊良胡崎ヨリ志摩國菅島ニ至ル線内

五　紀伊國官崎ヨリ加太港ニ至ル線内

六　紀伊國苫ケ島海峽及播磨國明石海峽以内ノ沿岸

七　播磨國室津ヨリ小豆島大角崎ヲ經テ讃岐國小田鼻ニ至ル線内及讃岐國三崎ヨリ備後國鞆ニ至ル線内

八　備後國鞆ヨリ伊豫國今治ニ至ル線内及伊豫國三津濱ヨリ周防國屋代島ヲ經テ上ノ國ニ至ル線内

九　豐後國地藏崎ヨリ美濃崎ニ至ル線内

十　豐前國今津ヨリ長門國本山鼻ニ至ル線内及筑前國若松ヨリ長門國六連島ヲ經テ村崎鼻ニ至ル線内

十一　筑前國西浦崎ヨリ志賀島大崎ニ至ル線内

十二　筑前國鹿家崎ヨリ肥前國神集島ヲ經テ呼子港ニ至ル線内

十三　肥前國津崎ヨリ鷹島ヲ經テ値賀崎ニ至

ル線内
十四　肥前國向後崎ヨリ番所崎ニ至ル線内
十五　肥前國野母崎ヨリ三重崎ニ至ル線内
十六　肥前國口ノ津ヨリ肥後國天草島大島崎ニ至ル線内
十七　肥後國天草島井探港及黒瀬戸以内
十八　薩摩國山川港ヨリ大隅國小根占川ニ至ル線内
十九　田雲國地蔵崎ヨリ伯耆國日野川ニ至ル線内
二十　丹後國鷲崎ヨリ博奕崎ニ至ル線内
二十一　越前國立石崎ヨリヲカ崎ニ至ル線内
二十二　能登國観音崎ヨリ沖波草ニ至ル線内
二十三　陸奥國平館ヨリ九艘泊ニ至ル線内
二十四　陸前國花淵崎ヨリ宮戸島萱ノ崎ニ至ル線内
二十五　渡島國函館山尾花岬ヨリ葛登支岬ニ至ル線内
二十六　後志國鮏慶岬ヨリ磯谷ニ至ル線内
二十七　後志國日和山ヨリ神威岬ニ至ル線内
二十八　釧路國尻羽崎ヨリ大黒島ヲ經テルムセシマ岬ニ至ル線内

第十六條　各船舶ノ航路定限ハ其ノ大小、現狀及季節ニ應シ船舶檢査法第二條ニ依リ前條ニ定ムル區域以内ニ於テ檢査官吏之ヲ定ム但シ遠洋航船若ハ近海航船ノ航路ヲ制限セントスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十七條　沿海航船若ハ平水航路ヲ第十五條第三號若ハ第四號ニ掲クル航路區域ノ内外ニ跨リテ航路ヲ限リ若ハ其ノ區域外ニ於テ新ニ航路ヲ限リ航行セシメントスルトキハ船舶所有者ヨリ事由ヲ具シ檢査官廳ヲ經由シテ其ノ認可ヲ遞信大臣ニ申請スヘシ

第十八條　第十七條ノ場合ノ外船舶ノ航行期間内ニ於テ其ノ航路定限ヲ變更セントスルトキハ船舶所有者ヨリ事由ヲ具シテ其ノ認可ヲ檢査官廳ニ申請スヘシ

檢査官廳ニ於テ前項ノ申請書ヲ受理シタルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ノ大小、現狀及航路ノ狀況ヲ査覈セシメ意見書ヲ添附シテ申請書ヲ遞信大臣ニ進達スヘシ

第十九條　船舶ノ旅客定員ハ其ノ航路定限、旅客室ノ等級及積量ニ應シ左ノ割合ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第一　遠洋航船
上等室　一人ニ付　面積十二平方尺　容積七十三立方尺　以上
中等室　一人ニ付　面積十二平方尺　容積六十立方尺　以上
下等室

第二　近海航船
上等室　一人ニ付　面積九平方尺　容積六十立方尺　以上
中等室　一人ニ付　面積九平方尺　容積五十立方尺　以上
下等室

但シ航路ヲ定限シタル航路ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間二十四時間以内ナルトキハ

第三　沿海航船
上等室　一人ニ付　面積十二平方尺　容積六十立方尺　以上
中等室　一人ニ付　面積九平方尺　容積五十立方尺　以上
下等室　一人ニ付　面積六平方尺　容積四十立方尺　以上

但シ航路定限ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間六時間以内ナルトキハ平水航船ノ割合ニ據ルコトヲ得

第四　平水航船
上等室　一人ニ付　面積九平方尺以上
中等室　一人ニ付　面積六平方尺以上
下等室　一人ニ付　面積四、五平方尺以上

但シ航路定限ノ最遠里程ヲ航行シ得ヘキ時間一時間以内ナルトキ又ハ其ノ航路定限ノ最遠里程五海里以内ナルトキハ其ノ航路ノ狀況ニ據リ下等室一人ニ付面積三平方尺マテニ遞減スルコトヲ得

第二十條　特別ノ契約ヲ以テ移住民若ハ人夫等多人數ヲ搭載セントスルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ當事者雙方ノ連署ヲ以テ第六號書式ノ申請書ニ船舶檢査證書ノ寫ヲ添ヘ船舶司檢所檢査執行地ニ於テハ其ノ船舶司檢所、其ノ他ノ地方ニ於テハ本船所在地ノ地方官廳ニ差出スヘシ

前項ノ官廳ニ於テ申請書ヲ受理シタルトキハ檢査官吏ヲシテ旅客ヲ搭載スヘキ場所及準備ノ適否ヲ査覈セシメ船舶檢査規程ニ依リ適當ト認ムル場合ニハ左ノ割合ニ依リ別種旅客室ノ旅客定員ヲ定ムヘシ

第一　近海航路區域外航行
一人ニ付　面積九平方尺　容積五十立方尺　以上

第二　近海航路區域内航行
航行時間二十四時間以上
一人ニ付　面積七平方尺　容積四十立方尺　以上
航行時間二十四時間未満
一人ニ付　面積五平方尺　容積廿五立方尺　以上

旅客ヲ搭載スル場合ニ於テ五歳以上十二歳未満ノ者ハ二人、五歳未満ノ者ハ四人ヲ以テ前條及本條ニ依リ定メタル旅客定員ノ一人トシテ計算スルコトヲ得（三十一年遞信省令第十二號ヲ以テ追加）

第二十一條　第二十條ノ官廳ニ於テ申請ヲ認可シタルトキハ第七號書式ノ別種旅客室檢査證書ヲ交付スヘシ

別種旅客室檢査證書ノ有效期間ハ航行ニ要スル期間ヲ標準トシ檢査官廳之ヲ定ム

別種旅客室檢査證書ニハ第十一條及第十二條ヲ準用ス

第二十二條　別種旅客室檢査證書ハ別種旅客室ニ掲示スヘシ

第二十三條　旅客室ニ貨物ヲ搭載シタルトキハ其ノ積量ニ對スル旅客員數ヲ減スヘシ

第二十四條　旅客室ト乘組員常用室、通常旅客室ト別種旅客室トハ各之ヲ區別スヘシ

第六章　汽壓制限

第二十五條　船舶ノ汽壓制限ハ機關ノ現狀ニ應シ船舶檢査規程ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第七章　航行期間

第二十六條　船舶ノ航行期間ハ船舶ノ現狀ニ應シ船舶檢査法第四條ニ依リ檢査官吏之ヲ定ム

第二十七條　船舶所有者若ハ船長ハ船舶ノ航行期間内ニ於テ檢査ヲ申請スルコトヲ得

第二十八條　船舶ノ航行期間内ニ於テ船舶ヲ入渠若ハ上架セントスルトキハ第八號書式ニ依リ船舶所有者若ハ船長ヨリ檢査官廳ニ届出ツヘシ但シ外國ニ於テ入渠若ハ上架シタル場合ハ此ノ限ニアラス

第二十九條　船舶ノ航行期間内ニ於テ船體機關其ノ他要部ニ損傷ヲ生シタルトキ又ハ之ヲ修繕變更セントスルトキハ船舶所有者若ハ船長ヨリ事由ヲ具シ修繕變更ヲ加フル場合ニハ其ノ仕樣書ヲ添附シテ檢査官廳ニ届出ツヘシ

第八章　臨視

第三十條　檢査官廳ニ於テ第二十八條若ハ第二十九條ノ届書ヲ受理シ必要ト認ムルトキ又ハ船舶ニ異狀アリト認ムルトキハ檢査官吏ヲシテ船舶ヲ臨視セシメ又ハ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命スヘシ

第三十一條　檢査官吏船舶ニ臨視シタルトキハ船舶所有者若ハ船長ニ於テ其ノ指揮ニ從フヘシ

第三十二條　檢査官吏第三十條ニ依リ船舶ニ臨視シ檢査ヲ執行スル必要アリト認ムルトキハ船舶ノ航行ヲ停止シ又ハ其ノ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命スヘシ

第九章　再檢査

第三十三條　船舶檢査法第九條ニ依リ船舶ノ再檢査ヲ申請セントスル者ハ事由ヲ具シ檢査ヲ執行シタル檢査官廳ヲ經由シテ申請書ヲ遞信大臣ニ差出スヘシ

第三十四條　遞信大臣ニ於テ第三十三條ノ申請書ヲ受理シ再檢査ヲ執行スルノ必要アリト認ムルトキハ特ニ檢査官吏ヲ命シ檢査ヲ執行セシムヘシ

第三十五條　遞信大臣ニ於テ再檢査ノ申請ヲ理由ナシト認ムルトキ若ハ申請者ニ於テ遞信大臣ノ認可ヲ受ケスシテ再檢査ノ執行前船舶ノ原狀ヲ變更シタルトキハ申請書ヲ却下スヘシ

第十章　旅費及手數料

第三十六條　第五條及第三十三條ニ依リ檢査官吏ノ出張ヲ要スルトキハ檢査申請者ハ成規ノ旅費日當ヲ納ムヘシ

第三十七條　第八條、第十一條、第十四條若ハ第二十一條ニ依リ船舶檢査證書、回航認可證書若ハ別種旅客室檢査證書ヲ交付シタルトキハ檢査申請者ハ手數料壹圓ヲ納ムヘシ

第十一章　罰則

第三十八條　第六條、第七條、第十條、第十一條、第十二條、第十四條第四項、第二十二條、第二十三條、第二十四條、第二十八條、第二十九條若ハ第三十一條ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス第三十條若ハ第三十二條ニ依リ船舶檢査證書若ハ假證書ノ返納ヲ命セラレタル者之ニ違背シタルトキ亦同シ

前項ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス

附則

第三十九條　本則ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第四十條　明治十八年農商務省告示第十四號、明治十九年遞信省令第一號及明治二十六年遞信省令第十八號西洋形船舶檢査細則ハ本則施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十一條　明治二十六年遞信省令第十八號西洋形船舶檢査細則ニ依リ交付シタル別種旅客室檢査證書及明治二十九年遞信省訓令第二號西洋形船舶檢査手續ニ依リ交付シタル航行認可書ハ本則第二十一條及第十四條ニ依リ交付シタルモノト見做ス

第一號書式
汽（帆）船　九第　回（特別）（定期）（臨時）檢査
申請書
一所有者ノ住所及氏名
一定繫場
一仕出地（登簿噸數十五噸未満ノ汽船ニ在テハ）十一條ニ依リ船舶檢査證書、回航認可證書若ハ別種旅客室檢査證書ヲ交付シタルトキハ檢査申請者ハ手數料壹圓ヲ納ムヘシ

一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一登簿噸數(積石數)
一前回ノ航路定限
一前回ノ汽壓制限
一前回ノ航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一前回汽罐水壓試驗ノ年月
一船長ノ氏名及其ノ海技免狀ノ種類

右汽(帆)船　航路ニ使用仕度目下　ニ碇泊(入渠若ハ上架)中ニ有之檢査準備整居候ニ付來　月　日御臨檢相成度此段申請候也

明治　年　月　日

所有者(船長)
氏　名　印
宿　所

檢査官廳宛

第二號書式

汽(帆)船　第　回定期(臨時)檢査申請書

一所有者ノ國籍及氏名
一借入者ノ住所及氏名
一定繋場
一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一總噸數
一登簿噸數
一汽機ノ種類
一汽罐ノ種類
一製造年月及場所
一借入ノ期間
一前回ノ航路定限
一前回ノ汽壓制限
一前回ノ航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一前回汽罐水壓試驗ノ年月
一船長ノ氏名及其ノ海技免狀ノ種類

右汽(帆)船　航路ニ使用仕度目下　ニ碇泊(入渠若ハ上架)中ニ有之檢査準備整居候ニ付來　月　日御臨檢相成度此段申請候也

明治　年　月　日

借入者
氏　名　印
宿　所

檢査官廳宛

第三號書式（竪九寸 横一尺三寸）

第　號

割印

船舶檢査證書

船名	船ノ種類	航路定限	航行期間		旅客定員		
					上等室	中等室	下等室
定繋場	登簿噸數若ハ積石數	所有者	汽機種類	汽罐種類	汽壓制限	端艇	船長

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス

明治　年　月　日

檢査官廳名　印

第四號書式（竪九寸 横一尺三寸）

假船舶檢査證書

船名	船ノ種類	航路定限	端艇	旅客定員		
				上等室	中等室	下等室
定繋場	登簿噸數若ハ積石數	所有者	汽機種類	汽罐種類	汽壓制限	船長

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス
但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日

檢査官吏官氏名　印
（檢査官吏二名以上ナルトキハ連署スルモノトス）

第五號書式

回航認可證書

所有者　住所　氏　名

右所有汽(帆)船　丸船舶檢査法施行細則第十三條第三(四、五若ハ六)項ニ依リ(旅客貨物ノ搭載ヲ禁シタルトキハ其旨ヲ記入ス)　ヨリ　迄航行スルコトヲ認可シ此ノ證書ヲ交付ス
但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日

檢査官廳名　印

第六號書式

汽(帆)船　丸別種旅客室檢査申請書

一仕出地及仕向地並寄港地(若シアラハ)
一航行里程
一平均速力
一航行豫定日限
一別種旅客ノ種類(移住民若ハ人夫等)
一別種旅客ノ人員
一別種旅客室ニ充ツヘキ場所

右汽(帆)船今般　ト契約ノ上別種旅客搭載航行仕度檢査準備整居候ニ付來　月　日ニ於テ御臨檢相成度船舶檢査證書寫相添以連署此段申請候也

明治　年　月　日

所有者(船長)
氏　名　印
宿　所

契約相手方
氏　名　印
宿　所

船舶司檢所(地方官廳)宛

第七號書式（竪九寸 横一尺一寸）

割印

別種旅客室檢査證書

船名	所有者	仕出地及仕向地並寄港地(若シアラハ)

別種旅客

種類	總員	內譯

右檢査ヲ遂ケ船舶檢査法施行細則ニ依リ此ノ證書ヲ交付ス
但シ此ノ證書ハ明治　年　月　日限リ無效トス

明治　年　月　日

船舶司檢所(地方官廳)名　印

第八號書式

汽(帆)船　丸入渠(上架)屆

一船主ノ住所及氏名
一定繋場
一船質(鋼、鐵、木若ハ木鐵)
一登簿噸數(積石數)
一航路定限
一汽壓制限
一航行期間
一前回檢査ノ場所
一前回入渠(上架)ノ年月
一今回入渠(上架)ノ事由及場所
一入渠(上架)ノ豫定月日
一出渠(下架)ノ豫定月日

右及御屆候也

明治　年　月　日

所有者(船長)
氏　名　印
宿　所

檢査官廳宛

●船舶檢査規程（明治三十年六月遞信省令第十二號）

船舶檢査規程左ノ通定ム

船舶檢査規程

第一章　總則

第一條　此ノ規程中鐵船ニ關スル規定ハ鋼船ニモ之ヲ適用ス

木鐵交造船ノ木部ニハ木船ニ關スル規定、其ノ鐵部ニハ鐵船ニ關スル規定ヲ準用ス

日本形西洋形ヲ折衷シテ構造シタル船舶ニハ其ノ構造部分ニ依リ西洋形船若ハ日本形船ニ關スル規定ヲ準用ス

第二條　此ノ規程ニ於テ旅客汽船ト稱スルハ十二人以上ノ旅客定員ヲ有スル汽船ヲ謂フ

第三條　此ノ規程ニ於テ特別檢査ト稱スルハ船舶ヲ日本船舶トシテ初テ航行ノ用ニ供スルトキ若ハ爾後船舶ノ狀況ニ依リ三年乃至五年毎ニ一回執行スルモノ、定期檢査ト稱スルハ初テ船舶ノ航行期間ヲ定ムルトキ及航行期間滿了ノトキ若ハ船舶檢査法施行細則第二十七條ノ申請アリタルトキ執行スルモノ又臨時檢査ト稱スルハ船舶檢査法施行細則第二十八條若ハ第二十九條ノ屆出又ハ其ノ他ノ原因ニ依リ檢査官廳ニ於テ必要ト認ムルトキ執行スルモノヲ謂フ

第四條　第二回以後ノ特別檢査ハ檢査官吏ニ於テ第三條ニ依リ豫メ期限ヲ定メテ船舶所有者若ハ船舶借用者ニ通知シ該期限內ニ於テ船舶所有者若ハ船舶借用者ノ便宜ナルトキ之ヲ執行ス

第五條　臨時檢査ニ於テ特別檢査ノ手續ヲ執行シタルトキハ其ノ檢査ヲ特別檢査トシ又定期檢査ノ手續ヲ執行シタルトキハ其ノ檢査ヲ定期檢査トスルコトヲ得

第六條　特別檢査ハ船舶ヲ入渠若ハ上架セシメテ之ヲ執行ス

進水後又ハ前回入渠若ハ上架後一年ヲ經過セサル船舶ニ在テハ檢査官吏ノ見込ニ依リ前項ノ入渠若ハ上架ヲ猶豫スルコトヲ得

第七條　第二回以後ノ特別檢査ニ於テハ船體、汽機及汽罐ハ各時ヲ異ニシテ之ヲ檢査スルコトヲ

得

前項ノ場合ニ於テ汽鑵ノ檢査ニハ船舶入渠若ハ上架セシムルニ及ハス

第八條　定期檢査及臨時檢査ハ船舶碇泊中ニ之ヲ執行ス但シ檢査官吏ノ見込ニ依リ其ノ入渠若ハ上架ヲ命スルコトヲ得

第九條　檢査官吏ハ檢査上必要ト認ムルトキハ船舶ノ試運轉ヲ命スルコトヲ得

第十條　檢査官吏ハ船舶ノ大小、年齢及現狀ニ依リ第十三條第一號第二號第三號及第五號、第十四條、第十五條、第三十四條第三項、第四十條、第七十四條、第七十五條、第八十二條第一號第二號及第三號並第八十三條ニ規定スル檢査方法ヲ變更若ハ增減スルコトヲ得

第十一條　檢査官吏ハ此ノ規程ニ規定セサルモノニ付テハ航行ノ安全ヲ目的トシ船體、機關及屬具ノ適否ヲ認定ス

船體、機關又ハ屬具ノ構造方法此ノ規程ニ該當セサルモ遞信大臣ニ於テ之ト同一ノ效力ヲ有スト認メタルトキハ此ノ規程ニ適合スルモノト看做ス(三十一年遞信省令第二十七號ヲ以テ追加)

第十二條　水壓試驗ノ執行ハ檢査官吏ノ適當ト認ムル證明書ヲ有スルモノニ限リ之ヲ省略スルコトヲ得

第二章　西洋形船舶船體部檢査

第一節　檢査準備

第十三條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　船體ノ內外適宜ノ場所ニ足場ヲ設クルコト

二　石炭及荷足ヲ取出シ船體ニ固著セサル物品ハ成ルヘク取片付ケ又淦水道覆板ハ悉ク取除ケ船體ノ內外部トモ總テ掃除スルコト

三　二重底及水艙ハ出入口ヲ開キ其ノ水ヲ排出シ內部ヲ掃除シ檢閱ニ支障ナカラシムルコト

四　船體屬具ノ中取外ササレハ檢査シ得サルモノハ之ヲ取外シ手用淦水喞筒、手用消防喞筒及操舵具等ハ所屬具ヲ取揃ヘ錨鎖、大索、帆類、船燈、信號器、救命具其ノ他航海ノ要具ハ總テ適宜ノ場所ニ排列シ置クコト

五　端艇ハ所屬具ヲ備ヘ水上ニ浮ヘ置クコト

第十四條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ第十三條ニ掲クル準備ノ外鐵船ハ船底外部ノ塗料ヲ搔落シ木船及木鐵交造船ハ船底包板ノ幾分ヲ剝去シ外板ノ現狀、塡隙及固著釘ヲ檢査スルニ支障ナカラシムヘシ

第十五條　特別檢査ニ於テハ第十三條及第十四條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　肋骨及外板內面ノ現狀ヲ檢スル爲メ內張板ノ幾分ヲ取離スコト

二　梁端及梁上側板ヲ檢スル爲メ甲板ノ幾分ヲ取離スコト

三　鐵船ニ於テハ第一號及第二號ニ掲クル外船舶ノ年齡及現狀ニ依リ船底其ノ他ニ塗リタル「セメント」ノ幾分ヲ取離シ且外板、肋骨、隔壁、二重底ノ內底板其ノ他要部ニ於ケル鐵板ノ厚ヲ檢スル爲メ小孔ヲ穿ツコト

四　木船ニ於テハ第一號及第二號ニ掲クル外船底包板及毛紙ノ全部又ハ幾分ヲ剝去シ船骨ノ要部ヲ檢スル爲メ外板ノ幾分ヲ取離シ且固著釘ノ現狀ヲ檢スル爲メ其ノ若干ヲ拔取ルコト

第十六條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第二節　船體檢査

第十七條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部ハ左ノ如シ

諸內龍骨、縱通材、船首及船尾肘材、肋骨、梁、梁受材、梁肘材、梁曲材、梁柱、隔壁、支水戸、支水瓣、淦水道、汽機及汽鑵ノ臺、石炭庫、船底「セメント」、車軸隧道、船尾管、上面甲板、二重底、甲板、塡隙、船口、艙貨門、舷窓、天窓、以上諸部ノ固著方及釘

第十八條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査ニ於テハ第十七條ニ掲クルモノノ外左ノ要部ヲ檢査スルモノトス

龍骨、船首材、船尾骨材、龍骨翼板、其ノ他外板、塡隙、船底外部ニ通スル諸孔、鑿、嘴子、芥除、飛、以上諸部ノ固著方及釘

第十九條　特別檢査ニ於テハ第十七條及第十八條ニ掲クルモノノ外船骨、外板、甲板等ノ內定期檢査ニ於テ檢査セサル部分ヲ檢査スルモノトス

第二十條　鐵船及木鐵交造船ハ船ノ中央部ニ於テハ梁每ニ、首尾ニ於テハ其ノ現狀ニ依リ相當ノ間隔ニ梁柱ヲ設クヘシ

木船ハ船ノ中央部ニ於テハ梁一本置ニ、首尾ニ於テハ其ノ現狀ニ依リ相當ノ間隔ニ梁柱ヲ設クヘシ

前二項ニ掲クル梁柱ノ外甲板室、斜橋、操舵機、揚錨機及揚貨機等ヲ支フル梁其ノ他必用ノ箇所ニハ梁柱ヲ增設スヘシ

上層梁ニ梁柱ヲ設クルトキハ其ノ下層ノ梁ニモ亦之ヲ設クヘシ

第二十一條　木製汽船ハ機關室ノ前後ニ隔壁ヲ設ケ登簿噸數二百噸以上ナルトキハ其ノ隔壁及石炭庫ノ圍壁ヲ鐵製トスヘシ

前項ノ隔壁ハ正甲板ニ止ムルモ妨ナシ

第二十二條　汽鑵ニ接近シタル隔壁、石炭庫ノ圍壁及船體ノ部分木製ニシテ汽鑵トノ距離一尺未滿ナルトキハ之ニ毛紙ヲ敷キ鐵板、鐵板若ハ亞鉛板ヲ張リ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ燃焦ノ豫防ヲ爲スヘシ但シ其ノ隔壁其ノ他ノ部分ニ二寸以上ヲ隔テテ鐵板ヲ張リタルトキハ毛紙ヲ敷クヲ要セス

第二十三條　鐵船及木鐵交造船ノ隔壁ノ數及構造ハ造船規程第二十章ノ規定ニ準スヘシ但シ船舶ノ構造ニ依リ隔壁ヲ減規程ニ定ムル爲マテ達セシムルヲ得サルトキハ檢査官吏ニ於テ適當ト認ムル他ノ補充方法ヲ用フルモ妨ナシ

此ノ規程施行以前ノ製造ニ係ル木鐵交造船ニ限リ隔壁ハ正甲板ニ止メ且機關室ノ前後ニ設クルモノノ外其ノ數ヲ減スルモ妨ナシ

第二十四條　二重底ノ內底板及水艙ノ頂板ニハ密閉シ得ヘキ出入口ヲ設ケ艙內ニ於ケル內底板ニハ厚二寸以上ノ內張板ヲ取附クヘシ

艙內ニ貨物或載荷用ノ水給ヲ設クルトキハ其ノ給口ノ覆蓋ヲ水密ニ裝置シ得ヘキ構造トスヘシ

定期檢査及特別檢査ニ於テハ二重底及水艙ノ現狀ヲ檢査シ必要ト認ムルトキハ相當水壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試驗スヘシ

第二十五條　給及機關室ニハ淦水喞筒及測水管ヲ設ケ喞筒管ノ端ニハ芥除ヲ設置スヘシ但シ登簿噸數二百噸未滿ノ水船ニ限リ每艙ニ設クルノ必要ナキトキハ各艙ヲ通シテ一箇ノ淦水喞筒ヲ設クルモ妨ナシ

手用淦水喞筒ハ最大喫水線以上ノ甲板ニ於テ使用シ得ヘキ樣裝置シ該喞筒ノ上辭、下瓣ハ各孫備ヲ備フヘシ

第二十六條　二重底及水艙ニハ區畫室每ニ蒸氣喞筒ノ吸水管及排氣管ヲ導クヘシ

船首隔壁ノ前部及船尾隔壁ノ後部ヲ水艙トシテ使用セサルトキハ船首隔壁ノ前部ニハ手用淦水喞筒ヲ設ケ船尾隔壁ニハ支水瓣ヲ設ケテ船尾隔壁後部ノ淦水ヲ車軸隧道ニ導クカ又ハ之ヲ他ニ排出スルノ裝置ヲ爲スヘシ

水密構造ノ車軸隧道ニハ淦水瓣ヲ設ケ之ニ蒸氣喞筒ノ吸水管ヲ導クヘシ

第二十七條　甲板間ニ於ケル機關室ノ圍壁ニハ上甲板迄圍壁ヲ設クヘシ

前項ノ圍壁ハ鐵製トシ又木船ニ於テハ鐵製ナルトキハ少クモ其ノ高二尺迄ハ成ルヘク之ヲ水密ニ構造スヘシ

第二十八條　正甲板及上甲板ニ設クル給口ノ緣材ハ其ノ高甲板上面ヨリ沿海航船ニ於テハ五寸以上、近海航船及遠洋航船ニ於テハ七寸以上トシ又給口ニハ堅牢ナル覆蓋ヲ備ヘ且之ヲ堅固ニ密閉シ得ヘキ樣二重ノ覆布及適當ノ繃具ヲ備フヘシ

第二十九條　載貨門ノ周圍ニハ適當ノ補强構造ヲ爲シ其ノ戸ハ堅牢ニ作リ適當ノ繃具ヲ備ヘ之ヲ閉鎖スルトキハ水密ナル樣取附クヘシ

第三十條　旅客室及乘組員常用室ニハ明取リ及空氣流通ノ爲メ相當ノ窗若ハ空氣筒ヲ設クヘシ

沿海航船以上ノ舷窗ニハ圓形水密ニシテ開閉シ得ヘキ堅牢ノ硝子戸ヲ用ヒ且波浪ヲ受クヘキ舷窗ニハ堅牢ノ覆蓋ヲ備フヘシ但シ此ノ規程施行以前ノ製造ニ係ル船舶ニ限リ角形舷窗ヲ備フルモ其ノ構造水密ナルトキハ之ヲ改造スルヲ要セス

天窗及空氣筒ハ甲板ヨリ適當ノ高ニ造リ其ノ緣材ノ高ハ船口緣材ノ高ニ準シ風雨ノ爲メ破損セサル樣堅牢ニ固著シ之ニ覆布ヲ備フヘシ

第三十一條　上甲板ニハ適宜ノ間隔ニ排水孔ヲ設ケ且閉塞舷墻ヲ備フルトキハ其ノ舷墻ニ適當ノ排水口ヲ設クヘシ

正甲板以下ノ甲板ニハ適當ノ排水管ヲ設ケ之ヲ淦水道ニ導クヘシ若シ之ヲ船外ニ通スルトキハ其ノ管口ニ適宜ノ支水戸若ハ螺旋蓋ヲ設クヘシ

第三十二條　旅客汽船ノ舷墻及柵欄ハ船舶ノ大小ニ應シ近海航船以上ニ於テハ二尺五寸以上、沿海航船以下ニ於テハ適當ノ高トシ之ヲ堅牢ニ取附クヘシ

第三十三條　旅客汽船ニ於テハ旅客定員及乘組員ヲ合セ人員大約五十人ニ付一箇ノ割合ヲ以テ便所ヲ設クヘシ但シ人員三百人以上ナルトキハ檢査官吏ニ於テ其ノ割合ヲ斟酌スルコトヲ得

上等室用若ハ乘組員用ノ便所ヲ區別シテ設クルトキハ上等室定員若ハ乘組員ヲ除キ其ノ殘餘ノ人員ニ對シ前項ノ割合ヲ以テ之ヲ設クヘシ

第三十四條　船ハ堅牢ナル蝶鉸ヲ以テ附著セシメ近海航船以上ノ船舶ニ於テハ蝶鉸三組以上ヲ備ヘ其ノ各距離五尺五寸以內ナルヲ要ス但シ總噸數一百噸未滿ナルトキハ蝶鉸ノ數ヲ二組ト爲スコトヲ得

下端ノ舵架ハ蝶鉸ノ數ニ加算スルモノトス

特別檢査ノトキ及檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ舵ヲ取外サシメ之ヲ檢査スヘシ

第三節　附具

第三十五條　船體部ニ於テ主トシテ檢査スヘキ屬具ハ左ノ如シ

檣、帆架其ノ他ノ圓材、艤裝索具及金具、帆、錨、錨鎖、揚錨機、起錨機、錨鎖管、大索、操舵具、手用淦水喞筒、手用消防喞筒及附屬品、端艇、救命具、船燈、信號器、測量器

第三十六條　檣、帆架其ノ他ノ圓材及索具等ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ上檣、帆架等ヲ下シ下檣及斜檣ノ楔ヲ拔取ラシメ其ノ現狀ヲ檢査スヘシ

第三十七條　船舶ニハ適當ノ帆一揃ヲ備フヘシ但

シ檣ヲ備ヘサル船舶ニ於テハ此ノ限ニアラス

帆船ニ於テハ前項ノ外尚ホ左ノ豫備帆ヲ備フヘシ

横帆ヲ備ヘサル船ニ「フオール、ステースル」一箇「メインスル」一箇

横帆ヲ備フル船ニ「フオースル」又ハ「メインスル」一箇「フオール、ステースル」一箇「トツプスル」一箇

第三十八條　錨、錨鎖及大索等ハ左ノ規定ニ依リ

第一號表及第二號表ニ照ラシ之ヲ備フヘシ

一　木船、木鐵交造船及瓦甲板鐵船ニ於テハ上甲板下ノ噸數ヲ以テ、輕甲板又ハ覆甲板ヲ備フル鐵船ニ於テハ該甲板下噸數ノ五分ノ四ヲ以テ表中ノ噸數トス

二　大錨ハ其ノ合量表中ノ合量ヨリ減少セサル限リハ二箇ヲ備フヘキ船舶ニ於テハ內一箇ハ七分五厘以內又三箇ヲ備フベキ船舶ニ於テハ內一箇ハ一割五分以內、一箇ハ七分五厘以內表中規定ノ量ヨリ少量ナルモ妨ナシ

三　汽船ハ沿海航船以下、帆船ハ近海航船以下ニ限リ日本形錨ヲ代用スルモ妨ナシ

四　錨ハ常時使用セサルモノト雖モ甲板上ニ備置クヘシ

五、第一號表及第二號表ニ於テ中錨ノ鎖及鋼索ハ便宜其ノ一ヲ備ヘ或ハ相當ノ大サノ麻索、棕梠索ヲ以テ之ニ代用シ又同表中規索ノ麻索及鋼索モ便宜其ノ一ヲ備ヘ或ハ相當ノ大サノ「マニラ」索、棕梠索ヲ以テ之ニ代用スルモ妨ナシ

六、第一號表及第二號表ニ定ムル錨數、錨量竝錨鎖、大索等ノ徑、周及長ハ數ニ依リ得タルモノト噸數ニ依リ得タルモノト差異アルトキハ其ノ小ナルモノニ依ルコトヲ得

第三十九條　船舶ニハ常用操舵具ノ外豫備操舵索

一　揚錨機、起錨機及操舵具ハ特別檢査ノトキ及檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ之ヲ取外スヘシ

第四十一條　手用淦水喞筒ハ檢査毎ニ其ノ屬具ヲ取附ケ且檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ試驗ヲ行フヘシ

第四十二條　登簿噸數五十噸以上ノ旅客汽船ニハ蒸氣喞筒ノ送水管ヲ上甲板ニ導キ船內各部ニ達スヘキ消防用布管ヲ備ヘ尚ホ登簿噸數二百噸以上ノ旅客汽船ニハ消防用移動喞筒一組以上ヲ備フヘシ

消防用送水管、喞筒及布管ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ試驗ヲ行フヘシ

第四十三條　旅客汽船ニハ其ノ噸數ニ應シ左ノ規定ニ依リ端艇ヲ備ヘ且其ノ場所ヲ相乘シタルモノノ十分ノ六トス但シ救命艇ニ於テハ空氣箱及航行豫定時間六時間以內ノ沿海航船ハ此ノ限ニアラス

一　端艇ノ容積ハ外部ニ於テ長、幅ヲ測リ長ノ中央ニ於テ內部ノ深ヲ測リ之ヲ相乘シタルモノノ十分ノ六トス但シ救命艇ニ於テハ空氣箱ノ容積ヲ除クニ及ハス

二　一人ノ容積十立方尺ノ割合ヲ以テ旅客定員及乘組員數ヲ搭載シ得ヘキ端艇ノ數及容積ニ達セサルモ其ノ不足ヲ補充スルヲ要セス

三　普通端艇ノ容積五十立方尺未滿ナルトキハ之ヲ救命艇ノ容積百立方尺未滿ナルトキハ之ヲ表中ノ容積ニ算入セサルモノトス

四　普通端艇ハ傳馬船其ノ他舟ノ容積ハ西洋形端艇ニ劣ラサルモノヲ以テ之ニ代用スルモ妨ナシ

五　傳馬船其ノ他舟ノ容積ハ西洋形端艇ニ同シク其ノ長、幅、深ヲ測リ之ヲ相乘シタルモノノ十分ノ七トス

六　端艇ニハ必要ナル附屬品ノ外豫備トシテ櫂及櫂架各二箇以上、放水口ノ栓、淦杓、鉤竿各一箇以上ヲ備ヘ又救命艇ニハ羅針盤、斧及水箱各一箇以上ヲ備フヘシ

第四十四條　救命艇ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　艇尾ハ尖形ナルヲ要ス

二　救命艇ニハ其ノ容積十立方尺ニ付少クモ一立方尺ノ割合ヲ以テ水密ナル空氣箱ヲ備ヘ若シ空氣箱ノ容積不足ナルトキハ「コルク」其ノ他ノ浮游物ヲ入レタル完全ノ浮袋ヲ以テ其ノ不足ヲ補フヘシ

三　救命艇ノ構造ニハ亞鉛材ヲ用フヘカラス又鐵製ノ艇ニハ鋼製空氣箱ヲ用フヘカラス

四　空氣箱ハ艇首艇尾又ハ兩側ニ設置シ其ノ種類ハ銅製若ハ眞鍮製ノ螺釘ヲ以テ取附クヘシ

五　救命艇ノ周圍ニハ救命索ヲ備フヘシ

第四十五條　第三號表中八十噸以下ノ船舶ニ於テハ端艇ノ代用トシテ、百五十噸以下ノ船舶ニ於テハ其ノ端艇中一箇ノ代用トシテ又定數ノ端艇ヲ備フルモ其ノ容積ノ不足二割以下ナルトキハ其ノ補足トシテ救命浮筏若ハ救命浮帶ヲ用フルコトヲ得但シ其ノ割合ハ端艇ノ容積十立方尺若ハ十立方尺未滿ニ付救命浮筏若ハ救命浮帶一箇トス

端艇ハ第三號表ニ掲クル容積ヲ有スルトキハ該表中艇數十箇以上ヲ要スル船舶ニ在テハ其ノ定數ヨリ二箇以內、六箇以上ヲ要スル船舶ニ在テハ一箇ヲ減シ又該表中二百噸以下ノ船舶ニ在テ

表中ノ容積ヲ有スル端艇一箇ヲ以テ二箇ニ代用スルモ妨ナシ

第四十六條　帆船及旅客汽船ニアラサル汽船ニ於テハ乘組員一人ニ對シ十立方尺ノ割合ヲ以テ端艇ヲ備フベシ但シ其ノ一艘ハ本船ノ中錨ヲ揚セ得ヘキモノナルヲ要ス

第四十七條　救命具、船燈、信號器、測鉛器、國旗、世帖、消防用手桶及斧ハ船舶ノ種類ニ依リ

第四號表ニ照シ之ヲ備フヘシ

第四十八條　救命浮環ハ船名ヲ記載シ上甲板ニ於テ乘人ノ認メ易ク且投入ニ便宜ノ場所ニ配置スヘシ

第四十九條　第四號表ニ掲クル救命浮帶及救命艇ハ操舵室其ノ他何時ニテモ取出シ易キ場所ニ之ヲ備置クヘシ

旅客汽船ニ於テハ第四號表ニ掲クル救命浮環及救命浮帶ノ外遠洋航船ニ於テハ上等、中等旅客定員、近海航船ニ於テハ上等旅客定員ニ等シキ救命浮帶若ハ救命浮環ヲ增備シ之ヲ該客室毎ニ配置スヘシ

第五十條　舷燈隔板ハ艇心ヨリ三尺以上前方ニ突出スヘキ長ニ作リ之ヲ船舷若ハ其ノ他ノ固定物ニ取附クヘシ

第五十一條　汽船ニハ前方ニ音響ノ妨ナキ適當ノ位置ニ汽笛若ハ汽角ヲ裝置スベシ

第五十二條　海國ハ沿海航船ニハ其ノ航路區域及區內港灣ノ分國、近海航船ニハ日本全國及航路海岸港灣ノ分國、遠洋航船ニハ近海航船ニ要スル海國ノ外航通外國ノ海岸港灣ノ分國ヲ備ヘ又平水航船ニハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキニ限リ其ノ航路ノ海國ヲ備フヘシ

海國ハ海軍水路部ノ最近刊行ニ係ルモノヲ使用スヘシ但シ最近ノ刊行ニアラサルモ改正ノ廉ヲ記入シタルモノ又ハ外國出版ノ海國ニシテ最近ノ刊行ニ係ルモノハ之ヲ備フルモ妨ナシ

第五十三條　信號火器ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ發火ヲ試ムヘシ

第五十四條　沿海航船以上ノ船舶ニ於テハ旅客定員及乘組員ヲ合セ一人一日少クモ二升ノ割合ヲ以テ沿海航船ハ汽船ニ在テハ三日分、帆船ニ在テハ十日分、近海航船ハ汽船ニ在テハ三月分ヨリ少ナカラサル飲用水ヲ貯蔵スルニ適スヘキ水箱ヲ備フヘシ但シ蒸溜器ノ備アルトキ又ハ沿海航船ニシテ檢査官吏ニ於テ前記ノ水量ヲ貯蔵スルノ必要ナシト認ムルトキハ該水箱ノ容積ヲ減スルコトヲ得

第五十五條　旅客室及乘組員常用室

第五十六條　甲板間ノ距離遠洋航船ニ於テハ六尺以上、近海航船ニ於テハ五尺以上、沿海航船及平水航船ニ於テハ四尺五寸以上ナルニアラサレハ旅客室ヲ設クルコトヲ得但シ船尾ノ如キ斜曲ノ場所ニ設ケタル腰掛欄ノ平棚ニシテ其ノ上面ヨリ甲板臺面迄ノ高三尺五寸以上ナルトキハ之ヲ客席ヲ設スコトヲ得

第五十七條　上甲板上旅客室ノ高ハ遠洋航船ニ於テハ四尺五寸以上、沿海航船ニ於テハ六尺以上、近海航船ニ於テハ五尺以上ナルヲ要ス

第五十八條　旅客室ノ高六尺以上ナルニアラサレハ客席ヲ二層トスルコトヲ得ス

第五十九條　雜居客室ノ長十二尺以上ニシテ其ノ出入口一邊ニノミ在ルトキハ其ノ出入口ヨリ該室ヲ貫キ幅一尺八寸以上ノ通路ヲ設クヘシ若シ之ヲ設ケサルトキハ全面積ノ六分ノ一ヲ通路ニ充ツヘシ

雜居客室二室以上鄰接シ其ノ出入口一室ノ一邊ニノミ在ルトキハ其ノ出入口ヨリ他室ニ達スル迄幅一尺八寸以上ノ通路ヲ設ケ又他室內ノ通路ハ前項ニ準スヘシ

第六十條　左ニ掲クル場所ハ客室ニ充ツルコトヲ得ス

外車汽船ノ車覆、船首隔壁ノ前方（船首隔壁ノ設ケナキ船舶ニ於テハ正甲板上面ニ於テ船首材ノ內面ヨリ長最大船幅ノ二分ノ一ニ達スル迄ノ場所）幅若ハ長一尺八寸未滿ノ場所其ノ他檢査官吏ニ於テ旅客ノ起臥動作ニ不適當ト認ムル場所

機關室兩側ニ於テ一尺八寸以外ノ場所ニ客席ヲ設クルトキハ該室兩側一尺八寸迄ノ場所ヲ以テ客席ノ容積ニ算入スルモ妨ナシ

第六十一條　左ニ掲クル場所ハ客席ニ算入スヘカラス

通路、艙口ノ周圍一尺八寸迄ノ場所、瓶貨門ノ前後各一尺二寸ノ所ヨリ其ノ幅ニテ艙口ノ周圍一尺八寸迄ノ場所、其ノ他檢査官吏ニ於テ客席ニ不適當ト認ムル場所

沿海航船又ハ平水航船ニシテ厚蔵口ヲ開閉スルノ必要ナキモノ及湖川港內ヲ限リ航通スルモノハ艙口ノ上面周圍及瓶貨門ノ內側ヲ客席ニ算入スルモ妨ナシ

艙口ヨリ瓶貨門ニ至ル除去面積ヲ算スルニ當リ艙口ト瓶貨門ノ位置竝列セサルトキハ瓶貨門ノ中央ヨリ艙口ノ中央ニ至ル距離ト瓶貨門ノ幅ニ二尺四寸ヲ加ヘタルモノトヲ相乘シ其ノ積ヲ除去面積ト爲スヘシ

第六十二條　客席ニハ莚、畳其ノ他旅客ノ座臥ニ適スヘキ敷物ヲ備フヘシ

第六十三條　甲板間機關室ノ前後ニ於ケル雜居客室ノ容積ハ每室其ノ前中後ノ三箇所ニ於テ上中下ノ幅ヲ測リ前後上下ノ幅ニ前後ノ中幅及中央上下ノ幅各四倍ト中央ノ中幅十六倍トヲ加ヘ之ヲ三十六ニテ除シ平均ノ幅トシ之ニ長ヲ乘シ總面積トシ之ヨリ其ノ室內ニ於ケル蔽圍ノ場所ノ平均幅ニ長ヲ乘シタルモノヲ減シ其ノ殘リ面積ニ平均ノ高ヲ乘シタルモノトス

機關室ノ兩側甲板上其ノ他或ル一部ニ於ケル客室ノ容積ハ平均ノ幅ニ長、高ヲ乘シ若シ其ノ室內ニ蔽圍ノ場所アルトキハ其ノ長、幅、高ヲ乘シタル積ヲ減シタルモノトス

船尾斜曲ナル場所ノ容積ヲ算スルニハ其ノ長(矢)幅(弦)ノ二分ノ一以下ノ所迄ハ本條第一項若ハ第二項ニ依リ算出シ其ノ後部ハ高ノ中央ニ於テ長ヲ測リ其ノ三分ノ二ニ其ノ場所ノ最大幅ト高トヲ乘シ其ノ容積トスヘシ

第六十四條　甲板間機關室ノ前後ニ於ケル雜居客室ノ面積ハ每室客席ニ充ツヘキ甲板又ハ棚ノ上面ニ於テ前中後三箇所ノ幅ヲ測リ前後ノ幅ニ中央ノ幅四倍ヲ加ヘ之ヲ六ニテ除シ平均ノ幅トシ之ニ長ヲ乘シ總面積トシ之ヨリ第六十一條ニ掲クル除去スヘキ場所ノ面積ヲ減シタルモノトス

機關室ノ兩側、甲板上其ノ他或ル一部ノ客席ハ平均ノ幅ニ長ヲ乘シ前項ニ準ジ通路等ノ面積ヲ減シタルモノトス

船尾斜曲ナル場所ノ面積ヲ算スルニハ其ノ長(矢)幅(弦)ノ二分ノ一以上ノ所迄ハ本條第一項若ハ第二項ニ依リ算出シ其ノ後部ハ長ノ三分ノ二ニ最大幅ヲ乘シタルモノトス

第六十五條　旅客定員ヲ算出スルニハ第六十三條ニ依リ算出シタル旅客室容積及第六十四條ニ依リ算出シタル旅客室面積ヲ船舶ノ航路定限及客室ノ等級ニ應シ船舶檢査法施行細則第十九條ニ規定スル旅客定員一人分最少容積及面積ヲ以テ除去シ其ノ商積ト面積トニ依リ算出シタル員數ヲ比較シ其ノ少數ヲ以テ該室ノ旅客定員トスヘシ

第六十六條　沿海航船以上ノ船舶ニ於テ甲板間ニ旅客室ノ設アルトキハ天氣ノ如何ニ拘ラス何時ニテモ甲板上ニ出入シ得ヘキ昇降口ヲ設ケ之ニ階子ヲ備フヘシ

前項ノ階子ハ旅客定員五十人未滿ナルトキハ幅一尺八寸以上ノモノ一箇以上、五十人以上百人未滿ナルトキハ幅三尺以上ノモノ一箇以上若ハ幅一尺八寸以上ノモノ二箇以上ヲ備フヘシ但シ廻リ階子若ハ勾配高ク段面狹クシテ梯欄ニ依ラサレハ昇降シ難キモノハ其ノ幅三分ノ二ヲ以テ前記ノ割合ニ適合セシムルモノトス

第六十七條　水火夫等乘組員常用室ハ其ノ船舶ノ航路定限ニ應スル下等旅客室ニ準シ之ヲ設クヘシ但シ該常用室ハ之ヲ船首隔壁ノ前方ニ設クルコトヲ得

沿海航船若ハ平水航船ニシテ其ノ航路定限往復豫定時間二十四時間以內ノモノハ水火夫等乘組員總數二分ノ一ニ對スル迄積量ヲ減シ又十二時間以內ノモノハ檢査官吏ニ於テ差支ナシト認ムル迄尙ホ之ヲ減スルコトヲ得

第六十八條　別種旅客室ハ近海航路ヲ航行スルトキニ限リ船內ニモ之ヲ設クルコトヲ得但シ其ノ船口ノ數若ハ大サ不充分ニシテ別ニ空氣筒等ノ設ナク檢査官吏ニ於テ空氣ノ流通不充分ト認ムルトキハ衛生上適當ノ場所ヲ限リ客席ト爲サシムヘシ又荒天ノトキ船口ヲ密閉スルノ必要アル船內ニハ之ヲ設クルコトヲ得ス

船梁ヲ備フル船舶ニシテ其ノ船梁上ニ甲板ヲ假設シ荷艙ト其ノ區域ヲ分チ檢査官吏ニ於テ旅客ノ搭載ニ適當ト認ムルトキハ遠洋航路ヲ航行スルトキト雖モ該甲板上ヲ別種旅客室トスルコトヲ得

第六十九條　船內ニ別種旅客室ヲ設クルトキハ其ノ底ヲ五尺以上トシ船梁若ハ假設シタル床梁又ハ貨物若ハ荷足ノ上ニ板及莚等ヲ敷クヘシ但シ衛生ニ害アリト認ムル貨物ノ上ハ客席トスルコトヲ得ス

第七十條　高三尺以上ノ開寒艙壁ヲ有シ且完全ノ天蓬ヲ備フル船舶ニシテ其ノ航行豫定時間二十四時間以內ナルトキハ上甲板ニ於テ適當ノ場所ヲ限リ別種旅客ヲ搭載スルコトヲ得

第七十一條　船內別種旅客室ノ積量測度方法ハ通常旅客室ノ測度方法ニ據ルヘシ

第七十二條　甲板間又ハ上甲板ヲ別種旅客室ニ充テ仕出港ヨリ仕向港ニ直航スルトキハ船口ノ上面周圍及艙貨門ノ內側ヲ客席ノ面積ニ算入スルコトヲ得但シ其ノ船口下ニ別種旅客室ヲ設クルトキハ艙貨門ノ內側ノミヲ面積ニ算入スヘシ

第七十三條　上甲板ニ別種旅客ヲ搭載スルトキハ其ノ場所ノ形狀ニ從ヒ第六十四條ニ依リ面積ヲ算出シ之ヲ五ニテ除シ其ノ得數ヲ定員トスヘシ

第三章　日本形船檢査

第七十四條　定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　水線上ノ包板及埋木ノ幾分ヲ取外スコト

二　船內ヲ掃除シ取外シ得ヘキモノハ總テ之ヲ取外シ腰當梁ト三ノ甲梁トノ中央部ニ積ミ置クコト但シ積石數千石以上ノ船舶ニ於テハ舷側內部ヲ檢スル爲メ兩側ノ索板ヲ足場ニ殘シ置クコト

三　檣、帆架、舵及傳馬船ヲ除クノ外屬具ハ檣ノ上ニ排列シ置クコト

四　舵ヲ引上ケ檣ヲ倒シ置クコト

第七十五條　特別檢査ニ於テハ第七十四條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　包板、外舷、外舶、除艙、投板、蓋詰及埋木ノ幾分ヲ剝取リ腰當梁其ノ他一二ノ梁端ヲ拔出シ置クコト

二　檣ハ船體上ニ倒シ若ハ陸上ニ揚置クコト

三　各部ニ於テ若干ノ釘ヲ拔取リ置クコト

第七十六條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第七十七條　定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部及屬具ハ左ノ如シ

船體

航、加敷、內舶、外舶、戸建、中艙、重板、弦、弦押、刻付、腰當梁其他各種梁、筒、筒挾、檣壓、步桁、檣、恭板、除艙、投板、蓋、梁ノ外端、外舷、千里

屬具

檣、桁、帆、舵、錨、錨索、檣索、淦水喞筒、消防具、傳馬船及附屬品、救命具、船燈、信號器、測量器

第七十八條　航ト加敷ノ接著、加敷ト中艙ノ接著、中艙ト重板ノ接著、內舶戸建(艙板ノ接著、弦ニ於テ梁孔及其ノ端端、除艙上部ノ刻付、大鐵、見付刻、小間ノ笂、小間板ノ水口等ハ其ノ現狀ノ適否ヲ檢査スヘシ

第七十九條　航ト加敷及內舶、戸建ト艙板ノ接著釘ハ內部ニ於ケル折曲ケノ適否ヲ檢査スヘシ

第八十條　腰當梁ノ所及中艙大縱ノ所ニ於ケル加敷中艙ノ通リ釘鋲貫シタルトキハ鋲貫ノ程度ニ從ヒ一本置ニ其ノ半數ヲ打換ヘ若ハ悉ク打換フヘシ

弦ノ縫釘鋲貫シタルトキ弦押ヲ取換ヘ其ノ縫釘ヲ打換フヘシ

第八十一條　救命具、船燈、信號器、測量器、國旗、書冊、消防用手桶及斧ハ第四號表ニ照シ之ヲ備フヘシ

第四章　機關部檢査

第一節　檢査準備

第八十二條　定期檢査ニ於テハ左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　吸鍋ノ彈環、滑瓣等ヲ取外シ排氣喞筒、循環喞筒、給水喞筒、淦水喞筒等ノ諸瓣ヲ取出シ冷汽器、蒸騰器等ヲ開キ置クコト又主軸ニ於テハ曲拐栓黃銅ヲ取外シ主軸受、中間軸受、進力受等ノ上半ヲ取外シ置クコト

二　機關室ノ淦水ヲ排除シ底部ヲ掃除シ泥箱ヲ開キ芥除ヲ床板上ニ取出シ各箱ノ芥除ヲ露出シ置クコト

三　正汽鑵、副汽鑵ハ水ヲ排除シ人孔其ノ他ノ諸孔ヲ開キ火床、火橋ヲ取出シ燃燒室、汽部、水部、汽兜、加熱器ヲ掃除シ安全瓣及正塞汽瓣ヲ取外シ置クコト

四　屬具ヲ適宜ノ場所ニ排列シ置クコト

第八十三條　特別檢査ニ於テハ第八十二條ニ掲クル外左ノ準備ヲ爲スヘシ

一　推進器ヲ取外シ螺旋軸ヲ拔取リ置キ瓣、嘴子ニシテ汽機汽鑵ノ要部ニ屬シ若ハ水線以下ニ於テ船外ニ通スルモノヲ開放シ置クコト

二　汽筩及正汽管ノ包被ヲ取除キ接續銲ヲ取外シ置キ機關室ヨリ各艙ニ通スル諸管ノ包被ヲ取除キ置クコト

第八十四條　臨時檢査ニ於テハ檢査官吏ノ指揮ニ從ヒ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第二節　汽機檢査

第八十五條　碇泊シタル船舶ノ定期檢査ニ於テ檢査スヘキ要部ハ左ノ如シ

汽筩、吸鍋、吸鍋銲、接續銲、導板、導瓣、滑瓣、滑瓣銲、動瓣機、排氣喞筒、循環喞筒、給水喞筒、淦水喞筒、冷汽器、蒸騰器、曲拐軸、中間軸、汽機蓋、軸受、進力受、管、瓣、嘴子、泥箱、芥除、副喞筒、副汽機、換熱汽機、揚鑵汽機

第八十六條　入渠若ハ上架シタル船舶ノ定期檢査若ハ特別檢査ニ於テハ第八十五條ニ掲クル外船尾管、螺旋軸、推進器及水線以下ニ於テ船外ニ通スル瓣、嘴子ヲ檢査スヘシ

第八十七條　汽筩ハ其ノ現狀ニ依リ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ造船規程第三百十二條ニ依リ水壓試驗ヲ執行スヘシ

第八十八條　冷汽器ハ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムルトキ五吠以上ノ水高壓力ヲ以テ其ノ漏否ヲ檢査スヘシ

第八十九條　遠洋航船ニ於テハ正給水喞筒及正淦水喞筒各二箇ヲ備ヘ其ノ一箇ヲ使用スルトキト雖モ他ノ一箇ヲ開放シ得ヘキ裝置ヲ爲スヘシ

第九十條　副喞筒ハ正給水喞筒ニ屬スルモノノ外別ニ給水管及制限瓣ヲ備ヘ汽鑵ニ給水シ得ヘキ裝置ヲ爲スヘシ但シ小機關ニ於テハ手用喞筒ヲ以テ副喞筒ニ代用スルモ妨ナシ

第九十一條　近海航船以上ノ船舶ニ於テハ機關室ヨリ每艙ニ正淦水喞筒ノ吸水管ヲ通シ其ノ淦水ヲ排除シ得ヘキ裝置ヲ爲シ尙ホ副喞筒ノ吸水管